
ISーインフィニット・ストラトスー 熾天使を駆る少年

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISーインフィニット・ストラトスー 熾天使を駆る少年

【Nコード】

N5762Q

【作者名】

三月語

【あらすじ】

IS、それは女性にしか扱うことが出来ないマルチフォーム・スーツ。

しかし、その常識を覆すことが起きた。

男がISを使える。

これは、偶然がきっかけでISに認証された一人の少年の学園バトル

ルラブコメである・・・

#00 Prologue (前書き)

はい予定通り始めました！

これは主人公が男なため、『ISの男は一夏以外有り得ない！』な人はご遠慮ください。

#00 Prologue

「・・・朝か・・・」

俺、二崎奏にしきかなでは今日行くことのために目を覚ました。

・・・何かって？そりゃあれだ、受験。

しっかし・・・

「なんでこんなことになっちまったんだよ・・・」

ベッドから降りて、そのまま居間に向かう間、思わずそっ呟いちまった・・・

こんなこと・・・

それは、元々受ける予定だった高校を諦めてIS学園と言う学園に

強制的に受験させられた、っつうこと・・・

とはいえ、強制的なんだからはっきりと喜べ！なんて言われてもしやあなしなんだが・・・

俺は嫌なんだよ・・・

ISというのは、正式名称インフィニット・ストラトス。

それは本来、女性しか扱えないもので、今の女尊男卑の世界を生んだ大元だ。

だけど、3年前に俺が廃工場で見つけたISが起動、所有者認証を済ませてしまった、ということが世界にばれ、IS学園の教師が俺

の家に直に来て入学用の資料を渡していったのがきっかけだった。

「つか、あの時大暴れしなきゃよかったんだろうけどなあ・・・」

起動したとき、突然現れたIS4機を初めて起動させた人間が全部行動不能にしてしまった、というのも原因・・・だと思う。

「・・・さて、不本意だけど受けに行くか。」

嫌な予感だけしかしない、あのIS学園へ・・・

俺はしっかりと制服を着込み、重い足取りで家を出た。

#00 Prologue (後書き)

次回はオリキャラ・IS紹介です。

#Other 主人公・IS設定（前書き）

ただのオリキャラ・IS紹介です。

2月23日、セラフィムに設定追加。

3月2日、奏とセラフィムの設定文追加&改訂。

#Other 主人公・IS設定

Name：二崎 奏 にいざき

性別：男

身長：165.3cm

体重：58kg

やや女顔なため、そして名前故によく女性と間違えられやすい（本人はそれを最も嫌う。）

髪は首に掛かる程度の長さで、それを縛っている。

一夏や箒とは八年前に自身が転校したために別れたが、幼なじみ。

専用IS・セラフイムは3年前（中学一年）偶然発見したものに触れた際、勝手に認証され、そのまま自分専用機にした。

中学では剣道をしていたが、飽きた為辞めているなどまともに力を注いでいない。が、並大抵の人間では太刀打ちできないほどの力を持っている。

性格は言動を取ると冷静・クールだが、実際は気さくで結構とつきやすい。そして優しい。そのため軽く二重人格と思われるやすい。実は軽くガンオタ。

他人の事には気がきくが、自分のことには果てしなく疎い。超天然朴念仁でキング・オブ・唐変朴。

趣味は機械弄りとゲーム。

好きなものはゲームと野菜と面白いもの。ベジタリアンではないが、結構野菜は食べる。単純に好きだから。そして普通にお茶が好き。

緑茶、ウーロン茶、麦茶、ブレンド茶など。

苦手なものは酸っぱいものと電車とバスと面倒なこと。酸っぱいものは単純に酸っぱいのが嫌だから、電車とバスは動いた瞬間（バスの場合はエンジンがかかった瞬間）酔うから、面倒なことはそのまんま面倒だから。

姉が一人いるが、本人は訳あって行方不明。（その姉が唯一の肉親）

CV：緑川 光

代表作：新機動戦記ガンダムW ヒイロ・ユイ

ティルズシリーズ リオン・マグナス&ジューダス

IS

セラフイム

第四世代に相当するが、作成者は不明であり、誰一人として所有者認証を受け付けなかったために元々廃棄される予定だったIS。超遠近・中距離型。

ISの姿はほぼウイングゼロカスタムに酷似している。

展開させると背部に6枚3対の翼を模したものが現れる。

『熾天使』の名を冠するに相応しい力を持つが、それ故に使用者を厳選し過ぎたのだ。

待機状態は翼を模した小さなオブジェのついた指輪（奏は左の中指に常備）。

武装

高圧縮粒子砲：所謂バスターライフル。照射式のため一発一発にタイムラグが長く、発射時に発生する反動によってシールドエネルギーが減少してしまうのが難点。だが一撃の攻撃力・シールドエネルギー削減力・射程距離は他の追隨を許さない。両手式で一丁の銃・片手式の二丁銃そのどちらでも対応可能。

高圧縮粒子剣：所謂バスターソード。のビームライフルと同じように砲身から剣が現れるタイプ。ちなみに現れた剣は粒子なので発射分離も可能。

粒子銃：中距離戦用の最大5連射銃。リロードはオート。

近接特化剣・風斬：軽量化を重視し尽くした剣。一撃一撃にそれほどの攻撃力はないが、手数を多くしたことでの問題を解消した。

（なお、このうち元からの武器は高圧縮粒子砲/剣、風斬。粒子銃については独自で開発した）

その他、ブラックボックスが2つ存在する。

Spec

最大速度は白式をも軽く超越する。が、その速度を出すために一定時間の溜めが必要。

背部の翼はそれぞれ独立した稼働が可能で展開・非展開が選択可能。非展開時は背中に閉じた状態。羽撃くことははたもできる。

装甲値は他のISより薄い。基準値を600とした場合、400。推測される開発コンセプトは『当たらなければどうということはない』。

機動力・旋回力はトップクラス。

空中上下方向の移動については、高速移動時には『機体を傾ける』のではなく、『空を蹴る』ことでラグを少しでも短縮可能。

武器の容量が大きいにもかかわらず、拡張領域はまだまだ有り余っている。

ブラックボックスが3つ、搭載されている。解放条件は不明。

ISモデル：『新機動戦記ガンダムW Endless Waltz』
ウイングガンダムゼロ（ウイングゼロカスタム）

単一仕様能力：鎮魂の殲滅翼（extermination wing of requiem）

翼が大きく広がり、その一枚一枚にシールドエネルギー干渉能力が備わっている。

通過するだけで相手のシールドエネルギーを残存量を減らしていく。翼を弾丸として無尽蔵に発射することも可能で、その場合一つ一つにシールド貫通機能がある。

発動中は零落白夜をも超える速度で自身のシールドエネルギーが減少していく。（最大量のエネルギーでも持つて30分しか使えないのが難点。

ただ、この能力は仮初の能力らしく・・・？

元ネタ：『月光蝶』

#Other 主人公・IS設定（後書き）

ISはチートな気がしますが、それ相応の代償があるのでそれで勘弁を。（後々どんなチート化していきます。さてさて、奏はチート向上に着いてくれるのでしょうか・・・？）

～ 次回予告 ～

結局合格して入学することになったIS学園。

そこはやっぱり女だらけ・・・と思ったら!?

次回、#01 クラスメイトは全員女・・・!?

仲間がいてくれてホント良かったっ!

#01 クラスメイトは全員女・・・！？（前書き）

始めましたメインストーリー！

基本原作沿いですが、視点は奏パターン多し、です。

#01 クラスメイトは全員女・・・！？

「・・・居辛い・・・。物凄く居辛い・・・。」

俺は今、教室の雰囲気居心地の悪さを感じていた。

なんでって言われてもなあ・・・？

「やっぱり周りは女だけかよ・・・。」

小さい声で俺はそう呟いた。

マジで。周りを見れば、女。女。女。

ちょっと前に俺以外の男でISを起動出来た奴がいる、って話は聞いたが誰かはよく聞いてないから、そいつがいてくれたら助かるんだけど・・・。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー。」

黒板の前でにっこりと微笑む女性服担任こと山田真耶教諭（つかさつき自己紹介してたし）。

身長はやや低めで生徒のそれと殆ど変わらない。というか、あれは

制服着てたら混ざっちゃうんじゃない？

・・・何となくだけど、無理に背伸びした感じがするんだが・・・。
俺だけ？そう思うの？

『それではみなさん、一年間よろしくお願いしますね？』
『・・・・・・・・・・』

教室の中は誰一人として返事をしない。というか、静まり返っている。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で・・・」

・・・あの副担、可哀想になってきたな・・・。

けど、返事なんて出来るか！？男は（多分）俺一人なんだぞ！？

「はあ・・・」

俺は窓の方を向いて溜息をついた。

・・・もうクラスメイトの視線はうんざり・・・

と思い始めてきたその時だった。

「一夏くん？織斑一夏くん？」

「は、はいっ!？」

(・・・マジ!?!一夏!?!一夏だつて!?!)

俺は心底驚いたさ。

今、名前を呼ばれて立ち上がったのが八年前に別れた幼馴染だったんだから・・・

んで、びっくりしたような返事をしたのか、山田先生大焦り。

「あ、あのっ、お、大声出しちゃってごめんなさいっ!お、怒ってる?怒ってるかな?ゴメンね!ゴメンね!でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ごめんね?自己紹介してくれるかな?だ、ダメかな?」

ぺこぺこ頭を下げる。

「・・・く・・・く・・・うっく・・・」

だ、ダメだ……！あまりにも変わってなさすぎるから……

ふ、腹筋いてえ……！腹筋があ……っ……！

一夏あ……とつとつと自己紹介済ませるや……！！

「いや、あの、そんなに謝らなくても……、ってか、自己紹介しますから！先生、落ち着いてください！」

「ほ、本当？本当ですか！？本当ですね！？や、約束ですよ？絶対ですよ！？」

最早最後は押し付けになってた……

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします……」

儀式的に頭を下げ、上げる。おお、すごい状態だ。

『もっと色々喋ってよ』とか『それだけ？』的な視線がすげえ。

そして『これで終わりじゃないよね？』的な空気も？

「……はあっ……はあっ……」

奥で笑いを腹筋総動員で堪え続けていた俺は、何かした訳じゃないのに相当疲れ切っていた。

息も絶え絶え、というのが相応しいくらい息切れしている。

「だ、大丈夫・・・？」

「だ、大丈夫だ・・・、気にしないでくれ・・・」

隣の女子が笑いを堪えたその後遺症に苦しんでいる俺を気遣ってくれたけど、下手に詮索されるよりは放っておいてくれた方が良い・・・

そのまま俺は一夏を再び見た。・・・さっさと終わらせろ、という意思を込めて。

と思っていたら、願いが通じたらしい。

「以上です!」

ガタタタッ!!!

「えっ、あれっ!?!?ダメでした!?!」

あの一言で殆どの女子がずっこけていた。

「くくくく・・・プクツ・・・だ、ダメだ、声が・・・出ちまうっ・・・」

いきなり『以上です！』って締める奴が今の世界どこに居んだよ！！

結果周りの女子はずっこけるし、俺は俺で笑いを必死になって堪えるしなくなっちまうし・・・

と改めて前を見たら・・・

ガン！！！！

「ぐうっ!?!?」

一夏が殴られた。・・・ってえ！あれはもしかして・・・

『げえっ!!!! 関羽!?!?』

一夏の奴、俺と同じこと考えていたらしいなオイ。

・・・と考える間もなく・・・

スパァン！！

また一夏が叩かれた。・・・つて!?

「ぐふぁ・・・」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。」

何かチヨーク飛んできたぞ!?

トーン低めの声。俺にはすでにドラの音が聞こえてくるんだけど・・・はて?

・・・いやしかし・・・、待て待て待て。なんで千冬さんがここに居るんだ?あの伝説の人が・・・

「あ、織斑先生。もう会議はもう終わられたんですか?」

「ああ。山田君、クラスの挨拶を押し付けてすまなかつたな。」

あれ?さつきとは別物の優しい声だ。関雲長はどこへ?赤兎馬に跨って去ったのか?劉備の元へ・・・

「い、いえっ、わたしは副担任ですから。これくらいはしないと・・・」

さっきの涙声はどこへやら、山田先生は熱っぽい声と視線で担任の先生へと応えている。あ、はにかんだ。

・・・物騒なこと言うなよ・・・

きやいきやいと騒ぐ女子たちを、千冬姉はかなりうつとうしそんな顔で見る。

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

これがポーズじゃなく、本当にうつとうしがってるのが千冬さんだ。

千冬さん、人気は金で買えないんだぜ？もうちょっと優しくしたら？

・・・と思った俺が甘かった。あるゲームで主人公を『王子様』とか言つて惚れこんでるヒロインくらい甘かった。天心甘栗・・・は特筆するくらい甘くないか。

「きゃあああああああつ！！お姉様！もっと叱って、罵って！！」
「でも時には優しくして！！」
「そしてつけあがらないように躡をしてっ！！」

クラスメイトが元気で何よりですね。

・・・とはいっても、実質俺も混乱と驚愕していた。

「……で？挨拶も満足に出来んのか？お前は……」

辛辣。しんらつ……極めて手厳しい、という意味。まさに一夏にかけた千冬さんの言葉はそれだ。

「いや、千冬姉、俺は……」

Bannon!!

本日三度目。千冬さん、頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ？

「織斑先生と呼べ。」

「……はい、織斑先生……」

今のやり取りで、姉弟なのがバレた。

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「じゃあ、世界でただ二人の男が『IS』を使えるってことで、彼が使えるのも、それが関係して……？」

「ああっ、いいなあっ！代ってほしいなあっ……」

最後のは放っておくとして、一応言っておこう。

世界でただ二人、『IS』が使える男の一人として、公立IS学園に居る。

と思っていたら、いつの間にか・・・

「えっと・・・二崎奏くん？あれ？さん？どっち？」

「はぁ・・・」

俺の番が回っていた。

もう当たり前のことが起こって俺は溜息をついた。

名前のせいだ。この女らしい名前のせい・・・

「『くん』でいいですよ。俺男なんで。」

訂正・・・というか説明をした時、視線が一気に俺に集中した気がした。

・・・めんどくさいが、自己紹介はしとかないとな・・・

「俺は二崎奏。髪とか名前とかが女っぽいが正真正銘男だ。」

とまできつぱり言い切った時、一夏の時と同じような視線が来た。

・・・言えはいんだる言えは・・・

「趣味は機械弄りとゲームだ。よろしく頼む。以上！」

最後まできつぱりと言い切って、俺は勢いよくイスに座った。

・・・あれ？

「・・・なんだよ、この沈黙は・・・」

この沈黙の後は二度と思い出したくなかった。

『カツコいーーーーーつ!!!!』

当然だよな・・・、あんな風にとつと言っちゃまったんだから。

クールな人間だ、などと思われたんだろうな・・・

「ほ、ほんとに男の子なの!?!」

「髪とかキレーー!!」

「モデルみたーい!!」

・・・止めてくれ、モデルとかそう言われるの嫌いなんだよ・・・

それと俺の髪は自然体だ、一度も整えたことはない。

そして確認を取った奴。ISの実技の時に思いきりシバく。

そして、俺の自己紹介の後の興奮を千冬さんが無理矢理鎮め、チャイムが鳴った、

「さあ、SHRは終わりだ。諸君にはこれからISの基礎知識を半月ほど覚えてもらう。その後実習だが、基本操作は体に染みこませる。いいか?いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ。」

・・・なんとという問題発言・・・というか教師らしくない発言だよ
おい・・・

「二崎、何か言いたいことがあるのか?」

「ない。何一つとしてないっす織斑先生!」

「ならいい。」

・・・なぜ考えがバレた？

#01 クラスメイトは全員女・・・！？（後書き）

） 次回予告 ）

八年ぶりに会った幼馴染。

変わっていなかったりどこか変わっていたり。

だけどアイツがいるとは思わなかった・・・

次回、#02 再会と地獄

止める、そんなふうに呼ぶな！そのあだ名で呼ぶなあーっ！

・・・感想、ください。

#02 再開と地獄（前書き）

今回、オリキャラが一人増えます。紹介は一巻終了後に。

#02 再開と地獄

「うー……あー……」

さっきコマ目の授業が終わった。

元々予備知識はあったし、3年ぐらいは実際に動かしていたからそこまで苦じゃなかったけど……

……空気が嫌だ！

「……なんだよこの桃色的な空気は……。なんだよこの好奇の目は……」

只今絶賛、廊下には女子のオンパレード。

同級生の奴等だけじゃなくて、2、3年の先輩がずらりと廊下に並んでやがる……

「あの子よ！？世界でISを使える男の人って！」

「あっちでぐったりしてる子もそうよ！」

「入試の時にIS動かしたんだって！」

「彼、謎のIS持ちなんだって！」

「世界的な大ニュースだったわよねー！」

「やっぱり入ってきたんだー！」

・・・ああ、俺は一体どうなっちまっただ・・・？

好奇の目は止めてくれ・・・

「あなた話しかけなさいよ！」

「あたし行っちゃおうかしら・・・」

「ちよつと！まさか抜け駆けする気じゃないでしょうね！？」

抜け駆けもクソもねーだろうよおい・・・

俺はサーカスとか動物園の見世物じゃねーんだからよ・・・

「しゃーねー、一夏を冷やかに行くか・・・」

俺は一夏の席に向かった。

「よっ、一夏！」

「・・・奏か！」

さっきの自己紹介で分かってたらしいな。ありがとうえぜ！

「まさか、お前がここにいるとはな・・・。何にも知らされてなか

「たからびつくりしたぞ!？」
「それはごっちの台詞だ!」

いや、お前の場合は多少は知らせがあつたらう？

「お前はぜんっぜん変わってねえなあ、おい!」

「お前は・・・変わったな・・・」

「・・・理由は・・・察してくれ・・・」

「何をどう察しろって言うんだよ?」

・・・悪い一夏、言葉少なに言った俺が悪かつた・・・

とまあ、そんなこんなで一夏と話が弾んでいた時だった。

「・・・ちよつといいか?」

『えっ?』

不意に声がかげられた。

・・・どっかで聞いたことがある声なんだが・・・筈にしては・・・
トーンが下がった・・・ような・・・

一夏にも不意だったようで、声が出たのは同時だった。

「……箒？」

（……マジかよ……）

「……」

一夏が名前を言った時、俺は驚きを隠せなかった。

この子が箒！？あの剣道一筋な！？神社の娘の！？嘘！？

「廊下でいいか？」

……多分、俺のことは覚えてないようだろうから、一夏なんだろうな……

「早くしろ。」

「あ、ああ。」

驚きを隠せないまま呆然とする俺を置いて行って、すたすたと廊下に行ってしまう箒（……と思われる子）と一夏。

ああ……、行かないでくれ一夏……。俺を教室に一人にしないでくれ……

そしてその女子。ざっと道を開けるな。モーゼの海渡を連想する

から・・・

「はぁ・・・。寝るか・・・」

そしてぽーんと取り残された俺は自分の席に向かった・・・

が。

か—————な—————ちゃ—————

「ーん!ー!ー!」

「ぐふあっ!?!」

左脇腹にダイビング!?!これ、位置的に最悪鳩尾に当たってた!!

・・・この呼び方と声は・・・、まさか・・・

「真琴・・・か・・・?・・・げほっ・・・」

「かなちゃんやっぱり覚えてくれてた!久しぶりー!」

「その呼び方は止めるって・・・8年前に言っただろこの馬鹿!」

「いーじゃんいーじゃん!!私とかなちゃんの仲でしょ!?!」

「く、びを、ふる、な、ゆす、るな、回すな!」

・・・最悪だ。まさか真琴が・・・、中咲真琴がいるとは知らなかった・・・!

波乱だ・・・

「ちよ、ちよつと抜け駆け！？まさかの抜け駆け！？」

「ず、ずるい！飛びついて抱きつくなんて！！」

これを見てずるいってよく言えるなそこ・・・

「二崎君、昔『かなちゃーん』って呼ばれてたんだ・・・」

「いらそこっ！そんな呼び方で呼ぶなっ！」

）
数分後
）

キーンコーンカーンコーン・・・

・・・よ、ようやくチャイムが鳴った・・・

織斑先生、今回ばかりは感謝するぜ・・・

真琴の急襲（字違いだっけ？そんな馬鹿な。これで合ってたよこれ）から始まった真琴との関係突きつめるための質問攻め。

俺はどうにかのらりくらりと避けたかったわけだが・・・

『かなちゃんは私の恋人なの！だからとっちやダメ！』

なんて真琴がぬかしやがるから・・・

『ね、ねえ中咲さん！い、いつ告白したの！？』

『く、詳しく聞かせて！？いつ出会っていつ好きになっていつ告白したのか！』

『え？それは・・・恥ずかしくて言えないやあ・・・／＼／』

『恥ずかしいことなら言わなくていいだろうが！それよかお前は告白してねえだろうが！俺は絶対にお前の告白にOKは出さねえけどな！』

『でもでもお、宣言しとかないと取られちゃいそうだもん・・・』

なんてことがあったから今俺は只今絶賛ダウン中・・・

「ぐはっ!？」

「二崎。何があったか知らんが起きろ。」

「・・・はい・・・」

・・・俺、生きていけるか心配だ・・・

#02 再開と地獄（後書き）

） 次回予告 ）

一夏のポケや山田先生の暴走に堪えた授業。

その後の休み時間、俺達の上に現れたのはイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。

・・・自分がエリートだ、なんて自慢しに来たらしい。

次回、#03 授業とエリート

教官倒せばエリート？なら俺もエリートだよな？エリートのプライドなんて、あつてねえもんじゃねえの？

#03 授業とエリート

「・・・で、あるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ・・・」

すらすらと教科書を読み進めていく山田先生。しかし、俺は今の文章で顔が青ざめていた。

・・・いかん、俺、ひよつとしたら刑法で罰せられるんじゃないか・・・？

ただ触れただけでセラフイムが起動し、登録認証、そのまま初陣・・・なんてやっちゃったから・・・

・・・いかんいかん！授業に集中しないと何かが飛んでくる！

・・・なんて俺が考えに没頭していたら。

「はい、織斑くん！」

山田先生が一夏を指名していた。

当の一夏は・・・

「ほとんど全部分かりませえん・・・」

・・・

「ブツ!!」

・・・噴いてしまった。

「え・・・、ぜ、全部、ですか・・・？」

先生の顔が困りど百パーセントで引きつった。

さすが一夏、相変わらずの爆笑をありがとう。

「え、えっと・・・、織斑くん以外で、今の段階で分からないって人はどれくらいいますか？」

拳手を促す山田先生。

しーん・・・

「ぶくくく・・・げほっ、げほっ」ほっ!し、死ぬ・・・、笑い死

ぬ・・・」

誰も挙げない。ただただ響くのは俺の笑い声だけ・・・

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「あの分厚いやつですか？」

「そうだ。必読と書いてあったらだろうか？」

千冬さんが一夏に当然だという目で聞いてくる。

「古い電話帳と間違えて捨て（バァンツ！）うわあっ！」

おお、また一撃決まった。

俺は机を叩いてまで笑い続けた。笑いが止まらない。ダメだ、マジで危ない・・・

「後で再発行してやるから、一週間以内に覚える。いいな？」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと・・・」

「やれと言っている・・・」

「・・・はい、やります・・・」

・・・一夏が諦めたような顔で言ったのをきっかけにようやく笑いが収まった。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力とかこの兵器を遙かに凌ぐ。そういつた『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ。」

おおつ、無理やりな命令。

「え、えっと、織斑くん。分からないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、頑張つて？ね？ねっ？」

山田先生が両手をぐっと握って詰め寄っていた。一夏よりより身長が低いから、必然的に上目遣いになっていた。

「はい。それじゃあ、また放課後によろしくお願いします。」

千冬さんも席に戻っていった。

「ほ、放課後……。放課後に二人きりの教師と生徒……。あっ！だ、ダメですよ、織斑くん！先生、強引にされると弱いんですから……。それに私、男の人は初めてで……。」

いきなり頬を赤らめてそんなことを言いだしている。山田先生、大丈夫なんだろうか？

IS操縦者って本当に男に免疫ないんだな。というか周囲の視線が痛い。視線に物理的な干渉力があつたら俺は蜂の巣だ。

「で、でも、織斑先生の弟さんだったら・・・」

「先生、そろそろ妄想から復帰して授業進めた方が良くいっすよー？」

「は、はいっ！」

おお、戻ってきた。そしてこけた。

「うー・・・、いたたた・・・」

・・・ホントに大丈夫だろうか？この先生は・・・

果てしなく前途が多難な気がした俺だった。

） 休み時間 ）

俺は真琴に飛びかかれるのが嫌だったということと一夏を冷やかしに行きたいと思ったから一夏の席まで行った。

「よっ、爆笑王！」

「誰が爆笑王だよ！」

「お前だ。」

「うぐっ・・・」

よし、俺の勝ち！

なんて遊んでいたら・・・

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「んあ？」

不意に呼びかけられて、二人して気の抜けた返事が出た。

話しかけてきた相手は、自毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通ったブルーの目が、ややつり上がった状態で俺らを見ていた。

僅かにロールがかった髪はいかにも『貴族!』ってイメージ通り。

『いかにも』今の女子という感じだ。

説明すれば、今の世の中、ISのせいで女性はかなり優遇されている。優遇どころか、もはや行き過ぎて『女々偉い』の構図が出来上がっている。

「訊いてます？お返事は？」

「あー、訊いてるぞー。」

「あ、ああ。聞いてるけど・・・どついう要件だ？」

俺は半分聞き流しながら、一夏は多分真面目に受け答えたら、目の前の女子はかなりわざとらしく声を上げた。

「まあ！なんですの？そのお返事！わたくしに話しかけられるだけ

でも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

『……………』

……出た。

一夏もだんまりを決めてるみたいだから、同じことを思ってるんだろ
うな……

……こんな奴は苦手だ。

ISを使える。それが国家の軍事力になる。だからIS操縦者は偉い。そしてIS操縦者は原則女しかない。

だからつつつてもその力を振りかざすのは違う。……多分。その力が粗暴なら、そんなものはただの暴力に過ぎないんだから。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし。」

「コイツと同じ。あとき笑っててコイツ以降の自己紹介右から左に流れてたから。」

知らないのはマジ。実際に一夏に笑わされていて聞き流していたし、千冬さんが担任だった、ということも大きかったしな。

が、この答えは目の前の女子（いい加減名前教えろや）に取ってかなり気に入らないものだったらしい。吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

あ、名前セシリアっていうんだ。理解した。

「あ、質問いいか？」

お、一夏が質問？なんだ？また笑わせてくれるのか？

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですね。よろしくてよ。」

うわー、明らかに貴族って言ってやがる。今のこの時代、貴族なんて時代遅れだつての・・・

「代表候補生つて、何？」

ガタタツ！！！！

「ブツ、・・・はっははははっ！！！！そ、そりゃ、そりゃねえぞ一夏！ないにもほどがあるぞ一夏！というか、俺を笑い殺す気か

お前は！」

「笑うな！こっちは真面目に聞いているんだから！」

俺が笑うのとほぼ同時にクラスの女子数名がずっこけた。

「あ……、あ……、あ……」

『あ？』

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

おお、凄い剣幕。マンガだったら血管マークが三つ四つついてるな。

「おう、知らん。さっき言っただろ？真面目に言ってるって。」

おお、言いきった。見栄はったら身を滅ぼすからな。

「……………」

セシリアは怒りが一周して逆に冷静になっただらしい。

あーあ、頭痛そうにして……

ぶつぶつと言いだしたりもして……

「信じられない！信じられせんわ！極東の島国というのは、こつまで未開の地なのかしら！？常識ですわよ、常識！テレビが無いのかしら……」

テレビはある。未開じゃない。未開だったらISを作る天才は生まれないだろうが。

しゃーねー、俺が教えつか。

「一夏、面倒だから一度だけ言う。」

「おう。」

「代表候補生、つてのは、国が代表IS操縦者の、その候補生として選ぶ出すエリートのことだ。単語から分かれボケ。」

「ぼ……。ま、確かに言われればそうだ。」

おお、見事に絶句。

まあ、誰が見てもボケだからいいじゃん。

「そう！エリートなのですわ！」

お、復活。

一夏にビシッと指された人差し指が鼻に当たるぞ、あの距離だと。

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ？その現実をもう少し理解していただけの？」

『そうか。それはラッキーだ。』

・・・息があつたな。

「・・・馬鹿にしていますの？」

・・・お前が幸運だつて言ったんだろ？

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。そしてあなた、ただただ笑ってるだけで、よくついてこれますわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていきましたけど、期待外れですわね。」

「俺に何かを期待されても困るんだが？」

「同じく。というか、俺は期待される存在じゃないし。」

「ふん。まあでも？私は優秀ですから、あなた達のような人間にも優しくしてあげますわよ？」

この一瞬、一夏と偶然目があつた。

(奏：・・・一夏、この態度があいつの優しすぎるぞ?)
(一夏：・・・らしいな。俺も十五年生きて初めて知ったぞ。)

「ISのことで分からないことがあれば、まあ・・・泣いて頼まれ
たら教えて差し上げてよよくってよ?何せわたくし、入試で唯一教
官を倒したエリート中のエリートですから。」

唯一、を強調したな。唯一だけ。

「入試って、あれか?ISを動かして戦うってやつ?」

「そのあれだ。」

「それ以外に入試などありませんわ。」

「あれ?俺も倒したぞ、教官。」

「は・・・?」

ほう、一夏も倒したか。なら俺はもっと自慢しよう。

「俺は教官を一撃でノしたが?」

「は・・・!?!?」

おお、驚愕してやがる。

「一夏、倒したって、お前の場合教官が突っ込んで自滅したんだろ

「？」

「んー・・・ああ、そうだった。お前の場合はほんとに瞬殺だったよな。」

「まーそう言ってくれるな。照れる。」

もうちょい自慢しとく。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「そりやお前、あれだろ？『女子では』なんてオチだろ？」

「だな。」

あ、ピシって音がした。うわ、なーんか嫌な音がしたよー？

「つ、つまり、わたくしだけではないと・・・？」

「らしいぞ？詳しくは知らんが。」

「あなたたち・・・あなたたちも教官を倒したっていの！？」

「うん、まあ。たぶん。」

「たぶん！？たぶんってどどういう意味かしら！？」

「俺は確実に。一撃で仕留めた。」

「い、一撃ですって！？」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ・・・」

キンコーンカーンコーン・・・

お、チャイムだ。三時間目開始だ。さ 今度は千冬さんの授業だ。
寝る訳にやいかねえな・・・

「話の続きは、また改めて！よろしいですね!？」

よくない。でもそう言ったら怒るな。黙っとくべきだ。

そのまま俺は席に着いた。

#03 授業とエリート（後書き）

） 次回予告 ）

千冬さんが言った『クラス代表』。

俺はやりたくないが、どっかのバカが推薦しやがったから面倒だぜ・

・

そして一夏が啖呵を切って飛び火した！？

そして渡された部屋割には・・・！？

次回、#04 宣戦布告、地獄の部屋割

・・・俺の三年間は地獄だと決まった・・・

#04 宣戦布告、地獄の部屋割(前書き)

オリキャラが増えます。・・・たぶん・・・笑えるかと。

#04 宣戦布告、地獄の部屋割

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する。」

一、二時間目と違って、三時間目は織斑先生が教壇に立った。

山田先生は隅っこでノート取ってる。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。」

まるで思い出したように織斑先生が言った。

・・・なるほど、果てしなくめんどくさそうだ・・・

最前列じゃ一夏が首かしげてる。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、簡単に言えばクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を図るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで。」

お、教室が色めきだった。

俺は一応知識はあるが・・・あとで一夏にはもう一度説明しとくか。

・・・面倒なのはごめんだ。仕事が多そうだ・・・

「はいっ、織斑くんを推薦します！」

お？

誰かが一夏を推薦した。

当の一夏は『他に織斑って苗字がいるのか？』っていつみたいに探してるじ。

「私もそれが良いと思います！」

うんうん。よしやね、もっとやね。そして俺をこんな面倒事から回避させてくれ。

「私はかなちゃんが良いと思う！」

・・・。

「では候補者は織斑一夏と二崎奏・・・他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ？」

『お、俺（かよ）！？』

一夏と同時につい立ちあがってしまっ。

「というか先生！？『かなちゃん』ってあだ名で俺だって分かるのかよ！？」

更に視線の一斉射撃。振り向かなくても分かるぞ。これは『彼ならきつと何とかしてくれる』っていう無責任で勝手な期待が込められた眼差しだ・・・

「織斑、二崎、落ち着け。邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないならこの二人で代表決定戦を行うぞ？」

『ちよつ、ちよつと待った！俺はそんなのやらな・・・』

「自薦他薦は問わないと言った。推薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ。」

「い、いや、でも・・・」

まだ反論をしようとした一夏を、突然二つの甲高い声が遮った。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

「そうです！納得がいきません！」

パンツ、と机を叩いて立ち上がったのはあのセシリア・・・なんと
かだ。

もう一人は・・・俺の横!?

「そのような選出は認められません!大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ!わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?!」

「代表候補生以外の生徒が代表というのはおかしいと思います!」

そつだそつだ、もつと言えもつと言え。そして俺を面倒から・・・
つてちょい待て。

「実力から言えばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります!わたくしはこのような島国でIS技術の修練に來ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ!」

「私の方が実力があります!こんな自己中やクラス代表性以外の生徒がなるのがおかしいっていうだけです!」

・・・おいセシリアなんとか。馬鹿にしてんのか?

イギリスも島国だろう?

というかもう一人、もつとやれもつとやれ。なんとなくいい気分だ。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「だったらトップは私よ！あなたじゃないわ、オルコットさん！」

「何をおっしゃってますの！？レギンハルトさん！？わたくしの方が実力は上でしてよ！？」

・・・どうでもいい時に隣の奴の名字知った。そうか、レギンハルトか・・・

おーおー、興奮冷めやらぬって感じでエンジン画家が温まってきたセシリアは怒涛の剣幕で言葉を荒げる。

そしてレギンハルトはレギンハルトで対立してる。プライド強いなこの二人。

「大体、文化としても更新的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で・・・」
「なっ・・・」

ムカツ！

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ？世界一まずい料理で何年覇者だよ？」

あ、一夏がキレた。

そして『あ、まず……』って顔した。

……一夏、骨だけは捨つてやる。安らかに死んでこい……。箒だけは悲しんでくれる……。はずだ。お前のその心意気に心の中で拍手しておいてやろう。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

一夏、諦める。覆水盆に返らず、転がり出した石は止まらない、だ。

「決闘ですわ！」

思い切り机を叩くセシリア。

「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい。」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……いえ、奴隷にしますわよ！？」

おーおー、話がどんどん進んでくぜ。

一夏がハンデのこと言いだして、結局取り消しにしたり、セシリア

の方が勢いにのりだしたり、突っ込まれたり・・・

「そのあなたも！あなたただけ関係ないって顔させませんわよ！？」

「俺を巻き込むな！俺は何も言っただけじゃないはずだ！」

「巻き込んでなどいませんわ！教官を素早く倒したという実力、虚言だと証明して差し上げますわ！」

・・・最悪だ！まだあれは見せたくないんだ！あれが完成してない！

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、オルコット、二崎、レギンハルトはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める。」

千冬さんが手を打って、話を締める。

締めないでくれ、まだ俺は何も準備が済んでいないんだ・・・

が、授業が始まってしまった。・・・仕方ない。今ある装備だけでも十分やれるか・・・

結局俺は大人しく授業を受けた。

その間の休み時間。

「かなちゃん、頑張つてね？わたし、応援してるから！」

「・・・元はと言えばお前のせいだっ！（ガンツ！）」

「いったーい！ひ、酷いよかなちゃん！女の子をぶつなんて酷いよ！」

「お前は論外だ。それと・・・その呼び方はいい加減やめろ！何度言えば分かる!？」

「いーじゃん・・・ううゝ、頭痛いよ・・・」

こんな会話があった。

『うう・・・』

そして放課後、俺と一夏は一つの机に二人して突っ伏していた。

俺の場合は・・・

「何故だ・・・！何故俺がこんな目に・・・！」

一夏の場合は・・・

「い、意味が分からん・・・。なんでこんなにややこしいんだ・・・？」

こんなだった。

俺の場合は今日の三時間目のアレ。

一夏は専門用語の羅列にやられたのだ。

ちなみに放課後とは言え全く状況は変わってない。また女子が他学年・他クラスから押しかけ、きゃいきゃいと小声で話し合っている。

(勘弁してくれよお・・・)

昼休みも、それはそれは地獄だった。

俺達が学食に移動するとゾロゾロと全員付いてくる。

俺たちは珍動物じゃないんだよ・・・

「ああ、織斑くんと二崎君。まだ教室に居たんですね。良かったです。」

「はい？」

「えうえ・・・？」

・・・あー、俺もうダメだ。変な声しか出ねえ・・・

んで顔を上げたら、山田先生が書類片手に立ってた。

・・・いつ見ても小さく感じるな、この先生は。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました。」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーを渡す先生。

ここ、IS学園は全寮制だ。だから生徒は全て寮で生活を送ることになる。

「俺達の部屋、決まってないんじゃないかなかったんですか？前に聞いた話だと、俺は一週間は自宅通学って話でしたけど・・・」

「俺は野宿するつもりだったんだが？」

「の、野宿かよ!？」

一夏、突っ込むな。仕方ないんだ、元いた家がすでに空き家じゃな

くなってるんだから。

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割を無理やり変更したらしいです。・・・織斑くん、二崎君、そのあたりのことって政府から聞いてます？」

最後は俺達にしか聞こえないように耳打ちしてきた。

ちなみに、『政府』ってのはもちろん日本政府。何せ、今までに前例の無い『男のIS操縦者』だから、国としても監視と保護の両方を付けたいらしい。

「そういうわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先してみたいです。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください。」

「・・・あの、山田先生？耳に息がかかってくすぐったいんですが・・・」

・・・それは俺も思った。いつまで耳打ち続ける気だこの先生は？

「あつ、いやつ、これはそのつ、別にわざととかではなくてですねつ・・・！」

「いや、分かってますけど・・・。それで、部屋は分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日は帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら・・・」

言葉を切った？

ま、俺は今ここにPSPとかPCとかUSBとか持ってきてるけど
ね だから荷物は服だけが無いはずだ。

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え。」

・・・言葉を切った理由が分かった。

ああ、ダースベイダーの曲がBGMに……。ああ、すぐにターミネーターの曲に変わった・・・

「ど、どうもありがとうございます・・・」

「まあ、生活必需品だけだからな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう。」

すげえ超大雑把。ま、確かにその通りだけど、人間には日々の潤いも大事だと思うっすよ、千冬さん？

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が

違いますけど……。えっと、その、織斑くんと二崎君は今のところ使えません。」

「え、なんでですか？」

「ほー？やっぱりアレですか？」

俺はすつと理由が分かった。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

気づけ馬鹿。

「おつ、織斑くんつ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だつ、ダメですよ！」

「いつ、いや、入りたくないです。」

「……それが当然だ。万一OKだとしても、どうなるか全く分からん。」

「え、ええっ！？女の子に興味が無いんですか！？そつ、それはそれで問題のような……」

どうしよう。この先生、一夏の話徹頭徹尾無視してる。

・・・徹頭徹尾の遣い方間違ってるか、これ？

そして、きゃあきゃあ騒ぐ山田先生の言葉が伝言ゲーム的に伝播したのか、廊下では女子が・・・まあ、何だ？『婦女子談義』的なものを勃発させていた。

「織斑くん、男しか興味が無いのかしら・・・？」

「それはそれで・・・いいわね。(じゅるり)」

「中学時代の交友関係を洗って！すぐにね！明後日までには裏付けとって！」

・・・どんだけぶっ飛んでんだ？おい・・・

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、二崎君、ちゃんと寮に帰るんですよ？道草食っちゃダメですよ？」

・・・確か、校舎と寮の間って50mあるかないかだぞ？どう道草食えって？

そりゃ確かに部活やアリーナ、整備室や開発室とか色々な設備があるぞ？でも俺らにはまだ関係ないぞ？

『ふー・・・』

二人して溜息をつく。

無論、千冬さんがいなくなってからだ。

「一夏、さつさと寮に行くか。・・・俺はもう眠いぞ・・・」
「俺もそうしたい・・・」

結局意見が合致したため、廊下の騒動を完全に無視して寮に向かった。

「……えーと、ここか。1025室だな。」

「俺は……げっ、1040室!?ウソだろ!?まだ先なのか!?
遠すぎるだろ!?!」

部屋割を見たら、一夏はわりと近い1025室。

だが、俺は1040室……どんだけ食堂から遠いんだ……?

「じゃあな……。また生きていたら明日……」

「お、おう……」

一夏に死にかけた目で別れを告げ、俺は一人部屋に向かった……

「1040室、1040室……。おお、ここか。」

一夏と別れて地道に探し続けた1040室。

それをようやく見つけて安堵の息を漏らした。

「おつて、ようやく俺の部屋だ。ゆっくり休めるといいな……」

鍵を差し込み・・・あれ、開いてる・・・？誰かと相部屋なのか・・・？

「・・・ま、いいか。」

気にしない気にしない。不干涉が命。

俺は堂々と部屋に入ってしまった。

「お！？おお！？おおお！？」

部屋に入っつての俺の第一声がこれだった。

だって！明らかに羽毛と思われる布団のベッドだろ！？しっかりとしたシステムデスク！地デジ対応テレビ！PC専用のスペース！

「う、ここは天国ですか・・・！？それともあの世ですか・・・！？」

思わずそう漏らしてしまった直後だった。四人部屋なのは気になったが！そんなの気にしない！こない場所、めったにないぞ！？

誰ー？

「・・・嘘だろ・・・？」

の・・・

俺の天国は一気に地獄に変わった。

あれ？この声・・・かなちゃん？

・・・そして、その予想は思い切り当たってしまった。

シャワーを使ってたらしく、悪魔の声はくぐもっていた。

(逃げる準備を・・・！逃げる準備をしないと・・・！！！)

そして、ドアに走りだしてシャワーのある(と思われる)部屋の前を通り過ぎた時・・・

「あっ！やっぱりかなちゃんだ！」

悪魔が出てきやがった!!

「っおおおおおっ!!」

俺は脱出のために思いきりドアをけ破って外に出た。そうするしかなかった!

「あーっ!かなちゃん待ってよー!」

後ろの真琴の声なんて聞いてられるか!?

んで、空中で回し蹴りしてドアを閉めた。・・・なんて器用なことをしたんだ俺は・・・

が。

かーなーちゃん!あーけてーよー!!

ドア越しに聞こえる声とドアをどんとどんと叩く音が響く。

・・・で殺す気か!?!今のかわさなかったら死んでるぞ!?!

一夏の怒声が聞こえてきた。

なーにーなーにー!? 何があつたのー!? あーけーてー!!

真琴には悪いが・・・今のお前を出す訳にはいかない! 出したら出したであらぬ噂が立ちまう!!

「一夏、負けるな……。俺も戦ってるぞ……。不幸と」

） 数分後 ）

ドアの前で拮抗していた俺と真琴だが・・・

ついに決着がついた。

「どーーーーーん!!」

「ぐはぁっ!?!」

遂に真琴がドアを蹴り飛ばしやがった。

その反動で俺はドアに吹き飛ばされ、挟まれた・・・痛い!

「あれー?かなちやーん?どこー?」

「・・・あとで脳天一撃だな・・・」

「あ、こんなところに居たー」

ついに見つかった・・・って!?

「真琴!?なんだよその格好!?!」

「ほえ?なんだよって・・・」

今の真琴の姿。

・・・はつきり断言しよう。・・・全裸だ。

「服を着る服を！」

「えー？めんどくさいもーん！それにい、かなちゃんってさ、何度も私の裸見てるじゃーん？」

「それはガキの頃の話だ！今はもう違っただろボケ！お前ももう大人なんだからそれくらい自覚しろ！」

「やだー！！！」

俺をいい加減休ませてくれ！そしてお前はもっと恥じらいを持って！

いくら女尊男卑の社会だって言ってもな！？世間倫理とか道徳とかモラルとかあるだろうが！！

・・・どうにか真琴に下着も服も着せてようやく寝れたのが夜の十一時、消灯はとうに過ぎていた・・・

あ、ちなみに・・・

ゴンッ！

「いった いい！またぶったあ！」

「さっきも言つたる、脳天一撃だ、つてな！」

「もー怒ったもん！許さないもん！」

「おーおー、許さないからってどうするつもりだ？」

ここでちょっと調子に乗った俺だが、ちゃんと回避先もある。

が、予想外のこと came。

「チューしてくれないと許してあげないもん！」

「・・・じゃあ試験勉強IS操縦基礎知識に発展知識その他諸々、
一切合切教えてやらねえ。」

「ごめんなさい許してください許しますから教えてくださいお願いします
します奏様！」

勝った！

・
・
・
なんてやり取りがあった。

#04 宣戦布告、地獄の部屋割（後書き）

） 次回予告 ）

ついに始まったクラス代表決定戦。

俺の相手は隣の席のオーストリア代表レギンハルト。

どんな奴が相手だろうと、俺はぜってえ負ける気はねえ！

次回、#05 クラス代表戦！ 熾天使は空を舞い、そして脱臼す。
そして翌日。

・・・おい、脱臼ってどういうことだよ！？脱臼するのは俺か！？
一夏じゃなくて！？もしかして・・・面倒なことになるんじゃないかねえ
だろうな・・・

#05 クラス代表戦！ 熾天使は空を舞い、そして脱臼。そして翌日。（前

タイトルが何気なくふざけてるのは・・・

気にしない方向で！というか、気にしたら負けです！・・・きつと。

途中、『うわー、これ古くさっ！』と思えそうなところがあります
が・・・

それも気にしない方向で！

#05 クラス代表戦！ 熾天使は空を舞い、そして脱臼。そして翌日。

・・・そんなこんなで一週間が過ぎ、あっという間にクラス代表選になった。

「初戦は・・・俺とオリヴィエ？オリヴィエって・・・レギンハルトか？」

「そーみたいだよ？」

ピットで真琴がおどけて言う。

・・・テメエ、一度マジで死んでみるか？

「ところで奏、お前のISって専用機なのか？」

一夏が突然聞いてきた。・・・といっても仕方ないか？だってあいつはまだISが無いんだから。

専用機を渡す、って前言ってたけど、まだ届いてないらしい。

「俺か？専用機だが・・・あ、そういえば織斑先生？俺のISデータ、あつちに送ってくれました？」

「まだ送ってなかったな。」

やっぱり・・・

・・・まあいい。俺はただ勝つだけ。クラス代表になりかけちまったら辞退するだけだ。

「さあ、行かせセラフィム。」

俺がそう呟いた時、俺の体を光が包む。

さすがにまだ背中の中の羽は展開させていないが、まあ、三枚目からは要らない・・・かもな。

「き、綺麗です・・・」

二枚を展開させた状態の俺を見て、山田先生がうつとりとした目で見ていた・・・

うつとりしないでいいよ？

・・・ちなみに、俺のこの日までの一週間はこうだった。

基本的に夜十二時まで起き続けて武器の開発をしていた。

開発・・・というよりはイメージを作り上げて、ジャンクを回収しに行っていただけだが。

その武器は・・・セラフィムの高威力砲の命中精度を上げるための補助武器なんだが。結局、未完成。

ついでに、箒は全く俺のことをうる覚え程度でしか覚えてなかったらしく、一夏に言われて思い出したらしい。薄情な幼馴染だこのヤロー。

ま、一夏の仲介もあって再び仲良くなったが。そして箒は真琴と仲良くなった。・・・なぜか不干渉条約なるものを締結していた気がしたか？

「んじゃ一夏、行ってくる。連戦になるかもしれないが、お前と戦えたらいいな。」

「ああ、俺もそうなるのを願ってるぜ？」

「OK、行ってくる！」

「かなちゃん、頑張ってるねー？」

能天気な真琴の声援をガン無視して・・・

「おっと、ちよーつと離れててくれよ？風強くなるから・・・」

少しづつ ストを溜めて・・・

そのまま二枚翼で最高速度で！

「うおおっ！！」

「きゃああっ！」

「うわっ！！？」

後ろで悲鳴が聞こえたが、無視無視。

そのままアリーナの中央まで突っ込んでいく。

「まさか、いきなりキミと戦うなんて思わなかったよ。」

「そりゃこつちもだよ。まさかお隣さんと一戦目、というかISS学園セラフィムデビュー戦を行うなんてね？」

相手は・・・ロックしてない。というか、正々堂々と戦いたいらしい。

「本気で来なかったら・・・墜とすよ！」

マジで言ってる？

俺のISの本気は本気出したら肉眼で追えなくなるかも、なんだぜ？

「・・・本気じゃないとダメ、か？」

「ダメ！」

「ダメか・・・。なら、許してくれよ？プライド粉々に砕いちまっても、なあ！！」

相手が本気でこいと言ったのでそれに応えるように俺は・・・

翼を全て全開にした。

「っ!？」

やっぱり？こいつの本気の姿はこれなんだし。六枚三対の翼なんて普通に見ないだろ？

さて、相手が驚いている内に相手の武装や能力を確認・・・

武装数四、内一つは同種四つ確認。特殊能力の存在を確認

特殊能力、ねえ？ま、セカンドシフトまで行かなけりゃOK？

「そんじゃ、いくぜ!？」

「か、かかってきなさい！叩きのめしてあげる！代表候補生の力、見せたいぞ!」

・・・なんだ？どことなく顔が赤いぞ？

警告、敵IS、エネルギー装填を開始

そんな表示が出た。・・・肩のアレか！

「いつけえーーーーーっ!!!!!」

そして肩から予測通りの砲撃が。

「やぐっ!?!」

などと言いつつ俺はそれをすっと回避。

(・・・粒子砲じゃ距離が短すぎて逆にポコポコにされる。かとい
つて粒子銃や風斬じゃ手数が多すぎて逆に集中的ないじめになっ
ちまう・・・)

その間にも相手・・・オリヴィエは休む間もなく肩から砲撃を繰り
出してくる。

「当たれっ!当たれっ!当たれっばあっ!」

・・・なんだろ、相手が勝手に逆上してる気が・・・

って今度は銃やミサイル!?

「うわ、さすがにこれは危ねえ!?!」

はつきりいえば余裕で回避している訳だが、それでも危ない。マジ危ない。

「ちよろちよると動き過ぎなのよ！いい加減当たってよ！」

「食らう訳にはいかねえだろ！？」

相手はあまり動いてないが、俺はアリーナを縦横無尽に動き回っている。

それこそまだ全速力じゃないけど。

F o r p i t) S i d e I c h i k a (

俺たちはビットで奏の試合を見ていた。

「うわー・・・」

「なんなのだ、あのISは!?!」

中咲（・・・だったっけ？）は呆然と見ていて、箸は驚いている。

正直俺も驚いているんだけど。

画面の中の状況は、完全に奏の一方試合になっている。攻撃が一度も当たっていない。

なのに、一切攻撃してない・・・。何をしてるんだ!?!

S i d e K a n a d e

戦い始めて十五分。

そろそろ終わらせた方がいいかな・・・？

ちなみに、自分の状況を確認する。

ダメージレベル無し、残りシールドエネルギー、380

・・・やっぱりどっかで消費したらしい・・・

なら！

「一気にケリをつける！」

俺はアリーナの限界まで一気に飛んでいく。

「あ、ちょ、逃げる気!？」

オリヴィエは追いかけるような気がしたが、やっぱり読み通り、I
S性能のせいで追ってこない。

「これで……、終わりだ！」

俺は粒子砲を展開し、相手に向けてエネルギー装填を始めた。

「ま、まさか……」

開いても俺のやりたいことを理解したらしい、逃げる体勢に入った。

だが……

「今更逃げても遅えんだよお！」

装填完了した粒子砲のトリガーを引いた。

「あ、うわ、きゃあああああ！」

よし、ヒット！つかビンゴ！

・・・てか、大丈夫か？

一応相手のエネルギー状態を確認して・・・って！？

「やべ、本気で撃つちまった！大丈夫かあいつ！？」

俺は本気で心配し（ほんとにマジ！だってあれ全力だったし！）、慌ててレギンハルトのところへ行った。

全力で、って思い切り言っちゃったら、突然、

「一気にケリをつける！」

なんて言われて離れられた。

「あ、ちょ、逃げる気!？」

敵前逃亡よ!？てか、それ以前の問題!それ以前の問題よ!？

追わなきゃ、けど追えない・・・

私のIS、ヴェルヴェーゲン・ファルケは機動力を捨てたIS。

だから下手に追うと的になるもの・・・

「これで・・・、終わりだ！」

相手はライフルを展開して・・・

警告!敵IS射撃準備完了!放射まであと二秒!

嘘！？あんな遠くから当たるわけないじゃない！！

でも、あそこで準備するなんて・・・

「ま、まさか・・・」

そう考えた時にはもう体が、ISが動いていた。

出来るだけ横に、少しでも当たらないように、って。

けど・・・、遅かった。遅すぎたの。

「今更逃げても遅えんだよお！」

当たらないだろうって思われていたところから、圧縮された粒子が飛んできて・・・

「あ、うわ、きゃあああああ！」

当たった。

バリアー貫通。ダメージ390。シールドエネルギー残量、
1。実態ダメージ、レベルB。

垣間見えたダメージ状況が大きなものだった。

た、たった一撃でここまでダメージがあるなんて……。シールド
エネルギーがまさかここまで減っちゃうなんて……

私、悔つてた……。キミのこと……。

そして、薄れた意識の中で、私の名を呼んだのは……

……天使じゃない。悪魔でもない。

二崎奏という名の王子様だった……

F o r p i t) S i d e I c h i k a (

「はぁ・・・、すごいですねえ・・・」

目の前で山田先生がうつとりしていた。

俺はというと、相手のレギンハルトのISの方が気になっていた。

「ふえー・・・かなちゃんすごい・・・」

中咲(だったはず)の言葉にはうなずけた。

なんだよあれ・・・、間違いなく卑怯だろ・・・

「っ！織斑先生！」

「わかっている！」

モニターを見ていた篤が驚きを隠せない顔をしたから、つられてモ

ニターを見たら・・・

『ヴェルヴェーゲン・ファルケ、ダメージ390。シールドエネルギー残り1。ダメージレベルB。』

と表示されていた・・・え!?

「い、一撃でここまで削るのか!?!」

・・・はい、こういう驚愕しか浮かばない。それ以外の驚愕を浮かべる人を見てみたい。

セシリアがどんな顔してこの試合を見ているか分からないが、多分、教官を一撃でのしたのが事実だと理解したと思う・・・

S i d e K a n a d e

「おい！レギンハルト！悪い！全力でやっちゃまった！というか加減すんの忘れてた！」

一瞬ふらつとしたレギンハルトのISを下から掴んだ。

・・・ああ、今気がついたけど所謂お姫様だっこになってる。

「だ、大丈夫……。だけど、もう私の負けだね……。ダメージも大きいし、シールドエネルギーももうないし……」

「……ほんつとに悪い！何したっていいってくらい悪いって思ってる！」

ただ、この発言が後で大変な目に遭う切っ掛けになるとは思わなか

った・・・

「え、えと、あの、その、はう・・・／＼／」

・・・なんだ？レギンハルトが顔また赤くしたぞ？しかもさっきより真っ赤だ・・・

「かなちゃんが浮気したあ~~~~~っ!!!」
「うおっ!?!」

(真琴が大号泣。)

「お、おい、落ち着け!浮気じゃない・・・はずだ!」
「浮気しちゃだよ~~~~!!!!かなちゃんは私のんだからあ
~~~~!!」

(誰もがびっくりするくらい的大号泣。しかも理由は勝手な思い違い。当の奏は浮気をするもなにも、付き合っていない)

Side Kanade

俺はオリヴィエ（・・・とりあえず何でもしてやるって思い切り叫んだら『オリヴィエって呼んで欲しい』って言ったから今はそう呼ぶことにした・・・）を抱きかかえたままピットに戻ってきた・・・が。

「か~~~~な~~~~ちや~~~~ん!!」

「ふうっ!？」

「きゃあっ!!」

いきなり真琴が突っ込んできて、オリヴィエを落としてしまった。

ちなみに着地と同時にISを解除したからダメージは素通り・・・

!!

そして真琴は思い切り俺に抱きついて締めつけて・・・

「奏、やったじゃねえか！」

「・・・頼む一夏、真琴を退けてくれ・・・ぐおお・・・」

唯一の救い、一夏に救出（俺のだ！俺の！）を依頼したが・・・

「・・・わ、悪い、無理だ・・・」

などと引きやがった！この薄情者！

・・・が、その理由はすぐに分かった。真琴だ。真琴の奴に原因があった。

目が・・・ね。『私を退かしたら悪い噂を全校中に流す！』なんて目をしてやがった。

んで、悲劇はその後だった。

「ちよ、ちよっと！奏は私のなのよ!？」

「お？」

「は？」

「へ？」

突然聞こえた声にそれぞれが拍子抜けの声。

ちなみに上から一夏、俺、箒。

声の主は・・・オリヴィエだった。

オリヴィエは俺の腕を掴んで自分の方に一気に引き寄せ、そのまま抱きついた!!!?

んで、真琴をホントに目の敵のように睨みつけている。

「かなちゃんとならないですよ!!!」

「奏は私のなんだからー!!!」

「お前ら俺の腕に抱きつくなくなしがみつくな引っ張るな!!!」

見事な『 な』の連発。

だが・・・痛い！肩が外れる！！

「んぎい~~~~~!!!」

「んにい~~~~~!!!」

「肩が痛い肩が痛い肩が外れる肩が痛い肩があ~~~~~つ!!!」

ゴキン!!!

『あ。』

・・・ついに恐れていたことが起きた。

俺の左肩、脱臼・・・



引っ張っていたのは・・・オリヴィエだった。

「・・・これでは二崎は代表決定戦二戦目は無理だな・・・」

「無理とかそういう次元の話じゃないっすよ・・・」

「ということは、だ。織斑。次の試合が実質の代表決定戦だ。」

「は、はい!!」

一夏・・・、頑張れ。馬鹿二人のせいで約束果たせなくなっちゃまった・・・

「中崎とレギンハルトは二崎を負傷させた罰として保健室へ連れて行け。いいな？」

『は、はい・・・』

すっかり怯えきってしまったような返事を返した二人。

つか俺は普通に歩けますよ？やっちゃまったのは左肩ですよ？

「・・・篤？あとで結果だけ教えてくれ。俺は・・・寝てるわ。」

「あ、ああ。分かった。任せておけ。」

・・・なーぜキョドった？

ついでにその後の連絡は笑った。

なんでって？

『馬鹿二名の乱闘により、二崎奏は戦闘不能。セシリア・オルコックト対織斑一夏が実質上の代表決定戦とする。』

だから。

〈 保健室 〉

「……まず一つ言わせてもらおう。お前らまずどっか行けよ！」  
『嫌!』

わーお、さっきまでいがみ合って乙女の戦い勃発させて俺の肩外した人間はどこへ行った？

「とりあえずお前らがいなくなってくれば俺はゆっくりと休めるんだけどな……」

『じゃあ私試合見てくるから!』

わーお、また息ぴったり。

「あー、行ってこい行ってこい。俺はぐっすり寝てお前らへの恨みを募らせてもらうから……痛っ!？」

「や、やっぱり残って私が看護を……」

「か、看護は私がする!」

「お前らもう試合見に行ってこい!居るだけ邪魔だ!」

一声荒げて叫んだら、二人ともしよぼんとして行ってしまった。

そして二人の姿が見えなくなってから……

「……ふっ！」

ゴキン。

脱臼を無理に治す。

「……あただ……無理して治すもんじゃないか……？ま、でも……」

取り敢えず腕を振り回してみる。

痛みは引いたな。けど、多分……全治一週間？

絶望は全治三年……か？

「ま、それはおいおい考える……か……」

そのまま襲ってきた睡魔に俺は完全に敗北した……

「・・・で！奏！起きろ！」  
「お・・・？」

・・・どれだけ時間がたったんだろうか？誰かが起こしに来た。  
・・・あ、箒か。

「第か……。どうだった、一夏の試合は？」

「一夏の……。負けだ。もう少しで勝てるところだったのだが……」

「やっぱり、か。」

「やっぱり、だと？」

「……。やっぱり怪しまれる？といっても理由は単純。」

「ISの駆動時間、それに使用回数、そして練習・訓練で見につけた実技的知識。相手……。オルコットだったか？彼女と比べたら雲泥の差があるからな……。でも……」

「でも？」

「もう少しで勝てる、ってところまで追いつめたなら、あいつとしては上出来、だろ？」

「あ、ああ……」

「おい、何顔を俺から背けてるのかい？」

「ま、ありがとな。教えてくれて。」

「ああ。そういえば、部屋割が変わった、と言っていたな。」

「部屋割が？」

「……。なんだ？イヤな予感が絶えなくなっただが……」

「お前の部屋、一人増えたそうだ。誰かは聞いてないが、そう伝えておけ、と言われた。」  
「マジか・・・」

嫌な予感が三倍増しになった・・・

）  
1040室前  
）

ちよつとー!!なんているのー!?

先生に頼んで部屋割変えてもらったのよ!あなたが奏に変なこと  
しないかの監視につて!

ここはかなちゃん私の愛の巣なんだからー!!

部屋から口喧嘩が聞こえ・・・つて!!

「何が愛の巣じゃコラア!!」

ドアを蹴り開けて突入!!

そんなふざけた話があつてたまるか!!

「あつ、奏!!」

「あつ、かなちゃん!!」

頼むからこれ以上俺の心労を増やさないでくれ・・・

その前に一番の疑問を解消したい!

「オリヴィエ!なんでお前がこの部屋に!?!」

「奏がこいつと一緒に部屋に同居してるって聞いたから!」私の



奏に何かあつたら嫌なの!!」

「あんたのじゃないの! 『私の』 かなちゃんなの!!」

どちらもやけに『私の』を強調したな・・・

「あんな、俺はお前らどちらのものでもないんだぞ? そして俺はお前らのものになる気はないし、寧ろ俺は一人になりたい!」

そう言い離して毛布をひつつかんで・・・

「ちよつ、奏!?!」

「かなちゃん、どこ行くの?」

「今日は野宿する! こんなところにいたら命がいくらあっても足りん!」

「あつ、かなちゃ (ボタン!)

真琴が何言ってるか気にしねえ! 静かな方がいいんだ俺は!

翌日。

「お、おい奏！？顔が真っ青だぞ！？」

「だ、大丈夫か！？」

「あ、ああ……、気にしないでくれ……」

部屋に戻れなくて寮をふらふら歩いていたら千冬さんに見つかり、部屋に強制退去させられ、寝ようとしたら突然ベッドにもぐりこんできた真琴とオリヴィエに困惑し、結局眠れずに朝を迎えた俺だったんだから……

ある意味自業自得だ……。何故二人がベッドにもぐりこんできた

り抱きついてきたり肩外したりしたのか分からんが……

そんなグロッキーのままSHRが始まった……ら……

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

山田先生は嬉々としてそんなことを言った。クラスの女子も大いに盛り上がっている。

……よし。俺としてはすっげ嬉しい。面倒事回避万歳!

「先生、質問です。」

突然一夏が手を上げた。……いいじゃないか、お前が代表なんだから。

「はい、織斑くん。」

「俺、昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか?」

「それは……」

「それはわたくしが辞退したからですわ!」

がたとんと立ち上がり、早速腰に手を当てるポーズ。・・・もうそれ  
いいってば。

・・・あれ？なんで辞退してるんだ？そしてなんでテンション高い？  
そして横！幸せそうな顔をしない！そして横見て目があった時にう  
つとりしない！もじもじしない！もしもーし！？

まあいい、横放置！なんか昨日の怒り調子が無くて上機嫌なんだけ  
ど！？

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば  
当然のこと。なにせ、わたくしセシリア・オルコットが相手だった  
のだったのですから。それは仕方のないことですわ。」

確かにな。・・・つっても俺の横で今うつとりと陶醉した目で俺を  
見ている奴も代表候補生だった・・・よな？

「それと、まあ、わたくしも大人げなく怒ったのも反省しまして・  
」

・・・『しまして』？

「一夏さん」にクラス代表を譲ることにしましたわ。IS操縦に  
は実践が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いに事欠きませんも

の。」

「・・・ほうほう、なんとという無駄な心遣い・・・って『一夏さん』！？一夏に対する呼称が変わった！？」

「いやあ、セシリア分かってるねー。」

「世界に二人しかいない男子がいるんだから、どちらかを持ち上げないとダメだよな。」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑くんは。」

「おいおい、クラスメイトを売る気か？」

「そ、それですわね。」

「コホン、と咳払いをしてあごに手を当てるオルコット。・・・そのいつもと違うポーズに意味はあるのか？」

「わたくしのように優秀でエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ・・・。」

あの時罵倒のオンパレードをした人間のどこがエレガントで華麗な

んだ？

バン！

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな！」

対立して立ち上がったのは箒だった。机を思い切り叩いて。

痛くないか？・・・あ、でも痛くないかも？

「オリヴィエ？」

「・・・(ぽー・・・)」

「おい？おい？」

「・・・(ぽー・・・)」

ダメだ、横の方は無反応。視線に『私にIS操縦教えて』というものを感ずる気がするんだが？

面倒だから横を放置しておいて・・・も一回箒たちを見たら・・・

箒は相変わらず異様に殺気じみた視線でオルコットを睨みつけている。

(おいおい、そんな目で見たら相手が怯えるだろうがよ・・・)

と思つてオルコットを見たら・・・おろ？

そのオルコットはその殺気の籠った眼に全くビビることなく逆に誇らしげに返していた。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ！い、一夏がどうしても、と懇願するからだ！」

あらま、ホントかどうかは一切知らんけど。

「え、筈ってこなのか・・・？」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

おーおー、一夏が怒鳴られた。

ちなみに、ランクというのはあくまで訓練用の機体で出した最初の格付け。一夏はBらしい。それで俺は・・・測定不能らしい。セラフィムを使つてる時と訓練機の時とで全然違つたらしく、本来の力が測れなかつたらしい・・・

仮判定でAらしいけど。セラフィム使用時だったら確実にSはいつていたらしい。

「座れ、馬鹿ども。」

いつもの出席簿が箒の頭に落ちた。そのままオルコットの頭にも。

「レギンハルト、横に恋慕と陶醉の表情を浮かべるな。私情とそれ以外の区別をつける。」

オリヴィエにも出席簿が落ちた。

・・・あれ、痛そうだ・・・

「その得意げな顔は何だ。止める。」

ああ、一夏の頭にも落ちた。

「お前らのランクなどゴミだ。私からすればどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな。」



あのオルコットも千冬さんに言われたら反論する余地もないらしく、何か言いたそうな顔をしていたが、結局言葉を飲み込んでいた。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前にも言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ。」

へえ……。千冬さん、職場ではしっかりしてるけど、実際どうしてんだろ？ だいぶ前に一夏の家行って千冬さんの部屋ちらっと見た時、色々散らかってた気がしたから……

バシン！

「ぐふああ……」

「……お前、今無礼なことを考えていただろう？」

「ソ、ソナコトハアリマセンヨ？ メツソウモナイ……」

「ほう……？」

バシン！ ガスッ！！

「すみませんつした……」

「分かればいい。」

こうして善良な市民は暴力に屈していくんだよ！ そんな事実、誰も

分かつちやいねえ！！

「クラス代表は織斑一夏。誰も異存はないな？」

はーいと（出席簿のダメージで呻く俺と対象の一夏以外は）クラス一丸となって返事をした。・・・団結心素晴らしいなオイ・・・

ま、俺にとっては良かったことだよ全く・・・

#05 クラス代表戦！ 熾天使は空を舞い、そして脱臼。そして翌日。（後

） 次回予告 （

運よくクラス代表を回避した後、普通の授業が再開した。

ISの実技で実際の起動、急浮上や急降下をさせられたが、専用機  
持ちで一番稼働時間の少ないあいつはやっぱりというかなんという  
か・・・

そして、謎の転校生・・・いや、転入生？の姿が・・・

次回、#06 傑作な実技と転校生とクラス代表おめでとうパーテ  
ィー

・・・俺、クラス代表関係無いのに、何で強制参加させられてんだ  
る・・・？パーティーに・・・

#06 傑作な実技と転校生とクラス代表おめでとパーティー（前書き）

ようやく鈴出せました・・・

今このペースだとシャルやラウラが出るのはいつになるやら・・・

3月28日、鈴の名字変換ミス修正しました

## #06 傑作な実技と転校生とクラス代表おめでとうパーティー

「では、これよりIS基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、二崎、レギンハルト。試しに飛んでみせる。」

四月下旬、遅咲きの桜も散りきったころ。

俺はこうして千冬さんの授業を聞いていた。

これまでにあったことを簡単にまとめると、真琴とオリヴィエの喧嘩騒動がより多く勃発するようになったこと、セシリアが謝罪し名前前で呼ぶように言ってきたことがあった。更にはオリヴィエとすごく仲良さそうにしていた。

前者はまあ・・・俺には分からないが・・・

誰でも予測できることだったらしいのだが、後者は誰もが予想できないものだった。

その時、やっぱりあの『オリヴィエ一撃撃破』が相当衝撃だったのか、色々と教えてほしい、とまで言われた。・・・後ろと横からの強烈な殺気に首を縦に振ることはできなかつたが・・・

話を戻すと・・・今は訓練中。

俺はISの展開はお手の物。一秒もいらさないぞ？

「早くしろ、熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ。」

一夏が急かされている。

ちなみに、それぞれのISの待機状態だが、俺は左中指の翼を模したオブジェがついた指輪。セシリアは左耳のイヤークラス。オリヴィエはカチューシャ。一夏は・・・右腕のガントレット。なぜあいつだけあんななんだ？

「集中しろ。」

次は絶対やられるな。・・・なんて思っていたら展開していた。

・・・よく見たら浮いてないの俺だけ？

一夏の『白式』も、セシリアの『ブルー・ティアーズ』も、オリヴィエの『ヴェルヴェーゲン・ファルケ』も全部数十センチほど浮いているのに、俺だけ足が付いている。

「よし、飛べ。」  
『はいつ!!--!』

言われてからの二人の行動は早かった。びっくり。

セシリアは急上昇し、オリヴィエも遅れながら上昇した。

「よし・・・俺も!」

なんて呟いた一夏は・・・

「おわっ!?!わっ!?!わっ!?!わあああああ・・・

なんだか知らないけど変に飛んでいった。

「・・・そっぴや織斑先生?俺、一体何枚翼を展開すりゃいいんすか?」

「全部展開しろ。全速力で飛べ。」

わーお、なんとという無茶ぶり。

「なら、全員ちよつと下げてもらえませんか？こんなに近いと何人かは風で吹き飛ばされそうな気がするんで・・・」  
「分かった。全員下がれ。二崎のISの飛翔で吹き飛ばされたくなければな。」

織斑先生の一言で、全員が一斉に下がった。

・・・これくらいなら多分・・・、誰にも被害ないかな？

「よし・・・」

キュイイイイ、と音がして、バーニアにエネルギーが溜まっていた。  
く。

そしていったん地面を蹴って跳び上がり、更に空中で空蹴りをして・・・

『きゃあああああああ！！』

俺は3人が飛びまわっている空へと一気に舞い上がった。

やっぱりものすごい風が吹いたから、一斉に悲鳴を上げた。

途中で白式もヴェルヴェーゲン・ファルケも抜いた。



それで、だいぶ先行していたブルー・ティアーズに追いついた。

《何をやっている。スペック上の出力はセラフィムはともかくブルー・ティアーズとヴェルヴェーゲン・ファルケよりも白式の方が上だぞ。》

下で一夏が千冬さんに叱られているのが見えた。

「本当に素早いISですね・・・」

「ある方法使えばもっと速くなるけどね？」

「ま、まだ速くなりますの!？」

セシリア、俺の目の前で驚愕。

・・・だけど、それやったら最悪腕折れるしな・・・

と、昇ってくる二人を待っていたいる間、セシリアと他愛のない話をしていた。

急上昇、急下降は昨日やったばかり。俺の場合は超が付くけど。

んで、ちょっとぼーっとしてたら二人が追いついたために更に動く。

《ちょっと奏！何セシリアと楽しそうに話してんのよー！！》

飛んでいたら、遅れ気味で飛んでいるオリヴィエから何故か怒りの籠った声が。・・・なんで？

「楽しそうにしてねえよ！お前らが遅いから普通に喋くっただけだ！お前が早く上行っていたら多分お前と話してた！」

《ほ、ほんと・・・？えへへ・・・》

・・・なぜか喜んでるような声が？

実を言うと、俺は他の三人よりも遙か先を旋回している。

・・・だって、俺のセラフィム、全速で飛ぶと速度はトップクラスなんだから。

だから、他の三機と比べると縦横無尽に舞っているように見える訳。

・・・と、そんじょそこらを飛び回っていたら・・・

《織斑、オルコット、レギンハルト、急降下と急停止をやってみせる。目標は地表から十センチだ。》

そんな指示が聞こえた。・・・あれ？俺は？

《二崎は三人の急停止成功後、目標を地表から一センチにして全ての翼を展開したまま急降下と急停止を行え。》

はあ！？一センチ！？無理でしょ！？慣性とか！『車は急に止まれない原理』よ！？

《では、奏さん。お先に失礼しますわ。》

《奏、先に行くわね。》

セシリアとオリヴィエが先に降りて行った。

うん、相変わらずファルケ（もう面倒だから略す。）は遅い……。『鷹』ってついてるのになぜ？

まあ、そこそこの速度は出てると思うよ？

《奏、先に行くぞ？》

ついに一夏も降りる。・・・なんたる、嫌な予感が・・・

「って馬鹿！墜落する気かお前は！！」

明らかに『墜落コースヒヤッハー!!』じゃねえかそれ!!

「間に合ええええええええええええ!!」

腕折れる覚悟で空中に高圧縮粒子砲を構え、空に向かって放射。それと同時に前進して超加速を発動。

・・・だが、間に合う訳もなく・・・

ズドオオオオオオン!!!

ぶわあああ・・・

一夏は墜落、間に合わなくてそのままの速度で趙急降下をした俺は難なく急停止をしていた。

目標より一五センチ先でブレーキかけたけど。

俺のことは無視してくれて助かったが、一夏の方に集中が行く。皆息を飲んでる。

「一夏！」

「織斑くん！」

篤と山田先生が慌てて一夏の元へ走っていき、織斑先生は相変わらず普通に歩いている。

「一夏！大丈夫か！？」

「大丈夫ですか！？」

俺もその場に着いた。

煙がはれたら・・・

当の一夏はグラウンドに大穴を開けて頭を地面に突っ込んでいた。

あ、IS解除されてら。

「~~~~~っでえっ！痛ってえ、死ぬかと思った・・・」

そんな言葉に全員が安堵の息を漏らす。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った？グランドに穴を開けてどつする。」

「……すみません……」

……ま、無事で良かった。

一夏は座ったまま方向転換した。

「情けないぞ一夏。私が教えてやったことをまだ覚え（ドンッ！）うおっ！？」

あんな擬音ばかりのことを『教えてやった』という箒を言葉を言いきる前にセシリアが突き飛ばした。

……いつIS解除した？

そして一夏の元へ走っていく……

「大丈夫ですか！？一夏さん！？お怪我はなくて！？」

「あ、ああ、大丈夫だけど……」

……ああ、箒の顔がどんどん怖くなっていく……

「それは何よりですね。ああ、でも、一応保健室で見てもらった方

がいいですわね……。よければわたくしが一緒に「無用だ。」

ああ、ついに箒が参戦した。

周りも傍観してないで止めるよ・・・

「ISを装備していて、怪我などする訳が無いだろう。」

「あら篠ノ之さん？他人を気遣うのは当然のことですよ？」

セシリアが対抗を・・・ああもう、真面目に授業を進めようぜ？

「お前が言うのか、この猫かぶりか！」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ！」

「ぐっ・・・」

「むっ・・・」

『んんん~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~っ！！！！』

ついに睨み合いにまで勃発したよおい。

いい加減にしないと出席簿が・・・

ぱあん！ぱあん！

ほら落ちた。

「邪魔だ、馬鹿者ども。端っこでやっている。」  
『……はい……』

やっぱり逆らえないんだよね……。あれ。

「二崎、武装を展開しろ。織斑もISをもつ一度展開してから武装を展開しろ。特に織斑。それくらいは自在にできるようになっただろう。」

「は、はあ……」

「……はあ……」

「返事は『はい』だ。」

「はっ、はい！」

「……はあ。」

思わず溜息ついちゃったから……

ガンッ！

……鉄拳制裁受けたよチクシヨ……



とりあえず指示受けたから武装を展開する。

(・・・短銃、5連射式、速装填・・・)

『ヴォン』という音と共に粒子銃が展開した。・・・あれ？普通はしないだろこんな音？

「さすがだ、二崎。」

珍しく千冬さんが褒めた！？

そのまま一夏を見て・・・

「遅い。0・五秒で出せるようになれ。」

やっばけなした。

「オルコット、レギンハルト。武装を展開しろ。」

『はい。』

いつのまにかISを展開させていたセシリアとオリヴィエにも同じ命令が出た。

二人は左手を肩の位置にまで上げ、セシリアは自分の横に、オリヴィエは前にかざした。

俺みたいに電子音が鳴るわけでもなく、一夏みたいに時間がかかるわけもなく、爆発的に光った直後、セシリアの手には《スターライトmk?》が、オリヴィエの手には《インパルスカノン》が握られていた。

二人とも俺と同等で、しかも装填済みでロックが外れている。

「さすがだな、代表候補生。だが・・・、オルコット、そのポーズは止める。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ。」

「で、ですが、これはわたくしのイメージをまとめるために必要な・

・・・

「直せ。いいな。」

「・・・、・・・はい・・・」

反論の余地があるように見えたセシリアはそのまま黙りこんでしまった。

「オルコット、レギンハルト、二崎。近接用の武器を展開してみせろ。」

「はい。」

「あ、はい。」

「えっ、あつ、は、はいつ。」

オリヴィエと俺は元々構えていた為にあっさり答えたが、セシリアはどうも頭で反論していたらしく、急なことに慌てていた。

一旦武器を『クローズ収納』して、近接武器を『オープン展開』。

オリヴィエは重そうな剣、《メルト・スレイガ》を、俺はリーチが長めな《高圧縮粒子剣》を出した。

けどセシリアの手の光はくるくると回ったまま。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです……、ああ、もうっ！《インターセプター》！

やけくそ気味に叫んだ結果、イメージが出来上がったのか、光は武器になった。

が、この方法は教科書の初めに書かれている、『初心者向けの方法』。代表候補生には屈辱だろうな……

「……何秒かかっている？お前は実戦でも相手に待ってもらえるか？」

「じ、実践では近接の間合いに入らせません！ですから、問題あり



らませっていた。

・・・頬にひまわりの種詰めたハムスターがお前は・・・

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片づけておけよ。」

頑張れ一夏。俺は応援しているぞ。

「二崎、お前も手伝え。」

「・・・」

・・・もう嫌・・・

一夏、墜落したお前を恨むぞこの野郎・・・

この片づけの時、箒とセシリアはさっさと帰ってしまったが、オリヴィエと真琴が残っていた。

その時・・・

「奏、あの時なんでセシリアを見ていたの・・・？」

「あ、あのさ？オリヴィエ？なんかすっげえ怖いぞ？その目・・・」

「正直に答えて・・・。お願いかなちゃん、私、酷い目に遭わせたくないから・・・」

「真琴、お前もか！？・・・悪い一夏、後任せた！」

「あ、おい！奏！？」

『逃がさない！』

一夏を放置して脱兎のごとく脱走。

そして後ろから阿修羅のような殺気を出しながら俺を追いかける真琴とオリヴィエ。

怖い！めちゃくちゃ怖い！何このホラーゲーム真つ青な無限追いかけっこ！？

S i d e    ? ? ? ?

「ふうん、ここがIS学園かぁ・・・」

その夜。

IS学園の正面ゲートの前に、小柄な体に不釣り合いなポストンバ

ツグを持った少女が立っていた。

まだ暖かな四月の夜風になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結んである。肩にかかるかかからないくらいの髪は、金色の留め金がよく似合う艶やかな黒色をしていた。

「えーと・・・、受付って・・・どこにあるんだっけ？」

上着のポケットから切れの紙を取り出した。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表していた。

「本校舎一階総合事務受付・・・って、だからそれどこにあんのよ・・・」

文句を言っても、紙は返事をしない。少女は多少のイライラと一緒に紙を上着のポケットにねじ込む。また中でぐしゃ、という音が聞こえたが、もちろん気にしていない。

「自分で探せばいいんでしょ？探せばさあ。」

ぶつくさ言いながらも、その足はとにかく動いていた。思考よりも行動。そういう少女なのだ。よく言えば『実践主義』、悪くいえば『よく考えない』である。



(・・・つたく、出迎えが無いとは聞いていたけど、ちょっと不親切すぎるんじゃない？政府の連中にしたって、異国に十五歳を放り込むとか、何か思うところないわけ？)

少女は、日本人に似ているがよく見ると違う。その鋭角的でありながらどこか艶やかさを感じさせる瞳は、中国人のそれだ。

・・・とはいえ、この少女にとって、日本は第二の故郷であり、思いの地であり、因縁の場所である。

(・・・誰かいないかな？生徒とか、先生とか、案内できそうな人・・・)

学園内の敷地を分からないなりに歩きながら、きよるきよると人影を探す。・・・とはいえ、時刻は八時過ぎ、どの校舎も明かりが落ちっており、当然生徒は寮にいる時間だった。

(あーもー！面倒くさいな・・・。空飛んで探そうかな・・・)

一瞬、『それは名案！』と思った少女だったが、あの『アナタの街の電話帳』三冊分に匹敵する学園内重要規約書を思い出して、止めた。

まだ転入の手続きが終わっていないのに学園内でISを起動させた

ら、事である。最悪、外交問題にまで発展する。

『それだけはやめてくれ』と何度も懇願していた政府高官の情けない顔を思い出して、少女の気分はちよつと晴れた。

（ふっふーん。まあねー、私は重要人物だもんねー 自重しないとねー）

そんなこんなで敷地内を歩き回っていたら・・・

だから・・・でだな・・・

声が聞こえた。

視線を向けると、女子がIS訓練施設から出てくるようだった。どこの国でもIS関係の施設は似たような形をしているからすぐにそつだと分かる。

遅れてもう一人の女子が出てきた。

（・・・ちよつどいいや。場所聞こつと。）

声をかけようとして、少女は小走りにアリーナ・ゲートへと向かう。

だから、そのイメージが分からないんだよ・・・

不意を突かれて、少女の体はピクンと震えてその足が止まる。

男の声・・・、それも、知っている声にすごくよく似ていた。・・・  
否、おそらく同一人物。

(アイツがいた・・・！あたしって分かるかな？分かるよね？一年ちよつと会わなかったただけだし。)

そう自分に言い聞かせつつ、けれど自分だと分からなかったらどうしようという不安に思考が乱れるが・・・

(・・・大丈夫、大丈夫！それに分からなかったら、あたしが美人になったからだし！)

・・・超がつくポジティブ思考にスイッチを入れ、少女は再び歩き始めた。

「いち・・・(あつ！声裏返っちゃった！どうしよ、なんかあたしがすっごい意識してるみたいじゃん！恥ずかしいなあ・・・)」

と言った時だった。

「一夏、いつになつたらイメージがつかめるのだ？先週からずっと同じ所で詰まってるぞ？」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ、『くいつて感じ』って……」

「……くいつて感じた。」

「だからそれが分からないって……おい、待ってて箒！」

「箒、それじゃ一夏が分からないのも無理ないって。擬音使って説明するなって。」

「む……」

すたすたと足を進める女子を、男子が追いかけ、女子（……なのになぜか声が男子のような？）が忠告をしていた。

（……誰？あの女の子。なんで親しそうなの？って言うかなんで名前と呼んでんの？それにあの女の子……？あれ？でも声低かったよな……あーもー、そんなのどうでもいいの！あの子も親しそうだった！）

さっきまでの胸の高鳴りは嘘のように消え、酷く冷たい感情と苛立ちが雪崩れ込んできた。

それからすぐ、総合事務受付は見つかった。アリーナの後ろにあったのが、本校舎だったからだ。灯りがついていたので、そこだと分かった。

「……ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園  
へようこそ、ファン・リンイン 鳳鈴音さん。」

愛想のいい事務員の言葉はどこへやら、少女……鈴音は見るからに不機嫌です、とばかりに唇をとがらせながら聞いた。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ？鳳さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子、一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわね。それと、不慮の事故でクラス代表になれなかった『最強』って言える天使のようなISを使う男の子もいたわね。」

噂好きは女性の性、その体現のような事務員の姿を冷ややかに見ながら、鈴音は質問を続ける。

「二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ？」

「名前は？」

「え？ええと・・・、聞いてどうするの？」

鈴音の態度に少しおかしなところを感じたのか、事務員は少し戸惑ったように聞き返す。

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってって・・・」

にっこりとした笑顔には、ばっちり血管マークがついていた。

S i d e K a n a d e

「という訳で！織斑くんクラス代表おめでとう！」  
「おめでと〜！」

パン！パン！パン！

クラッカーが鳴って、一夏の頭に紙が乗った。

ちなみに今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。ちなみに俺は強制参加させられた（真琴とオリヴィエに）。

各自飲み物を持ってわいのわいの騒いでいる。

壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた紙が掛け  
てある。

・・・就任式か！？

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ！」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと。」

・・・待て、今返事したの二組の奴じゃなかったか？なぜ三十人以上いる！？

そして筈は不機嫌そう。

そしてあくびをした後だった。

「はいはい、新聞部です。話題の新人生、織斑一夏君と二崎奏君に特別インタビューをしに来ました〜！」

オー、と一同盛り上がる。

・・・よし逃げよう。

「あ、私は二年の黛薫子。みゆずみかおるこよろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺。」



一夏が名刺を受取った。

・・・しまった、逃げるタイミングを失った。真琴が、オリヴィエが俺の腕を掴みやがった。

「ではまず織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ボイスレコーダーを一夏に向け、無邪気な子供のように目を輝かせてる・・・

「えーと・・・」

おお、悩んでる悩んでる。

「・・・まあ、なんというか、がんばります・・・」  
「えー？もつといいコメントちょうだいよ。」俺に触るとヤケドするぜ！』とか！」

いつの時代の台詞だそれは。

なんて突っ込んでいたらまたあくびが出た。

「ふああ・・・、真琴、オリヴィエ、そろそろ寝たいんだが？」

「えー？かなちゃんもう寝ちゃうのー？」いつち おめでとパーティーの途中だよー？」

「そっだよ？もっと祝ってあげようよ！」

ちなみに真琴は一夏のことを『いつち』と呼ぶようになった。こいつの癖だ。

「・・・いい。明日一言だけ言っておくさ。・・・ふああ・・・まだ仕事残してるしな・・・」

『どこのサラリーマン？』

二人して突っ込むな！

「・・・よっ。」

『あっ・・・』

二人の手からするりと腕を抜いて、俺はさっさと食堂を出た。

まだ一夏がキヤーキヤー言われている間に、だ。

なんで二人が切なそうなの、というか残念そうな声を出したのかは知らん。

(奏が食堂を出て数分後……)

「じゃあ次は二崎君！……ってあれ？二崎君は？」

「眠いからって部屋に戻りました……」

「はぁ……」

(真琴とオリヴィエが落ち込んだ表情で残されていた)

「じゃあもっかい呼びこんじゃえー！」

「もっかいじゃないよー！終わるまでだよー！」

「そっだそっだー！」

「だったら、部屋までインタビューしに行く？」

『しちやいましょー!』

(なんて会話が展開されていた)

そして1040室。

既にシャワーを浴びてあとは寝るだけになって。

「・・・やっぱりきたか・・・腕・・・」

左腕が痛む。原因もはっきりしている。

『あの』超加速の時だ。

「・・・明日に影響しなけりゃいいんだけど。」

ベッドに体を預けてうとうととし始めた時・・・

かなちゃーん！起きてー！寝てなくても起きてー！

・・・悪魔が俺を呼ぶ声がした。

「インタビュアーは受けねー。受ける気無え。だからおやすみ。」

「寝るな————っ!!」

ああ、悪魔が入ってきた……

でも、もつ目が……

かなちゃん、起こしたのに・・・

「・・・寝ちゃった・・・」

「じゃあ、また今度だね、インタビュー！」

だったらだったら！

「あ、私が答える！」

私だったら結構知ってること多いし、それに・・・うふふ・・・

「・・・真琴、変なこと言うなよ？」

「変なことなんて言わないよ箒ちゃん」

「顔がにやけてるぞ・・・」

箒ちゃんになんか言われたけど気にしな～い！

「本人に直接した方がいいからね、だからまた。」

って言って副部長さん帰って行った。あーあ、『完全嫁宣言』  
できなくなっちゃった……



#06 傑作な実技と転校生とクラス代表おめでとうパーティー（後書き）

） 次回予告 ）

朝方になって聞いた転校生の存在。

どうやら一夏の幼馴染みらしい。・・・セカンド、らしいけど。

そしてそいつはやたら一夏にべったり・・・いや、付きまとっていった。

次回、#07 転校生・鳳鈴音の襲撃

・・・あの唐変朴、まーた何かやかしゃがったらしいな・・・

（作者近況）

ここしばらくは書き溜め分更新になりそうです。

それと、執筆付加予告ですが、4月第二週の日曜日は執筆できそうにありません。

例の散瞳検査を行うからです。バルスしてしまうからです。サングラスがないと日向が歩けない歩けない・・・

糖尿病は・・・なぜか血糖値は90未満・・・

薬はどんどんランクが下がってますが・・・低血糖を起こさないか不安です。

#07 転校生・鳳鈴音の襲撃（前書き）

今回は後書き次回予告が台本風になってますが気にしないでください。

3月28日、鈴の名字変換ミス修正しました

## #07 転校生・鳳鈴音の襲撃

「あ、二崎くんおは……よ……」

一人の女子が俺に声をかけて……止めた。

仕方ないさ、俺、またグロッキーになって机に突っ伏してるから……

「あ、織斑くんおはよー。ねえ、転校生の話聞いた？」

あ、一夏が女子に捕まった……転校生？

「転校生？今の時期に？」

それは思った。今の時期に転校とかおかしいと思うぞ？

「なんでも、中国の代表候補生なんだってさ。」

「ふーん。」

……そういや代表候補生とえば……

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

・・・やっぱり。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。  
今朝もまた、腰に手を当てたポーズをしている。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？騒ぐほどのことでもあるまい？」

お、さつき窓際最前列の自分の席に居た箒がいつの間にか一夏の席のそばにいた。

・・・そっぴや代表候補生つても一人いたよな・・・？

ま、俺も一夏の近くに行くか・・・

「どんなやつなんだろうな？」

「む・・・、気になるのか？」

お、箒が気にした。

「ん？ああ、少しは。」

「ふん・・・」

あ、不機嫌になった。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに・・・」

「そう！そうですわ、一夏さん！クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう！ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ！」

なーんか、面倒事に巻き込まれそうな気がしやがるな・・・

ちなみに、クラス対抗戦とは呼んでそのまま、クラス代表同士によるリーグマッチ。本格的なIS学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためにやるって話。

それと、クラス単位での交流及びクラスの団結のためのイベントだそうだ。

やる気を出すために、一クラスには優勝賞品として学食デザートの半年フリーパスが配られる・・・女子が燃えるのも良く分かるよ畜生・・・

「まあ、やれるだけやってみるか。」

「やれるだけやるで済ますなボケ。」

「そうですわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

おお、話に自然に溶け込めた！！

「そうだぞ。男子たるもの、そのような弱気でどうする？」

「織斑くんが勝つとクラス皆が幸せだよー。」

俺は幸せじゃない。デザートはあまり食べないし。俺は寧ろ野菜を食いたい！

そんなことを考えていたら、俺達の周りに女子が一人二人と集まってきた、あっという間に女子で埋め尽くされた。

「織斑くん、頑張つてね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って、一組と四組だけだから、余裕だよ！」

それぞれがそれぞれで楽しそうだ・・・

一夏が『おう』と答えた時だった・・・

「その情報、古いよ。」

入口から声が聞こえた。あれ？なんか昨日だったか一瞬間こえた声にそっくりな気が・・・

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できなから!」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた奴は俺は知らないが、一夏は知っていたようで・・・

「鈴・・・?お前、鈴か?」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音!今日は宣戦布告に来たってわけ!」

堂々と来たなああのツインテールは・・・

「何格好付けてるんだ?すっげえ似合わないぞ?」

お、爆弾発言。

「んなっ・・・!?!?なんてこと言っつのはアンタは!」

あ、あの姿は・・・

ガンッ！

「あたっ！」

鉄拳制裁きた。

「いったー……、なにすんの！？うっ……」

凰……だったっけ？が振り向いた先に居たのは、我らが一組担任の千冬さんだ。

あの反応からして、苦手らしい。

「もうSHRの時間だぞ。」

「チ、チフユサン……」

・ お、なんかカタコトっぽくなった。どんだけ苦手なんだよ、おい……

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ邪魔だ。」

「す、すみません……」



すすごとドアから退いた凰。あーあ、あの態度は絶対ビビってる。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ。」

「は、はいっ！ー！」

二組へ向かって猛ダッシュしていった。

「……っていうかあいつ、IS操縦者だったのか……。初めて知った……」

あ、それ禁句タブー……

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で……」

「お前ら落ち着け！さっき織斑先生がSHRの時間だって……」

俺が止めるもクラスメイトからの質問集中砲火。一夏のボケエ！

バシンバシンバシンバシンドゴン！

「席につけ馬鹿ども。」

千冬さんの出席簿が火を噴いた。俺には鉄拳・・・なんで？事態の収拾に努めた俺だけ鉄拳・・・？誰か説明してくれ・・・

授業中は筈とセシリアが出席簿を食らっていた。・・・珍しいな、何か考え事でもしていたんだろうか？

筈はまだ返事をしてその答えが『聞いてませんでした』だったが、セシリアは完全に授業はそっちのけ。ブロンドヘアが圧縮された。

そして俺の横は相変わらず。そろそろ鉄拳制裁くら（ドゴーン！）

「何か変なことを考えていなかったか？」

「よ、横の身を案じていただけです……。授業聞きながら……」

何故か俺だけ鉄拳。何この差は？

ちなみに他の休み時間で。

「そっいえば二崎くんってなんでクラス代表決定戦で戦えなくなっ

たの？」

この一言で……

『はづっ！！』

ポケ二人が固まった。

「……言ってもいいんだが、あるポケどもがどう反応するか……  
だぞ？」

「かかかなちゃんやめて！おおお願いだからやめて！」  
「そ、そそそそうよ！ややややめて？」

当事者二人が大慌てで俺の口封じに掛かる。

「……さて、やめてやるうか、言っちまうか……」  
『やめてえーっ！！』

なんだろ、すっげ楽しい……

〈 昼 〉

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休み、一夏に開口一番で二人が文句を言った。

ちなみに計算していたが、山田先生には注意五回、千冬さんに出席簿で三回叩かれていた。・・・学習しろよちったあよ・・・

千冬さんの前でボケっとしてるなんて、腹空かした虎の前に自分の体に焼き肉のタレ塗りこんで立っているようなもんだぞ？

「まあ、話なら飯食いながら聞くから。とりあえず学食行こつぜ？  
奏もどつだ？」

「お、いいねえ。」

別に断る話でもないし、立ち上がる。

「む……。ま、まあお前がそういうのなら、いいだろう。」「  
「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ？」

「……。どんだけ上から目線なんだお前は。女尊男卑の社会って言うてもだぞ？」

んで食堂へ向かったんだが、クラスメイトが数名ついてきたことはもう分かっていた。真琴とオリヴィエも一緒にいた。

「待ってたわよ、一夏！」

どーん、なんていう効果音が合いそうな用に立ちふさがったのは渦中の転校生、鳳鈴音・・・だったか？転校生、ってのは覚えてるけど別クラスだしな・・・

「まあ、そこ退いてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ。」  
「う、うるさいわね。分かってるわよ！」

・・・そこは一夏に同意。マジで邪魔。

凰（・・・？）は既にお盆を持っていて、ラーメンが鎮座していた。

「のびるぞ。」

「わ、分かっているわよ！大体、アンタを待ってたんでしょ！うが！なんで早く来ないのよ！」

いや無理だろ。エスパーか？一夏は超能力者か？瞬間移動を覚えた・・・

で、うるさい。

その二人が旧誼を暖め（・・・でいいの？）ていた時。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！！一夏さん？注文の品、出来てましてよ？」

あ、確かに。

大げさに急き込んだ箸とセシリアによって会話が中断、一夏は日替わり定食を持っていった。

ちなみに俺は・・・カツ丼（大盛り）、ざるそば（大盛り）、野菜サラダ（ドレッシングマヨネーズとかなし）×2・・・だがなにか？



そのメニューを見た真琴とオリヴィエは・・・

「あー・・・、またやってる・・・」

「・・・奏つていつもこうなの？」

「・・・かなちゃん、野菜好きだから・・・」

なんて呆れられていた。

「向こうのテーブルが開いてるな・・・。行こうぜ。」

一夏が俺らを含めた全員に促す。・・・つっても十人近くいるから移動に時間がかかるけど。

「あ、一夏。」

「何だ？」

「凰・・・だっけか？昔の友人ダチなんだろう？ゆっくり話してこいよ。俺はあっち行ってるから。」

「あ、ああ。」

一夏に友人と話をさせるために俺はちよつと席を外す。

さ 飯を食おう・・・って時に・・・

バンツ！

箒とセシリアが同時に机を叩いた。

「一夏、そろそろ説明して欲しいのだが？」

「そうですね、一夏さん！まさかこちらの方とつつ付き合ってたっしやるの！？」

お嬢さん方？声がこちらに丸聞こえだよ？聞き耳立ててる俺も悪いけど。

「べ、べべべべ、別にあたしは・・・」

「そつだぞ。ただの幼馴染だよ。」

そうか、幼馴染だったのか。

・・・横が睨んでるけど。

「・・・どうかしたか？」

「なんでもないわよ！」

・・・あーあ、怒った。なんでかは知らんけど。

で、もう興味無くなったからざるそばをずるずる食べ始めたら・・・

「ちょっと！聞いていらっしやるの!?!?」

少しは静かに飯食おうぜ？

「ごめん。あたし、興味無いから。」

「言ってくれますわね・・・」

「一夏に教えるのは私の役目だ!」

「あなたは二組でしょ？敵の施しは受けませんわ!」

あーもー、ヒートアップするな畜生・・・

「あ、それ・・・」

「んむ?・・・」

真琴が何かに気付いた声を出した。・・・見たらオリヴィエがわさびの山を半分口に入れた・・・つて!?!?

「~~~~~」

ああ、鼻押さえて悶絶してる。涙目になってる。多分今口の中ひりひりしてると思う。

ちなみにオリヴィエはざるそばだった。真琴はサラダうどん。

「……ったく。わさびの使い方間違ってるっての。わさびは汁で溶いて、そこにそば浸けて啜る。それが普通の遣い方だ。」

「ほ、ほうらるっ？（そ、そうなの？）」「

……まったく。

と、オリヴィエの世話（そう言ったら絶対キレるな）をしていたら・

「一夏！どういうことだ、聞いてないぞ私は！」

「わたくしもですわっ！」

また二人が机を叩いて一夏に問い詰めていた。

「えっ？よく、鈴の実家の中華料理屋に行ってたただけだ。」

「なにっ？店なのか……」

「お店なら別に不自然なことは何一つありませんわね……」

あ、落ち着いた。

横はむすっとした。

んで、俺が飯を食い終わった時、ちょうどチャイムが鳴った。予令の。

オリヴィエはどうにか食べ終わったらしいが、まだ目尻に涙を浮かべていた。

・・・まだ残ってんのかよ、わさびダメージ・・・

S i d e R i n - i n

教室に戻る間、あたしはある事に気付いた。

(あ、昨日のこと聞くの忘れてた・・・)

ま、いつか。後で聞けば。

S i d e K a n a d e

放課後の第三アリーナ。相変わらず一夏の特訓を見ておこつと俺はそこに居たのだが・・・

いつもと違うことがあった。

「え・・・？」

一夏は間拔けな声を出していた。

「な、なんだその顔は・・・。おかしいか？」

「いや、その、おかしいっていうか・・・。」

「篠ノ之さん！？ど、どうしてここにいますのー！？」

そう、箒がIS特訓に参加していたんだから。IS『打鉄』を装着、展開して。

本来なら対射撃型はセシリアが、対格闘型は俺が、対万能型はオリヴィエが（オリヴィエは俺からの要請で参加）担当していたんだが・

簡単に説明すりゃ、打鉄は純日本国産のISとして定評のある第二世代量産型。安定した性能を誇るガード型で、初心者にも扱いやすい、だから、企業や国家、このIS学園でも訓練用として一般的に使われている。・・・以上、教科書から引用改訂。

「どうしたもこうしたも、一夏から頼まれたからだ。」

そうだったね。

「それに、近接格闘戦の訓練が足りていないだろう。私の出番だな。」

「いや、それは奏が・・・」

「いやいやいや、俺より寧ろ箒の方が近接格闘に向いていると思うぞ、俺は。」

そりゃ、俺も近接武装は二種類あるぞ？だが普通の武器に比べれば『クセ』が強いから・・・



「くっ……。まさかこんなにあっさりと訓練機の使用許可が下りるだなんて……」

奥で悔しそうな顔をするセシリア。・・・なんでだ？

「では一夏、始めるとしよう。刀を抜け。」  
「お、おう。」

あーあ、ペースに乗せられちまって。

「では……。参るっ！」

……っ。

「お待ちなさい！一夏さんのお相手をするのはこのわたくし、セシリア・オルコットですよ！？」

言うが早いか一夏の前に割って入ったセシリアは、箒と真っ向から対峙する。

「ええい、邪魔な！ならば斬る！」  
「訓練機」のときに後れを取るほど、優しくはななくてよー！」

あーあ、戦闘始めちゃった。

「ねえかなちゃん？」

「どうした？」

真琴がいつの間にか隣にいた。打鉄を装着、展開して。

「私も練習したいな・・・なんて・・・」

「よし完膚なきまでに叩きのめす！」

「酷いよかなちゃん！私だってIS使えるようになりたいのに！」

お前の場合は例外だ！

「私は・・・ダメかな？」

「・・・二対一でもいいぞ？叩きのめすだけだけどな？」

『はっ！』

・・・下手に特訓積んで俺より強くなったら何言われるか分かったもんじゃないからな・・・

二人を怯えさせて一夏を見たら・・・

「一夏！」

「何を黙って見ていますの!?!」

「うえっ!?!何を黙ってって……どっちかに味方したらお前から怒るだろ!?!」

「当然(だ/ですわ)！」

そのまま一夏は二対一のIS戦をさせられた。

・ ……あれは地獄だ……。俺はこの無差別IS戦に地獄を見た……

） 数分後 （

「では、今日はこのあたりで終わることにしましょう。」

「お、おう……」

「ぜえぜえと息を切らした一夏に対して、セシリアはけろりとしている。……さすが代表候補生、力の差は歴然だな……」

「ふん。鍛えていないからそうなるのだ。」

「箒も……疲れているみたいだが、一夏のように疲労困憊……なんてことはない。」

「つかお前ら鬼畜か？二人で一夏をフルボッコしたただけだから……」

「奏も……全然……疲れてなさそう……だな……」  
「そうか？」

俺の近くには目を回した真琴とオリヴィエが。

何度も何度も起き上がって立ち向かってきては俺に一撃でのされて  
いるんだからな・・・

「何をしている。速くピットに戻れ。」

「お、おう。・・・って箒？なんでこっち側に来るんだ？」

「私もピットに戻るからだ。」

「いや、セシリアの方に・・・」

「ピ、ピットなどどっちでも構わないだろう!？」

まあな。ピットはどっちでもいいだろ？

「あ、箒。」

「なんだ？」

「どっちかピットまで連れてってやってくれないか？」

「お前が目を回させたのだろう？」

ぐ、否定できない。

「けど女二人を男に運ばせるのか？これでも俺は自分の脆さに定評  
があると主張するけどな。」

「・・・」

なんだ箒、その『ウソをつくな』という目線は？

「まあいいだろう。一人だけだがな。」

「サンキュ、助かる。」

話がついてピットに戻った後、一夏がISの展開解除をした。

箒は髪を結び直しながら一夏に話しかける。

「無駄な動きが多すぎる。だから疲れるのだ。もっと自然体で制御できるよつになれ。」

「……いきなりこの台詞って……、少しはねぎらってやっても罰は当たらんぞ、箒……」

ちなみに俺はまた別のところで真琴とオリヴィエに団扇を仰いで風を当てているから二人きりの空間が一応出来上がっている。盗み聞きは出来るけどな。

「箒、ものは相談なんだが……」

「なんだ、言ってみろ。」

「今日、先にシャワー使わせてくれよ。って言うか箒、剣道部に入るんじゃなかったのか？毎日俺に付き合っていたら部活で他の女子

に出遅れるぞ？」

篤、まだ部活決めてなかったのか。ガキの頃の記憶じゃ熱心な剣道少女だったはず？

「そ、それはお前が気にする必要はない。．．．こっちの方で出遅れる方が問題だ．．．」

「え？何？」

「な、何でもない！」

篤の最後の眩きは俺には聞こえていた。．．．出遅れる？なんのとだ？

「で、シャワーなんだが．．．」

「一夏っ！」

バシユツ、とスライドドアが開いて風が来た。一夏のお陰で苗字は覚えたぞ。

「おつかれ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね？」

「サンキユ。あー、生き返る．．．」

・・・あいつは・・・

「変わってないね、一夏。若いくせに体のことばかり気にしてるとこ。」

「あのなあ、若いうちから不摂政してたらいかんのだぞ？クセになるからな。後で泣くのは自分と自分の家族だ。」

・・・

「一夏、ジジくさいぞ。」

「ジジくさいよ。」

「う、うっせーな・・・」

ついつい顔を出してしまった俺。

あ、鳳がなんか変な目で見てる。・・・まさかまたあれか？顔つきや髪が女っぽいからか？

そしてまた一夏に目を向けた。興味を持ってくれなくてOK。

「一夏さあ、やっぱりあたしがいないと寂しかった？」

「まあ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろ。」

「そっじゃなくってさあ？」



すっげにこにこしてるな、あいつ。

「鈴。」

「ん？なにになに？」

「何も買わないぞ。」

ずるっ、っていう擬音で鳳が姿勢を崩した。ちなみに俺も崩した。

「アンタねえ……、久しぶりに会った幼馴染なんだから、色々と言っことがあるでしょうが！例えばさあ……」

「あー……、ゴホンゴホン！」

筈がわざとらしい咳払いで会話を遮って、『私は別に興味はないのだが』と言っような態度で話し始めた。

「一夏、私は先に帰る。シャワーの件だが、先に使っ方がいいぞ。」

「おお、そりゃありがたい。」

「では、また後でな、一夏。奏、また明日。」

「ん。」

『また後で』をやけに強調したような気がしたぞ……？

「……一夏、色々聞きたいんだけど……」

箒がピットを出て言うてから、えらく引きつった笑顔で鳳が一夏に詰め寄った。

「昨日アンタと一緒にいたもう一人の女子、あれ誰なの!？」

「女子? 昨日俺と一緒にいた女子は箒だけだぞ？」

「嘘! もう一人いた!」

・・・ひよっとして、まさか・・・?

「おい、それってこんな髪形してなかったか？」

俺は放置していた髪の毛をいつものように縛って鳳に聞いてみた。

「そうそれ!・・・って・・・」

黙り込んだ。

「ようやく理解したらしいな。一夏、一度も聞かれなかったのか?」  
「聞かれなかったぞ? お前のことは説明したけど。」

・・・誤解が解けて良かった・・・

「それと一夏、さっきのどういいうこと？」

「ん？いや、いつもはシャワーは箒が先なんだが、今日は汗だくだから順番が変わってくれて頼んで・・・」

「じゃ、じゃ、シャワー！？』いつも』！？い、一夏、アンタの子とどういう関係なのよ！？」

「どつって・・・前に言っただろ？幼馴染だよ。」

「ああ、俺からも断言する。」

「お、お、幼馴染とシャワーの順番と何の関係があんのよ！？」

あ、これも言っってなかったらしい。

「俺、今箒と同じ部屋なんだよ。」

・・・爆弾投下しやがった。

「・・・は？」

「いや、俺らの入学ってかなり特殊なことだったから、別の部屋を用意できなかったんだと。だから、今は普通に二人部屋で・・・」

あ、わなわなと震えだした。

「そ、それってあの子と寝食を共にしてるってこと・・・!?」  
「まあ、そうなるか。でもまあ、筈で助かったよ。これが見ず知らずの相手だったら緊張して寝不足になっちまうからな。」  
「緊張じゃなくて襲撃されるから、の間違いだろ?」

そこで訂正。

「・・・」  
「ん?どうした?」  
「・・・ったら、いいわけね・・・」  
「?」

俯き加減の風がなんと叫んだのかが聞き取れず、二人して耳を傾ける。

「だから!幼馴染ならいいわけね!?!」  
「うおっ!?!」

一夏が身を引いた。あの距離だったら頭突きを食らってたな。

「分かった。分かったわ。ええ、ええ、よく分かりましたとも。」

何故か一人で納得を始めた凰は、何度も何度も頷いていた。・・・  
何が分かったってんだ？

「一夏っ！」

「お、おう・・・」

「幼馴染は二人いるってこと、覚えておきなさいよ！」

「俺も一応幼馴染なんだが？」

「アンタは関係ないの！」

ぐは、残酷な一言をよくも・・・

「別に言われなくても忘れてないが・・・」

「じゃあ、後でね！」

そう言って凰はピットを飛び出していった。

「・・・一夏。」

「なんだ？」

「女って・・・よく分からんな・・・」

「ああ・・・」

『特に幼馴染の考えることは。』

最後、息があっただのはホントに偶然だった。

ちなみに、真琴とオリヴィエは戻った時すでに姿が無かった。・・・  
部屋に戻ったか？

「あ、一夏、飯食った後お前の部屋行っていいか？」

「おう、いいぜ。・・・でも、どうしたんだ？」

「ま、それは気にしないでくれ。」

「あ、ああ・・・」

面白いもんが見れそうだしな！

「・・・というわけだから、部屋代わって？」

「ふ、ふぎけるなっ！なぜ私のようなことをしなくてはならぬ  
い！？」

今俺がいるのは一夏と篝の部屋。なんで俺がここにいるかって？  
・自分の部屋に行きたくないからだよ・・・

んで俺が一夏たちと雑談していたら嵐がいきなり入ってきて、こっ  
なった。

・・・うん。この二人相性最悪だ。

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？気を使うし、  
のんびりできないし。その辺、あたしは平気だから変わってあげよ  
うかなー、って思ってたさ？」

「べ、別にイヤとは言っていない・・・。それに、これは私と一夏  
の問題だ！部外者に首を突っ込んでほしくはない！」

「大丈夫。あたしも幼馴染だからね」

「だから！それが何の理由になるというのだ！」

さっきからこんな調子で話が進まない進まない。更に言えば噛み合

ってない。片や我が道を行く性格、片や頑固。

「一夏、一夏！」

「なんだよ奏？」

「平和的解決は諦める あいつはもう荷物を持ってきてる。」

「はあ……」

「一夏はどこか諦めがついたようで。」

「鈴……」

「うん。」

「それ、荷物全部か？」

「そうだよ。あたしはポストンバッグ一つあればどこでも行けるからね。」

「おお、たくましい子。」

ちなみに前にセシリアの部屋に（なぜか強制的だったが）招かれた時には、高級ホテルのような感じがした。同室の人がかわいそうだった。

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから。」

「ふ、ふざけるなっ！出て行け！ここは私の部屋だ！」

「『一夏の部屋』でもあるでしょ？じゃあ問題ないじゃん。」



そう言つて一夏の方に顔を向けた嵐。箒も一夏の方を見る……と  
どうか睨む。

「俺に振るなよ……」

一夏が頭を痛そうに抱えた。

「半分優しさで出来てる錠剤、買ってきてやるうか？」  
「いや……大丈夫……だと思つ……」

一夏……頑張れ！

「とにかく！部屋は代わらない！出て行くのはそちらだ！自分の部  
屋に戻れ！」

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

「約束？」

「そう。小学校の時の……」

「む、無視するなっ！」

そりゃ怒るつて。一夏も話に乗るなよ……

「こつなつたら……」

激高した箒は机に立てかけてあった竹刀を取った。

「あつ、馬鹿！！」

「馬鹿野郎！」

「はああつ！」

竹刀を取ったということは、箒のことだ、絶対に振り下ろす！

そういう考えがまとまった時、すでに俺の体は動いていた。

シパンン！！

『あ．．．』

「あ、危ねえ．．．。箒！落ち着け！無防備な人間に竹刀を振り下ろすとかどうかしてるぞ！！」

腕が痛えが、無理矢理受け止めた．．．が、少し痛みが薄いような．．．？

「部分展開．．．しかも速い．．．」

「今の、生身の人間なら本気で危ないよ。」

今の一夏の声で分かった。鳳はどこかを部分展開していたみたいだ。

・・・というか、生身で受け止めた人間がここにいるんだが・・・？

「う・・・」

怒りにまかせて自制心を失ったことへの一喝が何より聞いたのか、  
箒はバツが悪そうに顔を逸らした。

「ま、いいけどね。」

後ろの鳳も気にしないといった感じで、展開を解除したらしい。

「アンタもありがとね。」

「いや、気にすんな・・・痛っ・・・」

こりゃ、後で二人に詰問されるか？

「・・・わりい一夏、どっかで湿布買ってくるわ。さすがに痣になりそうだからな・・・」

「あ、ああ・・・」

俺は腕の痛みをこらえつつ、一夏の部屋を後にした。

「誰か、湿布持ってたらありがてえんだが・・・普通はありえないか。」

1040室に近づいたところ、後ろの方で思いきりドアを閉める音がした。

多分・・・一夏が何かしたな。

翌日、生徒玄関廊下に張り紙が貼ってあった。

表題は『クラス対抗戦日程表』<sup>リーグマッチ</sup>。

その一回戦に示されていた組み合わせは・・・

「一組 織斑一夏 対 二組 凰 鈴音」だった。

## #07 転校生・鳳鈴音の襲撃（後書き）

） 次回予告 ）

クラス対抗戦を目前に控えた日、俺たちは一夏の最終調整に行った。

ピットにいたのは鳳鈴音。そいつは一夏に話があったらしいが次第に喧嘩に発展し・・・

一夏は禁句を口にした・・・  
ハカ タワー

次回 #08 まな板は怒らすべからず

「（奏）今ここに、新しい名言が生まれた・・・。作者によって・・・」

「（オリヴィエ）新しい名言ってどういうことよ！何それ、私に喧嘩うってるの!?!?」

「（奏）だから落ち着け！」

「（オリヴィエ）ほにゃ・・・ はっ!?!?そ、そんなことしても落ちつかないふう・・・」

「（篤）それで落ち着くものなのか!?!?」

#08 まな板は怒らすべからず(前書き)

・・・また、新しい名言が生まれてしまった・・・

「(オリヴィエ)新しい名言って何よ!喧嘩うってんの!？」

・・・奏？

「(奏)面倒だからパス。後頑張れ。」

・・・何!？

3月28日、鈴の名字変換ミス修正しました



## #08 まな板は怒らすべからず

・・・五月。

「どうやら一夏と凰、ケンカしたらしいな。あの日めちゃくちゃ」構って構って」だった奴がパタリと来なくなったから・・・

そして俺が一夏と一緒にいてたまに会った、と思ったら『怒ってます』オーラ全開だった。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな。」

「あ、そうか。色々していたから全く気付かなかった。」

「色々って・・・だからか、お前が最近顔を見せてなかったのは。」

放課後、日が暮れ始めて来たのを眺めながら今日も一夏たちは特訓に向かう。俺は久しぶりに見学。

真琴は・・・なぜか付いてきた。

メンツは、一夏、篤、セシリア、オリヴィエ。最初の頃は俺もいて、真琴もいたが、俺がいなくなった途端、真琴もいなくなったらしい。

クラスの女子のテンションも落ち着いてきたようで、最近はず問攻撃、視線包囲網に遭うことも少なくなってきた。が、話題の対象なのは今も同じみたいで、アリーナの客席は満員御礼だろう。

余談だが、その席を指定席として売っていた二年生が先日千冬さんに制裁を下された。首謀者グループは三日間寮に謹慎させられていたらしい。・・・何をしたんだ、何を・・・

「第、一夏の状態はどうだ？」

「IS操縦もようやく様になってきた、というところだ。さて一夏、今度こそ・・・」

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですけど。このくらいは出来て当然、出来ない方が不自然と言う者ですわ？」

「ふん。中距離射撃型のメソッドが役に立つものか。第一、一夏のISには射撃装備が無い。」

「確かに・・・そうね。」

言葉を中断されたせいか、どこか棘のある言葉で第が言う。・・・でも実際、それはその通りだったり。一夏のIS・白式には射撃装備が一切ない。あるのは雪片型式・・・という剣だけだ。

普通、ISは機体ごとに専用装備を持っている。だが、その『初期<sup>プリ</sup>装備<sup>セット</sup>』だけでは不十分だから、『後付<sup>イコライザ</sup>装備』がある。俺のセラフィムの場合、初期装備は高圧縮粒子砲／剣と風斬。後付装備は粒子銃とただいま開発中の武器だ。

そして、ISと言うのはこの後付装備のために『拡張領域<sup>パススロット</sup>』が設けられている。装備できる量はスペックで違ってくるが、基本的には二つできるようになっているのが一般的なIS。

・・・が、一夏のISはそうではない。拡張領域ゼロ。初期装備は書き換えられないから、近接ブレード一本と言うのが今の一夏のISのスペックだ。

「それを言うなら篠ノ之さんの剣術訓練だって同じでしょう？ISを使用しない訓練なんて、時間の問題ですわ。」

「な、何を言うか！剣の道はすなわち見という言葉を知らぬのか！？見とは全ての基本において・・・」

「一夏さん、今日は昨日の無反動旋回のおさらいから始めましょう？」

「ええい、このっ・・・聞け、一夏！」

「俺は聞いてるって！」

一夏が不条理な怒りにおわれている間に一夏の手をさっさとセンサーに触れさせた

「と言うか、今日は最後なんだから、総合的なことをした方がいいんじゃないのか？」

「お前は黙ってる、奏！」

「あなたは黙っててくださいな、奏さん！」

わーお、とばっちり。

「奏、正論を言ったはずなのにね・・・」

隣でオリヴィエが何気なく励ましてくれた。

それで、ドアがバシユツと音を立てて開いて、ピットに入って行っ  
たら・・・

「待ってたわよ、一夏!」

凰がいた。腕組みをして不敵な笑みを浮かべて立っていた。

あれ? 昨日会った時は怒り心頭なご様子だったぞ?

「貴様、どうやってここに・・・!」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ!」

箒、再び言葉を中断される。諦める、今日はそついう運命なんだか  
ら・・・

そして凰は『はんつ』と挑発的な笑いと共に、自信満々に言い切っ  
た。

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題無しね。」

おい。『関係者』違いだと思っぞ、それ。

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな・・・」  
「盗っ人猛々しいとはまさにこのことですね・・・」

おーい、お前ら落ち着け。キレるな。

とりあえず、プレッシャーが酷い。この修羅場に一番関係ない俺でも感じる。心臓の弱い人はご注意ください、人間凶器が近くにいるので。

「・・・おかしなことを考えていないか、一夏、奏・・・」  
『いえ、何も？人斬り包丁に対する警報を発令していただけです。』  
「お、お前らと言っやつはっ・・・！」

一夏に掴みかかってくる筈を、鳳が間に入って邪魔した。

「今はあたしの出番。あたしが主役なの。脇役はすっこんでてよ。」  
「わっ、脇やつ・・・！？」

うん、素晴らしいほどばっさり言い切ったな。

「はいはい、話が進まないから後でね。・・・で、一夏。反省した？」

「へ？なにが？」

・・・やっぱり何かケンカしたらしいね。原因一夏で。

「だ！か！ら！あたしを怒らせて申し訳なかったな、とか、仲直りしたいな、とか、色々あるでしょうが！」

「いや、そう言われても・・・、鈴が避けてたんじゃねえか・・・」「あんたねえ・・・！じゃあ何、女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ！？」

「おう。」

馬鹿だ。ああ、馬鹿だ。

「なんか変か？」

「変かって・・・ああもうっ！」

焦れたように声を荒げて、頭を掻く鳳。・・・分かる。分かるぞその気持ち。なんでかは知らんけど。

「謝りなさいよー！」

・・・一夏にとって、これ一方的な要求だろうな・・・

「だから、なんでだよ！約束覚えてただろうが！」

「あつきた！まだそんな寝言言ってるの！？約束の意味が違うのよ意味が！」

意味・・・？豚を使った沖縄の郷土料理のことか？・・・あ、これ  
ミミガーか。

「かなちゃん、変なこと考えてない？」

「くだらないこと考えてるでしょ！？」

・・・一夏も何か考えてたらしい。なぜバレた？

「あつたまきた！どうあつても謝らないっていうわけね！？」

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうしてきてるんでしょうが！」

なんとという無限ループ。説明すれば謝る 説明したくない とにか  
く謝れ 説明しろ 説明すれば謝る＝エンドレス。

「じゃあこうしょ！来週のクラス対抗戦、<sup>リーグマッチ</sup>そこで勝った方が負けた

方になんでも一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね!？」  
「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらおうからな!」

あーあー、売り言葉に買い言葉、ってか？返却制度クーリング・オフの効かない物々  
交換……

「せ、説明は……その……」

あ、鳳赤くなつた。……指差したままだけど。

「なにだ？やめるならやめていいぞ?」

「だ、誰がやめるのよ!あんたこそ、あたしに謝る練習しておきな  
さいよ!」

「なんでだよ、馬鹿。」

「馬鹿って何よ馬鹿って!この朴念仁!間抜け!アホ!馬鹿はあんな  
たよ!」

「うるさい、貧乳。」

「おまつ……」

言ってしまった!あの馬鹿、言いやがった!禁句を!(ちなみに俺  
がそう考えていたことは秘密だ)

ドガアアンツ!……!



いきなりの爆発音、そして衝撃で部屋全体が微かに揺れた。

俺の後ろからも音がしたから数歩下がると・・・

ISを右腕から肩まで展開した風と両腕を完全展開させたオリヴィエがいた・・・

壁を殴った、そして撃ったような・・・けど、拳は壁に届いていないし砲撃もカス撃ち・・・そんな衝撃だった。

「い、言ったわね・・・！言っではならないことを・・・言ったわね！！！」

「私のささやかな悩みを・・・絶対・・・許さない！！！」

・・・ISアーマーに紫電が走ってるぞ？明らかにあれは禁句だろ？

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん！」

「今の『は』！？今の『も』よ！いつだってあんたが悪いのよ！」

どづいっ理屈？

んで、オリヴィエを見たら・・・ってうおおっ！？

「絶対に許さない・・・許すわけにはいかない・・・一回殺す・・・」

阿修羅がいた。ツインテールが空へ舞い上がっている。・・・髪の毛もなくて上に上がるものなのか？否。

「まず落ち着け！とにかく落ち着け！暴れたら收拾がつかなくなる！」

取り敢えず宥めておかないと！

「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね・・・。いいわよ、希望通りにしてあげる。・・・全力で、叩きのめしてあげる！」

凰はそのまま出ていった。

「あーもー、落ち着けっ！」

最後の手段！俺は後ろから子供をあやすように抱き締めて頭を撫でてみた。（け おん！のアニメ9話の先輩が後輩を宥めた時のような体勢を想像すると楽です by作者）

「奏！そんなことして私が落ち着く訳がはふう・・・」

「落ち着いた！？そんなことで落ち着くものなのか！？」

宥めることに成功したことに筭がめちやくちや驚いていた。

「そんなことしても私はどうにかなるわけじゃはふう・・・」

「落ち着き始めているな・・・」

「すごいよね・・・」

真琴までぼかんとしてる・・・

「はっ！？か、奏！離してよ！まずあいつを殺・・・すよりも先にこの幸せを感じ続けていたい・・・」

「猫だな、これは。」

「猫だね。」

そして、こんな意見に逢着した。俺にも猫耳が見える。黒いのが。

「ほーら、落ち着いたかー？」

「ちよっ、頭撫でないでよ！嬉し・・・くなっちやうからあ・・・」

・・・よし、落ち着いたな。OKOK、解決したな。

オリヴィエが落ち着いた時にセシリアを見たら・・・

「・・・パワータイプですわね。それも、一夏さんと同じ、近接戦闘型・・・」

真剣な眼差しで壁の破壊痕を見つめていた。

一夏、お前はしっかりと謝っておけ。土下座でもしてな。

ちなみにその後、第三アリーナから『にゃあああああつ！！！』  
っという悲鳴がES学園一体に響いた。原因は俺。悲鳴の素はオリ  
ヴィエ。・・・なんでこうなったかは各自勝手に想像してくれ。説

明するのが面倒くさい・・・

#08 まな板は怒らすべからず(後書き)

〽 次回予告 〽

ついに始まったクラス対抗戦。

一夏と凰がぶつかり合い、一夏がチャンスを掴んだ時、何者かが襲撃した。

一夏と凰は対峙して、熾天使は参戦した・・・

次回、#09 対抗戦開始！乱入者との戦い！そして・・・

熾天使は、戦いにて進化を遂げる・・・

「(奏)・・・突然だが、募集すると作者が言った。

募集内容だけど、俺の中学時代の同級生姉妹の性格のことだと。

双子姉妹は設計・開発のプロだ。

候補は2つ。

1・姉：不思議系 妹：器用貧乏(藍蘭島のまちとあやねみたいなもの)

2・姉：大人しい 妹：元気一杯、素直で甘えたがり

・・・作者から聞いた話だと、モブキャラらしく、恋愛感情とかは設定しないらしい・・・ぞ？

期間は4月4日の午前0時まで、だそうだ。

待ってるぜ？」

#09 対抗戦開始！乱入者との戦い！そして・・・（前書き）

クラス対抗戦、開戦！・・・ですが、乱入者が・・・！？

我らが唐変木・奏はどうするのか！？



#09 対抗戦開始！乱入者との戦い！そして・・・

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは偶然なのか必然なのか知らないが、一夏と凰だった。

噂の新入生同士の戦いだから、アリーナは満員御礼。それどころか通路にまで立って見る生徒まで居る始末。

会場入りできなかった生徒や関係者はリアルタイムモニターで観賞するとかどうとか。

ちなみに俺と篤とセシリアと真琴とオリヴィエは一夏がいた側のピットで見えていた。

へえ、ありや第三世代のISじゃねえか・・・。非固定浮遊部位アンロック・ユニットが特徴だ。ISのモデルを何度もみてるから分かる。

(つか、あの凰のISの棘つき装甲スパイクアーマー、当たったら痛そうだな・・・。使い方なんなのは知らね。)

「ねえかなちゃん。」

不意に真琴が俺を呼んだ。

「何だ？」

「彼女のIS、何て読むの？」

・・・そんなことか・・・

「読み方は『シエンロン』。どう間違っても『こつりゆつ』なんて読むなよ？」

「・・・私、本当に『こつりゆつ』って読むって思ってた・・・」

「えっ！？何そのかわいそうな子を見るような眼は！？やめて！！」

オリヴィエ、かわいそうな子を見るような眼、じゃない。かわいそうな子を見ているんだから。実際。

《それでは両者、規定の位置まで移動してください。》

アナウンスに促されて、二人が空中で向かい合った。大体・・・五メートル？

《一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベル下げてあげるわよ？》

《雀の涙くらいだろ？そんなのいらねえよ。全力でこい！》

凰がどうやら開放回線オープン・チャネルで一夏と会話してるらしい。そんな声が聞こえてきた。

《一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ？シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられるんだから！》

ちなみにこれは、一夏に対する脅しじゃなくて本当のことだ。噂ではIS操縦者に直接ダメージを与える”ためだけ”の装備も存在するとか。もちろん、それは競技規定違反で、人命に危険が及ぶ。けど……

『殺さない程度にいたぶることは事実上可能である』

という現実は、変わりようがない。

《それでは両者、試合を開始してください。》

ピーッ、と鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に二人が動いた。

そして、一夏が弾かれた。

《ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど……!》

青龍刀……と呼ばばいいのかわからない形の武器をバトンでも扱うように回す。どうも両端に刃のついた、いや、刃に持ち手が付いているそれは、縦横無尽に一夏に切り込んでいった。

あ、一夏が距離を取った……

《……甘いつ!》

突然風のISから光が漏れ、一夏が殴り飛ばされたようによろめいた。

《今のはジャブだからね。》

《ぐあっ!》

そして一夏は地表に打ちつけられた。

「な、なんだあれは……!?!」

箒が呟いた。

「あれは『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す、ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ。」

「第三世代型……兵器……」

「……」  
「真琴？真琴？」

オリヴィエが呟いた直後、真琴が何一つ言わなくなったためにオリヴィエが真琴を呼んだら……

「……ダメだ、真琴の奴オーバーヒート起こしやがった。」

そう、頭から煙を噴き出しやがった。まだおつむは弱いままなのか！？

「こんなことで!？」

「……奏さん、後で彼女に分かりやすく教えて差し上げていただけますか……？」

「……善処してみる。いざという時は『俺ノート』作るから……」

（そんな会話の端では、篤が苦戦する一夏が映し出されたモニターを見ていた）

「……一夏……」

（彼女は勝利よりもただただ彼の無事を願っていた……）

《よくかわすじゃない！衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに。》

話が一段落ついて、鳳がそういったのを確認して、俺は思わず頷いてしまった。

あれは砲弾が目に見えないし、その上砲身まで目に見えないんだから。

「けどあれは……一夏に何かが無いとただの一方的な試合になるぞ……」

） 数分後 （

さっきまで一方的な試合が急に止まった。

砲撃の嵐が止んで、一夏の目つきが変わった。

《鈴。》

《な、何よ？》

《本気で行くからな。》

俺の目に、一瞬嵐が曖昧な表情を浮かべたのが映った。



《な、何よ・・・、そんなこと、当たり前じゃない・・・。とっ、  
とにかくっ！格の違いってやつを見せてあげるわよ！》

一夏が凰に啖呵を切った後、一夏の動きが劇的に変わったぞ！？

あの見えない砲撃を回避して一気に背後に回って・・・お、いける  
か！？

その時だった。

ズドオオオオオオンッ！！！！

『っ!?!?』

凰に一夏の刃が届きそうになった瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。凰の衝撃砲・・・な訳でもない。あれから考えたら範囲も威力も桁違いな気がする。

しかもステージ中央からはもくもくと煙が上がっていた。どうやらさっきのは『それ』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃波らしい。

《な、なんだ？何が起こつて・・・》

一夏が困惑している。・・・くそっ！織斑先生たちに指示をもらつてこねえと！

俺はすぐその管制室まで走り始めた。・・・無論、篝やセシリア、オリヴィエに真琴も、だ。

「織斑先生！一体何があったんすか！？」

「所属不明のISがアリーナに侵入してきた。織斑と凰は二人で食い止めるつもりだそうだ。」

千冬さんが顎である方を向くように指示した。そこで見たのは……

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？凰さんも！聞いてますー！？」

ISのプライベート・チャンネルに声を出す必要はないのに、そんなことを失念するくらいに焦る山田先生の姿が映った。

・・・うん、傍から見たらただの危ない人に見える。

「本人たちがやる、と言っているのだから、やらせてみてもらおう。」

「お、お、織斑先生！？何をのんきなことを言ってるんですか!？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ。」

と言って千冬さんは近くのケースを開けてコーヒーに粉を入れる。そしてかき混ぜて口元に運ぶ。・・・それは・・・

「・・・あの、先生？それ、塩ですけど・・・」

「・・・」

あ、いやーな沈黙。

ぴたりと口元に運んでいたコーヒーを止めた。

「なぜ塩があるんだ？」

「さ、さあ・・・？でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど・・・」

「(ペロリ)・・・これ、『博』の塩『だね。』」

真琴、意地汚いぞ。

「……………」  
「あっ！やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？だからそんなミス……………」  
「……………」

あーあ、嫌な沈黙だ。本当に嫌な沈黙だ。

「あ、あのですね……………」

山田先生、無理に話を逸らそうとしたけど……………」

「山田先生、コーヒーをどうぞ。」  
「へ？あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……………」  
「どうぞ。」  
「い、いただきます……………」

……………あの言葉の少ない脅迫は誰だって怖い。

ずずいつ、と押し付けられる「コーヒー」（微塩）。山田先生は涙目でそれを受け取った。

「熱いので一気に飲むといい。」

わあ、悪魔だ。

「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「私にも使用許可をください！」

「そうしたいところだが・・・、これを見る。」

ブック型端末の画面を数回たたき、表示される情報を切り替える。その画面には第二アリーナのステータスが映っていた。

「遮断シールドがレベル4に設定・・・！？」

「しかも扉が全てロックされている・・・！？」

「あ、あのISの仕様ですの！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かうこともできないな。」

そんな話が展開されている中、俺は一人、会話に参加していない。

（俺のISの高圧縮粒子砲なら遮断シールドを貫通して侵入できるか・・・！？）

「で、でしたら！緊急事態として政府に助勢を・・・！」

「やっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。」

遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる。」

(千冬の眉がいら立ちにピクツと動いたのを危険信号と受け取ったセシリアとオリヴィエは頭を押さえながら物言いを諦めた)

「はぁぁぁぁぁ。結局、待っていることしかできないんですね・・・」

「何、どちらにしてもお前らは突入隊に入れないから安心しろ。」

「な、なんですって!?!」

「う・・・」

参加不可能、という言葉にセシリアは千冬さんに詰め寄り、オリヴィエは黙り込んだ。

「まずオルコット。お前のISの装備は一对多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる。」

「そんなことはありませんわ!このわたくしが邪魔など・・・」

「セシリア、連携訓練した?その時の君の役割は?ビットをどう使うの?味方の攻勢は?敵はどのレベルを想定したの?連続稼働時間は・・・」

「わ、分かりましたわ!もう結構ですの!」

「レギンハルト、代わりに説明は十分だ。お前の場合は・・・」

「分かっています。私のISは機動力に劣ってますから、逆に足手纏いになり得るから、ですよね?」

「そつだ。」

S i d e M a k o t o

そんな二人の会話を見ていた私はあることに気付いた。

「・・・あれ？かなちゃんと篝ちゃんは？」

私はキョロキョロと二人の姿を探したけど、二人ともいなくなっていた。

「・・・あいつは・・・」

その時間こえた織斑先生の眩きの意味は、直後になって分かった。



《織斑先生、事後報告でいいっすか!?!》

かなちゃんからの連絡!?!?

「二崎、何をするつもりだ?」

《遮断シールドを打ち抜いて貫通させ、そこから突入します!》

遮断シールドを打ち抜いて……?えっ!?!?

「……出来るのか?」

《出来るか出来ないか、じゃなくて、やるかやらないか、っす!》

「……分かった。特別に許可を出そう。」

私はかなちゃんに突撃許可が出た時、居てもたつてもいられなくなつて、ピットに向かって走っていた……

Side Kanade

《・・・分かった。特別に許可を出そう。》  
「ありがとうございます。んじゃ！」

俺は一旦通信を切って、目の前の遮断シールドに対峙した。

さて・・・と。まずは・・・

「一夏！今から侵入するから場所開けとけ！」

一夏に開放回線で告げる。横の方にも聞こえたはず。

《奏！？侵入するってどこからだよ！？》

「上にいる！そこから一気に、な！」

《ちよつとあんた！そんなことできると思ってたの！？》

おーおー、横から乱入してきやがったか・・・

「できると思ってるから居るんだよ！そうじゃなかったらはなからいねえ！後はアリーナの中だな！」

《お、おい、かな（ブツッ）》

俺は一方的に回線を切って改めてシールドを見る。

「よし・・・」

俺は両手に一丁ずつ高圧縮粒子砲を展開し、接続してシールドに向けた。

「破壊する・・・っ！」

そして、引鉄を引いた・・・

S i d e I c h i k a

「奏！？おい、奏！！」

慌てて回線を繋いで呼び掛けてみた。けど、一向に繋がらない。

「・・・仕方ない。鈴！」

「な、なによ！？」

「後ろに下がるぞ！」

「ど、どういう……」

「いいから早く！」

「わ、分かったわよ……！」

鈴が下がったその直後、あのISにめがけて粒子砲が降り注いだ。

「……成功、したのか……!？」

「分かんない……。けど、あいつは私たちを狙ってないみたいね・  
……」

上がっていた煙が消えたその先には……

「……よかった……!」

六枚三対の翼の熾天使がいた……

S i d e K a n a d e

・・・よし、侵入完了・・・！まずは合流だ・・・

「無事か!？」

「ああ！だけど、もうワールドエネルギーが無い！」

「鳳、お前は!？」

「あたしもそんなに持たないわよ！」

二人とも限界すれすれだったんだな・・・

「それと相手の情報をくれ！」

「分かった。相手は多分無人機。ブルー・ティアーズより高威力のビーム兵器持ちだ。」

「・・・それだけ分かれば上等！前言ってた『零落白夜』は使えるのか！？」

これが一番重要なことだ。俺の武器でも相当な威力があるが、シールド無効化攻撃じゃない。けど、一夏の『雪片弑型』はシールド無効化攻撃。

これを使えるか使えないかで戦い方も変わってくる。

「あと・・・使えて一度だな。」

「・・・OK。鳳・・・」

「・・・で・・・わよ・・・」

「お？」

鳳が何か言ってる。

「鈴音でいいわよって言うてんの！」

「了解。俺は奏でいいからな。・・・それで、俺が囿になるから、俺が一夏の判断で衝撃砲を撃ってくれ。」

「いいけど・・・当たらないわよ？」

「誰が当てろって言った？当てなくてもいいんだよ。一夏は・・・何をすべきか分かるよな？」

「・・・ああ。」

一夏は何をするか分かってくれたようだ。ポケがこつもあっさりと理解するとか珍しいな……

「さて……そんじゃ行き……」

と俺が突っ込もうとした瞬間だった。

『一夏っ！！』

『かなちゃんっ！！』

キーン……とハウリングが尾を引く声は、箒と真琴のものだった。

「な、何してるんだお前ら……」

中継室の方を見ると、審判とナレーターがのびていた。多分……ドアを開けた先にバシンと一撃食らったらしい。糖分目を覚まさないような倒れ方をしてる……。ご愁傷様。

『男なら……！男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする  
！！』

『そんなやつ、あの時みたいになっつけちゃってよ！！』



大声。またハウリングが起こる。ハイパーセンサーで拡大して二人を見たら、肩で息をしていた。表情は・・・焦っているような・・・？

「・・・・・・・・」

「・・・マズいっ！！」

敵ISをふと見たら、今の館内放送、その発信者に興味を持ったように、一夏らからセンサーレンズを逸らし、じっと二人の方を見ていた。

「鈴音っ！！」

「鈴、やれえっ！！」

「ど、怒鳴らなくても分かってるわよ！」

両腕を下げ、肩を押しだすような格好で衝撃砲を構える鈴。最大出力砲撃を行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がる。

一夏は、俺の思惑通りその射線上に躍り出た。

「ちよっ、ちよつとばか！何してんのよ！？退きなさいよ！」

「一夏に構うな！鈴音、気にしないで撃てえ！」

「ああっ！俺に構うな！」

「うっ……。ああもっ！どっなっても知らないわよっ  
！！」

衝撃砲が一夏の背中に当たる。

「ぐっ……オオオッ！！」

同時に俺は相手の攪乱を始める。とは言ってもそんなに相手を動かしてはならないために近くをうろろろするだけだ。

相手はしっかり引っ掛かってくれるために動いていない。

そして、一夏が零落白夜を使って突っ込んできた。

相手も片腕を振りかぶって殴りにかかる。

なら、俺は……！

「ぐっ……、一夏！俺ごとやれえっ！！」

「うおおおっ！！」

俺のISの翼にわずかに掠り、一夏の必殺の一撃は敵ISの右腕を切り落とした。

が、その反撃で一夏は左拳をモロに食らい、俺も軽く打ち上げられて同じ方向へ吹き飛ばされた。

『一夏っ！！』

『かなちゃん！』

箒と鈴音と真琴の声が聞こえた。・・・が、これもあくまで計算のうちなんだよ・・・！

「・・・狙いは？」

「それと弾幕は？」

《完璧ですわ！》

《当然よ！》

よく通る声。うるさいとも邪魔だとも思う時もあるが、今はとても心強い。

刹那、客席からブルー・ティアーズの四機同時狙撃が敵ISを打ち抜き、さらにミサイルが何発も直撃する。

侵入口は、あの時開けた。

最後のミサイルが直撃した時、ボンッ！と音を立てて爆発し、敵I

Sは崩れ落ちた。

シールドバリアーが無い状態でブルー・ティアーズのレーザー狙撃とヴェルヴェーゲン・ファルケの豊富なミサイルを食らえば、ひとたまりもないだろうと思う。

「ホント、ギリギリのタイミングだったな・・・」

《ええ。ギリギリでしたわ。》

「でも、セシリアならやってくれると思っていたさ。」

《そ、そうですね・・・。とっ、当然ですわ！何せわたくしはセシリアオルコット！イギリス代表候補生なのですから！》

「それに、数も十分だったぜ？」

《た、たまたまよたまたま！いつもだったらそこまで無いわよ！》

こんな他愛のない会話は全てプライベート・チャンネルだ。

「・・・ま、これで・・・っ！」

敵ISの再起動を確認！警告！ロックされています！

《一夏！奏！早く逃げて！まだあいつ動いてる！》

鈴音からの悲痛な感じを帯びた通信。・・・だが！

「一夏、掴まれ！一気に潰すぞ！」  
「ああ！肩借りるぞ！」

片方だけ残った左腕を最大出力状態バースト・モードに変形させたISがクレーターから俺たちを狙っていた。

次の瞬間、ビームが迫る。

『うおおおおおおおおおっ！！！！』

俺たちは、何のためらいもなく光に飛び込んでいった。

俺が意識を失う刹那、表示を見た。

『二次移行セカンドシフト、完了。同時進行にてブラックボックス解禁』と・・・

#09 対抗戦開始！乱入者との戦い！そして・・・（後書き）

（次回予告）

無人ISと戦い、捨て身の一撃で攻撃した男達は目を覚ます。

目覚めた奏に通達されたのは、引越しの話。

引越した部屋で、奏はある事実を知る。

#10 戦いの後、そして引越し。

そして、1040室には、バカの悲鳴が木霊する・・・

#10 戦いの後、そして引越。 (前書き)

第一巻、終了しました！

色々あったなあ・・・

## #10 戦いの後、そして引越す。

Side Ichika

「う……っ?」

全身の痛み呼び起されるように俺は眼を覚ました。

なんだか状況が分からず周囲を見回すと、どうやら保健室にいるらしい。そして俺が寝ていたのはベッド……だ。

(……ええと、どうなったんだ?俺の攻撃は当たって、奏がふっ飛ばされて……)

「気がついたか。」

俺が情報の整理をしていたら、シャツ、とカーテンが引かれた。

確認する前に行動。……ああ、絶対千冬姉じゃん……

「体に致命的な損傷はないが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうが、まあ、慣れる。」

「はあ……」



またぼーっとする。千冬姉の話を聞きながら、なぜ自分の体が全身打撲なのかが分からなかった。

何となく見た窓の外は、もう茜色に染まっていた。・・・もう放課後か。

「衝撃砲の最大出力を背中から受けたんだぞ？しかもお前、ISの絶対防御をカットしたな？よく死ななかったものだ・・・」

聞いていたけど、今一つ覚えが無い。・・・あれ？絶対防御ってカットできないシステム根茎じゃなかったっけ？

「まあ、なんにせよ無事で良かった。家族に死なれては寝覚めが悪いからな。」

そう告げた千冬姉の表情は、いつもよりずっと柔らかかった。世界で二人だけの家族。その俺にしか見えない顔だった。

「・・・千冬姉。」

「ん？なんだ？」

「いや、その・・・、・・・心配かけて、ごめん。」

俺の言葉にきよんとした後、千冬姉は小さく笑って

「心配などしていないさ。お前はそう簡単には死なないだろう。なにせ、私の弟だからな。」

・・・変な信頼の置かれ方だなあ……。けど、それも千冬姉の照れ隠しの一種だと分かっているし、別段気にならないけど。

「では、私は二崎のこともあるし後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ。」

そう言われて俺は片隅で燻っていたことを思い出した。

「そ、そうだ！奏は！？奏は・・・」

そう、俺と同じ数少ない男のIS操縦者でなぜか女性と勘違いされやすいどこか意地っ張りな俺の親友のことだ。

「あいつなら無事だ。無理に突っ込んだ上にお前を護るようにしていたから腕に軽い火傷をしているくらいだ。うわ言で『時の・・・、時の涙が・・・』と言っている。」

相変わらずの危険発言を・・・

奏のことをあらかた言い終えると、千冬姉はすたすたと保健室を出ていった。

「あー・・・ゴホンゴホンっ!!」

千冬姉と入れ違いに誰か入ってきたようだ。・・・というか、そのわざとらしい咳払いはまず間違いない筈だ・・・

ジャッ!!とカーテンを両手で開けた。・・・半分だけ開いていたそれは、今筈の手で全開になった。・・・全部開ける必要ないだろ？

「よう筈。」

「う、うむ・・・」

ポニーテールの幼馴染は、腕組みをしてふん、と鼻息を漏らす。・・・なんだろ、怒っている・・・わけじゃないみたいだけど、上機嫌・・・というわけでもなさそうだ。

「あつ、あのだなつ、今日の戦いだがつ!!」

「ん？そついえば・・・試合はどうなったんだ？やっぱり無効試合か？」

「あ、ああ。それは当然だ。あんなことは起きてはな・・・」

それも・・・そうだな。・・・しかし、再試合はいつになるんだろう。俺の全身打撲が治ってからだと嬉しいけど。

「お、お前は何を考えているんだ!？」

「へっ!？」

いきなり怒られた。何を憤慨しているんだろう・・・というか怒っているのか？なんか別の感情を隠すために起こっているフリをしているように見えなくもないけど・・・

「勝てたからいいようなもの・・・あのような事故、先生方に任せておけばいいだろう!？過剰な自身は身を滅ぼすという言葉を知らんのかお前は!？」

「あ、勝ったのか俺。あいつに。」

「あんなものは勝ったとは言わんっ!！」

・・・どっちだよ・・・

息を荒げる筈は、その眉を上下するほど興奮していた。・・・何をそんなにいきりだっって・・・あ。

「もしかして、心配してくれたのか？」

「し、していないっ!だ、だ、誰がお前の心配などするものか!！」

してねえのかよ……。いや、そこはしてくれよ幼馴染……

「とっ、とにかくだ！これで訓練のありがたみも分かっただろう！  
これからも続けていくぞ、いいな!？」

「あ、ああ、わかったわかった……」

「……ふん。分かれればいい。……では、私は先に部屋に戻る。」

待ってくれねえのかよ。薄情な幼馴染だな……

「……一夏。」

「ん？」

「そ、その、だな……。た、戦っているお前は……。か、かか  
つ、かつ……」

カカツとしていたぞ、とか？

「格好良か……。な、何でもないっ!!」

最後の方が聞き取れなかった。しかしまあ、本人が何でもないと  
っているし、何でもないだろ。そういうことにしておこう。

「で、ではな!」

算は逃げるような速足で保健室を出ていった。どうでもいいけどド  
アは閉めて行こうぜ？あと、出来たらカーテンも戻してほしかった  
な・・・

「ん・・・、急に眠気が・・・」

疲労のせいか、俺は眠りに落ちていった・・・

Side Kanade

「・・・たくあんっ!？」

・・・なんか変な寝言で目を覚ました。・・・なぜ「たくあん」？  
そしてすぐに今いる場所を把握する。・・・保健室ね。あの後どう  
やらぶっ飛ばされたみたいだ・・・

「眼を覚ましたか。」

体を起こした直後、声がした。千冬さんだ。

「体の具合はどうだ？」

「特にこれといって何かあるわけじゃないっす。」

「そうか。・・・お前のISだが・・・」

千冬さんがセラフィムの話を持ち出した。

「二次移行が完了したようだ。調べさせてもらったが、お前のIS

には……」

「分かってるっす。自分でも前に調べたことがあるんで……」

「そうか。なら話は早い。二崎、『本当の単一仕様能力』<sup>トウルーワン・オブ・アヒリテイ</sup>は使うな。

」

「……承知してますよ。何の能力かは分かってねーっすけど、どこかしら危険な臭いが漂ってましたから。」

俺がそう告げると、千冬さんは踵を返し

「ISは明日返す。話はそれだけだ。動けるようになったらすぐ部屋に戻れ。いいな？」

「了解。」

それだけ言って、去っていった。

さって、俺も部屋に戻りますかね？



（1040室前）

「あっ、二崎君！いいところに！」

部屋に入ろうとした時、声をかけられた。

・・・この声、山田先生？

「どうしたんですか？」

「えっと、お引越しです！」

・・・はい？

「えっと、話の脈絡が良く分からないんですけど・・・」

「あっ！すいません！えっと、お引越しするのは二崎くんです。織斑くんの方も調整がついて、今度から別室に一人で住めますよ。」

・・・あれ？

「俺と一夏を一纏めにしないんすか？」

「本当はそうしたいんですけど、織斑先生から『あの二人を一緒にすると、馬鹿どもが押し掛けるだろう』と言われたので・・・」

・・・納得。俺と一夏が一つの部屋に入ったら全校生徒の女子が部屋に一拳に押し寄せてくるのは自明の理だ・・・

「んじゃ、すぐに引越しを「引越し!？」「げふっ!？」

後ろから開かれたドアに後頭部を強打。・・・痛い・・・

「・・・つてえな・・・誰だ!！」

「ごめん奏・・・。それで、引越してって本当!？」

開けたのはオリヴィエだった。

「ま、本当だ。その方が俺としてはありがたいな・・・」  
「そっか・・・」

今までのことを考えたら大人しい。・・・嫌な予感が・・・

「まつ、またお邪魔するから、その時色々教えてね!!」  
「・・・教えるくらいなら、な。っと、荷物まとめてさっさと行かねえとな・・・」

真琴がいない間に一人で荷物をまとめ、1040室を出た。

「これが、二崎君の部屋の鍵です。」

と渡されたのは1001室。

「・・・今度は一気に食堂に近づいた気が・・・」  
「そこしか開いてなかったの・・・」

俺は山田先生と別れ、新たな自室へと歩いていった。

・・・しばらくは何もされなさそうでありがたい・・・

（1001室）

俺はこの部屋に入った後千冬さんに呼ばれ、一枚のディスクを渡された。

それを俺はPCに繋いで開いてみた。

「・・・なるほど。二次移行の名が『零の鎮魂』ゼロ・レクイエムか・・・」

二次移行の詳細を見て俺は呟いた。

「翼が2枚になってシールドとしての役割を兼ねた・・・独立稼働推進機構になったわけだ・・・。単一仕様能力は・・・2つ!?？片方は『鎮魂の殲滅翼』・・・もう片方は・・・なるほど。正確な手順を踏むかりべレートワードを言うことで開放、ね・・・」

そして俺はリべレートワードを復唱して確認した。

〈1040室〉

「えっ!?!かなちゃん引っ越しちゃったの!?!」

「そだよ。1001室に。」

「どうしよ・・・このままじゃ・・・」

「このままじゃ?」

「勉強教えてもらえないから進級できないかもしれないよ

っ!!!!!」

「そつち!?!」

#10 戦いの後、そして引越し。(後書き)

「(奏) 奏だ。」

今回は一旦本編を休んでオリキャラ&ISの説明をするらしい。

範囲は#01から#10までの、だ。」

## #Other キャラ設定などその1（前書き）

キャラ設定で「（真琴）バカーーーーーっ！」へぶっ!？

「（オリヴィエ）プライバシー！プライバシーの侵害よ！」

「（奏）・・・あいつらは放置して、二人の説明だ。後ISも。」

## #Other キャラ設定などその1

〈キャラクター編〉

NAME：中咲 真琴

性別：女

身長：152.8cm

体重：「かなちゃん以外に教えたくない！」

8年前に奏と出会い、3年前に別れた、幼馴染みの一人。

頭にぴよこんと跳ねているアホ毛が特徴の茶髪。ついでにボディラインはそこそこいいほう。出過ぎている訳でもないが出なさ過ぎている訳でもない。目の色は黒。

奏には8年前に恋い焦がれ、それ以来ずっと思い続けていた。

性格は普段は天真爛漫という言葉が似合うくらいの元気娘。だが、奏の前ではただの甘えん坊な乙女に早変わりする。（例えるならば、TOSラタトスクのエミルとマルタの出会ったばかりの頃の関係）趣味は料理（ちなみに目標は奏）。裏趣味では奏のことを考えたり思ったり妄想したりなど・・・

特技は射撃。実は立射エアライフル全国大会出場経験あり。結果は第3位。

奏の（将来の）嫁は私だ、ということを目に振りまいていたが、オリヴィエが奏に惚れたことで危機感を覚え、より積極的になる。

IS判定はB。

専用ISは無し。

一人称は『私』、奏は昔の癖で『かなちゃん』と呼ぶ。

CV：豊崎 愛生

代表作：けいおん！ 平沢 唯

いちばんうしろの大魔王 曾我けーな



Name：オリヴィエ・レギンハルト

性別：女

身長：160.2cm

体重：「乙女の秘密よ！」

アメリカ生まれのオーストリア代表候補生。物ごころつく前にオーストリアに引越した。

代表決定戦で奏と戦うが、圧倒的な力の差を見せつけられ、その上優しくされたことで惚れた。

黒が混じった銀髪のサイドツインテール。カチューシャ（IS待機状態）付き。くせ毛は全くない。目の色は蒼。

ある部分は果てしなく悲しい。・・・簡単にいえば絶壁。そこを言われると大噴火。

性格は優しく、一見おしとやかに見えるが意外と激情家で、一途。というか尽くして尽くして尽くし尽くす人間。そしてデレツン（デレ：ツン≡8：2）。

怒ると怒髪天を突く、の代名詞。が、奏に抱きつかれるor頭を撫でられると落ち着く。抱きつかれた時は最早猫。

（奏的に仕方なくだが）真琴と同室だということを知り、自分もそこに入ろうと懇願、無理やり押しとおして入室。（偶然4人部屋だったために問題なかったのが救い）。後に奏が別室に移動、また離れ離れに（笑）。

特技は金管楽器の演奏。金管楽器ならなんでもござれ。

苦手なものは怖いものやびっくりするもの。怪談とか心霊スポットとかはめっっぽう弱く、近づいたり始まつたりした瞬間に隅っこで蹲って泣きだすほど。驚かされると簡単に腰が抜ける。雷が鳴ると机の下に隠れ、近くで聞こえるとトラウマがあつたかのように怯え出してしまふ。

IS判定はA。

ISは『ヴェルヴェーゲン・ファルケ』。  
一人称は『私』で、奏は『奏』と呼ぶが、ごくまれに『奏様』になる（奏は大迷惑）。

実は奏の隣の席。#01で奏に話しかけていたが、その時はただ単に心配していただけ。興味はなかった。

CV：釘宮 理恵

代表作：ハヤテのごとく！ 三千院ナギ

機動戦士ガンダム00 ネーナ・トリニティ

〈ISS編〉

ヴェルヴェーゲン・ファルケ

使用者：オリヴィエ

全レンジ対応の万能型機体。実は第二世代型。

火力、装甲ともに高め。その分機動力を捨てた機体。待機状態はカチューシャ。

武器

69mm経口アサルト・レールガン：肩部遠距離型電磁砲。連発には不向きだが、一発一発に威力がある。電力元はシールドエネルギー・ブーストエネルギーとは別電力。

インパルス・カノン：遠・中距離専用の武器。連射性に優れ、装填段数も多め。意外と近接戦闘時にも対応可。

メルト・スレイガ：近距離用の物理剣。

ミサイルポッド（名称なし）×4：牽制用・迎撃用に使用できる。かなりの量を搭載している。

Spec

防御は先述の通り他のISより高め。基準値を600とした場合、800近くある。

その上火力も高く、卑怯臭い機体に思われがちだが、その分の機動力を捨てた為、下手な操縦では『動く的』。

単一仕様能力：アサルト・レイザー

69mm経口アサルト・レールガンを限界を超えて連射する能力。本来連発に不向きな武器を無理に使用するため武器破損率が高く、シールドエネルギーすら消費する問題点がある。その分威力は申し分ない。

おまけ：命名者は既に死亡。『速度を捨てたのになぜ鷹？』という疑問は永久に解明されることはなかった・・・

#Other キャラ設定などその1（後書き）

（次回予告）

騒動も一段落ついた頃、奏の元に手紙が届く。

手紙の主は彼の姉の『第二の天災（字違わず）』の華奈多からだっ  
た。

この手紙に奏は絶望するしかなかった。

次回、#11 転校生は奏の姉の関係者！？

111が、絶望と歓喜に揺れ動く・・・！

# 1 1 唐突の転校生は奏の姉の関係者！？（前書き）

今回はオリジナル話です。

新オリキャラ、増えます。

一部、カオスになります。

# 1 1 唐突の転校生は奏の姉の関係者!?

五月も終わりにさしかかったころ。

《1 - 1 二崎、至急職員室に來い。以上。》

突然放送で呼ばれた。

「奏、何かやらかしたのか？」

「俺がそんなことすると思うか？」

『思(うよ/うぞ/いますわ/うな)』

「ユニゾンしてそう言うかっ!？」

皆して俺のこと問題児扱いするのかよっ!!

「・・・とにかく、俺に思い当たる節はねえ。行ってくる。」

俺は一人で職員室に向かった。

（職員室）

「は？」

「だから言っただろう。あの馬鹿から手紙が来たと。」

職員室で千冬さんに言われたのはこのことだった。

千冬さんが言う『あの馬鹿』とは、何を隠そう俺の姉だ。

「手紙、ねえ・・・？」

唐突に渡された封筒を開封して、俺はその手紙を読んだ。

【おっす、久しぶりだね奏！元気してるかい？姉さんは相変わらず元気だよお？奏がないからさびしいけど・・・】

唐突だけど、IS学園に3人、拾った子を転入させるから！

奏にはそこに行けない姉さんの代わりに面倒を見てほしいんだ。

あ、一番下の子は奏の許嫁にしたからね？

それと、今度会ったらハグし合おう！姉さん、奏分が足りなくて禁断症状起こしそうだよお！！

させてくれなかったら姉さん壊れちゃうかも・・・】

「・・・織斑先生？」

「なんだ？」

「今からあの馬鹿を抹殺しに行ってもいいっすか？」

「やめておけ。私もあの馬鹿には頭を悩ませたがそいつのためにお前を犯罪者にしたくないからな・・・」

「だったら警察に通報していいっすか？近親　とかストーカーとか適当に言いがかりつけて置いて・・・」

「やめてくれ。それ関係者として色々話さなければならぬのが面倒だ。」

だったら・・・



「この憤りを一体どこにぶつけりゃいいんだああああああああ  
あああああああっ！……！」

「えーっと、今日は転校生が来ました。ど、どござ。」

どこか緊張した声で山田先生が告げた。

「どんな子かな？」

「専用機持ちなのかな？」

「可愛いかな？」

なんて色々な憶測が立っている。

微妙に事情を知っている俺としては凄い複雑な心境だ・・・

「じゃあ、入ってきてくださ・・・」

と言つて山田先生は何も言わなくなった。・・・いや、言えなくなつたのか。

ほらぁルー！入るよ！

や、やだよぉ・・・、恥ずかしいよぉ・・・

恥ずかしかつてないで入る！さつさと！

ほら、エリイもそんな急かしちゃダメだよ？ルティアもさ？ちよつと恥ずかしいの我慢して？ね？

うっ・・・

なんて漫才(？)が展開されていたからだ。

「早く入れ、セストナ姉妹。」

「すみません織斑先生……。ルティアは極端な恥ずかしがりな  
で……」

千冬さんが赤い髪の子に急かすが、どうやら一人恥ずかしがって  
入りたがらないようで……

クラスメイトも、

「すごい恥ずかしがりな子が来たね……」

「どうして恥ずかしんだろ？」

「ひょっとしてめっちゃくちゃ可愛いから、とか？」

「違うよー、何かコンプレックスがあるからじゃない？」

憶測がさらに広まった。

「……二崎。」

「そこで俺に振ります!？」

いきなり千冬さんに呼ばれた。

「お前が面倒を見るようにあの馬鹿から言われたのだから？ならこの事態の收拾を付けるのもお前の役目だと思うのだが？」

いや・・・、そこでそれを言われたら・・・

「えっ！？二崎くんが面倒を見るってどういうことなの！？」

「『あの馬鹿』って誰！？」

「家族じゃないのかな！？千冬様にああいう風に言われているからきつと兄弟よ！！」

ほら見ろ、こんな話が広がった。

「・・・たく、転入早々面倒かけんなよ・・・姉さん関係者さん？」

「あはは・・・、ごめんね？」

「・・・んで？さつきからぐずってるのは？」

「あの子。あの金髪の・・・」

赤髪の少女が指差した先には、しゃがみ込んで必死になって廊下の柱にしがみついている金髪少女がいた。そして、それを無理やりにも引き剥がそうとする水色がかった銀髪の少女も。

「……はぁ……」

俺はその乱闘(?) 現場に溜息と共に歩いていった。

「セストナ長女、お前だけ先に自己紹介をしておけ。後の二人のことも簡単に説明を頼む。」

「あ、はい。」

後ろで千冬さんが指示をしていた。

「……さつて、引き受けたけどどうすっかな……と……?」

水銀髪の少女の近くまで来た時、何故かすっごい熱視線と疑惑と困惑が入り混じった視線を感じた。

「……ルー?」

「……」

「おい、ルー?」

「……」

「……リー姉!リー姉」

っ!!」

いきなり引き剥がそうとしていた方の少女が多分さっき話していた少女のことを呼んだ。

「エリイ、どうしたの？」

リー姉、と呼ばれた少女が、聞き返した。教室からひょっこりと顔を覗かせて。

直後、教室から出てきた顔、顔、顔。正直、怖い。

「ルーが凍った！顔真っ赤で！いつものような顔の赤さじゃないの！」

エリイと呼ばれた少女がそう言った瞬間、教室から覗かせていたたくさんの顔が引っ込んだ。

瞬間、1 1が揺れた。

「転入生があんなに可愛いなんて信じられないよー！！」

「モデル顔負け！？そんなのありえない！！」

「神は私を捨てた！」

「この世界に神なんていないのよー！！」

「信じない！このふざけた幻想を壊したい！」

「ウゾダドンドコードーン！！」

「ナンダ、コノ、アマアマナクウキ？」

おい、誰だ今オンドウル語喋ったやつ。

それにメタ発言多発したぞおい。

「・・・おい、大丈夫か？」

と、さつきから顔真つ赤の少女の肩に手を置いた瞬間・・・

「っ!?!?!?」

急に元に戻ったようで、自分の肩に置かれた手と俺を何度も見て・・・

「・・・っ!?!」

エリイという少女の後ろに隠れた。

・・・なんだろ、小動物を連想させるな・・・

そんでもって、顔を見え隠れさせている・・・目があつたら完全に隠しちまっけど。

ついでに気になったのが、三人とも目が赤いな・・・特に今隠れているのが一番赤色が濃い気が・・・

「・・・多分これで大丈夫・・・なはずだ。」

「ごめんね？いきなり迷惑かけちゃって・・・」

「・・・気にするな。特に気にすることでもねえし。」

そして教室に戻った。俺はいつもの席に戻る。

教室はざわめいている。無論、転入生のことだ。

「静かにしろ、馬鹿者ども。」

千冬さんの一喝で教室は一瞬にして静まり返った。

「え、えっと、じゃ、じゃあ、自己紹介を・・・」

さっきの出来事にまだ何かあったのか引き気味ながらも山田先生が促した。

「・・・さっきの、まだ俺見てるよ・・・」

「あ、はい。リース・セストナです。まだこの国に来て日が浅いので何かと迷惑かけるかもしれないけど、宜しくお願いします。」



リース……ね……。結構礼儀正しいな……。姉さんが仕込んで……わけないな。多分素だ。

「私はエリイ！皆よろしく！」

「……また省略した……。えっと、私とエリイとルティア……今エリイの後ろに隠れてる子なんだけど、義理の姉妹なの。」

へえ……。？義理の姉妹、ね……。拾った、って聞いたけど（姉さんから）、どういう過程か後で尋問する必要があるかもしれないな……

「ルー？自己紹介しないと……」

「へう……」

リースがルティア（……だっけ？）に自己紹介を促したらその本人はエリイの後ろに隠れてしまった。

その瞬間だった。

「何あの子！？あんな萌えの固まり初めて見た！！」（女子A）

「お持ち帰りしたい！かぁいいよお！！」（女子B）

「小動物みたい！！」（女子C）

「へううーっ！？」（ルティア）

教室が騒がしくなったのは。こら、またメタ発言出たぞ？

直後。

「いい加減静かにしろ！この馬鹿者どもが！！」

さっきより声が大きくなった千冬さんの一喝が響き渡った。

休み時間になって、俺は姉さんからの要件を思い出した。

【面倒を見てくれる？】という、明らかに【答えは聞いてない！】と聞こえんばかりの一方的なお願いをだ。

「まったく、面倒を押し付けてくれるよあの人は・・・」

「あの人って、華奈多さんか？」

「ん？ああ、一夏か。ビンゴ。あの通称『第二の天災』二崎華奈多。」

「・・・字、違うと思うのだが・・・」

筭に突っ込まれた。いや、合ってる。あれで合ってないと世界が崩壊するかもしれない。

「さって、俺は俺で用件をどうにかしてこないとな・・・」

俺は席を立ち上がり、リースの席へと向かった。理由は簡単、彼女なら話をしやすいだろうと思ったただけだ。

・・・ちなみに俺を睨みつける視線が背中に刺さって痛かった。

(・・・奏がリースと話をしているその間・・・)

Side Olivier

「~~~~~」

私は唸っていた。何につて？もちろん・・・

今日転入してきたあの姉妹によ！

まだリースって子はいいの！一番下の子！あの子の奏を見る目が違  
った！恥ずかしかつてるような眼じゃなかった！

「うにゅう~~~~~」

唸っているのは私だけじゃない。真琴も。

「ちょっと、どうしちゃったワケ？アンタが犬みたいに唸ってるの初めて見るわよ？」

「仕方ないの・・・仕方ないのよ・・・、鈴・・・！」

いつのまにか1 1に鈴がいた。

鈴とはあのクラス対抗戦の後、同じ部分が寂しい者同士、ということとで仲良くなった。

「仕方がないように見えないわよ？アンタが奏にぞっこんなの、分かんないわけじゃないんだけど。」

「でも・・・でも・・・っ！このまま泣き寝入りしたくない・・・っ！」

私があるところを指差したのにつられて鈴がそこを見た。

そして・・・

「オリヴィエ、アンタの気持ち、よ

つくわかったわ・・・。確かに・・・泣き寝入りはできないわね・・・

」

「・・・真琴と話してくる・・・」

「あたしも力、貸したげるよ？」

「・・・いい。これは私の戦争なんだから・・・」

S i d e R i n - i n

『これは私の戦争』。

あたしはこの言葉に、オリヴィエの気持ちに籠っているのに気づいた。ううん、籠ってるなんて話じゃない。

それにしても・・・

「あのルティアって子、どんっただけ大きいのよ・・・！あたしたちに対する当て付けなの・・・！？あんな脂肪の塊、あつたつて・・・！あつたつてえ・・・っ！」

あたしもホントに不条理さに思わず歯ぎしりしてしまった・・・

なによ、あんな大きいモノ引っさげて！あんな脂肪の塊なんて・・・

脂肪の塊なんて・・・っ！！

S i d e M a k o t o

「・・・真琴・・・」

「・・・分かってる、戦争でしょ・・・？」

オリヴィエが私の名前を呼んだ時、何が言いたいのかはつきりと理解出来た。

オリヴィエは今、危機感を覚えている。それも、私が覚えた危機感と全く同じもの。

つまり、『かなちゃんがとられてしまっ』ということ。

それだけは絶対に阻止しないとイケない。

「オリヴィエ、今回だけは一時的に休戦だね・・・」

「そうね、今は二人で争ってる場合じゃないもんね・・・」

『これは私たちの戦争なんだから!!--』



S  
i  
d  
e  
K  
a  
n  
a  
d  
e

・  
・  
・  
なんだ？  
一瞬寒気がしたんだけど  
・  
・  
・

## # 11 唐突の転校生は奏の姉の関係者！？（後書き）

（次回予告）

ハムスターを嫉む猫。

そんなような気がしたその戦い。

そしてその戦いは意外な結末を迎える・・・

次回、#12 乙女の第一次聖戦、愛しき者を賭けた（？）戦い、  
そして奪われたFirst Kiss

「（鈴）あたし達は何も悪くない・・・悪いのはあっち・・・自業自得よ！」

「（一夏）ま、まあ、確かに俺達は悪くないよな？言われたままに  
しただけだし・・・」

「（オリヴィエ）うぎーーーーーっ！！！」

アンケート結果ですが、2になりました。1一人もいない・・・

さらに、またアンケート+ご意見です。

内容は『真琴に専用機を持たせるべきか？』と、『持たせるならどの  
ようなISか？』です。

私は持たせるなら彼女の特技（キャラ紹介参照）を活かせるような  
ものが良いな、と思っています。

期間は次の水曜日まで。

よろしくお願いします。

#12 乙女の第一次聖戦 愛しき者を賭けた(?)戦い、そして奪われたFi

「(奏)・・・なあ、この『First Kiss』って、誰のだ？」

それは本編を見てのお楽しみ。

「(奏) 鬼畜だ！鬼畜がここにいるぞ！」

後書きの次回予告にアンケート結果、載せてあります。

#12 乙女の第一次聖戦 愛しき者を賭けた(?) 戦い、そして奪われたF

その日の午後(重要会議があるらしく、午後の授業は一切休みになった)・・・

「で?いろいろ聞いていいか鈴音?俺はなんで椅子に縛られているという果てしなく情けない恰好を晒しているわけ?」

「あはは、ごめんね?オリヴィエに『力貸す』って言っちゃったからさあ?」

そう、俺は今アリーナ(許可取得済み)の席の椅子に鈴音と一夏によって縛り付けられていた。

ここに筭やセシリア、リースにエリイはいない。それぞれピットに行っているのだ。最早脅迫で。

「つか一夏てめえ!なんでお前まで協力してんだよこのヤロー!」「悪い、こっぴどい後でどんな目に遭うか・・・」

くそっ、なんだってこんなめんどくさい目に遭うんだよ・・・

↳ 数時間前（誰かの視点では無いので、そこをお間違えないよう  
by 作者）↳

「ルティア、私たちと決闘よ！」

「へうつ?!」

先陣切って決闘を申し込んだのがオリヴィエだった。

挑まれたルティアは困惑するばかり。

「けっ、け、け、決闘!? む、む、無理、無理！」

「無理もへつたくれもないの! かなちゃんのこと好きなの分かって  
るんだからね!?!」

「へうつ?!?!」

拒否するものの、事実を告げられルティアの顔が真っ赤に染まる。

「拒否してこなかったら奏に告白したらダメだからね！いい！？今日の放課後、第1アリーナで決闘だから！」

一方的にオリヴィエが言いきり、二人は去っていった。

「へっう・・・」

そしてルティアは困っていた。

ちなみにこの間、エリイが奏に対し、『エリイのお兄ちゃんみたいだから『かな兄』って呼んでいい？』と言われ、渋々承諾する奏の姿があった。

さらにさらに、一夏に脅迫する勢いで協力をする二人の姿が見られ、さすがの篤らも近寄り何か物申すことは叶わなかった。

く  
今  
く

「はあ・・・ルーも断るの下手だからねえ・・・」

「エリイ、止められないか？面倒だし、俺が困る。」

「うーん、かな兄の頼みだし、何とかしてみるけど・・・」

何とかしてみるじゃない、何とかしてくれ。

・・・あいつら、後で一発殴っとくか？





勢いよく突撃して・・・

ズテン！

「ふみゅっ！」

転んだ。頭から。

刹那、アリーナの空気は・・・

『・・・・・・・・。。』

冷めた。

「・・・・・・・・ひっく・・・・・・・・くすん・・・・・・・・」

そして、涙目に・・・

「・・・・・・・・なんたる、なんか苛めてる気がしてきた・・・」

「真琴、ここで挫けちゃダメ！私たちは戦争してるのよ！..！」

「はっ、そうだった！」



「・・・奇遇ね一夏、あたしも思えてきた・・・」

・ 俺たちの意見は完全に一致していた。最早あれはただの苛めだと・

「それと何となく思ったんだが・・・あれって遮断シールド張ってないよな？」

『・・・確かに。』

「更に俺は一応身体が固定されているだけだよな？」

「そうだな。」

「あたしらはそう頼まれただけだし。」

・・・二人の言葉である意見に逢着した。

・・・間違いない、この後俺に何か被害が来るな、絶対・・・

）アリーナ内部（誰かの（ry））

「あっっ！」

ひたすら避け続けていたルティアだったが、遂によけきれないミサイルが出てきた。

「よっし、当たったあ！」

「追撃でふっ飛ばせっ！」

そしてオリヴィエが空中でふらついているルティアに追撃をかける。  
・  
・

「……あっ……」

「てえ

いっ！」

回し蹴りの要領で繰り出された蹴りは……

「うあっ！きゃああああああっ！！」

ブラッディ・ノワールの背部に直撃、ヴェルヴェーゲン・ファルケによる力任せの蹴りで飛ばされていった。

（アリーナ外（椅子辺り、Side Kanade））

見事に追い詰められたルティアは、オリヴィエの蹴りを完璧に食らってふっ飛ばされた。

・・・俺の方に！？

「やばい、鈴、逃げるぞ！」

「分かってるわよ！」

「つておい待てお前ら！俺殺す気か！？」

『（お前／あんだ）は死なないから大丈夫！そう信じてるから！』

「死んだら永久に枕元に化けて出て最終的には呪い殺してやるから  
なこのヤローどもがあっ！なに親指立てていい笑顔してるんだよこ  
ん畜生！！」

椅子に縛られてるから動けるわけねえしバタバタしてる間に接近し  
て・・・

「うおおおおおおおっ！！！！」

「ひゃああああああっ！！！！」

S i d e I c h i k a

・・・椅子に縛ったから逃げられない奏とふっ飛ばされてきたルテ  
イアが激突した。

「……思いっきり激突したわね……」  
「……煙が……もうもくもくと……」

激突地点は何も見えなくなっていた。

） 数分後 ）

S i d e M a k o t o & a m p ; O l l i v i e r

『 あ

』 …… 『 …… 』



Side Houki & Cecilia

「なっ、何が起こったんですの!？」

「わ、分からん!遠すぎて何も・・・」

「何もわからないのが齒がゆすぎますわ・・・!」

Side Liece & Ely

「え、エリイ!?何が起こったの!？」

「・・・おっ!!ルーが大人の階段登った!」

「る、る、ルティアが!?あ、でも、華奈多さんには婚約者・・・  
許嫁認定受けてるわけだし、あ、でも、なんか私が行き遅れた気が・・・」

「リー姉・・・?ちょっと?妄想が暴走してるよ・・・?」

S i d e   I c h i k a   &   a m p ;   R i n - i n

「・・・俺たち、大丈夫だろうか・・・？」

「大丈夫、全部真琴とオリヴィエの責任にしちやええ大丈夫よきつと・・・」

何が起こったのか・・・

「 つ!?!?!? 」

「 ~~~~~ つ!?!?!? 」

簡単なこと、奏とルティアが・・・

衝突して転がり、回転が落ち着いた瞬間にキスをしていた状況になったのだ。

（誰も気づいてないが、この時奏はどうにか解放していた右腕で止めようとして失敗し、ルティアの胸を触るというラッキースケベを発動していた）

お互い、茫然としてしまっているため、身体が一切動かず、キスをしたままなのは誰も突っ込まない。

S i d e   K a n n a d e

・・・どどどどどつするべきなんだ俺は!?!?事故つっても間違いない

ルティアとキスしちゃったんだよな!?

せ、せ、責任取らないといけないのかこれは!?

そ、それに右手に何か柔らかいものが当たってるんだけど!?

Side Lutia

き、きき、きききキスしちゃった・・・!!しし、しかも私のファーストキス・・・!!ど、どどどどうしよう!!?

離れなきゃダメって分かってるのに離れたくないよぉ~~~~っ!!

へっっ

っ!?!?!?

Side Ichika

「奏!」

「二人とも大丈夫・・・」

鈴が最後まで言わずに黙ってしまった。

俺も二の句が継げない状態。

「あー、なんだ？これって俺たちの責任じゃないよな？」

「うん、大丈夫だと思う。あたしたちの責任じゃないわよきつと。

第一これは事故でしょ？それにきつかけはあつちなんだし、あたしたちは何も罪には問われないはずよ？というか、押し付けてしまえば大丈夫。うん。」

鈴と二人で俺達の潔白を証明し合う。

つか鈴。最後のほう早口すぎて聞き取りづらかったぞ？

「……っていつまでそんな甘々空間生成し続ける気よあんたらは！！甘過ぎて胸やけしそうよ！？」というか口から砂糖が吐けそうな気がするわ！！」

鈴、空気で胸やけは起こさないと思うぞ……？

と考えていた時、奏がゆっくりとルティアを起こした。

「逃げたお前らが何ぬかしてんだよ！そんな風に見えたか！？」

「見えたわよ！ただけその……き、き、き、き、キスし続ける

気！？」

「バツ、バカか！？ぼっ、茫然としてたんだよ俺は！それに動くに動けなかったんだよ！！」

おい、ルティアが顔真っ赤にして・・・あ、IS解除された・・・  
。すっごいもじもじしてるな・・・。俯いてるし・・・

《ちょっとー！なんで遮断シールド張られてないのよー！？》

突然開放回線で激怒の声が。

「なんでって、あなたたちが『張らなくていい、そっちには何も実害ないようにするから』って言ったんだからね！？」

《でももしかしたらってことも考えてよー！！》

・・・なんて理不尽な。張らなくてもいい、って言われてたし、ちやんとするだろって思ってたのに。

「あんたたちってバカなの！？だったら最初から『張らなくていい』なんて言わなけりゃいいじゃん！！」

《うぎ　　っ！ー！！》

あ、オリヴィエが・・・

《なんであっちに蹴飛ばしちゃったんだろなんでシールド張っどけ

って言わなかったんだろなんで打撃攻撃しちゃったんだろ私のバカ  
っ！！！！！》

・・・壊れた。

（結局、この模擬戦という名のルティア粛清戦は粛清決行側の誤爆  
という結果で終わった。

ルティアがラッキー、というおまけつきで・・・）

(翌日)

Side Kanade

「えっ！？セストナ末っ子ちゃんが二崎くんにキスしちゃったの！？」

「えう……」

「二崎くんってファーストキス誰かに捧げてなかったよね！？」

「へう……」

「どうだったの！？どんな感じだったの！？二崎くんの唇の味は！？」

「えうえう……」

「恥ずかしかがってないで教えてくださいな！！気になって仕方がないんですの！！」

「ふえう……」

ルティアに対する昨日の事故（あれは事故だ。俺はそうとしか認めない。誰が何と言おうと……）の追及がクラスの女子、いや、1年生全員によって行われていた。

結果、ルティアは涙目。

オリヴィエを見たら……





『わ、私、恥ずかしがり、直してみせる!』

って。

普通の人なら些細なことかもしれないけど、ルティアにとってはとても重要なことだもんね。

私も協力しないと、ね。

そして、ルティアの恋を叶えてあげないとね？華奈多さん関係なしで・・・

#12 乙女の第一次聖戦 愛しき者を賭けた(?) 戦い、そして奪われたF

〈次回予告〉

「(奏)・・・する意味なくね?」

・・・ですよー。次キャラ紹介だもんねー。

「(奏)つーわけで次回はキャラ紹介その2だ。」  
それと結果です。

真琴には・・・

専用機つきます!

具体案が出ましたので、それを参考にしつつ、より射撃特化なISにしたいと思います。

## #Other キャラ設定などその2（前書き）

「（エリイ）今回はエリイ達のプロフィール紹介みたいだね。」

「（ルティア）は、はず、はじゆかしい・・・よお・・・／／／」

「（リース）ルティア、噛んでるよ？」

## #Other キャラ設定などその2

） キャラクター編 ）

リース・セストナ

身長：158.9cm

体重：「内緒」

突如1-1に転入してきた三姉妹の長女。どこかの国に所属している訳でもない。

面倒見が良く誰に対しても優しいが、実は怒ると一番怖い人。

意外と耳年増なところがあり、一旦妄想に入ると想像力豊かな妄想少女に変わる。

ついでに料理は出来ない。というか、やったことが無い。料理は今までルティアがやっていたから。

目の色は薄紅色。

髪色はパツと見赤色だが、ところどころに銀髪が混じっている。

華奈多にはわけあった彼女達の放浪中に拾われた。

IS判定はA。

ISは華奈多が作った『ヴァルド』。

一人称は『私』で、奏は名前呼び。

CV：遠藤 綾

代表作：らき すた 高良みゆき

NEEDLES クルス・シルト（山田）

イメージキャラクター：戦場のヴァルキュリア3、リエラ・マルセリス

エリィ・セストナ

身長：143cm

体重：「（エリイ）んーとね？去年が確か・・・」「（リース）・・・言わなくてもいいと思うよ？」「（エリイ）そう？」

突如1-1に転入してきた三姉妹の次女。

活発で人懐っこく、『元気の塊』とまで言われるほどの元気娘。そしてせっかち。ただ、身内や大切な人を侮辱された時に、真っ先に怒る（それをよく逆手に取られる）

本人は全く気にしてないが、ある部分は『壁』。

意外とゲーマー（華奈多の影響大）。だが、格闘ゲームはたった一人しか使えない上戦法も単一。

目の色は赤色。

髪は水色がかつた銀。後ろで束ねてはいるが、適当なのでぼさぼさ。IS判定はA。

ISは華奈多の試作品IS、『プロトタイプ・ヴァルド』。我儘のオンラインで使わせてもらっている。

一人称は『あたし』か『エリイ』。奏は『かな兄<sup>にい</sup>』と呼んで慕っている。リースは『リー姉<sup>ねえ</sup>』と呼ぶ。

CV：戸松 遥

代表作：機動戦士ガンダムOO Second Season ミレyna・ヴァステイ

剣と魔法と学園モノ。3 ロクロ（PS3のみ）

イメージキャラクター：戦場のヴァルキュリア2、エイリアス（ただし、『エリちゃん』の方がイメージ的に強い）

ルティア・セストナ

身長：153.8cm

体重：「（エリイ）えーつと・・・」「（ルティア）だめっ！！！！」むがむが・・・」

突如1-1に転入してきた三姉妹の末っ子。

極端な恥ずかしがり。普段は勉強もでき料理や掃除などでもできる完璧な子なのだが、人前に出た瞬間、ドジっ子に早変わりする。・・・が、事故による奏とのキスで少しでも恥ずかしがり克服しようと奮闘するように。

華奈多公認の奏の許嫁（奏・ルティア両方は未承諾）。

スタイルは華奈多曰く「絶世の美女だね、ルーちゃんは」（ある部分は三姉妹の中でも一番大きく、引き締まっているところは引き締まっている。出ている部分は彼女のコンプレックスであり、少しでも小さい数値を出そうと身体測定の際は毎回限界まで縛ってもらっていた）。

奏には一目惚れでベタ惚れ・・・なのだが、性格が災いし、思いを告げられない。

髪は金髪でおろしている。結構長い。待機状態のISで前髪を一部縛っている。

目の色はルビーのような赤。

IS判定はAA。

ISは華奈多作IS、「ブラッディ・ノワール」。

一人称は「私」。奏は「奏君」と呼ぶ。リースとエリイは「姉さん」と呼ぶが、リースの場合「リー姉さん」とも呼ぶ。エリイには「ルー」と呼ばれ、華奈多には前述の通り「ルーちゃん」と呼ばれる。

CV：水樹 奈々

代表作：NARUTO 日向ヒナタ

ロザリオとバンパイア 赤夜萌香（表裏）

イメージキャラクター：フェイト・T・ハラオウン

ヴァルド

使用者：リース

第三世代相当の中・近距離型IS。  
性能は通常の第三世代ISを上回る。  
待機状態は白銀色のリストバンド。

武器

独立駆動可動式槍剣：槍に当たる部分が剣として代用可能であり、  
駆動可能部位は6カ所。駆動した場合貫通能力が向上。また、独立  
駆動による静電気の蓄積によって砲撃を放つことが可能。

多重追尾式ミサイル格納庫×4：一つの格納庫に団膜を張ることが  
可能な量のミサイルを搭載。全弾発射した場合避けることはまず不  
可能。

正面对応式盾：名前の通り正面にだけ対応した盾。少しだけ面積が  
拡大する仕組みとなっており、正面だけとは侮れない。

単一仕様能力：ライジング・ヴァルキリー

全身に雷を纏い、全性能を向上する。発動時間は槍剣にある第二蓄  
電機能部位に溜められた電力に左右される。

Spec

武装数は若干少なめだが、それを補える量を持つ。  
単一仕様能力が使用者に使い所を迫るといふ変わったIS。

プロトタイプ・ヴァルド



使用者：エリイ

リースの専用IS・ヴァルドの開発試験機。

性能は第二世代にちよつと劣るくらい。

試験機なので、わりと何でもできるといった変わった機体。

#### 武器

駆動試験用槍：ヴァルドの槍剣の開発モデルとなった槍。砲撃を放つことが出来るが、蓄電時間が長く、砲撃までの時間がかかるのが欠点。

拡大仕様盾：正面を護る拡大できる盾。

（その他）

拳：何故かエネルギーを纏うことができる。エリイが開発案を出し、華奈多が実装した。

使用可能技

ハンドキャノン：拳に収束したエネルギーを正面至近距離に放つ技。  
プラネットクラッシャー：敵をひたすら殴り続けた後、惑星を壊す勢いで上へと殴り飛ばす。加減しない限り、ISの装甲を凹ませることが可能。（ちなみに発音は『クラッ（ ）シャ（ ）』）

コロナスパイク：アッパーで打ち上げた後、地面に向かって思い切り拳を振り下ろす。どんな加減で殴ろうと火を纏うためにそう名付けられた。

#### Spec

試験機仕様な為リースの『ヴァルド』に比べて格段に劣る部分はあるが、エリイの発案によって超近接距離戦最強の機体となった。ちなみに拳技の名前はエリイが『ゲームで気に入った技から取った』と自ら言っている。

第二世代劣化版のためなのか、あるいは開発試験用機なためなのか、単一仕様能力はない。

ブラッディ・ノワール

使用者：ルティア

ルティア専用類似第四世代型IS。

当初彼女がこのISを勧められた際、『露出が多すぎて恥ずかしい』という理由で拒んでいた（多少の改良で露出は減ったものの、まだ多い方、コンプレックスである胸が隠しきれない、と本人は言っている）。

待機状態は頭にある黒い結紐。

武器

ザンバーハーケン：鎌であり剣である、という風変わりな武器。黒いエネルギー刃である。

ツインケルベロス：両腰部にある駆動調整型長距離砲。

クレセントスラッシャ：黒い湾曲エネルギー剣。三日月形。

単一仕様能力：ライオット・ソニック神速ノ雷光

装備をザンバーハーケンのみにし、防御能力を完全に捨てた完全暗殺用ともとれる能力。

発動中まず目視は不可能。だが、装甲を完全に捨ててしまうという欠陥があり、攻撃に当たると甚大なダメージを受ける。

Spec

開発コンセプトは『当たらなければどうということはない』。そのため機動力を大幅に上げるために防御装甲を限界まで削った（露出が多くなったのはそのため）。

機動力は全IS史上最高峰。セラフィムをも超越する。

名前の由来は、まだこのISが名もない時、ルティアに試用させた際に全身に血のように黒いオイルを浴びていたから、という逸話が

ある。

（I S 学園非関係者）

名前：二崎 華奈多

身長：155.5cm

体重：本人とコンタクトが取れず、不明（by作者）  
奏の姉でかなりの天才。篠ノ之束と並び称されるほど。  
分類としては工学・応用型の人間で、『発明の束、実用新案の華奈多』とよく呼ばれている。

女性としてはありえないほど自分の髪の毛に無頓着で、ところどころがはねていたり爆発していたりする。

重度のブラコンで、奏のことを溺愛している（傍から見ればそうとは見えないが、実際は病的なほど）。奏の将来の相手は自分が認めたい相手じゃないとダメだと思い、そして誰も認めようとしませんが、ルティアだけは認めた（ルティアは全くそんな話を出していない）。束からは『かなち の人付き合いの良さが羨ましいよ』と評される。

ちなみに、千冬・束とは幼馴染。

CV：？？？

## #Other キャラ設定などその2（後書き）

（次回予告）

寮へ戻ろうとした時に声をかけてきた同級生。

『アラスカの絶対零度』の異名を持つ彼女の話は、『模擬戦をしてほしい』、とのこと。

その話を奏は承諾するのだった・・・

次回、#13 模擬戦、やらない？

今此処に、第一学年最強を決める戦いが勃発する・・・

#13 模擬戦、やらない？（前書き）

「（奏）今回もオリジナルだ。バトルがメインだが短いらしいぜ？」

「（リース）後書きに業務連絡がかなりあるみたいだよ？」

「（奏）それは後書きの話だ。んじゃ・・・」

『#13、スタート！』

### # 13 模擬戦、やらない？

「ねえ、ちょっといいかしら？」

「ん？」

『っ！！』

昼休み、唐突に声をかけられた。

「新卒の告白！？」

ないだろ、真琴。

「告白なんてしないわ。確かに彼に用はあるけど、私の用は告白じゃないの。」

「とか言ってホントは告白する気でしょ！？」

いや、ないだろ。つかいい加減にしろ。

「告白じゃなくて、戦ってほしいの。二崎くん、模擬戦、やらない？」

『ほええ！？』

模擬戦、ね？今までやらねっばなしな気がしたから・・・

「・・・良いぜ、やるうぜ？ただし、手加減できないからな。」

「いいわ。こちら元から、手加減する気はないんだから。じゃ、放課後ね。」

「ああ・・・っと、そーいや名前・・・」

「ルシエラ・アイシスよ。宜しく、二崎君。」

やっぱ俺の名前は知られて当然か・・・

「・・・分かった。放課後、第1アリーナで、だな？」

「ええ。挑んだ以上、逃げたりはしないわよね？」

「逃げるかっての。逃げたら男が廃るってな。」

「ふふっ。期待して待っているわ。」

そう言っつてルシエラは去っていった。

瞬間。

「えっ!?!ええ　　っ!?!に、二崎くんが勝負するって!?!」

「あの時の戦い、あまりにもあっけなく終わっちゃったからもっとなんか戦いが見られるかも!?!」

(ちなみに『あの時の戦い』とは、奏対オリヴィエのことである。

#05参照)

「相手はあの『アラスカの絶対零度』だよ！？負けちゃうかもしくないよ！？」

「あ、『アラスカの絶対零度』！？現在一年最強って言われてる！？」

急に教室が賑わしくなった。

あ、そうなのか。今年最強なんだ。

「か、かなちゃん・・・！勝ち目あるの・・・！？」

「わからん。」

「い、いくらあの時私のファルケを瞬殺したっていつでも！相手は現在一年生最強よ！？」

「・・・情報があれば、多少は対策を練られると思う・・・。つーことでしたらしく静かにしてくれ・・・。」

俺は手元に端末を呼びだして検索をかけた。



S i d e I c h i k a

「ん？どうかしたのか？騒がしいけど・・・」

俺達が教室に入ってきた時、教室が騒々しかった。

「あ、一夏！さつき奏が勝負挑まれたの！」

「しょ、勝負！？」

いつそんなことが決まったんだ！？

「あ、相手は！？相手は誰なんだ！？」

「相手は・・・4組のルシエラ・アイセス。・・・『アラスカの絶  
対零度』よ・・・」

「・・・誰だそれ？」

「し、知らないの！？」

正直に言ったら鈴に驚かれた。・・・ホントに誰だ？

「ルシエラ・アイシスっていったら『アラスカの絶対零度』って言われてる現在一年生最強の生徒よ!？」

「し、知らなかった・・・」

「奏さん！勝てますの!？」

セシリアが奏に勝てるかを聞いてみたが・・・

「・・・」

「か、奏・・・さん・・・?」

奏はセシリアの話に見向きもしないで画面とにらみ合いを繰り返していられた。

・・・違う。物凄い速さで指が腕が動いているから何かしているんだと思う。

「・・・奏、かなり本気のようなね・・・」

「相手が相手ですもの。必死になるのも分かりますわ・・・」

「・・・というよりも・・・なのだが・・・」

何か箒が今の奏を見て引いていた。

「箒？どうした？」

「いや・・・こんな真面目に何かに取り組んでいる奏を見たことがない気がしてな・・・」

「・・・見たことなく合っていると気づぞ・・・」

目の前の奏は指や目の動きが今までとは当社比で割増しで速かった。

Side Luthia

「ルティア、どうするの？応援に行く？」

「へうえっ！？えと、その、う、うん！／＼」

か、奏君が戦うって聞いたから応援しようかどうか迷ってたんだけど・・・

う、うん！行こう！応援しに！

「ルー、応援しに行くのはいいけど戦ってるかな兄見て気絶したりとかしないですよ？」

「し、しにゃいよおっ！ぜ、絶対しない！」

あう・・・噛んじゃった・・・

で、でも！絶対気絶しない！

放課後・・・

S i d e K a n a d e

「ありがと、私のわがままに付き合ってくれて。」

「・・・いや、俺も戦ってみたくなっただけだ。雰囲気でもそうだったけどな？あと後から現在一年生最強って聞いて余計に、な？」

お互いにすでに対峙している。ルシエラのISは既にセカンドシフト状態らしい。

そして俺もセカンドシフト状態だ。翼が2枚の独立駆動式になっているのがその証明。

「そんじゃ、時間をかけるのもなんだろうから・・・」

「勝負・・・開始ね！」

その言葉を皮切りに、お互いに戦いを始めた。

S i d e I c h i k a

ついに二人の戦いが始まった。

アリーナの席は、1年最強VS全校ただ二人の男子のうちの一人、  
ということまで満員御礼だった。

ちなみに俺たちは奏側のピットで見てる。ある意味特等席だ。

「あれ？奏のIS、いつの間に姿が変わったんだろ？」

真琴の疑問はよく分かる。前見た時はまだ翼が6枚3対だった気がするのに……

「あれが『セカンドソフト二次移行』ってやつ？それにしてもすっごー！」

鈴が驚いていた。確かにこの中で二次移行したISを持っているのはいない……はず。

「……／／／」

「ルティア……見とれちゃってるよ？」

「へううっ!？」

ルティアがまた顔真っ赤にして見とれていた。……どんだけ恥ずかしがりなんだらうか？

「あ、撃った。あ、回避された。あ、ルシエラがガトリング撃った。当たるわけないよねー。」

こんな風に解説してるのがエリィ。……言われなくても分かって

るって。

それにしても・・・なんであるの二人はああも戦えるんだろうか？

「お前が弱いからだ。」

「まだまだ実力が足りませんのよ？」

「一夏がゼロだからじゃないの？」

ぐは。た、確かにそうだが酷くないか？色々・・・

「で、でもさ？一夏ってそんなに弱くないと思うけど・・・」

オリヴィエからの救いの手。・・・あなたは神なのか！？

「だってさ？セシリアも鈴も一夏に追いつめられてなかったっけ？  
あと少しでも時間があったら逆にやられてたかもしないんだよ？」  
『づづづ・・・』

・・・救われた・・・



S i d e K a n a d e

もう何回剣と槍で撃ちあったんだろうか。とつづくに数えるのを止めるくらいやり合った。

が、実を言つとお互い一撃も決まっていなかったりしていた。

「やっぱ、現時点1年最強って言われてるだけあるな・・・！汗一つ掻いてないとかどういふことだよ・・・」

「汗一つ掻いてないわけないわよ？実質あなたの攻撃避けるの必死だから。そう言つあなたもどうなの？私の攻撃、全て余裕そうに避

けるけど?」

「どこが余裕そうだよ・・・?避けるのに集中し過ぎて攻撃出来てねえなら意味ないだろ?」

こっちが皮肉を言ったら相手も皮肉を返してきた。

・・・どっちにしろ、余裕なんだよね。お互い。

「・・・もういい加減決着つけねえか?」

「もう?まさか飽きちゃったとか?」

「飽きたんじゃなくて、そろそろ決着つけねえと日課の・・・」  
「アレ」がな・・・

そう、『アレ』だ。

S i d e I c h i k a

・・・アレ？

「あー、『アレ』ね・・・。やっぱりあたし対策かなあ？」

エリィが何か知っている風なことを言った。

「エリィ、『アレ』って何？」

「え？誰も見てなかったりするの？あたしは一度戦ったよ？」

た、戦った！？何で戦ったんだ！？

「ひよつとして・・・ゲーム・・・だつたりする？」

「そだよ？『武装 姫』。かな兄めちやくちや強いんだよねー。特にお気に入って言うてるアーン アルが。」

・・・まさか奏がそのゲームにはまっていたとか知らなかった・・・

「あ、『武装 姫』？やったことあるわよ？一周して飽きちゃったけど。」

「やったことあるんですの！？オリヴィエさん・・・」

そしてもう一人経験者がいた。・・・身近に・・・

「あ、ああっ！」

そんな話で盛り上がっていた時、何か展開が起きたらしく、リースが声を上げた。

一斉につられて奏を見たら・・・

S  
i  
d  
e  
  
K  
a  
n  
a  
d  
e

粒子砲が凍りついていた。

・・・マジで？

「避け切ったと思ったら粒子砲が凍ったって・・・なあおい、アレか？ワンオブ・アビリティ単一仕様能力か？」

「そ。アイス・ブレイズの単一仕様能力はフリージング。相手を凍らせることが出来て、自分が有利になる能力。」

「つまり今は粒子砲が使えない、ってことか？」

「そう言うこと。じゃあ・・・これで本当におしまいにするっ！」

ちいっ！切り札が使えないとなると火力不足が・・・っ！

・・・待てよ、あつちが単一仕様能力を使ったんならこつちも使って文句は言われないはず・・・！

「セラフイム・・・っ、俺に力を貸せっ！」

そう叫んだ時、ウィンドウが表示された。

《『鎮魂の殲滅翼』、使用可能です》と・・・

「単一仕様能力、発動・・・！」

S i d e   I c h i k a

「なっ、なんだ！？セラフィムの形が！？」  
「うっん、変わったのはセラフィムの翼！大きくなってオーラを纏  
ってる！」

目の前で急に姿が変わった・・・いや、違うか。あれは・・・翼が  
大きくなってオーラを纏ったセラフィムは・・・

俺達からしてみれば、神々しく見えた。

ただ、気になる目線が。

『……………//』

……3人ほど完全にぼけーっとした目線が……ね……



S i d e K a n a d e

「・・・これが・・・セラフィムの単一仕様能力か・・・。副作用もすさまじいな・・・。」

能力を見て、そしてシールドエネルギーを見て素直な感想を漏らす。

・・・シールドエネルギーの減少量が激しすぎる。

「これで・・・決着を付ける！」

「くっ・・・。」

「これで・・・活路を見出したぜ！今度はこっちの番だあああああ  
ああっ！！！」

二崎くんが単一仕様能力を発動した瞬間、アイス・ブレイズにも異変が起きた。

・・・何なの！？この異常なシールドエネルギーの減少は！？

「・・・それがあなたの単一仕様能力つてわけね・・・」

「ああ・・・。対戦初お披露目、初使用、能力初見だけだな！」

所見で使いこなせるなんて・・・、信じられない・・・

「これで・・・決着だあああつ！！！」

けど・・・、私も負けるわけにはいかない！

「はあああああつ！！！」

）そして、二人は衝突した。片方は槍で、もう片方は物理剣で・・・

S i d e I c h i k a

全員が衝突の結果を固唾をのんで見守る。

もうもうと上がる煙の中で何が起きているのかは、俺たちには全く分からない。

そして、金属同士がぶつかり合う音も聞こえない。銃撃の音もしない。

下手したら自分の心臓の音が良く聞こえるくらい静かだった。

「……どっちが……勝ったんだろ……!？」

鈴がそう呟いた時、煙が……

「あれは……」  
「嘘……」

無くなり……

全員（俺もその中に入ってるが）が驚愕の顔をしていた。

煙がはれた先には、翼が二次移行状態のセラフィムが佇んでいて、

ISが解除された相手を抱えていたんだから。

そしてそのまま横を見たら、ツインテールが逆立った鬼とアンテナが直立した魔神と頬を膨らませた涙目の小動物が一匹・・・そんな感じの3人がいた。

・・・誰のことか、それとどれに当てはまってるかはそれぞれで想像してくれ。分かると思うから。特に小動物が。

S i d e K a n a d e

「か、勝った・・・」

「・・・私の負けね。というか、いつまでこうしているつもりなのかしら？」

「うおわあっ！わりい、すぐ下ろす！」

慌てて、だが安全に地上に降りてルシエラを下ろした。

そして俺もセラフィムを解除する。

「負けちゃった、か。」

「・・・実力は一緒だったんだ、性能の差で勝ったようなもんだ。打鉄で戦っていたら決着がつかなかったかも、な。」

事実、お互いに攻撃が当たらなかったのは事実だ。つまり、実力は拮抗しているわけで、同じISに乗って戦っていたら決着はつかないのも分かる。





S i d e I c h i k a

「うわー・・・」

「今のあの二人は・・・お相手したくありませんわね・・・」

今のあの二人って言うのは・・・

奏を追いかけてまわしている真琴とオリヴィエだ。

なんでかはよく分からないけど。

「えうう〜・・・」

「もー、ルティア！泣かないの！」

そして横ではルティアが泣いて、リースが宥めていた。

・・・なんたる、このカオスな雰囲気は・・・

S i d e L u c i e r a

私が最後にはつきりと言わなかったのは・・・

『私、あなたに興味を持ったの』。

傍から見れば告白見たいかもしれないけど、好きかどうかの意味はない。

ただの興味。

けど・・・

あの時実はドキドキしていたのは私だけの秘密。

### # 13 模擬戦、やらない？（後書き）

（次回予告）

6月初頭の日曜日。

IS学園も漏れることなく休みとなる。

次回、# 14 奏式素晴らしく無駄な休日の過ごし方

これは我等が主人公の休日の1ページである・・・

「（奏）・・・そんじゃ、業務連絡な？」

先ず、普通ならどうでもいいことから。

『奏に言ってもらいたいアニメ・ゲームキャラの言葉』を募集する  
そうだ。

んで、7月始動予定の新作に追加で出てくる神姫のアンケートと名前を、とのこと。

挙がっている候補は

- 1 ・ラブティマス
- 2 ・プロキシマ
- 3 ・マリーセレス

の3つだ。

そして、重要なもの。

シャルの扱いを変えるかどうか、だと。

一夏ハーレムに加えて俺が少し楽できるか俺が大変な目に遭うか、の二択だな。

詳しいことは活動報告に書いてある。

期限は、神姫は5月末まで、シャルのことは5月6日の午後8時までだ。

つーことで・・・よろしくな。」

#14 奏式素晴らしく無駄な休日の過ごし方(前書き)

今回から第二巻分突入です！

後書きで結果とかお知らせとがあります。

## # 14 奏式素晴らしく無駄な休日の過ごし方

六月初頭の日曜日。

俺は今日は忙しい。RPGのキャラクターの育成とか。

「お つす、かな兄！一戦交える？」

「つたく、ノック位しろ。エリイ。」

「え？面倒だし、手塞がってるし・・・」

「じゃあどう開けた？」

「足。」

・・・時たま思うんだが、彼女は本当に女なのだろうか？

俺クラスのゲーム好きだし、行動は女の子らしくない（さっき言った通り手が塞がっていたらなりふり構わず足で開ける、ショートカットと称して道なき道を道にする、など）し・・・

なにより、なぜか『萌え』に詳しいのが一因だったりする。・・・まさか、姉さんに調教されたか！？

「かーなーにーいー！早くバトロー？」

「わーったわーった、急かすな！」

俺はエリイに急かされてディスプレイを起動、GCを接続して出力

し、ス ブラDXを起動。

「おっし、連勝記録を更新してやるぜ？」

「なにー？だったらこっちは連勝記録止めてやるぞー？」

ちなみに現在、俺VSエリイのス ブラDXの結果は40戦38勝  
2分け。連勝は30だ。

んで、キャラ選択。エリイは毎度おなじみピ ユー。俺は今回は気  
分的にピカ ユウ。

「ステージは……」

「ピー 城で！」

「マジかよ……。そこキー来るから嫌なんだよな……」

きっちりCOMも準備して対戦開始。ストック5機での戦いだ。  
ちなみにCOMは3Pがマオ、4Pがロだ）

《Ready……Go!》

そして戦闘が始まった。



結果。

《ピッチャユピッチャユ》~~~~~!!!  
《ピーカーピカー》  
《Game Set!》

勝ったのは俺。残機は3。つまり圧勝。

順位は4P 3P エリイ 俺（右に行くほど順位上）。

「ぶー！かな兄強すぎー！」

「お前が上級者向けのキャラ使ってるから悪いんだろ！？ピユウってブンに並ぶほどの上級者向けのキャラなんだぞ！？」

「可愛いから使いたいんだもん！！もう一戦！今度はかな兄プン使って！！！」

「お いいぜ？またボッコボコにして連勝記録伸ばしたらあー！」

今度はタイムマン設定10機戦で戦った。

そして10分後。

《チュ            ツ!!!》

《プリプリ》

《Game Set!》

「なんで            !?!」

「諦める、これが実力の差だ。」

ピカ ユウの時よりもあっさり終わった。俺の勝ち。

残機はなんと8だ。

「かな兄強すぎー!チート!?チートなの!?!」

「アホか!使ってるどころ見たか!?素だ!経験と実力の違いだ!」  
「ぶー!」

ちなみにだが、俺が最初引きわけていて今は連勝している理由は、エリイの闘い方が分かってしまったから、というのが大きかったりする。言い換えればかなりのワンパターン戦法だ。

「……かな兄、この後なんか予定ある?」

「……そうだな……、ちょっとケー　行ってくるかな?」

「PCのメモリ増設?」

「それもあるけど…… HDDでも買おうかな、と思ってな?」

ISに関わってから、PCのメモリの使用領域が食われる食われる。

だから新しくHDDなどを買い込んで使用領域を確保しようというわけだ。

「ま、半日くらいはかかるかもだし、今から行ってくるわ。」

「ん。いつてらっさい。」

何故か部屋に居続けるエリイを残し、俺は学外へ出た。

ちなみに途中で鈴音に遭い（会っただって?そんな生易しいことじゃなかったぜ……）、色々と聞かれた。無論、一夏のこと。

そして、今俺は電気街にいる。隣にはリースが。

理由は『予定があつたし、一緒に行かない？』と言われ、OK出したからだ。

「なんか、ごめんね？ひよっとしたら一人で来たかったりしたのかもしれないけど・・・」

「いや？謝ることないぜ？一人つつたつてどうせやることなくって買い物済んだら飯食って帰るだけだし、誰かいた方が暇つぶしになるしな。」

「んー・・・、なんかルティアに悪いかも・・・」

「なんでルティアに悪いんだ？俺見たら恥ずかしがっちゃうんだぞ？」

「はあ・・・（こりゃ・・・ルティアの最大の敵は奏だったりする・・・のかなあ？）」

突然溜息をつかれた。・・・なぜ？

「あ、私ここに用があったんだ。じゃあ、また後で合流しない？」

「えー、あ・・・、俺、どんだけかかるか分からねえぞ？」

「いいよ？それくらい待つから。だいじょぶだいじょぶ。」

・・・なんとなく嫌な予感がして来たぜ・・・

そんな不安を残しつつ、俺はリースと別れた。



「……ここはやっぱり聖地だろうか……？それとも天国……？」

俺は目の前にあるHDDやメモリに感激していた。

だって1TBだけ！？1.5TBもある！何この幸せ空間は！！！？

「どれどれ……？1TBは10,200円で、1.5TBは13,500円……俺の予算は30,000円……。いけるな……。」

そして増設するメモリも見る。

「……良々な気な300GB対応型で14,000……これにすするか！」

俺は1.5TBのHDDと300GB対応のメモリを持ち、レジへ直行した。



・・・うん、案外時間がかからなかった。びつくりだ。こんなにあっさり決まるかね！？

集合予定場所へ来た俺は、リースがないことを確認。

「・・・暇だしPSSストアでも見るか・・・」

PSSPを起動してネットに接続。・・・しかし。

「何故だ！？何故繋がらない！？ちよっ！？落としたいデータとかあつたのに！！」

何故だああああああ・・・

Side Liece

お買い物が終わって待ち合わせの場所へ急ぐ。

そこで私が見たものは・・・

「・・・」

orzな体勢で落ち込んでいる奏だった。

「・・・え っと、奏？大丈夫？何かあった？」

「大丈夫だ、問題ない（キリッ）。」

「うん、そういうネタがすぐ出てくるってことは大変なことがあったんだね？」

この一言がすごい心配なんだけど・・・

「それじゃ、帰るっ」

「・・・そうする。」

そうして二人して帰っていったの。

あ、デートしたわけじゃないってこと、ちゃんと言っておくからねっ。

お昼ご飯、一緒に食べたけどね。

夕方。

「メモリ増設して、USBハブでHDD接続して……っと。よし！大容量確保おっ！」

「1.5TB増設完了っ！よし、これでESの情報も詳しく調べられるぞ！やった！」

「さ……って！このまま色々……コンコン……（……）……？開

「いてるぞー？」

「ノック？エリイだったらいきなり開けてくるし、真琴だったらすでに『かなちゃん？』って呼ぶ。」

「オリヴィエだったらこんな大人しくドアを叩くなんてことはしない。もっとドンドン音が鳴ってる。」

「リース辺りか？それともルシエラか？再選申し込みみたいな話で。」

「・・・ルティア？」

「あ、あの、その・・・／／／」

「ドアの先にはルティアがいた。」

「・・・あれ？ルティアってこんな子だったか？うん、想定外過ぎてびっくりだ。」

「『じゅ、じゅ、ご飯、い、一緒に、い、行こ！？／／／』」

「『飯？・・・そっぴやそろそろそんな時間だったっけな・・・。いいぜっ。』」

「ほ、ほんと・・・？」

「・・・だからその小動物のような眼はやめね。拒否したら苛めてるような気がして困る。」

「別に拒否る事もないしな。腹も減ってきたし。」  
「じゃ、じゃあ、い、行こ？」

・・・なんか引つ掛かりを感じるけどまあいいか。

「・・・ところで・・・」  
「な、なに？／＼／」



「なんで抱きついてるわけ？」

「・・・ダメ？（ちよつと身長差がある）奏の方が身長高い）  
ために上目使いに）」

・・・くはあ！

だ、ダメだ、これは破壊力がありすぎる！強すぎる！カワイイとか  
そういうレベルのものじゃねえ！

そして食堂までの道の間、すっごい羨望の目で見られていたりした。  
ただ専らルティアがだが。

・・・しかし、今までのルティアを見てたらこんなことするよう  
な感じにや見えなかったぞ・・・？

・・・誰の差し金だ・・・？

「ひっくち!!」

「あれ、エリイ、風邪ひいた？」

「うー・・・誰か噂してるかなあ・・・」

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え？何の話？」

「織斑くんと二崎くんの話！」

「えっ！？何それ！？いい話！？いい話なの！？？」

「そう！それも最上級にいい話！」

「聞かせて！何度でも聞かせて！」

「まあまあ落ち着いて。絶対に女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね？今月の学年別トーナメントで……」

いつものごとく、思春期真っ盛りな女子たちは羨ましいというかなんというか……。食堂に入って直感で思った。

俺とルティアは一角に群がっている女子を見て、ちよつと離れた位置の席を取った。

「あの一角、なんかすっげえ女子がいるけど……。何してんだ？」

「さ、さあ・・・？」

女子同士、と思ってルティアに聞いてみたが、彼女でも分からないらしい。

いつもより熱気が違う。

「ええっ！？そ、それ、マジで！？」

「マジでマジで！」

「ウソ　っ！きゃーっ！どうしょ　っ！？」

・・・ホントに一体何なんだ？

なんかよっぽど楽しいことでもあったらしいけど、騒がしいっただけありやしねえ。ここは飯を食うとこだ、一部を占領して黄色い歓声を上げる場所じゃねえぞ？

「・・・あ、あの・・・ね？」

「ん？」

そんな愚痴を心の中で言っていたら、ルティアが何か聞いてきた。

「そ、その・・・かつ、奏君は・・・す、好きな人って・・・いる？」

「好きって言うって何だ？恋愛とかそういうことか？」

「う、うん・・・／＼／」

「いないな。というか恋愛そのものをしたことすら無え。というか恋愛って何？今まで俺すごい女子に嫌われてたりしたんだけど？つーか女子の友人<sup>タチ</sup>ってあの姉妹くらいしか連想つかねえんだけど・・・」

そう、今まで俺は女子が話しかけることがなかった。声をかけようとしたらさっさと逃げちまうし。

ちなみにその友人ってのはIS学園近くの小さなIS工場のメカニック姉妹だ。ちよくちよくセラフィムの修理を頼んでいたりもするし、粒子銃の開発を頼んだりもしたし、腕が確かなのは保証できる。

「そ、そう・・・なんだ・・・」

そう言っつてルティアは自分の人差し指をツンツンし始めた。

「・・・で？なんでそう言うことを聞いたりしたわけ？」

「へうえ！？な、にやんでもにやい！にやんでもにやいよ！？気、気にしにやいで！！／＼／」

うん、気になる。そこまでカミツカミになってると気になってしょうがない。

「わ、わわ私おおお茶持ってくるね！？／／／」

と言って脱兎のごとくルティアは行ってしまった。

「・・・俺なんか悪いことしたか？」

・・・なんか、なあ・・・

S i d e L u t t i a

・・・か、奏君、好きな人いないんだ・・・//

ま、まだ私にもチャンスがあるってことだよ・・・ね・・・？

「・・・頑張らなきゃ・・・」

まずは恥ずかしがりを克服しなきゃ・・・！



Side Kanade

「あ つ!!二崎くんだ!」

「えっ!?ウソ!?どこ!?!」

「ねえねえ、あの噂ってむぐむぐ・・・」

さつきから黄色い歓声を上げて騒いでいた一団の一角が俺に気付いて一気に雪崩れ込んできた。

・・・噂?すぐ口を塞がれて何のこったかわかんねえけど・・・

「な、なんでもないの、なんでも・・・。あははは・・・」

「バカ!秘密って言ったでしょうが!!」

「で、でも本人だし・・・」

一人が俺の前で大の字になって通せんぼ、その陰で何やら小声で何か喋ってる。

「・・・噂ってなんだよ？」

「え、うん！？な、なんのことかな！？」

「ひ、人の噂も三六五日って言うよね！？」

一年か？長すぎるなオイ。

「な、何言ってるのよミヨは！四十九日だってば！」

「それは四十九日法要のことを言いたいのか？正しくは『人の噂も七十五日』。」

『そうそれ！！』

・・・まさか突っ込むことになるとは思わなかったぜ・・・

「・・・つーかさ、何か隠してねえか？」

「そつ、そんなことっ！」

「あつ、あるわけっ！」

「ないよ！？」

連携技を決めてから即撤退。この間わずかに二秒経過。・・・何がしたかったんだあいつらは・・・？

「な、何かあったの・・・？」

そうこうしていたらルティアが戻ってきた。・・・お、この匂いは  
烏龍茶か？

「なんかよく分からねえが噂が出来てるっぽい。」  
「へ、へえ・・・噂・・・？」

ルティアが小首を傾げている間、俺はもらったお茶を啜っていた。

ちなみにこの後ルシエラが来て・・・

『二崎君、隣、いいかしら?』

と聞いてきたために理由もなくOKを出した。

その時に横から何か感じてみたら・・・

『むぶ』という効果音が似合いそうな感じで頬を膨らませていたルティアがいた。

何この小動物。もし俺がそう言う系の人間だったらお持ち帰りして  
るぞ？

そしてその夜。

世界のIS情勢をネットで見る。

「……なるほど。現行最強のIS部隊はドイツの『黒ウサギ部隊』か……隊長は……へー？俺と同じ年？すっげ。」

ついでに色々しておく。

色々って？

そもそも、武 神姫エリイ戦対策のイー を育てておくことさ。

そんで消灯時間もとくに過ぎた午前一時。

ベッドにもぐりこんで俺は寝た……

1018号室。

(ちなみにここはセストナ姉妹用の部屋。第三者視点でのガールズ  
トークをお楽しみください)

「へー。かな兄好きな人いないんだー。」  
「というか女子が話しかけたら逃げるって、それ絶対恥ずかしがつてだと思っ……」

ルティアが戻って来た時、待つてましたとばかりに待機していたエリイに捕まり、あの事を包み隠さず言わされていた。

「それで？ルーはどうしたいわけ？」

「そ、それは……その……／／／」

「エリイ、まだそういうことは……」

「っ、っ、付き合いたい……です……／／／」

ここでルティアが心の内を明かした。

「りょーかい。後はエリイにお任せあれ〜」

「というよりエリイ？逆に邪魔するのもダメよ？本当はルティアが頑張った方がいいんだけど……」

「大丈夫だ、問題ない（キリッ）。」

「……それ聞いたの今日2回目だ……」



#14 奏式素晴らしく無駄な休日の過ごし方(後書き)

〈次回予告〉

IS実習の関係で騒がしくなった1-1。

そして、告げられた転校生の存在。

クラスが再び荒れはじめる・・・

次回、#15 Boy Meets Boy、Girl Att  
ack Boy(前編)

転校生は男・・・!?

はい、お知らせなどです。

アンケート結果ですが・・・

どちらも一票しかありませんでした・・・

なので、過去の感想を洗って、その類の記入を票として集計した結果・・・

シャルは奏のハーレムに加える形になりました。

そして、真琴のESの名前の・・・

意味を發表します！

意味は『白い雷光』。

あ、名前は英語ではありませんか？

# 1 5 B O Y M e e t s B O Y , G i r l A t t a c k B O Y ) 前

今回は・・・まだ前編です。

ですが、漸くこぎつけた気がしました・・・

「やっぱりハツキ社製の方がいいなあ・・・」

「え、そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインが良いの！」

「私は性能的に見てミューレイの方がいいかなあ？特にスムーズモデルの。」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん？」

月曜の朝。

クラス中の女子がわいのわいのと賑やかに談笑していた。

全員手にカタログ持参。意見を交換し合ってる・・・つーか俺にはミューレイとかハツキとかわかんねえけど・・・

ちなみに今月に入ってから急に席替えが行われ、俺の席は一夏の右隣に移った。

大方目的は監視だろうけど。

そして俺は絶賛ゲーム中。目指せフルコン！

「そう言えばかなちゃんのISスーツってどこの奴？」

「そういえば、どこかの、なんていうのは見たことないけど・・・」

何か急にふられた。

「・・・俺のは・・・どーこだったっけなあ？特注だったか・・・  
そうでなかったか・・・覚えてねえ。・・・あゝ！！」

・・・ミスった。

ISスーツってのは、文字通りIS展開時に体に着ている特殊なフ  
ィットスーツのこと。

このスーツなしでもISの起動は可能っちゃ可能だが、反応速度が  
どうしても鈍るらしい。

「ISスーツは肌表面の微弱な静電気を検知することによって、操  
縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、ISはそこで必要な動き  
を行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径  
拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は  
消えませのであしからず。」

すらすらと説明しながら現れたのは我らが1 1の副担、山田先生。

「山ちゃん詳しい！！」

「一応先生ですから・・・って、や、山ちゃん!？」

「山びー見直した!!」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん！……って、や、山ぴー!？」

「さすが山田先生!!」

「ど、どうも……って山田先生……ってそれは合ってますか……」

入学式が済んでから大体二ヶ月で、山田先生には愛称が8個ほどついた。慕われてる証拠だと俺は思う。良いことだと思っよ？人の信頼は勝ち取るのが難しいって誰かが言ってた気がする。

「あ、あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちよつと……」

「えー? いーじゃないーじゃないーん。」

「まーやんは真面目っ子だなあ。」

「ま、まーやんって……」

「あれ? マヤマヤの方が良かった? マヤマヤ。」

「そ、それもちよつと……」

「もーっ、じゃあ前のヤマヤに戻す?」

「あ、あれはやめてください!!」

……お、珍しく語尾を強くして拒絶した。

なんかトラウマでもあんのかね? ヤマヤ、っつーあだ名に。

「とっ、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください! 分かりましたか? 分かりましたね!？」

『はい。』

クラス中から返事が来るが、これって絶対あれだな。形だけの返事だ。

うん、絶対に山田先生のあだ名は増えていくな。予想がどうかそ  
ういうあれじゃない。確定だ。

「諸君、おはよう。」

『お、おはようございますっ！』

それまでざわついていた教室が一瞬でぴつと礼儀正しい軍隊整列（  
・ 比喩表現とかそういうレベルじゃない。俺も実質こういう状況  
を見たのは初めてだった。エリイは便乗して、リースは雰囲気呑  
まれて、ルティアは涙目でしていた）

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがIS  
を使用しての授業になるので忘れないようにな。忘れたものは代わ  
りに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもない者は・・・  
まあ、下着で構わんだろう。」

「ってちよい待てえ！！」

「どうした二崎。」

つつい声が打ちまっただが、この際言わせてもらう！



「いつくらなんでも下着はないって！何！？俺たち男子に辱めを与える気！？それとも公開処刑とかする気なのか！？」  
「煩い黙れ（バゴツ！！）」

ありがたい出席簿アタック。・・・何故だ？俺は世間一般論とか倫理の問題を説いたはずなのにこの仕打ちは何故だ？

「少々問題があつたが、山田先生、ホームルームを。」  
「は、はいっ！」

俺が出席簿を喰らつた頭をさすっている間に連絡事項を言い終えた千冬さんが山田先生にバトンタッチする。

・・・ちよつとメガネを拭いていたみたいで、わたわたとしている姿が何となく子犬みたいだった。

「え、ええとですね、今日はなんと！転校生を紹介します！しかも二名です！..!」  
「え.....」

よし耳栓！

『え

「.....」  
「こっちは ばつぐんだ!!」

っ!?!?!?』

い、いきなりの転校生紹介にクラス中が一気にざわつきやがった・  
・！み、耳が・・・

・・・というか、なぜこのクラスだ？普通分散させるだろうに・・・

なんて考えていたら、教室のドアが開いた。

「失礼します。」

「・・・」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがピタリと止まった。

・・・俺も二の句を告げるわけねえ。

入ってきた内の一人が・・・男だったんだから。

# 15 B o y M e e t s B o y , G i r l A t t a c k B o y ( 前

↳ 次回予告

転校生は二人。そのうち一人が一夏に手をだそうとした。

それを止めたのは・・・？

次回、# 16 B o y M e e t s B o y , G i r l A t t  
a c k B o y ( 後編 )

『一発限りの一夏ミサイル』火を噴くぜ！そして・・・  
「(シャルル) 皆、お待たせ！」

補足

奏がやっていたのはご存知某太鼓ゲームです。

実力は私と同程度です(アーケードの『やわ か戦車』裏譜面を『  
よんばい』でフルコン可能)。

シャルル党の方、本来なら水曜日に投稿するはずだった#16が今日まで遅れたことをお許しく下さい・・・

「(奏) 何があつた？」

何箇所かミスを見つけ、携帯で直すのが面倒だったのが一部、レポートの件が大半です・・・

「(シャルル) あ、謝らなくてもいいのに・・・」

「(真琴) かなちゃんが天才って言われる理由の一部が発覚する#

16・・・」

「(オリヴィエ) 見ないと風穴開けるわよ!」  
「アリア!? これISだよね!？」

「(奏) あー、なんだ? アリアとIS、エイプリルフル企画で一日だけのコラボをしていたらしい。その名残・・・なのか? これは・

・・・」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします。」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼した。

そして呆気にとられたのは俺以外のクラス全員だった。

ちなみに俺は・・・全く気にしてなかった。ふーん、という程度。

「お、男・・・!?!」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいるときいて本国より転入を・・・」

・・・ボケーっつと見ているだけだが、一応人間観察。

人懐っこそうな中性的な顔で、礼儀正しい振る舞い。髪は金髪で、それを首の後ろでご丁寧に束ねている。体はどつとどか関係なしに華奢に思えるほどスマート。

・・・なんたる、印象は誇張じゃなくて『貴公子』といった感じ。  
嫌味の無い顔が眩しい。俺と大違い。

「きゃ・・・」

なんか嫌な予感がして来たから・・・

「一夏。」

「・・・分かってる。」

『いざ、耳栓！』

「はい？」

『きゃあああああああ

っ！！

』！

ソニックウェーブ、とでも言うべきなのか？冗談じゃないぞ、マジ  
で。

「男子！！三人目の男子！！」

「しかもうちのクラス！！」

「美形！！守ってあげたくなる系の！！」

「地球に生まれて良かった~~~~~っ！！！！」

誰だ、今某大捜査線ドラマの主人公の台詞言った奴。声が似ていた。

つか元気だ。他のクラス&学年から誰も来ない理由はHR中だしな。教員の皆さん、マジでお仕事お疲れ様です・・・

「あー、騒ぐな。静かにしろ。」

面倒くさそうに千冬さんがぼやく。こつこつ十代女子の扱いが鬱陶しかったりするんだろうな・・・

「み、皆さんお静かに！！まだ自己紹介が終わってませんからっつー！！」

・・・一応まだ一人残ってるわけで。見た目からかなりの異端な奴だ。

銀髪・・・いや、下手したら白髪にも近いそれが腰まである。そして左目にただの黒眼帯。某独眼竜がしていそうな感じ・・・でもないか？

開いている目はセストナ姉妹と同じような赤。と言っても温度は多分氷点下。

印象はどっからどう見ても『軍人』。身長はシャルルより小さいが、気配がそれを補ってるように感じる。

「・・・」



当の本人は未だに口を開かず、腕組みをしたまま教室の女子たちをくだらなそうに見ていた。

あ、でもそれはもうしてない。千冬さんにだけその目が向けられていた。

「・・・挨拶をしろ、ラウラ。」

「はい、教官。」

「・・・教官!？」

いやいやいや、それはどうでもいいとして、それで素直に返事した。・・・千冬さん一筋だったりする？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ。」  
「了解しました。」

明らかな軍人だな。ありや。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」  
「・・・」

クラスメイトの沈黙。かくいう俺も何も言わない。何かさ、もっと  
言えよ。

シユヴァルツエア・ヘーゼ、通称黒ウサギ部隊の隊長ってことは知  
ってるんだけどな。

「あ、あの、い、以上ですか？」  
「以上だ。」

・・・なんか、あるバカのあの日のことを思い出した。

んで、ボーデヴィツヒが一夏と目があった時・・・

「っ！貴様が・・・！」

とか言っただけか一夏に近づいて・・・なるほどな。何かあるらしい  
な。ピンタか？ま・・・

パシィッ!!

「Lernt die Prinzessin des schw  
arzen Kaninchens auch die Mind  
e start nicht? (黒ウサギの姫様は最低限のマナーす  
ら学ばねえのか?)」  
「貴様・・・っ!」

させねえけどな。軽い挑発の意味も込めてドイツ語で言ってやるよ、  
分かりやすくな。

S i d e M a k o t o

『おおー・・・』

かなちゃんがあの転校生の手を取って何か止めた時に行ったあの言  
葉にクラス全員が思わず声を漏らした。

私も驚いてるんだけど・・・ね・・・。かなちゃんが天才だってことは知ってるんだけど、まさかドイツ語までペラペラだなんて知らなかった・・・。

・・・というか、なんて言ったの？

S i d e K a n a d e

「ちっ・・・」

舌打ちと同時に掴まれた腕を俺の手から解放。

「邪魔が入ったが・・・私は認めない。貴様があの人の弟であるなど・・・認めるものか・・・！」

一夏はポカーンとしてやがる。俺の隣の筈ですら口を開けていた。

「はあ……。織斑先生に対する心的陶醉、それに伴う神格化、か。」  
「……っ!」

あ、口に出た。

が、何か言うわけでもなく、なんかすっげえ睨みながら席に着いた。  
……気にしねえけど。

「あー……。ゴホンゴホン!ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦を行う。解散!」

千冬さんが手を叩いて行動を促す。

「わ、悪い奏……」  
「やな予感がしたから止めただけだ。俺の気まぐれでやったと思っ  
てくれ。」  
「あ、ああ……」  
「今日は第二アリーナだから第二アリーナ更衣室が開いているはず  
だぜ?」  
「そっぴやそっぴや……」

なんて移動のことを考えていたら、

「おい織斑と二崎。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう？」

おうそうだった。

「えっと、君が織斑君で君が二崎君・・・だね？初めまして。僕は・・・」

「えーと、デュノアだっけ？今は移動が先だ！急がないと女子が着替え始める！！」

「そ、そうだった！！」

取り敢えず説明して行動する。俺がデュノアの手を取ってそのまま教室を出た。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え！これから実習の度に移動だから、早めに慣れてくれ！」

「う、うん・・・」

・・・どうした？さっきと違って落ち付かなさそうだな・・・

「何かあったか？妙に落ち着きなさそうに見えるぞ・・・？」

「う、うん！？な、なんでもないよ！？」  
「そうか？それならいいけど・・・」

取り敢えず階段を下りて一階へ。速度を落とすわけにはいかないわけ・・・

「ああっ！！転校生発見！」

「しかも織斑君や二崎君と一緒に！！」

HRが終わったというのが一番の理由だ。

早速各学年各クラスが情報選手のための尖兵を派遣していた。

・・・波に呑まれたら最後、質問攻めの拳句授業に遅刻、閻魔の特別講習カリキュラムが待っている。

・・・受けるわけにはいかないっ！

「いたあっ！こっちよ！！」

「者共出会え出会えい！！」

いつからここは武家屋敷に変わったんだ！？法螺貝の音が聞こえた気もしたぞ？！？

「織斑君の黒髪や二崎君の自然に焼けたっぽい焦げ茶の髪も良いけど、金髪って言うのも良いわね・・・」

「しかも瞳はエメラルド!!」

「きゃああっ！みてみて！二崎君とデュノア君！手！手繋いでる！」

「日本に生まれて良かったっ！！ありがとお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね!!」

待て。今年のことだ。いつもは何やってたんだよ・・・

「な、何？なんでみんな騒いでるの？」

状況が読み込めないのか、デュノアが困惑顔で聞いてきた。

「そりゃ、男子が俺たちだけだしな。」

「・・・？」

なんでそんな『意味が分かりません』的な顔を？

「いや、普通に珍しいだろ？ISを操縦できる男って、今のところ俺達しかいないんだから。」

「あっ！・・・ああ、うん、そうだね。」



・・・？

「それに奏は今年最強の一角なんだからさ。」  
「え、そうなの！？」

驚かれた。・・・というかいつの間に俺は最強の一角を担うことになっただんだ？

そういうことよりも先に・・・俺たちは今この包囲網を突破することが先だ。我、彼ノ地へト至ルマデ死ネズ。彼ノ地着イテモ死ヌコトナカレ。

「一夏、そこに立て！！」  
「はあっ！？」  
「いいから立て！！」

渋々俺の指示した場所へ立つ一夏。・・・よし。

「行けえよ一夏あつ！！」  
「げふうっ！？」

一夏を女子の群れに向けて蹴り飛ばした。

これぞ段数一発制限、秘義『一夏ミサイル』！！欠点は一発限り、  
っつーことと指示した場所に立たない限り撃てないことだ！！

「お、織斑君が飛んでくる！！」

「ど、どうしよう！？どうしたらいいのかな！？」

「た、助けたらひょっとしたら・・・」

そんなことを言っている女子の中に一夏が墜落。

「うわぁ・・・」

「一夏、君の犠牲は無駄にはしない・・・デュノア、急ぐぞ！！」

「え、あ、うん！！」

もう一度デュノアの手を引いて走る。

後ろから『奏！怨むぞ　　っ！！』という声が聞こえてきたが気にしない方向で。

更衣室。

一夏を犠牲にして俺とデュノアは無事更衣室についた。

「ふ、振り切った……」

「ご、ごめんね……、いきなり迷惑かけちゃって……」

「いや……大丈夫だ……。それよか助かったぜ。男子が増えてくれたおかげで少しは気が楽になりそうだ……」

「そ、そうなんだ……」

……ほんとに助かった。

「……んじゃ、改めて自己紹介な。俺は二崎奏だ。奏、って呼んでくれ。」

「よろしく、奏。僕のことシャルルでいいよ？」

「OK。……うわっ！やべえ、時間がねえ！！急がねえと……」

時計を見たら時間ぎりぎりだった。着替えが間に合うかも分からない。

急ぐために俺はボタン二つを外して一気にずるんと脱ぎ、それをベロンチに放り投げた勢いでTシャツも脱ぎ捨てた。

「わあっ!?!」

「あ？」

いきなりなんだ？

「どうした？何か忘れものでもしたか？……つか早く着替えないと出席簿が落ちるぞ……？」

「えっ、あっ、うん！！あ、でも、その……あ、あっち向いてて……ね？」

「……まあ俺は他人の着替えをじろじろ見る趣味はねえが……つておい、シャルルがじろじろ見てるぞ？」

「み、見てない！別に見てないよ！？」

両手を突き出して必死に否定してるけど……同じ男だよな？なんでこんな反応するんだ？

「ま、ホントに急げよ？シャレにならないからな、出席簿は……つておろ？」

気が付いたらシャルルは着替え終わっていた。

「……着替えるの早いな……」

「い、いや、別に……って奏まだ着てないの？」

いやいやいや、さつきからシャルルの視線が気になって着替えられなかっただけなんだが・・・

「さつさと着替えるコツでもあんのかなー・・・」

「あ、あははははは・・・」

着替えながら言っていた為、シャルルがどついう風にいるのかわからないが・・・苦笑というかなんというか、そんな感じの言い方をしていたのは気がついた。

「・・・ふう。よし、終わった。んじゃ、行こうぜ？」

「う、うん。・・・大丈夫・・・なのかな・・・」

「一夏のことか？大丈夫だろ？」

「そ、そうかなあ・・・」

・・・いい奴だなあ・・・

そう思いながらグラウンドに向かう途中、改めてシャルルを見てみたが・・・

「そういやそのスーツ、ひょっとしてデュノア社製？」

「あ、うん。デュノア社製のオリジナル。ベースはファランクスだけど、殆どフルオーダー品。」

「へー。デュノア、って聞いたから多分フランスのあのデュノア社のIS企業の息子なんだろうな、って思った。やっぱりな。予想通

りだ。」

「そ、そうかな……。そういう奏は……。ひよっとしたら二崎博士の弟……。なんだよね？」

げ、あの馬鹿姉博士なんて言われてんのか！？

「姉さんは博士とかそういう大層なもんじゃねえよ。天災だ。」  
「て、天災……。？」

困らせたみたい。が、天災というのは事実だ。俺にとってはな。

そんなこんなで一夏を犠牲にした俺らは無事グラウンドについた。

「遅い！」

一夏は完全にアウトだった。

何の偶然かは知らないが、一夏の隣はセシリアだった。

ちなみにシャルルは一夏の後ろ、俺はセシリアの後ろだった。

「ずいぶんゆつくりでしたわね？」

「・・・奏に蹴り飛ばされなきゃな・・・」

「はい？」

セシリアが疑問符で返してきた。

「一夏が女子に追われたから、サービスで俺が蹴飛ばしてやったんだよ。」

「・・・相変わらず女性との縁が多いようですね？そうでないと二月続けてはたかれたりはたかれかけたりしないですものね？」

うわ、棘がある棘がある。

「何？アンタまたなんかやったの？」

そして後ろから声がした。なるほど鈴か。

「後ろにいるわよ、バカ！！」

一夏がようやく気付いた。

とうかバカで気付いた気がする。ま、確かに二組で鈴以外に一夏にあんなことは言わないな。主にバカとかバカとかバカとか。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれかけましたの。」

「はあ!?一夏、あんたなんでそうバカなの!？」

あーあ、そこまで騒がしいと・・・

「・・・安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる。」

ギギギ・・・とブリキの音が鳴りそうな感じで首を動かすセシリアと鈴。

視線の先にはもちろん鬼がいた。当実習の鬼教官はどなたもカムヒア。年齢国籍性別は問わない。さあ地獄の幕開けだ。

バシ　ン!!

蒼天の下で今日もまた出席簿が二回火を噴いた・・・



〈次回予告〉

IS 起動訓練が始まった。

まずは模擬戦、そして専用機持ちによるコーチング。

女子はもちろん雛鳥だった・・・

次回、#17 訓練模様 一夏の受難、俺にとってはどうでもいいが

「(奏)・・・セシリア、これ読めってさ。」

「(セシリア)これを・・・？・・・こんなもの、恥ずかしくて読めませんわ!!/!/」

「(奏)・・・諦める。外部圧力がかかってんだ。読むしかないんだよ・・・」

「(セシリア)くっ・・・み、見ないとダメですからねー!?(  
某魔法少女第三期の融合機風に)/!/」

「(奏)・・・ぷくっ!」

「(セシリア)わ、笑わないでくださいます!?!こ、これ、恥ずかしいんですよ!?!」

「(篝)それと連絡だ。ルシエラの紹介の後、オリジナルキャラのイメージミュージックをまとめて掲載するそうだ。どんな感じになるかはお楽しみに、と三月語は言っていたぞ。」

#17 訓練模様 一夏らの受難、俺にとってはどうでもいいが(前書き)

「(奏)・・・今回はかりは女子がウゼえって思えた・・・」  
姦しくなりますしね。

「(奏)姦しいで済む話か？」

#17 訓練模様 一夏の受難、俺にとってはどうでもいいが

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する。」  
『はいっ！（へーい……）』

バシーン！

「おおおおお……」

「返事は『はい』だ。」

め、めんどくさそうに返事をしたのがバレた……っ！！

とりあえず今回は一組と二組の合同実習のため、人数はいつもの倍  
否応なく出てくる返事も気合が入っているように感じる。

「くうっ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……！」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

おい、どこの亡霊だ？ 怨念がましく呟いているぞ？ 叩かれた頭を痛  
そうに押さえたセシリアと鈴が、ね。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの  
十代女子もいるしな。……凰！ オルコット！」  
「な、なぜ私まで！？」

・・・完全なとぼっちりだな。ま、諦めるセシリア。あの人には屁理屈は通用しない。こっちを折る時は理屈を使ってくるから夕チが悪い。・・・いや、メインは物理攻撃か。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る。」

「だからってどうして私が・・・」

「一夏のせいなのになんでアタシが・・・」

「お前ら少しはやる気を出せ。・・・アイツにいいところを見せられるぞ？」

・・・なんだ？千冬さんが何か言ったぞ？何を言ったんだ？

「やはりここはイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね！！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！！」

突然やる気がマックスになった。・・・何があった？あれか？洗脳か？洗脳されたのか？それとも勝ったら飯とかデザートとかをおごってもらえるとかあんのか？

「それで、相手はどちらに？私は鈴さんとの勝負でも構いませんが。」

「ふふん。それはこっちの台詞。返り討ちよ？」

『現時点1年最強の一角の奏（さん）が（相手／お相手）でも（い

いけど／構いませんわよ( )?』

何故俺の話が出てくる?俺は面倒だから拒否らせてもらいたいんだが?頼むから巻き込んでほしくないんだが?

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は・・・」

キィィン・・・

・・・なんだこの機械音?空気を裂く音によく似てるんだが・・・?なーんか嫌な予感が・・・?

「ひゃあああああ~~~~っ!ど、どいてくださあ~~~~い!」

・・・マジで?この声って山田先生だよな?どこからこの声が?

って一夏が犠牲に!?

「うわあああああ!?!?!?」

そして追突した。

「・・・おおう、なんというラツキースケベだこのヤロー・・・ここにアイツがいたらブチ切れるだろうな・・・」

あいつ・・・それは中学の時の通称『歩くエロ辞典』だとか『エロオ兄』とか言われている。

ちなみに『エロオ弟』もちゃんという。二人合わせて『エロオブラザーズ』だ。命名は女子だったな・・・

おっと、何が起こったか、つつと・・・まあ、あれだ？一夏が山田先生を押し倒して胸を掴んでしまっていた・・・つつとことだな。

そして何か危険を感じたのか硬直を抜け出した一夏の目の前をレーザー光が通過した。

「ホホホホ・・・。残念です。外してしまいましたわ・・・」

顔は笑っているがその額にははつきり血管が浮いているのが見えた。

・・・あれはセシリア・オルコット（大逆鱗バージョン）と命名しておこう。

「げっ!?!?」

そしてガキン、という連結音が聞こえた。

見たら鈴が武器（確か双天牙月だった）を連結させていた。

「いいちかあ

っ！！！」

「うおおおっ！？」

躊躇いなく首狙い！？殺す気だ！！

避けたけど確かあれはブーメランの原理があつたはず……。あ、避けられない……。一夏、君のことは忘れないだろう……。二日くらい。

「はっ！」

ドンッ！ドンッ！！

短く二発、火薬銃の音が響いた。弾丸は的確に双天牙月の両端を叩き、軌道を変えて撃ち落とされた。

射手は山田先生だった。……。すげえ。

両手でしっかりとマウントしていたのは五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》。

ついでに驚かされたのは何よりも山田先生だった。あの体勢から上体だけをわずかに起こして射撃を行ってあの命中精度だった。

・・・あの入学試験の時に俺にあっさりと面撃たれて気を失ったあの先生は一体どこに・・・？

『・・・・・・・・』

どうも驚いたのは俺だけじゃなかったみたいだ。殆ど全員が啞然としていた。

だが、真琴は違った。

「・・・あの命中精度、私にも真似できるかな・・・？ラファールの五十一口径、あれは結構反動が大きいような気がしたけど・・・」

真琴が射撃手の目をした。そうは思えないが、真琴は実は全国エアライフルの立射の第三位なのだから。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない。」

「む、昔のことですよ・・・。それに代表候補生止まりでしたし・・・」

「



パツと雰囲気がいっつも山田先生になった。

くると体を回して起き上がって、肩部武装コンテナに銃を預け、ずれたメガネを両手で直した。・・・ああ、いつもの山田先生だ。

「さて小娘共。いつまで惚けている？さっさと始めるぞ。」

「え？あの、二対一で・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける。」

負ける、と言われたのが気に触ったのか、二人ともやる気になったらしい。

特にセシリアは一度勝っているから尚更だと思う。

「では、はじめー!!」

号令とともにセシリアと鈴が飛翔した。

それを目で確認してから山田先生も空へと舞い上がった。

先制で攻撃したのは代表候補生コンビだが、山田先生はあっさりと回避した。

「さて、今の間に・・・そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試してみせる。」  
「あっ、はい。」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりとした声で説明を始めた。

(説明は原作と同じなので割愛しますby作者)

「・・・ああ、一旦そこまでいい。・・・終わるぞ。」

シャルルの説明を右から左に聞き流していた俺は（ひ、酷いよ・・・  
byシャルル）戦闘を見続けていた。

山田先生が射撃でセシリアを誘導、鈴と衝突した所でランチャーを  
発射、クリーンヒットした。

『きゃあああああああああああ！！』

二人の悲鳴が聞こえたか、と思ったら、二つのISがぎりもみ落下  
して地面を抉った。

「くっ・・・うう・・・、まさかこの私が・・・！」

「あ、アンタねえ・・・！何面白いように回避先読まれてんのよ・・・

・！」

「り、鈴さんこそ！無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！！」

「こっちの台詞よ！なんですぐビットを出すのよ！！しかもエネルギー切れるの早いし！！」

「ぐぐぐぐぐつ……！！」

「ぎぎぎぎぎつ……！！」

「……竜虎相見える……違うな。この二人を見ると例えられる竜虎が可哀想だ。」

同時に専用機持ちと代表候補生のブランド株価が暴落したような気がした。無情にもストップ安はないらしいけど。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の實力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように。」

手を叩いて千冬さんが意識を切り替える。

「専用機持ちは織斑、二崎、オルコット、レギンハルト、セストナ姉妹、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。ではグループに分かれて実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。なおセストナ末は二崎のグループに混ざり二崎の補佐をしる。いいな？では別れる。」

千冬さんが言い終わるや否や、俺、一夏、シャルルに一気に二クラス分の女子が詰め寄った。

ちなみに俺のところにはちゃっかりルティアがいた。

「織斑君、一緒に頑張ろう!」

「二崎君、私に色々教えて!」

「デュノア君の操縦技術見たいなあ!」

「ね、ね、私も良いよね?同じグループに入れて!」

・・・予想した通りだったけど、改めて・・・ウゼえ。

どうすりゃいいんだよ・・・

「この馬鹿者共が・・・。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ!順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百週させるからな!」

・・・鶴の一声?それまでわらわらと群がっていた女子軍は蜘蛛の子を散らすのごとく移動し、それぞれの専用機持ちグループは二分とかからず出来上がった。

「・・・最初からそうしろ、馬鹿者共が・・・」

千冬さんにはねないようにながら、各班の女子はぼそぼそおしやべりを始めていた。

「……やった。織斑君と同じ班だつ。名字のおかげだ……」

「……うー、セシリアか……。さっきぼろ負けしてたし……」

。はあ……」

「……鳳さん、よろしくね。後で織斑君のお話聞かせてよ……」

「……デュノア君！分からないことがあったら何でも聞いてね！

ちなみに私はフリーだよ！……」

「……え……オリヴィエー？凄いのか分かんないよ……」

「……やた、二崎君と同じ班！」

「……リース、よろしくね？」

「……え、えーと、よ、よろしく？」

「……」

ちなみに唯一おしゃべりが無いのが例のドイツ転校生のラウラ・ポ  
ーデヴィツヒの班。

あーあ、沈黙を通りこして色々酷い。十代乙女にはあの鉄壁城砦  
には大変だな。

「ええと、いいですかみなさん。これから訓練機を一班一体とり  
に来てください。数は『打鉄』が五機、『リヴァイブ』が四機です。  
好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよ！」

山田先生がいつもより三倍しっかりしている。赤い角が見えそうな気がした。さっきの模擬戦で自信を取り戻したか？

・・・メンドクせえけどやるしかねえか？

「二崎君、ISの操縦教えてー？」

「ふえーん、重おい！！私着より重いもの持ったことないよぉ〜！」

ウソつけ。鞆はどうなんだ？教科書は？

「ねえねえ専用機ってやつぱりいい感じ？いいなー、羨ましいなー。」

急に囲まれてしまった。

「むー・・・」

「うう・・・」

・・・何となくルティアの視線は分かるが、この明らかかな怒りの籠った視線は・・・

「かーなーちゃん？」

・・・いたか。お前が。

《各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切っております。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね？》

ISのオープンチャンネルで山田先生が連絡してくる。・・・なんとなくや　な予感がするが。

「そんじゃ、出席番号順に頼むわ。最初は誰だー？」

「はいはいはいっ！ー！」

・・・なんかすっげえ元気のいい返事が返ってきたな・・・

・・・しかも声が某『わふー』な声なのは気のせいだろうか・・・？

「出席番号三番！青矢美園！テニスボール部！趣味は試合観戦とスポーツ漫画を読むことー！！」

「あ、ああ・・・。・・・とうかなんで自己紹介・・・？」

「よろしく願いますっ！ー！」

突然腰を折って深く礼をして、右手を差し出してきた。



・・・なんだ？何がしたいんだ？ますます分からなくなってきた。

「ああっ！ずるい！！」

「私もっ！」

「一目見てからずっと思っていました！！」

何故か他の女子（真琴&ルティア除く）も一列に並び、同じようにしていた。

・・・おイルティア、なんで羨ましそうな目をしてる？俺にはその意味が分からないぞ？

そして真琴、お前はその殺気を引っ込める。二度とお前に勉強とか教えてやらねえぞ？

「・・・一体何を『お願いしますっ！！！！』うおっ！？」

今度は後ろから！？

見てみたらシャルルも一夏も同じような状況になっていた。

「え、えつと・・・？」

どちらも状況が分からないらしい。・・・俺もだ。仲間だな。

スパパパアン！！

『いったああっ！！？』

見事なハモリ悲鳴。千冬さん、一列に並んでいるからさぞ叩きやすかったことが。

叩かれたシャルル班女子一同は、頭を上げた瞬間、目の前の修羅に気付いた。

「やる気があつて何よりだ。それならば私が直接見てやろう。最初  
は誰だ？ん？」

「あ、いえ、その・・・」

「わ、私たちはデュノア君でいいかな・・・なんて・・・」

「せ、先生のお手を煩わせるわけには・・・」

「何、遠慮するな。将来有望なやつらには相応のレベルの訓練が必要だろっ？・・・ああ、出席番号順で始めるか。」

・・・合掌。生きていたらまた会おう。

そんなシャルル班の尊い犠牲を見て飛び火を恐れた二崎班女子は流れるような動きで列を解散、目の前には先頭の青矢がISの外部コンソールを開いてステータスを確認していた。

ちなみに俺たちの班のISはラファールだ。

「OK。さつさと始めるか。青矢はISに乗ったことはあるか？」

「あ、うん。授業でだけど何回かは。」

「なら大丈夫か。まず装着して、そのまま移動だな。時間をはみ出したら放課後居残りだろうし。」

「そ、それは嫌！よし、真面目にやる！！」

・・・今までは不真面目だったのか？

・・・なんやかんやあって、一人目の装着、起動、歩行と問題なく進んで・・・

行くはずだったのに、二人目の装着で問題が発生した。

「・・・立ったまま解除しちゃったか・・・」

「あ、あゝ・・・。」

やっちゃった。専用機持ちつてことをすっかり忘れていた・・・

訓練機で使う場合は装着解除時に絶対にしゃがまないといけないというルールがあった。

立ったままISの装着解除をすると、当然立ったままになる。

「メンドクせえ、がつー！」

何か言われたりする前に自分でラファールの起伏に手をかけて登り、自分で装着、しゃがませて解除して降りた。

『おおー・・・』

同時に俺の班から声が漏れた。

しかし、これは一人の女子（ガチで名前忘れた）の声ですぐに荒れることに・・・

「やたっ！二崎君が乗った直後に使える！！」

「えっ!?!」

『ずる~~~~い!!!!』

・・・別に羨ましがったりすることか？

「・・・いいなあ・・・」

こらルティア。聞こえてるぞ？

《・・・に決まっている!!!》

ああ、一夏の班には筈がいたか。筈が焦っているような声が聞こえた。

・・・そして色々トラブルってるか・・・

「あー、あつちの方が羨ましいかもしんねえけどこのままやったら出席簿が火を噴くぞー？」

そう言った瞬間、一斉に真面目になった。いやー、千冬さんの存在が大きい。

「むー……」

なんだろ、かなちゃんが教えるのは分かるけどお……

かなちゃんが乗った直後のISにすぐ乗れないのがやだなあ……

「中咲さん？次あなただよ？」

「えうえつ！？えつ、あつ、そ、そう！？」

「……どうしたの？そんなに慌てて……」

「もしかして二崎君とのちよつとアレなこと考えてた？」

「そんなことない！！そんなことないもん！！違うもん！！」

「そんなに必死に否定しているとこが怪しいなあ？」

「うぎい~~~~っ！！！！」

S i d e K a n a d e

・・・真琴が呻った？

「つかさつさとしろ。お前らもあまり茶化すな。俺の自由なゲーム  
タイムを奪おうとしないでくれ。」

『はい！...!』

・・・ガキか？いや、ゲームタイムがどうかという俺も人のこと言  
えないか・・・



「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

・・・結局、ほぼ全員が立たせたままの状態で終わらせてしまうと

いう問題はあったが、無事終わった。

格納庫にISを移してから再びグラウンドに集まっていた。ただ、一夏の班と比べて時間には余裕があった。

千冬さんは連絡事項を言うだけ言ったら山田先生と一緒に引き上げてしまった。

「さて、昼休みは何をするかな・・・っと・・・」

ちなみに俺と一夏はISを運んでいた。結構重かったが。

そしてシャルルは『デュノア君にそんなことさせられない!』と数人の体育会系女子が訓練機を運んでいた。

「シャルル、着替えに行こうぜ?」

「え、ええっと・・・、僕はちよつと機体の微調整をしてから行くから、先に言つて着替えてよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいからね?」

「そうか?・・・まあ、待たなくていいつつうならさっさと行くけどよ。」

シャルルを置いて行く形にはなるが、俺は先に行く。

「・・・しっかしまあ、結構動いたもんだよなあ?」

「・・・だな・・・」

一夏と二人で更衣室に向かった。

今日の昼こそ絶対に『正丸2000』クリアしてやる!!

#17 訓練模様 一夏の受難、俺にとってはどうでもいいが(後書き)

〈次回予告〉

昼休み。一夏に拉致られて奏は屋上へ。

そして屋上はカオスな雰囲気。

まともなのは・・・エリイ？

次回、#18 昼の光景、夜のティータイム

・・・ティータイムと言えるか？アレ・・・

「(奏)・・・なあ？」

なんでしょ？

「(奏)この紙に書かれている『増える』って何だよ!?!?」  
なにかが増えます。それだけです。

「(奏)その内胃に穴が開くぞ・・・」

#18 昼の光景、夜のティーブレイク（前書き）

昼の光景です。

カオスです。

そして、もう一人の××料理人が登場します・・・（；）

## # 18 昼の光景、夜のティーブレイク

「……どついうことだ？」

「ん？」

昼休み、俺たちは屋上にいた。

ちなみに俺は教室にいるつもりだったのに、一夏に強制連行された。

……一応PSPは持ってきたけど。

何となくだが、女子群は今日はシャルル目当てで食堂に行ったらしく、屋上は完全に貸し切り状態だった。シャルルはこっちにいるのに。

「天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな……！」

箸が横に視線をやる。その先にはまず俺がいて、セシリアに鈴、シャルルに真琴、オリヴィエにセストナ姉妹、更にはルシエラまでいた。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方が美味いだろ？それにシャルルは転校してきたばかりで右も左も分からないだろうし。」

「そ、それはそうだが・・・」

ぐぬぬ・・・と何かを言いたげにしながら持ち上げた拳を握りしめていた。

何があつたか知らないけど、俺はいい迷惑だ。

「んじゃ、仲良く飯でも食つてくれや。俺はあつちで・・・」

「か、かなちゃん!!これ!!」

「か、奏君、こ、これ!!」

「あら、偶然ね。私も作ってきたのだけど。」

突然真琴とルティア、そしてびっくりルシエラから弁当を渡された。

・・・昼、カロリー イト食べながらゲームしようと思つたのに・・・

「わ、私だつて作ってきたわよ!!」

そしてオリヴィエからも。

「・・・あのな、俺は一人だぞ?こんなに食えるか?」

「大丈夫!かなちゃんなら大丈夫!」

「そうよ!というか私が作ったお弁当が食べられないって言うの!

「？」

「そういつわけじゃないんだが・・・色々無理だろ!？」

俺が弁当を捌くのに困っていたら・・・

「ま、まず私のから・・・//」

『あつ?!』

「あう・・・」

先に出ようとしたルティアだったが、睨まれて撃沈。

「早く!」

と言って開けられたオリヴィエの弁当を見て・・・

俺は・・・

!?

( ; ) こんな顔をするしかできなかった。



なぜなら・・・

「・・・オリヴィエ、あなたまさか、卵焼きしか作れないとか言わないわよね？」

「そつ、そんなことないわよ！わ、私にかかればコロッケでも唐揚げでも楽勝よ！？」

そつ、弁当箱の中身は黄色になっていた。

辺り一面黄色。寧ろ怖い。何この拷問？

「・・・と、とりあえず一口だけでも・・・」

言い合いを始めた女子勢を置いてその卵焼きを一つだけ食べてみた  
が・・・

「・・・かな兄？」

「ふえふいい、ふいふふふえ（訳：エリイ、水くれ）・・・  
「水？お茶だけど・・・あるよ？」

エリイが出したお茶を引つ手繰るように取って一気に飲み干す。

「~~~~~だあっ!!！」

「あ、奏！どうだった!？」

「・・・正直に言うべき？」

「正直に言ってー!!！」

・・・しかし、あれはどう説明すればいいのだろうか・・・？

「正直に言うつぞ」

「うん」

「色々とせびこぞ、」ねは・・・

「へっ!?!？」

正直に言った。間違いない。色々と問題ありだ。

「まずなんでか知らないけど硬い。異常に硬すぎ。何があった？」

「え、えーと……」

「それに卵焼きっただけでどんだけ卵使ったんだ？」

「うぐっ……」

……言いすぎたか？

「こっ、今度は絶対に美味しいって言わせてあげるんだから……」

が、何か決意をもったらしい。うん、いいことだ。これで多少マシになればいい。聞かれたら何とかしてやれるし。

「……えっと、本当に僕が同席して良かったのかな？」

こんな状況がいたたまれなくなったのか、シャルルが聞いてきた。

「……いいんじゃない？俺は巻き込まれただけだし、一夏の好きにさせてやれば？」

「そ、そうかなあ……」

シャルルは異常な位遠慮深い。寧ろそれが困るくらいに。

実を言うと三人目の男子争奪戦が勃発した時のことだが……

女子が1 1に大挙して押し寄せた時のシャルルの言葉が……

『僕のような者のために咲き誇る花の一時を奪うことはできません。こうして甘い芳香に包まれているだけで、もう既に酔ってしまいうなものですから。』

……だった。なんたる、あれだ。貴公子が言うような言葉だった。俺には言えない。ゲーマーな俺には……

「男子同士仲良くしようぜ？色々不便もあるだろうけど、まあ協力してやっていこう。分からないことがあったら何でも聞いてくれ。」

……IS以外で。」

「アンタはもうちよっと勉強しなさいよ。」

「してるって！多すぎるんだよ覚えることが！お前らは入学前から予習してるから分かるだけだろ！？」

「ええまあ、適性検査を受けた時期にもよりますが、遅くても皆ジュニアスクールのうちに専門の学習を始めますわね。」

……なんとまあ、イギリスでは小学生の頃からISの勉強を始めてるのか。

「だったら奏はどうなんだよ？」

「一週間で覚えたさ。そのボケとは違ってな。」

一夏に嫌みで返した時、何故か『あゝ……』とかいう納得の聲が上がった。

「あれを見れば納得できますわね……」

「かなちゃんは天才だから……ね……」

「天才で済ませるものだろうか……？」

……おいコラ、話が聞こえてるぞ？

「え、何？どういふこと？」

「何かあったの？」

他のクラスだからそのわけが分からない二人にオリヴィエが説明した。

「今日もう一人転校生来たじゃない？ドイツの。」

「来たわね。ドイツのシュヴァルツェア・ハーゼの隊長さんだったかしら？」

「へー。」

「それで、一夏がはたかれかけたという話に繋がってくるんだけど、それを止めたのよ、奏が。」

それにまた二人の『へー』という声上がる。

「……言いふらさなくていいっての。面倒だからさ……」  
「いいの!!その時に言った言葉がね?」Lernt die P  
rinzessin des schwarzen Kaninc  
hens auch die Mindestart nicht  
?』だったの。」

俺が言ったことを全く同じドイツ語で説明したが……

「……オリヴィエ、あたしたちにも分かるように言ってくれない?」

「ドイツ語じゃ分からないわ?何を言ったのか……」

「あ。え、えっと……ね?」黒ウサギの姫様は最低限度のマナーを学ばないの?』って。」

「……ちよつと待って?日本語で言ったんじゃないよね?ドイツ語で言ったんだよね?」

「ドイツ語。私よりも流暢だった……」

突然鈴が震えだした。どうした?

「どんだけスーパーバイリンガルなわけよアンタは！！何？アンタに勉強教われれば誰だって東大合格できますよみたいな伝説でもあるわけ！？」

鈴にぼろくそ言われた。

「つかそんな伝説ねえわ！！あの天災なら分からなくもないがな！！」

「頭が良かっただけの弟バカのこと？」

「・・・そうだよ、お前のことを『女狐』と呼んで毛嫌いしているあの天災だよ・・・」

真琴と姉さんはお互い毛嫌いし合っている。真琴は姉さんのことを『頭が良かっただけの弟バカ』といい、姉さんは『女狐』と言っている。

「・・・ま、そんなこんなで勉強とかは俺に聞いてくれや。どうにかできる範囲でどうにかするからよ。」

「二人ともありがとう。」

「こ、これくらいは当然だろ・・・？」

「？」

・・・誤魔化せたかは知らないけど、実はこの時ドキッとしてしまっていた。

「・・・それよか一夏・・・分かってるな・・・？」  
「・・・分かってるぜ？部屋割のことだな？」



突然かな兄と一夏の間、の空気が変わった。

「決闘？血で血を洗うような決闘するの？それともISSでガチ戦闘？あたし審判するよ？」

だけど二人は聞いてないみたいで・・・

『せの・・・』

構えて（ちなみにこの時他の皆が息を飲む音が聞こえたけど気にしな～い）・・・

『最っ初はグーッ！ジャンケンポンッ！！』

「えっ！？そっち！？」

・・・うわー、一番平和的な方法で来たね・・・

しかも決着がつかないつかない。

「あたしゲームしてるねー？」

もつとつでもよくなったあたしはPSP始めた。

どっちが勝っても気にしない。だってかな兄の部屋には勝手に入るだけだし。

「よっしゃ勝ったああああああっ！……！」（奏）  
「くっそ、負けたっ！……！」（一夏）

ジャンケン決着ついたみたい。

「ついことでシャルルのルームメイトは俺ってことで。よろしくな？」

「うん。こちらこそよろしく。」

んで握手した・・・んだけど。

なんか違和感を感じた。男にしては手が小さい気がするし、なんとなく女の子っぽいような感じがしたんだけど？

それはおいおい考えるところで、昼飯の再開だな。カロリーー ト食うか。

ちなみに弁当は一口ずつ食べた。お世辞じゃないけどオリヴィエ以外の弁当は結構美味かったとだけ言っとく。

で、食ってたのはいいが、箸が全然箸を動かしてない・・・という  
か弁当の包みすら広げていないというね。

「箸？腹でも痛いのか？」

「違う・・・」

「そうか。ところで箸、そろそろ俺の分の弁当をくれるとありがた  
いんだが・・・」

「・・・」

無言で差し出される弁当。一夏が返事に困ってる。俺も困ってるが  
な！

で一夏が驚く。弁当の内容は凄い。和風でバランスの取れた献立の  
数々。

一夏のヤロー、羨ましいじゃねえか・・・

で、なんか箸のメニューには唐揚げがない。

一夏がそれを聞いたら・・・

「わ、私はダイエット中なのだ！だから、一品減らしたただけだ！文  
句があるか!？」

「文句はないが・・・、箸は別に太ってはないだろ？」

おい一夏。周りの女子の目の色が変わったぞ？

「あー、男ってなんでダイエット〃太っているの構図なのかしらね？」

「全くですわ。デリカシーに欠けますわね。」

「いやでも実際ダイエツトなんか必要ないように見え・・・。」

箸を見た後押し返された一夏。

「ど、どこを見ている、どこを！！」

「どこって・・・体だごぶおっ!？」

おい、見事な肘鉄。

「何堂々と女子の胸を見てんのよ!ア・ン・タ・は!!!」(鈴)

「一夏さんには紳士として不足しているものがあまりに多いようですわね。」(セシリア)

「一夏のえっちー!へんたい!!」(真琴)

「ちよっ!?!少しくらい弁明を!黙れ凡骨ウツ!!」酷えっ!?!」

ちなみに一夏に『凡骨』と言ったのは俺じゃない。エリイだ。社長

か？お前は某カードゲームの社長か？龍大好きな。中の人には『波乗り健郎』。

「・・・あー、なんだ？俺ちょっと寝るわ。午後寝たら出席簿食らうし。」

「え、あ、うん。おやすみ。」

「・・・zzz。」

Side Liece

奏は午後のために寝ちゃった。

・・・なんだろ？イヤ な予感がするんだけど・・・

「ほら、篝も食べてみるよ。」

唐揚げを女の子用の一口サイズに切って、箸で持ち上げてく。もちろん、左手を添えて。

「な、なに？」

「ほら、食ってみろって。」

「い、いや、その、だな・・・」

あーあ、篝ももっと自分の気持ちに正直になればいいのに・・・いつもの切れ味の良い刀みたいな篝は何処に行っちゃったんだろ、つてくらいに困った顔で自分の弁当と一夏の端を交互に見てた。

『ああっ！！！？』



そして同時に悲鳴。あげたのはもちろんセシリアと鈴。

そして出された唐揚げをぱくり。

「・・・いい・・・。いいものだな・・・」

「だろ？うまいよな、この唐揚げ。」

「唐揚げではないが・・・うむ。良いものだ。」

・・・なんか羨ましいかも。私も彼氏作ったら・・・あんなことやこんなことを・・・きゃー！！

「り、リー姉さん・・・？」

「はっ！」

ル、ルティアに呆れ目で見られた・・・

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あん』っていうやつなのかな？仲睦まじいね。」

「なんでこいつらが仲いいのよ!？」

「そうですわ!!やり直しを要求します!!」

・・・えーと、何の？

「それなら、皆おかずに一つずつ交換しようよ。食べさせあいつならいいでしょう?」

あ、妥協案。さすがシャルル。

「ん?まあ、俺はいいぞ?」

「ま、まあ、一夏がいいって言うんならね。」

「わ、私は本来ならばそのようなテールブルマーを損ねるような行為は良しとは致しませんが、『郷に入っては郷に従え』、ですわね。」

・・・なんか渋々、って感じだね。

私もお弁当食べなきゃ。

「はむ。・・・?るふいあ?ろつひらの?」

一口だけご飯を頼張った後にルティアがなんか落ち込んでいたのが見えたから気になって話してみた。

「・・・リー姉さん・・・」

・・・訂正。泣いていた。

「・・・はあ。も。ルティア？こついうことは焦っちゃダメだ、  
つて前から口を酸っぱくして言ってなかったっけ？」

「うん・・・」

「こついうのはね？機を見るのに敏感な人が有利になるんだよ？分  
かる？」

「うん・・・」

S i d e e l i e

・・・なんだろ、このカオスな空間。

一夏たちは何か『はい、あゝん』合戦に発展してるし、リー姉はル  
ーに説教始めちゃったし・・・

おまけにかな兄方面では弁当論争始まったし・・・

「・・・なんだろね、この雰囲気って・・・」

夜 (Side Kanade)

「じゃ、改めてよろしくな？シャルル。」

「うん。こちらこそよろしく、奏。」

夕食を終わらせて俺とシャルルは部屋に戻ってきた。

食堂に行ったら三人目の男子転校生ということで女子包囲網&質問攻めに遭い、永遠に続きそうなそれを適当に切り上げてきた。

元々どちらかの男子と相部屋にする予定だったらしく、じゃんけん（結構あいこが続いていたアレ）で勝った俺と同室になった。

で、今は朝作り置きしておいた麦茶を飲んでいる。

「紅茶とは色は一緒なのに全然違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ?」

「そりゃよかった。パックで湯出ししたやつだから安物だけど。」

ちなみに俺は同時進行で作ったさんぴん水を飲んでいた。これがまた美味いんだな。

「あ、シャワーの順番どうする?俺はその日その日で入る時間バラだけど。」

「どういうこと?」

「エリイがね。『ゲームしよーよー』ってドア蹴り開けて入ってくるんだよな……」

「へ、へー……」

……苦笑いさせちゃった。

「じゃ、じゃあ基本的に僕が後でいいよ。エリイさんが来ない時は奏が先に使って?」

「いいのか?実習後に汗かいてすぐシャワー使いたい日だってある

だろ？」

「うん、平気。僕あまり汗かかない方だから、すぐにシャワー浴びなくてもそんなに気にならないから。」

「そうか？じゃ、先使わせてもらうな。・・・あとさ、あんまり遠慮すんなよ？男同士だし、何より俺が困るし・・・」

「うん、ありがとう。」

・・・なんかシャルルの礼の言い方ってすっげえ自然体な気がしてきたんだよな・・・

「そういえば奏って放課後に一夏の特訓の手伝いしてるって来たけど、そうなの？」

「まあ・・・気紛れでやってるくらい。気分決めてるしな。やる気になりゃやるしやる気にならなきゃやらねーし。」

今日は引越しとか部屋の片付け（とは言っても机の上のPC設備の再配置くらいだけ）とかで一夏の特訓には全く関わらなかったけど、そろそろ俺の方も再調整しておいた方がいいかもしれない。今月末は学年別トーナメントだ。今度こそルシエラに勝たないといけないし。

「あ、じゃあ僕も加わっていいかな？一夏に何かお礼したいし、専用機もあるから役に立てると思うんだけど・・・」

「そりゃ助かる。俺がいない時に教えられるし、多分俺より丁寧だろうし。じゃ任せた。」

「うん。任された。」

運良く味方が出来た俺は、その日は気が楽になったためか知らないけどずっと眠れていた・・・



#18 昼の光景、夜のティーブレイク（後書き）

（次回予告）

アリーナで行われていた一夏の特訓。

そんな中、一人の少女が攻撃を仕掛けてきた。

何やら因縁があるらしく・・・？

次回、#19 一触即発な空気

明かされた因縁は重く・・・

#19 一触即発な空気(前書き)

特訓模様ですが何やら不穏な空気が・・・？

## #19 一触即発な空気

「ええとね？一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ。」

「そ、そうなのか！？一応わかっているつもりだったんだが・・・」

シャルルが転校してきて既に五日。今日は土曜。

IS学園だと土曜日の午前は理論学習、午後は完全に自由時間になっている。つっても土曜日はアリーナが全開放なため殆どの生徒が実習に使う。

それは俺達一夏特訓組も同じで、今日もこうしてシャルルに手合わせさせて、IS戦闘に関するレクチャーを受けさせていた。

同時に真琴もオリヴィエと簡単な模擬戦をしていた。結果は何とオリヴィエが僅差勝ち。真琴の精密な予測射撃に翻弄されていた為だ。

「うーん、知識として知っているだけ、って感じかな？さっき僕と戦った時も殆ど間合いを詰められてなかったよね？」

「うっ・・・、確かに・・・。『瞬時加速（イグニッション・ブスト）』も読まれてたしな・・・」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ？特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても起動予測で攻撃出来ちゃうからね？」

「真琴にとって格好の的だな。あいつは意外と予測射撃上手いから・・・。」

「直線的、か……。うーん……」

一夏が考え始める。

「ついでに一夏、お前『瞬時加速中に軌道を変えたら直線的にならなくて済むかも』なんて思ってねえだろうな？」

「そ、そんなことないぞ？」

「言つとくがな、そんなことしたら空気抵抗や圧力、遠心力その他諸々の関係でISに負荷がかかって最悪骨折れて入院だぞ？」

「……なるほど……」

一夏は俺やシャルルの言葉を頷きながら聞いていた。

シャルルの説明は俺が聞いても分かりやすい。ちなみに一夏は俺の説明も分かりやすいと言っていた。本当かどうかは知らねえ。

ちなみに……

箒は『こう、ずば　とやってから、ガキンっ！ドカンっ！……』  
という感じだ。』と擬音を用いて説明。もうちょっと詳しくしろ。

鈴は『なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。……はあっ？なん  
で分かんないのよバカ。』と自分の感覚を頼れという。教える以前  
にお前の教え方の改善が問題だぞおい。

セシリアは『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の  
時は後方へ二十度反転ですわ。』と超理論・数学的。角度なんて感

覚だから、行きつく所は鈴と同等。

ルティアは論外。まずは恥ずかしがり屋の克服を最優先事項とする。エリイは『一夏の場合、思いっきり近づかなきゃダメでしょ？だったらダメーシ覚悟で突っ込んで斬るべし斬るべし！君が泣くまで斬るのを止めない理論でゴーゴー！！』・・・箒以下。まずダメーシ覚悟という考えを排除すべし。

オリヴィエや真琴は射撃特化型なため（真琴は完全に射撃オンリー）、教えることはできない。

更にどうでもいいことだが、俺は今ISを展開していない。着替えにはいるけど、展開する必要がないと思ってるからだ。

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ。」

「あんなに分かりやすく教えてやったのに、何よ！」

「私の理路整然とした説明の何が不満だというのかしら？」

「・・・一夏の代わりに俺が言っとく。あれはアドバイスなのか？説明なのか？逆に俺がお前らの間違いを指摘しとくぞ？」

「私のアドバイスのどこに間違いがあるというのだ？」

おー、食って掛かってきた。

「そうよ！分かりやすいはずよ！？」

「では、どこに間違いがあるというのですか？」

「まず箒。お前の説明は擬音だらけで解読できない。次に鈴。感覚でやれって言ってるだけで教えるもクソもない。最後にセシリア。

お前の説明は結局感覚でやれって言ってるのと同等。」

『うぐっ・・・』

俺が問題点をグサグサと三人に突き刺していく間に、一夏への説明は単一仕様能力まで終わっていた。

「じゃあ、射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ。」

一夏に渡したのは五五口径アサルトライフル《ヴェント》だ。

「あれ？他の奴の奴の装備って使えないんじゃないのか？」

「普通は使えねが、所有者が使用許諾すりや登録先全員が使えんだよ。」

「そういうこと・・・今一夏と白式に使用許諾発行したから、試しに撃ってみて？」

一夏が射撃体勢に持っていく。やっぱり初体験だからか？結構重そうだ。

それをシャルルが誘導していく。

そして撃った。

「うおっ!?!?」

物凄い火薬音に驚いていた。

「どっつ?」

「・・・なんか、アレだな・・・。とりあえず『速い』っていう感覚だ・・・」

「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も速いけど、弾丸はその面積が小さい分より速くなるの。だから、軌道予測さえ合っていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になる。一夏は特攻する時に集中しているけど、それでも心のどこかではブレーキをかけてるんだよ。」

「だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか・・・」

「うん。・・・奏の場合は例外かもしれないけど。」

「・・・んあつ?」

不意に話を振られて変な声で返事。

「あ、そのまま続けて。一マガジン使い切っていいよ?」

「おう、サンキュ。」

一夏はそのまま撃ち続けていく。

「・・・こういうのは真琴の専門分野だったよな・・・」

「そだよ?これでも立射エアライフル全国大会三位だよ?」

「へー・・・って!?!全国三位!?!冗談じゃなくて!?!」

鈴が驚いていた。

「うん。あの時は調子が悪くて本調子じゃなかったんだけどね・・・」

「いや、それでも凄いと思うのだが？」

その間に一夏はマガジン二つ分撃ち切ったらしい。

「そついや、そのISなんだけど、山田先生が操縦していたのと大分違うように見えるんだが本当に同じ期待なのか？」

「僕のは専用機だからかなり弄ってるんだ。正式にはこの子の名前は『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』。基本装備をいくつか外して、その上で拡張領域を倍にしてるんだ。」

「倍！？そ、そりやすごいな・・・。ちよつと分けてほしいくらいだ・・・」

「あははっ。あげられたらいいんだけどね。そんなカスタム機だから今量子変換してある装備だけでも二十くらいあるよ。」

「・・・シャルルのリヴァイブカスタムってなんか・・・バルカンの火薬庫みたいだな。」

「第一次世界大戦の？」

何となく乗ってくれた。これはこれでありがたい。

そんな時だった。



「ねえ、ちよつとアレ・・・」

「ウソ、ドイツの第三世代型だ・・・」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど・・・」

急にアリーナがざわつき始めた。

全員がその注目の的に視線を移した。

「・・・・・・・・」

そこにいたのはもう一人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボー  
デヴィツヒだった。

俺が知る限りだと、転校以来誰ともつるもうとしない。というか会  
話さえしない孤高の女子だな。

俺も話そうとしたことはない。ま、叩くのを邪魔したわけだから陰  
悪なのは当然だろ？

「おい。」

ISの開放回線で声が飛んできた。一応覚えている。本人の肉声だ。

「・・・なんだよ。」

一夏が返事をした。

同時に言葉を続けながらラウラが飛翔した。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え。」

・・・なんだ？いきなり何を言っただけやがるんだ？

「嫌だ。理由がねえよ。」

「貴様にはなくても私にはある。」

何だ？理由？

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し得たであろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を・・・貴様の存在を認めない。」

・・・ああ、千冬さんのモンド・クロツソの話か。

・・・つか、あれって一夏が悪いことなくね？

「また今度な。」

「ふん……。ならば……。戦わざるを得ないようにしてやる!!」

言うが早いか、ラウラはその漆黒のISを戦闘状態へとシフト、実弾砲が火を噴いた。

……。つたくよ……。

バシユツ!!!

「テメはバトルマニアか？構ってちゃんか？何にせよ面倒持ち込むんじゃないよこのヤロー。」

『奏!?!』

それよりも早く間に入って翼のシールドで弾く。言い方はどっかの某白夜叉だ。

「また貴様が……」

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「くっ……」

更にシャルルからの（口による）援護射撃。

「フランスの第二世代型アンティークと速度が取り得だけのIS如きで私の前に立ち塞がるとはな……」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルキよりは動けるだろうけどね？」

「言つとくが、速度が取り得なんてぬかしてやがるとIS蒸発させるぞ？」

互いに涼しい顔をした睨み合いが続く。

同時に槍を構えたりースが、おずおずとだが鎌を両手に持つてるルティアが入ってきた。

『その生徒！何をやっている！？学年とクラス、出席番号を言え』

「!!」

突然アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞きつけてやってきた担当の先生か？

「・・・ふん。今日は引こう。」

横槍を何度も入れられて興が削がれたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていった。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。奏が防いでくれたし、なんともないよ。大丈夫。奏、サンキュ。」

「これで貸し一つ、か？」

「うっ・・・」

いつもの会話に戻った。

「んじゃ、今日はもう上がるか？四時過ぎだし、もうアリーナも閉まるぜ？」

「おう、そうだな。あ、シャルル、銃サンキュ。色々と参考になった。」

「それなら良かった。」

・・・これ、普通の子ならころりと落ちていただろうな・・・

「えつと・・・じゃあ奏、先に着替えて戻ってて？」

シャルルはとにかく俺らと着替えたがらない。・・・というか既にISスーツを着ていたり、先に着替えられていたり、だ。

俺は気にしないけど、一夏が、ね・・・

「あ、俺さっきの防御で翼のダメージ確認しねーといけねーからよ。」

「それ私も手伝っていい？少しだけなら修理できるから。後で勉強教えてくれるって約束で。」

「それくらいならいいけど？」

んで、俺とリースでセラフィムのチェックをすることになった。

そんなとき一夏があまりにもしつこくシャルルを誘うもんだから・・・

「適当に飛んでけ必殺一夏ミサイルバージョン2!!！」

「うわああああああ・・・」

面倒になったから蹴とばした。一夏ミサイルバージョン2!!！欠点

は何処に飛んでいくか俺にも予測がつかないことだ！！

「ま、気にしないでくれや。俺は特に詮索する気はないからよ。」

「え、あ、うん。ありがとう・・・」

で、俺とリリースで調整しに向かった。

後々一夏から『下旬から大浴場が使えるかも』と話を聞いた。  
・  
・  
・  
特に気にしないけど。



「・・・ふう・・・」

（ドアを閉め、寮に一人だけになった時、つつい息を漏らした。）

・・・疲れちゃったのかな・・・？

・・・シャワーでもしてすっきりしておこうかな・・・？

（シャルルはクローゼットから着替えを取り出してシャワールームへと向かった）

#19 一触即発な空気（後書き）

（次回予告）

奏とリースが部屋に入ったとき、そこにいたのは『少女』だった。

少女ーシャルルーは己の事実を口にして・・・

次回、#20 露呈した真実、告げられた事実

少年が『少女』という真実が明らかになる・・・

#20 露呈した真実、告げられた事実(前書き)

皆さんお待ちかねのシャルの秘密暴露！

それだけです！

## #20 露呈した真実、告げられた事実

「ごめんね？私現国苦手だから・・・」

「教えるくらいどうってことないって。それにリースはエリイアルティアに教える側になるんだろ？だったら協力くらいするって。」

調整も終わり、俺とリースは部屋に向かっていた。約束を果たすため。

ダメージは特に気にすることもなかった。

「んじゃ、適当にしてくれ。俺もいろ（バシユッ）い」

ドアを開けた瞬間、同時に空気が抜ける音がして、俺とリースは固まった。

部屋に入ろうとした時に、見たことのない『女子』がいたからだ・

「か、か、かな・・・で・・・？そ、それに・・・り、リース・・・さん？」

「え、えーと・・・」

「・・・・・・・・・・」

俺は本能でだろっけと目をすぐに逸らした。これは見てはいけ  
ないと思っただからだ。

が・・・

(あ、頭に光景が焼き付いて離れない!? どういうことだ!?)

逸らすまでに見てしまった光景が頭から離れない!! ウェーブの  
かったブロンドの髪、すらりとした体に長い脚、腰の括れで強調さ  
れたCカップくらいの胸・・・

っ、っーか、誰だったか!? 誰だった!? こんな女子見たことない  
ぞ!? でも俺のことを名前で呼び捨てにした・・・

「きゃあっ!?!」

バシユッ! ガチャッ!!

はっと我に返ったららしい女子がシャワールームに逃げ込んだ。

・・・ブロンド・・・? もしや・・・?

「え……つと……ぼ、ボディークリーム……入口に出してお  
くから……」  
「う、うん……」

会話になっているんだかどうか分らないやり取りで、俺はリース  
を部屋に入れてボトルを置いた。

もしかして今のシャルルか！？

「……ね、ねえ奏……」

「何も言つな何も言つな何も言つな俺は知らなかった俺は知らな  
かった俺は何も知らなかった……」

「責めたりするわけじゃないんだけど……後で謝つとこ？」

「……そうしておく。」

リースと話している間に、またバシユ、という音が聞こえた。

「あ、上がったよ……。り、リースさん、ど、どうも……」

「あ、ああ……」

「ど、どうも……」

それから数分間は誰も声を発せなかった。衝撃が大きすぎたから……

……耐えられない……

「……まあ、何だ？なんか飲むか？緑茶か麦茶のどっちかだが……

」

「う、うん。いただくよ……。……緑茶の方を……」

「わ、私も……。私は麦茶で……」

それぞれの意見を聞いて俺は逃げるように動く。

麦茶はそのまま、緑茶は少しでも温かい方がいいだろうか?と思つて温めなおしたものを湯飲みに入れて持っていく。

「・・・リース。」

「うん、ありがとう。」

「・・・シャルル。」

「あ、ありがとう　　きゃあっ!!！」

湯飲みを渡した時に指が触れたみたいで、シャルルが急に手を引っ込めた。

・ 持ち手を失った湯飲みが落ちそうになって、あわてて掴んだ俺は・

「あっちいつ!? 熱っ! み、水っ! す、すいつ、水道!」

慌てて水道まで行って蛇口を全開に捻る。火傷の時は水で冷やすのが先決・・・!

「う、ごめん!」

「大丈夫?」



二人が駆け寄ってきた。

「だ、大丈夫、のはず・・・だ。すぐ冷やしたし火傷にはならない・・・はずだろ？」

「ちよつと見せて・・・。うん。これなら大丈夫かも。」  
「で、でも、ちよつと赤くなってる！ホントにゴメンね!？」

軽くパニックになってるシャルル。俺の腕を強引にとって被害箇所を痛々しげな表情で見る。

リースは逆に冷静になっていた。

「す、すぐに氷貰ってくるね!！」

「ちよい待て!その格好で出るのはマズいだろ!？あとで自分で確保するから!！」

シャルルの格好はいつものスポーツジャージなんだが、バレたからか、胸を隠すための特別製コルセットをしていないから・・・

胸があることが思いつきり分かってしまう姿なんだから・・・

「でも・・・」

「そ、それよりもな?その、何だ?そ、それはわざとしてるのか?」

「な、なにを？」

「・・・さ、さつきから胸が・・・当たってる・・・」  
「!!--!!」

言われてやっとな体勢を理解したのか、シャルルは俺から飛び退くように離れたら、胸を隠すように自分の体を抱きしめた。

「・・・」

「・・・(ジト・・・)」

二人からの抗議の視線が・・・痛い・・・。俺は何もしてないはずだろ・・・？

「・・・奏のえつち・・・」

「ばっ!?! なっ、おっ、おお俺が悪いのか!?! 俺何もしてないよな!?! 何!?! 冤罪!?!」

「奏って・・・そういう趣味があっただ・・・」

「そういう趣味ってどういう趣味だよ!?! 公関係だなんていう話はないからな!?! つーか俺は変態じゃねえ!!--!!」

「・・・そうなの・・・?」

「これ以上騒ぎを大きくしないでくれえ~~~~~~~~!!!--!!」



騒動が収まってから。

「改めてだけど・・・、なんで男の子のフリなんてしてたの？」

リースが話を切り出した。無論、このことだ。

「それは・・・その・・・、実家の方からそうしろって言われて・・・」

「実家つつと・・・デユノア社か？」

「そう。僕の父がその社長なんだ。その人からの直接の命令なんだよ。」

シャルルの顔がこの話になってから顕著に曇っていく。・・・何故だ？

「命令つて・・・お父さんなんでしょ？なんでそんなことを・・・」

「僕はね？愛人の子なんだ・・・」

「つつ！？」

二人して絶句。

リースもそうだと思うが、俺は普通に世間を知る普通の十五歳だ。

『愛人の子』という言葉の意味が分からないほどのバカじゃないとは思っている。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなった時なんだけどね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でIS適応が高いことが分かって、非公式なんだけどデュノア社のテストパイロットをやることになってね。」

本当なら喋りたくないはずのことをシャルルは健気に喋ってくれた。俺たちはただ黙ってしつかりと話を聞くことに専念した。

「父に会ったのは二回くらい。会話は数回くらいだったかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時は酷かったなあ……。本妻の人に『泥棒猫の娘がっ！』って殴られたんだ。お母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね……」

愛想笑いを繋げていたシャルルだけど、その声はちつとも笑っていなかった。

同時に俺は手に力が入っていた。握りこんでいた。怒りを堪えていられるだけじゃない。おかしすぎるんだ。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの。」

「・・・それってやっぱり、デユノア社が作ってるのが第二世代型だから？」

「うん。ISの開発って物凄くお金がかかるんだ。殆どの企業は国からの支援があつてやっと成り立っている所ばかりだよ。それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニツション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なんだ。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるからね。」

前にセシリアが一夏に第三世代型の開発に関して色々言っていたな・・・

「話を戻すね。それでデユノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代型最後発だから、圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪するって流れになったの。」

「・・・話は分かった。やっぱり注目を浴びるための広告塔としてそして俺のセラフイムや一夏の白式のデータ取りのために男装をしてここに来たってわけか？」

「そう。あの人に言われたんだ。」

当たった。

話をまとめると、シャルルは一方的に親に利用されているだけなんだ。ただIS適応があつた、ならば使おう、そうとしか考えていな

いはず。ただの道具と同等の扱いしかしていないんだ・・・

「・・・とまあ、そんなところかな？でも二人にばれちゃったし、きつと僕は本国に呼び戻されるだろうね・・・。デュノア社は・・・まあ・・・、つぶれるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな・・・」

「・・・なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘ついててゴメン。」

「シャルル・・・」

ダアン！！

「か、奏！？」

「ど、どうしたの！？」

・・・もう我慢ならねえ。つい壁を殴っちまったが、今はそういうことはどうでもいい・・・！！

「そんなバカな話があつてたまるかよ・・・！シャルルが道具みたいじゃねえか・・・！親が子供を道具のように扱っていいのか！？親が子供の権利を剥奪する権利があるのか！？親が子供を束縛していいのか！？いいわけねえだろ！？」

「か、奏・・・？」

リースが困惑した顔で覗き込むが・・・言葉が止まらねえ。

「シャルルは一人の人間だろ！？生き方だつて自分で決定する権利がある！それを親の我儘で剥奪されるなんてバカな話があるかよ！あつてたまるか！！」

「ど、どうしたの？奏、変だよ？」

「・・・っ！・・・悪い、我慢できなくなった・・・」

シャルルが聞いてきたとき、ようやくクールダウンした。

「・・・俺は・・・子供の時に両親が死んだ。いや、殺された。」  
「っ！！！」

二人が息を飲んだのが分かった。

「聞いたことがあるかもしれないけど、親父もお袋も遺伝子学の最高権威だった。それが裏目に出たんだろうよ・・・」

「・・・その・・・、ゴメン。」

「別に気にすんな。俺の肉親は姉さん一人だ。どうせ今もどっかを放浪してんだろうよ？別に会いたいとも思わねえし、家族の温もりなんて、とうの昔にいらねえって思っちまったからな・・・。それよりシャルルはどうすんだよ、この後・・・」

「どうって・・・時間の問題じゃないかな？フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生を下ろされ



て、よくて牢屋行きとかじゃないかな？」  
「そんな……。それでいいの……？」

悲痛な声で聞くリース。

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないんだ・  
」

「……痛々しすぎる……。絶望すら乗り越えた諦観があった。

「……だったら、ここにいろよ……」  
「え？」

「IS学園特記事項第二十一条、本学園における生徒はその在学中  
においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同  
意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものと  
する。」

「……あ、そういうことね！」

リースは理解してくれた。

「つまり、この学園にいる限り、三年間はフランスからも何もされ  
ないってことだよ！」

「あ……」

シャルルはほっとしてくれたようだ。たぶん。きっと。

「……でもさ、奏……」

「何だ？特記事項の事なら聞くなよ？全事項覚えてるからな。」

「……やっぱり凄いな。」

「自慢することでもないさ。一夏が覚えている、なんて話だったら自慢しても良いと思うけど。」

「そうだね。ふふっ。」

ようやく笑ってくれたシャルルに二人してほっとする。

「まあなんだ。とにかく決めるのはシャルルってことだ。よく考えといてな。」

「うん。そうするよ。」

一夏のことを言ったのになんか照れくさくなって一旦顔を背けたが、改めてシャルルに視線を向けた時、ちょうど目があった。

「ん？どうしたの？」

「……なんだ、いや、まあ……」

シャルルは俺の顔を覗き込んできた。……なんか、ホントにこれはわざとやってるのではなからうか。

「……とりあえずシャルルさ、一度離れてくれ。」  
「？」

「……胸元が、な……」

指摘されてシャルルがまた胸元を隠した。こうしてくれると俺は助かる。

「か、奏……、さっきから胸ばかり気にしてるけど……、み、見たいの？」

「は？」

「……」

リース、その抗議の目は止めてくれ。ルティアが聞いたら大変なことになる。

「……気になるだけっつーか……なんというか……見たい……  
・ということはない。」

「……ホント？」

「おう、俺はそういうことは嘘言わねえし。」

『……』

また沈黙。

「と、とりあえずリース、飯食いに行かね？」

「そ、そうだね、そうしよ！ー！」

「あ、シャルルは・・・まあ、戻ってくるときに飯貰ってくるから待っててくれ。」

「うん。ありがとう。」

シャルルと一旦別れて、二人で向かう。

S i d e L i e c e

・・・あの時のシャルル君の事実、びつくりしちゃったな・・・

でも、奏のこと驚いちゃったかも。お父さんもお母さんも殺されちゃってるんだから・・・

・・・私たちのことは、まだ言わなくていいかな・・・？奏に変な気遣いさせてもいけないと思うし、なにより・・・

話が重すぎるもん。

S i d e K a n a d e

・・・一体何があつてこつなつた？

「う〜」

「しぎぎぎ」

「・・・あう・・・／＼／」

真琴が右腕に、ルティアが左腕に抱きついていて、オリヴィエが『  
乗り遅れた・・・このヤロー！』みたいな怨嗟の籠った唸り声を  
あげていた。

数分前。

俺はリースとただ歩いていた。シャルルの事を口外しないように確認しながら。

が。



「どーん!!」  
「きゃっ!?!」

突然後ろから義妹エリイの声が出た。

同時にルティアの悲鳴?

むぎゅっ!!

「っ……」

「あ……//」

とっさに掴んだのが俺の腕だった。

ちよつとバランスを崩したが、どうにか持ちこたえた。……のが悪かった。

ル

ティ

アああああ

っ!!!!」

「ぐおおっ!?!」

偶然なのか狙ってたのか、突然真琴が俺の空いていた腕に抱きついた。

またそれでバランスを崩しかけて、持ちこたえる。

それを見たのがオリヴィエだった、という訳。

真琴が威嚇するようにルティアを睨みつけると、ルティアは『絶対に離したくないもん！』と言わんばかりに力を込める。

それが分かると真琴も力を込め始める。

結果・・・

むに。

むにゅっ。

・・・二人の胸が押し付けられるわけで・・・

そして歩きづらくなるわけで・・・

「だーっ！！歩きづらいわ！！離れる！！」

「・・・かなちゃん・・・」

「・・・奏・・・君・・・」

「あ！？」

冗談抜きでイライラしていたから威嚇気味に返事。が。

『嫌・・・(なの・・・)?』

・・・まさかの二人同時の上目遣い(＋涙目)！？

きゅうしよに あたった！！

こうかは ばつぐんだ！

「頼むから離れてくれ……。マジで歩きつらい……。」「  
『。。。くすん。』」

泣々離れてくれたのはいいが。。。

もう疲れたよ、パトラッシュ。。。

#20 露呈した真実、告げられた事実（後書き）

（次回予告）

夕飯を貰ってきた奏。

シャルルはそれを食べようとして悪戦苦闘。

『甘えてもいい』の言葉にシャルルは……？

次回、#21 少女の甘え（きゆうしよに あたった！ こうかは  
ばつぐんだ！）+……

皆の者！輸血の準備をせよ！

「（奏）作者からのお願いだ。感想をくれ、とのことだ。なんか感想が一回の更新に一件だと寂しくなるらしい。とりあえず頼む。」

#21 少女の甘え(きゅっしょにあたった！こっかはばっぐんだ！)

さあ！IS至上激甘固有空間発生の時間でございます！

・・・でもまあ、ご期待に沿えない可能性もあります故、何卒御了承下さいますようお願い申し上げます。

#21 少女の甘え(きゅっしょに あたった! こっかは ばっぐんだ!)

「……た……、ただいま……」

「あ、奏おかえり……ってどうしたの? なんだかふらふらしてるけど……」

「……き、気にするな……。俺は気にしない……。そ、それより腹へったろ? 焼魚定食どうにかもらえたけど、食べるか?」

「うん、ありがと。いただくよ。」

俺からトレーを受け取ったシャルルだが、それをテーブルの上に置いた時……

「っ!」

引きつった顔で表情が固まった。

「……どうした? ひよっとして嫌いだったりしたか?」

「そ、そういうことじゃないんだけど……」

「……じゃあどうしたんだ?」

「さっさと食わねえと冷めるぞ?」

「そ、そうだね。うん。い、いただきます。」



ぎこちない笑みを浮かべたシャルルを不思議に思っていたが、その理由はすぐに分かった。

箸を割ったら、なんとまあ、結構偏っちゃった。

そして……

「あっ……」

ぼろっ。

「あっ、ああっ、んっ、くっ……」

ぼろっ。ぼろっ。

魚の身を解して箸でつまもうとして落とす。どうやら箸が苦手らしい。というか今初めてシャルルが箸を使っている所を見た……気がする。

「……なあシャルル。」

「な、なになかな？」

「ひょっとして、箸使うの苦手だったりするか？」

「う、うん。練習してはいるんだけどね……。あっ……」

また魚の身を落とす。一応皿の上だからなんともないが、このままじゃ食事が進まねー……

「……悪い。スプーンかなんかもらってくるわ……」

「えっ、ええっ？いい、いいよ、そんな。なんとかこれで食べてみるから。」

「つってもなあ……。食べづらくねえか？慣れないものを使つて相当辛いと思つぞ？」

「でも……。悪いよ……」

……まったく。

「シャルル。」

「な、何？」

「ちったあ誰かに甘えることをした方がいいんじゃないかねえか？そんな遠慮ばつかだと損するだけだぞ？」

「うう……」

あ、やっぱり小さくなった。

「……だがまあ、初っ端から甘えろ、なんて言われても無理だろうから、最初は俺に頼ることからしてみな？家族云々関係なしに、俺はいつでもシャルルの味方になるぜ？やれる範囲でなら何でもしてやらあ。」

「奏……」

しばらく迷っていたようだったが、やっぱり食うのに時間がかかることが嫌になったか、観念したように口を開いた。

「じゃ、じゃあ、あ、あの……」

「ん？スプーンか？」

「そ、そうじゃなくて……、その……／＼／」

……どうした？

「え、えっと……、ね？か、奏が……食べさせて……？／＼／」

……なんという事態に！？

予想の斜め上の言葉が聞こえたぞ！？

「あ、甘えてもいいって……言ったし、やれる範囲でならなんでもするって……言ってたから……／＼／」

言いづらそうに指をもにょもにょさせて言つかね！？俯いてもじもじしながら言つかね！？

「そ、そりゃいいって言ったけど・・・な？さすがにそれは恥ずかしいというか・・・なんというか・・・／／／」  
「・・・ダメ？・・・やっぱり・・・イヤ・・・なの・・・？／／」

・・・ぐは。

上目遣いは反則だろ！？顎引いた上目遣い+頬真つ赤染めは絶対反則だろ！？レッドカードだろ！？

そんな捨てられた子犬が雨の中段ボールから送ってくるような眼差しは反則だと思っ！！

「~~~~~っ！！・・・わ、わかった・・・／／／」

もうこうなったらどうにでもなれだ！！

「・・・じゃあ、その、あ、あーん・・・／／／」  
「あ、あーん・・・／／／」

ま、まさかシャルルと『はい、あーん』をやることになるとは思わなかったぜ・・・

咀嚼をするシャルルの顔は心なしか赤い気がする。

「ど、どうだ？／＼」

「う、うん。お、おいしいよ？／＼」

「な、ならいいか・・・／＼」

・・・辛い！これは辛い！これバレたら俺はどうなる！？・・・多分死ぬ。

「じゃ、じゃあ、その、次は・・・ご飯が・・・いいな・・・／＼」

「あ、ああ・・・／＼」

箸で女子一口分ほどの量（俺感覚で）をつまんで、シャルルの口へと運んでやる。

「・・・あーん・・・」

「ん・・・／＼」

・・・これが雛に食べ物を与える親鳥の気持ちなのか？よく分からん。

というか、ちょっと慣れた。

「つ、次は和え物がいいな・・・／／／」  
「わ、わかった・・・／／／」

こうして結局最後まで『はい、あ ん』で俺が食べさせることになったが、最後の方は殆ど無言になっていた。

・・・今日は色々ありすぎて疲れた・・・。疲労がたまりにたまっていたのか、俺は布団に潜り込んで数秒後、眠りに落ちていった・・・

Side Laura (三人称パターン)

「・・・」

誰もいないアリーナのピットに、一人の少女が立っていた。

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。

(・・・織斑一夏・・・。教官に汚点を残させた貴様を絶対に私は認めない・・・。絶対に排除する。どのような手段を用いても・・・)

そして、同時にこちらも思っていた。

(私の障害に成りうる男、二崎奏・・・。貴様も排除の対象だ・・・)

# 2 1 少女の甘え（きゅっしょに あたった！ こっかは ばっぐんだ！）

（次回予告）

放課後勃発した代表候補生同士のバトル。

次第にそれはただの暴虐へと化していった。

少年は無謀にも突撃をした・・・

次回、# 2 2 Blue Days / Red Switch

その暴虐に、響き渡るは少年の咆哮・・・



#22 Blue Days/Red Switch (前書き)

ついにラウラと奏がぶつかると・・・!?

そんな風雲急を告げそうな#22、どつどつぞ!

#22 Blue Days / Red Switch

月曜の朝。

「・・・なんだ？」

「・・・さあ・・・？」

教室に向かっていた俺とシャルル（男子モード）は、廊下にまで聞こえる声に首を傾げた。

「本当だつてば！！この噂、学園中で持ちきりなのよ！？月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき」一夏がどうかしたのか？「きゃあああああっ！！？」

・・・何なんだ、ホントに・・・

音源がクラスだったから入って普通に声かけたら悲鳴が返ってきたぞ？

「で？なんの話だったんだ？一夏の名前が挙がってたが・・・」

「う、うん？そうだったけ？き、気のせいじゃないの？」

「さ、さあ？どうだったかしら？き、気のせいじゃありませんの？」

鈴もセシリアもあははうふふと言いながら話を逸らそうとした。・  
・  
なーんか・・・なあ・・・？

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！私も自分の席につきませんとー！」

どこかよそよそしい様子で二人はその場を離れていった。

それに便乗してる・・・と言っていい感じで、何人が集まっていた  
女子群も同じように自分のクラス&席に戻っていった。

「・・・一体何だったんだ・・・？」

「ち、さあ・・・」

そして放課後。

「ふにい〜・・・」  
「えうえう〜・・・」

真琴とルティアが半泣きになってノートを写していた。

移しているノートは通称『俺ノート』。俺が作っているから、という理由で真琴が勝手に名付けた、真琴曰く『テスト必勝ノート』だ。

ちなみに内容は現国。

「じゃあ真琴とルティア、終わったら部屋にノート届けてくれ。暇だし一夏見に行ってくる。」

「ふにゆう〜・・・」

「あつう〜・・・」

・・・なんか変な呻き声をあげていたが気にしない。

さて、今日は第三アリーナだっけか？

「・・・なんだ？何かあったのか？」

「あ、奏！」

「おう、シャルルに筭。おまけに一夏。」

「俺はおまけか！？」

「気にするな。俺は気にしない。・・・それはどうでもいいとして、  
何があったんだ？」

シャルルたちと偶然合流して、事の顛末を聞いてみたが、あっちも  
何も分からないらしい。

「こつちで先に様子を見に行く？」

シャルルが観客席へのゲートを指す。

・・・そっちの方がピットに入るよりも早く様子を見れるか・・・？

「しかし、誰かが模擬戦をしているようだが、それにしても様子が・・・」

ドゴオンッ！！

『っー！？』

「鈴！セシリア！！」

ちよつど見たときには、鈴が地面に叩きつけられていた時だった。

「・・・なんだよこれ・・・。ただの暴虐じゃねえかよ・・・！」

俺が呟いた時、セシリアがラウラに向けてゼロ距離でミサイルピットを射出させた。

が・・・

「無傷!？」

終わりか？ならば・・・私の番だ。

言つと同時に瞬時加速で地上へと移動、鈴を蹴り飛ばし、セシリアに近距離からの砲撃。

更にワイヤーブレードが飛ばされた二人の体を捕まえてラウラの下に寄せられた。

ここからは、一方的な力による暴虐だった。

ISアーマーが破壊されていくも、ラウラの拳が止まることはない。

そして、無表情の顔が確かな愉悦に口元を歪ませたのを見た時、俺は・・・

「その手を止めろや糞野郎がああああああっ!!!!」

セラフィムを展開、同時に粒子砲を結合して構え、鈴とセシリアに当たらない位置へと放った。



それでバリアーが破壊。

「奏！止める！！」

「無理だ！無茶をするな！！」

「夏と筭の制止がかかるが、そんなこと聞いてられるかよ！！」

「うおらああああああああああああ！！！！！！」

鈴とセシリアを掴んでいるラウラへと、銃剣を突き出す。

「……貴様も専用機持ちだったとはな……。だが、感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな……」

エネルギー人が届くその寸前で、俺の体が止められた。眼帯をしていないラウラの右目が、直線状に突っ込んできた俺を正確に捉えていた……

「……くそ……、届かなかったか……！指すら……動かせねえってか……」

「やはり貴様も敵ではなかったな。この私とシュヴァルツエア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。……消える。」

傍から見ればピンチ。が。

「……くははは……」

「何が可笑しい？」

俺は笑っていた。

「……これで全力じゃねえ、つつつたらどうするよ？」

「……何？」

大型カノンが砲口を向けたとき、最大の挑発をしてやった。

俺のセラフイムには切り札がある。それも、一つだけじゃなく、複数。

奏っ！

遠くからシャルルの声がした。

「誰も来るな！巻き添え食らいたくなかったらな！！……さて、俺と一緒に……地獄へ行こうぜえ！？」

「この状況で何が出来る？……見物だな。」

・・・やってやるうじゃねえか。

「単一仕様能力『鎮魂の殲滅翼』、発動承認・・・、エネルギー翼による連撃、待機状態にして設定・・・！」  
「っ!?!」

エネルギーをまとった翼がラウラを取り囲む。全方位でだ。

へっ、ざまあみやがね。大方急速にシールドエネルギーが減少して  
ることに驚いてやがんだろうよ？

「責様っ・・・」

他に意識を持っていかれた為か、硬直が解ける。

その隙に俺は鈴とセシリアを連れて一夏の元へ。

「一夏、箒！二人を保健室へ連れて行け！気を失ってるだけだが危  
なくないとは言いきれない！！」

「あ、ああ！！」

「わかった！」

一夏と箒が二人をかついでいなくなって・・・

「奏、僕に協力できることってない!？」

「今はそこにいるだけでいい! ISを展開したら速攻で戦闘不能になる!！」

それだけ言っただけ俺はラウラに向き直る。

「言ったよな・・・?俺と一緒に地獄へ行こうぜ、ってなあっ!！」

「ほざけ、雑魚がつ!！」

お互いに剣がぶつかろうとした時・・・

ガギンッ!

金属同士が激しくぶつかり合う音が響いて、その影響で動きが止まる。

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる・・・」

「千冬さん!？」

止めたのは予想外の人物だった。普段と同じスーツ姿で、ISどころかスーツすら装着していないまま、IS用近接ブレードを持ち、それを補佐なしで軽々と扱っていた。

「模擬戦をやるのは構わん。・・・が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になれば教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか？」

「教官がそう仰るのならそれで。」

素直に頷いて、ラウラはISの装着状態を解除する。

「二崎、お前もそれでいいな？」

「釈然としねえが・・・上等だ。構わねえ。公の舞台でその天狗鼻へし折ってやらあ・・・」

俺もISを解除する。

「教師への返事はもう少ししっかりとしろ。・・・では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する！解散！！」

手を叩いて千冬さんが解散を促した。それはまるで銃声のようだった。

「・・・奏、大丈夫だった？」  
「平気だ。寧ろまだやり足りねえ、って気分だ・・・」

戻ってきた所でシャルルと会う。

やっぱり心配してくれていたみたいだ。

「でも、無茶ばかりしたらダメだよ？」

「・・・目の前で友人がやられてるのを黙って見てられるわけねえ  
だろうがよ・・・」

「それは・・・そうだけど・・・」

「とりあえず二人の状態を見に行こうぜ。それと今回の顛末を話しておかねえとな。」

「そ、そうだね！」

鈴とセシリアが運び込まれた保健室まで二人で向かうことにした。

おまけ

「・・・お、終わったあゝ・・・」  
「・・・う、腕が痛い・・・」

どうにかノートを映し終わった二人が机に突っ伏していた。



#22 Blue Days/Red Switch (後書き)

〈次回予告〉

ラウラとの戦いは学年別トーナメントへと持ち越された。

保健室では、包帯を巻かれた二人が不満を漏らす。

部屋では事件が起きた。

次回、#23 Blue Days/Red Switch After

奏の体は持つのだろうか・・・？

今回、『』ではじまったのに、『』で終わる箇所がありました。あれは仕様です。話していたのは一人でしたが、悲鳴を上げたのは複数だったから、です。

#23 Blue Days/Red Switch After (前書き)

騒動が起きてからの話です。

奏にはまだまだ不幸な目にあってもらいますよ・・・

『……………』

保健室についた時、最初に目についたのは打撲の治療を受けたと思われ、包帯が巻かれた鈴とセシリアがむっすーとした顔で視線を明後日の方向へ向けていた姿だった。

「べ、別に助けなくても良かったのに……」

「あ、あのまま続けていれば勝っていましたわ……！」

強がりを言うなよお前ら……

570

「お前らなあ……。はあ……。でもまあ、大した怪我じゃ無くて安心したぜ……」

「こっ、こんなの怪我のうちに入らな……。いたたたっ!!！」

「そもそもこっやって横になっていること自体無意味……。つうっつ!!！」

「お前らなあ……。命があつてよかった、とか思わねえのか？あれ下手したら死んでたぞ？骨折れて……」

全く……。怒り心頭の怪我人二人。どうしたものか？

「好きな人に格好悪いとこ見られたから、恥ずかしいんだよね。」  
「ん？」  
「どういうことだ？」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。俺はシャルルが入ってきてから扉にもたれかかるように立った。

好きな人？は？

でもそんなふうだったのは俺と一夏だけで、鈴とセシリアにはばっちり聞こえていたらしい。

「なっ、ななな何を言ってるのか、ぜぜぜ全っ然わかんないわね！  
ここっ、これだから欧州人（ヨーロッパ人）って困るのよねえっ！  
！／／／」  
「べべっ、別に私は無理なんかしてませんわっ！！／／／」

二人とも顔真っ赤でまくし立てて……。何なんだ？シャルルは一体何を言ったんだ？まあ、大方一夏関係だろうけど。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」  
「ふ、ふんっ！／／／」  
「不本意ですが頂きましょうっ！！／／／」

だが、ここでかーなーり気になったことが。

「フーかき、一体全体なんでラウラと二対一をやることになったんだ？」

『ブツ！！』

うわ、吹いた。

「げほっ、げほっ！そ、それは・・・その・・・／＼／＼」

「けほっ、ま、まあ、何と言いましようか・・・けほっ！お、女のプライドを・・・侮辱されたから・・・ですわね・・・／＼／＼」

プライド、ねえ・・・？まあ、なんかの挑発行為を受けた、ということとは間違いないな。

「あっ！もしかして一夏のこと・・・」

シャルルが何か言いかけた時、鈴とセシリアが口封じで取り押さえた。

「アンタってほんつと一言多いわねえっ！...」

「そっ、そうですわ！まったくですっ！...」

怪我人がそんな暴れて大丈夫かよ・・・

「二人とも止めとけて。怪我人のくせに動きすぎだぞ？」

あ、一夏が二人の肩に手え置いた。

『ひぎゅうつうつつ！！』

・・・やっぱりな。あれは痛いだろ。打撲だったはず。置かれたら痛いって。

『うつ・・・ぐうつ・・・』

「ほら、やっぱり痛いんじゃない。バカだなあ。無理するなって。」

「バカってなによあ、バカってえ！バカあつ！！」

「一夏さんこそ大バカですわっ！！」

「バーカバーカバ　カっ！！」

・・・元気すぎるだろうがよ・・・お前らもうちよい行動に自重しろっての・・・

「何なんだよお前ら・・・」



S i d e   I c h i k a

保健室の扉がいきなり吹っ飛んだ。もたれていた奏は避けられるわけもなく……

ドアと共に保健室の窓に引っかけたぶら下がる形になった。女子からは見えない位置にいる。

というか、これはマジだ。初めてドアが吹き飛ぶという光景を目にしたぞ……。こういうことってテレビ以外であり得るんだな……

『織斑君！』

『デユノア君！』

「あれ？二崎君は？」



入ってきた、なんて生やさしいものじゃない。文字通り雪崩れ込んできたのは数十名の女子生徒。

ベッドが五つもある広い保健室なのに、室内はあっという間に埋め尽くされた。

しかも俺とシャルルを見つけるなり一斉に取り囲み、バーゲンセールの取り合いのごとく手を伸ばしてきた。

・・・うわぁ、軽いホラー映画だぞ、これは・・・

人垣から伸びてくる無数の手、手、手。・・・普通に怖いわ。

「な、な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたの、皆・・・ちよ、ちよっと落ち着いて!？」

『これ!!!』

状況が読み込めない俺達に、バン!と女子生徒一同が出してきたのは、学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「な、なになに・・・?」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは・・・』」

「ああ、そこまでいいから！とにかくっ！」

そしてまた伸びてくる手。・・・ホントに怖いわ！！

『私と組もう、織斑君！！』

『私と組んで！デユノア君！！』

『ここにいるはずの二崎君！私と組もう！！』

どうしていきなり学年別トーナメントの仕様変更があったかは分からないが、ともかく今こうしてやってきているのは全員一年生の女子だ。リボンの色で分かる。

学園内で三人しかいない男子ととにかく組もうと、先手必勝とばかりに勇み迫ってきているのだろう。

そんな時。

「・・・ぐおおおお・・・」

後ろから呻き声が。聞いたことある声だ。

その声は、突然怒声に変わった。

「お前らなあ！俺を殺す気か！？（ガン！！）もうちよつと上行つてたら俺死んでただぞ！？バカか！？お前ら揃いも揃ってバカか！？」

まくし立てるように怒鳴る奏。・・・うん。確かにもうちよつと上行つてたら落ちて下手したら死んでた。よく引つ掛かってたな・・・

「・・・で！？この騒ぎはなんだよ！！学年別トーナメントがどうとか聞こえたけどな！」

「あ、あのね？学年別トーナメントで二人組制が採られたからそれで組もうって・・・」

「俺はシャルルと組む！以上！」

『えっ！？』

S i d e K a n a d e

ちなみに話はきっちり聞いていた。あまりにも自己中心的な女子群  
についてプツンしてしまっただけだ！悪いか！？

んで、俺の発言にシャルルまで啞然としてる。

「だから・・・もう一回行けえよー夏あつー！！」  
「またかああああああ・・・」

A g a i n ー夏ミサイル！！立ち位置もばっちし、上方修正問題な  
し！！

『織斑君がそっち行っただわ！！』  
「皆の者、出会え出会え　　！！」

・・・また地鳴りを立てて女子群が退散した。・・・よし、これで

OK。

「ちょ、ちよつと奏さん!?なんてことしてくれますの!?!」

「そ、そつよ!一夏と組むのはあたしなのよ!?!」

また怒鳴る二人。 . . . いい加減にしないと怪我に響くぞ?

「ダメですよ。」

. . . おろ、山田先生登場。

鈴とセシリアは突然の登場に目をぱちくりさせていた。

「お二人のISの状態をさつき確認しましたが、ダメージレベルがCを超えています。当分は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ?ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません。」

. . . まあ、確かにな。これで落ち着いてくれるかはわかんねえが . . .

「うっ . . . ぐっ . . . !わ、わかりました . . . 」

「不本意ですが . . . 、非常に、非常にっ!不本意ですがっ!トー

ナメント参加は辞退します・・・」

お、あっさり引き下がった。

「分かってくれて先生嬉しいです。ISに無理をさせるとそのツケはいつか自分が支払うことになりますからね。肝心なところでチャンスを失うのは、とても残念なことです。あなた達にはそうなってほしくありませんからね。」

明らかに納得していないようだが、トーナメントに参加できないことは理解していた。

ちなみにこれはIS基礎理論蓄積経験注意事項第三項だ。『ISは戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験に破損時の稼働も含まれ、ISのダメージがCを超えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまう為、逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある』だ。

「ま、二人とも今は体を休めとけよ？仇くらいは討ってやるからよ！」

「頼みましたわよ、奏さん！」

「絶対、絶え　　っ対に！あいつに勝ってよね！！」

「ああ、約束したぜ！」

鈴、セシリアと仇討ちの約束をし、俺とシャルルは寮に帰った。

「あ、あのね、奏……」  
「ん？」

とりあえず夕食を済ませた後部屋に戻るなり、シャルルが口を開いた。

……なんか言い方に勢いが……

「あの、遅くなっちゃったけど……、助けてくれて……ありがとう……」

「何のことだ？」

「ほ、ほら、保健室で。トーナメントのペアを言い出してくれたの、凄く嬉しかった。」

……あー、あれか。

「ま、気にするな。事情を知ってるのは今のところ俺とリースだけだし。で、リースがいない時どうにか出来たの俺だろ？それにリースと組んでみる、女子群に質問攻め食らうぜ？」

「あ、あー……。あ、で、でも、それが自然に出来るのは、奏が優しいからだよ、きつと。誰かのために自分から名乗り出られるなんて、凄く素敵なことだと思うよ。僕は凄く嬉しかった。」



・・・さすがブロンド貴公子。俺には真似できねえわ。

「・・・ところでシャルル。俺かりーすしかない時は無理に男子口調にしなくてもいいぞ？」

「う、うん。僕・・・じゃなかった、私もそう思うんだけど、ここに来る前に『正体がばれないように』って、徹底的に男子のしぐさや言葉遣いを覚えさせられたから、すぐには治らないかも・・・」

またか・・・。「覚えさせられた」ってホントに道具としてしかみてないんだな・・・

「で、でも、その・・・、やっぱり女の子っぽく・・・ない・・・かな？」

シャルルがなんか落ち着かなそうに視線を泳がせて、遠慮がちに聞いてきた。

「一人称が『僕』と言うとかそういう類か？」

「そ、そう。女の子っぽくないんだったら、せめて奏と二人っきりの時だけでも普通に話せるように頑張るけど・・・」

「・・・無理する必要はないと思うな。現実にはいわゆる『ボクっ子』なんてのもあるし。そう考えたら大丈夫だと思うぞ？お世辞抜きで言うけど、無理に女の子っぽくしなくてもシャルルは可愛いと

思うし。」

「か、かわつ・・・！？僕が？ほ、本当に！？ウソじゃなくて！？お世辞じゃなくて！？／＼／＼」

どうしたんだ？急に落ち着きがなくなつてめちゃくちゃに聞いてくるぞ？

「俺がウソ言うような人間に見えるか？」

「み、見えないけど・・・」

「そういうことだ。マジ。」

「そ、そう・・・なんだ・・・。じゃ、じゃあ、別に・・・いいかな。変えなくても・・・／＼／＼」

・・・何がどうしたのか分からないけど、別にいいことになったらしい。まあ、それでいいか。

「もう寝るつもりで着替えるか？色々あってまだ着替えてねえし。」

・・・あ。

「・・・悪い。俺一旦外に出てる。」

「えっ？どうして？」

「シャルルは・・・その・・・アレだ。は、裸見られたいのか？」

「え、えと・・・み、『見て！』なんていうことはないけど・・・」

男同士なのに部屋から出てたら怪しまれるよ?」

うぐ。

「そ、それに奏に悪いし……、ぼ、僕は……気にしないから……  
。ノノノ」

「いやいやいや、俺が気にする……そうだ、洗面所の方に行つて  
PSPやってるから終わつたら声かけてくれ。」

「だ、だからそんなに気を遣わなくてもいいつてば!ほら、普通に  
しててよ。それに奏も着替えないといけないでしょ?ね?」

とりあえず部屋から出る必要はなくなつたらしい。が、シャルルが  
どうしてこんなに一生懸命なのか理由が知りたい。

けどなあ……。人の好意を無下にしたくないんだよなあ……

「……わーったよ、俺も着替えるよ。」

「うん、そうして。」

シャルルが笑みを浮かべた。さっきまで一生懸命に話していた為か、  
頬が薄紅色になっていた。

「さーてと……、そろそろ半袖に変えるかな……?えーと……  
着替えて着替え……お、あつたあつた。」

「……………」

「どうした？俺の顔に何かついてるか？」

さつきは『部屋から出なくていい』ってあれほど豪語していたのに、なぜかシャルルは着替えようとしなない。

「か、奏、そんなにじっと見られていたら着替えられないよ……………」  
「あ、悪い。スマン。」

軽く返して背中を向ける。

……………なんか部屋引越す前の状況を思い出すな……………

「じゃ、じゃあ、着替えるね……………」  
「あ、ああ。」

不意に声をかけられたから変な返事になった。

(……………また女子特有の匂いってやつか……………？甘い匂いが……………  
辛い……………)

着替えながらそう考えていた。

「か、奏？手が止まってるよ？」  
「えっ？あ、ああ。ボケっとしてた。」

上着は既に肌着だけになっていた。が、そこから先が止まっていた  
ようだ。

「……………（ジー…………）」

…………視線？

「シャルル？」

「ふあっ！？な、なにかなっ！？／＼／」

…………なんかすっげえ驚いた声でした。明らかに動揺してる。

「俺の勘違いなら悪いけど、もしかしてこっちを見てないか？」

「そ、そんなことはないよ！？／＼／」

「そ、そうか…………。悪かった。」

全力否定。…………じゃあさっきの視線は一体何だ？

「……………(ジー…………)」

まただ。

「……………覗きは犯罪だぞ。」

「ふえっ!?!い、いやっ、ぼ、僕はそんなんっ……………きゃんっ!?!」

狼狽したシャルルの声が小さな悲鳴に変わった。

「どうしたー? 大方ズボンでも脱ぎ損ねて転んだか?」

「いたた……………。そ、そう。ズボンに足が引っ掛かっちゃった……………」

ちなみにシャルルが転んだ間に俺はズボンの履き替えが終わっていた。

が、そこで…………

「大丈夫か?」

と、振り向いてしまった。

『あ。』

シャルルはズボン以外は全て下着、しかも（当然だな）女物のパンツだけの状態だった。

・・・マズい！俺にとってマズいぞ！？

「きゃ・・・／＼／」

「悲鳴はダウトオ

ッ！！」

ここで女の悲鳴が上げられたら俺たち二人が揃ってまずい状況になる！！

突発的にシャルルの口を塞ごうと走り出していた。

結果、シャルルの悲鳴は止まった。

が・・・

「くっ・・・！！」

ぶつかるとのを阻止するため無理に体を捻ったために足を滑らせ・・・

ゴッ！！

「・・・おっ・・・」

壁に思いきり頭をぶつけた。

そのまま意識がブラックアウトした・・・



S i d e C h a r l e s

「……………」

(気絶した奏をとりあえず介抱してベッドに寝かせたシャルルは、まだ顔に赤みが残っていた。その表情には怒りと恥ずかしさが、そしてその中に嬉しさが垣間見えるという、複雑怪奇なものだった)

「ま、まったくもうっ！奏ってばやり方が大胆なんだから……」

(さっきのこと(たまたま転んでちょっと大変な体勢の状態を見られたこと)が意図的でないことは分かっていた)

「ちゃ、ちゃんとやってくれれば、僕は別に……」

……ぼ、僕は何を言ってるんだろ！？／／／

ああもうっ！寝ちゃおうっ！うん！それがいいね！！

(奏を視界から外し、照明を落とそうと立ちあがった時、シャルルの頭にふつとあの時の言葉が浮かんだ)

『じじじいるよ』

・・・初めて、そんなことを言われた・・・

あの時・・・、初めて自分が誰かに必要とされた気がした・・・

「・・・奏って、ずるいね。」

だって、僕の心をこんなに揺り動かすんだもん・・・

(顔を近づけた為、今は眼と鼻の先にいる)

これじゃまるで、『眠れる森の美女』みたいだ。けど、役を間違えてるよ？

(それからしばらく、シャルルは奏を近くで見つめて、優しい表情を浮かべた。)

そして、額にキスを落とした)

「おやすみ、奏・・・」

心臓の鼓動が聞こえそうなの、火照った体を抱きながら、シャルルは長い夜を過ごしたのだった・・・

#23 Blue Days/Red Switch After (後書き)

〈次回予告〉

ついに始まった学年別トーナメント。

第一回戦は一年の三強全てが揃い踏み豪華な舞台となった。

因縁絡むこの試合に、開戦のブザーが鳴り響く……

次回、#24 Find out my mind Chapter  
r1 開戦、学年別トーナメント

この戦いの行き着く先は……？

学年別トーナメントです！

さあ、注目のカードは一体・・・！？

六月最終週、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色に染まる。

その慌ただしさは想像以上で、今こうして第一回戦が始まる直前まで全生徒が雑務や会場整理、来賓誘導を行っていた。

それからようやく解放された生徒は急いで各アリーナの更衣室へと走る。ちなみに男子組は例によって無駄に広い更衣室を貸し切り状態にしている。

「……しかし……、凄いなこりゃ……」

一夏が更衣室のモニターから観客席の様子を見る。

そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔触れが一堂に会している。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、トーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ?」

「ふーん……、ご苦労なこった。」

「多分俺達には否応なしにチェック入ると思うけどな?」

あまり興味なさげに返す一夏と、ちょっと皮肉を込めて言う俺。

「やっぱり、二人ともボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね。」

「まあ、な。」

「当たり前だろ？ 仇討ちの約束してんだからよ。」

そう、鈴とセシリアは結局トーナメント参加の許可が下りず、今回は辞退せざるを得ない状態になっていた。代表候補生であり、専用機持ちの二人には立場が悪くなっちまうだろうな……

「……あの二人には辛いだろうな。実力を試せず、ただ傍観するだけしかできないんだからよ……」

例の騒動とその結果を思い出し、俺は無意識に手を握りしめていた。あまりに力が籠っていたらしく、シャルルがさりげなく重ねた手でほぐしてくれた。

「あまり感情的にならないでね？ 彼女は……多分だけど奏と同じ三強の一角を担ってると思うから……」

ペアを組むと分かってから、同室と言うのも手伝って、俺とシャルルはかなり親しくなった（ちなみに俺がゲームしている所をよくシャルルは当たり前のように見るけど、俺はシャルルに進めることは

一切しない。そういうのは強制するのはよくないと思う。うん。

大体はシャルルが俺の気持ちや考えを汲んで気を利かしてくれているが、最近は何となく俺もシャルルのことが分かってきた・・・はず。

「そっいえば一夏、お前ペアどうした？」

「リースに頼んだ。箒にペア頼もうとしたら逃げられて、ちようちよ通りがかったリースに相談したら『じゃあペアになるっか？箒は逃げちゃったし、セシリアたちはダメでしょ？一時的ってことで、どう？』ってね。」

やっぱりリースは優しいな・・・

「そろそろ対戦表が決まるはずだよな。」

どういう理由だかなんだか知らないが、突然のペア対戦への変更がなされてから従来まで使っていたシステムが正しく機能しなかったらしい。本来前日までに出上来がるはずの対戦表も、今朝から生徒たちが手作りの抽選クジで作っているとか。

「・・・お、対戦相手が決まったみたいだな。・・・はっ！？」

「えっ！？」

「おいおいマジかよ・・・」



出てきた文字を見て、一夏とシャルルはぼかんとした声を同時に上げ、俺は果てしなく困ったような感じの声が出ていた。

「……まるで即興パーティーみたいじゃねえかよ……」

一回戦第一試合の組み合わせは……

二崎奏&シャルル・デュノア

VS

ラウラ・ボーデヴィツヒ&ルシエラ・アイセス

と、通称『一年最強軍団』が揃い踏みするカードになっていたのだ。

ちなみにその隣の第二試合の組み合わせは……

織斑一夏&リース・セストナ

V S

エリイ・セストナ&ルティア・セストナ

見事にセストナ姉妹の大喧嘩という形に、一夏が巻き込まれるという謎のパターンとなっていた。

S i d e L u c i e r a

対戦表が出た時、私は何も言わなかった。

話には聞いていたけど、あの黒ウサギの隊長さんとペアを組むことになるとは思わなかった……

けれど、相手は二崎君。今度こそ決着をつける時みたいね……

ペアとしては最悪。話は合わないし、力が全てだと思ってるその姿は……

過去、代表候補生になった直後の私と被って見えた。

（観客席は満員御礼。理由は二つ。初の男子が二人も揃って出ることで、IS学園一年の『三強』が揃い踏みしているということもあるからだ）

「一回戦で当たるとはな。貴様を待つ手間が省けたというものだ。」  
「そりゃどうも。俺だって同じ気持ちだからよ。」

試合開始まで五・・・四・・・三・・・二・・・一・・・

『叩きのめす!!』

試合開始と同時に俺は粒子砲を構えた。

「だあらっしやああああああっ!!」

だが相手は代表候補生、二人とも避けた。

「シャルル、分かってるな！先にラウラを落とす作戦で変更は無し！ルシエラの妨害があった時点で優先順位を変更、ルシエラを落とす！」

「了解！」

「それとAICとルシエラの単一仕様能力には気をつける!!」

「わかってる！」

AICとは、シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略で、慣性停止能力のことだ。

ISは基本、PCI、つまりパッシブ・イナーシャル・キャンセラーで浮遊や加速、停止をしている。

それを止めてしまう感じだと思つと楽かもしれない。

「開戦直後の砲撃か。しかもかなりのエネルギー消費をするだろう砲撃。無謀だな。」

「無謀で結構！まずはテメを・・・舞台から脱落させたらあつ！」

AICの弱点は範囲が限られていることはわかる。後は他に何かあるはずだ、と俺は踏んでいる。

「そうやってこそそと遠くから攻撃することしか能がないのか？情けないな。」

「情けなくて結構。俺の基本兵装はこれとな・・・っ！」

粒子剣を生成、その剣状部分を遠心力で射出する。

「させないわよー！」

ルシエラが入り込んでくるが・・・

「こっちこそ、させないよ！」

シャルルがそれを妨害。

「奏、やっちゃって!!！」

「いけっ、コンフューズ・ショットっ!!！」

「っ!!！」

射出した剣がブーメランとして機能すると思ってたんだろうな。ザマミロ。コンフューズ・ショットは粒子砲を散弾砲に強制的に変える技なんだよ。あの剣はそのコンバータみたいなものだ。

黒炎でラウラの姿が隠れるが・・・少しはこれで時間が稼げるはず・・・!!

「シャルル！作戦B！一気に蹴散らすぞ！」

「OK！」

「二対一・・・、いいわよ、かかってきなさい!!！」

こうしてルシエラ対俺&シャルルが始まるうとした・・・が。

「嘗めるな！」

ラウラの復帰が速かった。

「シャルル、予定大幅変更！一人一殺で行け！」  
「わ、わかった！」

シャルルに大幅変更をかけた予定を通そうとしたが・・・

「ごめんなさいね、あなたの相手をしている暇はないの！」  
「しまっ・・・」

シャルル、脇を抜かれる。

「奏、ルシエラさんがそつちに・・・」  
「分かってる！今度こそ決着を・・・」

と言いかけた時・・・

「邪魔だ！」

ラウラが突然俺に向かっていたはずのルシエラを後ろに放り投げた。

「なっ!?!」

「あなた・・・っ!」

ルシエラは着地するまでもなく、地を転がる。

「銃剣だけなら私の方が数の差で有利だな!」

「銃剣だけだと思っなっっの!」

後ろのシャルルもワイヤーブレードによる牽制を受けて引き離されていた。

《シャルル、無事か!?!》

《大丈夫!奏こそ、どうにか掻い潜ってサポート入るから!!!》

《いや、大丈夫だ。分断されちまったがどうにかやるぞ!》

《うん!》

プライベート・チャンネルで短くやり取りをして、一人一殺作戦をとることにした。

シャルルには荷が重いかもれない。相手は『三強』の一角なのだ。



だが、ここでシャルルが善戦してくれた（ルシエラを倒した）場合、こちらが完全に有利になる。ラウラは一对多に特化した戦い方だ。つまり、自分側が複数の状態での戦いを想定していないということだ。

先にルシエラが倒れてしまえば、こちらが数では有利になる。二人組は一＋一で表面上の結果は二だが、深層的な結果は必ずしも二とは限らない。

「相手が奏じゃなくてゴメンね。」

「・・・いいわ。まずはあなたを倒すだけだから！」

その後は銃撃戦の応戦だった。ガトリングと『レイン・オブ・サタデイ』が火を噴きあい、お互いに一進一退の攻防を繰り広げていた。

「先に片方を潰す戦法か？まったくもって無意味だな。」

「はっ、おめでたい頭だなテムエはよ。相方を頭数に入れてないなんてな・・・」

「・・・その減らず口、二度と叩けないようにしてやる！！」

「来いよ！その自信を・・・根本から押し折ってやらあ！！」

ラウラが突っ込んでくる所を上空、後方へと一気に飛翔していく。

「やはりハツタリだったようだな！言った側から逃亡か！？」

「逃亡じゃねえよ・・・。これがAIC突破の大技だ！！単一仕様

能力『鎮魂の殲滅翼』発動、エネルギーコンバートで風斬にエネルギー付与、シールドエネルギー消滅能力を追加・・・こっちのシールドエネルギーなんて糞喰らえだああああああああっ！！！！」

Side Rin & Cecilia

「あのバカ、大技使いすぎよ！？あんなんでAICが突破できるわけが・・・」

「いえ、鈴さん！突破できるかもしれませんわ！！！」

「そんなわけが・・・えっ！？い、イグニッション・ブースト『瞬時加速』とまた違う加速・・・！？なんか複数に見えるんだけど！？」

Side Kanade

「ただの瞬時加速・・・っ!?!」

「ただの瞬時加速じゃねえ!その発展延長線の技術スキル、『残影加速』  
レムナンツ・ブ スト)だ!」

残影加速。俺がこのトーナメントまでに完成させた大技の一つ。最大速度によって発生した金属の表面剥離によって質量のある分身を作り、その全てで相手に攻撃するという下手すりゃ自滅に等しい大技だ。「こっち向いてていいのか?あの分身は全て・・・質量があるんだぜ?」

振り向きざまに単一仕様能力は切る。使いすぎは燃費が悪いからな・

「・・・っ!」

すぐさま停止結界を発動するも、相手(分身)は三体。

「本体も合わせて四体ってなあっ!!!」

(一方・・・)

「あなたもなかなかやるわね・・・」  
「そちらこそ・・・」

こちらはこちらで、実力伯仲、と言える展開となっていた。

素でお互いに攻撃が当たらないのだ。

ルシエラはガトリングのため、止まって撃たないと照準が定まらない。が、射撃と離脱のタイミングがばっちり、シャルルの攻撃は悉く回避される。

シャルルは相手に攻撃されなければいいため、一方的に攻めればいいのだが、相手は『三強』の一角、そういうこともできない。攻め続けることはできず、回避に専念することもしばしば。

「ゴメンね、そう長く時間をかけている余裕はないんだ・・・！」  
「お互い早期決着を望んでいる、というわけね・・・！」

「がっ……」

『残影加速』によって生まれた分身による攻撃が、背後から決まった。

「もう一発……食らいやがれ！！至近距離ならAICも使えないよなあっ!？」

「がはっ!！」

停止結界の弱点その二、対象一つに集中しないと使えない。これもビンゴ！

俺はラウラの腹を一撃殴り、続けざまにもう一撃振り抜きで吹き飛ばす。

壁際まで吹き飛んだラウラは、そのまま地に倒れ伏す。

(瞬間、会場に歓声起きた)

「まだまだ！まだ終わらねえ！テメエには一度、一方的に殴られる痛

さと怖さを教えてやらねえとなあつ!」「  
「くっ……」

起き上がるラウラにコンバータ解除した風斬で刺突。

そのまま斬り上げて斬り下ろして……

「そのついでにその大型兵器、破壊させてもらっぜ!」

「貴様……っ! 貴様あああつ!」

「……これでチェックメイトだ。悪いな、これが戦いだ!」

ゼロ距離で粒子砲の引鉄を引く。

ラウラのISに紫電が走る。

「あの一撃でまだ耐えるか……。ならもう一度……っ!？」

瞬間、異変が起きた。

Laura inside...

(こんな・・・こんな所で負けるのか・・・!? 何一つ出来ずに・・・何も果たせずに・・・、私は・・・!)

相手の力量を、技術を、全てを見誤ったのは間違えようのないミス。しかし・・・それでも・・・

(私は・・・負けれない! 負けるわけにはいかない・・・!)

・・・ラウラ・ボーデヴィツヒ。それが私の名前であり、識別上の記号。

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

・・・暗い、暗い闇の中に私はいた。

ただ戦いのためだけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。

知っているのはいかにして人体を攻撃するか、という知識。分かっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるか、という戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

私は優秀だった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。

それがある時、世界最強の兵気……ISが現れたことで世界は一変した。

『ヴォーダン・オージェ』……擬似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下における動態反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理のことを指す。そしてまた、その処置を施した目のことを『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』と呼ぶ。

危険性は全くない。理論の上では、不適合も起きない……はずだった。

しかし、この処置によって私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。

この『事故』により私は部隊の中でもIS訓練において後れをとることになる。

そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

世界は一変した。……私は闇からより深い闇へと、止まることなく転げ落ちていった……

そんな私が、初めて目にした光。それが教官……織斑千冬との出会いだっただ。



『ここ最近の成績は振るわないようだが、なに、心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな。』

その言葉に偽りはなかった。特別私だけに訓練を課したということにはなかったが、あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はIS専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

しかし、安堵はなかった。自分を疎んでいた部隊員も、もう気にもならない。

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に・・・憧れた。

その強さに、その凛々しさに、その堂々とした様に。自らを信じる姿に、焦がれた。こうなりたいと、この人のようになりたいと思っ  
た・・・

そう思ってから私は、教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけて話しに行った。

いや、話など出来なくても良かった。ただ側にいるだけで、その姿を見つめるだけで、私は体の深い場所からふつつつと力が湧いてくるのが感じられた。

それは、『勇氣』という感情に近いらしい。

そんな力があつたからだろうか、私はある日聞いてみた。

『どうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれますか？』

その時・・・ああ、その時だ。あの人が鬼のような厳しさを持つ教官が、僅かに優しい笑みを浮かべた。

私は、その表情に何故だか心がちくりとしたのを覚えている。

『私には弟がいる。義理の弟のようなものもいる。』

『弟・・・ですか・・・』

『あいつらを見ていると分かる時がある。強さとはどういうものなのか、その先になにがあるのか、をな・・・。そして、力を持つ、ということがどういうことなのか、を改めて考えさせられる・・・』

『今はそれでいいさ。・・・そうだな、いつか日本に来ることがあるなら会ってみるといい。・・・ああ、だが一つ忠告しておくぞ。』

あいつら・・・義理の方は今はどうかは知らないが・・・』

優しい笑み、どこか気恥かしそうな表情、それは・・・

（それは、違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに・・・）

だから・・・許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。

そんなふうには教官を変えてしまふ弟、そしてそれ以上の義理の弟的存在・・・、それを認められない。認めるわけにはいかない。

だから・・・

敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚無きまでに叩き伏せると！そして、その障害となる目の前の男を排除すると！！

ならば・・・こんな所で負けるわけにはいかない・・・。目の前の男はまだ余裕な表情を浮かべている。私はまだ一撃も与えられていない。

力が・・・欲しい。

ドクン・・・と私の奥底で何かが蠢く。

そして、そいつは言った。

『 願うか・・・？ 汝、自らの変革を望むか・・・？ より強い力を欲するか・・・？ 』

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など・・・空っぽの私など、何から何までくれてやる！！

だから・・・力を・・・、比類無き最強を・・・、唯一無二の絶対  
を・・・

私によこせ!!

D a m a g e L e v e l . . .  
M i n d C o n d i t i o n . . . U p l i f t .  
C e r t i f i c a t i o n . . . C l e a r .  
《 V a l k y r i e T r a c e S y s t e m 》 . . . b o o t .

S i d e K a n a d e

「あああああっ!!!」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を發した。同時にシュヴァルツエア・レーゲンから激しい電撃が放たれ・・・

「うわっ!!!」

俺の体が弾き飛ばされた。

「ちっ・・・」

「奏、大丈夫!？」

「大丈夫だ、問題ない・・・。つか・・・あれは・・・!」  
「なっ!？」

今残っている全員が目を疑った。

その視線の先では、ラウラが・・・そのISが変形していた。

・・・いや、変形という生易しいものじゃない。装甲をかたどっていた線は全て溶解しどろどろになり、ラウラの全身を包み込んでいった。

黒く、深く濁った闇が、ラウラを飲みこんでいった・・・

「あれは・・・『ヴァルキリー・トレース・システム』・・・」

#24 Find out my mind Chapter 1

開戦、学年別

（次回予告）

V Tシステムの起動により、トーナメントは中断した。

残ったのは奏達のみ。だが奏は一人残ると決意。

奏の真意は・・・

次回、#25 Find out my mind Chapter

r 2 最後の切り札、真単トゥル・ワンオブ・アヒリテイ一仕様能力の目覚め

目には目を、歯には歯を。力には力を。その代償は・・・

V Tシステム起動により、闇に囚われていくラウラ。

奏がとつた方法とは・・・！？

そして、『真単一仕様能力』とは！？



「『ヴァルキリー・トレース・システム』……？」

ルシエラが初めて聞いたように反芻した。

「ああ……。世界で開発はおろか、研究すら禁止された禁断のシステムだよ……。過去のモンド・グロツソの部門優勝者か総合優勝者<sup>ヒルデ</sup>の動きを真似るシステムさ……。下手したら操縦者が死に至る可能性すらある、なんて言われている……」

「そんなシステムが……。なんで……？」

「知るか。けど断言できることが一つだけある……。あれは……。織斑先生の動きをトレースしてる。」

ドイツに一時期いたことは知っている。前にネットで見た。

どうもその時に取られたんだろうよ。

「そんな……。じゃあ勝ち目が……」

シャルルが絶望したような声をあげた。

「……。いえ、まだ勝ち目がないわけじゃないのでしょ？二崎君。」

「……ルシエラにはお見通しか……？」

「そういうことじゃないわ。ただなんとなく……そう思っただけ。」

「え？えっ？」

「最後の切り札が……っ！皆避けろっ！」

『っ！！』

溶解しきった後、形を成したあのIS（元シユヴァルツエア・レーゲン）が刀を振りかぶって突進してきたため、全員に回避するよう言う。

全員避けきってくれたようだ。

『非常事態発生！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルDと認定、鎮圧のための教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返し！』

全てのシールドが張られたらしい。閉まりきっていた。

「そ、それで、最後の切り札って……なに!？」

「シャルルは聞いたことあるか？『目には目を、歯には歯を』っていのを。」

「えっと……ハンムラビ法典だったっけ？」

「『明答。二崎君の場合は……きつとその原理に則ることなのね。」

「……目には目を、歯には歯を。毒には毒を、違法には違法を……」

「…つてな…」  
『え？』

さすがにこれは分からなかったらしい。

「…じゃ、実際に見せてやるよ…」  
『トゥルー・ワンオブ・アヒリテイー真単一仕様能力』を  
「！！」

「・・・真・・・単一仕様能力・・・!?」

初めて聞いた。ISに積み重ねているのは単一仕様能力だけ。真単一仕様能力なんて聞いたことがない。

じゃあ・・・

「じゃあ、あの単一仕様能力は・・・何？」

ルシエラさんが僕の思っていたことを代理で聞いていた。

「『鎮魂の殲滅翼』は・・・簡単に言ってしまうえば『イミテーション・ワン・オフ・マヒル偽単一仕様能力テイ』だ。この単一仕様能力を隠すための隠れ蓑みたいな能力、といったところか？俺も先月気付いたばかりだが・・・」

そんなものが隠れていたなんて知らなかった。隠さなければならぬ能力ということはそれほど凄いものなんだろうね・・・

「・・・正式起動法チエック・・・、プロテクション解除・・・、  
『ゼロ』、起動！」

奏が『ゼロ』と叫んだ時、奏のISが姿を変え始めた。

けど、さっきのような禍々しい変化じゃなくて、ISが鎧のように  
体を包み込んでいく。それも、優しく、ふんわりと。

変化が終わった後の奏を見て、僕は何も言えなかった。

だって・・・

そのISは神々しくて、  
奇麗だったから・・・



「・・・初めて起動したが、上手くいったみたいだな・・・」

「大丈夫・・・なの!？」

「・・・大丈夫だ。シャルル、ルシエラ。」

「あ、うん・・・、なに？」

「何かしら？」

俺の呼びかけに応えるシャルルとルシエラ。

「俺は今から・・・ラウラを助けに行ってくる。この力があれば、きっと・・・いや、絶対にラウラを助けられるはずだ。だから・・・二人とも一旦退いてくれ。二人を巻き込まないまま戦う自信がないからな・・・」

事実、そうだ。このシステムの全貌が分からない、どういう効果があるのかは分からない。名前からすれば、きっと効果は『ゼロシステム』と同じような気もするが・・・

「私たちがいたら・・・邪魔になる、ということね・・・？」

「酷い言い方をすれば・・・そうなる。ゴメンな。」

「いいよ・・・でも!」



「な、なんだ？」

ビシッ！つとシャルルが俺に指を差してきた。珍しく、言葉が強く、有無を言わせないものだった。

「約束して。負けないって。絶対に勝って、ラウラさんを助けるって。」

「・・・ああ。約束してやるよ。ラウラを助けてきてやるよ！それでもしなきゃ男じゃねえだろ？」

「じゃあ、約束破ったら明日から奏は女子の制服で登校してね？」

「う・・・。あ、ああ！いいぜ？約束破ったら腹かっさばいてもいいぜ！？」

「あー、死ぬのはダメだからね？」

・・・返された。

だが・・・、これで目的は出来上がった・・・

「じゃあ、奏・・・。」

「あなたの帰り、待ってるわ・・・。」

二人はそう言い残して、ピットへ戻っていった。

「・・・さて。これでここにいるのは俺とお前だけだ。・・・ゼロ、

次の条件で俺を勝利へ導け……。条件は……。ラウラ・ボーデヴィツヒの無傷救出、かつ敵ISSの排除。」

数秒後、頭の中に情報が流れ込んできた。

「く……。っ！これほど辛いとは……。なあっ……。」

情報量に処理が追い付かず、頭が痛む。

「……。だが、処理が済んだ……。！この方法でお前を救ってやるよ、ラウラ・ボーデヴィツヒっ！！」

目の前のISSに向かって突進する。

敵ISSはやっぱり殺す勢いで剣を振るうが……

《前方右側方向へ二五度で回避》

まずは回避……。！

《回避後敵ISSの武装排除の為、エネルギーコンバータ状態の風斬を以て敵ISSの手首を切断》

「お前の望んだ絶対の力つてのは……」

《敵足首を切断、これにより歩行を不能にする》

「こんな歪みきつた力だったのか！？ラウラ・ボーデヴィツヒ！！  
それがお前なのか！？」

《敵中央部を粒子剣の切先のみで切断、これによりラウラ・ボーデ  
ヴィツヒ救出条件を達成、同時に敵ISの撃破目標を達成》

「だったら俺は……、お前をその歪みから救ってやるよ！！」  
「ぎ、ぎ……ガ……」

切断面から紫電が走り、黒いISが中央で二つに割れた。

そして、気を失うまでの一瞬の間に俺とラウラの目があった。

眼帯が外れ、露わになった金色の左目と、そうでもない赤い目と。

酷く弱って、捨てられた子犬のような眼差しで、助けてほしいと懇  
願しているような目と。

「・・・しょうがねえ。テメエへの仇討ちは勘弁してやるよ・・・」

その言葉が聞こえたかどうかは、ラウラだけが知るところだろうけど・・・

『一つ忠告しておくぞ。あいつら・・・義理の方は今はどうか知らないが・・・心を強く持て。あいつらは未熟者の癖にどうしてか、妙に女を刺激する。特に義理の方はそれが顕著だった。油断していたらあつという間に心を奪われるぞ?』

そんなふうと言う教官は酷く嬉しそうで、それでいてどこか照れくさそうで、なんだか見ているとこちらがモヤモヤとした。

・・・今なら分かる。あれはそう、ちょっとしたヤキモチだったのだ。それでつい、あんなことを聞いてしまった・・・

『教官も惚れているのですか?』

『姉が弟に惚れるものか。馬鹿者め。』

ニヤリとした顔で言われて、私はますます落ち着かなくなる。

それに拍車をかけたのが……

『……だが、あいつは……な。』

といった時の教官の顔だった。あの時の教官はいつもの教官の顔ではなかった。

私は教官にこんな顔をさせる、その男たちが……羨ましかった。

そして、出会って、教官の弟とは戦うことはできなかったが、目の前の男と戦って、理解した。

強さとは……なんなのか。その答えは無数にあるのだろう。

けれど、その答えの一つに、強烈に出会ってしまった……

『強さつっつーのは……己の強さを誇示するためのもんじゃなくて……、誰かを守りたい、命をかけても守りたいと思う時に現れるもんじゃねえのか？』

……そう、なのか？

『きつとそうだろ。ただ己の強さを誇示するために使う奴なんて、

言っちまえばただのガキ。本当に守りたい奴がいれば、そのために強くなるうとするだろうしな・・・』

守りたい・・・もの・・・

『誰を守るか、そして、本当に守りたいか。それがどれだけ強いかなだ。』

本当に守りたい・・・か・・・

『そうだろ？ 誇りなんてあつてないもんだし、そんなんで守りたいものを失うってのは辛いもんだぜ？』

そして、そいつは・・・、その男は・・・優しい笑みを浮かべて言った。

『守るべきものを守れないなんて、情けなくて仕方ねえよ。』

・・・では、お前は・・・？ お前は何故強い・・・？ どうして・・・強くいられる・・・？

『バーカ、俺なんてまだ弱いんだよ。強くなんてねえんだよ。』

断言。その言葉に私はぼかんとしてしまう。

あれほどの強さを、信念を持ってなお、弱いと言う。それが理解できない。

『・・・だがな？ もし俺が強いつていうなら・・・そりゃ・・・』

・・・それは・・・？

『・・・弱いなりに強くなるうと、守りたいものを守るうとする強い意志を持つてるから、だな。』

・・・。

『それにな、強い奴なんて世界のどこにもいねえんだ。』

・・・どういうことだ？

『これは単に受け売りなんだがな・・・。こういう言葉がある。『強者などいない。人類全てが弱者なんだ』という言葉がな。』

・・・？

『つまり・・・どこにも強い人間なんていない。皆弱い人間だ、ということだよ。』

・・・。

『ああ、そういえばさつきから気になってるんだが、千冬さんの言う『義理の弟的存在』が誰か気になるんだろ？』

あ、ああ・・・。知っているのか・・・？

『知ってるも何も・・・俺のことだ。よく一夏と遊んでいたからな、それでそういう扱いを受けていただけだよ。』

・・・っ！



『・・・それだけだ。・・・どうやら俺には・・・また守るべきものが  
増えちまったみたいだしな・・・』

守るべきものが・・・増えた・・・？

『お前のことだよ、ラウラ・ボーデヴィット。絶対にお前を守って  
やるよ。恐怖や辛さからな。』

言われて、私の心は初めての衝撃に強く揺さぶられた。

『絶対にお前を守ってやる』

・・・  
そう言われて、私は・・・ああ、そうか。これが・・・そうなのか・

ときめいて、しまったようだ・・・

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では、私はただの十五歳の『女』なのだ・・・

・・・二崎、奏・・・

・・・教官の言う通りだ。確かに・・・

私はこいつに・・・

心を・・・奪われてしまった・・・

S i d e K a n a d e

先生にラウラを預け、着替えるためにアリーナの更衣室へ向かった  
時だった。

「・・・ぐっ・・・が・・・あ・・・」

唐突に頭に激痛が走った。

「これが・・・『ゼロ』の代償なのか・・・!？」

あ、頭が・・・重い・・・!

意識が・・・

(奏は自分の着替えの置いてあるロッカーまで這う這うの体で到達したが、そこで遂に意識を失ってしまった・・・)

〈次回予告〉

波乱の学年別トーナメントは幕を閉じた。

一人は改めて生きる意味を持ち、一人は新たに道を見つけた。

そしてその翌日、カオスは進展した・・・

次回、#26 新たな『私』と少女の決意、そしてカオスは進展す

迷ひ神が 1-1に誕生・・・!? 奏の命運や如何に!?

#26 新しい『私』と少女の決意、そしてカオスは進展す（前書き）

2巻ラストのこの話、カオスになります（特に後半が）

そして最後には・・・？

#26 新しい『私』と少女の決意、そしてカオスは進展す

Side Laura（一部三人称）

「う・・・、あ・・・」

ぼやっとした光が天井から降りているのを見て、ラウラは眼を覚ました。

「気がついたか？」

その声には聞き覚えがある。聞き覚えがある・・・どころではない。どこで聞こえたと一瞬で判断が出来る。自らが敬愛してやまない教官こと織斑千冬だ。

「私・・・は・・・？」

「全身に無理な負荷がかかったことによる筋肉疲労と打撲がある。しばらく動けないだろう。無理をするな。」

（千冬ははぐらかそうとしていたようだった。だが、ラウラはかつての教え子、誘導されなかった）





ージ、そして何より、操縦者の意思……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう。」（千冬の言葉を聞きながら、ラウラはギョツとシーツを握りしめた。その視線はいつの間にか俯き、眼下の虚空を彷徨っていた）

「……私が……望んだから……ですね……」

……あなたに……なることを……

（この言葉は口にしなかったが、千冬には伝わっていた。）

「ラウラ・ボーデヴィッヒ!!」

「はっ、はいっ!!」

（いきなり名前を呼ばれ、ラウラは驚きも合わせて顔をあげる）

「お前は誰だ？」

「わ、私は……、私……、は……」

（その言葉の続きが出てこない。自分自身がラウラであるように感じても今の状態では言えなかった……）

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれから、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』になるがいい。時間は山のようにある。なにせ、三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘。」  
「あ……」

（ラウラにとって、その言葉は意外だった。まさか、自分を励ましてくれるとは思わなかったのだ。そんな彼女には、なにを言うべきか分からない。分からないまま、ただぼかんと口を開けていた。そんなラウラに、千冬は席を立ててベッドから離れる。もう言うべきことは言ったのだらう、教師の仕事に戻るようだった）

「……ああ、それから……」

（そして、ドアに手をかけた所で、振り向くことなく再度言葉を投げかけた）

「お前は私にはどう足掻いてもなれないぞ。あいつらの姉は、こう見えても心労が絶えないのさ。」

（きつと、にやりと笑っていったはず。それがどうしてかラウラには分かった。そして、千冬が部屋を去ってから数分経って、急にラウラはおかしくなった）

「・・・ふ、ふふ・・・、ははっ・・・」

ああ・・・なんてずるい義姉弟だ。二人揃って言いたいだけ言っ  
て言い逃げた。あそこまで言っ  
て結局自分で考える、なんだから、ず  
るいことこの上ないな・・・

自分で考えて、自分で行動しろ・・・か。

笑いが漏れる度に全身が引きつるように痛かったが、それさえも今  
は嬉しく感じられた。

完敗。完膚無きまでの敗北。それが今はたまらなく心地いい。

・・・そうだ。ラウラ・ボーデヴィツヒは、たった今これから始ま  
るのだから・・・

「あー……。まだ頭が痛むっつーの……」

「あ、あまり無理するなよ……。？」

「今は一夏の気遣いが心にしみるぜ……」

その後、自分の部屋でシャルルと一夏に介抱されていた時に目を覚ました。

やっぱり『ゼロ』のダメージが大きかったらしく、あの場所で気を失っていた所をシャルルと一夏が発見したそうだ。

診断結果は『神経系、及び脳の極端な疲労』。数時間眠れば治るだろう、と言われていたらしい。

で、今に至る。まだ頭が痛い。

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は、各自個人端末での確認の上……』

誰かが学食のテレビを消した。俺は全く関係のない顔をして野菜炒め定食を食べていた。

「……シャルルの予想通りになったな。」

「そうだねえ。あ、一夏、七味取って？」

「はいよ。」

「ありがと。・・・奏、ホントに大丈夫？」

「今にも死にそうな顔してるぞ・・・？」

「・・・大丈夫だ、問題ない・・・と言いたいけどあまり大丈夫じやねえかもしれねー・・・」

「ほらあ、無理しちゃダメだって言われてたでしょ？」

当事者二人がこんなんびりしたものだところからか批判が来そうだが、俺が一応復活してからついさっきまで教師陣から事情聴取をされていたのだ。特に俺は『ゼロ』についての詳細な事情聴取を受けていたのだ。千冬さんから。

ちなみにこんな感じ。

『二崎、お前が使ったと思われるあのシステムは何だ？』

『し、システム・・・すか？・・・つつ・・・。あまり長々と言えないんですけど・・・』

『話せる限りでいい。話せ。』

『あれはセラフィムの『真単一仕様能力』です。『鎮魂の殲滅翼』は『偽単一仕様能力』になって・・・』

『私が聞きたいのはそこではない。何故それが積まれていたのか、ということだ。』

『いや、そればかりは俺にも・・・』

『だが、お前は知ってるように使っていたな。そのシステムが何な

のか、を・・・」

「・・・それは・・・その・・・ま、アレですわ。前見たアニメのシステムと名前が被っていたから多分そうかなーって・・・」

「・・・まあいい。あのシステムは知っているな？」

「・・・はい。正式名称『ゼロ・ウイニング・システム』。必勝をもたらすシステムで、過去の凄惨な事故の為、研究・開発などはおろか、それに関わる全資料すら閲覧を禁止された特S級の危険なシステム・・・」

「それで正解だ。このISの制作者の異常さが伺える・・・」

「・・・まったくで。」

「二崎、このことをあまり口外するな。し過ぎた場合、お前に面倒が起るからな。」

「分かってますって・・・痛っ・・・」

こんな感じだった。

「・・・ふー。ごちそうさま。学食といい寮食堂といい、この学園は本当に料理が美味くて幸せだ・・・。・・・ん？」

先に飯を食い終わった一夏が何かに気付いた。

その目線を追ったら、物凄い落胆した女子群だった。

「優勝・・・チャンス・・・消え・・・」

「交際・・・無効・・・」

『うわあああああんっ！！』

バタバタバタツ！と数十名が退散した。

「・・・どうかしたんだろうね？」

「さあ・・・」

「・・・今の声が頭に響いた・・・このヤロー・・・殺す気か・・・」

で、頭の痛みをこらえながらふっと横を見たら、箒が一夏を見ていた。落ち着きなさそうに。

あ、一夏が気付いて、行って・・・

「ほ、ほ、本当か！？本当に、本当に、本当なのだな！？」



・・・何度本当を繰り返す気だ？かなり嬉しいようなのは分かるが。

ただ、その後が笑えた。

「そんな事だろうと思ったわ！！」

「ぐはあっ！！」おー、腰の捻りを加えた正拳。鋭い一撃は一夏の顔に吸い込まれていった。

「ふんっ！」

「ぐぼあっ！？」

・・・お、鳩尾につま先が刺さった。

・・・余談だが、位置が悪かったのか、箒のパンツが見えた。白かった。

「げぼっ・・・ぐっ・・・げふっ・・・」

「・・・一夏ってさ、わざとやってる時があるんじゃないかって思う時があるよね！」

「・・・確かにな・・・」

「な、何？どういう意味だよ、それ・・・」

「さあね。」

「知るかボケ。」

「酷え・・・」

蹲る一夏を放置して、もう一度席に戻る俺。

シャルルも続いてきた。珍しくシャルルが一夏を放置。

「・・・そういえばさ。」

「なに？聞きたいことがあるならなんでも聞いて？」

ちょうど月見うどんを食べ終えたシャルルがニコニコ顔で聞いてきた。

俺？食べ終わってるけど？

「ISで会話・・・プライベート・チャンネルとかオープン・チャンネルみたいなもんじゃなくて、二人だけの空間みたいな感じの奴・・・って出来ねえか？」

「ん？うーん・・・なんか聞いたことがあるような気がする・・・。IS同士の情報交換ネットワークの影響だ、って言われてるけど、操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉クロッシング・アクセスが起こるっていう、アレかな・・・？」

「多分それかもしれないねえな。しかし・・・波長、ねえ？」

「ISはよく分からない現象や機能がかなりの数あるからね・・・。作った篠ノ之博士は全機能を公表していない上に現在失踪中だし、前に何かのインタビューで事故進化するように設定した部分があるから、本人も全部を把握するのは無理だって言ってた気がする・・・」

「・・・東さんらしいわ、それ・・・。というか、現在進行形で俺

の姉さんも失踪中だし。」

「あ、そうなの？」

シャルルが苦笑して聞いてきた。

俺は頷いて返す。

「……というか奏……、二人だけの空間で会話って、もしかしてポーデヴィツヒさんと……？」

「あ、ああ。そうだけど……」

「ふーん……。そうなんだ……」

ああ、シャルルが黒い……。ここ最近の特訓の賜物とは言いたくないが、途端に不機嫌になるのが良く分かるようになった。

語尾が強くなる、歩く速度が速くなる。それが不機嫌の兆候。何故不機嫌になるのかは全く分からない。

「あ、織斑君にデュノア君に二崎君。ここにいましたか。……二崎君、頭は大丈夫ですか？」

「……大丈夫……と言いたいです。」

まだ痛む頭を軽く押さえて言う。

「それよりも、朗報です！」

いきなり大声をあげて言いだした。・・・頭があ・・・

「何とですね！ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です  
！！」  
「おおっ！？そうなんですか！？てつきり来月からになるものとは  
かり思っていました！！」

一夏が食いついた。・・・頼むから叫ぶな・・・

「それがですね、今日は大浴場のボイラー点検があつたので、元々  
生徒たちが使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、  
それなら男子の三人に使ってもらおうって計らいなんですよ！」  
「ありがとうございます！山田先生！！」

・・・また・・・意識が・・・

「せ、先生！僕、奏を部屋に連れて行くので一夏を先に入れてあげ  
てください！」

「あ、あつ！だ、大丈夫ですか！？」

「こ、声を・・・、大声を上げないで・・・」

「あつ、す、すいません・・・」

とりあえずシャルルによつて食堂から退散。ちなみに食器は一夏が片付けてくれた。

「奏・・・大丈夫？ホントに大丈夫？さっきより頭痛が悪化してる気がするけど・・・」

「・・・近くで大声出されりゃ酷くもなるさ・・・。今は大分落ち着いてきたけど・・・」

ゼロに早いうちに慣れねえとな・・・

後で半分優しさでできてるあの薬を飲んでおくかな・・・

「とりあえず・・・一夏が風呂から出たら風呂のこと考えるか・・・」  
「えっ、あつ、そ、そうだね・・・」

色々と考えてみたけど何も出てこない。

結局風呂まで来てしまった・・・

「じゃあ、ごゆっくり。」

『は、はあ・・・』

脱衣所のドアが閉まった。

沈黙タイム In 脱衣場。辛い。

つかさ？女子の裸ってみだりに見ちゃいけないもんだろ？さすがにそういうのはいけないというのは分かる。

「・・・えーと、シャルル？」

「はひゃいつ!?!」

噛んだ。多分噛んでなかったら敬語だった。

「シャルルも今日疲れたろ？先風呂入れよ。」

「え、でも奏はどうするの?」

「シャルルが風呂上がるまで待ってる。落ち着くまで待ってるよ。」

シャルルには恩も礼もめちゃくちゃある。それを返すという事にはならないかもしれないが、少しは、ね・・・

「い、いいよ！それなら僕が脱衣場で待ってるから！」

「・・・なんか悪いな・・・ホントにいいのか？」

「い、いいって！・・・とっ、とにかく先にどうぞ！・・・僕のことには気にしないで！」

「・・・んじゃ、先入らせてもらっわ・・・。体温温めて少しでも頭痛を抑える・・・」

「う、うん！そうした方がいいよ！・・・」

「じゃあ、入ってくる。」

「う、うんっ！ご、ごゆっくりっ！・・・」

シャルルに言われて、俺は先に入ることにした。

「・・・うわー・・・」

大浴場にはいった第一声がこの声だった。

とにかく広い。

「・・・先に体とか頭とか洗っておくか・・・」

いつもの癖で、先に体などを洗う。いつの間にかついていた癖だが、これが結構風呂に気分良く入れるんだよね・・・

そして全身を洗い終えて、湯船大に浸かる。

「・・・あゝ・・・生き返るうゝ・・・。・・・特に頭が・・・」

さっきまで軽く痛んでいた頭が急に痛まなくなった。さすが温め効果。

そんなこんなでぼけーっとしていたら・・・

カラカラカラ・・・

・・・ドアの開く音？幻聴だろ？きつと・・・

ぴた、ぴた、ぴた・・・

今度はタイルを歩く音？シャルル・・・じゃないはず。

「お、お邪魔・・・します・・・／＼／」  
「ブフォッ!？」

口まで沈んでいたから湯を噴きだす形になった。



ってちよい待て！なんでシャルルが！？

俺は緊急的な行動で風呂の隅っこ（つつてもただ奥へ行っただけ）に逃げる。

「ど、どどどどどうしていきなり入ってくるわけですかねシャルルさん！？私も確かに入浴を進めましたよええ！！ですけどそれは俺が入らない場合のことであって・・・／／／」

「・・・ぼ、僕が一緒だと・・・、イヤ・・・？／／／」

「い、いや、そういうことじゃないんだが！！うん！／／／」

実際言つと、困る。この一言に限る。

「や、やっぱり・・・、その、お、お風呂に入ってみようかなー、つて・・・。め、迷惑なら・・・上がるよ？／／／」

「いやいやいやシャルルさんよ、上がるなら俺の話でございませぬ！？俺はもう十分に使つてたし頭痛は引いたし！！それに・・・／／／」

「ま、待って！！」

急に大声で呼び止められ、俺は驚きも相まって行動と言葉が止まった。

「そ、その、話が・・・あるんだ。大事なことから・・・奏に聞

いてほしいんだ・・・／＼／

「あ、ああ・・・、わかった・・・／＼／」

大事な話と言われりや、しかも名指しで聞いてほしいとあれば、聞かない訳にはいかない。

しかし・・・まっすぐにシャルルを見る訳にはいかない。というか、自分で退路を失ってしまっている。

「その・・・、前に言っていたこと、なんだけど・・・」

「前っていうと・・・、学園に残れ、ってやつか？」

「そ、そう、それ。僕ね、ここにしようと思うんだ。僕はまだここだっと思える場所を見つけれないし・・・、それに・・・」

「そ、それに!？」

「・・・」

何故か返って来たのは沈黙だった。

「きゃあっ!？」

「な、なにがどうした!？」

いきなりの可愛らしい悲鳴に俺の声までひっくり返った。

「す、水滴が落ちてきて・・・、びっくりしただけ。大丈夫だから・

「な、ならいいけど……」  
『……………』

また沈黙。

なにこれもうヤダ。

ちやぶ……

「シャルル……？」

「こ、こつち見ちやダメっ！！あっち向いてて！！／／／」  
「わ、悪い！！／／／」

何をしようとしているのかは分からない。というか……のぼせてきた……

が、そんな感覚は次の瞬間、吹き飛んだ。

ぴとっ……と、俺の背中にシャルルの手が触れた。

「じゃ、シャル……／／／」

そのまま、その手は俺を後ろから抱き締めてきた！？せ、背中に体

が密着してる！！い、イカン、心臓が口から飛び出そうだ！！

「奏が……、奏がここにいろ、って言うてくれたから。そんな奏がいるから、僕はここにいたいと思うんだよ……？」

「そ、そうなのか……？／＼／」

俺にとっては勢い任せに言っていたようなことだが、それがシャルルの救いになったようだ。

「それに、ね？もう一つ決めたんだ。」

「もう……一つ……？」

「そう。僕のあり方。奏が教えてくれたんだよ？」

「……そ、そうだった……っけか？／＼／」

「そうだよ？……ふふっ、奏って自分に関することはどこまでも鈍感なんだね。ホント、憎たらしいくらいに。」

「……なんか……、それは……まあ、なんだ？すまん。」

「いいよ。許してあげる。だけど……僕のこと、これからシャルロットって呼んでくれる？二人きりの時だけでいいから……」

「……それが本当の……」

「そう、僕の本当の名前。お母さんがくれた、本当の名前なんだ。」

「……分かったよ、シャルロット……」

「ん。」

どこか嬉しそうにシャルル……いや、シャルロットが返事をした。まるで子供のような無邪気さだった。

「……ところでシャルロットさん？いつまでもこんな体勢だと正直色々とまずいんだが……／＼／＼」

さっきまで意識しなかったものの、突然背中に触れている膨らみが気になってしまった……

「ふえっ！？えっ、あっ、うん！そっ、そうだね！！ぼ、僕、さ、先に体と髪、洗っちゃうね！！／＼／＼」

シャルロットも自分の状態を自覚したのか、慌てて水音を立てながら俺から離れ、そのまま湯船を上がった。

「……こ、こっち覗いちゃ……ダメだよ？／＼／＼」

「覗かないから安心しろ。俺には覗きという趣味は一切ないからな。」

「……そんなはつきり断言しなくてもいいのに……。……覗いてもいいのに……」

何を言ったのかは水音で分からなかった。

ちなみにこの後30分ほど満喫、風呂を出た。

もちろん着替えはシャルロットが先、俺が後。

「……じゃ、戻るか。」

「うん。」

そう言って頷くシャルロットは、湯上りのせいか頬を赤く染めていた。

それから部屋に帰ってしばらく雑談をした後、あっさりと眠りについた。……話とかをよく覚えてないのは、疲れたからだろう。きっとそうだ、そうに違いない、きっとそうだろう、そうだと思いたい……

翌日。

朝のホームルームにシャルロットの姿はなかった。

『先に行つてて』と言つたため食堂で別れたが、何かあったらしい。

ちなみに辺りをぐるっと見回したらラウラもない。・・・まあ、あいつは事情聴取だろうな。

「み、みなさん、おはようございます・・・」

教室に入ってきた山田先生は何故かふらふらしていた。朝っぱらから如何様なダメージを受けたのでござろうか？・・・言い方はどうでもいいとして。

「今日は、ですね・・・みなさんに転校生を紹介します・・・。転校生といますか、すでに紹介は済んでいるといますか・・・ええと・・・」

なんか歯切れが悪い。

もう今月に入って二人。合計五人いるのにね。転校生。

「じゃあ、入ってきてください。」

「失礼します。」

・・・あれ？この声って・・・

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いし

ます。」

スカート姿のシャルロットが礼をした。

全員哑然としている。俺も。

「ええと、デュノア君は・・・デュノアさん、でした。ということ  
です。・・・はあ、また寮の部屋割を組み直す作業が始まりますよ  
お・・・」

山田先生の憂いはそこにあっただか。なるほど。

・・・て。待、て、よ？

「え？デュノア君って女!？」

「おかしいと思った!美少年じゃなくて美少女だったわけね!!」

「って二崎君!同室だから知らないってことは・・・」

「ちよっと待って!?!昨日って確か男子が大浴場使ってたよね!？」

一夏が俺を『嫌な予感がする』という目で見ていた。安心しろ、俺  
もだ。

Bannon!!



「一夏あ

っ!！」

はい出た鈴が。

「ちょっと待て鈴！俺は冤罪！冤罪だ

っ!！」

「問答無よ

うっ！死いね

っ!！」

「ま、まだ死ぬわけにはいかないっ！必殺奏バリアっ!！」

「てめっ、怨むぞ!？毎晩枕元に化けて出てやるぞこのヤロー!？」

「成仏するよう毎日念仏唱えておいてやるから安心しろ!！」

「つかよくよく考えたらこのままだと俺ら二人とも死ぬって

っ!！」

『・・・あれ、俺生きてる・・・?』

同時にユニゾンした声。俺と一夏。生きてた。なんで？

間一髪・・・と言っているのかどうかは定かではないが、俺と鈴の間に割って入ったのは・・・なんとびっくりラウラだった。

その身体には黒いIS、『シユヴァルツェア・レーゲン』が装着されている。衝撃砲をAICで相殺したと思う。

・・・肩のレールカノンがない。・・・なにせよ、助かった。

「た、助かったぜ、サンきゅっ!？」

いきなりだ。いきなり俺は一夏から引っ手繰られ、ラウラに引き寄せられ、あろうことが・・・

唇を奪われた。・・・セカンドキスだ、奪われたのは。ファーストキスは事故によってルティアが奪った。

「~~~~~くあwse drift gyふじこIip..@.:っ!  
? / / /」

驚天動地。何が起こったのか教えてほしい。ついでに俺がなんて言ったのかも。

「お、お前は私の嫁にするっ！決定事項だ、異論は認めん！！／／」

『・・・嫁じゃなくて婿だろそこはよ・・・』

何故か一夏と二人で冷静なツツコミが出た。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする！」

「そんな習わしはないっ！聞いたことないわ！」

その時だった・・・

「・・・奏・・・？」

「ひっ!？」

何この冷めきつた声!?!オリヴィエの声だよな!?!?

「かなちゃん・・・一緒に・・・死のう?」

真琴が病んだ

っ!?

「うー……」

る……ルティア……?どうしたんだ……?小動物みたいな唸り声上げて……

「すまん一夏、俺は一日逃げ(ぼすっ)……へ?」

誰かとぶつかった。

「……」

シャルロットだった。

「……」

「……」

ああ、これは御迎えでも来るんではなかるつか。



「不幸だあああああああああああつ！！！！！！」

その日の夜。(第三者視点)

キーボードを叩く女性がいた。

その女性がいる所は、秘密ラボ。その女性は・・・篠ノ之束だった。

突然、琴を鳴らすような音の着信音が聞こえた。

「こっ、この着信音は…！」

同時にウサ耳がピコンと上がった。

びっ。

「もすもす終日く？はあくい 皆のアイドル、篠ノ之東だよあく？」

電話の相手は・・・

「・・・っ！（この状態で怒りマークが目に見えていた）」  
「って！待つて待つて！切らないで箒ちゃん！！」

篠ノ之箒、東の妹だった。

「・・・姉さん・・・」  
「やあくやあく我が妹よく うんうん、用件は分かっているよあく？欲しいんだよね？君だけの専用機が？」  
「っ！」

箒は目的を読まれて驚いていた。

「もちろん用意してあるよく？最高性能にして規格外。そして白と並び立つ者！その機体の名前は・・・」

『赤椿』！！・・・あ、そうそう、ついでにかな君に言っといて？  
かなちーが頼まれものを完成させたよーって。」



#26 新しい『私』と少女の決意、そしてカオスは進展す（後書き）

「（奏）次回はキャラなどの紹介だ。・・・つってもルシエラだけだが。」

それと。

番外編で『この話をやってほしい！』などのリクエストありましたら、可能な限りやります！

ただし、なるうのルールの範疇でお願いします。

時期ネタ（バレンタインがいい例ですね）は時期に間に合うようにやりますが・・・

## #Other キャラ設定などその3 (前書き)

キャラ紹介です！

「ルシエラ」今回は私だけ、のようね。」

ピンポイントで貴女だけでしたし。

「ルシエラ」そこは気にしないわ。じゃあ、始めましょうか。」

## #Other キャラ設定などその3

） キャラクター編 ）

NAME：ルシエラ・アイセス

性別：女

身長：163.3cm

体重：「別に言う必要はないでしょう？」

アメリカの代表候補生。所属は意外と四組。だがクラス代表ではない。『自分はそういうことが苦手だから』と辞退したためだ。

地元でも他の追隨を許さない強さを誇り、見た目がクールな為に出生地に関わって『アラスカの絶対零度』と呼ばれる。

冷静さを醸し出すような口調だが、実際は優しい。他の女子曰く、『クールビューティー』。スタイルもそこそこ良い方なため、よく羨望の目で見られたりする。

暑がり。寒さにはめっぽう強い。

髪色は薄い水色。ストレートでかなりの長髪（ほとんど床につくくらい）。

奏には『LIKE』の意味での好意を持っている。・・・が、あくまでそれは表面上。実際は・・・

IS判定はAA。

ISは『アイス・ブレイズ』。

一人称は『私』。奏は最初は『二崎君』だったが後に『奏』と呼ぶようになる。ごく稀に『ルシエラ様』と呼ばれることがある（本人は大変嫌っている）。

CV：野田 順子

代表作：テイルズシリーズ チャット、セルシウス（TOWER3のみ）

真・三国無双シリーズ 星彩

イメージキャラクター：テイルズシリーズ、セルシウス（レディアン  
ント3の）

） IS編 ）

アイス・ブレイズ

使用者：ルシエラ

第三世代中・近距離型のIS。拡張領域はラファール・リヴァイブ  
までとはいかないが、それでも大きい方。

火力、機動力も平均以上の高スペック。

待機状態は右耳の結晶状のイヤリング。ISの色は氷をイメージし  
た水色。

一次移行状態は中世の鎧をイメージしたもので、二次移行状態は口  
ーブのような形状になっている。

武器

55mm口径ガトリング：一般的なガトリング。イメージはガンダ  
ムヘビーアームズ改（EW仕様）のメインガトリング。

メイル・ブレイドランス：槍・剣を兼ねた物理打撃武器。先端から  
は刃が四つに分かれている。

エッジ・ショット：衝撃砲と同じ原理の武器。違うところは発射口  
がはっきりしているところ。放たれる砲撃の形は三日月形。

フロスト・ゲイル：氷弾を55mm口径ガトリングに装填して撃ちだす。

Spec

武器の数は一般ISとあまり大差ない。が、連射力に長け、持ち前の機動力を損ねない設計になっている。

単一仕様能力の影響か、使用者を選ぶ機体になっている。武器やIS構造に氷結防護処理などの氷結用の処理が施されている。

単一仕様能力：フリージング

ISの氷結用処理によって可能な射撃武器に氷結属性を持たせる能力。この能力を使用することで敵武装の氷結が可能、無力化ができる。

ただし、氷結可能なのは武器のみ。（武器が氷結した場合、一度収納すると氷結解除されている。）そこはちゃんと相手のことを考えてある（なぜか）。

#Other キャラ設定などその3 (後書き)

今回はついに公開、キャラクターイメージミュージックです！

ちなみに奏のみ再録です。

本日昼ごろ更新します！

## #Other オリジナルキャラクターイメージミュージック一覧

「(奏)・・・で？余興的な所に俺たちが呼ばれた理由ってのは『IS熾天使』のオリジナルキャラクターのイメージミュージックが決まったからその音頭をとれ、ということなのか？」

はい、そういうことです。

「(リース)呼ばれたのが奏と私と・・・」

「(シャルロット)なんで僕？」

まあ、色々時間がかかったからシャルロット党の人へのファンサービス？

「(シャルロット)い、いいのかなあ・・・」

「(奏)いいんじゃない？作者がそうするって言ってたし。という

かさつさと進めようぜ？時間がかかっても仕方ないし・・・」

「(リース)だね。じゃ、奏は改めて発表ってことで。」

『一覧です、どうぞ！～！』

二崎奏

通常時 深蒼

情報：作詞・赤尾でこ 作曲・石渡太輔 アーティスト・ツバキ

ヤヨイ（CV：今井麻美）

ゲーム『BLAZBLUE CONTINUUM SHIF

T 2』主題歌

特殊状態時 思春期を殺した少年の翼

情報：テレビアニメ『新機動戦記ガンダムW』、ヒーロ（ヘビーアイムズ）VSゼクス（トルギス）時のBGM

中咲真琴

やっぱり世界はあたし れじえんど！

情報：作詞・NAO、八木沼悟志、山下慎一狼 作曲・八木沼悟志  
アーティスト・fripSide NAO project！

テレビアニメ『恋姫無双』ED

オリヴィエ・レギンハルト

基本：恋愛向上Committee

情報：作詞・こだまさおり 作曲&編曲・前山田健一 アーティスト・麻生夏子

OVA『バカとテストと召喚獣 祭』OP

?????：BRAVE PHOENIX

情報：作詞&作曲・上松範康（Elements Garden）  
アーティスト・水樹奈々

テレビアニメ『魔法少女リリカルなのはA's』劇中挿入歌

リース・セストナ

二人三脚

情報：作詞&アーティスト・misono 作曲・清水昭男

ゲーム『テイルズオブシンフォニア ラタトスクの騎士』主



題歌

エリイ・セストナ

通常 トーストにはたっぷりジャムを

情報：ゲーム『テイルズオブレジェンディア』ミニ・ブレット登  
場シーンBGM

戦闘時 The Arrow was shot

情報：ゲーム『テイルズオブジァビス』序盤戦闘BGM

ルティア・セストナ

流星のビヴロスト

情報：作詞・山下慎一狼 作曲・伊藤賢治 アーティスト・nao

ゲーム『超次元ゲーム ネプテューヌ』主題歌

ルシエラ・アイセス

Resuscitated Hope

情報：作詞・渡部紫緒 作曲・坂部剛 編曲・坂部剛 アーティス  
ト・コミネリサ

テレビアニメ『GOSICK』ED

?????

罪な薔薇

情報：作詞・新川宗平 作曲&編曲・佐藤天平 アーティスト・Y  
oko

ゲーム『魔界戦記ディスガイア2』OP

く品評（ほぼ全員出ます）く

「（奏）俺のIMはわからなくもないな……。特に『思春期を殺した少年の翼』が。この時点ではまだそれを流す状況はなかったらしいけどな？」

「（真琴）深蒼ってカツコイイ曲だよな？」

「（オリヴィエ）確かにそうね。『バトルっ!!』って感じの曲だもんね。」

「（真琴）で、私の曲は……」

完全に明るさだけを意識しました。真琴のイメージは『天真爛漫』なので、全体的に明るいものを選曲しましたよって。

「（エリイ）これってあれだよな？出てくる人のほとんどが女性っていう作品だよな？」

「（シャルロット）……作者のえっち……」

えっち関係ないし！！これしかなかったんだ！！というかこのアニメは深夜枠だけどそういうことはなかったはず！！

「（鈴）オリヴィエのは・・・あの学園コメディのOVAのOPだよな？主人公がバカなやつでしょ？」

ご名答です。イメージに合いそうな気がした曲でもあって。

「（リース）あの????ってのはやっぱりISに鳥の名前が使われてるから、ということを意識して？」

それも多少はありますが、ある事に関わってくるんですよ。ほら、『brave』って『勇気』という意味がありますよね？

『・・・？』

あー、やっぱり分かりませんか？ま、それはおいおい発覚するので放置するとして・・・次はリースですね。

「（エリイ）リー姉のはやっぱり友達を大切にする人だからそういう関係で？」

そうですね？友人の存在がいかに大切かを物語ってるような歌ですし、そういうのを大切にするリースだからこそその曲だと思ったんですね。

「（奏）へえ・・・？結構深く考えてんだな。」

「（エリイ）・・・それよりもさ、今だから言うけどなんであたし

のは全部テイルズのゲームミュージックなわけ？」

エリイがゲーム好きだから。それ以上それ以下の答えなんてないですよ？

「（エリイ）酷いつー!!」

「（奏）でもよ、『The Arrow was shot』って結構カッコイイ曲だと思うけどな？」

「（エリイ）あ、そうなの？」

「（鈴）心変わり早っー!!」

ルティアは『流星のビヴロスト』です。

「（オリヴィエ）『流星のビヴロスト』……？聞いたことない曲ね……」

「（真琴）えーと……確か……（真琴歌唱中）……ってやつ？」

そうそれです。結構いい曲だったので。ちなみに私は原典ゲーム未プレイです。

「（一夏）……それだと意味ないんじゃないのか……？」

まあ、それは放置で。本当ならもう一個、『重大な秘密が発覚した時』のも予定していましたが、……止めました。

「（ルティア）じゅ、重大な秘密って……なに？」

これは……今明かすのは大変アレな内容なのですよ。明かすことだけはまだ許されないのですよ。あれ過ぎて曲が決められなかった

のですよ。

「(セシリア)いつ明かしますの?」

大体・・・文化祭の頃辺り?

「(ラウラ)辺り、というのはどついつことだ?」

そうとしか言いようがないんですよ・・・

「(ルシエラ)そして私のは・・・気まぐれで決めた、なんてことはないでしょうね?」

無いです。とは言っても聞いて『あ、これイメージに合ってなくね!?!』と思って。

「(篝)クールで知的な、というイメージらしいな?」

はいそうです。

「(奏)・・・なあ・・・作者、最後の『???』は何だ?また誰か増えるのか?」

増えますよ?奏、アンタにやもつと困ってもらいますからね・・・?

「(奏)ふざけんなオイ!!今でさえもう何度死にかけたと思ってんだよ!?!」

「(一夏)このゲームって確か・・・作者がやりこんでいたゲームじゃなかったっけ?」

私がやりこんでいたのは一作目です。二作目は五〇時間くらいでしたよ？

「（真琴）・・・オリヴィエ・・・」

「（オリヴィエ）・・・セカンド・ジハード第二次聖戦の開戦の準備ね・・・？分かってるわ・・・」

「（ラウラ）・・・そいつは一体どんな奴だ？」

今は前情報になりますけど、すぐに出てきます。見た目は『綺麗』  
『知的』が合いそうなんですけど、実際は超ド天然でかなり行動が過激だったりします。

「（ラウラ）・・・むう・・・。嫁が「（奏）だからお前のが『嫁』だって何遍言えば分かるんだお前は！！」・・・婿が「（奏）婿でもないけどな！！」取られてしまうのか・・・？」

まあ、またあの『天災』が関与している、ということだけは言っておきましょうかね？

「（リース）・・・じゃあ、今回はここまで。ここで次回予告するね？」

〈次回予告〉

何事もない平和な日々が続いていたある日。

突如1 1に現れた転校生。

彼女が1 1を混乱に陥れる・・・

次回、#27 荒れる1 1、第二次聖戦勃発！？そして奪われた奏の1

そして乙女は嫉妬に狂い、小動物は号泣する・・・？

P.S. は各自考えてください。

#Other オリジナルキャラクターイメージミュージック一覧(後書き)

今回出た歌の中で『この歌詞知りたい』という人いましたら報告ください。

掲載はあまりしたくないので、検索を推奨しますが、どうしてもといわれたらやります・・・



#27 荒れる1 1、第二次聖戦勃発！？そして奪われた奏の――

（前

転校生、襲来！

奏の運命は如何に！？そして奪われたのは！？

乙女達の行動は！？

#27 荒れる1 1、第二次聖戦勃発！？そして奪われた奏の |

Side Liece

HR前。

《・・・1 1二崎、校舎内にいたら至急職員室まで来い。繰り返す。1 1二崎、校舎内にいたら至急職員室まで来い。》

「またあのクソ姉があ

・・・

放送がかかったと殆ど同時に奏は職員室まで走っていった。

697

「・・・何があつたの？奏があんなに全力疾走するなんて・・・」  
「・・・私から簡単に説明しよう。リース達が来た時と同じ感じで、ちょうどあの時もこうやって放送で呼ばれてな。」  
「へ、へえ・・・」

シャルロットもちよつと引いてた。実際そうだったのかは私も知らないんだけどね・・・

「・・・(こそこそ)」

「で？そこでこそ動き始めたラウラ・ボーデヴィツヒさん？何

をしているの?」

エリイがこそごとと教室から出ようとしていたラウラを見つけて、呼び止めた。

「尾行だ。嫁の行動は逐一確認しておかないといけないからな。」

「・・・それ、ストーリーカーと同じことしてるよ?それにな兄は絶対に浮気しないから安心してほしいんだけど・・・」

「行くべきだと思う!」

「ついてくべきだと思うわ!私も!」

「・・・(コクコク!!)」

「・・・あれ?ルティア?なんかおかしいよ?そんな積極的な子だったっけ?」

「・・・あーあ、行っちゃった・・・」

「というかシャルロットは行かなくていいの?」

「うーん・・・、僕は・・・いいかな?後が怖いし・・・」

ちなみにシャルロットの選択は正しかった。

・ 尾行した組は全員、織斑先生からありがたい出席簿を買ったから・・・

S i d e K a n a d e

「千冬さ」（ガスツ！）織斑先生だ。・・・織斑先生、またっすか!？」

入りざまに言った内容が悪く、いきなり出席簿。

「お前の言う通り、『また』だ。諦める。」

「また手紙でいきなり届いたとかいう話・・・？」

「・・・信じたくないだろうが、事実だ・・・」

渡された手紙を見る。

【やほー、奏ー

今回も突然だけどまた秘蔵っ子をそっちに送ったからねー

その子の面倒、リーちゃんたちと一緒に見てあげてね？

そうそう、その子、かなり奏のこと気になってるから気をつけてね？

P・S・ 女狐のIS、完成したから。姉さん脅すのはよくないよ？】

「・・・織斑先生、今すぐ屋上から飛び降りて頭力チ割って死んでもいいですか・・・？」

「自殺沙汰は止める。事後処理が面倒だ。転校生はもう来ている。」

「なら今すぐどこかへ逃亡していいいわけない！！」ラウラ・・・？」

「・・・お前ら、何をしていた・・・？」

そこにいたのは、ドアを開け放った体勢のままのラウラを筆頭として、真琴、オリヴィエ、ルティアだった。

「え、えーと・・・」

「それは・・・その・・・」

「・・・へう・・・」

直後、出席簿が火を噴いた。

「・・・はあ・・・」

「奏、なんだか辛そうだね・・・」

「また転校生か？」

机に死んだように突っ伏す俺に、ギャラリーのごとくわらわらと人が集まる。シャルロットを筆頭にして、だ。

ちなみに前にはシャルロット、その横に篝、セシリア。

「・・・もうやだあの姉・・・」

「・・・諦める。あの人の破天荒さは元からのものだろう？」

「そこまで破天荒なんですか？奏さんのお姉さんは・・・」

「破天荒で済むだけマシだと思っぜ？」

「・・・最悪だ・・・」

そしてHRを迎えた。俺にとって悲劇のHRが・・・

「えーっと・・・今日は転校生を紹介しまーす・・・」

教室中が急にざわつきだした。

「転校生!?!」

「こんな時期に!?!しかもまたうちのクラス!?!」

「誰だろ誰だろ!?!こんな時期だから気になっちゃうんだよねー!?!」

ちなみに誰か、というのは知らないが、俺は一応存在は知っている。大方女子だろ?男子で新しくESを起動させることが出来た人間は俺と一夏以外の情報がないんだし。

「はぁ・・・。また部屋割を考えないといけません・・・。では、」

入ってきてください……」

やつれたような山田先生の合図(?)で入ってきたのは……

黒髪……いや、漆黒の髪を持った少女だった。

「綺麗な髪……。真つ黒でつやつやだ……」

「スタイルいいな……。モデルみたい……」

「足細ーい……」

こんな言葉が飛び交っていたが、一番大きかったのは……

「胸大きいのが羨ましいい　　っ!!!」

……男子いるんだし、それ考えての発言を頼むぜ?

「では、自己紹介をお願いします……」

「……サギリ・カンザキ……。よろしく……」

後ろのディスプレイには『神崎 沙霧』と表示されているが、なぜか読み方は欧米式。……どういうことだ?



「ええと、神崎さんはいわゆる帰国子女なので・・・皆さん仲良く・・・」

そこまで言い終わらないうちに神崎は動き始めた。

・・・俺の前に来た？なんで？

「・・・」

「・・・な、なんだ？」

少しの沈黙。それが嫌。

だが、その沈黙は神崎の行動で終わることに。

「・・・あのさ、一体何を・・・」

「・・・ん。」

「むぐうつ!?!?」

突然唇を奪われた!!いきなりしな垂れかかるように首に腕回してきたと思ったら同時にだぞ!?!俺今回巻き込まれだよな!?!?

S i d e I c h i k a

・・・突然奏が転校生にキスされた。うわ、なんたるこれ、デジャ  
ヴ？

しかも長い。かなり長い。まるで見せつけてるような感じで長い。  
・・・あ、奏が机叩き始めた。ギブか？

「・・・っ！？な、なんだ!？」

急に寒気がした為、後ろを向いた。

後ろには・・・

『・・・・・・・・』

夜叉が、魔王が、魔神が、鬼がいた。

「カナチャン・・・？」

「ドワイウコトカセツメイシテクレナイカシラ・・・？」

怖っ！！これB級ホラーより怖いぞ！？片言！片言になってる！！

「・・・奏って堂々と女の子の前でキスできるんだね・・・。凄いなあ・・・。」

「・・・お前は私の嫁だろう・・・？何をしているんだ・・・？」

二人も怖い！！奏、逃げる！！

「~~~~~」

「・・・よく見たら小動物がいた。頬膨らませて涙目の。何これ可愛い。篝がなんだかトランスしてる。ああ、あれは下手したらお持ち帰りされるタイプだ。」

なんだろう、ルティアって天性の小動物性があるのか？

・・・あ、ようやく離れた・・・と思ったら抱きついた！？



・・・あれ？死んで・・・ない？

「・・・奏は死なせない。死ぬんだつたら一人で勝手に死んで・・・」

か、神崎が止めていた・・・！しかもなんかどっかで見たことあるようなISで・・・

「・・・ん」

「だーっ！抱きつくな！邪魔！いろんな意味で邪魔！！」

「・・・」

「聞いてねえ

っ！！！！神ざ「・・・沙霧。」は

！？」

もう一回忠告しようとしたら挟まれた。

「・・・私の名前。沙霧・・・。そう、呼んで欲しい・・・」

「・・・だったらあ！沙霧！さっさと自分の席に行け！！お前の席はあそこだろ！？」

俺が差したのは俺から見てかなり後方の空席。

「……(フルフル)」

なのに首を振った。……バカ!?

「……私の席は……」

『あ

っ!?!?』

突然俺の膝の上に座りやがった!!前が見えない!前が!

「だ　か　ら　　!!自分の!指示された席に行けって

言っただよ!!」

「……いやなの……?」

うぐっ……

だ、だが……負ける訳には……

後ろが怖いし……

「……カナチャン……マケタラユルサナイカラネ……」

「フフ・・・ウフフフフ・・・」

怖い怖い怖い！！アレ怖い！何この迷ひ神！？

なんて焦っていたら・・・

パンー！！

「さっさと指定された席へ行け馬鹿者。いつまで迷惑をかける気だ。

」

「うっ・・・」

ありがたい出席簿を食らい、千冬さんに首根っこを摘まれて連行されていった。

「・・・解放された・・・」

俺はこういっのがやっとだった。主に精神的意味で・・・

唇。俺の受難はまだ続いていた。

休み時間にはPart 1。

「……」

「……／／」

「……」

「……ぎりぎりぎりぎり……」

「……なあ、この構図はどうにかならないのか？」

俺の両腕には沙霧とルティアが抱きついている（ルティアはしがみついている、と言っても過言じゃないけど）。

そして唸る真琴に齒軋りするオリヴィエ。

故に両側から柔らかいものが四つ、押しつけられている。正直理性もやば……くはない。視線が辛いからそのおかげで気にならない・

「さあね。僕は知らない。」

ああ、シャルロットが不機嫌になっていく……



休み時間にはPart 2。

「奏！いつまでそうしているつもりだ！！」  
「知るかボケ！俺に聞かれても困るわ！」

また沙霧に抱きつかれていた。

「・・・ええい、いい加減嫁から離れろ！」  
「じゃねえ婿だ！それにどちらでもねえ！！」  
「・・・嫌。」  
「・・・そこまで嫌なのか・・・！」  
「・・・絶対に嫌。」

・・・ああ、こんな対立ムードが悪化していった・・・

「ならば実力行使でやるまでだ！嫁は私のものだからな！！」

「・・・違う。奏は私のもの・・・」  
「俺はどっちのもんでもねえってば!!」

腕を引っ張られた・・・つてかまた肩抜ける!脱臼する!!マズいからマズいから!!

昼休み(Side Ichika)・・・

「・・・一・・・夏・・・」

奏に呼ばれてみてみたら・・・

な、なぜか顔が真っ青なだけ!?

「お、おい奏!?大丈夫かよ、顔真っ青だぞ!?理由は分かんなくもないけど!!」

「これが・・・大丈夫に・・・見えるか・・・よ・・・」

そう言っただけは力尽きて倒れた。

原因はそう、今日の転校生、神崎だ。

今現在も、『いつ抱きつこうか』と、奏を虎視眈々と狙っている。はつきり言っと、あれは虎の目だ。獲物を狙う虎。

だが、それを許さないメンバーがついに立ちあがった・・・

「オリヴィエ！セカンド・ジハード第二次聖戦！第二次聖戦やるよ！！」

「分かってるわ！！第二次聖戦よ！私たちの尊厳と奏を守るための第二次聖戦よ！！」

「私も混ぜてもらおう！これ以上嫁の自由を奪われるのはたまらなからな！！」

・・・ラウラまで参加しやがった。あれは・・・なあ？

「・・・かな兄、大丈夫・・・じゃなさそうだね・・・」

「これを大丈夫と言える奴の目を俺は疑うね・・・」

「・・・むー・・・」

「・・・うー・・・」

珍しくシャルロットとルティアが何もしないで唸っていた。

「……皆さ、ちょっとは奏のことを気遣う、ってこと出来ないのかなあ……？」

リース、今回はその言葉に俺は激しく同意をしたい。奏が死にそう  
だ。

「いやー、荒れてるわねー。」

「つつくなー……、ボケえー……」

「り、鈴さん……。止めてさしあげたら……？」

「えー？こついう時の奏ってそうそう見れたもんじゃないわよー？  
なんか弄りがいがあるっていうか？」

鈴は奏の頬をつついたりして遊んでいた。完全におもちや。

完全に殺伐とした雰囲気があるこの教室に、突然開戦の音が聞こえ  
た。

声の主は・・・もちろんあの三人。

『沙霧！放課後第一アリーナでバトル（よ／＼だ）！！』

#27 荒れる1 1、第二次聖戦勃発！？そして奪われた奏の――

(後

次回予告)

ついに始まった第二次聖戦。  
セカンド・ジハード

渦中の少女、沙霧が見せた圧倒的な力。

そして、奏の唇は再三奪われる・・・

次回、#28 セカンド・ジハード 第二次聖戦、開戦

そして、ラッキースケベも再臨する・・・

#28 第二次聖戦（セカンド・ジハード）、開戦（前書き）

さあバトルです！第二次聖戦です！非常に無益な戦（ピチューン）

#28 第二次聖戦（セカンド・ジハード）、開戦

第一アリーナ。

・・・デジャヴが。

「・・・鈴。」

「・・・何よ。」

「・・・何故俺はまたアリーナ観客席の椅子に縛られているのでありませうか？」

「・・・聞かないで・・・。あれを思い出させないで・・・。」

鈴に聞いたたら突然震えだした。

今回は鈴も完全に被害者の一人だったようだ。

あの気迫に競り負けて、澁々せざるを得なかったらしい。



ついでだが、ルティアとシャルロットは参戦しなかった。・・・W  
hy?

アリーナ内部（三人称）。

「絶対に負けない絶対に負けない絶対に負けない・・・」  
「勝つてやる勝つてやる勝つてやる勝つてやる勝つてやる・・・」  
「・・・嫁は私のものだ・・・。絶対にやらんぞ・・・」

アリーナの中では、この三人がかなりやる気を出していた。

相手は当然、今回の騒動の根源、神崎沙霧。

当の沙霧は、というところ・・・

「・・・奏、見てて。絶対に勝ってくるから・・・」

完全にOut of 眼中だった。

「・・・作戦を練るぞ。」  
「・・・隊長、作戦を私たちに・・・」  
「・・・うむ、今回の作戦は・・・三人で包囲し、逃げ場を失わせ  
て潰す作戦だ。」  
「・・・了解しました。」  
「では・・・ポジションだが・・・」

この三人はあくまで沙霧に勝つことだけを考えていた。そのための  
作戦会議。物凄い連携を見せようとしていた。

Side Kanade

「そっぴゃシャルロットとルティアってあれに参加しないでいいの  
か？」  
「いいのー！」  
「じ、ここにいる方が・・・いいもん・・・／／／」

・・・どういふことだ？

「・・・ルー、もうちょっと大胆に言ったら？」抱きつけるからだもん！』とかさ？」

「そ、そついうことじゃ・・・ない・・・もん・・・／＼／」

・・・最初から聞きづらかったけど・・・

「どういふことだ？」

「か、奏は関係ないの！関係ないわけじゃないんだけど関係ないの

！！」

「は？」

「・・・えとね？奏、女の子には意地っ張りにならなきゃいけないことがあるってことなの・・・かな？これ・・・」

「・・・分かるわけねー・・・」

「（リー姉、リー姉！！）」

「どうしたの、エリィ？」

「（内緒話内緒話！！ちょっとこの二人にドッキリしかけようと思つてー）」

「（・・・それは・・・どうなんだろう・・・？）」

「（だーいじょうぶだつて！こつでもしないと二人とも意地っ張りなままだよ？）」

「（・・・それは・・・そうかもしれないけど・・・）」

「（だから、後ろから二人をドンツ！つて押してあげて抱きつかせてあげたらどうだろうかなーつて思ったの！協力してより 姉！！）」

「（・・・不本意だけど・・・ま、いつか。）」

（リースがシャルロットの、エリィがルティアの後ろに立つ）

『せ の つ ー ！ ！ 』

『せのっ!』

は？

ドンッ!

「わわっ!?!」

「ひゃうっ!?!」

いきなりシャルロットとルティアが押されてこっちに来たあっ!?!?

押したのは・・・エリイと・・・リース!?!?

「い、ごめんね奏・・・」

倒れてくるため、結局二人は・・・



アリーナ（三人称）。

「作戦通りだ！やるぞ！！」

「了解！！」

「絶対に倒す絶対に倒す絶対に倒す……」

「……三対一……」

三人が一斉に指定された場所へ動く。

沙霧は動く気配がない。

「当たれえっ！！」（ラウラ）

「いつけえっ！！」（オリヴィエ）

「殺すうっ！！」（真琴）

三方から一斉に放たれる射撃。

それが全て沙霧へと向かう。

沙霧は動かない。

「……スペリオルビット完全展開、各方面へ4つずつ防御モードで……」

そう呟いた瞬間、彼女のISの背中 of 翼のような部分から計12個のビットが射出され、各方面に盾を展開した。

「なっ!?!」

「全方位防御!?!」

「……嘘……」

全員が啞然としている中、沙霧はビットを周囲に彷徨わせる。

「これが私の絶対防御。誰も私を落とすことは……できない。」

「そんな訳があるかあっ!?!」

「有り得ない!絶対防御なんて存在するわけない!?!」

「防御の隙間、撃ち抜いてあげる!?!」



S i d e K a n a d e

「絶対防御！？ビットを使った完全防御！？……おいおい姉さんよ……、一体何を作ってくれたんだよ……」

俺は驚きと呆れが同時に来ていた。だつてさ？いわゆるチートだぜ？チート。

絶対防御なんて普通は存在しないんだぜ？それなのに完全防御を実現したとかチート以外の何物でもねえぞ？

） 数分後 （

もう一度アリーナ。

「あの防御が……」

「ぬ、抜けない……!?」

「盲点が……見つからないよ……!?」

この完全防御に悪戦苦闘していた。

「……今度は……こっちが行く!」

沙霧が言うや否や、両肩、腰のレールガンが全部前を向いた。

「……スペリオルビット、砲撃モードで展開……」

そして、今まで盾の機能を持っていたビットから砲門が現れ、形もこの字になった。

「……いけ!」

Side Kanade

「・・・分かった!!」

「ひゃわあっ!?!」

「な、なにになに!?!?どうしたの奏!?!」

突然声をあげた為だろうけど、ルティアとシャルロットが驚いた。

「どっかでのIS見たことあるような・・・って思ってただけ  
どようやく謎が解けた!!」

「は!?!?アンタあのIS見たことあるの!?!?」

「あのIS自体は見たことないが・・・そっくりなものなら見たこ  
とある!!!あれは・・・」

『あれは・・・?』

一斉に息を飲む。

「両肩と腰のレールガンから・・・フリーダムだ!!!フリーダム!!」

「フリーダム？」

「いやいやいや、奏、あれはストライクフリーダムじゃないのか？」

「だったらあの肩のレールガンはどう説明するんだよ!？」

「俺もあのビットで返すぜ!？」

一夏と言い争いに。

「あのさ、一夏にかな兄……？」

「なんだよエリイ?」

「あれってさ、フリーダムとストライクフリーダムを足して二で割ったようなISで決着つけねばいいんじゃないの？」

『それだ!!!』

またまたアリーナ。

「わっ、たっ、こっ、これっ、だ、弾幕っ!?!弾幕すぎる!?!」

「このままだ……ジリ貧よ……!」

「このまま……引き下がれるかああああああつ!?!」

ラウラが沙霧に弾幕の嵐を掻い潜りながら呐喊。

だが。

「・・・グングニル。まずはあなた・・・」

「しまっ・・・」

最後まで言うまでもなく、投合されたグングニルが直撃。これによつて・・・

「まっ、まだまだ！まだ私は（プシュウウウ・・・）なっ!？」

シュヴァルツエア・レーゲンが白煙を噴き出した。

その画面には『シールドエネルギー残存量0、戦闘続行不能』と表示されていた。

「くそっ!!」

ラウラ戦闘不能に・・・

結果、二人の敗北はほぼ確定になって（オリヴィエは遠距離型なた

め、真琴はラファール・リヴァイヴなので機体こそは万能型だが、彼女自身の戦闘スタイルが遠距離固定射撃型なため）・・・

沙霧が圧勝・・・

S i d e   K a n a d e

・・・マジ!?一人で三人に圧勝!?

「嘘・・・!?!?」

「信じられませんわ・・・!?!」

俺の一つ飛んだ後ろで見ていた鈴とセシリアの正直な感想。驚愕し  
かない。

「・・・あ、シールドバリアーが解除された。」

エリイがそう言った時、風が吹いた。

上を見たら・・・

「・・・奏」

沙霧が・・・って!?

上空でIS解除、そのまま重力に従って落下!?

「って待ておい!止められねえ支えられねえ被害者が増えギヤ

ッ!!--」

『きゅ

っ!!--』

無論、俺の腕に抱きついていたルティアと、いつのまにか後ろから  
しな垂れかかっていたシャルロットにも被害。

椅子を一脚俺＋沙霧の体重でブレイク、後ろに倒れた。

「……さ、沙霧デメエ……（ふにっ）（ふに?）」

・ なんか柔らかいものに触れたなー……と思ってその方を見たら……

「……／／／」

・……マジごめんなさい、ルティア、ごめんなさい。胸に手が当たってました。掴んでました。

「かな兄えっちー!」

「ま、待て、これ事故!!事故だから!!／／／」

「じゃあ僕のこれも事故なんだよね……?後ろにいた僕も悪いんだけど……」

「へ?」

上を見たら……

「……あんまり見ないで……奏のえっち……／／／」



スカートを押さえて抗議の目を持って俺をじーっと見ていたシャルロットさんが・・・

「・・・二人ともマジでごめんなさい・・・。・・・というか俺なにも悪くないんだよな！？悪いのは上から落ちてきた沙霧であって、この状況を作り上げたあの三人も悪いんだよな！？」

「そ、それは・・・そうだけどお・・・。／／／」

「・・・／／／」

「ルティアもそろそろ腕を解放してっ！？」

S i d e  
R i n

「・・・なんなのよこのデジャヴは・・・。なんなの横の甘々空間は・・・！！」

「・・・これが・・・『砂糖が吐けそう』空気ですね・・・」

目の前でまた奏が沙霧にキスされていた。



「とうか何かある度に抱きついたりキスしたりするのやめろ!!  
こっちがもたんわ!!」

「・・・や・・・なの・・・?」

・・・ここは心を鬼にして・・・心を鬼にして・・・

「・・・私の全て・・・奏のものだもん・・・」

ピシッ!

・・・あ、空気が凍っ・・・

「・・・奏・・・?これはどういうことなのかなあ・・・?」

「えっ、ちょ、シャルロットさん?いきなりどうしたのでありませんか?何を突然そんな艶のない目をつけて痛い痛い痛い!!ルティア、腕を締めるな!!色々とマズいから!!」

「う　　っ!!! (恒例涙目小動物化+頬膨らませ)」

） 翌日（Side Ichika）

「……奏？」

「……へんじがない、ただのしかばねのようだ（棒読み）。」

「エリイ、ふざけちゃダメだよね？」

「えー？今のかな兄の状況を説明したのに……」

朝来た時、奏は机に突っ伏していた。

まるで生氣を感じられないのはなぜ……？

そして考えられる方を見たら……

「……？」

特に変動がない。ジーンと奏を見つめているわけではないが。

「おはよ、一夏。」

「ああ、おは……よ……」

「……／＼／＼」

「どうしたの、一夏？」

「・・・いや、なんでも・・・ない・・・」

ルティアさん？なんでそんなにつやつやしてるんですか？何かあったんですか？怖いです。

「・・・奏、昨日何があった？」

「・・・聞くな・・・、昨日は生き地獄だった・・・。もう嫌だ・・・。死にたい・・・」

・・・何があったんだ、ホントに・・・

（昨日の真相。

奏がエリイ経由でルティアに唇を奪われました。しかも長時間、大人な感じで）

「……俺は一体……どうなるの……？」

#28 第二次聖戦（セカンド・ジハード）、開戦（後書き）

（次回予告）

7月。

1001号室では事件が起きた。

同刻、少女の声にならない悲鳴が上がる。

次回、#29 1001号室女難戦線

奏の貞操は如何に！？悲鳴をあげたのは！？

#29 1001号室女難戦線(前書き)

女難戦線勃発!

『羨ましいぞこのヤロー!』と思う方いるかも?

・・・ただ、ね・・・やり過ぎたかなー?・・・と思う節もありまして・・・



Side・・・?

「ゴメンね？手伝ってもらっちゃって・・・」

「いや、気にすんな。」

放課後の廊下、夕日が赤く差し込む中をシャルロットは奏と歩いて  
いた。

手に持つのは今月の学年行事、臨海学校について書かれたプリント  
である。

744

「・・・でもよかったの？今日予定とかあったと思うんだけど・・・」

「

「いや、ねえぜ？」

そんな感じで歩いていると、教室に着いた。

「・・・ふう。これでおしまいと。」

「そうだな・・・。んっ・・・。さてと・・・」

「あっ、あのねっ！？奏、ちよ、ちよっといいいかな！？」

「ん？なんだ？」

シャルロットが大声をあげて奏を呼びとめた。

「えつと、その、ぼ、僕ね？ちよつと気になってただけど・・・」  
「・・・なんだよ？」  
「ど、どうして手伝ってくれたのかなーって・・・」  
「そりやお前なあ・・・。好きな奴を手伝うのに理由があるかよ？」  
「えっ!？」  
「えっ、つて・・・」

驚くシャルロットに困る奏。

「ほ、ホント!?好きって・・・えっ!？」  
「好きって・・・そのまんまだよ。英語で言えば『LOVE』だな。」  
「・・・奏・・・」  
「・・・シャルロット・・・」

夕焼けが二人を照らす中、お互いの顔が近付・・・

「……あれ？」

（……くことはなかった。ここはシャルロットの部屋。？）  
シャルロット）

ぼーっとした頭で状況を整理する。（

・・・えーつと、ここはIS学園の一年生寮の僕の部屋・・・、  
時間は早朝六時半・・・

「・・・夢・・・かあ・・・」

(状況を把握したシャルロットは盛大な溜息をついた。)

・・・もうちよつと・・・せめて十秒くらい見ていられたらなあ・・・

(見ていた夢の残骸に思いを馳せ、その名残を惜しむ。目覚めと共に消えゆく夢の内容も、執着が故になかなか消えずに残っていた。まるでビデオのように・・・)

「・・・／／／」

(ボンっ！という音が合うような勢いでシャルロットの顔が赤くなつた。意識がはっきりして来るうちに、夢の内容が恥ずかしくなつてしまう)

・・・が、学校の教室で・・・二人きりで・・・なんて・・・

・・・ど、ドキドキしてる・・・

・・・ぼ、僕は何を考えてるんだろうね・・・

(先月の学年別トーナメント以降、本来の性別に戻ったシャルル・デュノアことシャルロット・デュノアは、今はもう奏とは別室になっていた)

「・・・あれ？」

(一週間に一、二回ほどこのような夢を見るため、分かっているも隣のベッドに奏を求めて見てしまう。その時、ベッドが空っぽだったことに気付く。すでに起床してどこかへ行った、という感じではなく、最初からそれは使われていなかった、という方が正しい)

「・・・まあ、いいや・・・」

・・・そ、それよりも夢の続きを・・・

・・・でも、せっかく夢なんだし、もうちょっとエッチな内容でも僕は・・・全然・・・

「・・・な、何を考えてるんだろうね、僕は・・・//」

(カーツと赤くなつた顔を隠すように頭の天辺まで布団を被ると、  
ドキドキと高鳴る心臓を宥めるのに必死になるシャルロットだった。  
・  
・  
)







奏と一線を越えようとするその直前までだったのだ・・・

越えようとした瞬間、目が覚めた・・・というか飛び起きてしまった。

S i d e K a n a d e

チュンチュン。

「……ん……」

あー……雀が鳴いてやがらあ……。早く起きると鳴いてやがらあ……

もう5分ほど寝させるや……。頼むから……

ふに。

・・・？なんだ・・・？なんだこの柔らかい物体は・・・こんなもん布団の中にあっただっけ・・・？

ふにふに。

・・・邪魔くせえ・・・

むにゅっ。

「・・・んうゝ・・・」

・・・待てい。今の感触はここに確実に存在してはならないものだったぞ・・・

それに今明らかに俺の声じゃない何かの音が聞こえたぞ？それにこ

の声は男の声ではない（もし男の声だったら今俺は自殺を考えるね。うん）。

・・・じゃあこっちのは・・・

ふにっ。

「・・・んっ・・・」

・・・ダブルで嫌いな予感が・・・

・・・こっついう時は眼を開けて現実を確かめるべきだと・・・

「・・・」

『すう・・・すう・・・』

・・・寝息は二つ。しかしどこからかはわからない。というか多分俺の横。

・・・っ!!

・・・今何か頭の中をよぎった！効果音があつたらキュイイーン！だ。今なら分かる。俺はニュータイプだ・・・絶対。

勢いよく布団をめくると・・・

・・・なぜかラウラと沙霧がいました。皆さんどう思っただろうか？全裸ですよ？全裸。

年頃の女の子が全裸でベッドに潜り込んでいたとあると大変如何わしいことをしていたのではないか？と思う奴が多いと思うが・・・

断じて誓おう、俺は何もしてないと！！

「・・・ん・・・。なんだ・・・？もう朝か・・・？」

「うにい」

「ちよっ、まっ、お前ら隠せ！前！前！！見えるから！見えるか  
ら！！！」

冗談で言ってるんじゃない！ホントに見える！！胸とか隠さなきゃばいとかか！！なにもかも！！

「・・・夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ・・・？」

「・・・（コクコク）」

「『包み隠さぬ』の意味が違うっ！！服を着ろって言ってんだよ！！  
『・・・？』」

「・・・なんで『お前は何を言ってる?』みたいな顔をしてんだよ!!」

「日本ではこういう起こし方が一般的だと聞いたぞ・・・? 将来結ばれるもの同士の定番だと・・・」

「お前に間違えた一般常識を教えた奴を今すぐにも修正してやりたいよ・・・」

「・・・(フルフル)」

沙霧が頭を横に振った。・・・いい加減お前も服を着ろや。

「・・・こっちの方が・・・定番・・・」

「・・・ちょ、おまつ、なにこっちに接近して・・・」

「んっ・・・」

「@ ± ÷ @ @! ?」

「なっ・・・! ?」

「・・・またですよ・・・? また奪われましたよ? 俺が何かしましたか・・・?」

「・・・はふ・・・。これが一般的・・・」

「それも違うわケえっ!! 第一世間一般じゃ朝裸になって起こし

に来る夫婦はいねえわ!!」

ラウラはラウラでわなわなしていた。

「……奏!」

「なん……っおおおいつ!?!」

いきなりラウラが飛びかかってきた!?

俺はそれをどうにか横っ跳びで回避!!

「……なぜ避ける!!」

「避けるわ! 一体何がしたいんだお前はあああああつ!?!」

今度は沙霧が!?

「……避けちゃ……ダメ……」

「だから避けるっつってんだろっが!! お前らアレか!?! 痴女!?! 痴女なのか!?!」

「ええい、さっさと私に唇を奪われる!!」

「奪うのは私……!」

「奪われてたまるかよ!! つか逃げ場がねえっ!?!」

唯一の逃げ場、玄関への行き先はラウラが、窓は沙霧が押さえてしまっていた。

「とにかく逃げ「逃がさん！」つえええつ!？」

逃げようとしたら足払い・・・ならぬ腕払いをされて一回転して床に背中を打ちつけた。いてえ・・・

「う、腕を決めるな・・・!いてっ、いだだだっ!折れっ、折れる!!!」

「お前はもう少し寝技の訓練をすべきだな？」

「何の、寝技だよ・・・!!」

「む・・・」

沙霧がなんか唸ってるけど今は知るかよ・・・!!

「し、しかし、だな・・・?ね、寝技の訓練をしたいのなら・・・わ、私が相手になってやらなくもないが・・・/!/」

「お前はバカか!?変なことを軽々しく口にするなよ!!」

「お、お前の口から言いたいのだな!?よ、よかるう・・・/!/」  
「違うっ!顔を赤らめるな!先月のアレをお前は反省しねえのかよ!」

「アレ、とは?」

「あれは・・・アレだ・・・その・・・き・・・、キスだよ・・・

!/!/」



・・・直で言うと結構恥ずかしい。頭の中にまだ残ってやがった。

「・・・セカンド、だったからまだ気は楽だが・・・」

「・・・わ、私は初めてだったぞ・・・。・・・うむ、嬉しくは・・・

・あるな・・・////」

「・・・私も・・・////」

「知るか・・・よ・・・っ！」

「なっ!?!」

締められていた腕を抜き、ベッドから降りた瞬間。

「・・・どーん。」

「へぶうっ!?!」

沙霧に後ろからのし掛かられた。うつ伏せだから胸板が痛い。

「・・・捕まえた。これで奏は私の・・・」

「させるかあっ!?!」(ドンッ!?!)」

「あっっ・・・」

「ぐええっ!?!」

ラウラまで乗ってきやがった!?!?

「嫁は渡さん！私のもものだ！！」

「……違う。私の……」

「……どっちのでも……ねえ……！！」

だ、誰か……助けて……くれ……！！

S i d e L u t h i a

「はづうゝ・・・//」

あ、あの夢が・・・あの夢があゝ・・・//

だ、だって、だって・・・//

「・・・あれ？」

・・・奏君の部屋の前に・・・来ちゃった・・・

貴様あつ！奏は私の嫁だと言っているのが分からないのか！？  
そっちこそ・・・奏は私のお婿さんだって言ってる・・・！！

・・・なん・・・だろ？

・・・た、助けに行った方がいいのかな・・・？見た方がいいのかな・・・？

「・・・ルティア？」

「あれ？ルー、どうしたの？」

「・・・抜け駆け？」

姉さんたちと真琴が来た。

「え、えとね、奏君の部屋が騒がしいから・・・、見た方がいいかなって・・・でも・・・／／／」

「・・・髪の毛変にはねてないかな・・・」

「・・・服おかしくないかな・・・」

「・・・こんな時に身だしなみ整えるかな・・・？」

・・・だって、だらしないうって思われたくないもん・・・／／／

「あーもうめんどくさいな二人ともおっ！さっさと入るよー！！」

「わ、私が入る！！」

「わ、私が入る・・・！／／／」

ガチャ。

・・・あれ？鍵が開いてる？なんでだろ・・・？中の騒動が原因かなあ・・・？

(僅差でルティアが先に入った)

「か、奏・・・く・・・」

「かなちや・・・」

「かな兄ー？お？おお！？これはこれは・・・」

「奏？だいじよ・・・」

S i d e K a n a d e

「げっ!？」

「む？」

「ん？」

「・・・なんで・・・真琴たちがいるんだよ・・・!？」

「いやー、修羅場ですねーかな兄？」

「こんなところに能天気なんだだだだっ!! 避ける! 体が二つに裂けるっ!!」

抵抗できなくなっている状況（両腕を引っ張られている）を見られた！！

「……………」

リース……………顔を赤らめるな……………！！

「……………い……………」

真琴？

「ずるいよ！！私だってそこまですたことないのにいつ！！私だつてえ！！」

「脱ぎだすな

っ！！お前もかい！バカか！

お前はバカか！！それとも痴女か！？そして張り合うな！！服を着ろ！！こんなところ見られたら確実に俺に悪い噂が立つだろうが！！それを考えるポケエっ！！」

「貴様も乱入するか！いいだろう、貴様も倒して私が嫁と結ばれる！！」

「……………負けない……………」

「（ドスッ！）ごっふうっ！？」（腹に突進を喰らう）

ちよ、ホント誰か助けて！？

「……ルー、こういつ時に行動すればポイント高いかもよ？それとも誘惑する？……どうする？」

「えう、そ、そによ、それは……あう……／／／」

「じゃあ脱げ　　っ！！」(ルティアの服を思い切り引つ張り上げる)

「きゃあああああっ！？／／／」(上半身下着のみになる)

「脱がすなボケ　　っ！！」



このラウラ&沙霧の争奪から始まったこの女子全裸事件・・・

寮長の山田先生が大慌てで飛んできて、更に織斑先生が来るまで騒動が続いた。

山田先生ですら止められなかったこの騒動、それをあっさり止めた織斑先生はホントに救世主<sup>メシア</sup>だった。

・・・何故皆出席簿で俺だけ殴られたのか。それが凄い不服だけど。

おまけ

オリヴィエは一体・・・？

「えへえ・・・ケーキ食べ放題だよ・・・えへへえ・・・じゆるり・・・あー・・・ももなんだあ・・・おいしそー・・・ふえへへえ・・・」

まだ夢の中だった。かなり幸せそうな夢。幸せなのはそれでいい。

#29 1001号室女難戦線（後書き）

（次回予告）

女難戦線終了後、朝食を取る一同。

そこに慌てて入ってきたシャルロット。

なぜだか様子がおかしいぞ？

次回、#30 少女に舞い降りた奇跡（？）

それは奇跡といえるのか・・・？

#30 少女に舞い降りた奇跡(?) (前書き)

#29の事後です。

シャルロット、珍しく遅刻で・・・？

### #30 少女に舞い降りた奇跡(?)

「……………」

場所は変わって一年寮食堂。

傍から見れば『羨ましいじゃねえかこのヤロー!』なんて言われ  
そうな、俺にとって地獄の時間から解放された……

んで、今は遅めの朝食を取っていた。

右隣にはラウラ、左隣には沙霧、正面には真琴、その両隣りにリー  
スとエリイ。ルティアはちよつと離れた位置にいる。

メニューは……単純にハムエッグ定食。ラウラはパン＋コーンス  
ープ＋チキンサラダ。沙霧は俺と同じ。真琴はご飯＋味噌汁＋炒り  
卵。

リースたちは全く同じ目玉焼き定食。

「……………どうした?欲しいのか?」

俺の視線(というかどんなもん頼んだのかな……)と見てい  
ただけ)に気付いたラウラが、『わけてやるっ』と言って口に入れ  
て…………!?

「おまつ!?!それは無いわ!?!」

「ん?どうした?かじっていいぞ?」

「そんな食べ方出来るかよ!?!一夏じゃあるまいし!?!」

「へっくし!?!...ずず...」

「どうした?風邪でも引いたか?」

「...風邪は引いてないと思うんだけどな?」

「うっ...」

よく見たら真琴が呻っていた。

「ふむ。・・・嫉妬か？」

「にやっ!?!」

・・・猫？

「自分が出来ないものだから、羨ましいということか？」

「うぐっ・・・うっ・・・!?!」

ああ・・・、悔しがってやがるよ・・・。あまりにも凶星過ぎたからか・・・？

S i d e L u t h i a

(ルティアはこの時、誰よりも食事が進んでいなかった。理由は簡単・・・)



し・・・下着姿・・・奏君に・・・み、見られちゃった・・・//  
ど、どうしよ・・・。だ、大丈夫かな・・・？変な子って思われて  
ないかな・・・？//

あうう・・・、姉さんのバカあ・・・//

(朝の事件が原因だった。)

S i d e K a n a d e

「わああっ！ち、ちこつ、遅刻つ、遅刻するうっ！！」

不意に珍しい声が聞こえた。

声の主はパタパタと忙しそうに食堂に駆け込んできて、余っている  
定食からとりあえず一番近くにあったものを手に取った。

「シャルロット、おはよ。」

「えっ、あっ、み、皆、お、おはよう!」

リースが自分の隣に手招きして呼び寄せた。

でもまあ、シャルロットの焦りも良く分かる。シャルロットがこんなに遅く食堂に来ること自体が珍しいが。

今から朝食を取り始めていたら大急ぎで食べないと遅刻確定だ。

「どうしたんだ？時間にうるさいはずのシャルロットがこんな遅くに起きてくるなんてさ？寝坊か？」

「う、うん、その、ちよつと・・・その・・・寝坊・・・」

「へえ？シャルロットでも寝坊なんてするんだね。」

「う、うん、まあ・・・ね・・・。その・・・二度寝、しちゃったから・・・」

・・・まあ、なんか引つ掛かりがあるが気にしな・・・

キーンコーンカーンコーン。

「予鈴だっ！」

「ウソっ!？」

「今日のSHRって織斑先生だったよね!？遅れたら死んじや……  
つてかなちゃん!？」

「俺はまだ死ねないっ!!死んでたまるかああああああっ!!！」

誰よりも先に疾走。……が。

「ま、待ってよ皆……」

シャルロットが遅れていた。慌てて食べ終えて片付けて……だか  
ら。

「……しょうがねえ、なっ!!！」

「わわっ!?!?!」

シャルロットの元へ戻って、抱える。

ちなみに他の面子は……

先に行っていた。あの沙霧ですらもつけない。やっぱり千冬さんが  
怖いのだろう。

靴を履き替え（シャルロットのも俺が履き替えさせた）、階段までの廊下を走る。

途中、『いやあああああああつ！！ちっ、ちこっ、遅刻っ、遅刻するうゝゝゝゝゝゝゝゝっ！！』という、聞き覚えのある声があったが、気にしない。こっちの方が遅刻するわボケ！

本鈴間近の廊下には誰もいない。だから全速力で走れる。

え、こ、これって、お、お姫様だっこ・・・だよね!? わっ、わっ、  
これって・・・これって・・・ええっ!? / / /

う、内履きも履き替えさせてもらったし・・・ / / /

・・・今日の奏・・・大胆・・・ / / /

Side Kanade

「・・・見えたっ！教室のドアっ!!」

ギリギリのところの間合いそっだ!!

「そおおおおおおおいっ!!...!!」

Bannon!!

ドアを踵で蹴り開ける。

「あ。」

・・・体勢悪

ドフッ！！

「ごはっ！？」

「か、奏！？」

シャルロットを守ろうとして無理に体勢を変えた為、背中を打ちつけた。

「・・・ご、これで・・・セー」「ご苦労なことだな。しかしアウトだ。」・・・あれ？」

・・・なんで本鈴前に鬼教師が？

「教室のドアを蹴り開けるとはよくないな。それに・・・」

教室内では・・・

「いーなーデユノアさん・・・」

「お姫様だっこ・・・羨ましい・・・」

「私だつてされたことないのに・・・」

ざわついていた。

「また面倒を呼び起こしてくれたからな・・・」

「・・・すみません・・・」

「え、ええと・・・すみません・・・」

ちなみにシャルロットは下ろした。さすがにいつまでもしているのは悪い。

「二崎は放課後教室を掃除しておけ。デユノアは連帯責任でだ。二回目は反省文提出だ。いいな？」

『はい・・・』

二人揃つて意気消沈。

そのまま空気を読めないチャイムが鳴つて、SHRが始まった。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ?」

一応言うが、授業こそ少ないが、一般教科も当然IS学園で学ぶ。中間テストは無いが期末テストもある。ここで赤点なんて取ったら夏休みは地獄の補習だ。

・・・多分手えさえ抜かなきゃ俺は余裕。

「それと、来週から始まる郊外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ?三日間だが、学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように。」

・・・ついでに、七月頭の校外実習・・・すなわち、臨海学校だ。三日間のうち、初日は丸々自由時間。もちろんそこは海だから、十代女子はテンション上がりっぱなしだ。

・・・ちなみに俺はその真逆だ・・・酔い止め買い込んでおかないと・・・

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ。」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか?」

クラス一のしつかり者こと鷹月の尤もな質問。俺も気にはなっていた。



「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する。」

「ええっ！？山ちゃん一足先に海に行ってるんですか！？いいな〜！！」

「ずるい！私にも一声かけてくれればいいのに！！！」

「あー、泳いでるのかなー？泳いでるんだろうなー・・・」

・・・ないだろ。視察に行ってる。仕事なんだから、そんな遊んでなんかいないだろ。

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行っているんだ。遊びではない。」

はい、と揃った返事をする一組女子。相変わらずのチームワークのようだ。

放課後、夕日が射す教室で俺とシャルロットは掃除をやらされてい

た。

他の生徒は誰一人としていない・・・はず。

普段IS学園は専属の清掃業者が隔々に亘ってピカピカにしている。

『学舎の掃除を生徒にやらせないというのは如何なものか』と一時期保護者の反発があったらしい。けど、『わずかな時間もIS教育に回した方がいい』ということで決着がついたとか。

・・・つーことで、教室掃除というのは専ら生徒への軽い処分or罰として使われることになったらしい。

で、それを今まさに体感しているわけであって・・・

「・・・なんでドア蹴り開けただけでこんなことやらなきゃならねえんだよ・・・」

「とか言いつつちゃんとやってるんだよね、奏って。」

「そりゃ・・・まあ、言われたことはやりきるのが俺の主義だし。」

そう、俺は言われたことはやりきる主義。面倒くさがりな人間なのに、だ。

「ん、んん〜っ!」

「・・・っと、無理するなって。机運びは俺がやるよ。・・・つかそれ、岸里の机だろ。教科書全部置きっぱで、通称『フルアーマー机』とか言ってる・・・」

「へ、平気だよ・・・。一応これでも専用機持ちだし、体力は人並みに・・・きゃっ!」

と、言葉が続けたシャルロットが重さに負けて足を滑らせた。

それを俺はとつさに後ろから体を支えた。・・・ついでに机は足で倒れるのを防ぐ。

「・・・つたく、怪我したら元も子もねえだろ?だから言ったる?無理するなって。後は俺がやるから・・・」

「う、うん・・・。あ、ありがとう・・・」

ちなみに状態は軽いお姫様だっこ状態。

「・・・っと。作業再開つとな・・・」

「あっ・・・」

シャルロットを離れた時、残念そつな声がした。

「どつした?」

「えっ！？あつ、その、な、なんでもないっ！！！！／／／」  
「・・・？そうか。なんでもないならいいけど・・・」

今朝の遅刻といい今といい、今日のシャルロットはどうしたんだ？

S i d e   C h a r l o t t e

・・・わ、わ、し、心臓痛いバクバクいつてる・・・／／／

か、顔大丈夫かな？変な顔になってないよね？／／／

（罰掃除とはいえ、願ってやまない二人きりという状況に、シャルロットの胸は自然と高鳴りを増していた。

夕暮れに染まる教室が、ふと今朝見た夢の光景と重なり、シャルロットの顔は耳まで真っ赤に染まる。

顔から痛いほどに熱を放っているのが自分でも分かるくらいで、普段の落ち着いた様子は微塵も見られない）

ど、どうしよ、な、何か喋らないと……！うう……、で、でも、言葉が出ないし話題もないし……

「そついえばぢ。」

「ひゃいっ!?!」

こ、声裏返っちゃった!!!?

「……ど、どうした? すっげ声裏返ってたけど……」

「な、なななんでもないなんでもない! なんでもないよ!? ちよ、ちよっと考え事してただけだから! それだけ! うん! / / /」

「……そ、そうか……」

(特に疑問を持ったわけでもなく、奏は素早く、かつ的確に机を運んでいく)

……机が戻っちゃったら、掃除も終わっちゃうんだね……

「……先月から気になってたんだけどさ、この際聞こうと思ってな?」

「う、うん。なにが?」

「いやな? 前に『二人きりの時はシャルロットって呼んで』って言

つてただる？俺はてつきりまだしばらく男のフリをするのかと思つてただけどよ。翌朝あつさり女子に戻ったからなにがあつたんだろ、って。」

「あ、え、えつと、それは・・・その・・・／／／」

（それについては、ちょっとした事情があつたため、シャルロットとしてはそれを聞かれると痛いところであつた。

いつもはきはきとした受け答えも、今日はずっとしどろもどろだ）

「・・・まあ、言いたくなきゃ別に言わなくていいけど。どうせ気になつてただけだし。」

「き、気になつてたの・・・？／／／」

「そりゃな。」

「そ、そう・・・、そうなんだ・・・／／／」

（『ええと・・・』と迷いながら言葉を探すシャルロット。

何度か奏と窓の外を交互に見てから、意を決したように口を開いた）

「その、ちゃんと女の子として・・・ね？奏に見て欲しかったから・・・なんだ・・・。だから、二人きりの時だけ女の子・・・っていうのも変つていうか・・・卑怯つていうか・・・、その・・・、と、とにかくっ！奏が原因なんだよ！？／／／」

「・・・いや・・・その、なんだ？すまん。」

「べ、別に謝つてほしい、とかいうことは無いんだけど・・・」

(そういつて、シャルロットはぷいっと顔を窓の方に向けた。夕陽の影響もあって、彼女の顔は際立って赤く見えた)

「・・・でもまあ、俺はちゃんとシャルロットのこと女の子ってみてるし・・・」

「えっ？それって・・・」

(予想外な言葉に胸がときめくシャルロット。だが、そこはやっぱり唐変朴・オブ・唐変朴ズ、織斑一夏を超えるキング・オブ・唐変朴、二崎奏であった)

「だってな？俺は事実をそのまま持つてくるタチだし。シャルロットの場合だってシャルロットが女の子っていう事実をそのまま持つてきただけだからな。」

・・・え？

(シャルロットの後ろでカラスがかあ、と鳴いて飛んだ。実際に飛んだわけではないが、ぼかんを通り越してカラスが飛んだ、である)

ううう~~~~っ!!奏って・・・!奏つてえ~~~~!!

( 心の中で地団太を踏むシャルロット。顔もさっきまでとは違う、憤りの赤色だった。)

しかし、はつきりと言つ訳にもいかず 言えるわけもなく

こつなるのだから、どうしようもない)

・・・奏って、本当はわざとやってるんじゃないのかな・・・？

( しかし、奏はわざとじゃないのだからよりタチが悪い。別名『唐変朴王』と言われるほどの唐変朴故に不意にドキリとすることを言い、心がときめくような行動をとる。)

その度シャルロットは瞬間湯沸かし器の如く顔から湯気を出してしまつのであつた。現に、今朝のあのお姫様だつこの時も心臓が飛び出そうだったのだから)

・・・まあ・・・その、嬉しくはあるんだけどね・・・

本当ならそういうことは自分だけにして欲しいんだけど・・・難しいんだよね・・・

「・・・しかしさ、何か別の呼び方考えないとな・・・」

「えっ、な、なんで!?!?」

「だってさ、やっぱり前の癖がまだ残ってやがるからたまーに『シャルル』って呼んじゃまったりするじゃねえかよ。」



「え、あ、うん、確かにね……。で、でもいいの？」  
「シャルロットが良いって言うならな？」

（そう答えた奏に、シャルロットは慌てて首を縦に振る。音が鳴る勢いで）

「う、うんっ！ぜ、全然大丈夫！！せ、せっかくだし、お、お願い……しようかな……／＼／＼」

（動揺と興奮が入り混じり、つつい声が半音高くなり、最後の方は消えるような声になる。

）  
どうにか隠そうと試みるシャルロットだが、心の中ではお花畑が広がっていた）

わくわくっ！？ど、どうしよう、どうしよう！？奏ってどうしたんだろ！？い、いきなりで心の準備がまだっ！？……あ、でもこれって……僕のこと……特別な存在として……扱ってくれてるんだよね……？

（心の中の盛り上がりがついつい口から洩れそうになるが、それをどうにかこらえ、シャルロットは奏の答えを待つ）

「……そうだな……『シャル』、なんてどうだ？こっちの方が

呼びやすいし、親しみやすいだろうし。」

「シャル・・・うん！いい！いいよ！すくいい！！」

「そ、そうか・・・。そんなに思いっきり反応するって・・・。まあ、えらく気に入ってくれたようでよかったです。」

「う、うん。シャル・・・シャル、かあ・・・。うふふ・・・。／＼」

（ただいまシャルロットの心の中のお花畑では、三等身のシャルロット×4が手を繋いで踊っていた。もしテロップ機能があつたならば、『しばらくお待ちください』と書かれているはず）

「・・・あ、シャル。今度の日曜日だけだよ。」

「うん、なに？」

「買い物かねえか？水着、持ってねえだろ？俺も新しく水着買いたいし、他にも色々調達しないといけないものもあるからさ。」

「そ、それって・・・ふ、二人きり・・・で？／＼」

「それしかねえだろ？今ここに居るの、シャルと俺だけなんだしよ。」

「う、これって・・・で・・・と・・・？デート・・・だよね・・・？デート・・・なんだよね・・・！？」

（瞬間、シャルロットは世界が止まる音を聞いた。）

「・・・あー、でも待ち合わせに・・・なるか？ 駅前の噴水広場でよ？」

「・・・いいよ・・・いいよ・・・！」

(この時のシャルロットはもう、何も聞こえていなかった。頭の中には奏との二人きりのデートのことで一杯一杯だった)

Side ????

「・・・」

この時、人影が二つ動いた。

この話を聞かされていたのだ。

「・・・ずるい・・・」

「・・・卑怯・・・」

誰もいない廊下に、羨望の音が木霊した・・・

#30 少女に舞い降りた奇跡(?) (後書き)

〈次回予告〉

日曜日。シャルロットと奏の買い物(シャルロット的にはデート)。

だが、やはり邪魔者は付き物だった。

そして、おまけもやっぱり・・・

次回、#31 お出かけ(二人+一匹(?))

一年寮にくぎゅボイスが響き渡る・・・!?(アリア・アニメネタ  
あります)

#31 お出かけ（二人＋一匹？）（前書き）

シャルと奏が出かけます。

なんかついてきます。

おまけになんか壮絶なことになります。

# 3 1 お出かけ（二人＋一匹？）

日曜日。シャルとの約束の日だ。と言ってもただの買い物。

「今日は・・・買い物日和だなあ・・・」

いつもの普段着（黒い半袖インナー（無地のもの）の上に赤色の半袖薄ジャケットを羽織り、下はブルージーンズ）で部屋を出た瞬間だった。

「どこ行くの？」

・・・見つかってしまった。普段着だろう（白のタンクトップに同色の薄手のパーカー、青のデニムジーンズ）オリヴィエに。なんでこんな時に居んの？

「・・・どっか。」

「どっかってどこよ？・・・もしかして・・・デート？」

「デートじゃないことだけ言っておく。ただの買い物だよ、買い物。」

「私も一緒に行きたいな。私も買い物行きたいし。それに・・・デートになるし・・・／／／」

「・・・ちがは。」

「つーねてーって！！！！」







「  
#

」  
.....  
「

「  
．．．あ、奏！遅かった．．．ね．．．  
」  
「  
．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．  
」

息を切らして現れた俺に声をかけるシャル。だが、途中で声が消え

た。

「にゃ

っ!!」

まだしがみついていたオリヴィエがいたからだ。ちなみに靴を履くために出来上がった一瞬の隙に走ったものの、すぐ捕まった。

シャルの顔が・・・怖・・・

「・・・奏・・・？なんでオリヴィエがいるの・・・？」

「・・・捕まった。朝部屋を出た時に鉢合わせして去ろうとしたら連れて行って・・・」

「ふうっ!!・・・ううっ・・・」(涙目。八重歯がちょっと覗いていたりする)

「・・・マジでごめんなさい。マジで。わざとじゃなくてホントに偶然だった・・・」

「・・・」

仏頂面で無言の圧力。・・・なんたる、この首を絞められた鶏の気持ちは・・・

「・・・よし、@クルーズでパフェおごろう。」

「・・・パフェだけ？」

「・・・俺の全財産投資してでもケーキ食べ放題ドリンク飲み放題にする。」

「ん。あと、はい。」

手？

「手、繋いでくれたらいいよ?」

「・・・そういうことか?ならいいや。ほらよ。」

・・・よくよく考えてみりゃよく知らない街+異国だからはぐれたらアレだな。大変だ。

「・・・」

あれ?違う?なんでシャルは黙りこくってるんだ?

「・・・大丈夫か?」

「ひゃわあっ!?!?な、な、なにがっ!?!?」

「いや、シャルが。やっぱり今日帰って休むか?」

「う、ううん!?!?いいっ、平気っ、大丈夫っ!?!?いい、行こっ!?!?」

急に歩き出すシャル。

引っ張られるように歩き始める俺。

そして・・・

「ううん・・・やあ・・・やあ・・・ぐすっ・・・」

もう完全に泣き始めていたオリヴィエだった（引きずられながら）。

Side . . . ? ? ? (三人称)

「 . . . . . 」

「 . . . . . こんなことして良かったのかなあ . . . 」

「 さ、さあ . . . 。 で、でも一夏さんは今忙しそうでしたし . . . 」

駅前へと向かって歩き出した奏とシャル、そして奏に引き摺られたままのオリヴィエ。その姿を物陰から見つめる三つの影があった。

ちょうど青になった横断歩道を渡って人混みに消えると、頃合いとばかりに茂みから姿を現す三つの影。

一人はアンテナの如くピコピコと動くアホ毛。一人は躍動的なツイントール。一人は優雅なブロンドヘア。つまり、真琴、鈴、セシリアであった。

「……ねえ……」

「なんですの？」

「……あれつて……手え握つてない……？」

「……握つてるわね。明らかに。」

百人が見たら百人がそう返すであろう言葉を鈴が発した時、真琴は手にしていたペットボトルを握りしめた。

それはグシャツ！と音を立てて中央が形を変えた。

「……そつか……。やっぱりそつか……。私の見間違いでもなくて、白昼夢でもなくて、やっぱり……。そつか……」

「……真琴？アンタ目怖いわよ？単色になつてるわよ？」

「……よし、心中しよう……」

「ちょ、ちょっと！？それはさすがにダメですわ！！もうちょっと考えましよう！？」

「……いいの……。一緒に死ねばきつと結ばれるから……。あはは……」

手には形が変わり果ててしまったペットボトルが。血も流れ出ている。

げに恐ろしきは十代乙女の純情。……いや、これは純情とは言い切れない。最早病的な恋慕の情の行きついた果て、だろう……

「ほう、楽しそうだな。では私も混ぜるがいい。」



「……私も。」  
『!?!』

いきなり背後からかけられた声に、驚いて振り返る鈴とセシリア。

真琴は……

「ふふ……ふふふ……うふふフフ……」

完全に病んでいた……

背後に立っていたのは、鈴とセシリアにとって忘れもしない先月二人が完全敗北を喫した相手……ラウラと先日の暴走転校生・沙霧だった。

ラウラはちなみに制服、沙霧は白インナーと青いパーカー、年季の入ったジーンズだった。

「なっ!?!あ、アンタいつの間に!?!」

「そう警戒するな。お前たちに危害を加える気は全くない……寧ろ今は別のことがある……」

「……(コクコク)」

「……沙霧さんが頷くなら分かりますけど……、それでも私たちは信じられませんわよ!?!」

二対一で負けたことが鈴とセシリアの懐疑心を強くしていた。それを弱めていたのが沙霧だが。

「あの事は・・・まあ許せ。」

「・・・ゆ、許せて・・・アンタねえ・・・！」

「・・・はい、そうですかと言えるわけが・・・！」

「そうか。では私は嫁を追うので、これで失礼するでしょう。」

「・・・私も奏を追いかけないと・・・。」

そういつて本当にすたすと歩き始めた為、今度は鈴とセシリアが止めた。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ!!！」

「そうですわ!追ってどうしようといっています!?!」

『混ざる。ただそれだけ(だ)』

見事なユニゾンで言われ、逆に怯む二人。ここまでストレートに言われると逆にびっくりだ。

「待ちなさいよ!未知数の敵と戦うには情報収集が先決、そうですよ!?!」

「ふむ、一理あるな。ではどうするのだ?」

「ここは追跡の後、二人・・・いえ、オリヴィエさんのことも踏まえると三人の関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきです

わね……ってあら？沙霧さんは？」

「……いない……わね……」

……そんなこんなで謎の追跡チームが出来上がっていた（一人は完全に黒いオーラに染まりきっていた）。

「・・・ここが水着売り場、ね・・・」

俺たち（+引きずってきたオリヴィエ）は駅前のショッピングモール、『レゾナンス』の二階にいた。

ここは凄い。交通網の中心でもあるため、電車・地下鉄・バス・タクシー・・・。なんでもござれのそろい踏みで、市内のどこからでもアクセス可能、逆も然りな場所だ。

交通網もだが、中も凄い。食べ物は欧、中、和を問わず完全完備、衣服も量販店から一流ブランドまで網羅。各種レジャーも抜かりなく、老若男女幅広く対応可能。『ここにはないなら市内のどこに行っ

でもない』と言われてるくらいらしい。一夏からの情報。

「・・・じゃあここで一旦別れるか？俺は色々と買わないといけな  
いから・・・」

「そ、そうだね・・・。あ、あのね？奏はさ、その・・・僕の水着  
姿・・・見たい？／／／」

「・・・そりゃ、海だろ？泳ぎたいし。・・・どうなるかわかんね  
えけど。」

「そ、そっか。じゃ、じゃあ、せっかくだし新しいの買おうかな？  
／／／」

・・・なんだ？今日はなんなんだ？

「じゃあ男女で売り場は違うし、俺は他にも回るから。」

「あつ・・・」

手を離したら何故だかシャルは妙に心残りのあるような声を出した。

なんか『欲しいものがあるのになかなか言い出せない子供』のよう  
な顔で見つめてくる。

「・・・どうした？」

「あつ、うつん？なんでもないよ？」

「そっか。・・・ついでにこれ、引き剥がしてくれるか？」

「・・・あー・・・、忘れてた・・・」



シャルによってオリヴィエ、水着コーナーへ誘致。

「・・・さて、俺は・・・まず薬だな・・・。酔い止め買い込んでおかないと・・・。」

(ちなみに・・・)

「・・・あれ・・・？さつき・・・ここ通った・・・」

(沙霧は完全に道に迷っていた。迷子である)

「・・・奏・・・どこ・・・？」





水着（ダークブルーのトランクスタイル・・・というか男性用ってトランクスタイル以外にあるのか？）も買って、酔い止めも買いだめしておいて（十箱。これくらい買っておかないと多分・・・いや絶対ダメ。それくらい俺は乗り物に弱い）・・・

「・・・時間にはまだ早いけどもう戻っておくか？その方がいいかもな。」

と戻ろうとした時だった。

「・・・!？」

俺の横を通り過ぎた女の子に目を奪われた。

可愛かった、とかそういうものじゃない。

・・・なぜか、ホントに何故かだが・・・

その子の顔が、ルティアそっくりだったのだから・・・

( ルティアはと言つと・・・ )

「だ、だから、ここは・・・こうなつてて・・・こうで・・・」  
「すつがくやだ                      つ！！べんきょーきら                      い！」

「そ、そんなこと言つても・・・ね？ダメだから・・・、姉さん・・・」  
「・」

( エリイに数学、特に連立方程式のやり方を教えていた。エリイが唯一苦手とする数学。それ故ルティアも必死だったりする )



「・・・あれ？」

戻ってきたら、シャルもオリヴィエもいた。

「お前らもう買い物終わったのか？・・・にしては・・・何もないけどな・・・」

「あ、ううん？ちよつとね、奏に選んで欲しいなあ・・・って。」

「わ、私も・・・お願い・・・／／／」

「・・・そういうことか・・・。・・・んじゃ、実物見に行くか？大体のイメージにも合わせた方がいいと思うし・・・」

そのまま女性用水着売り場に足を入れた・・・が。

・・・すげえ。色にしる形にしる、男性用の比じゃねえぞ・・・

・・・しっかしなあ？

・・・まあ、シャルにもオリヴィエにも意見を求められているわけだし・・・多少の我慢はするかな・・・

日曜日ということもあって、女性客の姿が目につく。

あっちも女物の売り場に男が入ってきたことですぐ気付いたらしい。

「そのあなた。」

「・・・あ？」

「・・・ここには俺とシャル、オリヴィエしかいないよな？」

「男のあなたに言ってるのよ。その水着、片付けておいて。」

いきなり言われた。ふざけんな。

女性優遇制度のせいだ。そんなものがあるおかげで男は見ず知らずの相手から命令されるんだよな・・・が。

「知るか。自分でやれ。」

こういうのが果てしなく嫌いだ。ただでさえ面倒なのを、見ず知らずの相手にいきなり『やれ』なんてアホらしい。

「ふうん、そういうこと言うの？自分の立場が分かってないみたいね？」



と警備員を呼ぼうとした。・・・させるか。

「・・・刑法二二三条、『脅迫』。」

「は？」

「『生命、身体、自由、名誉又は財産に対し害を加える旨を告知して人を脅迫した者は、二年以下の懲役又は三十万円以下の罰金に処する』。まずこれがアンタにかかる罪。」

「っ!？」

「他にもあるぜ? 刑法第二二三条『強要』。『生命、身体、自由、名誉若しくは財産に対し害を加える旨を告知して脅迫し、又は暴行を用いて、人に義務のないことを行わせ、又は権利の行使を妨害した者は、三年以下の懲役に処する』。更に刑法二三〇条『名誉棄損』。『公然と事実を摘示し、人の名誉を棄損した者は、その事実の有無にかかわらず、三年以下の懲役若しくは禁固又は五十万円の罰金に処する』。・・・これだけ全部、今俺が訴えたらアンタの人生どうなるんだろっなあ?」

「くっ・・・、お、覚えてなさいよ!!」

・・・勝った。俺にそういうことで勝てると思ってるのか? バカが。

「・・・す、すごいね奏って・・・」

「ま、まさか・・・全部覚えているとか・・・?」

「一応暇な時に六法全書流し見して刑法と民法、民訴に刑訴は全部覚えた。」

「・・・もつなにも驚かなくてもいい自信がついた・・・」

「あたしも・・・」

・・・呆れられた。

「と、とにかく水着を見てくれるかな？」

「おう、いいぜ。・・・おお？おおお？」

「じゃ、じゃあ！・・・こっち来て！！」

返事をした瞬間、二人に引っ張られた。

何故引っ張られるし、と思っていたら一緒に試着室に入ることになった。

S i d e . . .

「 . . . あれ? 」

「 . . . 隠れたようだな . . . 」

「 . . . ! 」

追跡していた四人。しかしセシリアが何かに気付いた。

「 あ、あの、皆さん? 私ちよつと急用を思い出しましたので . . . 」  
「 どうしたのよ、セシリア? 」

「きゅ、急用ですわ。お、おほ、おほほほ……」

と言ってセシリア離脱。すたこらさつさと行ってしまった。

「……なんなのよ、アイツは……」

「……」  
「というかアンタはいい加減その殺気を押さえなさいよ……！怖  
いから……」

真琴は相変わらず黒々とした殺気を放出し続けていた。

S i d e C e c i l i a

急用と偽って鈴さん達から離れた私。

実は・・・

「一夏さん！」

「ん？セシリアじゃないか。どうしたんだ、こんな所で？」  
「わ、私もちよつとお買い物・・・おほほほ・・・」

一夏さんを見つけたから。

「そっか。俺も水着を買いに来たんだ。」  
「じゃ、じゃあ！私と一緒に行きませんか！？私もまだ水着を買ってなくて！」

（ここでセシリア、大胆に誘う）

「おう、いいぜ。」  
「じゃ、じゃあ……！」

（セシリア、ここで腕を組んだ）

「で、では参りましょうか……／＼／」  
「あ、ああ……／＼／」

後は……鈴さんにバレないように……！！

S  
i  
d  
e  
  
K  
a  
n  
a  
d  
e

なんで一緒に入ることになるんですかね？お二人さん？

「ほ、ほら、水着って実際に着てみないと分かんないし・・・ね？」  
「だ、だから・・・ね？」

ね？とか言われてもさ・・・正直困るんだよな・・・

女性のみ試着可能とか言われてるけど。試着に使用された水着は店員が回収してクリーニングするとか。・・・どんだけだよ。

「す、すぐ着替えるから待っててっ！／＼／」  
「・・・いや、そればかりは外に出た方が・・・」  
「だ、ダメっ！！」

・・・オリヴィエさん？ダメって言われても困るんですけど？

「だ、大丈夫、じ、時間はかからないから・・・」

言うなり上着を脱ぎだすシャルとオリヴィエ・・・

「ちょ、おまつ！？」



無論、俺は慌てて後ろを向く。見るわけには・・・見るわけにはい  
かないっ!!

と、いつかこの二人は何がしたいんだ!?

S i d e C h a r l o t t e

．．．どどどじよ、勢いでやった．．．／／／

い、勢いでやった．．．／／／

へ、変な子って思われてないよね．．．？／／／

Side  
Olivier

・ ・ ・ つ、つられてやっちゃった ・ ・ ・ / / /

変態なんて思われてないよね ・ ・ ・ ?大丈夫だよね ・ ・ ・ ? / / /

S i d e K a n a d e

・・・目を閉じろ、何も考えるな、無心、無心・・・

・・・ダメだ、女子特有の甘い匂いのせいで集中できない・・・!!

こうなったら・・・

ポ モン図鑑番号順に連想していただけしかない!!

最初は・・・No.001、フシダネ、No.002、フシソ  
ウ、No.003、フシバナ、No.004、ヒトゲ・・・

(数分後(三人称、( )は台本形式で)

( (奏) NO・253、ジュ・・・ジュ・・・ジュ  
254、ジュ イン・・・、その後は・・・ ) トルだ!NO・

「い、いいよ・・・////」  
「わ、私も・・・////」

「あ、ああ・・・／＼／」

ゆっくりと二人を見る奏。その視線を早速感じて落ち着かないように指をもじもじと動かすシャルと、落ち着きのなさが体に現れるほどもじもじしているオリヴィエが。二人に共通しているのは奏の感想を今か今かと待っているだけ、ということだ。

「・・・・・・・・」

肝心の奏はと言うと、フリーズしていた。密閉空間で女子と一緒に＋生着替え＋水着お披露目という三段コンボに困っていた。

（（シャル）か、奏ったらなんで黙ってるんだろ・・・？み、水着が変だったかな・・・？あ、改めて見ると、これって結構大胆な水着だよな・・・／＼／）

（（オリヴィエ）か、奏、どうして黙ってるの・・・？な、なんか言ってくれないと・・・恥ずかしいじゃない・・・／＼／）

シャルはセパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に分かれているそれを背中クロスして繋げるという構造のものだ。色は夏をイメージした鮮やかなイエロー。正面のデザインは胸の谷間を強調するように出来ていた。

そしてオリヴィエは鮮やかな青のタンキニタイプ。美しさよりも可愛さを前面に押し出したモデルだ。中央の小さなリボンがワンピース

ントだ。

「・・・あ、あの、一応もう一つあって・・・／＼／」

「え、あ、わ、私も・・・／＼／」

「い、いや、それでいいんじゃないの！？それがいい！そうした方がいい！！うん！／＼／」

突然また着替えが始まるのではないかと警戒した奏は、反射的に言ってしまった。最後の方はもう意味が分からない。

それ自体はとても異性を喜ばせるような言葉ではなかったが、奏同様、あるいはそれ以上にテンパっていた二人にとっては物凄く褒めてもらえたように聞こえた。

「じゃ、じゃあ、これにするね！？／＼／」

「ちよ、ちよつとレジ行ってくる！！」

「お、おう、んじゃ、俺出てるから！／＼／」

今度は強引に引きとめられる前に試着室を出ようとカーテンを開けた時。

『え？』

「ええっ！？」

「・・・」



ドアを開けた先に立っていたのは、一組副担任の真耶その人だった。そして後ろでは状況に気付いた千冬が頭を押さえていた。

更にその後ろでは、青の水着を持ったセシリアと一緒にいた一夏が啞然とした顔で三人を見ていた。

「・・・何をしている、馬鹿者共が・・・」

次の瞬間、パニックに陥った真耶の悲鳴が木霊した・・・

「・・・!!」

何か聞こえた、その時。

沙霧の髪の毛一本がセンサーのように立ちあがった。

「・・・奏・・・こつち・・・!!」

そして、何かに惹かれるように走り出した。

目的地はもちろん・・・

奏の居る場所。髪の毛のセンサーが示す、奏の居る場所へ。

S i d e K a n a d e

「はあ、水着を買いにですか？でも、試着室に男女で入るのは感心しませんよ？教育的にもダメです！」

『す、すみません・・・』

・・・俺のせい・・・だろうな。最近怒られてばかりなのは・・・

ついでに一夏も来た。セシリアもだ。



「カナチャン・・・？ナニヲシテルノカナ・・・？」

「よし今からお前の将来について話し合おうか。このまま殺気出し続けるならお前に何もしてやらないという方向でいくけどいいか？」

「ごめんなさい許してくださいやめてくださいもうしませんだからやめてえ  
っ！！」

「・・・さつさと買い物を買わせて退散するでしょう。」

溜息交じりにそう言ったのは千冬さんだった。

持ってるのはどうやら水着らしい。土壇場準備？

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所が分からないので鳳さんとオルコットさんと中咲さん、ついてきてください。それにデュノアさんとレギンハルトさんも。」

「・・・どうしたんだ山田先生は？何かひらめいたような顔をした、と思ったら有無を言わず生徒五人を連れて行ってしまった。」

となると・・・。この場に残ったのは織斑姉弟＋義弟、ということ？

「・・・まったく、山田先生は余計な気を使う。」

『・・・え？』

シンク口。凄いなこれ。

「ふう……。行っても仕方がない、か。一夏、奏。」  
「な、なんですか？織斑先生？」

久しぶりに下の名前で呼ばれてぎくしゃくした反応をする一夏。正直俺もちよつと驚いていたり。

「今は就業中ではないからな、名前でいい。私たちはこの場ではただの姉弟だ。奏は私の義理の弟、だしな。」

「あ、ああ……」  
「わ、わかった。」

「……どうやら姉弟水いらず……ということらしい。俺は……まあ義理だし？」

「で、だ。二人とも。どっちの水着が良いと思う？」

そういつて千冬さんが見せたのは専用のハンガーに掛けられた二着の水着。

片方はスポーティーでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出する黒水着。

もう片方はこれまた対局、一切の無駄を排除したような機能性重視

の白水着。

「・・・白の方。」

「黒の方が。」

「いや、白の・・・」

「どうせバレてんだから諦める。癖。昔っから一夏は気に言った方をじっと見る癖があるからよ。それで分かっちゃまったんだよ。あ、俺は一夏準拠で。」

一夏、へこむ。

「・・・まったく、弟が余計な心配をするな。大体、私がそのあたりにいる程度の男になびくような女に見えるか？」

「・・・いや、見えないけど・・・」

「ないだろ。千冬さん・・・じゃねえ、ちー姉には。」

「というか千冬姉、彼氏とか作らないのか？そういう話、一回も聞いたことないしさ。」

「手にかかる弟共が自立したら、な。考える。」

・・・ぐう。

「で、お前らの方はどうなんだ？」

「え？俺？何が？」

「何のことだよ？」

「何がも何も、お前らは彼女を作らないのか？幸い学園内には腐る



ほど女がいるし、選り取り見取りだろう?」

「選り取り見取りで・・・」

酷い。そういう言い方は人としてどうか、と。

「特に奏。お前は・・・そうだな、ラウラなんかはどうだ?色々問題はあるだろうが、あれで一途な奴だぞ?容姿だって悪くはあるまい?」

「・・・いや、それはまた別の話だろ?」

「それに、キスした仲だろう?」

「・・・確かに。」

・・・なんとという四面楚歌。

ちー姉なんてニヤニヤしてやがる。面白がつてやがるよこん畜生・・・

「まんざらでもないか?それとも・・・神崎かセストナ・・・いや、敢えて名前で呼ばせてもらうか。ルティアか?」

「なっ!?!?!」

なんで沙霧とかルティアの名前が!?

「・・・まだそういうのは考えるべきじゃねえと思う・・・。そういうのは・・・アレだよ、結婚とかそこまで考えないと・・・」

ちなみに横で一夏が激しく同意していた。

「・・・お前らは本当に古い考え方を持っているな・・・。ならば容姿はどうだ？好きか？嫌いかな？」

「それは・・・まあ・・・可愛いと思うよ？鼻眞目抜きで。」  
「ほう？」

「あれでもうちよつと一般常識を持っていてくれたらひよつとしたら・・・って俺は何を言ってるんだ！？／＼／」

「見事な墓穴だな。」

「見事な墓穴だった。」

「・・・穴があつたら入りたい！！」

「一夏、お前にも言えることだぞ？」

「うぐ・・・」

「何にせよ、私を心配する前に自分の方をどうにかするんだな。私はまだ、弟共に気を使われるような年ではないさ。」

「・・・あーもう、分かった、分かったよ。変な心配はしない。これでもいいだろ？」

「ああ、それでいい。」

なんか俺巻き添えな気がする。なんで？

S  
i  
d  
e  
  
L  
a  
u  
r  
a

(時は数分ほど遡る。追跡軍団は真琴を覗く面々がシャルロットとオリヴィエの反応に比べて、奏があまりにも普段通り過ぎた為・・・)

『・・・ああ、いつものアレか。キング・オブ・唐変朴、二崎奏か。』

と。そうなるならウラには今にもバレそうな追跡をする必要がない。そう思っただけ水着が並ぶ売り場へと移動した)

「・・・これが全て水着か・・・。この世にはこんな様々な水着があったのか・・・」

・・・ふむ。そういえば私も水着を持っていなかったな。・・・まあ、泳げれば学園指定の水着だろうとなんでもいいだろう。あれはあれで機能的に優れている。代替りのものは必要ないな・・・

(そう思っていた時、声が聞こえてきた。他の女性客のだ)

「しつかり気合入れて選ばなくちゃねー？」

「似合わない水着着ていたら、彼氏に一発で嫌われちゃうもん。」

「他のこと全部百点でも、水着がカッコ悪かったら致命的だもんね

「？」

「……っ!!!??」

(瞬間、ラウラは銃で撃たれたような錯覚を覚えた)

「……そ、そうなのか……!? 致命的……なのか……!? あれでは……マズい……のか……!?!」

(呆然として立ち尽くしていたラウラ。その後、その彼女の白い肌がボツ!!と赤く染まった)

「可愛いと思うよ？ 鼻根目抜きで。」

(いきなり奏の声が……その言葉が聞こえてきたのだった)

「………//」

(突然の言葉に顔は熱を放って紅潮、心臓の動悸は一気にトップギアへ入れたかのように早くなっている。胸が高鳴って止まらない。

いつもは『褒める』『褒めるがいい』と何度も言っていたラウラで

あったが、実際に褒めてもらったことは無く、勿論『可愛い』などと言われたことはない。

そこへきての突然のこの言葉。冷静沈着・ドイツの冷氷と呼ばれたラウラが取り乱すのは仕方のないことだった)

か、か、可愛い……？可愛い……だと……？わ、私が……  
可愛い……かわ……いい……／／／

(意味もなくキョロキョロと周囲を見やっってから、ラウラは胸に手を当てて瞼を閉じる。

普段必要としない意識の集中砲で、コールする番号を何度も間違えながらラウラはISのプライベート・チャンネルを開いた)

(三人称)

同刻、ドイツ国内軍施設。そこでは現在、IS配備特殊部隊、『シユヴァルツェ・ハーゼ』……通称『黒ウサギ隊』が訓練を行っていた。

「何をしている！現時点で三十七秒の遅れだ！急げ！！」

そう怒号を飛ばしているのは副隊長のクラリツサ・ハルフォーフである。

齡二十二。部隊最高齡であり、十代が多い隊員たちを厳しくも面倒見よく牽引する『頼れるお姉さま』。

その専用機、『シユヴァルツェア・ツヴァイク(黒い枝)』に緊急

暗号通信と同義のプライベートチャネルが届いた。

「……受諾。クラリツサ・ハルフォーフ大尉です。」  
『わ、私だ……』

本来ならば名前・階級を言うのが当然だが、向こうの声が妙に落ち着きなく揺れていた為、クラリツサは怪訝そうな顔をした。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、何か問題が起きたのですか？」  
『あ、ああ……。とても、重大な問題が発生している……』

様子がただ事ではないと踏んだクラリツサは、訓練中の隊員へとハンドサインで『訓練中止・緊急召集』を伝えた。

「……部隊を向かわせる必要はありますか？」  
『い、いや、部隊は必要ない……。軍事的な問題では……ない……』  
『では？』  
『クラリツサ……。その、だな……。わ、わ、私は……。か、可愛い……。らしい……。ぞ……』

……。



沈黙。

「……はい？」

それまでの規律整然としていたクラリツサの声が、半オクターブほど高くなる。

ついでに、キリリとしていた口調は突然の意味不明な事態に対して若干間の抜けたものへと変化していた。

『か……か……奏が……そう、言っていて……だな……』

そこまで聞いてクラリツサはピンときた。

「ああ。織斑教官の義理の弟で、隊長が好意を寄せているという、あの『彼』ですか？」

『う、うむ……。ど、どうしたらいい……。クラリツサ……。ここ、こういう場合は、どうすべきなのだ……。？』

「そうですね……。まずは状況把握を。直接言われたのですか？」

『い、いや、向こうはここに私がいるとは思っていないだろう……。』

「……。最高ですね。」

『……。そ、そうなのか？』

「はい。本人のいない場所でされる褒め言葉にウソはありません。」

『そ、そうか……。そうか……。！』

先程まで動揺100%だったラウラの声が、クラリツサの言葉で花開くように明るくなった。

ちなみに、招集をかけた隊員達には、クラリツサがプライベート・チャンネルをしながら筆談で状況を伝えていた。

【隊長の片思いの相手に脈アリ】

『おおおお~~~~っ!!!』と、十数名の乙女の盛り上がった声がある。

なお、この部隊では、ラウラは人間関係に多大な問題を抱えていたのだが、先月のVT事件直後、『好きな男が出来た』という相談をクラリツサに持ちかけた時から全てのわだかまりが解けて消えたのだ。

その時の様子。

「えええっ!? あ、あの、た、隊長に・・・、好きな・・・男っ!」

「私は織斑教官一途だとばかり・・・」

「そうだろう、そうだろう。私もそう思っていた。しかし、だな、あの隊長が! あの! 隊長がだぞ!?」お、男の気を引くには・・・ど、どうしたら・・・いい・・・?』と言ったんだ!」

『きゃあ~~~~っ!!!』

「だから私は真摯に教えた! 日本では気に入った相手を『自分の嫁

にする』という風習があるということをして!」

「さすが副隊長!日本に詳しい!」

「当然だ。私は伊達や酔狂で日本の少女漫画を愛読しているわけではないっ!」

「か、カッコいい・・・」

「そんなかつこいい副隊長が好きです!」

「でも、可愛くなった隊長はもっと好きです!」

「そうだろう!私もそうだ!ああっ、どうして本国にいる間にこうして心を通わせあえなかったのだろうか!」

「確か、こういうときには日本では赤いお米を炊くんですよね!」

「そうらしい。おそらく、血よりなお濃いものがある、という教訓なのだろうな。」

「さすがは日本、痺れます!」

「懂れます!」

「よし、部隊員諸君。現時刻を以て今日の訓練は終了する!今すぐ兵舎食堂に向かい赤い米を炊くぞ!」

「はい、一副隊長(お姉さま)!」

・・・こんな感じであった。

流石は十代乙女(一部二十代女子なのは気にしない方向で)、いがみ合うのも些細な事なら仲直りもまた些細なことで怒るのであった。

・

『そ、それで、だな、今、その、水着売り場なのだが・・・』  
「ほう、水着！！そういえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどの  
ような水着を？」

『が、学園指定の水着だが・・・』

「何を馬鹿なことをっ！！」

『っ！！？』

ちなみに通信先のラウラはかなり驚いていた。

「確か、IS学園は旧型スクール水着でしたね？それも悪くは無いでしょう。男子が少なからず持つというマニア心をくすぐるでしょう。だが・・・しかしそれでは・・・!!」

「そ、それでは・・・？」

ラウラがクラリッサの答えを固唾を飲んで待つ。

「色物の域を出ないっ!!」

「なっ・・・!?!?」

「隊長は確かに豊満なボディで男を籠絡する、というタイプではありません。ですが、そこで際物に逃げるようでは、『気になるアイツ』から前には進まないのです!!」

「な、ならば・・・どうすればいい・・・?」

「・・・ふっ・・・。私に秘策があります・・・!!」

クラリッサの目が、きらりと光った。



おまけ。

「・・・奏え・・・」

「沙霧！？お前もいたのかよ!？」

「・・・くすん・・・」

「で？なんで泣いてるんだ？」

「・・・迷子に・・・なった・・・ぐす・・・」

瞬間、ほぼ全員ずつこけた。

「ま、迷子って・・・お前なあ・・・」

「だって・・・だって・・・」

「  
広  
か  
っ  
た  
ん  
だ  
も  
ん  
・  
・  
・  
」



その二。

「奏、その袋に何が入ってるの？」

「この袋か？水着と新作ゲームと酔い止め十箱。」

「な、なんで酔い止め十箱も・・・？」

「いや、俺乗り物酔い酷いから。」

「・・・奏、薬は用法・用量を守って、正しく使ってね・・・」

#31 お出かけ（二人＋一匹？）（後書き）

次回は特別企画、『第一回ガキの使いやあらへんで！ チキチキコレやってみたかってん 絶対においしい 選手権』をリスペクトして・・・

『第一回これやったら絶対おいしいパスタ選手権』やります！！

どんなカオスなパスタが出来上がるか、お楽しみに！！

#Other 第一回これやったら絶対おいしいパスタ選手権!! (前書き)

カオス、ここに極まれり!

食事中の方、不快感があるかと思しますので御了承下さい。

#Other 第一回これやったら絶対おいしいパスタ選手権!!

「(一夏) 第一回これやったら絶対おいしいパスタ選手権!!」

「(第) ……一夏、これは一体何なのだ？」

「(一夏) ……知らない。昨日突然作者が来て『一夏、女性陣にこれやってくれ。お前が司会で』って言われた。」

「(セシリア) で、これは一体何をすればよろしいのですか？」

「(一夏) ……えーっと……」

(台本を見る)

「(一夏) とりあえず一人最低一品づつ何か持ってきてくれたよな？それを使ってパスタを作ろう、って話。」

「(シャル) か、変わった企画だね……。僕も一応持ってきたけど……」

「(一夏) で、それを全員で食べてみる、って話。優秀賞には……はあっ!?!」

「(鈴) なによ?」

(一夏の手がわなわなと震える)

「(一夏) 『織斑・二崎そのどちらかと一日自由に過ごさせる権利を与える』……だと!?!」なお、これは作者の独断で話が進みます!?!」

「(奏) ……ところで一夏よ……なんで俺はこんな風に縛られ

「ているわけ？」

「（沙霧）・・・逃げるから。」

「（奏）はあ!？」

「（真琴）だってかなちゃん逃げちゃうでしょ？」

「（奏）いや逃げるとかの話は別だろ!？」

（奏、キレる）

「（ラウラ）安心しろ。美味しいものを食わせてやる。」

「（奏）その大層な自信が逆に心配になるんだよお!！」

（床を踏み鳴らす）

「（一夏）と、とにかく!このままじゃ始まんないからやる!!  
まずは・・・箒!」

「（箒）わ、私か!？」

「（一夏）順番的にそう書いてある。」

「（箒）わ、分かった・・・。私は・・・これだ!」

（手元にある布を引く）

「（鈴）・・・これって・・・ただの野菜炒め・・・よね?」

「（箒）野菜炒めだ。これなら当たり障りないだろう?」

「（リース）無難だとは・・・思うけど・・・」

「（エリイ）読者的にはもうちょっとインパクトあった方が良かったんじゃない？」

「（篝）どう考えようと私の勝手だろう！・・・とにかくだ。私はこれをパスタに混ぜる。」

「（一夏）じゃあ調理が終わるまで待機な。お願いしまーす！」

「（???）はいよー、お任せ！」

「（奏）・・・なんか今どっかで聞いたことあるような声が・・・」

） 数分後 （

「（セシリア）見た目は普通ですわね。」

「（ルシエラ）野菜炒めだもの、そこまで変なわけじゃないでしょう？」

（実食）

「（鈴）・・・普通ね。」

「（ラウラ）・・・普通だな。」

「（シャル）・・・普通だね。」

「（箒）・・・当たり障りのないものを選んだからな。普通なのは当然だろう。」

「（一夏）・・・じゃあ奏、ランクは・・・」

「（奏） 5、だな。」

（箒選択、『野菜炒めパスタ』・・・当たり障りないため真ん中の5。）

「（一夏）次は・・・セシリア。」

「（セシリア）私はこれですわ！」

(見せたのは……)

「(ルティア)……チョコ……レート……?」

「(セシリア)そう、チョコレートですわ!」

「(鈴)これ、明らかにハズレ臭がする……」

「(セシリア)鈴さん!? ハズレ臭がする、とはどついついことですよ!」

「(篝)字の通りだろう? 私にも分かるぞ……、それはやったらいけないと……」

「(セシリア)キ　　っ!」

(とりあえず、調理)

「(奏)……なんだ……この甘ったるい……臭い……」

「(エリイ)……臭いだけでも吐きそうな……」

「(リース)……よい子の皆は……真似……しないでね……」

(完成、実食)

『……うぶ。』

「(セシリア)す、すいません……です……」

「(ルティア)……ひ、酷い……味……」



「（オリヴィエ）これパスタに対する冒涇でしょ！？なんなのパスタチョコレートコーティングって！」

「（鈴）信じられない！！なんでパスタにチョコを混ぜるなんてこと考えるわけ！？おかしいでしょ物理的に考えても！！！」

「（リース）・・・ごめん、ちょっとトイレ・・・」

「（奏）髑髏！！髑髏×2！！！」

「（篝）それが妥当だ！私もそれに賛同する！！！」

（セシリア選択、『チョコレートパスタ』・・・壮絶な結果をもたらしたため髑髏二つ）

「（一夏）つ、次は鈴な・・・」

「（鈴）わ、分かった！セシリアのミスした分、あたしが挽回してあげるわ！！あたしのは・・・これよ！！！」

「（真琴）・・・なにかの・・・タレ？」

「（鈴）そ。酢豚のあん。中華風パスタをやってみようって思ったの！！！」

（全員）これなら無難な気がしてきた・・・

（調理開始）

「（奏）・・・お、いい匂いがしてきた。」

「（鈴）へへん。あたしが作ったやつだもん。いい匂いがして当然よー！」

「（エリィ）自家製！？すごっ！！！」

「（オリヴィエ）実家、ひょっとして何か料理屋でもやってた？」

「（鈴）昔中華料理屋やつてたから。」

「（エリイ）・・・しっかしさっきのチョコ Pasta 酷かった・・・。まだ気持ち悪い・・・。」

「（セシリア）もう・・・何も言わないでくださいます・・・？」

（完成、実食）

「（鈴）・・・これおいしくない!？」

「（ルシエラ）・・・おいしいわね・・・。普通にお店に並んでも差し支えないレベルだわ・・・。」

「（鈴）だよね!？やった、勝った!！」

「（オリヴィエ）・・・でもさ、これなんだかあんかけ焼きそば連想しちゃうんだけど・・・。」

「（奏）それは俺も思った。」

「（鈴）それとはまた別でしょ!？焼きそばじゃないんだから!! パスタなんだから!!！」

「（一夏）・・・うーん・・・俺、これ 8 出してもいい気がしてきた・・・。」

「（オリヴィエ）同感。 9 に近い 8 だよな?」

「（鈴）やたつ!！」

（鈴選択、『酢豚あんパスタ』・・・大好評につき 8）

「（一夏）次は・・・シャルだな。」

「（シャル）僕は・・・これ。」

「（鈴）・・・薄力粉と片栗粉を混ぜたやつ?」

「(シャル)うん。これを使って『焼きパスタ』を作ったらどうかなー、って思ったの。」  
「(一夏)なんかうまそうだな。」  
「(セシリア)・・・おいしそう・・・ですわね・・・」

(実際に調理)

「(ラウラ)・・・むう・・・」  
「(シャル)どうしたの、ラウラ？」  
「(ラウラ)・・・嫁が取られる・・・」  
「(リース)まだ分からないよ？今現時点トップなの鈴だし。」  
「(ラウラ)それはそうだが・・・」  
「(沙霧)・・・(フルフル)」  
「(エリイ)沙霧？」  
「(沙霧)・・・勝つのは・・・私・・・」  
「(鈴)燃えてる・・・！沙霧が燃えてるわ・・・！！」

(完成、実食)

「(一夏)・・・なんか煎餅みたいな感じだな。」  
「(奏)・・・これ店に出て欲しいくらいだ・・・」  
「(鈴)くう・・・これ・・・おいしい・・・！」  
「(リース)これ柚子胡椒に結構合うよ？」  
「(ルティア)・・・(ぽりぽりぽりぽり・・・)」

(好評のようだ)

「(真琴)これ・・・ 8くらい出してもいいかも・・・」  
「(オリヴィエ)・・・悔しいけど・・・ 8かも・・・」  
「(シャル)やった!皆ありがとう!」

(シャル選択、『焼きパスタ』・・・好評につき 8)

「(一夏)次は・・・ラウラ。」  
「(ラウラ)私はこれだ。」

(布を引いて姿を見せたのは・・・)

「(奏)・・・フリ ク?」  
「(ラウラ)フリ クだ。」  
「(真琴)いやなんでフリ ク?」  
「(ラウラ)今の時期暑いだろう?だから少しでも涼しくなってもらおうと思っただけ・・・特に嫁に。」  
「(奏)・・・死刑宣告な気がしてきた。」  
「(鈴)・・・1箱50粒でしょ?なんで10箱も?」  
「(シャル)・・・きつと人数分調整なんだよ・・・」

(調理開始)

「(奏) うわあああつ!! 臭い! 臭いが凄い!! これ絶対ハズレ  
!?!」  
「(一夏) やばい! やばすぎるってこれ!?!」  
「(セシリア) これ、兵器ですわ! 科学兵器ですわ!?!」  
「(ルシエラ) . . . これは. . . 酷いわね. . .」

(完成、実食)

「(奏) これ食いたくねえ!! 顔近付けてみるよ!! やっべえぞ!  
?」  
「(箒) . . . 顔に清涼感を感じるぞ!?!」  
「(オリヴィエ) これ鼻詰まりに聞くよね!?! 間違いなく!?!」  
「(鈴) 奏が食べなさいよ! これ奏にとってラウラが言ってたんだか  
ら!?!」  
「(奏) ふざけんな! 絶対嫌だ!?!」  
「(沙霧) . . . 奏。」  
「(奏) なんだよ!?!」

(奏に迫る、化学兵器が絡まったフォーク)

「(沙霧) . . . あーん。」  
『(真琴・オリヴィエ・シャル) ああつ!?!』  
「(ラウラ) なにつ!?!」  
「(ルティア) . . . ずるいい. . .」  
「(奏) やらねえぞ!?!」

「(エリイ) 食わせ食わせー!!」  
「(鈴) 奏、ファイト!!」  
「(奏) やらねえつつつてんだろ!？」  
「(鈴) だったら・・・」  
「(セシリア) 強行手段ですわ!」  
「(奏) あがつ!？」

(二人掛かりで奏の口をこじ開ける)

『(真琴・オリヴィエ・シャル) あーん!!』  
「(沙霧) あーん・・・」  
「(奏) ごぼおっ!？」  
「(鈴) はい、よく噛んでねー?」  
「(セシリア) よく味わってくださいなー?」

(咀嚼も二人掛かり)

「(奏)・・・うおおおおおおおっ!!!？」  
「(一夏) か、奏!？」  
「(奏) すげえ! 口の中がすげえ清涼感! そして果てしなくマズい  
!?!」  
「(一夏) お、俺も一口・・・ふおおおおっ!？」  
「(奏) み、水! 水くれ!! 水くれ!!」

(ルティアが慌てて持ってきた水を一気に飲み干す二人)

「(奏) これ髑髏で決定！髑髏以外の答えをぜってえ認めねえ！！」  
「(一夏) 酷い！これは酷過ぎるぞ！！」  
「(ラウラ) ……これのどこがいけないというのだ……？」  
「(奏) そう思ってる時点でアウトだよ！！」

(ラウラ選択、『フリ クパスタ』……壮絶な味&食感にて髑髏  
×3)

「(一夏) ……あ、あれは酷かった……！つ、次は真琴だ。」  
「(真琴) ラウラのミス、私が挽回して一気にトップ狙わせてもら  
うね！！私はこれ！！」  
「(ルシエラ) ……エビチリ？」  
「(真琴) 鈴に対抗する形になっちゃうけど、これだって合うはず  
だよね！？」  
「(鈴) パクリ！？パクリなの！？まさかそれ……」  
「(真琴) 私手作り！！」  
「(鈴) 被ったあーっ！！」

(調理開始)

「(ルシエラ) さっきの『フリ クパスタ』に比べれば随分マシね  
……」  
「(奏) 食べてないお前が言っなや……」

(完成、実食)

「(シャル)・・・ありかも。」

「(篤)・・・普通にありだな。」

「(奏)鈴のに比べればアイデアは奇抜じゃないけど・・・普通にイけるな。」

「(一夏)真琴的にはどれくらいだ？」

「(真琴)・・・9、かな？」

「(奏)んじゃ、一斉に言うか。せーの・・・」

『(真琴・リース・シャル以外) 6。』

『(リース・シャル) 9。』

「(奏)じゃあ民主主義決定で 6 だな。」

「(真琴)酷い！酷過ぎるよかなちゃん！」

(真琴選択、 『エビチリパスタ』・・・民主主義決定により 6)

「(一夏)次は・・・リースだな。」

「(オリヴィエ)あれ、私とんだよ？」

「(一夏)台本に『真琴の次リース』って書いてあるし。」

「(オリヴィエ)そっか・・・ふふふ・・・私の持ってきた食材に恐れ慄いたのね・・・」

(そういうことはないと思う・・・)

「(リース)んとね、私のは・・・これ。」

「(エリイ)『うま 棒』のたらこ味？」

「(リース)そう。安いしおいしいから合うんじゃないかな、って思ってた。砕いたのを入れるの。」



(調理開始)

「(ルティア)・・・(もじもじ)／／／」

「(エリイ)ルー、どうしたの？」

「(ルティア)・・・あ、あのね・・・？／／／」

(ルティア、エリイに内緒話)

「(エリイ)・・・大丈夫だよ、きつと。エリイのに比べれば絶対大丈夫だと思う。あたしふざけ切ったもん。」

「(ルティア)う、うん・・・」

(完成、実食)

「(奏)・・・どっか粉っぽさが残ってるな・・・」

「(篝)味はたらこパスタそのものなんだが・・・」

「(鈴)どっかちよっとばさはさしてるのよね・・・」

「(リース)うーん、ちよっと失敗しちゃったかなあ・・・？」

「(セシリア)けれど、粉っぽさがなければおいしいですわよ？」

「(沙霧)・・・おいしい。」

(リース選択、『うま 棒たらこ味パスタ』・・・味には定評ある

ものの、粉っぽさが残り、 6)

「(一夏)次は・・・ルティア。」

「(ルティア)ひえうつ!?ひゃ、ひゃいつ!」

「(エリイ)あ、あたし飛ばされた。」

(かなりテンパった様子でお披露目されたのは・・・)

「(一夏)・・・『ごはん すよ』?」

「(ルティア)う、うん・・・だ、だって・・・こ、これ、おいしい・・・から・・・ノノノ」

「(奏)それは否定しない!」

「(鈴)否定したくない!」

「(シャル)そ、そこまで・・・?」

『(奏・鈴)当たり前(だノでしょ)!』

(調理開始)

「(真琴)・・・あ、いい匂い・・・」

「(セシリア)そうですね・・・」

「(シャル)・・・ご飯が欲しいかも・・・」

(完成、実食)

「(奏)・・・マジ美味しい。マジで美味しい。」  
「(鈴)文句なしでおいしいわ・・・」  
「(真琴)負けた・・・！絶対負けた・・・！！」  
『(奏・鈴) 10だね！』  
「(篤)そんな独断でいいのか!?!」  
『(奏・鈴)いいに決まってる(じゃない)!!』  
「(一夏)他の皆はどうだ?」  
「(シャル)・・・うう・・・」  
「(ラウラ)・・・ま、負けた・・・」  
「(セシリア)もっとインパクトのあるものだったら勝てましたわ・・・!!」  
『(一夏・奏)いや、フリクとチョコレートでは勝ち目がないと思っ。』

(ルティア選択、『ごはん すよ』パスタ』、超好評につき 10)

「(一夏)んじゃ、次はオリヴィエな。」  
「(オリヴィエ)OK!これ見て驚きなさい!!」

取り払われた布からは・・・

「(真琴)小玉スイカ?」  
「(オリヴィエ)今暑いでしょ?これ食べて涼しくなってもらおうって思って!」

「（ルシエラ）それはいいかも・・・」  
「（エリイ）なんかおいしそう・・・」

（調理開始・・・完成、実食）

「（奏）早っ！！」

「（篝）と、とりあえず食べてみるぞ・・・」

「（オリヴィエ）・・・これダメ。マズい。マッズい！！」

「（奏）おい提案者！お前が先言うのかよ！？」

「（篝）・・・酷いな、これは・・・」

「（セシリア）・・・下品な味・・・ですわね・・・」

「（ラウラ）・・・これをもし嫁が出すなら・・・私は頑張つて食べるだろうが・・・」

「（奏）まず出すことはないから安心しろ。そして俺は嫁じゃないつて何遍言えば分かるんだお前は！！」

「（リース）これ・・・髑髏×2、だね・・・」

「（シャル）・・・うん・・・」

（オリヴィエ選択、『冷製スイカパスタ』・・・涼しくなるどころか不快感だけを与えたため髑髏×2）

「（一夏）・・・次は・・・ルシエラだな。」

「（ルシエラ）私のは・・・少し外れたかもしれないわね・・・」

(見せたのは、高級食材!?)

「(シャル)こ、これってフォアグラ!？」

「(鈴)世界三大珍味だよね!?!なんでこれが用意できたの!?!」

『(一夏・奏)企業秘密です。』

「(オリヴィエ)ふざけないでよ!!--」

「(一夏)いや、だって最初の方に書いてあるし・・・」

(書きました)

「(ルシエラ)まだ生だから調理する必要はあるけど。」

「(奏)と、とりあえず調理に行こうじゃないか・・・」

(調理開始)

「(鈴)・・・これって・・・お酒?」

「(一夏)ただの臭み消しだよ。アルコールは飛んでいくから酔うことは・・・」

「(リース)・・・」

「(エリイ)・・・」

「(セシリア)どうしましたの?お葬式でもあるような感じの顔してますわよ?」

「(エリイ)逃げなきゃ」

「(篝)は?」

「(ルティア)・・・ひっく。」

「(シャル)る、ルティア?どうしたの?」  
「(ルティア)・・・(ふらふらと奏に接近中)」  
「(奏)お、おいルティア?」  
「(ルティア)・・・奏・・・くん・・・」  
「(奏)お、おい、マジでどうした!?なんか目が蕩けて顔が赤く  
なつて・・・いつものルティアじゃねえぞ!?!」

(この瞬間、全員に電撃が走った)

「(リース)やっぱり起きた!?!」  
「(鈴)ま、まさか・・・酔っ払った!?!」  
「(エリイ)酔っばらうとかの話じゃないの!ルティアって本当にお酒弱いのに!おいだけで酔っし、酔ったルティアは暴走しちゃうの!?!」  
「(オリヴィエ)ウソでしょ!?!においで酔っつて!?!」  
「(リース)だ、誰か止めて!?!」  
「(エリイ)リー姉、もう手遅れ!?!」

(一方・・・)

「(ルティア)奏君、好き!大好き!」  
「(奏)はああっ!?!ちよ、ルティア!?!どうした!?!おかしいぞ!?!つか乗るのやめろ!?!」  
「(ルティア)赤ちゃんつくる!?!」  
「(奏)ばっ!?!おまつ、ちよっ!?!」  
「(ルティア)私、奏君とだったら(自主規制です)してもいいも

ん！」

「(奏) 脱ぐな つー!!」

「(ルティア) 脱ぐ脱ぐ脱ぐう つー!!」

「(沙霧) . . . かにやりえひやわらひによなによ (訳：奏は私のなの) . . . 」

「(ルティア) やーっ!! かにやれひゅんひやわらひのにやのーっ

!! (訳：奏君は私のなのーっ!!) 」

「(奏) . . . っつて沙霧、お前まさか!？」

「(沙霧) . . . かにやーりえー」

「(奏) ブルータス、お前もか!!」

「(沙霧) えへへ . . . 」

(カオス、ここに極まれり)

「(一夏) ちよ、かなり酔い酷くないか!？」

「(箒) そんな茫然としている暇があつたら止めるぞ、一夏!!」

「(鈴) 沙霧もなんか酔っ払ってるわよ!？」

「(エリイ) 簀巻き! 簀巻きにしてふん縛って!!」

『(ルティア・沙霧) やーっ!!』

「(シャル) ダメ、離れない!!」

(奏からルティア&沙霧の引きはがしに躍起になっている傍ら . . . )

「(ラウラ) . . . 」

(料理酒のビンを見つめるラウラ)

「(ラウラ)……!」(ゴキユゴキユゴキユゴキユ!!)」

(突然料理酒をラツパ飲みし始めるラウラ)

「(セシリア)……ラウラさん!?何をしていたらっしゃいますの!?!」

「(ラウラ)……ひつく……こーすれあ……かられひ……らひひゆえりゆ……(訳:ことうすれば……奏に……抱きつける……)」

「(鈴)頭がぐらぐらしてるわよ!?!」

「(ラウラ)らいひよーう……らいひよーうらお……(訳:大丈夫……大丈夫だぞ……)」

(結局)

「(ルティア)んー!んん　　!?!」

「(沙霧)んむ　　!?!」

「(ラウラ)……」

(3人を縛りました)



「（一夏）気を取り直して・・・実食だな。」  
「（真琴）・・・おいしいんじゃない？」  
「（オリヴィエ）・・・でもこれ、フォアグラの美味しさだよな？」  
「（ルシエラ）・・・そうね。酷評、受け付けるわ。」  
「（シャル）でもこれ、6はあげたいなあ・・・」  
「（セシリア）私は5ですわね・・・」  
「（鈴）あたしも5。」  
「（箒）私は4だな。味が・・・少し合わない気がする。」  
「（一夏）じゃあ中間を取って5だな。」

（ルシエラ選択、『フォアグラパスタ』・・・辺りに被害を出したものの、味はいたって普通なため、5）

「（一夏）残ったのは沙霧とエリイだが・・・」  
「（エリイ）あたしはこれ！」  
「（奏）歯磨き粉！？これ食材じゃねえだろ！？」  
「（エリイ）だいじょぶ！これで今までの口直しに！」  
「（箒）私が変わりに沙霧の分を言うが・・・これは・・・すき焼き、だな。」  
「（鈴）これは・・・普通ね。明らかに奏に美味しい思いをしてもらおうっていう魂胆？」

（同時進行で調理開始）

「（奏）うわーうわーうわー！酷い！悪臭！これエリイのだ！！」

「(オリヴィエ) 吐く! 吐くかも!!」  
「(リース) 沙霧の方に行った方がいいかも・・・!」

(完成、実食)

「(奏) まず沙霧の方!」  
「(箒) ……普通だな。」  
「(鈴) ……普通ね。」  
「(セシリア) ……普通ですわね。」  
「(真琴) ……普通にすき焼き食べたいかも。」  
「(オリヴィエ) これ 5でいいんじゃない?」  
「(シャル) これ、そのまま食べたいって意見を考えると 4が良  
いかも。」  
「(リース) …… 5でいいと思うよ?」

(沙霧選択、『すき焼きパスタ』・・・物議の結果、 5)

「(奏) 最後の・・・エリーの・・・歯磨き粉パスタ・・・」  
「(オリヴィエ) ……臭いが・・・酷いわね・・・」  
「(鈴) 言いたくないけど・・・残飯よ、これ・・・」  
「(エリイ) ……じゃ、いただきます!」  
「(シャル) ああ、あまり無茶したらダメだよ・・・」

(半分くらい頬張って・・・)

「(エリイ)ブフツ!!」

「(鈴)ちよつとエリイ、汚い!汚いつて!!」

「(エリイ)・・・あたしの口の中で小さいあたしが必死になってブロツクしてる感じ・・・」

「(真琴)・・・よく分かんない。」

「(奏)・・・分かる。俺も同じ感じ・・・うわーうわーうわー!  
!後味もすっげえぜ!!」

(今普通に居られる組、一口ずつ頬張るもの・・・)

「(セシリア)む、無理ですわ!!これを平気で食べられる人見た  
くありませんわ!!」

「(鈴)マズっ!!おえっ!!」

「(シャル)・・・うぶっ・・・」

(結果、壮絶な状態になったため、エリイ選択『歯磨き粉パスタ』  
・・・論外)

(別室)

「(一夏)・・・ど、どうにか全員分済んだけど・・・後は結果発表だな。」

「(奏)一番が多かったのは・・・ルティアの『ごはんすよ』パスタ!」

「(一夏)記録は 10!」

「(奏)一応後でなんかするとか作者が言ってるからご期待あれ!」

おまけ

『 (ルティア・沙霧・ラウラ) . . . すう . . . すう . . .  
「 (鈴) この酔っ払いども、ようやく寝たわね . . . すう . . .  
『 . . . . . 』

#Other 第一回これやったら絶対おいしいパスタ選手権!! (後書き)

「(奏) もうやりたくねえ! ぜってえやらねえ!」

「(一夏) フリクや歯磨き粉は正直なしだろ・・・」

反響や次回作の要望あればまたやりますけど?

『(奏・一夏) 嫌だあああっ!』

#32 海に着いたら十一時!! (Oceans Eleven) 前編 (前書き)

前次回予告を忘れてました!!

今回はいよいよ臨海学校!! またまた判明、沙霧の意外な一面!?

そしてエリイはネタ発言多発!?

#32 海に着いたら十一時!! (Oceans Eleven) 前編

Side Ichika

「海っ!! 見えたあっ!!」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声をあげた。

臨海学校初日。天候にも恵まれて無事快晴。全員のテンションはバカ上がりだ。

・・・だが、そうとも言えないのが二人いた。

「・・・ぎ、ぎもぢわる・・・」  
「・・・つぶ・・・」

現在バス最前列にいる奏とオリヴィエだ。

二人とも乗り物酔いしていた。・・・全然乗り物酔い治ってなかったのか・・・

「えへへ・・・」



通路を挟んだ隣にいるシャルロットは、手元に視線をやっている。凄じ嬉しそうだ。

「それ、奏に貰ったのか？」

「えっ、あ、うん。貰ったの。えへへ・・・」

どうやらシャルロットが左手首にしているのは、オレンジ色の小さな石（宝石だろうか？ちょっと光ってて綺麗だ）がワンポイントとなっているブレスレットだ。いつ買ったのかは知らないけど。

それをにこにここと眺めては、時々思い出し笑いでもするかのようになんか笑みを漏らす。

・・・そこまで気に入ってるみたいだ。

「うふふっ」

それにしても物凄じご機嫌だ。

「・・・シャルロット、朝からえらくご機嫌だね・・・」

真琴が若干むすっとした顔で言ってきた。

「うん、そつだね。ごめんね。えへへ・・・」

・・・真琴の言葉もなんのその、笑顔で返すシャルロット。・・・  
ここまでご機嫌だとちよつと怖い。貰ったブレスレットが嬉しかった  
たんだろつか？それとも海が楽しみなんだろつか？

「ぶー・・・、昨日ひよつこり三人がいなくなったと思ったら・・・」

どうやら昨日奏がこっそりシャルロットともう一人連れていなくな  
ったらしい。・・・沙霧の声は聞こえないし、ラウラの方は・・・

「・・・・・・・・・・」

・・・ずーっと大人しくしていた。ときどき挙動不審になって周囲  
をきよろきよろしている。

ついでに言っておくけど、和解はした。原因は俺じゃないと分かっ  
てくれたようだ。

「・・・大丈夫か？昨日からずっとそんな感じだったけど、どうし  
た？」

「・・・・・・・・・・／／／」

・・・返事がない。

「おい、ラウラ？」

「・・・・・・・・・・／／／」

ダメだ、完全に返事がない。

ちなみに別号車に乗っているルシエラは・・・

乗り込むまでが非常に速かった。神速、と言っていいほど。暑いのが苦手、と本人が言っていたのは記憶しているけど、まさかそのままとは思わなかった。

女子一同はきゃあきゃあ騒いでいたけど・・・

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ。」

この千冬姉の言葉で静まり返った。指導力抜群であった。

それでも聞こえてきたのは・・・

「……………」

というオリヴェイエの呻き声だった。……あれ？奏は？

……多分死んでもかも。分かんないけど。

言葉どおりしてほどなくしてバスは目的地である旅館に到着。四台のバスからIS学園一年生がわらわらと出てきて整列した。

「・・・おい、奏、大丈夫か？」

「オリヴィエ、大丈夫？」

「これで大丈夫に見える人の顔を見たいわよ・・・」  
「・・・」

俺とシャルで二人を支えながら下りる。

オリヴィエはまだ足元が覚束ないようで、奏は・・・

俺が完全に引き摺る形になっていた。

「それでは、ここが今日から三日間の世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように十分に注意しろ。」  
『よろしくお願いしまーす！ー！』

千冬姉の言葉の後、全員で挨拶する。出来ないのが二人いるけど。

この旅館は毎年お世話になっているらしく、着物姿の女将さんが丁寧に辞儀した。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね。」

三十代くらいだろうか、しっかりとした大人の雰囲気が漂っている。仕事柄なのかどうかは知らないけど、若々しく見えた。

「あら、こちらが噂の・・・？」

ふと、俺と目があつた女将が千冬姉にそう尋ねた。

「ええ・・・まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなつてしまつて申し訳ありません。」

「いえいえ、そんな。いい男の子じゃありませんか、彼。しっかりとしてそんな感じを受けますよ?」

「感じがするだけです。挨拶をしろ、馬鹿者。」

グイツと頭を押さえられる。・・・というか今しようとしたんだつて!!

「お、織斑一夏です。よろしく願ひします。」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清州景子です。・・・こちらの子は・・・あらあら、バスに酔つたんですね。」

「昔から乗り物に弱いので・・・こちらは二崎奏です。片方は義理の弟ですが、どちらも出来ない弟でご迷惑をおかけします。」

「あらあら。織斑先生つたら、弟さん達には随分厳しいんですね。」  
「いつも手を焼かされていますので。」

いや、それほどでもないと思うんだけど・・・というかそろそろ奏を安静にしてやりたいんだが・・・

「それじゃあ皆さん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館



の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所が分からなければいつでも従業員に訊いてくださいまし。」

女子一同は、はいと返事をするときさま旅館の中へと向かう。とりあえずは荷物を置いて、そこから・・・なんだろう。

ちなみに初日は終日自由時間。食事は旅館の食堂にて各自とるようにと言われている。

「ね、ね、ねー。おりむ、かなち。」

・・・この呼び方は間違いなくのほほんさんだ。振り向くと、例によって異様に遅い移動速度でこっちに向かってきていた。眠たそうにしている顔は、多分デフォルト。

「おりむーたちって部屋どこ？一覽に書いてなかったー。遊びに行くから教えて？」

その言葉で周りにいた女子たちが一斉に聞き耳を立てるのが分かった。・・・けど、俺たちの部屋なんて聞いてどうするんだ？面白いことは何も無いぞ、絶対。

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないのか？」

「わー、それはいいね。私もそうしようかな？あー、床つめたーいって〜。」

夏だしちょうどいいかも・・・なわけないか。

ちなみに女子と寝泊りさせるわけにもいかないということで、俺たちの部屋はどこか別の場所が用意されているらしい・・・らしいというのも、山田先生がそう言っていただけで明確には聞いていないからだ。

「・・・ちなみに俺も知らないぜ・・・うぶ・・・」

あ、奏がちよっと復活した。

「織斑、二崎、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい。」

おっと千冬姉がお呼びだ。

のほほんさんに『また後で』と言って別れた。

「え っと、織斑先生？俺たちの部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙ってついてこい。」

う、いきなり言論封殺された・・・

ちなみに旅館はかなり広くて綺麗だった。一学年丸々収容できる規模の旅館というだけでもすごいが、内装は歴史ある装飾と最新設備が見事に融合したものになっていた。

適度に効いているエアコンが素晴らしい。廊下ですらひんやり快適だった。

「織斑はここ、二崎はその隣だ。」

「え、こっつて・・・」

俺の部屋と言われたそこにバンと張られた紙は『教員室』と書かれている。・・・えーと・・・

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押し掛けるだろうということになってだな。」

はあ・・・と溜息をついて千冬姉が続ける。

「本当なら二崎も一纏めにしたかったのだが、部屋の都合上、そうもいなくてな。結果、お前だけが私と同室になったわけだ。二崎を一人にしておくと確実に就寝時間を守らない奴が絶対に出てくるから、私たちの部屋の隣にした。」

「そりゃまあ・・・そうだろうけど・・・」

虎穴に入らずんば虎子を得ず。・・・とはいえ、俺たち程度のために鬼の寝床、あるいはその付近に入る勇者はいないだろう。・・・いや一人だけはいた。・・・沙霧だ。あいつならやりかねない。奏の方に。

「一応言っておくが、あくまで私は教員だということを忘れるな。」  
「はい、織斑先生。」

「それでいい。．．．二崎、いい加減自分で歩け。いつまで織斑の肩を借りるつもりだ？」

「．．．む、無理．．．つす．．．」

まだグロッキー。乗り物に果てしなく弱いことは知っていたけど．．．  
・前より酷くなった気がする。

とりあえず俺は奏を隣の部屋に布団を敷いて寝転ばせて自分の部屋  
に行った。

S i d e K a n a d e

・・・酔った。バスに。

〈回想〉

「・・・マジで？」  
「どうしたの、奏？」

バスに慄く俺を心配そうに見つめるシャル。

「・・・俺最前列に行くことになるわ、絶対・・・」  
「え、そうなの？・・・隣に座れると思ってたのに・・・」

何か残念そうな顔をしているけど、こればかりは仕方がない。本当に俺は乗り物に弱い。

乗り込んですぐ、俺は最前列の窓側を陣取る。

その隣には・・・

「・・・やだなあ・・・バス・・・」

オリヴィエがいた。

「オリヴィエもバスダメなのか？」  
「・・・ダメ。すぐに酔っちゃう。」  
「・・・そっか・・・仲間だな・・・」  
「そうね・・・」

・・・お葬式モード完成。

そして・・・

エンジンがかかった直後。

「……うぶ。」

「え！？もう！？酔い止め飲んだ！？」

「……二箱飲んできた……」

「……それは……飲みすぎだと思う……てかそれで全然効いてないの！？」

もう酔いました。俺、バスはエンジンかかった瞬間に気持ち悪くな  
っちゃうんだよ……



そして今。

「……あー……気持ち悪い……」

布団に寝かされているのは分かる。けど……

「……大丈夫？」

「……なんでお前がいるんだよ、ルシエラ……」

いつの間にかルシエラがいた。

「私、暑いのが苦手だ、って前言っていただけでしょ？」

「あ、ああ……」

「海なんて行けるわけないの。だからここにいるわけ。」

「理由がつかなくてねえ・・・」

「だから、行けないなら看病をしろ、と織斑先生に言われたのよ。大したことはできないけど、出来ることがあるならするわ。」

さいですか・・・

「『三強』二崎奏にこんな弱点があるなんて・・・ね？」

「うっせー・・・後数分したら治るっつーの・・・きつと・・・」

（数分後）

「よし、復活!!」

「ホントに数分で復活したわね・・・」

どうにか立ち直った!!

「つーことでちよっくら行ってくらあ!!」

「・・・珍しく元気ね・・・。羨ましいわ・・・」

ちよっとルシエラには悪いけど海へ繰り出すぜ!!



久しぶり・・・でいいんだと思う。そんな海だ。

「あ、二崎君だ！」

「ウソっ、ついに復活!？」

「わ、わっ・・・。体鍛えられてるっ・・・。」

なんかすっごい言われてる。別に鍛えたわけじゃないんだけど。簡単に言えば『昔取った杵柄』ってやつ？

「おう一夏!・・・っってお前何やってんだ？鈴と二人で・・・。」

鈴が一夏の肩の上に登っていた。肩車・・・でいいのか？

「何って、肩車。あるいは移動監視塔ごっこ。」

「ごっこかよ・・・。」

「そりゃそうでしょ？あたし、ライフセーバーの資格とか持ってないし。」

「・・・ま、確かにそれはそうだな・・・。」

「あっ、あっ、ああっ!？な、何をしてますの!？」

セシリア登場。鮮やかな青のビキニだ。そしてパレオ。・・・まあ、アレだ。水着で強調された胸がエロい。一夏と同じく目を逸らしてしまう。

「……監視塔」って、だよ。」  
「……一夏さん……？バスの中で私と約束したの忘れま  
したのっ！？」

おお、凄い勢いでパラソル刺した！

「さあ一夏さん、お願いしますわ。」

……まさかのサンオイル塗り！？

「アンタこそ一夏に何させるつもりよ！？」

……猫みたいに一夏の上から鈴が飛び降りた。……すげえ。

「見ての通り、サンオイルを塗って頂くのですわ。レディーとの約束を違えるなど、紳士のすることではありませんわよ？」

……なんか声が優越感に浸ってるというかそんな感じだった。

「……分かった、仕方ない……」

「よし一夏、俺は去る。後は頑張れ。」

「なっ、おい奏！お前一人どこ行く気だよ！？」

「ビーチで寝てる。じゃあな。」

「おい！おい！！」

一夏が『一人孤立させないでくれ』という感じの叫び声を出したけどシカト。知るか。テメエのミスはテメエで処理しろ。

「・・・さつて、ふらふら泳いで『キヤ

っ！！！！』・・・なにがあつた？」

セシリアのすっごい悲鳴が聞こえた。・・・マジで何があつたんだ？

まあどっかで寝てるか。

ビーチでいい場所を見つけて寝ころんで。

「あ、奏、ここにいたんだ。」

「おーす、かな兄!」

「お、シャルとえり・・・いいっ!?!」

シャルとエリイの声が出たから、そつちを見たら・・・

バスタオルお化け×2!?!?



「な、なんだ・・・そのバスタオルお化け・・・？」

「ほら、奏に見せてあげなよ。大丈夫だって。」

「そうそう。別に恥ずかしいことないんだよー？下着じゃないんだし。」

「だ、大丈夫かどうかは・・・私が決める・・・」  
「へっう・・・」

今のは・・・

「ひょっとしてこっちがラウラでそっちがルティア？」

シャルとエリイはそれぞれ説得している。

ちなみにシャルは俺が選んだ水着、エリイはタンクトップの白水着・・・目が眩しい。変な目で見ているわけじゃない。マジで眩しい。

「ほーらあー、せっかく水着に着替えたんだから、奏に見てもらわないとね？」

「ま、待て！私にも心の準備というものがあってだな・・・」

「ルーもさ、そんな恥ずかしがるようなものじゃないと思うよ？」

「は、恥ずかしいもん・・・」

そういえば・・・ラウラとシャルは同室になったらしい。沙霧は真琴・オリヴィエと同室だとか。

シャルのような愛想のいい女子と居ればいろいろと心境が変わると思う。

「ふーん？だったら、僕とエリイで奏と一緒に遊んじゃうけども、いいのかなあ？」

「そうだよあ？じゃあ行くっか？かな兄？」

「な、なに！？」

「へうっ！？」

「じゃあ行く？」

言うなりシャルとエリイが俺の手を取る。・・・そしてシャルがそのまま腕を絡ませてきた。・・・当たってますけど？それはわざとですか？わざとでいいよね？

「ま、待て！わ、私も行くー！！」

「わ、私もっ、い、行くっ！いぎゅっ！！」( 囁んだ )

「・・・二人ともそのまんまの格好で？」

「さすがにそれは無いと思うなあ・・・？」

「ええい、脱げばいいのだろう！？脱げばー！！」

ついにラウラが躍起になった。

バスタオルを一気になぐり捨てて、水着姿のラウラが姿を現した。

「ううゝ・・・」

まだルティアは出たがらない。が。

顔だけ出た。

「うう・・・。・・・わ、笑いたければ・・・笑うがいい・・・  
／／」

ラウラの水着は、黒の、しかもレースをふんだんにあしらったもので、一見すれば・・・アレだ。大人の下着にも見えた。それにいつも飾り気のない伸ばしただけの髪は左右で一對のアップテールになっている。

正直に言う。・・・可愛い。

「おかしな所なんてないよね、奏？」  
「ないと思うぜ？つか・・・なんだ？可愛い・・・」  
「かつ!？」

そんなに俺の言葉が意外だった？

一瞬たじろいですぐ俯いて顔を赤くした。

「じゃ、社交辞令なら要らん・・・／＼／」  
「いや、世辞で言うかよ？なあ、シャル？」  
「うん。僕も可愛いって誉めてるのに全然信じてくれないんだよ。あ、ちなみにラウラの髪は僕がセットしたの。せっかくだからおしやれしなきゃ、ってね。」  
「そっか。・・・シャルも水着、似合ってるぞ？」  
「へえっ！？あ、ありがと・・・／＼／」

一瞬凄い声が聞こえたけど・・・？

「・・・あーもー！いい加減にしないと引つ張るよ！？バスタオル  
！！」  
「・・・へうう・・・／＼／」  
「バスタオル取らないなら・・・強硬手段！！」

エリイがルティアが体に巻き付けているバスタオルのびよこつと出  
てる所を掴んで・・・

「そー・・・れ　　っ！！」  
「へうう　　っ！？」

回した。

俗に言う『よいではないか』みたいな感じ。

「へっ、へうう、へうう〜・・・」

目を回したルティア。けど、水着は遂にお披露目。

その水着が・・・

「・・・エリイ、ルティアの水着ってかなり土壇場選択？」

「昨日選んできた。どつたの？」

「いや・・・なんというか・・・」

簡単に言うと、シンプルに黒いビキニ。面積は広め。なのに・・・どこか扇情的。シンプルなのに。しかも色白な肌を強調するような感じ。

「・・・似合いですぎてる・・・」

「へうっ！？／／／」

ちなみに髪は後ろで縛ってポニーテールにしてる。

あ、奏、そこにいたんだ！！

遠くからオリヴィエの声が。

「やっと見つけた・・・あ、ラウラの水着可愛い。」

「えうっ!?!?!」

また顔が赤くなる。さつきよりも真っ赤。

「あれ、オリヴィエ?あのネックレスどうしたの?」

「ネックレス?海に入って流れちゃったら嫌だから部屋に置いてきたの。というかシャルロットもさ、ブレスレット大丈夫なの?錆びない?」

「大丈夫。来る前にちゃんと保護コートしてあるし、後で塩水は洗い流すから。せっかく奏がくれたものだもん。」

えへへ、と笑顔で言うシャル。・・・ホントに気に入ってくれたよ  
うだ。

「・・・奏。」

「ん?」

さつきまでの声とは違う、いつもの落ち着いた声が俺を呼んだ。

「ずるいぞ、それは。私にも何かプレゼントを・・・その・・・、  
して、欲しいのだが・・・／＼／」

・・・マジ？ねだってくる？

・・・くくく。

「ん？」

腕を引つ張られたからそつちを見たら・・・

「・・・(づるづる)」

・・・出ました、涙目ルティア。今回はかりはおねだりモードも入  
ってるっぽい。雰囲気で分かる。

「・・・分かった、分かったから。誕生日とかなんかの記念があれ  
ばな。」

「む、そうか。では、機会があれば必ずくれ。絶対にだぞ。必ずだ  
ぞ！」

「(コクコクコク！)」

「お、おう。あ、でもあんまり高いものは勘弁してくれよ？俺も一  
応学生だし。」

「う、うむ。しかし、いずれは給料三カ月分というものを頼むぞ。部隊の仲間に聞いたが、日本では大事なプレゼントにはそれだけのお金をつぎ込むのだから?」

「わ、私は・・・安くても・・・いい・・・よ?」

・・・なるほど。ラウラが持つ間違った日本のイメージの原因はラウラの仲間だったか。・・・強ち間違っているわけじゃあないんだが、どこかずれてるんだよな・・・

そしてルティアは俺の財布事情を案じてくれている。助かる。

「ちなみに二人とも欲しいものつてあるのか?・・・ラウラは見た感じアクセサリーとか付けてないよな?」

「そう・・・だな。私はそういうものに正直疎い。・・・し、しかし・・・だな?お、お前が選んでくれるのなら・・・なんであろうと嬉しいぞ。」

「ルティアは・・・ISの待機状態の髪止めだけ、みたいだな。」

「う、うん・・・」

「・・・そうだな・・・ラウラはチョーカーとか・・・あ、今の髪型なら耳出てるからイヤリングとか。ルティアはリボンとか合いそう。可愛いと思う。」

「かつ、かわい・・・っ!? / / /」

「・・・っ!! / / /」

・・・なんか二人とも突然狼狽し始めた。指弄って。



「……しっかし泳ぐこともなく、ただゴロゴロとするだけってのも……いいなあ……」

「じゃあさ、ビーチバレーしようよ？えーと、今は……」

今のメンバーは俺、シャル、エリイ、オリヴィエ、ラウラ、ルティアの六人。

「ちょうど三人ずつで分けれる……か？」

「そうだね。ちょうど三人ずつで……」

「ボールとネットは？」

「……誰かから借りるか。」

「そうだね。」

そうして歩こうとした時。

「あー、二崎くん……！」

お呼びがかかった。

「ビーチバレーしようよ……！」

「わー、かなち と対戦。ばきゅんばきゅん。」

のほほんさん（一夏命名、俺便乗）もいた。……あれ？

「なんだ一夏に真琴、それにリースも。お前らもやってたのか？」

一夏と真琴、リースがチーム組んでやっていた。鈴もセシリアもいないし。

ちなみに水着だけど、真琴は何故か赤いタンキニタイプ。リースは水色のビキニだった。

「ああ、約束してたからな。」

「私はただの乱入。やりたかったから。」

いつも通り、というかなんというか・・・

「状況はどうだよ？」

「不利、かな？」

「ふーん・・・。ま、俺も今からやるのかな・・・と思ってたんだけど。」

「じゃあチーム変更ってことで!！」

うおっ、真琴が変わった。

「ちよっ、ちよっと待ってよ!私とシャルロットが奏と同じチーム

なのよ!?!」

「嘘だっ!?!」

……一瞬ヒグラシが鳴いた……気がした。

最近の真琴、なんか前に比べて病んだ気がする。なんでだ?

「じゃあもう一回じゃんけんで決めよ!?!そうしたら全て解決するから!?!」

「良いよ、負けないもん!?!」

「ぼ、僕だって!」

なんかじゃんけんが始まった。

「どーん。」

「うおっ!?!」

後ろから奇襲っ!?!曲者!?!

「……っってお前か沙霧……」

後ろに『どーん』と言って突撃してきたのは沙霧だった。

「・・・水着・・・どう？」  
「どう・・・って・・・」

沙霧の水着は、前を結んだ、肩に紐がかかっているタイプのもの。  
・くるりと回ったことで分かったけど、背中でも結んである。つまり二カ所で結んだ水着。

やけに胸を強調した感じだ。

「・・・何とも言えない。」  
「・・・ふう。」

・・・マジ。何か言ったら速攻で『変態』なんて言われるだろうか  
ら何も言わない。

「・・・何するの？」  
「ビーチバレー。チーム決めで女子群大荒れ。」  
「・・・一緒にやる？」  
『ダメっ！！』

わーお、さっきまでじゃんけんで大盛り上がりしていた皆さん一斉にダメ宣言。

「・・・というか沙霧！アンタ離れなさいよ！！」  
「そうだよ！！ちよつと胸おつきいからって！！」

・・・いやそこは・・・関係ないだろ・・・？

「・・・とつととチーム決めてくれ・・・」

俺がそう呟いた時、もう一度じゃんけんが始まった。

結果。

「勝った！！」

「やった！！」

「・・・むう・・・」

「負けたあ・・・」

チーム1、一夏、エリイ、沙霧。

チーム2、俺、シャル、オリヴィエ。

チーム3、誘った女子たち（のほほんさん含む）

審判、真琴（エリイも加わった結果、負けた）。

「ルールはお遊びルールでいいよね？タッチは三回まで、スパイク連発禁止、キリのいい十点先取で一セットね！」

「OK、サーブはそっちからでいいぜ！」

相手（確か櫛灘）にボールを渡す。

「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われたこの私の実力を・  
・見よっ！！」

なに、いきなりのジャンピングサーブ！？角度もスピードも申し分  
ない……

ってこのままだと……

「やべえ、このままだとラウラ直撃コースだ！」

「ご、ゴメン！」

「ま、間に合わな……」

「そおらあっ！」

ラウラの顔に当たる数センチ前でボールを蹴る。

飛び蹴りだったからそのまま……

「ブフッ！」

砂浜に顔面ダイブ・・・

「ら、ラウラ、大丈夫!？」

「か、かわ、可愛いと・・・言われると・・・わ、私は・・・はう  
う・・・ノノノ」

「・・・ひょっとして、まだ照れてたの？」

・・・?

「ラウラ・・・？」

「あ・・・ああ・・・ひゃわあああああああ・・・

起き上がったラウラを見たら、突然ラウラは海へと脱兎の如く走り  
去っていった。水上も数メートルくらい走っていた。

「お、おいラウラ!？・・・どうしたんだよ・・・」

一夏が声をかけたが、ラウラには聞こえてない。たぶん。

「うーん、これはあれかな？かなちーの乙女心ブレイカ が作動  
中なのかな？」

のほほんさんはなんか不思議なことを言っていた。

この後、チーム2とチーム3の戦い（じゃんけんで順番を決めた）はチーム2が勝ち、チーム1とチーム3はチーム3が勝った。

俺のチームと一夏のチームの戦いは、激戦だった。

例えば・・・

「あたしのこの手が真っ赤に燃える！！勝利を掴めと轟き叫ぶうっ  
！！」

「G!?!Gなのか!?!」

とか、



「ストライクうつ!!」  
「デュエルっ!?!」

とか、

「それでもっ! 負けられない戦いがあるんだあっ!!」  
「うわあっ!!」

とか、とにかくエリイが凄いネタ発言多発していた。

そして、山田先生らが参戦。

千冬さんのサーブは痛かった、と言っておく。

「……そろそろ昼だな……。奏って結局どこの部屋だったの？」

「あ、私も気になったな。」

「私も私も！」

「私も」。冷たい床情報は共有しよう？」

のほんさんの言葉に他の面子は『？』を浮かべていたが、とりあえず放置。

「……織斑先生の隣の部屋だ。一夏は織斑先生の部屋。」

『……よし、行くのは止めておこう。』

女子たちの決断は早かった。

おまけ

「……そういえば沙霧って全然海水で泳いでないよな？」  
「……（ぷるぷる）」

何故か沙霧が否定的に顔を振るわせ始めた。

「とりあえず行っておこうぜ？」  
「……！！！！！！（いやいや）」

……今度は拒否。どうしたんだ？

「……もしかして……泳げない？」  
「……うん……」

……原因判明。沙霧はカナヅチ。

「ひよつとしたら今後泳ぐ必要があるかも知れないから少しずつ練習して行こうぜ。な？」

「……（コクリ）」

が。

(海に近づくとつね)

「・・・」

・・・顔が青ざめてきた？

「(・・・)じわぁ」

え!?

「・・・ひつく・・・くすん・・・」

「ちよっ、はぁっ!?!?えええっ!?!?」

な、泣きだした!?

「・・・もしかして、海水が怖い・・・とか?」

「・・・」

・  
・  
・  
無言。  
結局この涙の意味は分からなかった。

#32 海に着いたら十一時!! (Oceans Eleven) 前編 (後書き)

〈次回予告〉

臨海学校初日の夜。

豪華な夕食を食べて部屋に。

そして部屋では・・・

次回、#33 海に着いたら十一時!! (Oceans Eleven) 後編

少女達の要望は、たった一言で玉砕した・・・

#33 海に着いたら十一時!! (Oceans Eleven) 後編(前書き

前編に引き続き、後編です!!

今回は最後の方、カオスです!

そして・・・!?



#33 海に着いたら十一時!! (Oceans Eleven) 後編

あっという間に時間は過ぎ、現在午後七時半。大広間三つを繋げた大宴会場で、俺たちは夕食を取っていた。

「・・・すげえ豪華。昼夜問わず刺身が出るとか・・・。美味いからいいけど。」

「そうだね。ホント、IS学園って羽振りがいいよ。」

そう言っただけで頷いたのは俺の右隣に座っているシャル。左隣には沙霧が。

実は全員、浴衣姿。意味が分からないが『御食事中は浴衣着用』だとき。普通逆だろ? 『御食事中は浴衣着用禁止』ってさ。

ズラリと並んだ一年生の生徒は座敷なため当然正座だ。そして一人一人に膳が置かれている。

メニューは刺身と小鍋、それに山菜の和え物が二種、赤出汁の味噌汁にお新香。

これだけ聞いたただけなら普通だが、刺身が豪華。カワハギ(肝つき)だから。独特の歯ごたえにクセのない味わいが良い。それに肝も、臭みや苦みもない。他にも俺の好きなサーモンやマグロまである。すげえ。

「・・・お、これマジものの山葵？本わさか・・・。高校生に出る  
メシじゃねえな、これ。」

「本・・・わさ？」

「・・・なに、それ・・・？」

「あ、二人とも知らないのか。本わさっつーのは、本山葵を擦り下  
ろしたやつのことを言うんだよ。」

「えっ？じゃあ、学園の刺身定食で付いてくるのって・・・」

「ありや練りわさだよ。原料は山葵大根やセイヨウワサビとかいう  
やつ。合成したり着色したりして見た目だけ似せてあるやつ・・・  
もあるな。」

「ふうん、これが本当の山葵なんだ？」

「それはな・・・。つっても、最近のやつは練りわさのでも美味い  
のはあるしな。店によっちゃ本わさと練りわさを混ぜ込んで出す所  
もあるし。」

「そうなんだ・・・」

・・・なんか嫌な予感が・・・

「はむ。」

「・・・（パク）」

・・・やっぱり・・・

「~~~~~」  
「~~~~~」

「~~~~~」  
「~~~~~」

・・・案の定悶絶する二人。箸まで落とすくらい。

「大丈夫かよ・・・」

「ら、らいひょうつ・・・。ふ、風味があつれ、おいひいよ・・・？」

「・・・(舌を出している)」

「お前ら何してんだよ・・・。ほら、水。」

水を受け取ったシャルはそれを慌てて飲む。沙霧は水に舌をつけている。なんか可愛い。

・・・シャルはどこまで優等生なのだろうか。

そんなこんなでシャルと沙霧が山葵に悶絶していたら。

「ああ　　っ！セシリアずるい！！なにしてるのよ!？」

「織斑君に食べさせてもらってる　！卑怯者ーっ!!」

「ズルイ！インチキ！イカサマ!!」

どうやら一夏がセシリアに何かして、それを他の女子が妬んだみたい。

瞬間。

「お前達は静かに食事をするのもできんのか!？」

はい、魔王登場。俺は関係ないね、今回は。断言しておく。

全員凍りついた。

「どうにも、体力が有り余っているようだ。よからう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は・・・そうだな、五〇キロもあれば十分だろう?」

「いえいえいえ!とんでもないです!大人しく食事をします!！」

そう言っつて各自の席に戻っていく。それを確認してから、千冬さんは一夏を見た。

「・・・織斑、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ。」

「・・・わ、分かりました・・・」

そして戸が閉まった時。

『・・・はあ・・・』

全員が安堵の息を漏らした。隣にいたシャルもだ。関係ないのに。

その後はゆっくりと夕食を堪能した。

「・・・」

隣ではまだ沙霧が水に舌をつけていた。

夕食後。

「さっぱりしたなあ……」

「確かに。これで牛乳でもありや最高なんだけどな。」

「ははっ、そりゃ言えてら。」

一夏と二人、露天風呂を贅沢に使わせてもらった。二人で貸し切りだから。

「まあ少しぐらいだべろうぜ？……つか一人で部屋にいるのが怖い。」

「……あ、ああ……。でも後でセシリアが……」

「ん、了解。」

そう話していたら、千冬さんが入ってきた。

「・・・なんだ、お前ら男二人きりか……。女の一人も連れ込まんとは詰まらん奴だ。」

「・・・だから・・・はあ、もういいよ、それは・・・」

一夏が諦めた。

「・・・いや、仮にも俺たち学生でしょ？それにまだ高校生。そういう恋愛事はまだ・・・早いんじゃないのか？って。」

「・・・はあ・・・」

・・・なんで溜息つかれた？

「・・・なあ、千冬ね（ゴスツ）痛って・・・」

鋭いチョップが一夏の頭に落ちた。

「織斑先生と呼べ。」

「まあ、それはいいじゃん。奏もいるけど、風呂上がりってことで久しぶりに・・・」

「・・・まあ、好きにすればいいんじゃない？俺はどうせ傍観してるだけだし。『アレ』だろ？」





Side Cecilia (三人称基本)

「」  
「」

(食事の後に風呂を一回、シャワーを一回浴びたセシリアは、鼻歌交じりに着替えていた。身に纏うのは旅館の浴衣。だが、素肌につけているのは先程までとは違う下着である)

ああっ、もしかしたら・・・もしかしたら、と用意していた甲斐がありましたわ・・・。ふふふ・・・

(つい表情が緩んでしまう。)

そんな様子から、不思議に思ったクラスメイトが声をかけてきた)

「セシリア、何かいいことあったの？」

「いえ、何も」

「・・・。『何も』って顔じゃないじゃない。」

「あら、そうですね？うふふ・・・」

「・・・はあ・・・、まあいいわ。あーあ、せっかく織斑君や二崎

君と遊ぼうと思って色々用意してきたのに、織斑先生の部屋とかその隣とかじゃあねえ……」

（その言葉に他の女子も同意する。）

ちなみに、用意してあったのは、トランプ、UNO、花札、人生ゲーム、モノポリー、ツイスターゲームだった）

……うふふ、今の私はゲームに頼る必要などありませんもの

（鼻歌交じりにコロンを吹くセシリア。揺れた髪は、いつもより豪華さが当社比二割増だ）

「あ~~~~。せっしーがえっちい下着つけてる〜。」

（いつも半開きの目だが、なぜか観察力・洞察力に長けたのほほんさんがそう告げた。）

刹那、セシリアもギクリとする。なぜなら……）

「なーに！？脱がせ脱がせえ〜っ！」

「剥けえ〜っ！身ぐるみ置いてけえ〜っ！」

「きゃあああっ！？やっ、やめっ……、引っ張らないでえ〜っ！」

「・・・／＼／」

（女三人集まれば姦しい、とはよく言ったもの。九人部屋なら姦しさ×三である。）

特に目当ての男子二人と遊べない分、暇もエネルギーも持て余している。そういう女子はちよつとのことで暴走することを、セシリアは我が身と同じく分かっていた。

ついでに珍しく姉たちと離れたルティアは、目の前で繰り広げられている光景に顔を赤くして成り行きを見守ることしかできなかった）

「わ、ホントにエロい下着つけてる・・・」

「えろ〜、えろ〜。」

「なになに？勝負下着？織斑君か二崎君の所に行けないのにそんなの着ちゃって〜。」

「まあまあ〜。セシリアつたらお、ま、せ、さ、ん」

（口々に言いながら、最後にユニゾンする女子たち）

『セシリア（せっしー）はエロいなあ。』

「え、エロくありません！！こ、これは、その、身だしなみ・・・  
そう、身だしなみですわ！！」

（セシリアはもみくちやにされて乱れた浴衣を直しながら、真っ赤

になって反論する。

それと同時に、自分だけが一夏の部屋に誘われていることがバレませんように、と心の中で密かに祈っていた)

「そつえばなんか念入りに体を洗っていたわね？」

ぎくっ。

「その後シャワーも浴びてたし、今もなんでかメイクしてるし？」

ぎくぎくっ。

「なんか、怪しくない？」

「あ、あつ、怪しくなどありませんわ！！これは女として当然の身だしなみ！！私、用がありますのでこれで失礼します！！」

「・・・わ、私もちよつと・・・外歩いてこよ・・・」

(ちよつと気分を害した風に言っつて、立ちあがる。ルティアは本当に外を散歩してこようと思っつて立ち上がった)

このまま部屋を出てしまえば私の勝ちですわ！

(そう考えるセシリアだったが・・・)

「・・・うん・・・くんくん。せっしがいつも使ってる香水じやないね？えと、この匂いはレリエルのナンバーシックス？わー、高級品だ。」

・・・しまった！

(時、すでに遅し)

「レリエルのナンバーシックス!?一振り十万円って言われる、あの!?」

「しかも毎年百個しか生産されないシリアルナンバー入りよ、あれ!」

「実物持つてるの!?ちょっと見せて!」

「え、ええ、見ても構いませんから、私はこれで・・・」  
『ダメ!』

(ええ・・・、と心の中で突っ込み&落胆するセシリアだったが、女子ズはその腕をがちりキープ。しっかりと掴んでいるためすぐに離してくれそうにはない)

「・・・えと、なんで私も・・・?」

( ついでにルティアも捕まっていた。理由は単純、『奏の下に行くこととしていたから、何かおめかししてるのでは?』と疑念を持たれたから。彼女は今回、外を散歩してこようとしていただけで、そういう目的は無い)

「これ、どこで手に入れたの!? お金を出してそうそう買えないって話じゃない!!」

「実家の方がレリエル社と懇意にしています・・・」

「うわ! そういえばセシリアって超お金持ちなんだった!!」

「私というか、私の実家が、ですけど・・・」

「匂い嗅がせて!!」

「あ、あの、それでしたらこのコロナを使っても構いませんから、私はこれで・・・」

『ダメ!!』

( ええ・・・以下略)

「もったいないもん!」

「セシリアがつけているんなら、それかげば十分!!」

( 両手を広げてにじり寄る女子ズ。嫌な予感がしてセシリアは後ずさると、すぐに壁に行きあたる。)

「ふっふっふっ。逃がしはしないわよお〜?」  
「さあ、大人しく嗅がれなさい!!」

(じりじりと近寄ってくる女子ズの目は、怪しく輝いていた)

「い、い、いやあああああ〜〜〜っ!!」

(セシリアの悲鳴が、ある一室に木霊した)

「……くんくん。」

「……え、えと、どうしたの……?」

「ん〜……?るーるー、いつも匂いが違うよ〜?」

「そ、そんなこと……ないよ……? 今日、備え付けのシャンプ  
ー使ったから……違うんじゃないかな……?」

(のほほんさん、ルティアの違いに気付くが、ルティアの言うこと  
は真実。だが……)

「なにーっ!?!」

「剥け剥けえ〜っ!!」

「ひん剥いて素肌を晒せえ〜っ!!」

「きゃああああああつ!!」

(ルティアも巻き添えに・・・)



「うつ、うつ……。酷い目に遭いましたわ……」  
「私なんて……。何も関係ないのに……。くすん……」

（結局もみくちゃにされた二人は、いまだ傷跡癒えぬままの様相で廊下を歩いていった。

一夏のいる部屋向かうセシリアと、ただ外で散歩しようとしたルティアが一緒に歩いている理由は、単に道が同じだったから）

でも、これでやっと……!!

（『一夏の部屋へと行ける』、そう思うと、今までの疲れもダメージも吹き飛ばせシリアであった。荒れた服装も、わずか数十秒で元に戻る）

の、喉の調子も整えておきませんか……。んっ、んっ……

（浮かれているのが歩調にも表れている。今にもスキップをしそうな足取りは、だんだんと速足になって目的地へと向かう。ルティアはそんなこと関係なしに、同じ歩調で歩く。

が  
(

『  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
』

( 部屋の前、その入り口のドアに張り付いている女子が四名)

「鈴さん、真琴さん？それに篝さんに沙霧さんまで。一体そこで何を……」

「シッ！！」

( 鈴が言うなりセシリアの口を塞ぐ)

「……?」

(ルティアはきよんとしている。

セシリアが訳が分からないままもがいていると、ふとドアの向こうから声が聞こえてきた)

千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？

そんな訳あるか、馬鹿者。……んっ！す、少しは加減しろ……

はいはい。んじゃあ、ここは……っど。

くあっ！そ、そこは……やめっ……っうっ！！

すぐに良くなるって。だいが溜まってたみたいだし、ね。

あああっ！！

……ちー姉、すごい声出てるぞ……

(一瞬の沈黙、それを破ったのはセシリアだった)

「……っ、っ、これは、一体、何ですの……!?!?」

「……/ / /」

(ひくひくと口元を震わせ、引き攣った笑みを浮かべながらそう尋ねるセシリア。しかし、返ってきたのはただ沈黙のみだった。

ルティアは聞こえてきた声にただ顔を赤らめるだけだった。何を想像していたのかは、各人にお任せしよう)

『・・・・・・・・』

(鈴、箒もズーンと沈んだ表情をしていた。その様子はまるでお通夜さながら)

「・・・・・・・・／／／」

(沙霧が一番興味ありそうに、赤面しながら聞いていた)

じゃあ次は・・・  
・・・一夏、少し待て。

(二人の声が途切れる。『あれ?』と思ってドアにぴったり耳を寄せた五人が・・・)

バンツ!!

『へぶっ!!!!』( 箒・鈴・セシリア・真琴)

「ふみゅっ!!!!」( 沙霧)

「っ!？」（ルティア）

（思い切り、ドアに殴られた。打撃の刹那、反射的に漏れた声は、殆どが十代女子にあるまじき響きをしていた）

「何をしているか、馬鹿者共が。」

「は、はは・・・」（箒）

「こ、こんばんは、織斑先生・・・」（鈴）

「さ、さようなら、織斑先生っ!!」（セシリア）

「そ、そそそれではっ!」（真琴）

「お、おお、おやすみなさいっ!!」（ルティア）

「うう・・・」（沙霧）

（脱兎のごとく逃走開始・・・と思われたが、五人はすぐに捕まった。

鈴、箒、真琴は首根っこを取られ、セシリアは浴衣の裾を踏まれて終了、ルティアは逃げ出そうとした瞬間に足を纏れさせて転倒。沙霧は最初から諦めたように鼻頭を押さええて呻いていただけだった）

「盗み聞きとは感心しないが、丁度いい。入っていけ。」  
『えっ!?!?』

（予想外の言葉に目を丸くする五人）

「ああ、そうだ。他の四人・・・ボーデヴィツヒ、デュノア、レギンハルト、アイセスも呼んで来い。」

『はっ、はいいっ!!』

「・・・!!! (コクコクコク!!!)」

(首根っこを解放された鈴・箒・真琴と、鼻頭を押さえて蹲っていただけの沙霧が駆け足で四人を呼びに行った。)

同じく浴衣を離してもらったセシリアは、ずれた胸元を正しながら、起きあがったルティアは観念したように顔を赤くしながら部屋に入った)

「おお、セシリア。遅かったじゃないか。じゃあ始めようぜ?」

(ぼんぼんとベッドを叩いてセシリアを呼ぶ一夏。)

それに対し、セシリアは余りにストレートな誘いにポツと真っ赤になった。

ルティアはとうに茹蛸状態)

「え、あの、織斑先生もいらっしやいますし、その、奏さんも・・・  
／／／」

「・・・?別にいいじゃないか。俺も体が温まってるし、早く始めようぜ?」

「い、いえ、こついつのは、その、雰囲気が・・・／＼／」

「・・・？」

「雰囲気い？」

(いまいちセシリアの言葉の意図が掴めない一夏と奏は、不思議そうな顔をするだけ。そして一夏は再びベッドを叩いて開始を促す。

どうにも困ったセシリアがちらりと千冬を見ると、向こうは向こうで、『私に構わず始める』と無言で告げてきた)

か、構わないなんてできるわけないでしょうに・・・

(しかし、このままでは埒があかない。しかも先程千冬はシャルロットとラウラ、ルシエラにオリヴィエを呼んでくるように言ったので、このままだとますます大変な事態になることを悟る)

うっっ・・・！お、女は度胸・・・ですわ・・・！

(ドクドクと張り裂けそうに高鳴る胸を隠そうとしながらも、セシリアは期待と不安とに踊らされたままギュッと目を閉じた)

「・・・」

(しかし、何も始まらない。)

『あれ?』と思って半分目を開けると、一夏が口を開いた)

「セシリア、うつ伏せじゃないとできないぞ?」

「え?ええ?う、うつ伏せで・・・しますの・・・?／＼」  
「うん。」

「そ、そうですね・・・／＼」

(本で読んだことと違うことに困惑しながらも、もしかしたら日本ではそうするのが一般的なのかもしれないと自分を納得させるセシリア)

「じゃあ、始めるぞー。」

「はっ、はいっ!!--」

(思わず裏返ってしまった声を恥じらうような余裕はもうない。すぐに訪れるであろう手の感触を待って、セシリアの心臓はいよいよ破裂寸前にまで暴れ始めた。)

そして・・・)

「ん、しょっ・・・!!--」



ギユウウウウウウ~~~~~ツ!!

「いたたたっ!?!いたっ!?!い、い、いっ、一夏さんっ!?!な、  
な、何をして・・・あうっっ!?!」  
「・・・!」

(突然悲鳴を上げるセシリア。)

その光景を見て初めて、ルティアは『さっきこの部屋で何が行われ  
ていたのか』を把握することができた。頭に電球がついている(

「何って、指圧。」

「し・・・あつ・・・?」

「そう、腰の。」

「腰の・・・」

(きょとんとしたセシリアは、一夏の言葉をオウム返しに反芻する)

「え、ええと、一夏さん?部屋に誘ったのは、もしかしてこの・・・

「  
「おう。マッサージをサービスしようと思ってな。セシリアって班  
部屋だろ?それじゃ落ち着かないだろうから、この部屋に呼んだん  
だ。」

(カア、とカラスが鳴いた。そして心の中でセシリアが泣いた)

「ぶ、無様です・・・私・・・」

「う？ど、どうした？そんなに痛かったか？」

「ええ、とても・・・致命的なまでに・・・」

「そ、そりゃ悪かった。すまん、優しくする。」

「もう何でもいいです・・・」

（深海よりも、闇よりも深いため息を漏らしたセシリア。それと一緒に魂まで抜けてしまったかのような、疲労と絶望と諦観と自嘲がごちゃ混ぜになった表情をした。

が、マッサージが始まると、その心地よさと一夏との会話もあって、自然と気分が回復し高揚していった）

「これくらいだったら大丈夫か？」

「ええ・・・。気持ちいいです・・・」

（一夏がマッサージを進めていく）

「ふええ・・・」

ルティアが珍しそうな声を出した。・・・なぜ？

「どうしたんだ？そんな珍しそうな声出して・・・」

「へうえっ！？にゃ、にゃんでもにゃいよおっ！？」

「・・・ひよつとして、一夏がマッサージできることが驚いた、とか？それとも羨ましかったり？」

「・・・え、えと、そによ・・・あうう・・・／／／」

・・・なんだろ、弄るのが楽しくなってきた・・・

「あうあうあう・・・」

「悪いな、俺には一夏並みの技術ねえからよ・・・」

そういつた時だった。

「おー、マセガキめ。」

なんと、千冬さんがセシリアの・・・ね。あれだよ。お尻を・・・握っていた・・・

しかも悪戯成功したときのような顔。夕子の悪さも子供っぽさもない、豹の笑み。

「しかし、年不相応の下着だな。そのうえ黒か・・・」  
「きゃあああつ!?!」

・・・見てない。俺は見てない・・・と思う。浴衣が捲れあがって下着が見えかけたけど、瞬時に俺は目を逸らした。

「せつ、せんせつ、離してくださいっ!!」

言い方が必死になってるのがわかる。

「やれやれ。教師の前で淫行を期待するなよ?十五歳。」  
「い、いい、いんっ、インコっ・・・!?!? / / /」  
「・・・(ボンツ!!)」

俺の横で一人が沸騰した。なんか音が聞こえた。

「冗談だ。．．．おい、聞き耳を立てている八人、そろそろ入ってこい。」

『．．．．．』

「私は聞き耳立ててないわよ？先生．．．」

ちよつとの沈黙の後、恐る恐る、といった感じでドアがゆっくりと開いた。

そこにいたのはシャルにラウラ、オリヴィエにルシエラ、さっき呼びに行けと命令された面々だ。

ちなみにルシエラは膨れていた。聞き耳を立てていないと。

「一夏、マツサージはもういいだろう。ほれ、全員好きな所に座れ。」

ちよいちよいと手招きをされ、六人はおずおずと入る。

ルシエラはちよつと遅れ気味だったが、一番堂々と入ってきた。

そして沙霧は．．．あ、あれ？いない？

「ぐおっ!?!?」

い、いきなり突進!?!?何!?!?なんだ!?!?

「ふにゆ・・・」

沙霧の声・・・？もしかして・・・

「ってまたそこかよ！？どけてー!!」  
「や。」

(この間、一夏が千冬と話をし、それでやっと全員(ルシエラはわかっていた)状況を理解。つまりセシリアの声もマッサージをしていたということ)

「は、はは・・・はあ・・・」  
「ま、まあ、あ、あたしはわかっていただけだね!」

(脱力する筈と、妙に強がる鈴)

「・・・／／／」

(そして、何かいろいろ『具体的なこと』を想像していたらしいシヤルロットとラウラ、そしてオリヴィエは真っ赤になって俯いていた)

「・・・まあ、おまえはもう一度風呂にでも行って来い。・・・あ  
あ、奏も連れて行け。」

「ん、そうする。じゃあもう一度行こうぜ？」

「わか・・・った！！ふう。沙霧のせいでまた一汗かいた・・・」

沙霧がどかないってぐずるから・・・ったく。

(去り際に一夏が『寛いで行ってくれ。って、難しいかもしれない  
けど』と言い残して去って行った。奏とともに)

(ちなみに)

「・・・お、一夏！見るよ、卓球台！」

「・・・どこの温泉地にもあるもんだな・・・」

「・・・一夏、明日の朝飯のおかず賭けて一戦やらねえか？」

「いいぜ、負けないからな！」





(三人称)

「おいおい、葬式か通夜か？いつものバカ騒ぎはどうした？」

一夏の残した言葉通り、どうしていいのか分からない女子が九人、何を話していいのか分からない女子が一人、言われたまま座っていた。

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは……ええと……」

「は、初めてですし……」

「……はう。」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物をおごってやろう。篠ノ之、何がいい？」

いきなり名前を呼ばれ、箸はびくつと肩を竦ませる。言葉がすぐに出てこず、困ってしまう。

そうこうしていると千冬は旅館備え付けの冷蔵庫を開け、中から清涼飲料水を取り出していく。

「ほれ。ラムネにオレンジジュースにスポーツドリンクにコーヒー、紅茶に緑茶。ココアにコーラ。烏龍茶に麦茶もあるぞ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ。」

そう言われ、実質交換したのはルシエラとオリヴィエだった。オリヴィエが持っていたのはコーラ、ルシエラが持っていたのはココアだった。

『い、いただきます・・・』  
「いただきます。」

言い方は違えど、全員同じような言葉を口にして、次々に飲み物を口にした。

女子の喉が動いたのを確認して、千冬はニヤリと笑った。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど・・・」

「な、何か入っていましたの!？」

「失礼なことを言うな馬鹿め。なに、ちょっとした口封じだ。」

そう言つて千冬が新たに冷蔵庫から取り出したのは、星のマークがきらりと光る缶ビールだった。

プシュツ!と景気のいい音を立てて飛沫と泡が飛び出し、それを唇で受け取つて、そのまま千冬はゴクゴクと喉を鳴らす。

『・・・・・・・・』

全員が啞然としている中、千冬は上機嫌な様子でベッドにかける。

いや、すでに一人様子がおかしいが。

「ふむ、本当なら一夏か奏に一品作らせるところなんだが・・・それは我慢するか。」

いつもの規則と規律に正しく、全面警戒態勢の『織斑先生』と目の前の人物が一致せず、殆どの女子がまたしてもポカンとしている。特にラウラは、さっきから何度も何度も瞬きをして、目の前の光景が信じられないようだった。

「おかしな顔をするなよ？私だって人間だ、酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけでは・・・」

「ないですけど・・・」

「でもその、今は・・・」

「仕事中なんじゃ・・・」

「ないですか・・・？」

ラウラ、オリヴィエ、ルシエラからは何の言葉も出てこない。その

代わりに、手元にある自分の飲み物をこくりと嚥下する。

沙霧はちびちびと緑茶を飲んでいった。ルティアは・・・様子がおかしい。

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ。」

そう言ってニヤリとする千冬は、全員の手元をざっと流し見た。

そこでやっとルティア・沙霧以外の女子一同が飲み物の意味に気がき、『あっ』と声を漏らした。

沙霧はそんなことお構いなしに緑茶を飲んでいる。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか。」

二本目のビールをラウラに言って取らせ、また景気のいい音を響かせて千冬が続ける。

「お前ら、あいつらのどこがいいんだ？」

あいつら、と言ってはいるが、全員がだれを指しているかが分かっていた。それぞれの想い人、一夏か奏だ。

「わ、私は別に・・・以前より腕が落ちていることが腹立たしいだけですので。」

と、ラムネを傾けながら等。

「あたしは・・・腐れ縁なだけだし・・・／＼／」

スポーツドリンクの淵をなぞりながら、顔を赤くしてもごもごと言  
う鈴。

「わ、私はクラス代表としてしっかりしてほしいだけです。」

さっきの行動の反発か、ツンとした態度で答えるセシリア。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう。」

しれっとそんなことを言う千冬に、三人はぎょっとしてから一斉に  
詰め寄った。

『言わなくていいです！！』

その様子をはっはっはっ、と笑い声で一蹴して、千冬はまたビールを傾けた。

「……私はその……かなちゃんが転校してきてちょっとした後  
に……助けてもらったから……／＼／」

「ほう？何をどう助けてもらったんだ？」

「そ、それは……その……い、いじめられてて……それで……  
はう……／＼／」

当時のことを思い出して顔を赤くする真琴。

「わ、私は……その……あ、あるとき……実は……その……  
／＼／」

「一目惚れでもしたか？大方『私の王子様』とか言ってるな。」

「はっ！」

図星を突かれ、変な声を出すオリヴィエ。事実、奏に『王子様』的  
願望を持っていた……

「僕……あの、私は……優しいところ……です……」

ぼつりとそういったシャルロットだったが、声の小ささとは裏腹に、

そこには真摯な響きがあった。

「ほう。しかしな、あいつは誰にでも優しいぞ？」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ……」

あはは、と照れ笑いしながら、熱くなった頬をぱたぱたと扇ぐシャルロット。それが羨ましいのかどうかは不明だが、最初の三人は押し黙ってシャルロットを見つめていた。

「で、おまえはどうだ、ボーデヴィツヒ？」

さっきから一言も発していない組その一のラウラに、千冬が話を振った。

それ自体は警戒していなかったようで、ラウラはびくっと身を竦ませながらも言葉を紡ぎ始めた。

「つ、強いところが……でしょうか……」

「いや弱いだろ。」

バツサリと切り捨てる千冬に、珍しくラウラは食ってかかる。

「つ、強いです。少なくとも、私よりも……」



そうかねえ・・・という千冬は、二本目のビールを開けた。

「で？アイセス、お前は・・・」

「私は・・・はつきり言ってしまうば、好きか、と言われると疑問符が付きます。ですが、では興味がないか、と聞かれると、はつきりとNoと言いますね・・・」

「つまり、友達以上恋人未満、といったところか？」

「それ以上に、ライバル、ということもありますから・・・」

どこか優しげな笑みを浮かべるルシエラに、千冬はある考えを持った。

「で、残った二人だが・・・。あからさまに好意を持つお前は・・・いや、どうした？セストナ・・・」

先程から全く声を発しておらず、俯いたままのルティアにようやく気付く千冬。それによって他の面々も気付き始めた。

同時に沙霧にも異変が。

「・・・(すくっ)」

「・・・(ふらぁ)・・・」

突然立ち上がる二人。ルティアは異常に早く、沙霧はゆっくりと・

「……お、おい、ルティア？沙霧？」

「ど、どうしちゃったのよ……？」

鈴たちの疑問も答えられるわけもなく、沙霧はたったがフラフラして結局床に座り込んでしまう。が。

「……（すたすたすた……）」

流れるような動きでドアを開け、部屋を去ってしまった。

「……神崎、どうした？」

「……織斑先生、沙霧は……」

「どうした？」

「……見たところ、酔ってます……」

『……』

空気が凍った。

「……待て、私は神崎に何一つ酒を飲ませていないはずだ。なぜ

酔った……？」

「……もしかして……においで……？」

「いや、まさか、そんなことは……」

ざわめく七人に千冬は……

「まあいい。後でどうにかしておこう。話を戻すが、あいつらは役に立つ。家事も料理も中々だし、他にも役に立つことがある。」

そつだろ、オルコット？と話を振られたセシリアは、赤い顔をして俯き、頷いた。

「と、いうわけだ。付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

『くれるんですか！？』

「やるか馬鹿。特に奏の方は……私に聞くな。」

『ええ……』

声を出してまで突っ込む七人。

「女ならな、奪うくらい気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども。ああ、奏の方だがな、あいつは『砦』を崩さないことには奪えないからな。」

三本目のビールを口にする千冬は、実に楽しそうな表情でそう言った。

その頃。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「ぜえ・・・ぜえ・・・ぜえ・・・」

一夏VS奏の卓球は、まだ続いていた。ポイントは、10VS10。  
15点先取での勝負だったのだが・・・

片方が点を取れば、片方が奪い返す。

逆転をされれば逆転し返す。

一戦一戦のラリーが非常に長い（大体四〜五分かかっている）。

のが原因で、試合は白熱していた。

「こ、今度は俺が・・・先取してやらあ・・・！」  
「それは・・・俺のセリフだ・・・！」

そして、奏が球を構えた時だった。

「せーん かなれきゅ

ん!!」「おぶぱっ!?!」

何者かが衝突、ボールは床に落下した。

「お、おい、奏・・・？大丈夫か・・・？今どつかのネコが言いそ  
うな言葉が聞こえたけど・・・ってあれ？ルティア？」

一夏が奏を見たとき、その何者かが判明。先程千冬たちがいる部屋  
から出てきたルティアだった。

「ふえへへえ〜・・・かなれきゅーん・・・しゅきー」

「酒くせえ!？飲んだ!？飲んだのか!？つかホントにルティアな  
のか!？」

「によんでにゃいよあ〜？ルーはあ、ルーらよあ〜！」

「性格変わってるって！性かむぐう?!」

目の前で繰り広げられている事態（奏完全被害者）に一夏はただ呆  
然とするだけだった。

「ん」

「ぷっはっ！！ル、ルティア！？ど、どうしたんだよ！！おかしいぞ！？／＼／＼」

「ねえ、かなれきゅーん……」

「な、なんだよ……？」

「……ひよ……？」

「一夏！今すぐリースかエリイ呼んで来い！！これ止めて！？止められる人呼んできて！？」

「え、あ、ああ！」

一夏、セストナ姉sを呼びに走って行った。

「ん……」

「……っておい何脱ぎだしてんだよ！？」

「らっひえ……あひゆい……」

「脱ぐな！！見えてるから！！見てはいけないものががつり見えてるから！！いい加減退け！覆い被さるなって！！」

「やっ！！あかりゃんほひいによっ！！」

「『やー』じゃない！！もつと自分の体大切にしろまず！つかこんな中途半端な奴と子供作りたいってどういう神経！？／＼／」

「りゅーろひゃんぴゃりゃ……にゃいもん……」

「は？」

「しゅきりゃにゃひゃ……ひょんにゃころ……ひにゃいもん……」

「……ないないない。こんなグータラゲーマー人間のことが好きになるとかマジあり得んって……」

どうにか引き剥がそうとしていた時に・・・

「奏、連れてき・・・」

「かな兄!？」

「・・・あちゃ〜・・・」

慌ててきた一夏が言葉を失い、リースは頭を痛そうに押さえた。

「・・・これ、においで酔ってる・・・」

「はあっ!？」

「ルティアね？お酒のにおいですぐ酔っちゃうの・・・。それも、普通のビールとかそういうのがダメ、という優しいものじゃなくて、料理酒あるじゃない？アルコール数低めの。」

「あ、あるな・・・」

「・・・あれでも、においで酔っちゃうの・・・」

・・・啞然。

「と、とにかくどうかしてくれ!!このままだと色々とまずい!!」

「ルティア!ほら、退こう!？奏迷惑してるよ!？」

「ふにい〜っ!!!や〜っ!!!」

「『や〜』じゃないの!!!ほら、退く!!!」

「・・・よし動けるようになった!俺逃げるから後よろしく!!!」



「早く！押さえられるのもそんなに持たない！！」  
「すまん、恩に着る！！」

奏、逃走。しかし・・・

「ふ にゃ

「うわっ！？」

「きゃあああっ！？」

っ！！」

ルティア、取り押さえられた状態から一気に自由になり、奏を追いかけていった・・・

「……廊下が騒がしいな……」  
「……さあ……何が……あれ？沙霧は？」

この騒動は千冬たちの部屋にまで聞こえていた。

無論、騒がしい理由は、奏の廊下疾走の足音だけ。

……おおおおおおおおおっ！！





S i d e    ? ? ? ?

某国、某施設。

そこに一人の少女がいた。

目の前には、黒と赤が入り混じった色のISが鎮座していた。

996

「・・・お願いね、」  
『・・・。アタシに力を貸してね・・・』

少女はそのISを愛おしそうに触った。

「・・・アタシは絶対に・・・絶対に殺す・・・！そして、アタシが完成体だってこと、証明してやるわ・・・！」



識別番号、034・・・。アンタを殺して・・・アタシこそが本当  
の識別番号034になる・・・。そして・・・





真の『ゼロ』の所有者がアタシだってことを・・・全世界に知らしめてあげるわ・・・」



そう眩き、身を翻す少女。

少女のその髪は金色、闇に溶ける直前に見えた目は・・・

紅く、  
冷たかつた。  
・  
・  
・

#33 海に着いたら十一時!! (Oceans Eleven) (後編) (後書き)

〈次回予告〉

合宿二日目、ISの試験稼働などの日。

専用機持ちも別行動をする。

その時、真琴と篤が千冬に呼ばれ・・・

二人の『天災』が姿を現した・・・

次回、#34 二大天災襲来、姿を見せる椿と雷光

紅き椿と白き雷光、その姿を見せる時・・・

最後にちよこっただけ出た少女、実はすでにちよっぴり出てたりします。

フライングですが、フラグです。さて、いつ出たでしょうか？

#34 二大天災襲来、姿を見せる椿と雷光（前書き）

二日目です。ついに天災二人が登場、箒と真琴の専用機も・・・！

ついでに前々言っていた『メカニック姉妹』が登場します。

#34 二大天災襲来、姿を見せる椿と雷光

合宿二日目の朝・・・

「・・・ん？」

なんか変な感じがして目が覚めた。

「ふにゆ・・・う・・・」

・・・なゼルティアの声か？

「・・・あ。」

なぜこうなったか思い出した。昨日・・・

く 昨日 く

「ふにゃーっ!!」

「ふにいーっ!!」

「お前らしい加減にしるよ・・・」

何があつたか知らないけれど、リースやエリイの話を聞くと、どうやらルティアは酔ってるようで。沙霧も同じような行動してるから、多分同じ。

今現在は猫化モードで対立中。お互いぽかぽか叩き合ってる。傍から見れば、ネコミミとかが見えるかも。

「だから・・・お前ら・・・大人しくしろ!!」

「にゃん!!」

「うわっ!?!」

(急にルティアが奏に跳びかかる)

「にゃーっ!!」

「うーっ!!」



沙霧まで飛び乗って、止まらないケンカ on the 俺。・・・  
これ、文法おかしいな・・・

「・・・はあ……。頭撫でてやつから大人しくしろ・・・」

「にやつ!?・・・ふにゃあ・・・」

「はふうく・・・」

・・・完全に猫だな。いや、犬か？

「んう・・・ふにゆう・・・」

「・・・すう・・・すう・・・」

・・・あ、寝た。

「・・・二人をどかして・・・ね・・・あれ？動けない？」



・・・このやる・・・いきなり耳の近くで悲鳴あげやがった・・・

「わ、わたっ、なっ、にやっ、にやんでっ、わっ、わたっ、へうっ  
!?!へううっ!?!?!/!/」

「落ち着け!まず落ち着け!!--落ち着いたら昨日のことすべて話す  
から!!--」

「・・・へうう・・・/!/」

・・・落ち着いてくれた・・・

「・・・昨日どこまで記憶がある?」

「・・・えと・・・織斑先生の部屋にいて・・・それから・・・あ  
れ?」

首をかしげる。・・・OK、ここから記憶がないことが判明。

「じゃあそこから、だな・・・」

） 昨日のこと、説明中・・・ ）

「・・・悪い癖、出ちゃったんだ・・・」

「リースから聞いたけどな？・・・しっかしあれは不可抗力でいい  
だろ？」

「・・・でもお・・・」

とにかく謝罪しようとするルティアを宥める。仕方ないさ、事故だ  
もの。

「俺は気にしてないから。昨日のは事故。それで十分。な？」

「・・・う」「ふにゅっ！」「えっ！？」

「おぶっ！？」

いきなり沙霧に抱きつくあふあふあふあふあ・・・

「……………！！！！つ！！！！」

（現状、奏は沙霧に頭をホールドされ、思い切り抱きつかれている。  
胸による窒息状態）

「……………！！！！」

とん……

「……………？」

（ルティアが奏の指の動きに気付く）

……………とん……………とん……………とん……………

「……………る……………てい……………あ……………す……………ぐ……………に……………」

（奏がルティアに助けを求めるときに使ったのはモールス信号。声もあげられず手話もできないため、最後の手段として使ったのだ）

「……………ど……………どうしよう、でも助けないと……………。……………うん、

がんばるー!!」

（奏のモールス信号は、『ルティア、スグニサギリノウデヲホドイテクレ』だ）

「せえ……の……!」

（そこからルティアの奮闘が始まった。

本当は嫌だけど、奏が沙霧を押し倒したかのような状況を作り、沙霧の腕を奏の頭から剥がす。

そのまま奏が抜けるのを待つただけだとまた抱きついてしまい、延々と同じ工程を繰り返すだけだから自分の体で仕切りを作って邪魔をしておく）

「……いい……よ……」  
「……ん。」

ルティアによってようやく動けるようになった。

「……ん……んっ……よっっ、  
脱出ー!ー!」  
「……ほっ……」

ルティア・・・ありが「きゃあっ!?!」・・・  
「ん」・・・

寝ぼけた沙霧がルティアを抱き寄せた・・・!?

「勘違いしてる!!俺と勘違いしてるって!!」  
「は、はなれなっ、さ、沙霧、やめんむっ!?!」

・・・見てはいけないものを見てしまった気がした・・・

「ん」~~~~つ!?!「ん」~~~~つ!?!「ん」~~~~つ!?!  
「ん」~~~~ん」~~~~つ!?!」

沙霧、起床。そのまま目の前の状況を把握してくれたようだ。・・・  
ルティアと沙霧が・・・キスって・・・おいおい・・・

そして二人のとつた行動は早かった。離れるまでが本当に早かった。

「・・・うつ」~~~~  
「・・・奏え」~~~~

・・・止めい。そんなうつるした目で見ないで。

「……諦める。どうしようもなかったんだから……」  
「……でもお……でもお……」  
「……しくしくしく……」

沙霧、嘘泣きやめろ。泣いていたら『しくしく』言わない。

「……ちったあなら慰めてやるからよ。落ち着け。」  
「……キス……」  
「はぁ？」

沙霧、お前は一体何をトチ狂ったことを？

「……わ、私……も……//」

ルティア、お前もか！！



S i d e S a g i r i

．．．むう．．．、奏のお嫁さんは私なのに．．．

私の方が．．．お似合いだもん．．．！

S i d e L u t h i a

・・・わ、私、か、華奈多さん公認の許嫁だもん・・・／／／  
・・・私だって・・・譲る気・・・ないもん・・・!!

Side Kanade

「・・・私が先!」

「・・・わっ、私がつ!!／／／」

「お前らは少しくらい自重することを覚えろ!つかルティア、性格  
変わってないか!?」

「うっっ!!」

「(・・・ジッター)」

・・・なんだろうか、これが本当の・・・いや、まだだ。まだこれはハムスター対ハツカネズミと思える。・・・うん。

「・・・これで我慢しろ。これ以上事が大きくなったら鎮めるのが面倒だ。」

そう言って俺は二人の頭を撫でた。

『・・・ふにゃあ・・・』

・・・よし、落ち着いた。

・・・しかしまあ、何の心境変化があったんだろうか？ルティアがあんな大胆になるとか・・・

） 集合場所 ）

「ようやく全員集まったか。・・・おい、遅刻者。」  
「は、はいっ！」

千冬さんと呼ばれて身を竦ませたのは、意外や意外、ラウラだった。

あのラウラが珍しく寝坊して、集合時間に五分遅れてやってきた。

ちなみに俺らに関しては、集合時間1分遅れの到着だったけど、昨日のこともあってお咎めなしになった。

「・・・そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみろ。」

「は、はい。ISのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。これはもともと広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、現在はオープン・チャネルとプライベート・チャネルによる操縦者会話など、通信に使われています。それ以外にも『被限定情報共有<sup>シェアリング</sup>』をコア同士が各自に行うことで、さまざまな情報を自己進化の糧として吸収しているということが近年の研究でわかりました。これらは製作者の篠ノ之博士が自己発達の一环として無制限展開を許可したため、現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとのことですよ。」

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう。」

そう言われて、ふうと安堵の息を漏らすラウラ。・・・心なしか、胸を撫で下ろしているようにも見えたが、それはきっと、ドイツ教官時代に嫌というほど恐ろしさを味わったからだと思いたい。

「さて、今日は各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え。」

はい、と一同が返事をする。流石に一年全員勢揃いなため、かな

りの人数だ。

現在位置は、IS試験用のビーチで、四方を切り立った崖に囲まれている。ちょっととした秘密のビーチみたいだ。

ここに搬入されたISと新型装備のテストが今回の合宿の目的だ。

「二崎、お前だけ特別だぞ・・・？専属の整備士が来ているのは・・・」

「・・・仕方ないと踏ん切りつけて欲しいっす・・・。俺だけじゃどうしようもないし、整備できるのあの二人しかいないんで・・・」

あの二人、というのは、俺の友人であり俺が知る限り最強のメカニック姉妹。ISの修理や追加装備の開発はすべて可能な限り受け付けるのがモットーな親父のもとにいる姉妹は、親の血をしつかりと受け継いでいた。ちなみに俺はその姉妹に追加装備の開発を依頼していた。

「お、いたいた！奏兄！！」

「やつほ、奏君！」

「お、来た来た。燦華、夜子、頼むわ。」

セラフイムの追加装備取り付け依頼を受けた姉妹、それが三城燦華、三城夜子の三城姉妹。

燦華とは中学の時の友人で、この時からPSPの改造とかでお世話

になった。本人は『機械いじるのが好きだから』と言って拒むことはない。かなりの無茶ぶりでも。

夜子はその妹。かなり活発な子・・・なんだが、俺のことを『奏兄』と呼んで甘えてくる。慕われていることはわかるんだが、そのたびに色々出費がかさむのが問題点・・・なんだよな・・・。甘えられると断れないのが彼女の強みなんだけど、ね・・・。

「まず、追加装備の説明だけど、いいかな？」

「ああ、頼んでおいたアレ、だよな？」

「うん。追加のバスターライフル型ブースター二つと、威力緊急相殺用に・・・」

「・・・おい、それ頼んだ覚えは・・・」

「あ、それアタシが発案したの。急に推進力を止めなきゃいけないときに前方ブースターだけだと相殺しきれないから大型威力のものが無理に抑えるべきだ、って。」

「・・・夜子が言うなら合ってるのかもな・・・」

「・・・で、追加するのは・・・腰の前方超威力レールガンと、両肩前方向発射式ツインレールガンね。」

「・・・夜子、これはただの緊急相殺用の装備なんだよな・・・？」

「・・・ただの相殺武器ならここまで威力を底上げする必要ないよな・・・？」

「ん？そだよ？でもね、緊急相殺中って無防備になるじゃん？だったらその間にも攻撃出来ちゃうものにした方がいいかなーって。」

「そんなん要らん。ブースターだけで十分だ。」

「ぶー・・・」

夜子がむくれたが気にしない。本当に要らん。アレつけたら移動する要塞じゃねえかよ・・・

「じゃあちよつと待っててね。これがこーであれがこれで・・・」

「じゃあセラフィム置いておくから頼むわ。俺まだ別の仕事あるし。」

「うん、任された。」

燦華・夜子にセラフィムを任せた時だった。

「篠ノ之、中咲。お前達はちよつとこっちに来い。」

『はい。』

「二崎も暇なら来い。作業はあの二人に任せてあるのだろう？」

「・・・へいへい・・・」

打鉄用の装備を運んでいた篤と、リヴァイヴのパーツを運んでいた真琴が、千冬さんに呼ばれてそっちに向かう。俺も同時に呼ばれた。

「篠ノ之と中咲には今日から専用・・・」

「や」

っほ

っ！ー！



「ち

~~~~~ん!!」

いちや~~~~~

向こうから砂埃を上げながら二つ人影が走ってくる。異常に速い。ISつけてるからだろうけど……

で、その人物と言うのが……

「……東……そして華奈多……」

……といつじゆ。

立入り禁止もなんのその、稀代の天災・篠ノ之東と二崎華奈多は堂々と臨海学校に乱入してきやがった。

「やあやあ、会いたかったよ、ちーちゃん!さあハグハグしよう!愛を確かめ……ぶへっ……」

カウンターの要領で東さんを片手で掴む。しかも顔面。指が食い込んでいた。……相変わらず手加減しないな、あの人は……

「うるさいぞ、東。」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ!」

・・・そんなふうには二人を見ている暇はない。・・・こっちにも・・・

「かーなーでーっ!! ひっさしびゅ」シャラップ!!」「りゅっ!?!」

・・・黙つとけ、姉さん。アンタが来ると俺が困るんだよ・・・

「ちょっとー!!? いきなり蹴るってどういうことなのかなー!!? 少しくらいは姉弟のスキンシップというものがあってもいいんじゃないのかなあ!?!」(涙目)

「うっさい。出会い頭に抱きつかれると俺がいるいる面倒なんだよ。いい加減弟離れしろこのブラコン。」

「それは否定しないっ!!」

「否定しろボケっ!! 大体な、ルティアとか沙霧のこと、何で唐突に行動するわけ!?! 少しは俺のこと考えろよ!!」

「えー? 奏はルーちゃんとかさぎリンとか好みじゃないの?」

「好みとかは別の話だ!! なんなんだよ両者の合意なしに婚約者決めるとか!! 馬鹿!!? 馬鹿なのか!?!」

「・・・そうだよブラコン・・・」

「・・・ちっ・・・」

・・・対立来た。姉さんが舌打ちした。

「・・・まったく、奏に脅されなきゃあんな女狐のIS作らなかつ

たのに……」

「げっ……、ブラコンが作ったIS……!? うわー引く……」

「黙らっしやい女狐えっ!!! 私が目が黒いうちは奏はやらんぞおっ

!!!」

「ブラコンからかなちゃんを貰ってくから!!! 奪ってみせる!!! 泣き面拜んでやるからね!?!」

「女狐にそんなことできるわけないじゃーん?」

「ただのブラコンに弟の恋愛の自由を奪う権利なんてありませんよーだ!!!」

あー……面倒なことになった……

「いい加減黙れこの馬鹿どもがっ!!!」

『いだっ!?!?』

面倒だから二人同時に拳骨。こうした方が早いことは、昔から知ってる。

「か、奏!?! 何で殴るの!?! 奏を守るためにやってるんだよ!?!」

「酷いよかなちゃん!!! このブラコンからかなちゃんを助けてあげようとしてるんだよ!?!」

「……ふーん……? じゃあ…… (「に「よ」「に「よ」「に「よ」「に「よ」」

」

二人の耳元でちょっとぼやいてみる。弱点を。

「すみませんでしたあっ!!！」

「自分、調子こいてましたあっ!!！」

ふう、落ち着いた。・・・あっちでも・・・

「殴ってから言ったあ!!!!しかも日本刀の鞘で殴ったあ!!!!箒ちやんひどおっ!!!!」

東さんが頭を押さえながら涙目になって言っていた。・・・なんとなくだけど、セクハラしたんだろっような、言葉で・・・

「え、えつと、この合宿では関係者以外・・・」

「ん? 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの私を置いて他にいないよ?」

「えっ、あつ、はいっ、そ、そうですね・・・」

山田先生見事に轟沈。・・・そういえばそうだ。東さんには何を言っても無駄。放任するしかないから。

「おい東、華奈多。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている。」

「えっ? めんどくさいなあ。私が天才の東さんだよ、はるー、終わ

り。」

「で、私がもう一人の天才、華奈多さんだよん はろはろー」

面倒くさがって言う東さんに、ちよつとおちやらけて言う姉さん。こんな対極にいる二人がこんなに仲がいいのは・・・永遠の謎だ。

んで、目の前にいるのがISの開発者にして天才科学者、篠ノ之東と、その発展開発の第一人者、二崎華奈多だと気づいたらしく、女子の間がにわかに騒がしくなった。

「・・・はあ・・・。もう少しまともでできんのかお前は・・・。せめて華奈多くらいにできるようにしろ・・・。そら一年、手が止まっているぞ。こいつらのことは無視してテストを続ける。」

「こいつは酷いなあちーちゃん？らぶりい東さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ。」

「まったくもー。東もちよつとやりすぎだよお？」

「うー、皆して東さんをいじめるよお・・・しくしくしく・・・」

そんな旧知の間柄である三人のやり取りに、おずおずと割り込んだのは山田先生だった。

「え、えつと、あの、こいつう場合はどうしたら・・・」

「ああ、こいつらはさつきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします。」

「わ、わかりました。」

「むむ、ちーちゃんが優しい……。束さんは激しくじえらしい。このおっぱい魔神め、たぶらかしたなあ〜っ！」

「……よし、ここからは音声だけに絞る。健全な十五歳男子にはきつ過ぎる。」

「きゃああっ!? な、なんっ、なんなんですかあっ!?」

「ええい、よいではないかよいではないかー。」

「あーあ、趣旨変わっちゃったよ……。ジエラシーはどこいったジエラシーは。」

ちなみに俺の知ってる限りだと、束さんの胸は千冬さんよりちょっと上……。らしい。一夏からの情報。で、そう考えると山田先生と同じか少し下……。くらいか?

ちなみに姉さんは残念だ。

「やめる馬鹿。大体、胸ならお前も十分にあるだろうが。」

「てへへ、ちーちゃんのえっち。」

「死ね。」

・ 犬 家よろしく砂浜に頭から突っ込む束さん。姉さんかというと……

「どうぞせ私にはないですよーだ・・・」

拗ねていた。

「あ・・・束さん・・・」

「おおうるーちゃん！！ひっさしぶりだねえ〜！最後に会った時より大きくなつたねえ・・・。わたしや嬉しいよお・・・。大きくなつて・・・」

ふに。

「ひゃうっ!?!」

「特におっぱ黙れ。」「ぶ!」

久しぶりにルティアにあつて興奮したのか、また・・・というかマジで驚掴みにしていた。

で、千冬さんから制裁。また砂浜に埋まる。

「・・・で？頼んでいたものは？」

「おおう！かな君久しぶりいー！！頼まれてたものかね？うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ？さあ、天をご覧あれっ！！」

ビシッ、と上を指す束さん、その言葉に従って箒も、真琴も、他の

生徒たちも空を見上げる。

・・・ズーンッ!!!

「おわっ!?!」

いきなり、いきなりだ。激しい衝撃を伴って、なにやら金属の塊が

二つ、砂浜に落下してきた。

銀色をしたそれは、次の瞬間正面らしき壁がパタリと倒れてその中身を俺たちに披露した。

「じゃじゃーん！！これぞ篝ちゃん専用機こと『赤椿』！全スペックがセラフィム以外の現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！！そしてそして、こつちが真琴って子の専用機『ヴァイス・ブリッツ』！！こつちはかな君完全監修、かなちー制作の二崎姉弟作の射撃特化ISだよ！！」

真紅と純白の装甲に身を包んだそれは、束さんの言葉にこたえるように動作アームによって外に出てきた。

新品のISだからか、太陽の光を反射して眩しい。

・・・待て。今さらりと恐ろしいことを言わなかったか？『セラフィム以外の現行ISを上回る』って・・・

「さあ、篝ちゃん！今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！！私が補佐するからすぐに終わるよん　かな君はヴァイスの方、お願いね」

「はいはい。真琴ー、さっさとフィッティングとパーソナライズ済ますぞー。」

それぞれがそれぞれで作業を始める。

「奏君、何か手伝うことないかな？」

「・・・ちよつとこっちの方、処理追いつかないから頼むわ。」

「OK、任せて！」

俺のセラフィムの追加武装の取り付けが終わった燦華が手伝いにき
た。

「・・・夜子は？」

「おやすみモード。しょうがないよ。まだまだ子供だもん。」

「俺たちだってまだガキだろうがよ・・・」

「ふふっ、そうだね。」

ちなみに先に束さんが乗りやすい体勢にしてくれたためにやりやす
かった。地味に凄かった。

「・・・さつとと、あの馬鹿姉は一切合切データ入れてねえから面
倒なんだよなあ・・・！」

「大丈夫だよ。だって奏君、プログラミングは得意でしょ？」

「そりゃ、な。」

「だったらすぐ終わるよ。・・・でもすごいね、これ・・・」

燦華が驚いているが、正直俺も驚いていた。だって、俺が考えた設
計以上のレベルだし・・・

「・・・はい、フィッティング終了。超速いね、さすが私！かな
くん、どーおー？」
「・・・どこその馬鹿姉が手を抜いてくれた個所があったんでそれ
を補うのあと1分はかかる・・・」
「もー、かなちーったらー。ケンカはめっ、だよ？」
「・・・ぶー・・・」

東さんが姉さんを一喝。・・・でもどこかふざけてるため迫力がな
い。

・・・けどまあ、本格的にこれは射撃特化・・・いや、射撃武器し
か無いじゃん。

「あの専用機、篠ノ之さんがもらえるんだ・・・」
「中咲さん、専用機・・・いいなあ・・・」
「だよねえ・・・。なんかずるいよねえ・・・」

ふと、観衆の中からそんな声が聞こえた。同時に作業終了。
それに素早く反応したのは、意外なことに東さんだった。

「おやおや？歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界
が平等であったことなど一度もないのだよ？」

ピンポイントに指摘を受けた女子は気まずそうに作業に戻る。それを別段どうでもいいように流して、東さんは作業を続ける。・・・つか、その発言の間も手が止まってなかった気がする。相変わらず天才だなあ・・・

「後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いつくん、白式見せて？東さんは興味津々なのだよ。」

「え、あ。はい。」

一夏が白式見せる、と東さんに言われた。

「・・・燦華、どうだ？」

「・・・難しいね。これ、元々の調整が雑だったから結構難航してる。・・・でもやりがいがあるね。メカニックとして、これほどやりがいのある仕事は無かったかなあ・・・？」

燦華の癖が出た。メカニックの仕事になると、本気になって仕事に取り組む癖。いい癖だけど、酷い時は三日三晩何も食わずに仕事を続けてしまうこともあるのがたまに傷だ。

ちなみに作業が難航しているその横では、東さんが百式を見て色々唸っていた。

「ん〜・・・？不思議なフラグメントマップを構築してるね〜・・・
。なんだろ？見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな
？」

ちなみに解説。フラグメントマップとは、各ISがパーソナライズ
によって独自に発展していくその道筋のことらしい。人間で言うところの
遺伝子だ。

「東さん、その事なんだけど、どうして男の俺がISを使えるんですか？」

「ん？ん〜・・・どうしてだろうね？私にもさっぱりだよ。ナノ単位
まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？」

「・・・いい訳ないでしょ・・・」

「にははは、そういうと思ったよん。んー、まあ、分かんないなら
分かんないでいいけどねー。そもそもISって自己進化するように
作ったし、こういうこともあるよ。あっはっはっはっ。」

・・・一夏の疑問、何の解決にもならなかった。

「ちなみに、後付装備ができないのはなんでですか？」

「そりゃ、私がそう設定したからだよん」

「え・・・ええっ！？白式って東さんが作ったんですか！？」

「うん、そーだよ？っていつでも欠陥機としてポイされてたのをもち
らって動くようにいじっただけけどねー。でもそのおかげで第一
形態から単一使用能力が使えるでしょ？超便利、やったぜブイ。で
ねー？なんかねー？元々そういう機体らしいよ？日本が開発してた

のは。」

「馬鹿たれ。機密事項をベラベラばらすな。」

べしん！と手加減なしの打撃が束さんの頭にヒット。無論、手を出したのは我らが鬼教師こと千冬さん。

んで、姉さんはというと・・・

「・・・ねえねえルーちゃん、さぎリン、奏との仲はどうなったの？ねえねえ、Bまでいった？どうなの？」

「び、びび・・・びび・・・／＼／＼」

「・・・（フルフル）」

！！！
・・・なんかルティアと沙霧に詰問していた。・・・って待てえい

「おいそこの馬鹿！！俺を社会的に抹殺しようとするのやめろ！！」

「えゝ？だつてえゝ、奏の許嫁の現状気になるもーん！！」

「馬鹿！俺が社会的に抹殺されるわ！！」

そう騒いでいたら・・・

「奏？どうしたの？」

シャルが来た。・・・カオスな関係になりそうな・・・

「・・・気にしないでくれ・・・。その馬鹿に社会的に抹殺され
そうな気がしてきたから・・・」

「じゃ、社会的に・・・」

姉さんの方を見てそう言った時、姉さんの目が光った・・・！？

「・・・奏、この子・・・一体・・・」

「・・・シャルロット・デュノア。デュノア家の娘でフランス代表
候補生。」

「え、えと、シャルロット・デュノアです。」

シャルが姉さんにあいさつした。礼儀正しく。・・・それがいけな
かった・・・

「・・・奏・・・」

「な、なんだよ姉さん・・・」

嫌な予感が・・・

「・・・彼女、認めてもいいかも・・・」

「よし今からじっくり話し合おうじゃないか？じっくり姉さんの価値観とか世間一般常識の件とか法律とかまずアンタのその狂った意識を修正してやるうか!？」

「え？なんで？」

「どこの世界に出会い頭に許嫁認定とか言い出す姉がいるんだよ！
？余計に俺が社会的に死ぬわ!!」

「・・・い、許嫁・・・/ / /」

横でシャルが赤くなってる!!

「いや・・・。早く甥か姪の顔を見たいもんだ・・・」

「よし殺す。マジ殺す。今すぐ殺す。」

「ちよっ、奏!?ストップ!殺しちゃダメ!!」(奏を羽交い絞めにする)

「止めるなシャル!アイツを殺さない俺はいずれ社会的に抹殺される!!」

「抹殺されないって!!抹殺されないようにするから!!僕が!」
『!』

シャル!止めてくれるな!一度お灸を据えておかないと!!

「・・・奏は私が守る・・・!」

「わ、私だつて・・・!」

「・・・僕だつて守れるんだから・・・!」

ちよつ、お前ら対立止め・・・

「一体何をしている？」

「・・・とうかさつきから奏の大声が聞こえるんだけど・・・」

オリヴィエ・ラウラも来た。・・・もうやだ・・・

「・・・奏！あの女狐以外だったらOK!!」

「突然何を言い出すんだアンタは!!」

「ここにいる皆嫁にしちゃえ!! 気にするな、私は気にしないっ！
！」

「よつ、嫁っ!？」

「えっ!？ええっ!？」

「気にするわ!!・・・あーもうこの姉やだ、頭が痛い・・・」

(一方)

「えーと・・・中咲さん・・・だっけ？」

「え、あ、うん・・・。あなたは・・・」

「私？三城燦華。奏君とはただの友達だよ？」

「・・・そっか。改めてだけど、私、中咲真琴。よろしくね。」

「こっちこそ・・・うん、これで終わり。後は4分ほど待っててね。フィッティング終わるから。」

「す、すごいね・・・」

「すごいことないよ。私なんてまだまだだから。」

「・・・私も、あの時『まだまだだ』って思わなかったから・・・かな・・・」

「どしたの？」

「うづん、こっちの話!!」

(フィッティング終了を待つだけになっていた)

「・・・いやー、しっかし奏も罪な男だねえ〜？」

「・・・なんだよ。」

なんか急にかまれた。

「だってえ〜、今わかってるだけでも女狐含めて六人に好かれてるんだよ〜？罪な男と言わずしてなんと言う〜？」

「・・・黙れ。その内の何人かはアンタだろうが。真琴ー、フィッティング終わったら試運転兼ねて飛ばすぞ。いいな？」

「いいよー。」

姉さんを無理やり無視して真琴に振る。

一足先に箒が試験稼働を始めようとしていた。

「んじゃ、試運転も兼ねて飛んでみよ？箒ちゃんのイメージ通りに

動くはずだよ？」

「ええ、それでは試してみます。」

ケーブルがプシュ、プシュ、と音を立てて外れていく。直後、箒が目を閉じて集中させると、次の瞬間には赤椿は凄い速度で飛翔していった。

「おわっ!?!」

「きゃあっ!?!」

その急加速の余波で発生した衝撃波に砂が舞い上がる。それから箒の姿を追うが、全く見えない。

「どうどう? 箒ちゃんが思った以上に動くでしょ?」

《え、ええ、まあ・・・》

東さんもきつとIS展開をしているんだろうな……。オープン・チャンネルでの会話が普通に聞こえる。

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『あめしづ雨月』で、左のが『からわれ空裂』ね。武器特製のデータ、送るよん」

どんな武器なのかはよくわからないから、一夏のISを通して見せ

てもらおう。・・・うん、さすがと言える身のこなしだな・・・

「親切丁寧な束おねーちゃんの解説付きー 雨月は単一使用の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続して敵を蜂の巣に！にする武器だよ」 射程距離は、まあアサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど、赤椿の機動性なら大丈夫！」

束さんの説明に合わせてかどうかはわからないが、箒が試しとばかりに突きを放った。

月が放たれたと同時に、周囲の空間にレーザー光はいくつもの球体として現れ、順番に漂っていた雲を穴だらけにした。

「次は空裂ねー。こっちは対集団仕様の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の攻勢エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利 そいじゃこれ撃ち落としてみてね、ほーいっ」と。

言うなり、いきなり十六連装ミサイルポッドを呼び出し・・・ええっ！？

そのまま一斉射撃・・・っておいおい・・・

「箒！！」

「・・・やれる！この赤椿なら！！」

聞こえた言葉通り、空列を一回転するようにふるつ籌。またあの赤いレーザーが、今度は束さんの言葉通り帯状になって広がり、十六発のミサイルを全弾撃墜した。

「すげえ・・・」

爆煙がゆっくりと収まっていく中、その真紅のISと籌は威風堂々たる姿をしていた。

「んじゃ、次はヴァイス・ブリッツ！あ、かな君に全データ送るか
らその指示通りにしてね？」

「めんど・・・しゃあねえな・・・。真琴、フィッシングは？」

「終わったよ。いつでもOK！！」

「んじゃ、まず飛んでみる。」

「んー！」

一言言つや否や、かなりの速度で飛翔していく。セラフィムやブラッディ・ノワール、リバレーティング・ローズには劣るものの、それなりの速さがあった。

そして高度300mまで飛翔した。

その間にセラフィムが戻ってきたから部分展開してオープン・チャ

ネル接続。

「どうだ？」

「・・・凄い！思った通りに動く！！わ、わ、凄い凄い！！」

「・・・ならいいか。んじゃ、次は武器な。ヴァイス・ブリッツの初期装備は・・・長距離用アサルトライフルの『サジタリウス』、中距離専用ショットライフル『ヘルゲートブラスター』、五五口径スナイパーライフルの『スターダスト』、『シールドビットキャノン』十二機だ。・・・まずサジタリウス出してみる。」

《OK!》

そのまま左手にサジタリウスを呼び出し^{コール}。

「んじゃ・・・東さん、的か何かありますか？」

「ほいほい的ですね〜？ポチツとな！」

と言って出た的は・・・俺の10cm横!?

「・・・ちよ、何これ!?ま、真琴！俺に当てないよつに横の的撃てー!!」

《・・・分かった・・・》

真琴の返事が変わったことに、近くの面々がどよめく。

「か、奏、真琴ってあんな子だったっけ？」

「なんか凄い落ち着いた返事だったんだけど!？」

「集中してる証拠だ。射撃の、な。一応下がった方がいいぞ？ひよっとしたら、があるかもしれないし。」

シャル達が下がった瞬間、俺の横を一発のレーザーが横切った。

「おー！中心命中、百点満てーん!!！」

狙いも性格、中央に当たったらしい。

「次はヘルゲート・ブラスターだが・・・これは適当に撃ってみろ。ただの距離用ショットライフルだから。」

《ん、了解。》

空で雲に向けて手当たり次第に撃つ。

《これ、意外に反動ないね。もっとあるかなーって思ったのに。》

「そうみたいだな。んじゃ、次はスターダスト。今度はもっと離れて・・・ここから大体1Km以上離れた地点に移動してくれ。狙撃範囲は大体300Kmと書いてあるけど、小手調べとしてそれくらいだ。」

《了解。》

数分後。

《着いたよ、大体1km離れた場所。》

「んじゃ、今度は・・・」

「ん？的かな？ほいほい、ポチツとな!!」

ふう、今度は安全な場所に的が出た・・・

「よし、的が見えるだろ？そいつ狙ってくれ。」

《・・・ん・・・》

少しの静寂があつて・・・

パシユンツ!!

「わっ!?!」

「す、すい・・・」

「射撃型、とは聞いていましたけど、まさかここまでとは・・・」

「ん、百点!凄いな凄いな君のお友達!」

俺も正直驚いている。ここまで精密射撃ができるって聞いたことな

いぞ……

「さ、最後にシールドビットライフル……ってこれ、俺のセラフイムの粒子砲連結状態の砲撃防げるってのわ！？」

「うんうん。束さんはヴァイス・ブリッツ作るのに手を加えてないけど、これかなちーがやったんだよねー。いいお姉さんだねー」

「いいお姉さんなのか……？とりあえず撃ってみるからビット防御展開しろ。全部な。あ、予めそういうふう設定しないと機能しないらしいぞ？」

《わ、分かったー！！》

真琴が慌ててビットを展開するのを見て、そして防御展開ができた
と判断した時、俺は粒子砲を連結して……

「……いつけ

っ！！」

一発ぶっ放した。

《……うわ、うわ、うわわ……あれ？なんともない……？》
「……マジかよ……」

ホントに防いでいた。

そんな啞然とした姿を見て束さんは満足そうに頷いていた。

姉さんもだ。

「・・・・・・・・」

けど、一人だけ二人を厳しく見つめる人物がいた。

・・・千冬さん？何であんな顔をしてるんだ？まるで敵でも見ているような・・・

「たっ、た、た、大変です！！お、おお、織斑先生っ！！」

いきなりの山田先生の声に千冬さんはその視線をやめて向き直る。

いつも慌てているのがお決まりな山田先生だが、いつも以上、尋常じゃない慌てっぷりだった。

「どっした？」

「こっ、こっ、これを！！」

渡された小型端末の、その画面を見て千冬さんの表情が曇る。

「『特命任務レベルS、現時刻より対策をはじめられたし』・・・」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた・・・」

「しっ、機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる。」

「す、すみません・・・」

「専用機持ちちは？」

「ひ、一人欠席していますが、それ以外は・・・」

何やら、千冬さんと山田先生が小さな声でやり取りしている。しかも、数人の生徒の視線に気付いてか、手話で会話を始めていた。

・・・なにになに・・・？暴走・・・？それに別に・・・？

「そ、そ、それでは、私はほかの先生にも連絡してきますのでっ！
！」

「了解した。・・・全員、注目！！」

山田先生が走り去った後、千冬さんはパンパンと手を叩いて生徒全員を振り向かせる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止、各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること！以上だ！」

「え・・・？」

「ちゅ、中止・・・？なんで？特殊任務行動って・・・？」

「状況が全然分かんないんだけど・・・」

不測の事態に女子一同ざわざわと騒がしくなる。

が、それを千冬さんの声が一喝した。

「とつとと戻れ！以後、許可なく室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな!？」

『は、はいっ！1』

全員が慌てて動き始めた。接続していたテスト装備を解除、ISを起動終了させてカートに乗せる。

その姿は今までに見たことのない怒号に怯えているかのようでもあった。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコツト、デユノア、ボー・デヴィツヒ、凰、二崎、セストナ、レギンハルト、アイセス、神崎！・・・それと、篠ノ之、中咲も来い。三城姉妹は旅館にて待機してもらいたい。」

『はいっ！!』

妙に気合の入った返事したのは、先に降りてきた篤と今し方降りてきた真琴だった。・・・そういえばこれで二人も専用機持ちになつたんだな・・・

・・・でも、大丈夫なんだろうか・・・？

言い知れぬ不安に駆られ、俺は落ち着くことができなかつた。

そして、嫌な予感が頭を過つた。

・・・今回、下手したら誰かが死ぬんじゃないのか、落ちるのは俺じゃないのか、と。

そして・・・

真琴や箒が失敗をしてしまうんじゃないのか、と……

3 4 二大天災襲来、姿を見せる椿と雷光（後書き）

（次回予告）

IS学園一年生臨海学校に割り込んできた緊急事態。

その事態は『銀の福音』の暴走、そしてアンノウンの明らかな敵意を持った進撃。

それぞれがそれぞれに準備を進める・・・

次回、# 3 5 作戦会議

熾天使は次世代との戦いを決意する。それが一人の少女の因縁の相手となるうとも・・・

3 3の奏の悲鳴『おぶぱっ！！』が分かった人、一報ください。

近いうちに『二崎奏の二問一答』、やろうと思います。

「（奏）・・・また唐突に始めるな・・・」

大丈夫、元ネタはあなたのCVの人がやったキャラクターなので、ということ、質問募集します！

些細なこと、くだらないことでも答えさせますので、どんどんどうぞ！！

んじゃ、例題を。

『チクワのおいしい食べ方を教えてください』

「(奏) 竹輪・・・？そりゃ・・・あれだ。カレーヌードルの汁に
一旦浸して天麩羅にする。それでもウマいだろ？つかウマくねえか
」？

・・・こんな感じですよ。奏、ありがとうございます。

「(奏)・・・ったく、面倒なこと始めるよお前は・・・」

#35 作戦会議（前書き）

福音&アンノウンとの戦闘のための作戦会議。

そして奏はついに事実を明かします。

その事実……セラフィムの『真単一使用能力』。

#35 作戦会議

「では、現状を説明する。」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、専用機
持ち全員と教師陣が集められた。

照明を落とした薄暗い室内に、ぼうつと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働に合ったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルハリオ・ゴスベル銀の福音』が制御化を離れて暴走、監視空域を離脱したとの連絡があった。」

「……いきなりの説明にちよつと気が抜けた。……何？軍用IS？それが暴走？何で俺達に？」

「そしてその十分後のことだ。別空域に正体不明のISがこちらに向かっていることが衛星にによって判明した。」

「……別の奴も同時に来たのか……」

『……………』

全員が全員・・・いや、俺と一夏以外、厳しい顔つきになっていた。俺や一夏、篝や真琴他多数とは違う、正式な国家代表候補生だ、ということもあるし、こういった事態に対しての訓練も受けていたのかもしれない。

それに、リースたちや沙霧は意外と動じていない。そんな訓練を積んでいたんだろう。

「その後、福音は衛星による追跡の結果、ここから二Km先の空域を通過することが分かった。正体不明のISはすでに確保に向かったIS軍隊をすべて無傷で壊滅させて今だこちらに向かっているようだ。最悪福音と同時に遭遇する可能性がある。距離は福音よりも遠いものの、進行速度が並の速度ではない。時間にして両者ともに五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することになった。」

・・・待て？

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう。」

・・・全部隊無傷で撃破・・・？もしかしたら・・・

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するよつに。」
「はい。」

最初に手を挙げたのはセシリアだった。

「目標IS、福音及びアンノウンの詳細なデータを要求します。」
「わかった。ただし、福音については二ヶ国の最重要軍事機密要綱だ。決して口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる。」

「了解しました。」

「それに、アンノウンの情報は提供できない。アンノン、しかも現れたのは先程なため、情報がない。」

「はい。」

一夏は状況を読み込めていないが、他の全員は開示されたデータを元に相談を始めた。

「福音は・・・広域殲滅を目的とした特殊射撃型・・・私のISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね・・・」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だね・・・しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利・・・」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ・・・」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからない。偵察は行えないのですか？」

「射撃性能も最大射程距離も分かんないよ？その射程範囲外じゃないと戦えないものもあるし・・・」

セシリア、鈴、シャル、ラウラ、エリイは真剣に意見を交わしている。

・・・俺はあることに引っかけりを覚えていた。・・・無傷・・・全滅・・・

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速四五十Kmを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう。」

「一回きりのチャンス・・・ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね・・・」

山田先生が言った時、一斉に視線が一夏を向き、俺を見た。

「・・・え？」

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ。それが無理なら奏の粒子砲で。」

「それしかありませんわね。ただ、問題は・・・」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね・・・。エネルギーは攻撃に全部使わないと難しいだろうから、移動をどうするか、だね。」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけない

な。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう。」

「奏のISも、そこまでエネルギー持たないわよ?」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ!お、俺が行くのか!?」

『当然。』

「ユニゾンして言うなっ!!」

何人もの声が重なった。見事。

「織斑、これは訓練ではない。実践だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない。」

一夏が一拍無言になって・・・

「・・・やります。俺が、やってみせます。」

「よし。・・・二崎、お前はどうか?」

「・・・俺は・・・もう一機のアンノウンの方をやらせてください。

あれは・・・最悪俺じゃないと倒せない気がするんです。」

「どういふことよ!?!?」

案の定、鈴が食いついた。

「・・・織斑先生、この理由を言うためにタブーを破るっすけど・・・
いいっすか?」

「・・・仕方ないな。二崎、私にもわかるように説明を頼む。」

「……まず……『ゼロ』を知っているか？」
『……『ゼロ』……？』

一斉に首を傾げた。が、千冬さんだけは別だった。

「……そういうことか……。そういうことになるなら確かに二
崎以外には倒せないな……」

「え、えと……」

「は、話がよくわからないんだけど……」
「ど、どういうことですか……？」

まったく話についていけない面々。普通はそつだ。

「……『ゼロ』、正式名称『ゼロ・ウイニング・システム』と呼ば
れるそれは国際IS委員会の中で危険度Sの、資料の閲覧そのも
のを禁じられたIS史上もっとも最悪なシステム……。このシス
テムを起動した場合、完全発動時だと自身及び仲間の生死を問わず
絶対的な勝利をもたらし、性格改変あるいは使用者の脳死、最悪死
亡、という結末も考えられる……。俺がそのアンノウンに挑むと
いった理由は……。そのアンノウンがゼロを積んでいる可能性が高
いから、なんだ。」
「……つまり……。どういうことなんだ？」

ラウラが最終確認とばかりに聞いてきた。

「俺のIS、セラフィムにもゼロが積まれている。まだ完全開放したわけじゃないが、最悪俺も完全開放するしかない可能性がある・・・」

『!!--』

・・・やっぱり啞然とした。仕方ないさ、ゼロの事実を今知ったんだろうから・・・

「ま、できるだけ完全開放しないうちに倒してみるさ。それよりまずは福音の方片づけなとな？」

「・・・そうだな。アンノウンの方は二崎に任せるとして、福音制圧作戦の具体的な内容に入る。現在、二崎を除いたこの専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、私のブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナ』が送られてきますし、超高感度ハイパーセンサーも付いています。」

「あ、あの、わ、私のブラッディ・ノワールもそこそこ速い方かと・・・その、えと・・・」

「オルコット、セストナ末。超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二十時間です。」

「おおよそ三十五時間くらいです・・・」

「・・・ふむ・・・。それならばセストナ末の方が適任・・・」

だな、と言おうとした千冬さんを、いきなり底抜けに明るい声が遮った。

「まーった待った　　っ！その作戦はちよつと待ったなんだよ
」

声の発生源は、と言うと・・・上、つまり天井。全員が見上げると、
部屋のと真ん中の天井から東さんの首が逆さに生えていた。あ、姉
さんもいた。

「・・・山田先生、室外への強制退去を。」

「えっ!?はっ、はいっ!あ、あの、篠ノ之博士、二崎博士、とり
あえず降りてきてください・・・」

「とっつ」

「ちよりやっ」

東さんは空中で一回転して着地、姉さんは何の対抗をしたのか空中
三回転捻りをやりやがった。

「・・・どこのガンダムパイロットだよアンタらは・・・」

「ちーちゃんちーちゃん、もつといい作戦が私の頭にナウ・プリン
ティングー!」

「出てきたアンノウンにも戦えるよー!??」

「・・・出て行け。」

頭を押さえる千冬さん。山田先生は言われたとおり東さんらを室外

に連れて行くこうとするが、するりとかわされてしまう。

「聞いて聞いて！ここは断つ然っ！赤椿の出番なんだよ！！」

「・・・なに？」

「赤椿のスペックデータ見て！パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！！」

「ブラッディ・ノワールもリバレーティング・ローズもだよ！！」

束さん、そして姉さんの言葉に伝えるように、数枚のディスプレイが千冬さんを囲むように現れた。

「赤椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ホラ！これでスビードはばっちり！！」

・・・展開装甲？なんか聞いたことあるような・・・？

「説明しましよ〜そうしましよ〜。展開装甲というのはだね、この天才束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー。」

・・・なん・・・だと・・・！？

「はい、ここで心優しい束さんの解説開始〜。いっくん、それかな君のためにね。へへん、嬉しいかい？まず、第一世代というの

は『ISの完成』を目標とした機体だね。次が、『後付武装による多様化』・・・これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』。空間圧作用兵器にBT兵器、後はAICとか色々だね。・・・で、第四世代とというのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という現在絶賛机上の空論中のもの。はい、いつくかな君理解できました？先生は優秀な子が大好きです。」

「は、はあ・・・。え、いや、えーと・・・？」

一夏が困っていたが・・・ちよつと待て。

「んじゃあなんだ？ルティアや沙霧のISは第三世代型でもなければ第四世代型でもないぞ？」

「おお、かな君いいところに気付いたね！かなちー、説明よろー。」

「任されたー。奏が言ったように、ルーちゃんやさぎリンのISは私が開発した『類似第四世代型』なんだ。」

「・・・類似・・・？」

「あの、ちよつといいですか？」

「んい？なんだねシャルロットちゃん？」

「えと、どういうところが『類似』になるんですか・・・？」

「簡単に言えば、『パッケージ換装は必要としないけどまだまだ万能型じゃない』ところだね。ルーちゃんのIS、ブラッディ・ノールは最高速度・攻撃性能は抜群だけど防御を完全に捨てちゃった所。さぎリンのIS、リバレーティング・ローズはルーちゃんのブラッディ・ノールの問題点を解決したかったために作った試験機なんだ。だから類似。」

「・・・あれで試験機・・・！？」

「いやー、あれはやっちゃったZE」

「なにが『やつちゃったZ E』だこの馬鹿！」

・・・一夏が混乱していた。仕方ないさ。各国ともやつとこそ第三世代の一号試験機が出来た段階なのに、突然第四世代、あるいは類似第四世代・・・だからな・・・

「ちつつちつ。東さんはそんじょそこらの天才じゃないんだよ？これくらいは三時のおやつ前なのさー！」

・・・なんでおやつにした？

「具体的には白式の『雪片式型』に使用されてます。試しに私が突っ込んだ。」

『え！？』

全員が驚いた。俺もだ。

零落白夜発動時に開く『雪片式型』の、その機構がまさかそれだとは思わないだろうし。言いかえれば、白式自体も第四世代型、ということになる。

「それで、うまくいったからなんとんと赤椿は前身のアーマーを展開装甲にしてあります。システム最大稼働時にはスペックデータはさらに倍ブッシュだ。」

「ちよ、ちよつと、ちよつと待ってください……？え？全身？全身が、雪片式型と同じ？それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。一言で言つと最強……いやいや、かな君のセラフイムがどうか分かんないから言えないけど、それを除いちよ最強だ」

「ところでヴァイス・ブリッツは？」

「単一使用能力にトランス機能付けてみた。紅くなるよ威力は上がるよ速くなるよ？普通の機体じゃ速さが足りないっ！！」

……もつやだ。

「ちなみに赤椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である、即時万能対応機リアルタイム・マルチロック・アクトレスつてやつだね。にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい。」

……静まり返った。沈黙だ。

「はにや？あれ？何でみんなお通夜みたいな顔してるの？誰か死んだ？変なの。」

変なの、で済むわけがない。

各国が多額の資金、膨大な時間、優秀な人材のすべてをつぎ込んで競っている第三世代型ISの開発。

それがすべて、水の泡と化したのだから。

・・・こんな、こんな馬鹿げた話があるわけがない。

「・・・東、言ったはずだぞ。やり過ぎるな、と・・・」

「そうだったけ？えへへ、ついつい熱中しちゃったんだよ。」

「・・・華奈多、お前もだ。いくら『類似』とは言え、第四世代なのにかわりは無いのだぞ？」

「ん。気いつける。」

千冬さんに言われ、ようやく東さんが東さん風に言うところの『お通夜状態』の意味が分かった。

「あ、でもほら、赤椿はまだ完全体じゃないし、そんな顔しないでよ、いっくん、かな君。二人が暗いと東さんはイタズラしたくなっちゃうよん？」

・・・あのね・・・

「まー、あれだね。今の話は赤椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦をこなすくらいなら夕食前だよ！」

「ヴァイス・ブリッツもその援護なら最強！・・・使っのが女狐つてのが気に入らないけど・・・」

「うつさいブラコン・・・」

「黙れ女狐！自分では何もできないくせに！！」

「アンタに言われたくないよダメブラコン！いつまでも弟離れできないといざって時に何もしてもらえないよ？」

「へんつ！別に女狐に何かしてもらおうって気はないもんね！」

「こつちだつてブラコンに何かするなんて願ひ下げ！！」

「つぎぎぎぎぎぎぎ・・・！！」

「つ~~~~~~~~・・・っ！」

・・・この二人は全く・・・

「いやー、それにしてもあれだね。海で暴走つて言つと、十年前の白騎士事件を思い出すね。」

白騎士事件と聞いて、千冬さんが頭を押さえていた。

『白騎士事件』、簡単に説明すれば、束さんが開発したISの力を世に知らしめた事件。

日本を攻撃可能なミサイル計二三四一発。それが一斉ハッキングを受けて制御不能になり、発射された。

混乱と絶望の最中、現れたのが、白銀のISを纏った一人の女性だった。

顔は初期ハイパーセンサーで隠れて分からないその人物はなんと・・・

ミサイルの約半数、一二二一発を叩き切った。

そして距離のあるものに対しては空中に荷電粒子砲を召喚して撃ち落とした。

そして、世界は国際条約を無視して現地へと偵察機を飛ばした。その目的は『目標の分析、可能であれば捕獲。無理ならば・・・撃滅』。

当時最新鋭だった機体も多く投入されたとか。

が、全く歯が立たなかった。

戦闘機を撃滅しながら、人命を奪わない白騎士。つまり、『相手を生かしたまま無力化するほどの余裕がある』という戦力差の証明に他ならなかった。

そのまま白騎士は突然の消失をした。完璧なステルス能力によって立った一基でミサイル二三四一発、戦闘機二九七機、巡洋艦七隻、空母五隻、監視衛星八機を撃破あるいは無力化した『究極の機動兵器』としてISは一夜にして世界中の人々が知るところになった。

「・・・とまあ、こうして私のらぶりいISはあっという間に広まっていたんだよね。女性優遇は・・・まあ、どうでもいいんだけど

どね、私はねー。でも隙あれば誘拐・暗殺っていう状況はなかなかエキゾチックだったよ。ウフフ」

・・・なんかすっごい楽しそうに話す束さんは、まるで我が子の晴れ舞台を自慢する母親みたいだった。

「しかし、それにしてもおっ・・・ウフフ。白騎士って誰だったんだろうね〜？ね、ね〜？ちーちゃん〜ん？」

「知らん。」

「うんうん、私の予想ではバスト88cmの・・・」

ガスンッ！

「・・・きゅっ〜・・・」

千冬さん恒例の出席簿アタック・・・いや情報端末アタック。

あれは痛い・・・。アレ、ガワが金属でできてなかったっけ・・・？

「ひ、酷いよちーちゃ　ん！束さんの脳は左右に割れたよおっ!?!?」

「そうかよかったな。これからは左右で交代に考え事が出来るぞ。」

「おお！そっかあ！ちーちゃん、頭いい〜!」

「・・・離れる、鬱陶しい・・・」

「・・・あのさ束、元々人間の脳って左右に割れてるよ?」

「ふおおっ!?!?そっなのかなちー!?!?」

・・・さつきから漫才をしているこの二人が・・・天才中の天才・篠ノ之束と二崎華奈多・・・なんだよな・・・

「あの事件では凄い活躍だったね、ちーちゃん！」

「そうだな。白騎士が、活躍したな。」

・・・俺たちの周りには失踪癖のある人が多いのか？

つかよく考えてみたら、今年の一年は異常事態らしい。分かっているだけでも十人ほど専用機持ちがいる。

多分原因は・・・俺達だな。

元々第三世代用に専用機持ちは多めに設定されていたに違いないはず・・・なのだが、世界で『ISを操縦できる男』が、しかも同時に二人登場したため、各国がこぞって動いた・・・とこだな。

「話を戻すぞ。・・・束、赤椿の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

「お、織斑先生！？」

声を上げたのはセシリアだった。専用機持ちの中でも高機動パッケ

ージを持っており、一緒に参加できる可能性があったと思っていたらしい。……まあ、ルティアの方が超高速起動時間が長いから無理だと思っけど。

「わ、私とブルー・ティアーズなら必ず成功してみせますわ!」

「そのパッケージは量子変換インスタールしてあるのか？」

「そ、それは……まだですが……」

痛いところを突かれたのか、勢いを失ってもごもごとしたすせしリア。

それと入れ替わるように束さんが口を開いた。

「ちなみに赤椿の調整時間は七分あれば余裕だね」

「よし。では織斑・篠ノ之両名による目標・福音の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三十分後。同時進行で二崎単独でアンノウンの撃墜を実行。これについては今すぐ開始だ。各員、ただちに準備にかかれ。」

「か、奏、本当に一人でいいの？」

「……一人で十分だ。酷な言い方かもしれないけど、誰かがいたら落とせるものも落とせなくなるかもしれないしな……」

「……気をつけてね……」

オリヴィエが心配そうに言う。

そして千冬さんがパンと手を叩いて、それを皮切りに教師陣はバツクアップに必要な機材の設営を始めた。

「……二崎、相手はアンノウンだ。決して気を抜くなよ？」

「……分かってるっす。それに、元々手を抜く気は無いので。ここには……守りたいものがあるから……」

〈 海岸 〉

「んじゃ、先行してアンノウン撃墜行ってくる！」

「奏……気をつけてね……」

「……姉さん、もう少なくとも、あの時より俺は強くなってるから。生きて帰ってくる。約束するよ。」

「……ん！」

……よし、これでいけるな……

「んじゃ、行ってくる!」

3 5 作戦会議（後書き）

（次回予告）

先行して向かった奏の前に現れたのは悪魔を模した深紅のI.S。

その使用者は『真のゼロを使えるのは自分だ』と言う。

そして、二人は刃を交えた・・・

次回、# 3 6 A n g e l F a l l

熾天使は翼をもがれて海に消え、悪魔は傷を負うも目的を果たさんとする・・・

ということで予告通りの『二崎奏の一問一答』。

「（奏）こんなシリアスな時にそれをやるか・・・？」

大丈夫です。これはまた別次元のようなものなので。

「（奏）・・・で？何を答えると？」

・・・まだ来てないのでお試し版の問題で！！

G V S G N 初心者の人から。

『アーケードでノーダメージクリアをしたといわれる二崎さんに質問です。敵の攻撃を受けないようにするにはどうすればいいですか？』

「（奏）基本歩け。攻撃が来たらブーストを吹かす。複数の場合は臨機応変に対応する必要があるけどな。ウオドムは空でも飛んどけ。」

「・・・と、いうことで。奏に対する質問、どんなくだらないことでも募集してます！！」

（今回の回答、私の弟からの情報です。これ、意外とマジです）

#36 Angel Fall (前書き)

タイトルからすでに不吉な予感が漂いますが・・・

今回の件で、タグに『残酷描写』付けました。・・・まあ、そう言えるのかは分かりませんが。

そして、一人の少女とアンノウンとの関係はいかに・・・!?

後書き、ようやく質問が気まりましたので。そして募集をば。

#36 Angel Fall

アンノウンに接近しようとして十八分後。

本来なら急がなければならぬけど、相手のターゲットはIS学園内にいる。そうじゃなければ明らか敵意を持ってこっちに来ない。だからそんなに速度を出していない。

「・・・ターゲット発見、これより接触、撃墜する。」

《わかった。無理だけはするなよ。》

「・・・了解！」

視認出来たところに一旦オープン・チャンネルで千冬さんに連絡し、改めて突っ込む。

1082

「・・・先手必勝!!！」

そして相手からも見える位置で粒子砲を撃つ。

「・・・!!」

・・・けど避けられた。・・・ま、当然といえば当然だけど。

「いきなりなんて、」挨拶ね。」

・・・やっぱり有人か・・・

「・・・何が目的でこっちに向かっているんだ、お前は？」

「・・・アタシの目的は・・・『真のゼロの所有者』となること、そして・・・ある奴を・・・識別番号034を殺す為よ。」

識別番号がなんなのかは撃墜後に捕まえて聞くとして・・・

・・・詰まるどころ・・・あれだな。

「結局の目的は殺しなんだな・・・」

「言ってしまうばそうね。・・・その目標、アンタも入ってるの・・・
よっ！！」

・・・速い！？翼にエネルギーを纏った斬撃か！！

「ちっ・・・」

避けるのには何の苦もない。けれど狙われた位置が・・・

「・・・首狙い、か・・・」

明らかに殺意を抱いている、ということ。

「良く避けたじゃない。アタシの今の攻撃、絶対に避けられるやつはない、って自信あったのに。」

「そりゃ避けるっての・・・。自分の生死に関わってただからな・・・」

皮肉には皮肉、それと同時に千冬さんからプライベート・チャンネルで連絡が入る。

《二崎、たった今織斑・篠ノ之が出た。しばらくは今のアンノウンを接近させないように頼む。》

「・・・了解、そちらに欠員は・・・」

《今のところは・・・。《お、織斑先生っ!!》どうした!!》

向こうで慌ただしい声が・・・この声は・・・山田先生か？

《せ、セストナさん・・・末っ子のセストナさんが!》

《セストナがどうした!!》

《む、無断で出ました!!》

・・・まさか!?

「自分の命がかかってるってのに余所見とは随分余裕ね!？」

「・・・ちいっ!」

くそっ、ルティアが無断で出て、目の前には俺を明らかに殺そうとしてるやつが・・・!

「これ以上時間をかけるわけにはいかなかった! さっさとケリをつける!」

「じゃあさっさと死んで! ここで消耗するわけにはいかないの! アンタの体に・・・風穴開けてあげるわ!」

S
i
d
e

L
u
t
h
i
a

・・・奏君とアンノウンの戦いの中で聞こえた言葉・・・

彼女が殺したがってるのは・・・奏君と・・・私。

何でなのかは知らないけど、とにかく私も関わってるんだ・・・

「・・・奏君、織斑先生、ごめんなさい・・・。約束も命令も破る
ことになって・・・。けど、私も・・・

私も・・・戦わないといけないから・・・！私だって・・・戦わないといけないんだ・・・！ノワール、お願い・・・私に・・・私に力を貸して・・・！」

S i d e K a n a d e

(数分が経過、一夏たちが福音と接触して四分ほど経過)

「……さすがに、すぐケリをつけるとは言ったものの……消耗戦……か……」

粒子砲も使った、粒子剣も使った、銃も連射した、『鎮魂の殲滅翼』も使った、『残影加速』も三回使った。出せる手札は……あと一つ。

「……セグエンテ、『アタシに勝利を見せ』なさい！」

「……!」

まさか……やっぱりというか……というかウソだろ……!?

……目の前で相手のIS……確か、セグエンテ、といったか？
それが元々禍々しいものがより禍々しいものへと姿を変えた。

・・・あの姿は・・・まるで・・・

「・・・エピオン・・・じゃねえか・・・」

そう、このセラフィムによく似ているガンダム、『ウイングゼロ』のライバルの『エピオン』そっくりになっていた。違うところは完全格闘じゃない所、ぐらいしかない。

「・・・ちっ、ならば・・・ゼロ、通常起動！」

《『ゼロ・ウイニング・システム』、正常起動経過確認。》

相手がゼロなら・・・こっちもゼロだ・・・！

「・・・やっぱり、アンタのISもゼロあるんだ・・・。でもね・・・」
「？」

・・・くるか・・・！？

「アタシのゼロには到底及ばない！そんな偽物、持ってたって何の意味も無いんだからっ！！」

いつ！？

「・・・速度が上がった・・・いや、攻撃手段を変えたからか・・・
!・・・くうっ・・・」

「ふんっ!そんなハリボテで頭痛?だったら・・・さっさと死んで
!!!」

「し・・・ねるかよっ!!!」

「このままむざむざ殺されて・・・たまるかよっ!!!」

Side Olivier (三人称)

「・・・奏・・・」

奏が出て行った海岸に、オリヴィエはただ一人立っていた。

「・・・私、また何もできないのかな・・・。また・・・何もできないまま・・・足・・・引っ張っちゃうの・・・かな・・・」

次第に涙声に変わる自嘲。それはただ、己の無力さを嘆くだけのものだったが・・・

「そんなの・・・もう・・・やだよ・・・！あの無人機の時も・・・ラウラのISの暴走の時も・・・奏は・・・自分が危険なのに戦って・・・！なのに・・・なのに・・・私は・・・！」

「なにも・・・でき・・・なかった・・・！もう・・・やだよ・・・
ぐすつ・・・、なにも・・・ひつく・・・できないの・・・！・・・
お爺ちゃん・・・、ファルケが・・・勇猛なのに・・・私がそうじ
やないの・・・なんでなの・・・？」

S i d e K a n a d e

(数十分が経過)

「……はあ……っ……くっ……っあっ……」
「もう限界？情けない……」

……頭が……割れそうだ……！

……何を言われようが……気にするかよ……！

「さあ……そろそろ……死んで!!」
「……しまっ……」

反応が……遅れ……

「させないっ！！（ガキイツ！）」

・・・！

「ル・・・ティア・・・？」

なんで・・・お前が・・・！？

「・・・ごめんね、奏君・・・。だけど・・・だけどあの子は・・・私も戦わないといけないから・・・！」

・・・どういう・・・

「出てきたわね、識別番号034！」

「私は・・・もうそんな名前じゃない！私には・・・私には『ルティア・セストナ』という名前があるんだから！」

「へえ・・・。だけど・・・。だけど！私にとってアンタは識別番号034に変わりはないの！私が殺すべき対象ということも！」

・・・ルティアを・・・せめて・・・ルティアだけでも・・・！

「ルティア・・・逃げる・・・！今のあいつには・・・絶対に・・・

勝てない・・・！」

「・・・ううん、逃げない・・・」

「ルティア・・・？」

「いつまでも逃げていたら・・・何もできないから・・・。逃げてばかりじゃ・・・自分の気持ちも意思も・・・伝えられないから！はあぁっ！！！」

・・・あの恥ずかしがりなルティアが・・・自分から・・・

「ふうん・・・。やっぱり完成体だけあって、攻撃に狂いはないわね・・・。殺さない攻撃には、ねっ！」

「くうっ・・・！ま、まだまだ・・・！」

「セグエンテの前に、いつまで強がっていられるの？私のセグエンテには・・・『本当のゼロ』が積まれているのよ？つまり・・・アంతに勝ち目はないの！」

「勝ち目が無くたって・・・！勝ち目が無くたって！奏君を守りたいから・・・！」

自分が不利なのは分かっても続く剣劇の応酬。

最初はブラッディ・ノワールの速度もあって拮抗していたが、次第に押され始めていく。

本当なら・・・俺が戦わないといけないのに・・・

「最初の威勢はどうしたの！？？！どんどん押されていくけど！？」

「うっ……くっ……う……」
「じゃあそろそろ……死んで！」
「うあっ!」

やばい、このままじゃ……ルティアが……!

動け……動け……!

「これで……止めっ!」
「……っ!」

「させるかあああああああっ!」

S i d e L u t h i a

「・・・あ、アンタ・・・動けなかった・・・はずじゃ・・・!?!?」

そんな・・・なんで・・・!?!?

「か、奏・・・君・・・!?!?」
「げほっ・・・!?!?へっ、無事かよ・・・ルティア・・・!」

目の前に現れた奏君は・・・

私を庇って、その代わりに実体剣を食らっていた……

その場所が……

「……さすがに……このままじゃ俺が死ぬ……か……？」

左の……脇腹……

「ルティアを殺そうなんて・・・簡単にさせるかよ・・・！」

「黙れ！死にぞこないが！」

「その死にぞこないに・・・手を噛まれるのはどこのどいつ・・・
だっ！」

奏君が粒子砲を構えて・・・

「・・・ルティア・・・まず逃げろ・・・！一旦引いて・・・対策
を練ればいい・・・！」

「え・・・！？」

「おらああっ！！！」

「く・・・あああっ！！！」

ゼロ距離で撃たれた粒子砲、相手は避けられなかった。結果、かなり後方に下げられた。

「・・・はあ・・・っ・・・もう・・・一撃・・・！」

そう言った瞬間、突然糸が切れたように・・・落ちていった・・・

「奏君っ！！！」

私もすぐに奏君を追って海中へ。

そして、そのまま抱えあげて再び出る。

「奏君っ！奏君！！……いや……いや……そんな……嘘……」

「……まだ……死んで……ねえ……」
「っ！！！」

……よかった……！

「……とにかく……逃げる……！何しても……いいから……」
「……うん！」

それで私が後ろを向いた時……

「……逃がす訳……ないでしょ……！」

あの子が……また出てきた……！

「……まずは……逃げなきゃ……！ノワール……」
ソニック
雷光
「……！」
ライオット
神速ノ

私の最高速度で・・・ここから離脱するー!!

S i d e
? ? ?
? ? ?

「・・・逃げられた・・・か・・・。速度も速いし、追いつけない・・・。どうせまた後で戦うことになるし、さっきまでの速度、出さなくてもいいか・・・。」

けど・・・

「今度こそ・・・今度こそ確実に・・・！」

#36 Angel Fall (後書き)

↓次回予告↓

戦いで負傷した奏。

そのことで自責の念にとらわれるルティア。何もできないことを嘆くオリヴィエ。

それをよしとしない面々は・・・

次回、#37 戦う意思、決意の二次移行(セカンドシフト)

黒は再び立ち上がり、鷹は真の姿を見せる・・・!

ということでもまずは『二崎奏の一問一答』!

「(奏) おい、俺今撃墜されてるんだけど!? 大丈夫なのか!?!」
大丈夫ですよ。前日も言ったと思いますけど、別次元ですから。

「(奏)・・・まあ、それならいいけど・・・」
ということで、今回は一気に二つ答えてもらいます! 内容は結構似通った感じですが。

Q1・俊さんから

現時点でヒロインの誰が好きなんですか?

「(奏)・・・好き? んー・・・シャルか・・・ルティア・・・?」
なぜ?

「(奏) シャルはまあ・・・学年別トーナメントで組んだし、色々と相性合うからだし・・・ルティアは・・・なんか小動物っぽいか

ら？」

・・・質問の意図、分かってます？

「（奏）LIKE、だろ？」

・・・俊さん、すいません。相変わらずの唐変朴で……。つづいて！

Q2・赤椿さんから

彼女は？作る気は？

「（奏）彼女はいない。作る気もない。」

・・・うわー、バツサリいききましたねー・・・

「（奏）事実だけど？下手に作ってあの姉（馬鹿）に何か言われてもな？」

・・・ということですよ。今回はここまで。俊さん、赤椿さん、ありがとうございました！

くだらない質問（ポッキーの正しい食べ方・・・とかでもいいです）でもかまいませんので、どんどん質問を！

続いて募集・・・というか急募です。

活動報告でも既に書きましたが、アニメ第九話のBパート、『STARRIGHT JET』がかかっている場所でサビに入るちよつと前でてくる、ぱつと見黒髪版ミクっぽい髪の桃色の水着の子（ほぼ一瞬しか映らないため確認は難しいかも？）の名前とCVを募集します！

一応現時点での設定を載せてありますので、詳しくはそちらを見てください。

期間は第二巻分終了までです！

#37 戦う意思、決意の二次移行（セカンドシフト）（前書き）

奏が落とされてから決意するまでの話です。

台詞全部に平仮名な部分がありますが、誤字ではなく仕様ですので、ご了承ください。

#37 戦う意思、決意の二次移行（セカンドシフト）

Side Luthia（三人称）

「……………」

旅館の一室。壁の時計は四時を指していた。

目の前の布団に横たわる奏からは、何も言葉もなく、既に三時間以上目覚めぬままだ。

（…………私の…………私のせいだ…………）

その横には、ルティアがいた。

「…………ひつく…………かなで…………くん…………つく…………」

その眼には涙が。

その涙の訳は…………

(私が・・・私があの時・・・命令や約束を無視して出なかつたら・・・！素直に・・・奏君の言うことを・・・聞いていれば・・・！こんな・・・こんなことに・・・ならなかったのに・・・！！・・・ごめん・・・ごめんね・・・)

自責と謝罪、その両方だった。

目の前にいる奏は、ISの防御機能をも貫かれた実体剣による刺傷、そしてその傷を負うまでの戦いで受けた傷によっていたるところに包帯を巻かれていた。

『神速ノ雷光』によって戻ってきたルティアがまず目にしたのは、
負傷した一夏、その側にいる筈。

そして・・・

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ。』

という千冬の言葉。

千冬は一夏に治療を、ルティアに抱えられながらボロボロになって帰ってきた奏には緊急治療を行うように指示し、すぐにまた作戦室に戻っていった。

命令無視に仲間の負傷。

軍規違反甚だしい事全てを一切責められないことが、ルティアにとつてとても辛いことだった。

そして・・・誰からも責められないことがまた、辛さに拍車をかけた・・・

(私が・・・私が無理をしたから・・・！私が・・・！)

不意に、部屋の入り口のドアが開く。

「・・・セストナさん、一旦休憩をとってください。」

声をかけたのは、山田先生だった。

「……いいんです……ぐすつ……私が……わたしが……
げんいん……ですから……ひつく……」

「あまり根を詰めて、いざという時に倒れたら、二崎君も悲しみま
すよ？ なにも『また戦いに行け』と言っているわけじゃないんです。
二崎君を心配しているのはあなただけじゃいんですから。」

「……でも……でも……」

「少しの間、先生が二崎君を看てますから、外を散歩してきたらど
うですか？ 自分が悪い、という自覚があるのはいいのですが、あま
り自分を責め過ぎるのも良くないことですよ？」

「……はい……」

とぼとぼと部屋を出るルティアを見送る。

「……二崎君、絶対に、絶対に目を覚ましてくださいね……？
そうじゃないと、悲しむ人がたくさんいますから……ね？」

そして、残された彼女にはこう言葉をかける他なかった……

廊下を一人歩くルティア。その足取りは決して軽いものではなかった。まるで彼女の今の自責の念を表しているかのような、そんな足取りだった。

「ルティア？」

「・・・ねえ・・・さん・・・」

そして途中でリースと会った。

「・・・ルティア、奏なら大丈夫。絶対、絶対に皆の前に、ルティアの前に元気に戻ってきてくれるから。」

「でも・・・わたしの・・・せいで・・・」

「ほら、いつまでも自分を責めてないで。いつまでも引き摺っていったら、奏を落とした子に勝てないよ?」

「でも……でもお……」

パンツッ！！

「……！？」

突然頬を叩かれ、何がどうなったのか理解が出来ないルティア。

「いつまでも甘ったれないの！いつまでも……いつまでも同じことを引き摺っていて！それで奏の状況が良くなると思う！？無断で出るほどだったあの時の覚悟はどうしたの！？」

「……」

「一人だけ無断で出てただやられて！大切な人を落とされて！それをいつまでも悔やんでうじうじする、それが通用しないこと、分かっているでしょ！？」

「う……うええ……」

「私たちは、曲がりなりにも専用機持ち……でしょ？だったら、そういう覚悟も必要ってこと。」

「……うええええ……ぐすっ……うええええ……」

「……ん。今は思いつきり泣いて、すっきりしてから、また……ね？」

廊下に、姉からの叱咤を受けた少女の……心の迷いを現し、それを洗い流すかのような泣き声が響き渡った。

S i d e O l i v i e r (三 人 称)

一 方 . . .

「・・・やっぱりここにいた・・・」
「だと思っただわ。奏のそこには行けない、かといってどうすることもできないから・・・と思っただわ。」
「え・・・？」

砂浜に一人佇んでいたオリヴィエに声をかけたのは、真琴と沙霧だった。

「・・・やっぱり、かなちゃんも落ちた、っていうこと聞いて・・・
どうにかしたくて、けどどうにも出来なくて・・・ここで泣いてい
たんだね・・・？」
「・・・な、泣いてなんか・・・ない・・・」
「・・・泣いてた。だって、目が真っ赤。」
「・・・！」

凶星を突かれ、驚きを隠せない。

「でもね・・・？それは私たちもなんだよ・・・？」
「・・・(コクン)」
「え・・・」

真琴が告げた事実、沙霧の肯定に思わず声が漏れる。

「・・・だつて、私たちが行つても何かできるわけじゃないから。かなちゃんの方行つても足手まといにしかならないし、福音の方行つても何もできないもん。」

「・・・それに、私たちが今できることは・・・何も無いから・・・けど・・・何かしようと思うことは・・・できる・・・」

「・・・そうだけど・・・そうだけど・・・！」

「・・・オリヴィエ？」

突然オリヴィエの語尾が荒くなり、それに疑問を持つ真琴。

「真琴や沙霧に比べて！私なんて何もできないの！私には力が無い・・・！皆の足手まといにならないくらい力の力もないの！！そんな私に・・・何かしようなんて思えると思う！？」

「・・・馬鹿！」

「っ！！」

「・・・沙霧・・・？」

沙霧が声を荒げた。

「・・・専用機持ちが・・・！そんな甘えたこと言える立場じゃないの・・・分かるはず・・・！専用機持ちなら・・・今自分が何をすべきか・・・分かる・・・はず！！」

「・・・沙霧・・・」

「・・・」

黙り込むオリヴィエ。

「オリヴィエ、私たち、皆に合流してどうするか話し合うから・・・
心の準備が出来たら・・・来てね・・・?」

そうして去っていく二人。

「・・・私は・・・私は・・・!」

Side Luthia (三人称)

「・・・どう？落ち着いた？」

「・・・うん・・・。ありがとう・・・リー姉さん・・・。」

「うん、吹っ切れたみたいでよかった。それで・・・どうする？また・・・戦う？」

「・・・私・・・あの子と決着付けないと・・・いけないから・・・！成功体、失敗作関係なく・・・『ルティア・セストナ』として・・・一人の人間として・・・！」

「・・・やっと決断したみたいだね。」

「全くだ。いつまでめそめそ泣き続けているのかと思っていたが・・・」

「・・・姉さん・・・！？ラウラ・・・！？」

急に聞こえた声にルティアが振り返ると、そこにはエリィとラウラがいた。

「かな兄がやられちゃって、それでただただ泣き寝入りするわけにはいかないでしょ？」

「嫁の敵討ち、お前が決意しなければ誰がやるというのだ？一番因縁のあるお前が・・・」

「・・・皆・・・」

仲間の、そして姉妹の激励を受け、再び涙ぐむルティア。

「あーあー、また泣いちゃう・・・」

「だって・・・ぐすっ・・・だってえ・・・ひっく・・・」

自分には・・・こんなに自分のことを考えてくれる仲間がいる。自分のことを思ってくれる身内がいる。

それだけでも、ルティアが泣いてしまふのには十分だった。

だが・・・彼女の決意は・・・

(・・・今度こそ・・・！今度こそあの子と戦って・・・勝って見せる・・・！)

彼女が改めて戦う強固な決意になった。・・・そして、勝とうという意思を持つのだった。

Side Olivier (三人称)

「・・・奏の敵討ち・・・か・・・」

オリヴィエはまだ、砂浜に立っていた。

その眼にはまだ、迷いがあった。

(奏の敵討ちには・・・行きたい・・・。けど・・・私には・・・
まだ・・・)

己の力不足。ISのせいではなく、己の。

「・・・でも・・・やっぱり・・・私だって・・・私だって・・・
！」

その時・・・

《・・・オリヴィエ・・・》

「・・・おじい・・・ちゃん・・・!？」

突然オリヴィエに声が聞こえた。それも、既にこの世にいない、彼女の祖父の。

《・・・オリヴィエ・・・お前は力が欲しい、そう言っていたね・・・
?》

「・・・言ってたけど・・・でも・・・どうして・・・?」

《・・・もし力を得たとして、だよ?お前はどうか力を使うのかな?》
「・・・私は・・・私は・・・」

オリヴィエの祖父の問い、それは『力の使い方』を問うものだった。だが、オリヴィエの答えは・・・既に決まっていた。

「私は・・・皆を守るために・・・！皆の力になるために力を使う！」

《・・・うん、いい答えが聞けた。オリヴィエや・・・》
「・・・何？」

《お前のファルケは・・・お前の答えを待っていた・・・。お前自身の・・・『力』の答えを・・・。それを聞けた今、ファルケはお前に力を貸してくれるだろう・・・》

「・・・どういう・・・こと・・・？」
《・・・それは・・・》

オリヴィエにはここから先は聞こえなかった。まるで砂嵐が掛かったかのようだ。

「・・・ありがとう・・・お爺ちゃん・・・」

そして、もう一人の少女にも決心がついた。

「……私も……戦う！皆の力になって……戦う！」

そして砂浜。

「……皆、お待たせ！」

「遅かったじゃない、オリヴィエ。」

「来ないかと思って、心配してましたのよ？」

「二体の場所は？」

「……出たぞ。ここから三十km離れた沖合上空に福音を確認。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ。同時にセグエンテ……嫁を落としたあの機体は今、ここから二十五km離れた沖合上空に現在ゆっくりとした速度で移動中だ。」

部分展開した腕に表示されるディスプレイを見ながらラウラが言う。

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね。」

「ふん……。お前の方はどうなんだ？準備はできているのか？」

「当然。交流の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアこそどうなのよ？」

「ああ、それなら……」

「オリヴィエさんがいない間に、すべて終わってましてよ？」

「僕も、準備オツケーだよ。いつでも行ける。ルシエラは？」

「私はもともと準備は終わってるわ。リース、エリイ、あなたたちは？」

「単一使用能力用のエネルギーも溜まってる。いつでも行けるよ！」

「準備することが無かったくらいだよ！」

「……。オリヴィエ、お前はどうか？」

「……。私は……。今までの私とは違うから……」

「どうということ？」

首を傾げる真琴に、オリヴィエは……

「言うより見せた方が早いわね。……ファルケ。」

最も先に展開したオリヴィエ。

現れた姿に……

「……嘘……」

「二次・・・移行・・・!？」

全員が言葉を失った。

今まで見てきたファルケとは全く違う、『鷹』を明らかに意識した
フォルムへと姿を変えていた。

「うん。ついさっき、だけどね。」

「・・・ルティア、沙霧、お前たちは・・・分かってるな？」

「・・・うん。」

「・・・大丈夫。どうなるかは分かんないけど・・・敵は・・・絶
対討つ・・・!」

それぞれの目に闘志が宿る。

「じゃあ、作戦会議だね。福音とセグエンテ、援護組に分けて・・・

」

「今度こそ・・・確実に落とすわよ!」
「ああ!」

#37 戦う意思、決意の二次移行（セカンドシフト）（後書き）

（次回予告）

奏と一夏の敵討ちに出た少女たち。

福音を墜とす面々と、次世代を落とす面々とに分かれ、それぞれが戦う。

しかし、それでも勝ち目はなく・・・

次回、#38 それぞれの戦い、目覚めた『真のゼロ』

少女の命が危機に瀕する時、『真の力』が覚醒する・・・

今回も空気が読めない『二崎奏の一问一答』！

「（奏）読めなさすぎだ。酷過ぎるぞ？」
気にしない方向で！つか気にしたら負け！！

Q1・俊さんから

『姉の華奈多と真琴は如何してあんなに仲が悪いのか？』

「(奏)・・・小学校の頃、たまたま真琴と一緒に帰っていた時にあの馬鹿姉が勘違いを起こして難癖付けて、そしたら真琴もギャーギャー言い始めて・・・そこからだった筈だな・・・仲が悪かったのは・・・」

あの二人が仲悪いのは、奏が小学生の頃からです。補足をすると、

「偶然奏と真琴と一緒に帰っていたら(当時真琴は奏に好意を抱いていません)、華奈多が『・・・お・・・女・・・の子・・・!?!?まさか・・・盗られた・・・!?!?』と勘違い。そして『女狐がつ!』と言った時、真琴も力チンときて『ブラコンー!!』と涙ながらに言った」

のが原因です。以上、補足でした。では次。

Q2・エドワード・ニューゲートさんから

『二崎奏の素晴らしい休日の過ごし方を教えてください』

「(奏)一日中ゲームやネットゲをしてたらだら過ごすことだ。それだけでも素晴らしい休日の過ごし方じゃないか?」

・・・人のこと言えませんが、完全にニートまっしぐらな生活方式です。

「(奏)うつせえっ!!」

今回はここまで。俊さん、エドワード・ニューゲートさん、ありがとうございました!!

まだまだ質問を募集しています!!どんどんどうぞ!

それと、募集の現状についての報告です。

新キャラの名前・・・候補二つ
新キャラのCV・・・候補八人（本来ならば九人でしたが、今後の
影響で一人無理になったため）
です。

第三巻分終了後に決選投票を行いますので。

ですが、まだ募集は続いています！！同じ人が複数出してもOK、
です！！

詳しくは活動報告の『急募』にて！！

#38 それぞれの戦い、目覚めた『真のゼロ』（前書き）

一夏と奏という二つの矛を失った少女たちは、そんな状況下であっても戦いを挑む。

そして、それぞれが危機に陥った時、奇跡は起きた・・・

前回更新分載録です。小説本文が3900字以降が消滅するという事態が起き、一旦消失する事態に至ったこと、本当に申し訳ありませんでした。

#38 それぞれの戦い、目覚めた『真のゼロ』

I n s i d e K a n a d e

「……ここは……？」

俺は全く知らない場所にいた。全く知らない丘、見たこと無い風景。
なのに……

「……どこか……懐かしい気がする……」

そう、思えた。

「……あれは……？」

そんなとき、前に誰かがいることに気付いた。

「……お前は……誰だ……？」

目の前にいた誰かは……

・
・
・
まるで天使だった。

） 福音撃破組 ）

海上二百メートル。そこで静止していた『銀の福音』は、まるで胎児のような格好で蹲っていた。

膝を抱くように丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む。

・・・？

不意に、福音が顔を上げた。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。そして立て続けにもう一撃、白い閃光が爆煙を貫いた。

「初撃、第二撃、共に命中！続けて砲撃を行う！」

五km離れた場所に浮かんでいるIS『シュヴァルツエア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に映るより早く次弾を発射した。

そしてその遙か後方、本来ならば命中するはずのない地点・・・目標からかなり離れた地点にいる真琴がそのラウラの第二撃が放たれたのを確認した瞬間、もう一撃放つ。

連続して攻撃をたたみかけ、敵に攻撃させる暇を与えない。それが作戦だった。

シュヴァルツエア・レーゲンは、通常装備のものとは異なり、八十口径レールカノン《ブリッツ》を二門左右それぞれの肩に装備して

いた。さらに遠距離からの砲撃・狙撃に対する備えとして、四枚の物理シールドが左右と正面を守っていた。

これが、シユヴァルツエア・レーゲンが専用砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備した姿であった。

(敵機接近まで・・・四千・・・三千・・・くっ・・・！予想よりも早い・・・！)

あっという間に距離が千mを切り、福音がラウラに迫る。

ラウラはその間もずっと砲撃を行っているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を撃ち落としながらラウラへと接近していた。

「ちいっ！」

砲戦使用はその反動相殺のために起動との両立が難しい。

それに対し、機動力に特化した福音は三百メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばした。

・・・避けられない！

しかし、ラウラはニヤリと口元を歪める。

「・・・セシリア！！リリース！！」

伸ばした腕が突然上空から垂直に下りてきた機体によってはじかれ、同時に体を吹き飛ばされる。

青一色の機体・・・ブルー・ティアーズと白銀の機体・・・ヴァルドによるステルスモードからの強襲だった。

ブルー・ティアーズの六機のビットは通常とは異なり、その全てがスカート状に腰部に接続されている。しかも、砲口は塞がれており、スラスターとして用いられている。

さらに手にしている大型BTレーザーライフル《スターダスト・シユーター》はその前兆が二m以上あり、ビットを機動力に回している分の火力を補っていた。

強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナ』を装備しているセシリアは、時速五百kmを超える速度下での反応を補うため、バイザー状の超高感度ハイパーセンサー《プリリアント・クリアランス》を頭部に装着している。そこから送られてくる情報を元に最高速からいきなり反転、福音を捉えて撃つ。

ヴァルドは特にそれといった特筆すべきものは無いのだが、あるとすれば・・・今現在も回転を続けている槍だ。回転部は六ヶ所それぞれが独立して回転しており、その回転部からはバチバチと音が鳴り続けている。

それを前に突き出した時、雷光が砲撃として飛んでいった。

『敵機B、Cを確認。排除行動へと移る。』

「・・・遅いよ。」

セシリアの射撃、リースの砲撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う。

それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルだった。

ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩す。

・・・が、それも一瞬のことで、すぐさま四番目の敵機に対して『^{シルバール}銀の鐘』による反撃を開始した。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』はそのくらいじゃ落ちないよ?」

リヴァイヴの専用防御パッケージは、実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ。そのシルエットは、ノーマルのリヴァイヴに近く、二枚の実態シールドと、同じく二枚のエネルギーシールドがカーテンのように全面を遮っていた。

防御の間もシャルは得意の『高速切替』ラビット・スイッチによってアサルトカノンを呼び出し、タイミングを図って反撃を開始する。

加えて、高速機動射撃を行うセシリア、距離を置いての砲撃を再開するラウラ、そしてその三つの合間を縫って近接攻撃を仕掛けてくるリース。さらに、いつ飛んでくるかわからない真琴の精密かつ正確な射撃。

三方からの射撃にそれを縫っての近接攻撃、そして予測の利かない遠距離射撃に、福音はじわじわと消耗を始める。

『・・・優先順位変更。現空域からの離脱を最優先に・・・』

全方向にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間に全スラスターを開いて強行突破を図る。

「させるかあっ!?!」

海面が膨れ上がり、爆ぜる。

飛び出してきたのは深紅の機体『赤椿』と、その背中に乗った『甲龍』であった。

「離脱する前に・・・」

「たたき落とすっ!!」

福音へと突撃する紅椿。その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パツケージ『崩山』を戦闘状態に移行させる。

両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設された二つの方向がその姿を現す。計四門の衝撃砲が一斉に火を噴いた。

『!!--!』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。

しかしそれは、いつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っている。しかも、福音に勝るとも劣らない弾雨。増幅された衝撃砲……言うなれば、熱殻拡散衝撃砲と呼ぶべきものだった。

「やりましたの!?!」

「……まだよ!」

拡散衝撃砲の直撃を受けてなお、福音はその機能を停止させてはいなかった。

『《銀の鐘》 最大稼働・・・開始・・・』

両腕を左右いつぱいに広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける。・・・刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃が始まった。

） セグエンテ撃墜組 ）

「・・・ やっぱり来た。待ちくたびれたわよ・・・」

「・・・ 奏の敵・・・！」

「・・・ 沙霧、落ちて着いて。今はまだ・・・まだ・・・！」

「・・・ (コクン)」

セグエンテと対峙するのはルティアのブラッディ・ノワールを筆頭に、エリィのプロトタイプ・ヴァルド、ルシエラのアイス・ブレイズ、オリヴィエのヴェルヴェーゲン・ファルケ（二次移行）だ。

「・・・ 今度はたくさん仲間を連れて・・・」

「・・・ 今度は・・・ 絶対にあなを倒す・・・！」

「倒せるものなら・・・ 倒してみなさいっ！！！」

言っちゃ否や、いきなりの突進。

「っ！皆、すぐに広がって！」

指示を出したのはオリヴィエ。一番冷静になっており機転が利いていた。

その言葉ですぐに散開。

「へえ……。一人一人確実に潰してほしい、ってわけ……。？。？。？。？。？。？。？」

・上等じゃない！」

「一人一人じゃない！」

「全員で……。攻撃するから！」

前からルティアがハーケンを持って呐喊。

同時に下から沙霧がグングニルを手に突撃。

「そんな攻撃、当たるわけ」ところがどっこいハンドキャノンっ！
「！がつ！？」

それを避けたその瞬間、セグエンテの背後から奇襲。

仕掛けたのはエリィ。武器にもなるその拳で殴り飛ばす。

「・・・やってくれるじゃない！」
「その武器、封じさせてもらうわね？」
「なっ!?!」

二振りのブレードを展開するも、氷結させられて使用不能に。

凍らせたのはルシエラ。早撃ちによってブレードに一発つつ単一使用能力を乗せた弾をぶつけたのだ。

「・・・上等・・・皆殺しにしてあげるわ!?!」

刹那、雰囲気が変わる。

「・・・『ゼロ』!」
「皆、ここからが正念場！」
「わかってる!」
「気をつけないとね・・・」
「決着は・・・」
『全て沙霧の一撃にかける!?!』

S i d e
M a k o t o

真琴は一人、どちらからしてもかなり離れた位置にいた。

理由は単純、そう簡単に狙われないようにするためと、安定した射

撃を行うためである。

「……皆……頑張つて……！私はここから援護するから……」

そうしてまた、引き金を引く。

彼女が今できること、それは……

一人だけ別行動をとって双方の援護を行うこと。ただそれだけだった。

） 福音撃墜組 ）

「・・・リース、ありがとう・・・」

「大丈夫だよ、これくらい!」

「・・・それにしても・・・これはちょっと、きついね・・・」

鈴をリースが庇い、箒をシャルが守る。

シャルの防御専用パッケージであっても、福音の異常な連射を立て

続けに食らい続けることはやはり危ういもので、物理シールドが一枚、完全破壊された。

同時に、リースの方も完全に防ぎきれたわけでもない。

「・・・結構ダメージ、貰っちゃったな・・・」

「リース、大丈夫!？」

「まだ戦えるよ!ラウラ!セシリア!お願い!」

「言われずとも!」

「お任せになって!」

後退するシャルとリースの二人と入れ替わりにラウラとセシリアがそれぞれ左右から射撃を始める。

セシリアは高機動を生かした移動射撃を、ラウラは砲戦仕様による交互連射を行う。

「足が止まればこっちのもんよ!」

そして直下からの鈴の突撃。双天牙月による斬撃の後、至近距離からの拡散衝撃砲を浴びせる。

・・・狙いは、頭部に接続されたマルチスラスタ―《銀の鐘》。

「もらったあああっ!」

エネルギー弾を全身に浴びながら、しかし鈴の斬撃は止まらない。

同じく拡散衝撃砲の弾雨を降らせ、互いに深いダメージを受けながら、ついにその斬撃が福音の片翼を奪った。

「はっ・・・はっ・・・！どうよ・・・ぐっ!？」

片側だけの翼になりながらも、福音は一度崩した姿勢をすぐに立て直し、鈴の左腕へと回し蹴りを叩き込む。

脚部スラスターで加速されたそれは、一撃で鈴の腕部アーマーを破壊し、海へと墜とした。

「鈴っ！おのれっ・・・っ!！」

箒は両手に刀を持ち、福音へと斬りかかった。

その急加速に一瞬反応を失った福音の、その右肩へと刃が食い込んだ。

（獲った・・・っ!！）

そう思った刹那、福音は信じられないことに左右両方の刃を手のひらで握りしめた。

「なっ!？」

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが、お構いなしに福音は両腕を最大にまで広げる。

刀に引つ張られ、箒が両手を広げた無防備な状態を晒す。そしてそこに、残ったもう一つの翼が砲口を開放して待っていた。

「箒!武器を捨てて緊急回避しろ!！」

ラウラが回避を促すが、箒は武器を手放さない。

(・・・ここで退いて、何のための・・・)

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。そして、それは一斉に放たれた。

(・・・何のための力かつ!！)

エネルギー弾が触れる寸前に、ぐるんと紅椿は一回転をする。その瞬間、爪先の展開装甲が筭の意思に伝えるように開き、エネルギー刃を発生させる。

「たああああっ!!」

踵落としのような格好で、エネルギー刃の斬撃が決まった。

ついに両翼を失った福音は、海面へと崩れるように墮ちていった。

「はっ、はあっ、はあっ……!!」

「筭!!」

「無事か!?!」

ラウラの慌てた声とリースの心配する声を聞きながら、筭は乱れた呼吸をゆっくりと落ちつけていった。

「私は……大丈夫だ……。それより福音は……」

『私たちの勝ちだ』と誰かが言おうとした時、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ。

『……?』

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのよう
にへこんだままだった。

そしてその中心、青い雷を纏った『銀の福音』が自らを抱くかのよ
うに蹲っていた。

「これは……！？一体、何が起きているんだ……！？」

「……！？まずい！これは……『セカンド・シフト第二形態移行』だ！！！」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔
を向ける。

無機質なバイザーに覆われた顔からは何の表情も読み取れない。け
れど、そこに確かな敵意を感じて、各ISは操縦者へと警鐘を鳴ら
した。

・
・
しかし
・
・
遅
か
っ
た
・
・
・

「よせ！逃げる！こいつは・・・」

最後まで言葉は続かず、ラウラはその眩いほどの輝きを持ったエネルギーの翼に抱かれる。

刹那、あのエネルギー弾雨を零距离で食らい、全身をズタズタにされたラウラは海へと堕ちていった。

「ラウラっ！よくも・・・っ！！」

ブレードを捨て、シャルはショットガンを呼び出す。福音の顔面へと銃口を当て、引き金を引いた。

「シャルロット！！」

その瞬間に、リースはシャルと福音の間に潜り込む。

ドンツッ！……という爆音が鳴るが、それはショットガンのものではなかった。

胸部から、腹部から、背部から装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。それによるエネルギー弾の迎撃が二人を襲ったのだ。

間に入って盾で防ぐリースだったが、その一撃によって盾を吹き飛ばされ、自身の体も、シャルの体とともに吹き飛ばされてしまった。

「な、何ですの！？この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な……！」

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。『瞬時加速』・・・それも、両手両足の計四ヶ所同時着火による爆発加速だった。

「くうっ!？」

長大な銃は接近されると弱い。距離を置いて銃口を上げようとしたが、その砲身を真横に蹴られてしまう。

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃もできず、セシリアは蒼海へと沈められた。

「私の仲間を・・・よくもっ!」

急加速によって接近した筈は、続けざまに斬撃を放ち続ける。

展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによって加速させる。

「うおおおおっ!!!」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘の応酬。徐々に出力を上

げていく紅椿に、わずかに福音が押され始める。

(いける！これならっ……)

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。……しかし……

キュウウウン・・・

「なっ!?!また、またエネルギー切れだど!?!?・・・ぐあっ!?!」

その隙を見逃さず、福音の右腕が幕の首を捕まえる。

そして、ゆっくりとその翼が包みこんでいった。

(すまない・・・、一夏・・・)

）
セグエンテ撃墜組
）

セグエンテを倒す切り札、沙霧の準備が終わるまで、絶対に墜ちないよう、かつ沙霧に攻撃が向かわないように戦うエリィとルシエラ。

「……準備できた……！」クリクサン・ノクターン『深紅ノ夜想曲』発動……！」

リバレーティング・ローズの単一使用能力『深紅ノ夜想曲』を発動させる沙霧。

その瞬間、ISの色が元の青白から赤黒へと変貌した。

その右手には、リバレーティング・ローズの唯一の近接武器、グングニルが。

「……ターゲット……ロックオン……！！……外さない！」

グングニルを……

「投げようたって無駄！どつせ当たらないのだから……！」

投合した。

「が……はっ!?!？」

投げられたグングニルは当たっていないのに、セグエンテにダメージを与える。遅れて実際に当たる。

「……この状態のグングニルは……ロックオンすれば相手がどんな状況だって絶対に当たる最強の矛……！……まだ……まだ手は緩めない……！」

スレイプニル・アローを連射、その間を埋めるかのようにインフェルノキャノンとストライクショットを撃ち、立て続けにスペリオルビットを砲撃モードで十機射出、セグエンテの周りに配置。

しかし、すぐに発射できる状況になった時……

「……はあぁっ……！」

もう一度呼び出したブレードで一閃、それによって全て破壊された。

「……まずは……アンタから潰してあげる……！」

そうしてセグエンテは沙霧へと向かう。

それを防ぐようにルシエラとエリィが前に立つ。

「沙霧、すぐに逃げて!!」

「わかつ『ピ』……』……限界時間……!?!?」

一旦離脱しようとした矢先、限界時間を告げる電子音が鳴る。

『深紅ノ夜想曲』最大の欠点、それは『四分という制限時間を過ぎると、全性能が極限までに落ちる』ということだった。

「真琴からの援護射撃が無い!?!?」

「真琴は……真琴はどうしたの!?!?」

S i d e M a k o t o

隙を縫って引金を引き続けて数十分が経過した頃。

・・・カチン！カチン！！

引金を引いても金属音しかなかった。

「エネルギー切れ！？何で！？使い過ぎた！？」

射撃武器統一エネルギー部が全滅してしまったのだ。

「……皆……ゴメン……！」

その地点で真琴はただ、全員に謝罪するだけしかなかった……

く セグエンテ撃墜組 く

「どうやら援護は来ないみたいね!」

「だったらもっぱらハンドキャノンっ!!」

エリイが手に収束したエネルギーを放つ。しかし……

「当たらないって言ってんのよっ!!」

避けて、鞭状のものを呼び出す。

「連結刃!?!」

「しまっ……!!」

伸びた鞭状の連結刃は、寸分狂わず沙霧を捕える。

「く……あつ……!」

「まずは……一人いつ!」

引き寄せた反動で殴りつけ、剥き出た岩に衝突させる。

「あ……ぐ……う……」

その反動で呼吸が一度止まる。

「次は……アンタよ!」

「くつ……!」

そのままターゲットを切り替える。ターゲットは……ルシエラ。

「やらせない……!」

ガトリングを撃つ。時には敵の位置を予測しての射撃もあるが……

「遅いつ！はああっ！！」
「かはっ……！？」

避けられたところに距離を詰める翼による一撃をもらい、重力に従って蒼海に墜ちていった。

「二人目……終わりっ！」

そしてセグエンテはオリヴィエを見る。

「三人目は……アンタよ……！」

「そう簡単に……墜ちるもんか！」

「私だって……守られてばかりじゃないっ！！！」

ルティアがハーケンを振りかぶってセグエンテに突撃。

「へえ……。アンタから殺されに来てくれるなんてねっ！！！」

セグエンテもブレードを振りかぶり、切り結ぶ。

その切り結び・鏢迫り合いが行われている間……

「・・・ファルケ、単一使用能力『アサルト・レイザー』・・・行くよ!!！」

ルティアが急上昇をした瞬間、肩の『アサルト・レールガン』が砲撃を開始した。

「そんな大型砲台、どうせ単ぱ・・・っ!？」

一発目を避けて余裕の声を出したが、それはすぐに消える。

単発式と思われたそれが、なんと二発、三発と、本来の限界を大きく超えて立て続けに連射をしていたからだ。

「まだまだあっ!!手を・・・手を休めるもんかあああああっ!!」

本来『アサルト・レールガン』は単発式。その限界を大幅に超えて連射し続けるこの行為は無謀ともいえる。しかし、この戦いは負けられない。だから限界を超えたのだ。

「・・・いい加減にしなさいよっ!!！」

飛んでくるレールガンを叩き斬るセグエンテ。

「えっ!?!」

「嘘……!?!」

「はあああっ!?!」

「きゃああああっ!?!」

叩き斬られたことに怯んだ瞬間を突かれ、蒼海へと落とされた。

「後はアンタ達だけよ……! 識別番号016と034……!」
「っ!?!」

エリイがそれを聞いて一つの結論を持った。

「……なるほどね……。そっちも私たちと同じなんだ……!
……けどねっ!?!」
「絶対に……負けるわけにはいかない……!?!」

改めて己の武器を構える二人。

「じゃあ……アンタらを徹底的に叩き潰してあげるわ!?!」
「絶対に……」

「叩き潰されるもんかああああああっ！！」

三つの影は、空中にて激突した。

S i d e K a n a d e

「お前は・・・誰だ・・・？」

俺はそう聞いた。けど、帰ってきたのは質問だった。

「君は・・・何のために力を振るうの・・・？」

「・・・は？」

・・・質問の意図が全く掴めない・・・。どういうことだ？

「もう一度聞くな・・・？何のために力を振るうの？」

二度目の問い質しにようやく理解できた。・・・力、ということか・

「・・・護りたいものを護るため、だな。」

「護りたい・・・もの？」

「・・・ああ。友人、家族、仲間・・・自分自身で護りたいって思ったやつすべて。それを護るため、さ。全てなんて護り切ることはできないかもしれない。矛盾してつけど・・・。けど、守れるだけ守ってやる。それが俺の力の振るい方・・・だな。」

俺は今言えることすべてを言った。

「そっか・・・」

声の主はバイザーがあって顔こそは見えなかったけど、声で分かった。満足な答えが聞けた、ということが。

「・・・君なら・・・僕を使いこなせると信じてる・・・。僕を・・・正しく使えると思う・・・。だから僕は・・・君を君自身が願う勝利へ導くから・・・」

そこで目が覚めた。

「……そう……か……。俺は……」

セグエンテに脇腹貫かれて・・・

「……………」

……やっぱり痛い。けど……けれど……!

「こんな痛み、耐えられなくて……誰かを護るなんて……言えるかよ……!!」

「奏……」

「……姉さん、か……」

外に出た時、そこにいたのは姉さんだった。

「やっぱり……行くんだね……?」

「行くしかないだろ? 負けっぱなしってのは性にあわねえし、何より……」

「……?」

「護るべきものがそこにいて、助けなきゃいけないものもそこにいるんだからよ。」

「……そっか。」

・・・なんか大人しいな・・・？

「奏、約束して・・・？」

「・・・なんだよ・・・なんか変だぞ・・・？」

「ルーちゃんを無事に連れて帰って・・・奏も無事でいて・・・そして・・・その助けたい子を・・・きっちり助けてくるって・・・約束して・・・」

「・・・分かったよ、助けてくる。そしてルティアも連れて帰ってくる。絶対にな。・・・そんで、俺が行ったこと、内緒にしてくれない？バレルの時間の問題かもしれないけど。」

「・・・ん。」

・・・さて。

「行ってくるわ。」

「ん!」

姉さんに見送られ、俺は空へと飛び出した。

そして俺は、セラフィムの・・・いや、ゼロの本来の力を抑え込むためのブロックワードを口にした・・・

「『ゼロ、俺を導いてくれ』・・・!」

） 福音撃隊組 ）

「ぐっ……うっ……」

ぎりぎりと締めあげられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。

福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと進化した『銀の鐘』が紅椿の全身を包んでいた。

（ここまで……なのか……。……情けない……）

ぼうつと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への秒読みカウントダウンが始まる中、幕の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた。

会いたい・・・

一夏に・・・会いたい・・・

すぐに会いたい・・・今会いたい・・・

・
この戦いを投げ出してでもいい、今すぐ会いたい・

「いち……か……」

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた。

「一夏……」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めて瞼を閉じた。

イイイインツ・・・！！

『！？！』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離した。

いきなりの出来事に混乱している箒が、瞳を開けた時に見たのは、強力な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ばす福音の姿だった。

(な、何が起きて・・・)

戸惑う筈の耳に届いたのは、さっきからずっと願い思っ
て止まない声だった。

「俺の仲間は・・・大切な人は・・・！誰一人としてやらせねえっ
！！」

「あ・・・あ・・・、あっ・・・あぁっ・・・」

ジワリと目尻に涙が浮かぶ。

僅かに潤んだその視界に見えるのは、白式第二形態・雪羅を纏った
一夏だった。

〈 セグエンテ撃墜組 〉

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・」
「・・・はあぁ・・・」

エリイ・ルティアとセグエンテが戦い始めてすでに数十分が経過。

エリイは既にいない。最初の方は数の有利さがあって、追いつめてはいたのだが、次第に速度に押され始め、速度に翻弄されたその一瞬を突かれて海へと墜ちたのだ。

そしてルティアは肩で息をしている状態。

それに対しセグエンテは簡単に息を整えただけだった。

「さあ・・・そろそろ終劇フィナーレにしよう・・・？」

「・・・まだ・・・終わらない・・・！終わらせるもんか・・・！」

フラフラとしつつも、その眼に闘志は宿り続ける。

改めてザンバーハーケンを持ちなおしたルティアは、もう一度振りかぶって斬りつける。

「ふふん、当たらないわよ、そんなもの！」

しかし、さらりと避けられてしまう。

「じゃあ今度は・・・こっちの番っ！！！」

急加速によって迫るセグエンテ。

ルティアはそれを避けようとしたが・・・

「あ……っ!?」

今までの戦いで蓄積されたダメージの『ツケ』が来て、よろけてしまった。

「それぞれそれぞれえっ!!」

「あっ!ううっ!!うあぁっ!!」

そのよろけた隙を突かれ、エリィを墜とした時よりも速い速度で連続斬りを受けるルティア。

その斬撃は重力に従い落ちることも、斬撃の反動で吹き飛ばすことも許されない。

装甲は次々に破壊されていき……

止め、と放たれた一撃によって完全に瓦解、展開解除されてしまう。

「おっと……」

「あぐっ!!」

「落とすわけにはいかないの。」

重力に従って落ちかけた時、ルティアの首を締めあげるように掴むセグエンテ。

「く……あ……」

ぎりぎり^ギと締められ、呼吸もままならぬ状況、次第に意識がぼやけてくる。

そんな中で、ルティアはあることだけを考えていた……

私……まだ……死にたくない……

助けて・・・!!

死ぬのは・・・やだ・・・怖い・・・

「かな・・・で・・・く・・・」

僅かばかりの抵抗の証でもあつた手もだらりと垂れ、既に為すがままになつてしまつたルティアの口から、無理だと分かつていてもなお助けを求める声が漏れる。

「じゃあね……『本当の失敗作』!!」

そして、手に持つブレードがルティアの胸に突き立てられようとした……

その時だった。

ガキインッ!!という金属同士がぶつかり合った甲高い音が鳴り、
セグエンテの操縦者も、

「・・・なんで・・・アンタが・・・!?!」

目の前の事態に動揺を隠せない状態になっていた。

(な・・・なにが・・・?)

ぼんやりとした意識の中、不意に聞こえたのは・・・

「ルティアを返してもらっぞ・・・!」

別の声。しかも、女ではなく、男。

「はあっ!!」

「うあっ!!」

セグエンテはその何者かから攻撃を受け、吹き飛ばされる。

その瞬間、首に感じていた圧迫感から解放され、それと同時に誰かに抱きかかえられる感覚を持つ。

「けほっ!けほっ、こほっ・・・」

「大丈夫か?」

そしてまた聞こえる声。

「悪かったな。ちょっとばかり目を覚ますのが遅くなっちゃった。」
「あ……あ……うああ……」

ルティアの目に涙が溜まり、それが零れ落ちる。

今彼女の目の前にいる人物。それは……

本来なら今ここにいるはずの無い、しかし、ルティアが先程まで助けを求め、その存在を求めていた・・・

「・・・安心しろ。もうルティアには傷一つつけさせやしねえからよ。ルティアは・・・俺が護ってやるから!!」

ゼロを完全覚醒させた熾天使を駆る少年、二崎奏だった。

#38 それぞれの戦い、目覚めた『真のゼロ』（後書き）

（次回予告）

第、ルティアの危機に現れた一夏、奏。

それぞれの戦いが今、始まる……！

次回、#39 決戦

白、赤VS銀、ゼロの天使VS次世代のゼロ。この二つの戦いの勝者は一体……？

……という事で、いつもの……と言いたいのですが、まずは謝罪を……

#38を一旦消去するという事態に陥り、大変なご迷惑をおかけしてしまったこと、本当に申し訳ありませんでした。

前書きにもあった通り、突然本文が3900字以降消滅してしまうという事態になり、『これでは公開するわけにはいかない』と決断したからです。

……では、『二崎奏の一問一答』を。

「（奏）……ようやく……というかこんなシリアス全開でやるお前は凄い……。俺からも……本当に申し訳ありませんでし

た。」

それでは、質問の方を・・・

Q1・俊さんから

『ルティアの涙目＋上目遣いのお願いとシャルの上目遣いでのお願い、ドッチが断りにくいですか?』

「(奏)・・・これは答えないといけない・・・ンだよな・・・?」
答えてください。

「(奏)無理だ!!--こんな萌殺兵器を並べられて!」どっちが断りにくいかなんて答えられる訳ないだろ!?!?・・・ちなみにルティアは断ったら罪悪感にさいなまれそうだし、シャルは断ったら後が怖い・・・。つかこの質問、逆に質問し返したい・・・」
・・・言い換えると、『どっちも断れない』ということですね。では次の質問。

Q2・俊さんから

『酒に酔ったヒロイン達の中で、一番扱いづらいのは誰か?』

「(奏)・・・ルティアと沙霧だな。ルティアは性格が真逆になるし、沙霧は元々のものが一気に酷くなったようなものだから・・・」
つまり?

「(奏)どちらも手がつけられない。・・・扱い辛いことこの上ねえよ・・・」
「・・・だそうです。今回はここまで。俊さん、ありがとうございました!!」

次回は・・・沙霧に来てもらって、一問一答やりたいと思います。なので、沙霧に対する質問をどんどんどうぞ!!--・・・あ、なろうっ法に引つかからない程度のものでお願いしますね?

それと、今の募集と新規募集内容を。

まずは、名前とCVについて・・・

名前・・・二件

CV・・・8人（元々は9人でしたが、諸々の事情で一人外させていただきました）

です。そして、この件については、次々回あたり、決選投票を後書きで行いたいと思います。なお、募集してくれた人のは匿名にします・・・まあ、感想にありますけどね。

そして、新規募集の件。

企画を実行するにしましたが、そのことで、です。

企画1・・・誰に何を歌ってほしいか

企画2・・・奏にどんな不幸が起こってほしいか

です。

企画1については一部縛りがありますので、それを気を付けてください。

企画2については、なるう法に抵触しない程度の女難を募集します。

どちらも活動報告をご覧ください。

#39 決戦（前書き）

白と赤VS銀、ゼロの天使VS次世代のゼロの戦いが始まる。

果たしてこの戦いの結末や如何に・・・？

#39 決戦

） 福音撃墜組 ）

「一夏っ！一夏なのだな！？体はっ・・・傷はっ・・・！！！」

慌てて声を詰まらせる箒の元へと飛んで、一夏は答えた。

「おう、待たせたな。」

と。

「よかつ・・・よかつた・・・本当に・・・！！！」

「なんだよ、泣いてるのか？」

「なっ、泣いてなど・・・泣いてなどいないっ！！！」

グシグシと目元を拭う箒の頭を、一夏は優しく撫でた。

「心配かけたな。もう大丈夫だ。」

「し、心配などっ・・・」

強がりばかりが出てくる様子の箒。

一夏は頭をなでながらも、ポニーテールではない今の箒の髪型がやっぱり気になっていた。

「ちょうどよかったかもな。これ、やるよ。」

「え……?」

一夏は持ってきたものを箒に渡した。

「り……リボン……?」

「誕生日、おめでとうな。」

「あ……っ……」

七月七日。今日が箒の誕生日。

プレゼントに悩んでいた一夏は、よくよく考えたら……というところでリボンを買うことにしていたのだ。

「それ、せっかくだし使えよ。」

「あ、ああ……」

「じゃあ、行ってくる。……まだ、終わってないし、何より……」

「……?」

「・・・他にも、やるべきことがあるしな。」

言うなり、一夏は接近していた福音へと急加速、正面からぶつかった。

「再戦と行くか!!!」

《雪片式型》を右手だけで構え、斬りかかる。

それをひらりとわけぞってかわした福音を、左手の新兵器、《雪羅》で追った。

白式・第二形態で現れたこの装備、状況によっていくつかのタイプへと切り替えることが可能な装備なのだ。

今はまるで一夏のイメージに合わせるように、指先からエネルギー刃のクローが出現している。

「逃がさねえっ!!!」

1m以上に伸びたクローが福音の装甲を切る。シールドエネルギーに阻まれはしたものの、その一撃は確実に福音を捉えていた。

『敵機の情報を更新、攻撃レベルAで対処する。』

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす。その次の回避の直後、福音による掃射反撃が始まった。

「そう何度も食らうか!!」

一夏は避けようとはせず、左手を構えて前へと飛ぶ。

雪羅、シールドモードへ切り替え、相殺防御開始!

キンッ!と甲高い音を鳴らし、雪羅が変形する。そこから光の膜が広がり、福音の弾雨を消していく。

これはつまり、エネルギーを無効化する零落^{……}白夜のシールド。

エネルギー消費は当然激しくなるものの、完全に攻撃を無効化できるため、圧倒的に一夏が有利になる。福音に実弾兵器が無い事は、スペックカタログで確認済みである。

「うおおおっ!!」

強化され、大型四機のウイングスラスタが備わった白式・雪羅は、

ダブル・イグニッション

二段階瞬時加速を可能にしている。複雑な動きが出来る福音でも、最高速での回避が可能な訳ではないのだから、十分追いつけるのだ。

『状況変化、最大攻撃力を使用する。』

福音の機械音声がそう告げると、それまでしならせていた翼を、自身へと巻きつけ始めた。それはすぐに球状になり、エネルギーの繭にくるまれた状態へと変わった。

(・・・マズい、嫌な予感がする！)

一夏の予感は、最悪なことになった。

翼が回転しながら一斉に開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの弾雨を降らせた。これはつまり、ダメージが回復しきっていない面々にも攻撃が及ぶということだった。

「くっ！守りきれるか・・・っ!？」

一夏はすぐさま仲間の盾に走ろうとするが、それを怒鳴り声に蹴飛ばされる。

「何やってんのよ!!あたしたちは腐っても代表候補生、リースは

専用機持ちよ！？余計な心配しないで、さっさと片付けちゃいなさいよ！！」

「私たちも・・・回復したらずぐ駆けつけるから！！」

「・・・鈴・・・リース・・・分かった！！」

仲間を信じること。一夏にはそれしかできなかった。だったら、どこまでも信じ切っていく。

一夏は右手の雪片と左手の雪羅、それぞれから零落白夜の光刃を作りだして、再度福音へと飛び込んでいった。

Side Houki (三人称)

(一夏が・・・一夏が駆けつけてくれた・・・!)

篝の心は、嬉しいをとうに通り越していた。

心が躍動する。熱を持って跳ね回る。

そして、戦う一夏の姿を見て、何よりも強く願った。

(・・・私は・・・ともに戦いたい・・・!あの背中を護りたい!)

篝は強く、強く願った。

そして、その願いに応えるように、紅椿の展開装甲から赤い光に交じって黄金の粒子が溢れだした。

「じ、これは・・・!?!」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していくのが分かる。

『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築・・・完了。

項目に書かれていたのは、単一使用能力の文字だった。

(・・・まだ・・・まだ戦えるのだな・・・？ならば・・・)

一夏から渡されたりボンで髪を縛り、気を引き締めて福音を見る。

(ならば、行くぞ！！紅椿！！)

紅い光に黄金の輝きを得た深紅の機体は、夕暮れの空を割くように駆けた。

） セグエンテ撃墜組 ）

「あ・・・アンタ・・・なんで・・・！？あの時確かに・・・脇腹貫いたのに・・・!？」

「護りたいものが傷ついている時に・・・大人しく棺桶で眠っていられるかよ？」

「大人しく棺桶で眠っていれば・・・こんなふうに殺されっ!？」

セグエンテが言葉を止めた理由、それは・・・

「・・・遅いな。」

既にセラフィム・・・奏がいる場所が目と鼻の先だったからだ。その手にルティアはおらず、その代わりに風斬が首元に突き付けられていた。

「俺はお前を・・・お前のその憎しみを殺す・・・!」
「・・・っ!!」

少し離れたものの、剣を突き付けられて、その一言。

セグエンテにはかなりの衝撃だった。なぜなら、殺すのは『自分』ではなく『自分の憎しみ』なのだから・・・

「そっ、そんなことできるわけ無いじゃない!!馬鹿!？」

「・・・ゼロの予測には・・・お前の勝利は無い・・・」

「・・・言ってくれるじゃない・・・!アタシの『ゼロ』に一度負けたクセにつ!!」

セグエンテは奏に突撃する。だが・・・

「・・・右四五度からの袈裟斬り、左四十五度への垂直方向に風斬を立てることで防御可能・・・」
「なっ!？」

動きを読まれ、そして防がれる。それだけでも驚愕なのだが、反応速度が前回の比ではない。

「・・・アンタ・・・一体・・・!？」

S i d e L u t h i a

「奏・・・君・・・」

あの時・・・私を庇って刺されたのに・・・なんで・・・？

・・・けど・・・助けてもらった・・・んだよね・・・

「・・・でも、ノワール・・・」

・・・ノワール・・・さっきの戦いで・・・

それに・・・今の私じゃ・・・戦えない・・・

「・・・ルティア・・・」

「姉さん！？大丈夫！？」

「私もいるわよ・・・！」

「オリヴィエ・・・ルシエラも・・・！」

「沙霧も・・・大丈夫だから・・・」

「・・・よかった・・・！」

・・・本当に・・・よかった・・・！

「ルー、実はノワール・・・」

「・・・何・・・？」

「・・・まだ二次移行してないの。華奈多さんから聞いていたんだけど、私とリー姉には言ってくれて、ルーには内緒に、って。なんですか、とかは一切聞いてないけど。とにかく、ルーはまだ・・・強くなれるから。」

私は、姉さんがそう言った時、ノワールの待機状態の髪飾りを取り外して見る。

・・・何となく・・・ノワールが光ったように見えた・・・

） セグエンテ撃墜組 ）

「・・・ふっ！」

「くあぁっ!!！」

セグエンテがブレードで突き刺そうとしたが、それを奏はすれすれのところで回避。

カウンターの要領で風斬を横薙ぎに振る。それはセグエンテに寸分の狂いもなく当たる。

「・・・なんで・・・なんでアンタに攻撃が当たらないの!?!? 何でアタシの攻撃がアンタに当たらないの!?!?」

「・・・ゼロの予測・・・それが俺の方が上回っているからだ・・・」

「そんな見せかけのゼロ・・・!」

「この力が見せかけというなら・・・」

今度は縦にブレードを振るが、それもさりと回避し、その要領で

また横薙ぎ。これも当たる。

「この現実は何だと言っただ？」

「……このっ！このおっ！！」

連撃を繰り返すセグエンテ。それを紙一重のレベルで回避する奏。

自分よりも確実に実力が上、という事実には焦りを感じ始めるセグエンテの攻撃は、既にもう、軌道がやけくそになっていた。

福音撃破組

「ぜらあああつー!」

零落白夜の光刃がエネルギー翼を断つ。

しかし、両方の翼を斬るのは至難の技、二撃目を回避されてしまう。その間に失われた翼は再構築され、一夏へと強力無比な連射射撃を行ってきた。

「くっ！」

エネルギー残量二十%、予想稼働時間、三分。

(くそっ！このままじゃ・・・！)

リミッター無しの軍用ISがどれほどのエネルギーを持っているのか、見当がつかない。

それに対し、白式には限界時間が近づいている。それは焦燥へと変わり、一夏の心をじわじわと焼いていく。

「一夏！！！」

「箒！？」

突然聞こえた箒の声に驚く一夏。

「お前、ダメージは・・・」

「大丈夫だ。それよりも、これを受け取れ！！！」

箒の・・・紅椿の手が、一夏の白式の手を握る。

その瞬間、一夏の全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、一度視界が大きく揺れた。

「な、なんだ・・・！？エネルギーが・・・回復・・・！？箒、これは・・・」

「今は考えるな！行くぞ、一夏！！」

「お、おう！！」

意識を集中させ、雪片式型のエネルギー刃を最大出力まで高める。

それによって出来上がった巨大な光の刃を、一夏は両腕で支えて振る。う。

「うおおおっ！！」

福音は一夏の横薙ぎを縦軸一回転して回避、再び一夏を視界に捉えると同時に光の翼を向けてくる。

「（・・・かかった！！）箒！！」

「任せろ！！」

一夏の方に向けられた翼を、紅椿の二刀が並び一断の斬撃で断ち切った。

「逃がすかあああっ!!」

さらに脚部展開装甲を開放し、急加速の勢いを乗せた回し蹴りが福音本体に入る。

予想外の攻撃に大きく姿勢を崩した福音を、一夏は下から上へと返す刃で残りの光翼も掻き消した。

そして、最後の一突きを繰り出そうとする一夏に、福音は体から生えた翼全てで一斉射撃を行ってきた。

(ここまでできたら・・・もう引かねえっ!!)

全身にエネルギー弾を浴びながら、一夏は福音の胴体へと零落白夜の刃を突きたてた。

「おおおおおおおおおっ!!」

エネルギー刃特有の手応えを感じながら、一夏はさらに全ブースターを最大出力まで上げる。

それに押されながらも、一夏の首へと手を伸ばす福音。その指先が喉笛に食い込んだところで、銀色のISはついに動きを停止した。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

アーマーを失い、スーツだけの状態になった操縦者が海へと墮ちていく。

「しまっ……!?!」

「……つたく、ツメが甘いよ、ツメが。」

ようやくダメージから回復したらしい鈴が、海面接触寸前で操縦者をキャッチした。

同じく、シャル・ラウラも無傷とはいかないが無事だった。

「……後は……」

「もう一機だな……」

「……あれ!?!この反応は……!」

シャルがセグエンテのいるところを探った時、本来ならあり得ない反応があることに気付く。

「……奏が……いる……」

「か、奏が!?!」

「確か脇腹を貫かれて重傷だったはずよ！？それがなんで！？」
「今はそんなことはいい、途中で真琴回収して助けに……」
「……いや、それはもういいようだ……」

助けに向かおうとした面々を、ラウラが制止した。

「……ということとは……」
「……終わったんだね……」
「ああ……。やっと、な……」

全員で仰ぎ見た空は既にもう青くなく、夕闇の朱色に優しく包まれていた。

） セグエンテ撃墜組^{それまで} ）

「はあっ……！はあっ……！はあっ……！はあっ……！」

大きく肩で息をするセグエンテ。それに対し奏は……

「……これ以上何もしないのは……ぐっ！」

息を整えるのでもなくただそこに佇んでいる・・・いや、貫かれた脇腹から血が滲み始めていた。

完全に塞ぎきった訳でもない、応急処置程度だったその傷が、再び開いたのだ。

「・・・へええ・・・まだ・・・治ってなかったの・・・ねっ!!」

奏が痛みで顔をしかめさせたその時、セグエンテは再度突撃を試みた。

「・・・まだだ・・・!まだ・・・」

セグエンテをも上回る速度で後退する奏。

「・・・なに・・・?」

その理由が分からず動きが止まるセグエンテ。

「・・・誤差範囲修正・・・高圧縮粒子砲接続・・・照射っ!!」

二つの粒子砲を接続させたセラフィム最強の武器を照射。

「くっ……ああっ!!」

その迫る速度があまりにも早く、砲撃はセグエンテの片翼を奪った。

「ま……まだ……もう片方が……!」

シールドエネルギーが大幅に削られ、セグエンテの失われた片翼からは紫電が走る。

それでも戦意を失わない相手に奏は……

「……ならばお前のその憎しみを……俺が断ち切ってやる!!」

風斬を持って突撃する。

「くっ! 負けるわけには……アタシを認めさせるには……成
功体になるには……負けられないのよっ!!」

セグエンテもブレードを二つ呼び出して突っ込む。

「成功体とか失敗作とか関係ねえっ！！ルティアはルティア、お前はお前だ！！誰かがそいつの代わりになるなんてこと出来るわけねえっ！！！」

「っ！」

「お前はお前の人生が・・・生き方があるはずだ！それを探せばいいだろうが！！！」

「アタシに生き方なんて・・・！生き方なんてえ・・・っ！！！」
「だったら・・・」

ゼロ・・・全ての武装を破壊する最短手順を示せ・・・

バキヤアッ！！

「あ・・・」

その一瞬、そこにいる全ての人間・・・いや、奏以外と言うべきだろうか？

その全員に、今起きたその光景が理解できなかった。

たった一瞬、たった一瞬で、セグエンテの持っていたブレード、残っていた片翼が粉々になってしまったのだから。

そして、セグエンテの操縦者にもダメージが。

「……今から探していけばいいじゃねえか……。誰かにすり替わる、成功体となる、とかじゃなくて……。『お前自身の生き方を……』」

「……無理……。よ……」

「無理なら誰かを頼ればいいさ。俺だって力を貸す。それで自分の生き方を見つけていけばいいさ……。」

「……」

奏がそこまで言った後、セグエンテは展開解除され、奏の腕には一人の少女が気を失って抱きかかえられていた。

「……これで……。何もかも終わりだ……」

刹那、奏もセラフィムが展開解除され、奏は重力に従い落ちていく。

「かな兄っ!!」

それを着水寸前で救出するエリィ。しっかりと二人抱きかかえている。

「……悪いな……。エリィ……。もう……。限界……。だ……」

「……うん……。お疲れ様、かな兄……」

エリィに抱えられながら、そのまま気を失う奏。

「……奏君……。ありがとう……」

そんな奏に、ルティアは涙を流して感謝をしていた……

#39 決戦（後書き）

（次回予告）

全員が生きて帰ってきたことに、厳しい言い方をしながらも安心をする千冬。

そして、少女の存在によって、明かされる真実。

次回、#40 姉妹の真実

明かされた真実は、辛く悲しい事実・・・

・・・ようやく戦闘も終わり・・・とはいえシリアスが続く中の
「一問一答」！

「（奏）・・・相変わらずのKYぶりだな・・・」

今回は・・・ゲストがいますが、まずは奏に対する質問を答えてもらいます。落ちによっては答えられなくなる可能性がありますので。

「（奏）・・・だよなあ・・・」
ではまず・・・

Q1・リンドウさんから

『嫁をとるなら何人？』

「（奏）普通に考えて一人だろ？一夫多妻制とかいつの時代の話だよ・・・」

だそうです。続いて・・・

Q2・俊さんから

『ヒロインを動物に例えるとどんな動物になりますか?』

「(奏)・・・箒とかは含めるべきなのか?」

今回はまずなしで。

「(奏)・・・了解。えーと・・・」

真琴：カラス(バカだし)

オリヴィエ：白猫(なんか雰囲気的に)

シャル：ハスキー(犬)(雰囲気似てる。それに普通の犬にしては位が高そうだから)

ラウラ：トラ(何となくそんな感じ)

ルティア：リス(・・・そうとしか言いようが無くね?)

ルシエラ：黒猫(あの気品の高そうな感じがそんな雰囲気を醸し出してるし)

沙霧：柴犬(・・・もうこうとしか言いようが無い・・・)

・・・だな。」

長々とありがとうございます。続いて・・・

Q3・エドワード・ニューゲートさんから

『どんなゲームが一番得意ですか? できればゲームのタイトルも教えてください』

「(奏) そうだな・・・アクションや音ゲーは結構得意だったりするな・・・。特に得意だ、といえるのは『ガン ムVSガ ダムN EXTPLUS』とか『太 達の』とかだな。」

一応伏せましたが、なんとなくわかるかと思えますよ?・・・では、ゲストを・・・

「(沙霧)・・・奏・・・」

「(奏)・・・おわっ!?・・・まったく、本当にお前はいつもいっつも・・・」

では沙霧、質問に答えてもらいますよ？

「（沙霧）・・・ん。」

Q1・エドワード・ニューゲートさんから

『32話のオマケで泣いてしまった理由を教えてください。』

「（沙霧）それは・・・その・・・」

そこは私から説明します。沙霧には過去、体が浸かるくらいの水に関係するトラウマを抱えており、それに気付けない奏がちょっと強要してしまったために泣きだしてしまった、ということですね。悪気はなかったんですけどね。

「（奏）・・・あん時はホントに悪かった・・・」

「（沙霧）・・・ん・・・」

では次。

Q2・俊さんから

『沙霧にとってヒロインの中で誰が一番の強敵か？』

「（沙霧）・・・ルティア・・・。だって・・・」

「（奏）・・・だって？」

「（沙霧）私以外の・・・許嫁だもん・・・」

「（奏）・・・そういう問題なのか？」

そういう問題かと。『許嫁』って結構ポイント高いですよ？しかも最初の、なので。では次。

Q3・俊さんから

『奏の何処が好きになったのか？』

「（沙霧）・・・全部・・・//」

「（奏）・・・全部・・・」

「（沙霧）・・・何もかも大好きだもん・・・//」

「（奏）・・・はいはい次次。」

Q4・俊さんから

『最終的にはどこまでイキたいか?』

「(沙霧)・・・(ぽっ)／／／」

「(奏)・・・沙霧・・・?」

「(沙霧)・・・赤ちゃん・・・何人ほしい・・・?／／／」

「(奏)話がぶっ飛んでやがる!？」

「(沙霧)・・・今からでも・・・作る・・・?／／／」

「(奏)って待て!ベルトを外そうとするなズボンを下ろそうとするな!おい!」

「(沙霧)・・・奏え・・・／／／」

「(奏)脱ぐなあああああああああつ!」

・・・えーと、奏の明日が分からない状況になりましたので・・・
今回はここまで・・・

まずは質問をくださったリンドウさん、俊さん、エドワード・ニユ
ーゲートさん、ありがとうございます!

今回は普通の『一問一答』をします。奏への質問、いくつでもど
ぞ! (くだらない内容でもOKです)

そして、現在の急募状況は・・・

名前：候補三つ

CV：候補九人

です。

次回の後書き、『一問一答』の後にリストを掲示しますので、そこから選んでください。CVについては、代表作を3つほど載せますので。

企画の方は、受け付けて、最終的判断は私が行います。・・・企画2の方はほとんど通る確率が高かったりします。結構ハイテンションなので。企画が面白くなってきて・・・

#40 姉妹の真実(前書き)

今回はセストナ姉妹の真実が明らかになります・・・

40 姉妹の真実

(三人称)

「作戦完了・・・と言いたるところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ。」

『・・・はい・・・』

「二崎にもそう伝えておけ。特に最も重大な違反を犯したお前には厳しいものを用意しておく、ともな。」

『・・・はい・・・』

傷だらけの戦士達の帰還は、それはそれは冷たいものだった。

腕組みで待っていた千冬に全員きつく言われ、勝利の感触さえおぼるげになっている。

そして今は大広間で全員正座。・・・気を失ってしまっている奏は別室で布団に寝かされているが。

この状態で既に三十分は経過している。セシリアの顔が真っ赤から真っ青に変わり始めていることが、危険信号の目安となっている。

「あ、あの、織斑先生、もうそろそろその辺で・・・。け、怪我人もいますし・・・ね？」

「ふん・・・」

怒り心頭の千冬に対し、麻耶はおろおろわたわたとしている。先程から救急箱や水分補給パックを持ちこんだりと忙しなく動いている。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。．．．あっ！だ、男女別ですよ！わかってますか、織斑君！！」

(．．．分かってますってば．．．)

『脱いで』の辺りで女子がそれとなく自分の体を隠したことが、一夏を軽く傷つけていた。

「それじゃ、皆さんまずは水分補給をしてください。夏はその辺りも意識しないと、急に気分が悪くなったりしますよ？」

それぞれが返事をして、スポーツドリンクのパックを受け取る。もちろん、体に考慮して温めの温度。

「うっ．．．うあ、口の中切れてるな．．．」

口の中の違和感に気付く一夏。

「……な、なんですか？織斑先生……」

じつと睨まれていたため、一夏は居心地悪さからつい口を開いた。

「……しかしまあ、よくやった。全員、よく生きて帰ってきたな……」
「え？あ……」

すぐに背中を向けられ手表情は見えなくなったものの、一瞬見えた顔は照れくさそうな顔をしていた。

一夏は、なんだかんだいって自分たちの身を案じてくれる千冬に、心の中でだけ感謝を言った。

『……』
『……』
『……』

（……ん？何で女子一同こっちを見て……もとい、睨んでいるんだ？）

「あの、織斑君？皆の診察をしますから……ええと……」
『とつとと出てけー！』

数名の声に押されて、一夏は慌てて廊下に脱出。

ピシヤリと閉じた襖に、一夏は背中を預けて深く息を吐いた。

「ふう……」

今回の戦いは終わった。

(……仲間を……皆を守れたよな……俺は……)

俺と・・・白式は・・・

．．．ふわぁ．．．

ルティア．．．胸おつきい．．．

ちよ、沙霧もよ！？何なのこの規格外！？

そ．．．そんなことない．．．よ．．．？

．．．普通．．．。ほつといたらおつきくなった．．．

ねえ．．．ルティア．．．沙霧．．．

．．．？

．．．な．．．何．．．？鈴．．．。目、目が．．．怖い．．．

よ？

アンタら一体何食べたの！？何を食べたらそんな大きくなるのよ

！！

そうよ！！不条理よ！！

そ、そんなこと言われてもあ・・・

・・・分かんない・・・

「・・・これ以上ここにいるのは毒だな・・・」

「夏はそそくさと部屋から離れていった。

） 別室 ）

「……」

少女が目を覚ました時、その視界には見知らぬ天井が映った。

「……そっか……私……負けちゃったんだ……あうっ……」

痛みで顔をしかめるが、それもちよつとのこと、すぐに引く。

「……」

横を見ると、自分を墜とした相手・・・奏がいた。

「・・・」

顔を見たとき、あの一言が脳裏に浮かぶ。

『・・・今から探していけばいいじゃねえか・・・。誰かにすり替わる、成功体となる、とかじゃなくて・・・。』お前自身の生き方を・・・』

「・・・！（ボンツ！！）／／／」

急に顔が赤くなった。

（・・・な、なに！？何なのよこの感覚！？ここに恋な訳ななないじゃない！！れ、れ、れ、恋愛なんてききき興味ななないんだから！！）

内心かなり拳動不審になっていた。・・・実際、少女が布団の上でごろごろ転がっているという、先程までとは百八十度違う光景が見られたとか・・・

） 数分後 （

「……とりあえず、セストナ達が連れ帰ってきた女子は……」
「……ええと……」

少女のことで困惑する麻耶、そして思慮にふける千冬。

「……あの、そのことは私から説明します。なぜルティアが狙われていたのか、ということの説明にもなるので……」
「……ああ、頼む。」

千冬からの許可……というか依頼……を受け、リースが話し始めた。

「……最初に結論から言っちゃつと……私達ね、『造られたんだ……』」
「……!?!」
「……造られ……た……!?!?」

全員、驚きの顔を浮かべる。

「『プロジェクト・ヴァルキリー』……。私たちが造られたのが、このプロジェクト……」

「……聞いたことがある……。確か……。『ISを操縦するこ
とが出来うる女性の優れた部分のDNAを受精卵に組み替え、最強
のIS操縦者を生み出す』プロジェクト……。今はもう、その研
究所自体が実験体の暴走による爆発で実態すらなくなった……。筈
だが……」

ラウラが自分の記憶を遡りながら言う。

「うん。それで私がその十五番目に造られた存在で、エリイは十六
番目……」

「……だから……。あの時『016』や『034』と言っていた
のね……。ということは、ルティアは034、ということになる
のかしら？」

ルシエラが自分の予測を言った。リースはそれを首を縦に振って肯
定する。

「え、じゃあ……。あの子は一体……」

「失敗作、というのは……。後から聞いた話なんですけど、ルティ

アには所謂双子の妹、といえる存在がいたんです。」
『ええっ!?!』

驚きを隠せない面々。その中には渦中のルティアも含まれていた。

「そこはあまり詳しく分からないから説明できないけど・・・分かってるのはルティアとその子の出生が私達と違うこと、元々ルティアとその子が造られた目的が、『最強の操縦者を誕生させること』だった、ということくらい・・・かな・・・」

「・・・最強の・・・操縦者・・・?」

「セストナ、分かりやすく説明してくれ。省略され過ぎてはつきりと分からない部分があった。」

「あ、はい。私達は今くまで実験体・・・簡単に言ってしまうと、DNAを組み替えることが可能かどうか』を試す為の存在だったの。その集大成がルティア・・・ということ。・・・とは言っても、華奈多さんに頼んで跡地に行かせてもらって・・・自分で調べあげたことをまとめただけなんだけど・・・」

「・・・酷いな・・・」

「同じように造られた私が言うのもなんだが・・・人の命をなんだと・・・」

「・・・馬鹿みたいなことしてるヤツもいたもんね・・・」

それぞれがそれぞれの言い方で怒りを露わにする。

「・・・あ、そだルー、そろそろかな兄看に行ったらどうかな?」

「あ・・・うん・・・」

エリイに言われ一人大広間を出るルティア。

「・・・エリイ、ありがと。嫌な役やらせちゃって・・・」

「いのいの。リー姉、あの話はルティアに聞かせられる話じゃないから。というかこの話は私の方が詳しいでしょ？きつと。」

「・・・そう・・・だね・・・。エリイ、後お願いね・・・」

ここで話をエリイにバトンタッチする。

「ルーとあの子の関係だけ・・・双子、って言ったよね？生まれた時にDNA判定を受けて・・・成功・失敗の烙印を押されたの。ルティアは『性格に難アリ、しかしそれ以外はすべて成功』、もう一人には『性格は良、しかし成功体には劣る部分アリ』・・・ってね。」

「なにそれ!？」

）
別室
）

「あ……」

部屋に入ったルティアが見たものは……

「あり得ないあり得ないあり得ない信じない信じない信じない嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ……」

蒲団の上で悶えている（ルティアにはなぜ悶えているのかは不明。実際には先程のことが原因だった）少女がいた。

「……」

「……（バフツ！！）／／／」

少しの沈黙の後少女は顔を赤くして布団にもぐりこんでしまう。

な、何しに来たのよ……／／／

「な、何って……奏君を……看に来た……だけ……だよ？」

至ってマジな話、ルティアは奏を看に來ただけなのだ。

……ふんっ！好きにしなさいよ……！別にもう何かしような

んて思っ
てないから……！……恥
ずかしいとこ見られたじや
ないの……

「……え？」

もっほっ
といてよー！

布団の中からの怒鳴り声にびくつくが、結局何もされないと分かる
と、すぐに奏の許へ
と行く。

そして包帯の取り換えなどを始めたのだった。

） 大広間 ）

「……つまり……『セストナ姉妹は『プロジェクト・ヴァルキリー』によって造られた存在』、ということで、今回のアンノウンの操縦者とセストナ末との関係は双子、成功作と失敗作の関係もあって一方的に恨んでいた』ということではないな？」

「大雑把にまとめてしまうとそういうことになります……。こんな……。こんな造られた存在なんて……。造られた存在だから何？」……え……？」

自嘲気味になりつつあるリースにいきなり言いだす鈴。

「造られたとかそんなの関係ないでしょ？リースはリース、エリイはエリイ。他にいる訳ないでしょ？」

「そうだよ。今僕達の目の前にいるのは『僕達の友達の』リース・セストナとエリイ・セストナだよ。」

「・・・皆・・・」

「ありがとう・・・」

二人は全員という言葉に感謝していた・・・

おまけ・・・

心拍数などの数値が安定しているのを確認して、ほっとするルティア。

その時だった。

くきゅるるるる〜・・・

「っ！！！！／／／」

ルティアのお腹が盛大に鳴った。

「・・・ぶつ。」

「っ！！！！（／／／／／／／）」

笑われた、というのもあってルティアの顔は盛大に赤くなった・・・

40 姉妹の真実（後書き）

（次回予告）

戦士たちが解放され、平和を謳歌していた時。

内気な少女は『キング・オブ・唐変朴』に対する一大決心をする。

しかしそれは、そんな簡単にいく訳が無く・・・

次回、# 41 全て終わって・・・結局告げられぬ内気な少女の恋心

少女の気持ちは、何時になったら告げられるのか・・・？

はい、まずは『一問一答』から。

「（奏）・・・今回は・・・俺だけ・・・だよな・・・！？」

そうですね？そういえば前はどこまで・・・

「（奏）ズボンを死守したわ！！下ろされたら最悪なところまで行っていたっつーの！！」

はいはい。じゃあ質問に答えてもらいましょ。

Q1・リンドウさんから

『ヒロインの中で一番怖いのは誰ですか？』

「（奏）・・・今のところは・・・色んな意味で沙霧だな・・・なぜ？」

「（奏）あんなことがあったわけだろ？それに・・・いつまた襲われるかわかんねえから・・・」

・・・では次。

Q2・俊さんから

『もしもシャルとルティアに顎を引いた上目遣い＋涙目＋甘えた声で「お兄ちゃん・・・」と呼ばれたら悶えますか？』

「(奏)・・・これ・・・悶えるどころか悶え死ぬだろ・・・？」
で、答えは・・・

「(奏)・・・多分・・・逃げる。逃がしてもらえなかったら・・・悶えるどころか発狂するな・・・」
なぜ？

「(奏)・・・なんか・・・異端審問会にかけられそうな気がするから・・・」

・・・という事で今回はここまで。リンドウさん、俊さん、ありがとうございました。

どうでもいいような質問まで受け付けています。どんどんどうぞ！

・・・そして・・・いよいよ決戦投票を行います！！

まずは集められた女の子の名前を。

候補1 高宮 春香(たかみや はるか)

候補2 佐橋 美雪(さはし みゆき)

候補3 黒嶺 静(くろみね しずか)

・・・読み仮名、振ってないのがありましたので、合っているか分
かりませんが・・・

ちなみにくつつける相手の名前は幸俚ゆきひなです。

そして、CVは・・・

候補1 野水 伊織

代表作：そらのおとしもの ニンフ

これはゾンビですか？ ハルナ

おまもりひまり 九崎凜子

候補2 佐藤 利奈

代表作：とある魔術の禁書目録ノとある化学の超電磁砲

御坂美琴

アスタロツテのおもちゃ！ 塔原直哉

魔法先生ネギま！ ネギ・スプリングフィールド

候補3 堀江 由衣

代表作：DOG DAYS ミルヒオレ・F・ビスコッ

フィリアンノ

テイ

ぬらりひよんの孫 雪女

ながされて藍蘭島 すす

候補4 竹達 彩奈

代表作：けいおん！（一期・二期共通） 中野 梓

DOG DAYS エクレール・マルティノツジ

バカとテストと召喚獣 清水美春

候補5 浅野 真澄

代表作：テイルズオブレジェンディア クロエ・ヴァレンス

緋弾のARIA 綴 梅子

戦場のヴァルキュリア3 イムカ

候補6 高垣 彩陽

代表作：機動戦士ガンダム00 フェルト・グレイス

そらのおとしもの 五月田根美香子

剣と魔法と学園モノ。3 チューリップ

候補7 南條 愛乃

代表作：バカとテストと召喚獣 工藤愛子

探偵オペラ ミルキィホームズ 明智小衣

星空へ架かる橋 初の兄一（幼少時）

候補8 中原 麻衣

代表作：ひぐらしのなく頃に 竜宮レナ

魔法少女リリカルなのはStrikers ティ

アナ・ランスター、ラグナ・グランゼニツク、メガーヌ・アルピーノ

テイルズオブヴェスペリア エステル（エステル

ーゼ・シデス・ヒュラッセイン）

・・・です。

次回の更新の後に、結果発表として特別話を組みます。そこで発表、ということまで。

期間は#41更新の二日後です。私の執筆が捗った場合は早くなりますし、時間がかかれば遅くなります。

#41 全て終わって・・・結局告げぬ内気な少女の恋心(前書き)

今回ついにシリアス終わったー！！な回です。久しぶりにコメディ
ー回をやりました。

セグエンテの操縦者の名前、ついに判明・・・というか決まります
！！

4 1 全て終わって・・・結局告げれぬ内気な少女の恋心

Side Ichika

「ね、ね、結局何だったの？教えてよ〜！」

「・・・ダメ。機密だから。」

お膳を挟んで向かい側、ぱくぱくと夕食を食べるシャルロットに、一年女子が数名群がってあれやこれやと聞いていた。多分、一番とっつきやすいシャルロットになら聞けると思っただらうけど、それは判断ミス、というやつだな。シャルロットは専用機持ちの中じや一番責任感が強いからな・・・。それは間違いないと断言できる。

「ちえー・・・。シャルロットつてはお堅いなあ・・・。」

「あのねえ、聞いたら制約つくんだよ？いいの？」

「あ、あ〜・・・それは・・・困るかなあ〜・・・？」

「だったら、はい。この話はこれでおしまい。もう何も答えないよ。」

「ぶーぶー!!」

・・・さすがシャルロット。同学年の女子をあしらうくらい朝飯前、といったところか？うん、なんか凄くお姉さんキャラだな。

「じゃあエリイに聞こーっとー!!」

「そうしよそうしよー!!」

あ、今度はエリイに矛先が行った。

「・・・あたしに『ゲームで』勝ったらいいけどおゝ？かな兄直々に鍛えられたアタシにだよおゝ？」

『・・・ごめんなさい。』

轟沈早っ!!奏のゲームの腕は何度か見てるから分かるけど・・・そこまでのものか!?

・・・それはまあ、置いてくとして・・・問題は・・・

「・・・(ぽくぽくもぐもぐぽくぽくもぐもぐ)」

さつきから忙しく箸を動かし続けている、ポニーテール復活の筈だ・・・

なんかさつきから俺に話しかけられないようにずっと食べているよ
うな気がするんだが・・・気のせいかな？

「あー・・・筈？」

「・・・(ぽくぽくもぐもぐ)びた」

あ、止まった。

「えーと・・・体は無事か？怪我とかして・・・ないか？」

「・・・(コクン)」

一呼吸置いて頷いて、また食事をぱくぱくもぐもぐと再開。

・・・うーん・・・

「なあ筈。」

「っ！(ピクッ)」

一瞬身を竦ませてから、箸を置いてゆっくりこっちを向く。なんだかその動きは妙なきこちなさを感じて、多分俺じゃなくても筈がおかしい事に気付くだろう。

「な、な、何か・・・？」

「いやな、どうも様子がおかしいからどうしたのかなー・・・と。」

「お、おかしい・・・ですか・・・？」

・・・はあっ？(ずるっ！)

・・・いかん、素でずっとけた。・・・な、な、なんだその敬語は・・・？

いやいやいや、変だろ、どう考えても・・・。どうも作戦終了からこっち、箒は不思議なくらい大人しいし・・・。借りてきた猫でももう少し活発だろ・・・。

・・・けど、ここ最近の反応で分かったのが、『おかしい事をおかしいというと女子はなぜか怒る』ということだ。・・・うん、全くもって意味がわからん。・・・だがしかし、事実なのでツッコミは遠慮しておこう。

「えーと・・・やっぱりなんでもない・・・」

「え・・・。あ、う・・・ん・・・」

・・・猛烈に言葉を間違った気がする・・・

隣の箒は見るからにしょんぼりと肩を落として、さっきよりも半分以下の速度で食事を再開した・・・。す・・・すまん・・・

『・・・』

それから俺と箒は特に会話もなく、もくもくと食事を続けた。

正直、おいしくてたまらないはずの料理は、その味がどんなであったかもおぼろげだった。

「・・・あれ？ルティアは？」

「変だね・・・。さっきまで一緒にご飯食べてたのに・・・」

「・・・あ、半分以上残してる・・・」

・・・いつの間にかルティアがいなくなってたみたいだ。

むらじ・・・

「・・・・・・・・！！！！」（カカカカカカカカカッ！！！！）

一番端の沙霧が・・・物凄い勢いと形相で口に料理を掻っ込んでいた・・・

箸なんて見えやしない。というより腕が何本にも見える。・・・早食いはダメだろ・・・

今の彼女は冗談抜きで『阿修羅をも凌駕する存在』になった気がする。・・・武士道さんすいません。・・・あれ？ブシドーだったっけ？

「……ごちそうさまー!!」

そして全員がまた半分くらい食べてる状況の中（そういう俺も半分くらい）、一人完食して部屋を去っていった。

「……ルーのことだし、どーせ慌てる必要無いと思うんだけどなあ……」

皆が呆然としている中、エリィの呆れ声だけが妙に大きく聞こえたのは気のせい……だと思う。

S i d e K a n a d e

「・・・」

「気がついたみたいね。」

「・・・俺は・・・気を失ってたわけか・・・」

横の女の子（名前？知る訳ないだろそんなもん）の声を聞いて現状を把握した。

「気絶もするわよ。アタシのセグエンテ以上のゼロを使うんだもん、アタシにも頭痛があるのにそれ以上だとどこまで酷くなるかなんて全く分かんないわよ？」

「……だろうな……下手したら死んでるぞ……これ……」

頭に痛み……いや、激痛が走るけど、そんなのお構いなしに起きあがる。

「……で？お前は何読んでんだよ？」

「何って……コナン・ドイルの『バスカヴィル家の犬』だけど？さつきまで『シャーロック・ホームズの事件簿』読んでたけど。」

「シャーロック・ホームズ、好きなんだな……。つか原文って……」

「そりゃ、ね。こついつの結構好きだもん。というか原文じゃなきゃ読めないもの。」

なるほど……ね。

「……そついや……名前、聞いてねえな……。名前、なんていうんだ？」

「名前なんてないわよ。簡単に言っちゃえば名無し、ね。」

「……しゃーねー。俺が名前、一応つけてやるよ。」

「えっ!？」

……おい、挙動不審になるな……

「いつまでも『名無し』『識別番号』だと過去引き摺ってばっかに

なるだろ？」

「・・・じゃ、じゃあ・・・た、頼もう・・・かしら・・・／／／」

・・・なぜ顔が赤くなるんだろっか？今のにそんな要素あったか？

しっかし・・・名前・・・名前・・・名字は・・・ルティアのこと
あれほど敵視していたから・・・名字は変えた方がいいな・・・

「・・・あ。」

そこで目に付いたのがさつきまで読んでいた『バスカヴィルの犬』。

・・・そうだな。そうするか。

「・・・一応名字決定、だな。」

「え？何？」

「名字は『オルメス』。お前が好きで読んでるドイルものの主人公から採らせて貰ったよ。」

「え、でも・・・シャーロックの名字って『ホームズ』よ？」

「フランス語読みで『オルメス』になるんだよ。名前はそれに関連して・・・」

なんか期待の眼差しで見られてる気が・・・

「・・・『ロロット』・・・『ロロット・オルメス』・・・。それ

でいいかもな。可愛い名前だと思うぞ？」

「かつ、かかかか、かわ、かわ、か、かわ、い、い！？／／／」

「……どこまでテンパってるんだおい……」

「『フー』ことだからよ、これからは『ロロツト・オルメス』として生きてきやいい、ってことだ。んじゃ、ちよつと俺は外ほつつき歩いてくるからよ……」

俺は未だにぼけーっとしている少女改めロロツトを置いて部屋を出た。……脇腹は……しばらくは無茶禁止だな、こりゃ。

S i d e L o l o t t e

・・・か・・・か・・・可愛い・・・!?

ああアタシがかかか可愛い!?

(テンパっていた。・・・というか奏はそこまで言っていない)

「ばば馬鹿言わにやいでよ!!ああアタシがかかか可愛い!?!?そんな訳なななにやいじやにやい!?!」

(そして、かなり動揺していた。声に出るくらいの動揺だった)

S
i
d
e

K
a
n
n
a
d
e

「ふう……」

海岸の岩場のため息をつく俺。

ため息は疲れたからじゃない。何もかも終わった、その安心から来たもの。

「……俺は……約束を守れたんだよな……？……きっと。」

同時に……

「俺は……ゼロを制御しきった……んだよな……」

……あの時の夢に出てきた、あの子が言った通りに……

「……あ……」

「ん？」

声のした方を見たら、ルティアがいた。浴衣姿の。

「・・・まあ、なんだ。座れよ、ここ。」
「じゃ、じゃあ・・・、お、お邪魔します・・・／＼／」

なんで『お邪魔します』なのかは気にしないことにした。

「・・・あ、あの・・・奏・・・君・・・？」
「・・・なんだ？」

「その・・・お腹・・・大丈夫・・・？」
「腹？」

・・・ああ、そういうことか。

「傷跡が残っちまうらしいけど、数日すりゃ傷も塞がるんだってよ。」

「・・・ごめんね・・・」

・・・まだ引き摺ってたのがここにいた・・・

「大丈夫だったの。俺は平気だから、もういいって。」

「でも・・・でも・・・」

「はあ・・・」

本日二度目のため息。・・・全く・・・

「ルティア、目え閉じな。」

「ふえ……？うん……」

ただ眼を閉じてその場で待つ。……よし。

ぺしっ！

「へううっ！？」

……よし、デコピン成功。

「これがお仕置き、ということでご我慢しろ。これ以上やれるかよ……」

「えっう……」

……いかん、涙目状態になった。虐めてる気がしてきた……

「とっ、とにかく……この件はこれで終わりっ！」

「う、うん……」

ルティアも謝罪を終わらせてくれた。

「か、奏・・・君・・・。あ、あの・・・ね・・・？／／／」
「ん？」

不意にルティアが話しかけてきた。・・・顔が赤い気もするけど・・・
いつものことか？

「あ、あの時・・・助けてくれて・・・あ・・・ありがと・・・／／」

「・・・あー、あれか？俺が助けたかった、つつーこともあるけど、姉さんにも頼まれてたんだよな。『ルーちゃんを無事連れて帰ってきてくれ』って。」

「そ、そう・・・なんだ・・・／／／」
『・・・』

・・・また沈黙。つらい。

「・・・あの・・・奏・・・君・・・／／／」

・・・今度は・・・何だ？

「あ、あの、あの、わ、わた、私・・・／／／」

S i d e L u t h i a

『・・・・・・・・』

あうう・・・・・・・・。どっしり・・・・・・・・

恥ずかしくて・・・・・・・・話せないよぉ・・・・・・・・//

・・・・・・・・あ・・・・・・・・でも・・・・・・・・今って・・・・・・・・誰もいない・・・・・・・・んだよ・・・・・・・・

・ね？

ね・・・自分の気持ち・・・素直に伝えなきゃ・・・ダメ・・・だよ
ね・・・//

・・・伝えるなら・・・今・・・！

私・・・//
「・・・あの・・・奏・・・君・・・。あ、あの、あの、わ、わた、

「奏君のことが……す……す……す……すう……!!」

す……なんだ？

「す……」……抜け駆け禁止……!」きいつ!」?

……おい、今ルティアの口から不思議な音が聞こえたんだが……
というか何故……

「なんで沙霧がここにいるんだよ……。そして何故……。という
かいつの間に俺に抱きついた……?」

「……奏は……。私のだもん……。!」

「だ、ダメえっ!」!

「ちょ、腕引つ張るな!!当たってる!当たってるから!」

「む……」

「ふにゅっ!」

「腕引つ張らない代わりに別のとこ抱きつくのもダメ!!」

止めて!?!俺のライフはすでにゼロだぞ!?!

「だからいいかげんっ!」!」んむうっ!」?

沙霧にまたキスされた!!というか恥じらいは無いのか!?

つか傷開く!傷開くから!!

「ダメっ、ダメえっ!//」

「あっ……」

沙霧を突き飛ばしたルティア。……た、助かった……って!?

「わ、私だっ、か、奏君のことが……!す……す……//

」

「いいっ!?!」

『……?』

俺の悲鳴(……とっていいのかわからないけど)を聞いてふと上を向く二人。

「……部屋に姿が見えないと思えば……」

「……奏、これはどういうことなのかな……?」

「……よし、心中しヨウ……」

「……(ゴゴゴゴゴゴゴ!)」

……いつの間にかラウラ、シャル、真琴、オリヴィエがいた……

・・・あれ？これは俺が悪いのか？それにオリヴィエ、後ろのスタンドは消しなさい。怖いから。

「・・・あのさ、俺怪我人だよ？今でも既に死にかけてるつてのに・・・これ以上酷い事されたら完全に死んじゃうけど・・・？」

・・・一応助命を請う。・・・意味無いかもしないけど。

「・・・問答無用っ！！！」

「やっぱりかあっ！」

「心配したんだよ！？ホントに心配してたんだよ！？」

「うふ・・・うふフフフフ・・・」

「シャル、すまん！真琴、怖いから止める！いい加減病むな！！！」

「抜け駆け・・・ズルイ・・・抜け駆け・・・卑怯・・・」

「なんなんだよこのカオス！！・・・痛っ・・・」

・・・こりゃ・・・治りそうにない・・・か・・・。だつて・・・

俺の周りが治させてくれそうにないんだもん・・・

4 1 全て終わって・・・結局告げられぬ内気な少女の恋心（後書き）

（次回予告）

福音・次世代の襲撃が終わったその日の夜、天才二人は岬にいた。

そこに現れたのは千冬。

次回、# 4 2 三人の会話

友人同士の会話・・・ともいえない話であり、友人同士の会話・・・
とも言える話もある・・・

・・・はい、シリアス解放後の『一問一答』！

「（奏）・・・おい、俺最後死にかけてるんだけど？」

死なない死なない。大丈夫！異端審問会にかけられてもあなたは死
なないことを保証する！！

「（奏）いや死ぬだろ!?!」

放置！質問開始！！

Q1・俊さんから

『過去に姉の華奈多がしてかした厄介事で何が一番嫌だったか？』

「（奏）・・・一番?・・・いろいろあり過ぎて一番が決められね
え・・・」

嫌だ、といえるのはどれほどあつたんですか？

「（奏）つい最近で言えば沙霧やセストナ姉妹の編入・・・だな。

あれだけでもかなり苦しめられたし・・・。中学校の時にはあるマ

ンガの影響受けてアンドロイド作り上げて俺によこすし・・・小学校の時なんか突然『ガンダム造るよー!!』とか言い出して・・・まあ、色々あるんですね・・・では次。

Q2・俊さんから

『姉の華奈多にコレだけは感謝してる事は?』

「(奏)・・・まあ、あるとすれば・・・中学校の時にアンドロイドよこしてくれたこと、か?」
なぜですか?

「(奏)・・・恥ずかしいんだけどよ、そいつがいてくれたおかげでさ、あまり寂しさを感じなかったんだよ。」
なるほど。それだけが唯一感謝するところだった、と。

「(奏)そういうことだよ。」
じゃあ最後の質問。

Q3・俊さんから

『雨が降り続ける中拾って下さいと書かれたダンボールに入ってるネコミミ&ネコシツポを着けて上目遣い+涙目で』にやあ』と寂しそうに泣いてるシャル&ルティア&沙霧が居たら「(奏)間違いなく拾うね!!」如何しますか?』・・・って回答早・・・

「(奏)これ見捨てたら鬼だろ、間違いなく!!」
・・・だ、そうです。今回はここまで。俊さん、ありがとうございました。

次回は・・・IS熾天使史上最強の萌殺兵器ことルティアをゲストに呼ぼうかと。

「(奏)・・・これは・・・答えにならない場合が多い気がしてきましたぞ・・・?」

そして、決選投票について・・・ですが。

予告通り、投票終了を7月2日にします!!

現在の状況は・・・

名前・・・1と2にそれぞれ一票ずつ

CV・・・野水さん、堀江さんに一票ずつ

です。

このままだと、再決選投票なるものを行うことになりかねますので、
ふるって投票お願いします!!それと制限を緩和して・・・

それぞれ一人一票ずつ、とします!!そうすれば決まるかと!!

よろしくお願いします!!

#42 三人の会話（前書き）

今回はタイトルを見ればわかると思いますが、結果発表ではありません。ちょっと予定を変更します。

後書きでは途中経過も公表しますので。

4 2 三人の会話

Side ????

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても四十二%かあ。まあ、こんなところかな？ヴァイス・ブリッツの方はどう？」

「あの女狐が単一使用能力使わなかったから何とも言えないけど・・・分かってるだけでも四十%・・・かな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、二人の女性が無邪気に笑いあっていた。

片や子供のように、片や天使のように。

それは、何時も退屈そうな顔の篠ノ之束と、それとなく自由人な二崎華奈多だった。

「んー・・・ん、ん」

「おや、ご機嫌？」

「そうかも」

鼻歌を奏ながら、束は次のディスプレイを呼び出した。そこには白式第二形態の戦闘映像が流れていた。

華奈多のディスプレイには、セラフィムのデータが。

二人はそれぞれのディスプレイを眺めながら、岬の柵に腰掛けた状態でぶらぶらと足を揺らす。

一歩間違えれば無事では済まないその場所でも、二人の表情は決して変わらない。

「は。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて。まるで・・・」

「・・・まるで『白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な。」

森から音もなく千冬が姿を現した。漆黒のスーツに身を包んだその姿は、夜の闇全てを引き連れているかのような静かな威厳に満ちていた。

「やあ、ちーちゃん。」

「おう。」

三人は互いの方を向かない。背中を向けたまま、束は先程と同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預け、華奈多は足を動かすのを止めていた。

どんな顔をしているのか、別に見なくても分かる・・・

そんな確かな信頼が、三人の間にはあった。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行っただんでしょうか？」

「……白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう？」
「ぴんぽーん。さすがちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのことはあるね。」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方不明となり、何時しか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた。

「それで、うふふ。例えばの話、コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね。ちーちゃんの一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じ単一使用能力を開発したとしても、不思議じゃないよねえ。」

千冬は、何も答えない。

そんな反応はお構いなしに、続けたのは華奈多だった。

「それにしても、不思議なこともあるもんだね。あの機体のコアは分解前に初期化したはずなのに、なんでなんだろうね？東がしたし、私も立ち会ったから、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね。」

「ねー？」

「不思議なこともあるものだな。」

三人揃って分からないというのが本当の所だった。

が、東や華奈多は別に分からなくても問題は無い。

「・・・そうだな。私も一つ、たとえ話をしてやろう。」

「へえ、ちーちゃんが？珍しいねえ。」

「明日は雪か台風かな？」

「黙って聞け。例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることが出来るとする。そこで使われるISを、その時だけ動けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのISが使える、ということになるな。」

「ん？でも、それだと継続的に動かないよねえ？」

「そうだな。華奈多は長い間同じものに執着する奴だが、東、お前は長い間同じものに手を加えることはしないからな。」

「えへへ。飽きるからね。」

「・・・酷いね。」

「もう、酷いなあ、かなちーは。」

「・・・で、どうなんだ？とある天才？」

「・・・どうなんだろうねー？うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ。いっくんはIS開発に関わっていないはずなのにね。」

「・・・ふん・・・。まあいい。次のたとえ話だ。」

「多いねえ。」

「多いねえ・・・。」

「嬉しいだろう？」

「違うね、と二人は返して千冬の話に耳を傾ける。」

「とある天才たちが、大事な妹を、弟の友人を弟の頼みで晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件、さらに因縁を持つ人間を向かわせること。」

二人は答えない。そして、千冬も言葉を続ける。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビュー、弟の友人もそこまでとは言わないが鮮烈なデビューを果たせる、というわけだ。」

「へえ、不思議なたとえ話だねえ。」

「・・・凄い天才たちがいたもんだねえ。」

「ああ、凄い天才たちがいたものだ。かつて、十二カ国の軍事コンピュータを同時にハッキングするという歴史的な事件を自作した天才と、世界各国で資料閲覧を禁止されていた史上最悪のプログラムをハッキングで閲覧した天才がな。」

二人は答えない。そして、千冬はもう一つ言う。

「・・・華奈多、お前を疑う訳ではないのだが・・・セラフィムにゼロを積んだのはお前か？」

「・・・ゼロは・・・積まれたんだ。私がちよーっと留守にしている間にね、誰かに入られてゼロを勝手にプログラミングされて。そのまま出しちゃうのも癪だったからプログラミングでブロックかけてたの。だから、セラフィムの根本を作り上げたのは私だけど、ゼロは私じゃないわけ。」

「・・・そうか。お前の弟は・・・生きて帰ってきた。全ての約束を果たしてな。」

「・・・そっか。」

華奈多は安心した声を出した。

「あ、そつだ千冬、一つ二つ、頼まれてくれないかな？」

「・・・なんだ？」

「過保護な姉から溺愛する弟を恋い慕う内気で一途な女の子と一途で真っ直ぐな女の子にプレゼントがあつたんだ。・・・これ、渡してくれないかな。」

渡されたのは、二枚のフロッピーディスク。

「・・・中身はなんだ？」

「内気な女の子用のは将来二次移行を果たした時の追加武装。真っ直ぐな女の子にはシステムアップデート用の。」

「・・・わかった。」

渡されたそれを、スーツのポケットにしまう。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「・・・そこそこにな。」

「・・・そうなんだ。」

岬に吹き上げる風が、一度強くうなりを上げた。

「　　。」

その風の中、何かをつぶやいて・・・束は消え、華奈多は突如現れた『翼が生えた何者か』の手を掴んで一瞬で姿を消した。

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木によりかかった。

その口元から漏れた声は、潮風に流れて消えていった・・・

#42 三人の会話(後書き)

今回は決選投票・結果発表です。

何となく定着してきた気がする『一問一答』。今回はゲストがいま
す。前回の沙霧のように奏が回答できなくなる危険性は無いので今
呼びます。・・・ルティア、どうぞ。

「(ルティア)え、えと・・・どうも・・・/ / /」

「(奏)・・・ルティアなら安心だな・・・。沙霧に比べれば全然・
・・・」
ではまず、奏から。

Q1・俊さんから

『上目遣い+涙目+頬を膨らませて拗ねるシャル&ルティア&沙霧
&オリヴィエの機嫌を治すのにどんな事をしますか?』

「(奏)・・・さあ?それぞれで反応は変わるけど・・・多分・・・
甘いものでも奢る・・・かも。ケーキだったりとかパフェだったり
とか・・・。ただ・・・」
ただ?

「(奏)・・・沙霧にはそれでは通用しない気がする・・・。あ
い
つのことだからとんでもないものを要求されそうな気がする・・・」
「(ルティア)・・・/ / /」
・・・納得です。続いて。

Q2・俊さんから

『中学の時に貰ったと言うアンドロイドは今如何なってるんですか
?そしてソレは女性型ですか?』

「(奏)・・・一気に行ったなおい・・・」

で？

「(奏)・・・まず、アンドロイドは女性型。姉さん制作取扱説明書的なものには『奉仕用メイドアンドロイドType (ニュー) Hestia』^{ヘスティア}・・・って書いてあったな。・・・ヘスティアって『炉』の女神だろうがよ・・・」

で、今は？

「(奏)俺の部屋のハウスキーパー的なことしてる。常駐でだけど、
「・・・だそうです。多分奏が自分の家に帰る時に登場するかもしれ
ません。次、ルティアです。」

「(ルティア)は、ひゃいっ!」

「(奏)・・・落ち着け。」

Q1・俊さんから

『今回命名されたロロットと今後どんな関係を築いて行きたいですか?』

「(ルティア)・・・やっぱり、仲良くなりたい・・・って思ってます・・・。双子の姉妹としても・・・」

「(奏)・・・だろうな。本当の姉妹の関係、ということまで持つていくのには時間かかると思っけど、頑張れよ?」

「(ルティア)・・・うん・・・」

Q2・エドワード・ニューゲートさんから

『奏、セストナ姉妹以外で、ルティアが心許せる人物はいますか?』

「(ルティア)・・・篝とかセシリアとか・・・奏君の周りにいる人皆には・・・心許せてます・・・」

Q3・俊さんから

『ルティアにとってヒロインの中で誰が一番の強敵か?』

「(ルティア)・・・ヒロインの中だと・・・えーと・・・シャル

ロット・・・かな・・・？」

それはなぜですか？

「（ルティア）・・・だって・・・奏君と一緒に部屋になったことあるし・・・息ぴったりだし・・・優しいし・・・へうう・・・」
なるほど。

「（ルティア）・・・でも、一番のライバルはやっぱり自分自身・・・です。」

「（奏）・・・これ、一番すごい回答な気がする・・・」

・・・素晴らしい回答を頂けたことで、ここからは・・・回答できない可能性が大なので、答えられない場合私が代わりに応えましょう。ただ・・・ルティアにとって公開処刑になるかも？

「（ルティア）・・・へうう・・・」

その前に・・・奏、ちよつと退場。

「（奏）はあっ！？なんでだよ！？」

あなたがここにいたらルティアが答えられないし。

「（奏）・・・わーった、わーったよ・・・」

（奏、退室）

Q4・俊さんから

『奏の何処が好きになったのか？』

「（ルティア）へうっ！？」

で、答えられます？自分で・・・

「（ルティア）えと・・・あによ・・・しよによ・・・／／／」

・・・どうやら回答不能なようなので、私が代わりに応えます。最初は単純に奏の容姿に一目惚れしていただけでしたが、今では奏の優しさ、覚悟・信念の強さに触れ、奏の人間性にも惚れ込んでおります。沙霧のような支離滅裂な解答ではなく、ちゃんとした理由がありますので。

「（ルティア）・・・へうう／／／／／」

Q5・俊さんから

『最終的にはドコまでイキたいか?』

「(ルティア)へうっ」

「っ!?!?」

答えられます?

「(ルティア)へうっ、へうっ、へうっ、へうっ……」

……仕方ないですね。分かる人になら分かる方法で聞きます。『恋愛のABC』ってありますよね?それで言うと……どこまで?

「(ルティア)……い……」

……はい?

「(ルティア)……E……まで……イキたい……です……
/ / / /」

……壁、厚いですよ?この回答でいったら沙霧は『CとDを延々と繰り返したい』などと言うでしょうね……。知らない人は自分で調べてください。

「(ルティア)……/ / / /」

今回はここまで。俊さん、エドワード・ニューゲートさん、ありがとうございました。次回は普通にやります。

そして、現在実行中の決選投票の途中経過ですが……

名前……候補2と候補3が同立2票、候補1が1票

CV……候補82票、候補1、候補3、候補7にそれぞれ一票ずつ

……となっております。

投票のルールは

- ・一人二票まで
 - ・同一者による重複投票はNG
- です。

本日未まで受け付けておりますので、お早めに!!!

#Other 結果発表

今回の投票の結果発表です！

キャラクター名

| | | |
|------|-------|-----|
| 候補 1 | 高宮 春香 | 1 票 |
| 候補 2 | 佐橋 美雪 | 2 票 |
| 候補 3 | 黒嶺 静 | 2 票 |

CV

| | | |
|------|--------|-----|
| 候補 1 | 野水伊織さん | 1 票 |
| 候補 2 | 佐藤利奈さん | 0 票 |
| 候補 3 | 堀江由衣さん | 1 票 |
| 候補 4 | 竹達彩奈さん | 0 票 |
| 候補 5 | 浅野真澄さん | 0 票 |
| 候補 6 | 高垣彩陽さん | 0 票 |
| 候補 7 | 南条愛乃さん | 1 票 |
| 候補 8 | 中原麻衣さん | 2 票 |

総投票数各 5 票ずつ

結果・・・CVは中原麻衣さんに決定しました。

キャラ名は・・・投票数が多かった一候補による再決選投票になります!!

期間は本日まで、結果は#43の後書きで発表します!

「(奏)・・・ところで、何で発表が遅れたんだ?結果的には#42で掲載したのと変わりなかったんだろ?」

じつは・・・TJAPlayer『THE MEDLEY OF KIRBY SSDX』をやっていたからなんですよね・・・

「(奏)へー?何分だよ?」

・・・15分・・・

「(奏)長いなおい!」

#Other 結果発表（後書き）

（次回予告）

帰路のバスに乗り込んだIS学園一年生。

バス酔い二人組が苦しむ中、また新たに被害の音が。

次回、#43 君の名は（ユア・ネーム・イズ）

乙女の本気の策略も、関羽（誰が三国志の英傑か、馬鹿者・・・B
Y千冬）の前には下策に等しい・・・

今回は『一問一答』お休みです。次回#43でやります。

#43 君の名は(ユア・ネーム・イズ)(前書き)

第三巻分、ついに終了!!

そして後書きでは結果発表もあります。

4 3 君の名は(ユア・ネーム・イズ)

(翌朝、朝食を終えて、すぐにIS及び専用装備の撤収作業に当たる。

そうこうして十時を過ぎたところで作業は終了、全員がクラス別のバスに乗り込んでいた。まだエンジンはかかっていない)

「・・・最悪だ・・・」

バス最前列に乗り込んでいた俺は、オリヴィエと共に行きと同じ様にお葬式ムード出しまくりだった。

ちなみに今の俺は・・・肉体的にも精神的にも摩耗した状態、といったいいかもしれない・・・

腹の傷が元で迂闊に走り回ることが出来なかったためにボッコボコにされ、戻ってきた時に無断で+怪我人が無謀に旅館を出たことがばれて千冬さんに大目玉。実質寝たのは三時間くらい。俺は腹の傷に響くだろうから、という理由で作業は免除された。その代わりに口口ツトの面倒を見る、と言われた。・・・面倒を見るとかいう年齢か？

・・・で、今に至るといわけだ。

「・・・奏・・・酔い止め・・・飲んできた・・・？」

「・・・残り全部・・・飲んできたぜ・・・ははっ・・・」

「……体……壊すわよ……?」

……再びお葬式モード。

「むー……」

「うう……」

「くうっ……」

「うー……」

なんか呻き声が聞こえるけど、気にしないでおこっ……

Side Charlotte

うー・・・オリヴィエずるい・・・

(バス酔う組であるオリヴィエが羨ましく感じるシャルロット。この時ばかりは不謹慎ではあるがバス酔いしない自分が妬ましかった)

・・・昨夜・・・ホントにやりすぎちゃったしなあ・・・。怒ってる・・・よね・・・

・・・そうだ、奏と話しよ。乗り物酔いは話をして気を紛らわせるといいつて聞くし。席も近くだし・・・。(シャルは奏の席の一つ後ろ)

うん、そうしようー!

S i d e L u t h i a

・・・うー・・・なんで席遠いんだろ・・・

(ルティアは奏・オリヴィエから見て一番遠い席にいた)

・・・席、代わってもらえないかなあ・・・

うー・・・。私も・・・近くがよかったなあ・・・

S i d e L a u r a

・・・むう・・・嫁と席が離れてしまった・・・

(ラウラもまた、最前列でお葬式ムード漂う二人から遠い席にいたが、ルティアほどとは言わない。離れたのは奏の席から四つほど離れた場所だからだ)

どうにかしてでも、嫁の苦しみを取り除けないものか・・・？

・・・そうだ。次の休憩の時に体調不良を装って嫁の隣の補助席に座ろう。そうすれば何か出来るな・・・

S i d e
M a k o t o

あーうー・・・こんな時に限って元気な自分が恨めしいよ・・・

(真琴はルティアの隣だった。ちなみに、普段の真琴も酔いやすい側の人間だったが、今回の臨海学校は、なぜか『酔う兆候』が全く見られなかったのだ)

・・・そだ、体調不良装って補助席行けば・・・一緒に・・・うふふ・・・

(ここにも一人、愚か者がいた・・・)

S i d e S a g i r i

「・・・ふう・・・」

（沙霧はむくれていた。奏の隣・・・とはいえ、通路を挟んでなの

だから、誰かが補助席に座ってしまえば、隣じゃなくなってしまうのだ)

「・・・私だって・・・隣にいたいのに・・・」

S i d e K a n a d e

二人して落ち込んでいた時だった。

「ねえ、織斑一夏君、っているかしら？」

「あ、はい。俺ですけど。」

急に一夏が呼ばれた。・・・一夏は俺から見て三つ後ろの席。

・・・確実に年上だな。・・・何がどうなのか分からないけど。

「君がそうなんだ。・・・へえ」・・・

なんか一夏をじろじろと興味深そうに見てる。・・・俺には何もなくてよかった。

「あ、あの、あなたは・・・？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ。」

「……え……!？」

……へー、福音の……ま、俺には関係ないか。

……まあいいや、もう寝よう……

……うとうととしていた時に突然ゴシャッ!……という音がしたのが気がりだけ。

S i d e

「
」

バスから降りたナターシャは、目的の人物を見つけてそちらへと向かう。

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ？ガキの相手は大変なんだ。」

そう言ってきたのは、傍にロロツトを連れた千冬だった。

ナターシャは、その言葉に少しだけはにかんで見せた。

「思っていたよりもずつと素敵な男性だったから、つい」

「やれやれ……。それより、昨日の今日でもう動いて平気なのか？」

「ええ、それは問題なく。……私は、あの子に護られていましたから。」

ここで言う『あの子』とは、つまり暴走によって今回の事件を引き起こした福音のことを指している。

「……やはり、そうなのか？」

「ええ。あの子は私を護るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断……。あの子は私のために、自分の世界を捨てた……」

言葉を続けるナターシャは、さっきまでの陽気な雰囲気など微塵も残さず、その体に鋭い気配を纏っていく。

「・・・だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのISを敵に見せかけた元凶を・・・必ず追って・・・報いを受けさせる・・・」

福音は、そのコアこそは無事だったが、暴走事故を招いたことから今日未明に凍結処理が決定された。

「・・・何よりも飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた・・・。相手が何であろうと、私は許しはしない・・・！」

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？しばらくは大人しくしておいた方がいい。」

「それは忠告ですか？ブリュンヒルデ。」

IS世界大会『モンド・グロツソ』、その総合優勝者に授けられる最強の称号・ブリュンヒルデ。

千冬はその第一回受賞者であったが、正直その名前で呼ばれることは好きではなかった。

「アドバイスさ。ただのな。」

「そうですね。それでは、大人しくしましょう。・・・しばらくは、ね・・・」

一度だけ鋭い視線を交わしあった二人は、それ以上の言葉なく互いの帰路に就いた。

・・・またいずれ。

そんな言葉が、二人の背中にはあった。

「・・・ねえ、アタシはいつまで突っ立ってればいいの?」

「・・・ああ、すまなかつたな。事情はどうあれ、お前は一応最前列に座ってくれ。」

「ん。」

ロロツトは短く返事し、言われたとおりにした。

女子一同、『誰?』とか『可愛い』とか言っていたが、それを一切無視してさっさと席に着いた。

おまけ。

パーキングエリアに着いた時・・・

「今から昼食の後小休憩をとる。各人、やるべきことはやっておけ。」

いいな？」

全員が返事をしたその時・・・既に奏・オリヴィエの姿は無かった。二人ともトイレに駆け込んでいたのだ。

そしてその昼食後、少女達は動いた。

バスの中・・・

「・・・うひひひ」
「・・・うひひひ」

当然の如く酔う二人。前・・・進行方向を見ているのにもかかわらず、酔っている。

「・・・お、織斑先生・・・」

「どうした、ボーデヴィツヒ。」

「ば、バスに酔ったようなので・・・ま、前に・・・」

「お前が酔うはずが無いだろう？あまりにも目的を露呈させ過ぎた嘘をつくな。」

「・・・はい・・・」

ラウラが轟沈。

後々にもルティア、真琴が果敢にも挑んでみたが、あえなく轟沈していた・・・

「奏、大丈夫？」

「・・・無理だ・・・」

「・・・ぷすつ。」

「・・・笑うな・・・」

ロロットにも笑われ、力なく返す奏であった・・・

4 3 君の名は（ユア・ネーム・イズ）（後書き）

（次回予告）

楽しかった臨海学校も終わり、平凡な日々が訪れた。

しかし、奏の身には不幸が訪れる。それも・・・

一人の少女の存在によって・・・

次回、# 4 4 ツン×4デレワガママ姫・ロロツト

『（ロロツト）朝ごはん出しなさいよっ！！』

『（奏）し！る！か！俺の！睡眠時間を！返せっ！！』

『（ロロツト）お腹空くじゃない！！』

『（奏）どっかでウィダーでも買って来い！それが嫌なら腹でもな
んでも空かせとけこのバカ！それに傷改めて開かせる気か！？』

『（ロロツト）バカ！？バカって何よこのバカ！！バカッ！！』

「（奏）・・・おい、次回予告が物凄い不安な予感しかしねえんだ
けど・・・」

気にしたら負けです！！さあ、『一問一答』！！

Q1・俊さんから

『セラフイムに新たに武装を追加したら、GNカッター&GN
ソード？ブラスター&GNバスターソード？、GNソード？、G
Nソード？&GNソード？&GNソードビット搭載GNシールドの

ドレが良いですか?』

「(奏)・・・これって・・・前からダブルオーセブンソード/G
UN、ダブルオーライザー最終決戦仕様、ダブルオークアンタ・・・
だよな?」

はい。

「(奏)・・・どれかって言われても・・・セットだからな・・・
単体で言えばGNソード?とGNバスターソード?、後は・・・な
いけどGNソードライフル、かな?」
・・・だそうです。

Q2・俊さんから

『奏と一夏、ドッチが料理上手なんですか?』

「(奏) 単刀直入に言う。知らん。」

・・・なんちう無責任な・・・

「(奏) リアルに知らねえし。一夏と料理対決したわけでもないし
食べ比べしたわけでもねえ、ましてや休みくらいに自分の分だけ朝
飯作るくらいしかねえからなんとも言えねえんだよな・・・」

だそうです。まあ、いずれやってもらいますけど。今回はここまで。
俊さん、ありがとうございました。

質問は随時受け付けておりますので、『これ、別にどうでもよくね
?』と言うことでもかまいません。

そして、再決選投票の結果ですが・・・

なんと・・・

総投票数が三票しかなかったため・・・

一発決定!!結果は・・・

佐橋美雪・・・一票

黒嶺静・・・一票

ということ、『佐橋美雪』に決定しました！！急募に伝えてくれた人、投票してくれた人、ありがとうございます！！

彼女はそう遠くないうちに絶対出てきますので、その時をお楽しみに！！

#44 ツン×4テレワガママ姫・ロロット(前書き)

戻ってきました日常パート。その第一話目が・・・

『ロロットに振り回される奏』

『ある意味素晴らしい反応を見せるロロット』

・・・です。

#44 ツン×4テレワガママ姫・ロロツト

Side Kanade

ロロツトはIS学園1-1に編入生として入ってきた。席は・・・
たまたま空席になっていた俺の一つ離れた右。

部屋割も緊急的、ということと俺と同室になっている。・・・とい
うか、一番間違いが無いだろう、という判断が出たらしい。・・・
俺自身、間違いを犯そうなどという不謹慎なことは考えない。・・・
当然だろう？

んで、その後の休日の朝、たまたま寮食堂で朝飯が出ない日のこと
だった……

「ん……」

俺が珍しく二度寝をしてしまった時だった。

「とつとと起きなさいよこのバカあつ！！（ズドムっ！！）」
「グフっ！？」

な、なんだ！？何が起きた！？なんで俺は腹を殴られた！？

それで目が覚めた時、目の前に足が迫っていた。

「ふんっ！ー！」
「くっ！」

それを俺は右手で受け止める。

改めて確認すると、それはロロットの足だった。

「何すんだ！お前に朝っぱらから腹殴られるいわれはねえぞ！」

「朝ごはん出しなさいよっ！！」

「しーる！か！俺の！睡眠時間を！返せっ！！」

「お腹空くじゃない！！」

「どっかでウイダーでも買って来い！それが嫌なら腹でもなんでも空かせとけこのバカ！それに傷改めて開かせる気か！？」

「バカ！？バカって何よこのバカ！！バカッ！！」

もう一撃！？……だが当たるかっ！！

（奏、一瞬の間にベッドを転がり落ち、そのまま離脱を図ろうとする。だが……）

「ふーっ！！」

ちっ、回り込まれた！！

「お腹が空いたあ！お腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたあーっ！！」

「おまつ、ちよ、待て！」

なんかめっちゃくちゃ腕突き出して掌底当てようとしてきやがった！

「いい加減にしろっ！」

「ふみゅっ!？」

面倒になったからロロットの頭を押さえる。

「ふにゃ

っ!!--!!」

身長差もあって、取り押さえることには成功した。・・・というか、手すら当たらないってぶじよ。・・・

「にゃ

っ!!--!!」

・・・日増しにこいつの扱い方を理解していつてる気がする・・・

結局この騒動は山田先生が到着して終息を迎えた……。そして俺も叱られた……。俺、止めただけだし被害に遭っていただけなのに……。手出してないのに……

んで、結局俺が朝食作る羽目になった・・・

の
は
い
い
が。

「かなちゃん、まだー？」

「早くしなさいよ！風穴開けるわよ！？」

「嫁の作る朝食か。楽しみだ・・・」

「・・・楽しみ。」

「・・・なんでお前らがいるんだよ！？」

そこにいないはずの真琴・ラウラ・沙霧がいたんだよ！

「いーじゃん！朝食堂開いてなかったんだし！」

「自分で作るっていう選択肢がお前らの中に無かったのか！？」

『（・・・）ない！』

「満場一致かこの野郎・・・」

・・・お前ら少しは俺が怪我人ということを出せ・・・

「だからさっさと作りなさいよ！！」

「うっせ！抜くぞ！？」

「抜けるもんなら抜いてみなさいよ！全身風穴だらけにしてやるわよ！？」

一悶着あつた後、朝飯。

「……うまいな。」

「……うう……かなちゃんまた腕上げた……」

「……おいしい……」

「……ま、まあおいしいわね……。わ、私に比べれば……。天地の差があるけど……！」

「……ロロツト、周りを見ようぜ？よく見る、周りが変な目で見てるぞ？」

「……なによ？」

「……いや、お前さ、もっと周りを見ようぜ？」

そこでロロツトが周りを見た。……周りにはある意味修羅がいた。
・

「……はあ……」

本日最初のため息について、俺はさっさと朝飯を食ってしまった。

んでもって、その後、恒例の勉強会（現国）。

「……（プシュウ……）」

「あ〜う〜……」

「……（返事が無い、ただの屍のようだ）」

「……死屍累累を体現したような状況だね……」

シャルと二人で教えていたんだが……こんな状況だ。

上から沙霧、ルティア、真琴。所謂『現国苦手組』だ。

そしてもう一人。

「漢字キライ漢字キライ漢字キライカンジキライカンジキライ……」

……ロロツトだ。前普通のラノベを読ませてみたところ、タイトルの時点で……

「・・・なんて読むのよ？」

・・・などとぬかした。・・・というところでーから漢字の練習をさせた。

「もういや

っ！ー！」

そしてとうとう我慢の限界が来た・・・らしい。

「なんで漢字があるの！？漢字なんて存在しなくてもいいじゃない！ー！」

「漢字はあった方がいいと思うよ・・・？」

シャルが宥めるが、ロロットはもう限界のようだ。さっきから不満ばかりをだらだらと言いつづけている。

「漢字なんて別に使えなくていいでしょー！？読めなくてもいいでしょー！？」

「読めないと無学にみられるぞ

「う、うっさい！そんなものどっつてことないわよ！ー！」

「・・・どっつてことなくはないと思うんだけどなあ・・・」

そんな時だった。

「やはりここにいたか。」

「ラウラ、どうした？」

「今回の古典の出題範囲のことで聞きたいことがあって来た。」

「……ああ、今回の古典は『枕草子』だったな……。……。で、どこだ？」

「この……。『いとをかし』と言う奴だ。」

「『枕草子・第一段』の『春はあけぼの』だな。こいつは……。口語訳で言えば『趣深い』となるが、普通に言えば『趣があつていい』とでも通る……。はずだ。」

「ではこの『つとめて』とは？」

「『早朝』だ。」

俺はラウラに質問されているところを記憶を頼りに答えていく。

「……」

「ロロツト、どうしたの？」

「かつ、奏!! あ、アタシにも勉強教えなさいよ!!」

「……わーったわーった。」

「……ロロツト。」

「なによ!？」

「妬きもち？」

「なっ!？」

……シャルは何を言っているんだ？

「ああアタシがややや妬きもちなんてやや妬く訳ないでしょ！？ばばバカじゃないの！？死ぬの！？」

「・・・ロロツト・・・凄い噛んでる・・・」

「ふーん？ひよつとしてえー・・・」

・・・エリイ、何時の間にお前は出沒した？

「（「」によ「」によ「」によ「」によ・・・）」

「・・・っ！？／／／」

・・・あ、ロロツトの顔が真っ赤になった。まるで茹蛸。

「ばっ、ばばバカ言わないで！？ああアタシは恋愛なんか興味ないし関係ないししたこともないし永劫するつもりもないし！可笑しいんじゃないの！？」

「でもでもお、そんなに早口で捲くし立てるなんて・・・怪しいなあ〜？」

「あああああり得ない！あり得ないわ！アタシが恋！？冗談じゃない！絶対にある得ないわ！」

「じゃあなんでかな兄に教えてもらおうとしたの？」

「そ、それは奏に教えてもらった方が分かりやすいと思っただけよ！か、勘違いしないでよね！？べ、別に奏に教えてもらいたいなんて思ったわけじゃないんだからね！？」

・・・なんかすっごい早口で捲くし立てるなあ・・・

「奏、まだあるのだが・・・」

「おお、悪い悪い。」

そして、勉強会はロロツトが暴走する中続いていった。

そして昼食後。

今はルティア・沙霧にフロツピーディスクの解析を頼まれ、それを
実行していた in セストナ姉妹の部屋。

・・・千冬さん、何時フロツピー渡されたんだ？

「・・・ど、どう・・・？」

「・・・こりゃ、相当嚴重なロックが掛かってんな・・・。そこま
で重要な機密事項なのかね・・・」

「・・・私のは？」

「沙霧のはもう解析が済んでる。これがそれをプリントアウトした
やつだ。」

沙霧に渡したのは『リバレーティング・ローズ、アルテミスモード
実装計画』だ。アルテミスモード、というのが何なのかはよく分か
らないが、分かる範囲で言えば、『スペリオルビット』の砲撃モー
ドのビームをその状態でのみ完全追尾弾に変更する、というものだ
った。

「・・・よし、ルティアのやつは後ロック一つ・・・解除！」
「本当!？」

「・・・本当だ。・・・なにに?・・・ルティア、これは・・・」
「・・・二次移行した後・・・だね・・・」

そのフロップピーに入っていたデータ、それは・・・

二次移行した後のブラッディ・ノワール、言い換えれば『ブラッディ・ノワール・ヘルサイズ』と呼ばれるそうだが、そのモードの追加兵装だった。

それが『超電子振動剣『クリュサオル』』と死神の翼を模したかのような『超高速機動型防衛対応可変翼』の実装だった。

「・・・なんつう大層なものを提案するんだあの姉は・・・」

「あ、あはは・・・」

「それにさ、なんだよこの『そら』と『率の高さ!?'それに『超高速機動型防衛対応可変翼』ってこれまんま『デスサイ』へカスタム』じゃねえかよ・・・」

「だ、大丈夫・・・だと・・・思うよ・・・?」

とりあえず用事も済ませた時には、既に夕方になっていた。・・・
どんだけロック解除に手間取ったんだか・・・

「・・・ふう・・・」

部屋の前について、ため息をひとつ。

そして入った時、音がした。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ねシネシネシネシネシネシネシネ

っ！！！！」

「いい加減銃乱射を止めろっ！！」

「で て

け

っ！！！！」

「で、出るから！出るから止めっ！！っおおっ！！？」

翼で防ぎながらも部屋を出る。・・・俺、何も悪いことしてない・・・
よな？

「……ロロツト……」

「……なによ。」

「……事故とはいえ……すまん。」

「……変態……」

「いやだから事故だって言ってるだろ!？」

「でも見たことに変わりないでしょ!？」

「いや、俺はすぐ目を閉じたね!!」

「どういうことよ!？」

「どういうこともクソもないだろ!？異性の体なんてむやみやたらに見るべきもんじゃねえだろうが!!」

「……うん、自分でも正論を言った気がする。合っていないとおかしい気がする。」

「あ、ああ、アタシの体が見る価値無いつて言うの!？」

「支離滅裂過ぎる返答が来た！？つか言ってねえから！！そういう
つてことは別に見せてもいってことだよな！？」

「そ、そそそんな訳ないじゃない！！変態なの！？やっぱり変態な
のねアンタ！！」

「変態はお前だろうが！？話をどれだけ飛躍させる気だ！？」

「うっさい変態！ド変態！！やっぱり死ね」

「っ！！」

「だから撃つな」

「っ！！」

結局また俺叱られた・・・。
今度は千冬さんにだよ・・・

4 4 ツン×4テレワガママ姫・ロロット（後書き）

（次回予告）

夏休みが迫る頃、ついにあの時間がやってきた。

少女達はその事実には驚愕し、焦燥する。

そして、別の意味で苦しむものは一人いた・・・

次回、# 4 5 テスト！！

少女達は目の前の危機から脱することはできるのか・・・

「（奏）・・・死ぬかと思った・・・」
大丈夫、あなたは死なない。

「（奏）その根拠は一体何処から来てるんだよ!？」
はいはい、『一問一答』行きますよ?」

「（奏）スルーかよ!？」

Q1・俊さんから

『寮の自分の部屋で目が覚めたら自分の腕に水着姿でリスミミとリスシッポを着けたルティアと自分の腰に水着姿でイヌミミとイヌシッポを着けた沙霧が抱き着いて寝ていて、起こしに来たシャルとオリヴィエと真琴とラウラに見付かったら如何しますか?』

「（奏）・・・これ・・・明らかに死亡フラグ立ってるだろ・・・」

・・・で？

「(奏)・・・まず逃げるな。弁明とかよりも先に逃げる。・・・弁明が通る気がしないからな・・・」
それはなぜですか？

「(奏)まず真琴がいる時点で無理。あいつは俺がらみになるとすべての人間性が無視されるからな・・・。次にシャルとラウラ。多分許してくれないだろうし・・・」
・・・さいですか。ちなみに抱きついていてる側に本当はロロットが入っていましたか、彼女の性格上、『それは無いだろう』と判断し質問を改訂させていただきました。

Q2・俊さんから

『ロロットですが、酔っ払った状態だと如何になりますかね？』

「(奏)ロロットいねえだろ？どうすんだよ？」

それをどうにかするのが私の使命。・・・へ ポー！！

「(奏)へ！？あの『世界のへ ポー』！？」

ちよつと！離さないよ！！なんでこんな所に来なきゃいけないのよ！！」

「(???)・・・」

「(ロロット)ふみゅっ！！」

「(奏)あれへ ホーだろ！！」

ということだロロットに来てもらいました。ありがとうへ ポー！

「(ロロット)ちよつと！何してくれてんのよ！！」

ちよつと・・・実験をするために来てもらいました。

「(ロロット)・・・実・・・験・・・？」

・・・飲め。

「(奏)単刀直入に、しかも淡白に言い切ったなおい！！というかロロット未成年！！未成年だから！！」

大丈夫！！ここは異空間のようなもの、現行法がなんぼのもんじやい！！捕獲せよ、へ ホー軍団！！

「（ロロツト）きゃああっ！？ちよ、離しなさいよ！止めなさいよ！！さつさと離さないと風穴開け・・・ちよ、そこ触らないで！！変た
い！！」

次！これを飲ませる！！

「（奏）酒瓶レベルかよ！！量あり過ぎるだろ！！」
やりなさい！！

「（ロロツト）ふむう

っ！！

「（奏）・・・ああ・・・どんどん酒が飲まれていく・・・。そして飲めない分が零れていく・・・」

解放！！

「（奏）・・・おい、ロロツト沈黙してるけど大丈夫か？アルコール中毒とか」・・・にゃ・・・う・・・。「・・・猫・・・なんていう訳ないよな・・・？」

いえ、いますよ？目の前に・・・

「（奏）目の前にいるのはロロツト・・・ってまさか！？」

「（ろろつと）にゃ
ん！！」（平仮名はわざとです）

「（奏）ドムッ！？」

いやー、ロロツトは酔ったら猫化するんですねー。知りませんでし

たよー。

「(奏) おい作者! !どごその根暗マンサーみたいな言い方すんな
! !」

「(ろろつと) にゃーん」

いやー、面白いですねー。

「(奏) 聞いちやいねえっ! ?」

「(ろろつと) にゃっ! !ふにゃっ! !にゃん! !にゃっ! !」

「(奏) ちよ、叩くな! !」

「(ろろつと) ……ふ……にゃ……」

「(奏) ……うとうとしました……」

「(ろろつと) ……すう……すう……」

「(奏) ……静まった……」

さーて、今日はこれで終わりです。俊さん、ありがとうございました!
た!

まだまだ質問は受け付けております! !どんなくならない内容でも
構わないので、どんどんどうぞ! !

#45 テスト！！（前書き）

学生なら決して避けては通れない恒例行事、テストです！奴です！！

それに奏たち・・・特にバカ組たちはどう立ち向かうのか！？

4 5 テスト！！

平和だった教室に、戦慄が走った。その原因はたった一つ。

「来週からテスト期間に入る。各人、しっかりと勉強しておけよ？」

・・・テストの告知が来た。俺には全く影響は無いが、それは他の女子一同には大変なもので・・・

「や、やばっ！ちゃんと勉強しなきゃ！！」

「ぶぎゃ　　っ！！」

「な、夏休みがあ・・・」

「どどどどどっしょっ！？」

・・・まさに阿鼻叫喚。

それは他の奴にも言えたわけで、真琴なんか・・・

「テストイヤだテストイヤだテストイヤだテストイヤだテストイヤだテストイヤだテストい（ry」

・・・ご覧の通り既に虫の息になっている。

んで。

「……なんだよその目は……」

横で沙霧がウルウルした目で俺を見ていた。

その奥にはルティアが同一行動で俺を見ていた。

「……しゃーねー、付け焼刃程度の勉強会でもやるか……」

そう言った時、沙霧とルティア、そして真琴の周りに花が咲いた……
・様に見えた。

そしてその日の夜。

「・・・なんで全員集合なんだよ！？八時だからか！？八時だからなのか！？」

「かな兄、ドリフってないで早くやる？」

「そーだよかなちゃん！教えてくれるって言うてたよね！？」
「ああ言ったさ。確かに言ったさ。でもな？俺はお前とルティアと沙霧に言っただつもりだったんだ。なのによ……」

俺はそこにいる全員を見て……

「一夏筆頭の馬鹿組は仕方ないとするぞ！？なんで優等生のシャルとかリースがいるんだよ！？」

「つて待て！なんで俺が馬鹿組筆頭なんだよ！！」

「……馬鹿つてところは否定しないのね……」

「いや、否定させねえ。」

「させるよ！！」

だつてよ、ISの基礎知識叩きこむのに一週間じゃとても足りなかつたんだからよ？

「で？他の面々はなんでだよ？特にシャルとかリースとか。……お前ら教える必要ねえだろ……？」

「……ほら、私現国苦手だし……」

「僕も日本史ちょっと不安だったから。」

「……一応最初のテストは現代国語と日本史だ。『なんで日本史？』とか思われそうだが、ここは日本だ。それ以外の答え要るか？」

「……つたく。しゃーねーから要点だけ掻い摘んでやってくからな？」

『はい。』

「……はあ……」

ちなみに今回、箒には協力を頼んである。報酬が必要無かったということが唯一の救いだ。

(ここから先は、殆ど音声だけでお楽しみください)

「かなちゃん!」

「なんだ?」

「全部教えて!」

「・・・(ゴソッ!)」

「いった

っ!」

「少しくらい自力でやれ!」

「だって っ!」

「だって何もあるか!少しくらい自分でやらなきゃ意味ねーんだよ!」

「う　　っ!！」

「奏、ちよつといいかな？」

「シャル、どうした？」

「『平安遷都』ってどう覚えればいいのかな、って。」

「ん？ああ、そんなことが。『794年、平安遷都』なら、『啼くよ驚平安京』ってな。数字を語呂合わせにして覚えると割と楽だぜ？」

「『啼くよ驚』・・・あ、そういうことか！ありがとう、奏!！」

「いーっていーって。箒、一番の懸念事項はどうだ？」

「・・・奏、もう代わってくれ・・・」

「は？」

「ロロツトは・・・もう覚える気が無いのか、というくらい漢字がダメだ・・・」

(そう言う箒が見せたのは、ノートに書かれた『芥川龍之介』の文字)

「・・・で？それをロロツトが読むと？」

「・・・『なんとかがわなんとかのなんとか』・・・」

「殆ど言えてねえっ!！」

「しょうがないでしょ!？分かんないんだから!！」

「少しくらい覚えようとしろ!！小学校で配られる漢字ドリルでもやつとけまは!！」

「なんでそんなものやらなきやいけないのよ!！」

「やらねえと夏休み全滅だぞ!？補習だらけの!！」

「だったらアンタが教えなさいよ!！」

「あの、奏さん？」

「んあ？何だセシリア？」

「この・・・『ナガシノ』・・・ですか？この戦いについて詳しく知りたいのですが・・・」

「こらあーっ！！無視するなあーっ！！」

「ロロツト、黙つとけ。・・・『長篠の戦い』・・・ああ、これは織田・徳川連合軍が武田軍と長篠でやりあつた戦いで、そんな時の武田軍は『武田の騎馬兵隊は強い』と言われていた。それを覆したのが織田家当主の織田信長で、武田軍の騎馬兵が自軍への突進を出来ないように大きめの柵を作り、その後ろから当時の鉄砲で相手を撃つ、という戦法をとつた。」

「でも、当時の鉄砲ですと、銃弾を込めるのに時間がかかりますわよね？その間にやられてしまうのではありませんの？」

「ああ、その説明を忘れてた。信長は鉄砲兵を複数の隊に分けて、各隊数人ずつの列に分けて、最初の兵が鉄砲を撃つてその弾を詰める間に次の列が撃つ、その列が弾を込める間にまた次の列が撃つ・・・といったように、絶対に鉄砲の撃ち手が休まらないようにしていったんだ。」

「でしたら・・・何の問題もありませんわね、ええ。」

「わかつてくれたようで。他ないかー？」

「あ、ちよつといい？」

「どした、リース？」

「・・・ここ、全般的に分かんない・・・」

「・・・『山椒魚』・・・ま、確かに分からはないけどよ・・・」

「かな兄！ルーが・・・！」

「あーもー！ルティアがどうしたんだよー！！」

「ダウンしてるー！！」

「・・・知恵熱・・・出てる・・・」

「しょうがねえ、ベッドにでも寝かせてやってくれ。んで・・・」

そんなこんなで、一週間はあっさりと過ぎていった・・・

そして、テスト当日。

初日の一時間目は現代国語。

「始め！」

千冬さんの一声で、一斉にテスト用紙を裏返す音がする。無論俺も裏返して問題を見た。

『問1 次のうち、芥川龍之介が書いた作品はどれか。記号で答えよ』

ア・『グスコープドリの伝記』

イ・『羅生門』

ウ・『坊ちゃん』

・・・どこをどう考えても『イ』だろこれ・・・

さーで、次の問題は・・・っと・・・

S
i
d
e

l
o
l
o
t
t
e

・・・

（ロロツトは沈黙していた。なぜなら・・・）

・・・読めない・・・

（付け焼刃程度で勉強しただけなために、一切漢字が読めなかったのだ・・・）

・・・もー！せめてフリガナでもふっっておいてくれたらよかったのに！！なんでフリガナふってないのよもう！！

（もはや理不尽な怒りをテスト用紙にぶつけていた・・・）

S i d e
M a k o t o

・
・
・

(こちらもまた、沈黙していた。なぜなら・・・)

・・・わかんない・・・

(こちらは純粹に分からなかったためだ)

もーこーなったら適当に埋めちゃえ！そうすればたぶん当たるよき
つとー！！これ『ア』にしようー！！

俺はあっさりと問題を解き進め、既に四つ目の塊の最後まで行っていた。所要時間はたった三十分。

『問8 夏目漱石、森鷗外のそれぞれの本名を答えよ』

・・・おい、これ現代国語関係あるか・・・？

・・・まあいい、夏目漱石は『夏目金之助』・・・森鷗外が『森林太郎』・・・よし、終わりっ！！

(二時間目、日本史)

S i d e L u t h i a

・
・
あ
う
・
・

(ルティアは殆ど頭が真っ白になりつつあった)

鎌倉幕府・・・何年だっけ・・・えと・・・4192年・・・だっ
け？

(今ここに、ガッツ伝説が再来した・・・)

S i d e L o l l o t t e

・・・うーん！

(ロロツト、ついに精神的に発狂)

何なのよこれ！？こんな昔のことなんて勉強する必要ないんじゃないの！？おかしい！絶対おかしい！！

(それぞれがそれぞれで苦難していた頃、沙霧はというと・・・)

「・・・・・・・・(カカカカカカカッ!!)」

(・・・下手したらテスト用紙が熱で出火するのではないか、と思われる勢いで答えを書きこんでいた。しかも・・・全問正解。あの時の『バカ』状態は何処へ・・・といえる気迫があった)

初日終了。

Side Kanade

』

「へんじがない、ただのしかばねのようだ。」

「・・・また出た。というか前もこんなことやってたよね？奏にだけど。」

ちなみに死んでいるのは（とはいっても『死んでいる』のは表面上だけどな）ルティアと真琴。ロロットは最早燃え尽きていた。

「・・・あのな、まだこれが三日続くんだぜ？今の時点でこうなっていたらお前から最終日どうなってるんだよ・・・」

「あう・・・」

「か、鎌倉幕府があ・・・」

「・・・ちよつと待て、お前から『鎌倉幕府成立』何年って書いた？」

『4192年。』
「・・・相当、未来・・・」

その日の夜。

なんかロロツトがいつにもなく胸を反らせて『ふっふーん』など
といいそつな雰囲気だった。

「奏！理数系じゃアンタに絶対！ゼえ

ったい！負

けないんだからね!!」

明日は・・・そうか、数学、化学か。

「・・・やれるもんならやってみろ。そのふざけた幻想をぶち壊してやるよ!」

「・・・わ、どっかの某幻想殺し君みたいなメタ発言したよ・・・」
「バカなのに・・・私と同レベルの馬鹿なのに・・・」

「ちよつと待ちなさいよアンタ!!アンタと同格にしないでくれる!?!」

「漢字も読めなきゃ私と同格って言われても問題ないからね!?!」

ケンカが始まった。真琴　ロロツト間で。

「アンタと比べればアタシは平均的・・・じゃなかった、全面的にできる女なんだからね!?!」

「じゃあなんで漢字が読めないわけ?読めなきゃ全面的じゃないよね!?!」

「うっさいうっさい!!アンタだって全面的にできない女じゃない!?!」

「むっか　　っ!?!」

・・・(プチン)

「・・・何の音・・・？」

(今の何かが切れた音に、小首を傾げたシャルが周りをきよろきよろと見渡した)

「・・・お前ら・・・そこまで喧嘩がしたいなら・・・」

「・・・皆、退避。真琴とロロツト以外退避。」

「え、エリイ？いきなり何を・・・」

(エリイが『何を言い出すんだこいつは？』と言いたげな一夏の背中を押して部屋から出し、その流れで奏・真琴・ロロツト以外のメンバーも部屋から出た)

「エリイ、一体どういうことなんだ？」

「・・・悪魔が再来するから・・・某ネスツ閻の支配者が・・・」

『は？』

(エリイ以外の全員が首を傾げた時だった)

望み通りに・・・

《ひいっ！！》

天んんんからあお塩おっ！！(ドッゴオオオオンッ！！)

ふぎぎや

っ！？

いっ・・・た

っ！？

「……な、何が起きたんだ今のは……」
「……かな兄最終秘奥義『天からお塩』が炸裂した音だよ……」
「……なんですか、その『天からお塩』というのは……?」
「……簡単に言えばただの拳骨なんだけど……」
「今のは拳骨が鳴らせる音ではないだろう……」
「……うん、威力が半端なく強いから……。あの時のかな兄は『イグ ス』みたいなものだから……」

(部屋に戻ってから全員が見たものは、頭を痛そうに抱え込んでしゃがんでいるロロツトと、完全に気を失っているであろう、頭から白煙を噴き出している真琴、そして明らかに別次元のオーラを纏っている感じがする奏だった)

そして翌日のテスト。

一時間目は数学。

シャーペンが机の上をカリカリと走る音に混じって……

カカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカッ！！！！

尋常じゃないほどの音を上げるやつがいた。その内の一人は俺だ。

後は……

S i d e L o l o t t e

何これ、昨日のに比べれば簡単じゃない。こんなの20分もあれば全部解けるわよー。簡単過ぎて欠伸が出るくらい。

(ロロツトもまた、奏並の速度でペンを走らせていた)

S i d e
S a g g i r i

(そして沙霧はといつと・・・)

「・・・・・・・・」

(もはや手は見る事が出来ず、視認出来るのは唯一、質量のある手の残像だけだった・・・)

(何が彼女をここまで変えたのか、それはまた、後に語るとしよう・・・)

・・・） はんのうがない ただのしかばねの ようだ）

（真琴は大絶賛撃沈中であつた。今取り組んでいた問題はただの連立方程式）

(二時間目、理科・化学)

Side Kanade

・・・なるほど、最初の問題は『周期表穴埋め問題』か・・・

「丁寧に簡単などころと難しいところを別々に抜いてやがらあ・・・

『問1以下の周期表の欠落部を順に埋めよ』

空いていたのは簡単などころで4のBe、11のNa、19のK。

ただ、難しいのは後半部分で・・・

・・・空いてたのは35のBr、55のCs、ランタノイド部分の61のPm、85のAt、アクチノイド部分の100のFm、そして極め付けには113以降完全欠落。最後の解けるやつ、普通はいるか？

ま、分からなくもないけどね・・・

えーと、面倒なのから片付けていくか。・・・113は・・・ウン
トリウム、英語表記は『U n n t r i u m』で元素記号はU
t・・・っと。

(案の定、最後の118に対しては、正答を書いたものは殆どいな
かった)

（おまけで真琴はとらじゆん・・・）

「・・・・・・・・」

（ついに頭から白煙を噴き出していた・・・）

二日目テスト終了後・・・

「今回の科学のテスト落とす気満々だったって絶対!!」

「周期表なんて覚えられないよー!!」

クラスの女子からは化学担当の教師に対する怨嗟の声があがっていた。

「・・・かな兄問題解けたの・・・？」

「余裕だけど？」

「あら、奇遇ね。アタシも解けたわよ？」

「ほーう？んじゃあ元素記号115は？」

「ウンウンペンチウム、元素記号Uup。じゃあ元素記号117は？」

「ウンウンセプチウム、元素記号Uusだ。」

「・・・ちっ、やるじゃない・・・！」

・・・周りはずいていけないようで、呆然と立ち尽くしていた・・・

テスト最終日。残っていたのは英語、公民、なぜか商業だ。・・・
なぜ商業を？

ちなみに光景は全く一緒。べ、別に作者が面倒だから省略したわけ
じゃないからな？・・・うわ、自分で言ってる気持ち悪くなっ
た・・・

そして二日後。

「先日の試験の結果を渡す。．．．しかし、お前らはどうしてここまで出来が悪い．．．？」

千冬さんのため息にクラスが危機に陥った。

「ま、まさか私赤点取っちゃった!？」

「うえーん!あの問題のせいだよおーっ!！」

「この世界に神はいないっ!！」

「・・・一応言っておくが、赤点はないから安心しろ。・・・出来は非常に悪いがな。だが、逆もいた。それも、二人な。」

出来の悪い奴の逆、つまり出来のいい奴、ということだ。

「二崎、それに神崎。全教科満点を取ったお前らだ。・・・少しはあいつらを見習えよ?特に中崎とオルメスはな。」

『づぐっ・・・』

そして、テストが返された。

「・・・しかし沙霧って凄いね!。全教科百点って・・・」

「ねね、どうしたらそんな点が取れるの?教えてよ!」

「・・・それは・・・」

『それは!?!』

「・・・愛の力」

・・・沙霧、今のご時世、それが理由として罷り通るわけないだろうが・・・

「ぎりぎり黒点だったあゝ!!」

「全く・・・何でこんなこといちいちやらなきゃいけないのよ・・・
!別に赤点だって夏休みを普通に過ごしてもいいでしょ!？」

真琴、ロロツトは無事通ったみたいでよかった、と思う。

定期試験第一回目 結果

奏、沙霧・・・全教科満点、文句なし

リース、シャルロット・・・奏らまでとは言わないが、優秀な成績
第・・・成績的には上の下と中の上の境界

一夏、オリヴィエ、ラウラ、セシリア・・・殆ど真ん中
ルティア・・・現代国語、英語でかなり足を引っ張ったものの、真
琴・エリイ・ロロットに比べれば遙かにマシな状態
エリイ・・・赤点ではなかったが、数学がかなり足を引っ張っていた
真琴、ロロット・・・かなりきわどいラインに存在。下の下なんて
当たり前

おまけ

鈴・・・一夏らと同列
ルシエラ・・・科学のあの問題さえなければ全教科満点だった

45 テスト!! (後書き)

まず、次回はキャラ紹介その4行きます。本編はお休み、ということ。

「(奏)で?いつものあれやるんだろ?」

はい、いつものあれです。『一問一答』。では・・・

Q1・エドワード・ニューゲートさん

『ある日目が覚めたら、真琴、オリヴィエ、ルティア、シャルロット、ラウラ、沙霧、ロロットの七人の心と体が入れ替わってしまいました。どんな組み合わせが一番怖いですか?』

「(奏)・・・オリヴィエの体にロロットの心・・・それが一番怖い・・・気がする・・・」
「・・・なるほど・・・アリアですね・・・」

Q2・エドワード・ニューゲートさん

『どんな組み合わせが一番相手ににくいですか(例 体：ルティア 心：沙霧)?』

「(奏)この例えがもはや相手にしにくい気がする・・・。それ以上なのは・・・体：ルティアで心：ラウラ・・・か?」
なぜ?

「(奏)・・・なんつーか・・・心が沙霧だったら性格が大胆になったルティア、って思うただけけど・・・ラウラだと・・・なあ?」
・・・この変態め・・・

「(奏) 変態違うわっ!!」

Q3・エドワード・ニューゲートさん

『自分(奏)、リース、エリィ、華奈多、三城姉妹、ロロットを動物に例えると?』

「(奏)・・・そうだな・・・」

俺：猫(俺性格結構気まぐれだと思っし)

リース：鳩(・・・なんだろ、そんな感じがする)

エリイ：猫(理由は俺の時と同じ。というより俺より自由気ままな感じがするからな)

姉(華奈多)：オタマジャクシ(それで十分)

燦華：ペルシャ猫(なんつーか・・・あいつ自身は飾らないのに飾ってる雰囲気があるんだよな・・・)

夜子：犬(あいつ結構俺に甘えてくるからな・・・)

ロロツト：虎かライオン(・・・雰囲気・・・なあ?)

・・・だ。」

華奈多、哀れ!

Q4・エドワード・ニューゲートさん

『34話で華奈多と真琴の喧嘩を仲裁する時、何とささやいたのですか?』

「(奏)『全生徒の前で二人の恥ずかしい過去を全て公に晒す』と言った。」

恥ずかしい過去、というのは本当に恥ずかしい過去で、二人の心を木端微塵にしまいかねないので伏せておきます・・・

Q5・俊さんから

『現状恋人を作る気が無いでしょうけど、ヒロイン達の中で結婚しても良いと思ってるキャラは誰ですか?』

「(奏)・・・かなり難しい質問来たな・・・というか質問今回多くないか?」

気のせいですよ。では、答えは・・・?

「(奏)・・・とりあえずないと言えるのは真琴だな・・・あ

れは結婚したら結婚したらで色々大変そうだし……。それと沙霧だ。付き合った時点で何もかも搾り取られそうな気がする……。その逆はというと？

「(奏)……ルティアか……シャル……。か？」
なぜ？

「(奏)……あの二人は俺と相性がいいような気がしてな……。……だそうです。」

それで、次回……。というか#46のゲストは……。次回予告で出た人です。彼女がメインなのでそのまま出てもらおうかと。

ついでに面倒なので#46の予告もしちゃいます。

＼#46予告＼
ある日のこと。

一人の少女が焦っていた。

その原因は己の意中の相手に対し、他者に比べて自分が何もできていないことだった……

#46 焦燥のラウラ

少女の焦りが大事件を生む・・・

「(沙霧)・・・どうぞ。最後の方は『プロジェクト・ヴァルキリ
ー』についてもうちよっと切り込んだ内容が載ってます・・・」

o t h e r キャラ設定などその4

） キャラクター編 ）

N A M E：神崎 沙霧

性別：女

身長：150.0cm

体重：「・・・秘密。」

華奈多が拾った少女その4。

口数が少なく自分から話そうとしないためにクールで人見知りな印象を受けがちだが、実は口数が少ないのは話すのが苦手なだけで見知りではなく、超がつくほど天然少女。そして不思議少女。

髪は漆黒で長い。首のあたりで縛っているが、それでも結構長い（解いた場合床に5cmほどつく）。

スタイルの良さは華奈多のお墨付き（ルティアほどではないが）。箒とルティアのちょうど中間くらいのスタイル。

アプローチは後続なのに一番行っている。しかも結構過激。

好きなものは無論奏、そしてサーモン（なぜかそこだけ奏と被っている）。嫌いなものは奏に対して敵対する人、山葵、浸かるくらいまでに張った水（何故か恐怖心を抱いている。よって海も砂浜までが限界。見ることでだけは別に平気）。なので普段大浴場は使わない。苦手なことは水泳（前述の水嫌いに影響）、お酒に滅法弱く、匂いだけでもあつさり酔っ払う。酔った時の行動はルティアと同等、酷い場合はそれ以上。

I S 判定は A A。

I S は『リバレーティング・ローズ』。

一人称は『私』。奏を呼び捨てにする。奏と自分の関係を言うときは必ず『自分が嫁だ』と言いつらす。

C V：早見 沙織

代表作：それのおとしもの イカロス（戦略エンジニアロイドタイプ
『Ikaros』）

神のみぞ知るセカイ（一期・二期共通） ハクア・ド・ロ
ット・ヘルミニウム

NAME：三城 燦華

性別：女

身長：155.9cm

体重：「・・・えと、秘密だからね？」

奏の中学時代の同級生であり友人。奏との恋愛関係はない。

実家が小さなIS工場で、ISのパーツや修理、追加装備や追加装甲の開発を受けている。親のモットーが『受けられる仕事は全て受ける。その仕事は素早く、決して手を抜くことなく最高傑作をお届する』。そのモットーは娘にもすっかり受け継がれている。

髪は黒髪でポニーテール。前髪は星型のヘアピンで留めている。

性格は大人しくて優しい。だが、開発になると真面目になる。集中力が凄い。

好きなことは機械弄りとIS装備開発、料理。苦手なことは水泳。メカニックとしての腕前は、彼女の師でもある親も絶賛するほど。一週間もあればISの銃火器系装備の開発を終わらせられる。

CV：高橋 美佳子

代表作：DOG DAYS レベッカ・アンダーソン（ベッキー）

緋弾のエリア 星伽白雪

NAME：三城 夜子

性別：女

身長153.4

体重：「内緒だよ！」

燦華の妹。14歳。

髪型は『魔法少女リリカルなのはA's Portable』の『星光の殲滅者』黒髪版。

性格は活発で物怖じしない。ただし、奏限定で甘えん坊に（恋愛感情は無い。兄妹的感覚）。

好きなことは姉と同じく機械弄りと開発。料理は苦手。欠点は興味移りが異常に早い。その分技術習得も早い。

メカニックとしての腕前は姉に劣るものの、発案の奇抜性と実用性は三城家お墨付き。

何故か八極拳を会得している。

CV：倅月 美和

代表作：MELTY BLOOD 有間都古

NAME：ロロツト・オルメス（Holmes）

性別：女

身長：「万年142cmよ！！文句ある!？」

体重：「はあっ!？言うわけないじゃない!!」

奏が洋上撃墜し、救助したエピオンの使用者。

性格は『緋弾のアリア』の『神崎・H・アリア』そのもの。髪の色が金髪で見た目がルティアそっくり。ツインテール。

恋愛にはほとほと弱く、簡単に顔を赤くしたり物凄いテンパったりカミカミになつたりムキになつて反論したり（例：『恋愛なんてどうでもいい!そんな無駄なものしたって何の得にもならないじゃない!そんなくだらないものなのが良いのか全っ然わかんない!!』（結構早口））。

体は幼児体型。身長は自称『万年142cm』。

口癖は『バカ』『風穴開けるわよ!？』など。

正体は『プロジェクト・ヴァルキリ』によつて生まれた、識別番号0034。『失敗作』と言われ、ルティアを敵視、後に和解。

ゼロを完全に扱うことが出来る現時点唯一の存在・・・だったが、奏がゼロを完全覚醒させたため、その立ち位置が危うかったりする。苗字の由来は、彼女が好んで読んでいた本が『シャーロック・ホームズ』ものだったため、フランス語読みの名前を選択した。名前はそれに関係して。名付け人は奏。

ゼロを扱う故に理数系には非常に強いが（数学・理科は基本満点、奏に匹敵するレベル）、国語や社会（地理・歴史・公民すべて）は完全にダメ。今までそういう勉強をしていなかったために漢字が読めないから。なので、そういう所はバカ。

IS判定はSS。

ISは『セグエンテ・ゼロ』。

一人称は『アタシ』で、奏は色々な呼び方をする。一例が『アンタ』『バカ』『奏』。

CV：福原 香織

代表作：らき すた 柊つかさ

それのおとしもの アストレア（局地戦闘用エンジニアロイ

ドタイプ（デルタ）『Astraea』

イメージキャラクター：髪型&口癖&特徴・・・『緋弾のアリア』、『神崎・H・アリア』

姿・・・『魔法少女リリカルなのは』、『

フェイト・テストロツサ』（よりも胸が小さくなった）

華奈多のCV：近藤 佳奈子
代表作・・・BLAZBLUE ノエル≡ヴァーミリオン

） IS編 ）

リバレーティング・ローズ

沙霧の専用機。開発者は華奈多。待機状態は前髪のヘアピン。意味は『解放の薔薇』。

第四世代型。様相はまるでフリーダム+ストライクフリーダム。

武器

スレイプニル・アロー：少し追尾性能を持った弓矢。追尾性は上下左右に三十度程度。

グングニル：シールドバリアを削る能力に非常に優れた槍。

インフェルノキャノン：奏の高圧縮粒子砲を無反動化・威力向上させた腰部二連装レールガン。その分のチャージ時間がかかる欠点を抱えるものの、それを補う性能を持つ。

ストライクショット：肩部の二連装砲。実弾で高威力。連射式には向かないが、単発の威力は申し分ない。

スペリオルビット×12：剣・銃・盾の性能を全て持ったビット。

その時その時の指示によって行動・機能を決められ、縦横無尽に飛ばすことが可能。

単一仕様能力：真紅ノ夜想曲^{クリムゾン・ノクターン}

全武器性能を極限まで向上させる禁断の能力。発動時は白と青の二色だったボディカラーが黒と赤に変わる。

強化状況

スレイプニル・アロー：追尾性能が完全追尾になる。

グングニル：投合時の速度が大幅上昇、シールドエネルギー消滅能力を持つ。ハイパーセンサーによるロックオンをした場合、『当たった』という結果を出してからダメージを与えるという状態が発生する。

インフェルノキャノン：威力が極限まで向上。

ストライクショット：連射式対応可になる。

スペリオルビット：ビットの移動速度が最大まで上昇。

代償として、能力の制限時間は四分、それを過ぎると全能力が最大にまで落ちる。途中解除すれば問題はないが、気付けば終わってるレベル。

Spec

造った華奈多ですら『やつちまったZe』と言いたくなるような攻撃能力を持つ。

セラフィムやブラッディ・ノワールに比べると速度は控えめだが、速め。シールドエネルギーも多め。攻守連立した超万能型のIS。武装も豊富。

名前の元ネタは『魔界戦記ディスガイア2』の『ロザリンド（ロザリー）』の『ローズリバレート』。

ヴァイス・ブリッツ

真琴用の専用機。待機状態はチョーカー。

類似第四世代型。

全体的に装甲は白い。

華奈多が『絶対に作るもんか』と言い張っていたが、奏の脅迫（とは言っても『アンタをもう姉さんとは呼ばない。赤の他人として扱うからな』と言っただけ）で渋々作ることにした。

ドイツ語で意味は『白き雷光』。

武器

サジタリウス：六五口径アサルトライフル。超遠距離対応アサルトライフル。奇襲にも使える。

ヘルゲートブラスター：ショートガトリング。中距離戦用18発装填。

スターダスト：五五口径のスナイパーライフル。現行IS史上最長距離対応のレールガンタイプスナイパーライフルで、装填も早い。シールドキャノンビット×12：防御と攻撃を兼ね備えたビット。起動させるときに命令した行動を自動で取る。

単一仕様能力：緋色ノ弾丸スカーレット・バレット

一撃一撃のシールドエネルギー減少量が向上、命中精度も大幅に上がる。かなり鬼畜な威力を誇るように。発動中はISのボディの色が赤く発光し、移動速度が格段に向上する。

欠点は異常なレベルの放熱をしてしまうため、長時間の発動が出来ないこと、発動後はクールダウンしない限り再度発動が出来ないということがある（一番手っ取り早いのは海に飛び込むこと。これで結構なクールダウンが可能だったりする）。

Spec

基本武装は全て射撃系。よって近接戦には非常に弱くなってしまっている。

速度は離脱などに関係するため速い部類に入る。その分装甲が薄く

なるため防御は低めだが、それをビットが補う形になっている。
開発の元ネタはストライクフリーダム。

セグエンテ・ゼロ

ロロットの専用機。待機状態はハート型の髪止め（何故か）。
世代不明。奏のセラフィムと同じ扱い。
悪魔をモチーフにしているため、全体的に雰囲気は禍々しい。機体は全体的に赤い。
ちなみに意味は『次のゼロ』、言い換えれば『次世代のゼロ』である。

更におまけで、ロロットからは『セグエンテ』とだけ呼ばれている。

武器

アイロンソード二振り：物理剣。幅が広い。

ソードロッド：連結刃を用いた鞭。予測不可能な攻撃を可能とするが、扱いは難しい。

ウイングエッジ：背部ウイングユニットにエネルギーを纏わせ、剣として扱う攻撃。

二丁拳銃：唯一の射撃武器。拳銃なのでダメージは物理。

単一仕様能力：ゼロ（完全開放）

奏のセラフィムに積み重ねられているゼロとは違い、こちらは最初から完全解放状態のゼロ。

Spec

基本武装は殆ど近接武器。遠距離にはほとんど弱い。全性能は一般ISを大きく凌駕する。

ゼロを積んでいることもあり、渡り合えるのは奏のセラフィムだけ、

と言われている。言い換えれば『対セラフィム用IS』。

〈用語解説など〉

プロジェクト・ヴァルキリ

ISを操縦することが出来る女性の優れた部分のDNAを受精卵に組み替え、最強のIS操縦者を生み出すことを目的としたプロジェクト。

実験体暴走のための研究所爆発、という凄惨な事件のためプロジェクトは闇へと葬られたが、その跡は残り続けている・・・

セストナ姉妹との関係

彼女らはプロジェクト・ヴァルキリ に基づいて生まれた。

リースとエリィは試験管ベビー。識別番号はリースが015、エリィが016。

ルティアとロロットは特殊で（出生に関するデータはなくなっていた）、ルティアは結果として成功体、ロロットは失敗作という烙印を押される。識別番号はルティアが034、ロロットが0034。失敗作は0を一つ多めにつけることがプロジェクトでは義務付けら

れていた。

研究所爆発事故での生き残りはこの四人だけ。

other キャラ設定などその4（後書き）

・・・ふう。まさか前書きで『天からお塩』をしてしまうとは・・・

「（奏）・・・まあ、あれはどちらも悪いんだしな・・・。プロフ
イール公開したお前もだけど、風穴開けようとしたロロットも悪い
わけだし・・・」

次回は前回通り『#46 焦燥のラウラ』をお送りします。一問一
答ゲストはラウラです。

「（奏）・・・ロロット、大丈夫か・・・？」

トラウマはあるかもしれませんが・・・大丈夫です。死んではいま
せんから。

#46 焦燥のラウラ（前書き）

今回、かなり『アレ』な内容（過激発言、どこかで聞いたことあるような言葉の多発etc）が含まれております。

かなりはっちゃけた内容になっておりますのでご注意ください。

それと、ラウラが途中でキャラ崩壊しているのは目を瞑って頂けると幸いです。

4 6 焦燥のラウラ

Side Laura

「・・・」

・・・私はドイツ軍IS部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』隊長、
ラウラ・ボーデヴィツヒ。

・・・私は今、非常に焦っている。

何に焦っているのかというと・・・それは目の前にいる人物のこと
だ・・・

「・・・奏・・・」

「ちよつ、沙霧！お前な、抱きつくな！！」

「・・・や。」

「・・・むーっ！！」

「ちよつ、真琴もかよー！！離れる！！」

・・・そう、目の前にいる、たった今抱きつかれて困っている人物、
二崎奏のことだ・・・

私は将来、絶対によま・・・間違えた、夫をモノにすると決めた。
だが・・・

・・・だが、現実はどうだ・・・？モノにするどころか逆にどんどん引き離されていっているような気がする・・・

このままではいかん、他の奴等に取り残されてしまう・・・。その実感はしているのだが、行動しようにも行動が出来ない、ということも

あつて・・・だな・・・

私には今、何が出来るだろうか・・・

「・・・ええい、いい加減離れる！私の夫にいつまでもいつまでもべたべたとひつついているな！！」

「考え直したのはありがたいがそういう言い方は止めれ！！変な噂が広がったら大変なことになるから！！」

「・・・軍人と一緒にいさせられない・・・！一緒にいたら・・・奏が死んじゃうから・・・」

「いや、軍人だから必ず死ぬなんてことは無いからな・・・？」

「ということはやっぱり死んじゃう可能性あるんだよね！？」

「戦場に出なければ、な！！」

「安心しろ、夫は絶対戦争に出さない！」

「・・・むう・・・。なぜ夫はあれほど異性が周りにいてかつ誘惑もしているのにも拘らず誰一人としてなびかないのだろうか・・・？」

誰もいない屋上の椅子で一人、最大の謎を考えていた・・・

「・・・やはり愛が足りないのか・・・？あのキスだけじゃ物足りないというのか夫は・・・私のふぁ、ファーストキス・・・だったんだぞ・・・／＼／」

・・・なのに・・・なのに私に惚れないとは・・・

「まだ足りないというのか・・・？私はもっと先に踏み込んでおくべきだったのか・・・？」

一人で考えに耽っていたら・・・

「おや、そこにいるのはラウラじゃないかい？」

「・・・エリイか。」

夫の義妹、エリイが突然話しかけてきた。

「いやー、なんか一人でぶつくさ呟いていたからさー？めちゃくちゃ気になっちゃってねー？」

「・・・特別大きな問題ではない・・・」

「でもさ、そんなぶつぶつ言うくらいだったら大きな問題じゃないわけないと思うけどなあ？」

「っ！！」

・・・確信を・・・突かれた・・・!?

「ひよつとして・・・かな兄のこと？」

「っ!?!?」

・・・なぜ・・・バレた・・・!?

「・・・今バレた、って顔してるし。やっぱり凶星だったね。カマかけてみただけなんだけどね。正直に言ったら？」

「・・・仕方ない、正直に言う・・・」

私は今さっきまで考えていたことをエリィに包み隠さず話した。

「なるへそ。かな兄が何で異性になびかないのか、ってことかあ。」
「ああ。あれほど過激な接近をされているのにも拘らず誰かになびいたりするわけでもなく・・・だからな・・・」
「・・・ん～・・・ひよつとしたら・・・」
「思い当たる節があるのか!？」

エリイが開いた端末を思わず覗き込んだ。

「ひよつとしたら・・・かな兄こっちの属性あるかも・・・」
「ど、どんな属性だ!？」

エリイが開いている端末である動画を再生した。

同時に軽快な音楽が流れ始めた。

「・・・これに何の関係が・・・」

そう言った時だった。

《やらないか》
「っ!?!？」

な・・・や、『やらないか』・・・だと・・・!?

「・・・え、エリイ・・・一体これは・・・!?!?!」

「所謂・・・」アツ
!』とか『やらないか』と

か・・・まあ簡単に言っちゃえば男々?」

「・・・男・・・々・・・?」

「・・・んー、直接言っちゃえば・・・ガチホモ?」

「へっ……くしょいつ!!」

「かなちゃん、どうしたの？風邪？」

「……ずっ……誰かが噂でもしてやがるなきつと……」

「風邪なら寝てなきや……私が看るから……」

「わ、私がつ!!」

《 エス・．．オー・．．エス・．．オー・．．アツ

！！！！

「．．．／／／」

．．．お、思わず見入ってしまった．．．

「え、エリイ・・・／＼／」
「・・・じ、実は・・・あたしも初めて見たんだよねこれ・・・あ
はは・・・／＼／」

こ・・・こんな風習もあるのか・・・日本には・・・！？）（あり
ませんby作者）

「だっ、だとしたらおおお夫が、夫が変な趣味に走っている、とい
うことになるのか！？／＼／」

「そ、そういうことになるね多分！／＼／」

「原因はあいつか！？一夏なのか！？」

「いやーそれは断定できないけど・・・かな兄自身がその属性持つ
ている可能性は否定できないかも・・・」

「だ、だったらどうすればいい・・・！？どうすればいいのだ・・・
！？」

「・・・（違ったら面白くなるからいつか・・・）・・・だったら
ラウラが修正してあげればいいじゃん？」

「しゅ、修正だと！？」

「そーそー。最悪自分の体使ってさー？そうすればもし戻ればそれ
でOK、そのままやっちゃえば一石二鳥だと思うよ？」

「・・・そ、そうすれば・・・戻るのが・・・！？違ったとしても・
・私は一気に他の奴等よりも一歩どころか二歩、いや、三歩も四
歩も先に進めるのか！？」

「んー、そゆことかな？（ルーには悪いけど、最近ちょっとふにや
けすぎてから気を引き締めてもらわないとね）（・・・あ、そ
うそう。）」

「なんだ？」

「かな兄の気を引こうと思つたら強気は止めてしおらしく・・・というかなんか全て身を委ねてみるようにしてみたらどうかかな？どっかで立ち読みした本に『そうすれば男は皆イチコロだぜっ！？』なんて書いてあつたし。」

「そ、そうか、そうすればきつと・・・！」

私はもういてもたってもいられなくなって一目散に走り始めた。

(さーで、ルーはどう動くかな？もしラウラが先進んじやったら焦るかもね〜・・・というかゴメンねかな兄、華奈多姉から『さつさと奏の甥・姪の顔見せる！さもないと断罪のエクセキューションだぞ！？』って脅されてるからなあ・・・)

(1001室前)

・・・よし、夫はいない・・・。ロロツトは既に部屋が変わって沙霧チャンスと同室になった・・・そして二人の部屋もここから遠い・・・今が好機だ・・・！

まずは・・・部屋を改造するか・・・！外に音が漏れないように・・・防音対策を・・・！

S i d e K a n a d e

「ふいーく、食った食ったく・・・」

「それにしても・・・ラウラどうしたんだろっね？部屋にもいなかったし食堂にも来なかったし・・・」

「どっかでなんかしてんじゃないの？鈍った腕を取り戻すためにアリーナに籠ってるとかさ？」

俺、シャル、鈴というちょっと珍しいメンバーで食堂で飯食って戻

つてきていた。

ちょうど部屋を出た時にシャルと偶然会い、鈴はさらに階段を下りた先でばったり会った。

「しっかし珍しいわね〜?」

「・・・なんだよ?」

「いや、アンタの周りっていつも沙霧か真琴かオリヴィエがいたはずなのに・・・今日一人もいないじゃない。どうしたのよ? 喧嘩でもした?」

「皆予定が入っちゃったんだって。」

「それこそ珍しいわね・・・」

談笑しながら戻っていったら・・・

「あら、奏君じゃない。」

「ルシエラか。今から飯か?」

「そんなとこ。それよりも・・・奏君、今日なんか部屋に業者でも呼んだ?」

「・・・呼んでないけど?」

「そう?なんか部屋から工事音がしたような気がしたけど・・・」

「・・・忠告として受け取っておくぜ・・・!」

「・・・気をつけてね。」

ルシエラから『部屋から工事音がした』という情報を聞いて、少し

身構えることにした。

「奏・・・気をつけてね・・・」

「何かあったらすぐ呼びなさいよ！」

「・・・おう、頼りにさせてもらっぜ・・・！」

シャル・鈴と別れて一人部屋の前に立つ俺。

ロロツトもいねえし、呼んだとしてもシャルや鈴がすぐ来れるわけがない・・・

「・・・俺が耐えるしかないな・・・」

俺は意を決して部屋に入った・・・時だった。

ガチャンツ！！

「っ！？（オートロック！？この部屋、普通に鍵だけだった筈だが！？）」

・・・こんな所で怯んでいる暇はない・・・！奥に行って真相を確かめない・・・

奥に進んでみたら、何やら怪しい工具箱やら何かの作業痕跡がそんなじよそこらに見られた。だが、何の作業をしていたのかは全く分からない。

・・・脱ぎ散らかされた服・・・人の形に盛り上がった布団・・・
誰がいるな・・・

「・・・誰だ・・・？」

バサッ（ 奏が布団を剥ぎ取った音）

ドタドタドタ（ 奏が必死になってドアに向かって逃げる音）

ガンッ！（ ドアにオートロックがかっているため出られなくなっ
てドアにぶつかった音）

なんでラウラがいるんだよ！？それも裸で！！

（現在奏はパニック状態で、オートロックがかけられていることも
忘れてドアを開けようとするが開くわけない）

「ん……」

隠れる場所、隠れる場所、隠れる場所……!?

「……奏……か……」

「ああそうだよ俺だよ！何でお前は俺の部屋に裸で……つか服脱ぎ散らかしてベッドで寝ている!？」

「……だって……」

……いつものラウラと違う……?

「……ラウラ……?」

「な……なんだ……?」

「……熱でも出たか?」

「そ、そんなことは……ない……//」

……おかしい。明らかに変だ。

「……ラウラ。」

「な……なんだ……?//」

「正直に言え、何があった?」

「そ、それは……その……//」

……何が原因か聞きだせば分かると思う……

「か、奏が・・・」アツ
「！！！！」が好きな男だ、と
聞いて・・・」

「・・・待て、どこからそんな嘘情報を仕入れた？」

「・・・違うのか・・・？」

「違うに決まってるだろうがよ・・・一体何処の阿部さんなんだ？」

「・・・よかった・・・」

「・・・何があった？」

「っ！！・・・そ、それは・・・その・・・」

どうやら『俺』アツ
「！！」『好き』情報（明らかに誤報）が
原因だということは分かったが・・・

「奏が・・・奏がそう言うのが好きだから・・・私達を見てないん
じゃないか、と思ってな・・・」

「・・・『見てない』がどういうことかの意味は知らんけどな、確
実に言えることは俺は『アツ
！！』『じゃねえからな？』

「・・・そうか・・・なら・・・」

「・・・ならってうおっ!?!?」

ラウラに腕を引っ張られてベッドに押し倒され・・・マズい！！

俺は慌ててシャルにプライベート・チャンネルでSOSを発信した。

《シャル！！シャル！！頼む今すぐ助けてくれ！この後俺を殺して
くれてもいい！すぐにドア突破して助けに来てくれ！！》

《ちよつ、奏！？どうしたの、凄い慌ててるけど！！》

《このままだとラウラに何されるか分からねえっ！！急いでくれ！！》

「ラウラ、ストップ！何する気だ！！」

「・・・何って・・・子作りだが？」

「よし今すぐ話し合おう。それが無理ならワールドデストロイヤーな？」

「今の私には何も効かない！！奏！お前と子供を作るまでは！！」

「これが戦場だったらかつこいい台詞だったよこん畜生っ！！」

「・・・万事・・・窮す・・・か・・・！？

「奏！！大丈夫！？ラウラに何もされてない！？」

「シャルか！！すぐにドア吹き飛ばしてくれ！！」

「くっ・・・もうシャルロットが来たか・・・！ならば強硬手段を・・・！！」

「さ・・・せる・・・かつ！！」

最後の砦のジャージだけは・・・ジャージだけは死守する・・・っ！！

「ええい、大人しくジャージを脱がせる！！」

「脱がせるかこのバカっ！！」

(一方外では・・・)

Side Charlotte

・・・うん・・・急がないと奏が危ないのは分かるんだけど・・・
どうすればいいのかなあ・・・

・・・今回は仕方ないよね!! うん、仕方ない!

「グレー・ステール灰色の鱗殻・・・! せえ・・・のおっ!!」

ドゴオオオオオンッ!!

「奏! 大じよ・・・」

・・・うん、言葉が出なくなつた。

だつて・・・

ぱつと見たら奏が今ジャージを下ろそうとしてるように見えるんだ
もん……

「……もう来たか……！」

「……今だっ！」

「なっ！しまった！！」

一瞬の隙を突いた感じで、奏がラウラの体の下を蛇のように抜け出てきた。

「……ありがとなシャル……隙を突いてくれて……」

「ねえ……奏……？」

「ねえ……奏……？」

「……は、はい、何でありませうか？」

……突然シャルが黒いオーラを纏った……気がした。

「ラウラと何をしようとしたのかなあ？あの助けを呼ぶプライベ
ート・チャネルは演技だったのかなあ？僕にやろうとしていたのを
見せつけようとしていたのかなあ……？」

「そんなことは無いと断じて誓う！もしそんなことがあったら俺は
今すぐにもそこから飛び降りてみせるくらいだからな！？」

「ふーん……」

ああ、シャルが全然信じてくれない……

「シャルロット、喜べ。奏は『アツ　　！！』な男じゃ「バカ

！それ以上変な噂を立てるようなことを言つな！！」「ふがふが……

「……え？」

「今のは忘れる！関係ないからな！？変に考える必要ないからな！
？」

一体何があったらこんなことになるんだよ畜生……！

「・・・ということだ。今からついでさせるかっ!!」なぜだ!?

「ダメに決まってるよ!!」

「そうだ、シャルの言うとおりだぞ!!なぜもひつたくれもあるか!!」

「ほら、服着て部屋に帰るよ!!」

「いやだ!私は絶対に奏と・・・!」

駄々をこねる(表現自体に間違いはない。実際に駄々こねてたし)ラウラに無理やり服を着せて引き摺るように連れて部屋を出ていったシャルに今回ばかりは感謝しようと思った。

S i d e C h a r l o t t e

「・・・」

僕達の部屋に戻ってきてから、ラウラは仏頂面のまま。無理矢理部屋を出されたことが原因だろうと思うけど・・・

「ラウラ？あんなことはダメだって誰かに聞かなかった？」
「・・・知らん・・・」

．．．どことなく拗ねているような気もした。

．．．でも．．．奏がもしラウラが好きだったら．．．あのまま．．．

「．．．っ！な、何考えてるんだる僕．．．／／／」

．．．きょ、今日はすぐ寝よう！うん、それがいい！一番だ！

S i d e L a u r a

・・・なぜだ・・・なぜ邪魔が入った・・・！

あのまま誰も来なかったら私は・・・！

「・・・まだ諦めたわけじゃ・・・ない・・・すう・・・」

(昼間の作業や先程の大騒動の結果、強い睡魔に襲われたラウラは、その睡魔に抵抗することもせずあっさりと眠った)

S i d e E l y

「・・・ああ・・・どうしよ、どうしよ・・・このままだとエクセキューションが最悪天からお塩だああ・・・」

（シャルに引き摺られて部屋を出てきたラウラを見て、エリイは大絶賛パニック中だった。原因は一つ、華奈多からの脅迫である）

・・・まあいいや。アタシは出来る限りのことはしたもん。何か言われても全て華奈多姉の責任に押しつけてしまえるからいいもん・・・！

4 6 焦燥のラウラ（後書き）

（次回予告）

朝起きたら、大変なことが起きていた。

全員が最初に口に出た言葉が『アレ、この部屋どこ？』

一体何が起きたのか・・・？

次回、# 4 7 心体交換（原因は華奈多（バカ））・・・！？

奏は一体、この事態にどう立ち向かうのか・・・！？

というわけで、今回は前『一問一答』にきた質問をリスペクトする形でやっていきます。お楽しみに。そして『一問一答』。

「（奏）次回がまたトラブル臭が漂ってるな・・・」
では。今回はゲストもいますし手短に。

Q1・俊さんから

『朝起きるとベッドにネコミミとネコシッポを着けたシャルとネコミミとネコシッポが着いたオリヴィエとリスミミとリスシッポが着いたルティアとイヌミミとイヌシッポが着いた沙霧と黒いウサミミと黒いウサシッポが着いたラウラが何故か全員二頭身で寝てました。起きた彼女達が甘えて来たら誰を可愛がりますか？』

「（奏）・・・あのな、これを決めろってどれだけ俺を困らせたい

んだ？決められるわけないだろこれ・・・」
で？どうするわけで？

「（奏）・・・全員可愛がる・・・かもな。」
では次。

Q2・エドワード・ニューゲートさんから

『奏が考える、一夏を振り向かせる方法』

「（奏）・・・なんだそりゃ？」

単純にもしお前さんが女性だったら？ということ考えて、ということですよ。

「（奏）・・・あれは・・・なあ？唐変朴・オブ・唐変朴ズなあいつだぞ・・・？」

それをどう落とすか？ということですよ。

「（奏）・・・一気に最終手段でやるか・・・それともかなり直接的な言葉で言うか・・・」

・・・だそうです。次奏に対してはラスト。

Q3・エドワード・ニューゲートさんから

『奏の知り合いの女性すべて（オリキャラ、原作キャラ問わず）を、探偵オペラ ミルキィホームズ』のキャラに当てると、誰が誰になると思います？』

「（奏）『ミルキィホームズ』って・・・あれか？あの・・・主人公が・・・えつと・・・あの四人組のあれか？」

その四人組ですね。シャーロック、ネロ、エルキュール、コーデリアの四人です。性格で言うとシャーロックは天真爛漫、ネロはクールだけど自分の欲望に忠実、エルキュールは引っ込み思案で恥ずかしがり屋、コーデリアはしっかり者だが短気・・・という感じです。
「（奏）・・・それを考えると・・・」

シャーロック：真琴

ネロ：沙霧

エルキュール：ルティア

コーディネリア：セシリア

「・・・と言った感じか？殆ど性格イメージでかぶせてみただけ
ど。」

とのことです。ではまず先に奏には出ていってもらって・・・

「（奏）だと思ったよ・・・まったく・・・」

ということとゲストのラウラに来てもらいました。

「（ラウラ）一体何のことで呼ばれたと思えば・・・」
まあ質問が結構来てるので。

「（ラウラ）・・・まあいいだろう。」

Q1・エドワード・ニューゲートさんから

『奏ラバースの中で、こいつは一番の強敵だと思う反面、こいつと
仲良くやれそう（あるいは仲良くしてる）という人はいますか？』

この質問は俊さんからの質問とかぶってしまして、こちらの方が内
容が多かったのでこちらと合わせての質問とさせて頂きました。
「（ラウラ）強敵だと思っているのはシャルロットやルティアだ。
シャルロットは一時期夫と同居していたから好みを把握しているだ
ろう。ルティアはあの性格が無かったら一番の強敵になりかねない。

・・・な。」

ではその逆は？

「（ラウラ）仲が良い奴か？仲良くしてるぞ？」

・・・だそうです。あてにならない回答な気もしますが・・・

Q2・俊さんから

『奏の何処が好きになったのか？』

「(ラウラ)・・・それは・・・強いところとか・・・優しいところとか・・・色々なところが好きになった・・・／＼／」
最初はかなり敵対していたんですけどねえ？

「(ラウラ)い、今は好きになっただんだ!!」
はいはい。

Q3・俊さんから

『最終的にはドコまでイキたいか』

「(ラウラ)それはもちろん(自主規制)・・・できれば子も何人か欲しいな・・・／＼／」

自主規制が入るまでのことを・・・

「(ラウラ)わ、私だっというのは恥ずかしいんだぞ・・・／＼／」
だったら最後のだけでメればよかったものを・・・

「(ラウラ)黙れ!!／＼／」

・・・はいはい。次も連続ゲストです。次は奏の義妹でかなりのゲーマー、エリイに来てもらいましょう。質問受け付けてます。

#47 心体交換（原因は華奈多（バカ）・・・？（前書き）

今回は過去『一問一答』に送られてきた質問をリスペクトして作り上げた問題です。

いやー、エリイには悪い事をしたな、と。

そして再び天からお塩が・・・

#47 心体交換（原因は華奈多（バカ））・・・？

Side Ely

・・・あたしは今、ひっ・・・じょ
！に困っていた。

「華奈多姉、なんてものをあたしに送ってくんのよ・・・！」

送られてきたのは7つの薬。そして手紙。

【これ使ってー、皆をひっかきまわしておいてねー

あ、これ砕いた方が効果あるよー？ついでに言つと効果があるのは
深夜3時。それまでならみんな寝ちやうだろっから！】

・・・いつ作戦を決行しよう・・・

(昼)

「あ、あたしが飲み物持ってくるね!!」
「おー、頼んだー。」

一人だけになって飲み物を取りに行けた。
・・・作戦は一度きり・・・
・出来るのは今だけ・・・!

「ほーい、お茶持ってきたよー。あ、セシリアは紅茶でよかったよ

ね？」

「ありがとうございます、エリィさん。」

疑われないようにちゃんと渡していく。ちなみに関係ない筈・セシリア・鈴・リー姉・一夏・かな兄とアタシ以外には薬入りのを渡した。においをかいでみたけど無臭。・・・華奈多姉、一体どこまで高性能姉貴なわけ・・・？

そして、薬入りのお茶をそれぞれが飲んだ・・・

(翌日)

Side Charlotte?

・・・なぜ隣に私がいる・・・?

一体何があつた・・・!?

Side Laura?

・・・あり?なんで横にシャルロットがいるの?

え？なんで？

S i d e M a k o t o ?

・・・あれ？隣にオリヴィエがいる・・・？

僕の隣はラウラだったよね・・・？

S i d e O l i v i e r ?

・・・何でアタシの隣に真琴がいんのよ・・・！

S i d e L u t h i a ?

・ ・ ・ リースとエリイがいる ・ ・ ・

・ ・ ・ 変 ・ ・ ・

S i d e S a g g i r i ?

・・・え、ええ!?!? な、何でロロットがいるの・・・!?!?

へっうっ!?!?

S i d e L o l o t t e ?

・・・私の隣に沙霧がいる・・・!?!?

ちよっと待って、私の隣って真琴だった筈よ!?!?

S i d e K a n a d e

あゝ・・・平和だゝ・・・

・今日はきちんと授業あるけど・・・まだ6時・・・ゆっくりして・・・

『奏っ!!!』

「かなちゃん!!!」

「いきなり俺の安眠タイム邪魔すんなボケっ!!! 一拳に押し寄せて
どうした!!!」

そう、真琴・オリヴィエ・ルティア・シャル・ラウラ・沙霧・ロロ
ットが一気に迫ってきたのだ。

「どどどどどうしようかなちゃん!!! へへ変になっちゃった!!!」

「・・・ラウラ、お前がそう呼ぶなんて悪い冗談はよしてくれ・・・

」

「いや、私はこっちだ・・・」

「どう見てもシャルなんだが?」

「違う! 私はラウラ・ボーデヴィツヒだ!!!」

・・・さつきからシャルが『私がラウラだ』なんて言ってるし、ラ
ウラが『かなちゃん』って真琴しか呼ばない方法で俺を呼ぶ・・・

「よし確認した方が早いな。」

(以降、女性陣の台詞の前に状況を知らせてもらうために(体/心)
表示をします)

「……まず……真琴。」

「（ラウラ／真琴）んい。」

「真琴はラウラ……と。オリヴィエ。」

「（ロロット／オリヴィエ）ん。」

「オリヴィエはロロット……次、シャル。」

「（真琴／シャルロット）はい。」

「シャルは真琴……ラウラ。」

「（シャルロット／ラウラ）ああ。」

「ラウラがシャル……あーもう、めんどくさい！ルティア！」

「（沙霧／ルティア）……／／」

「……ルティアが沙霧……逆で沙霧は？」

「（ルティア／沙霧）……ここ。」

「その逆が沙霧……と……消去法でロロットはオリヴィエ、
ということか。」

「（オリヴィエ／ロロット）そう言うことになるわね。」

「……よ、ようやくノートに纏めれた……」

「……まったく……！いったい誰がこんなことをしでかしゃがったよ全
く……」

「（真琴／シャルロット）……今日の授業……どうしよう……」

「……無理に出ない方がいいな。今日ばかりは変に思われてしま
う可能性が非常に高い。」

「（オリヴィエ／ロロット）ほんと、いい迷惑よ……」

「（沙霧／ルティア）か、奏君……あんまり驚いてないね……」

「……さって、まずは連絡入れとかねえとな……」

とりあえず携帯で千冬さんに連絡。 . . . 諸悪の根源は分かっている。 『ヤツ』 しかいねえ . . .

「 . . . あ、織斑先生？二崎つすけど . . . 」
『 どうした？ 』

「 尋常ならざる事態が発生したので俺と中咲、レギンハルトにセストナ末、デュノアにボーデヴィツヒに神崎、最後にオルメス . . . 今日休みますんで。 」

『 . . . 『アイツ』絡みか . . . 』
「 その『アイツ』です . . . 」
『 . . . 仕方ない。今回だけだぞ。 』
「 今回で済めば御の字つすけど。 」

少し話して電話を切る。

「 一応休むことを伝えといた。 『尋常ならざる事態』で把握してくれる人で助かった . . . 」

「 (ルティア / 沙霧) . . . 奏 . . . 」
「 どうした、ル . . . じゃなかった、沙霧 . . . ? 」

「 (ルティア / 沙霧) 行くな . . . 一緒に行く . . . 」
「 あのな？外で誰かに見つかってみる？何言われるか分からねえぞ？ 」

「 (ルティア / 沙霧) . . . いいもん . . . ! 」
「 (シャルロット / ラウラ) . . . しかし、このままだと何も出来んな . . . 」

「 (ロロット / オリヴィエ) それもそうね . . . 。このままじゃ外

も歩けけないじゃない・・・」

「(シャルロット/ラウラ)・・・いや、私が言いたいのはそのじゃない。」

『(ロロット/オリヴィエ)&(真琴/シャルロット)(なに?)』

「(シャルロット/ラウラ)子d「禁句!それ以上言つな!」むぐむぐ・・・」

「(真琴/シャルロット)・・・あ、ありがと、奏・・・/」

「(オリヴィエ/ロロット)全く・・・発言に気をつけなさいよア
ンタ!」

「(ラウラ/真琴)・・・んー・・・」

「(ロロット/オリヴィエ)どうしたのよ真琴?」

「(ラウラ/真琴)・・・体が軽いなあって・・・」

「(シャルロット/ラウラ)真琴、貴様あつ!」

「(真琴/シャルロット)お、落ち着いてよラウラ!」

・・・なんちうカオス・・・

「(オリヴィエ/ロロット)・・・オリヴィエ・・・」

「(ロロット/オリヴィエ)・・・何よロロット・・・」

「(オリヴィエ/ロロット)・・・何で・・・私達お互い変わった
だけなのよ・・・!」

「(ロロット/オリヴィエ)・・・言わないで・・・!言っただけ・・・
悲しくなって・・・くるから・・・」

・・・さーて、俺は出かける準備でもして・・・

「オリヴィエ／ロロツト」というよりアンタ達！少しくらいそれよこしなさいよー！」

「（沙霧／ルティア）そ、それって・・・？」

「（ロロツト／オリヴィエ）その無駄についた胸の脂肪の塊のこと！！」

「ぶっ！」（ 奏が口に含んでいたお茶を盛大に噴き出した音）

「（沙霧／ルティア）しば・・・っ・・・／／／」

「（ルティア／沙霧）・・・脂肪じゃない・・・」

・・・脂肪じゃなきゃなんだ？駄肉か？

「（ルティア／沙霧）・・・今は私のじゃないけど・・・私のは奏のものだから・・・」

「（沙霧／ルティア）だ、ダメっ！そ、そんなにやこといわにやいでえっ！！／／／」

・・・沙霧があんなん言うことなかったから・・・斬新だな・・・

「・・・さって・・・今から締め上げに行くか・・・」

俺は携帯を取り出して、連絡を入れる。

対象は・・・

俺が一番考えうる、この事件の根源。

外出届を出して一時的な外出。

とりあえず相手の今を考えて、
大手を振るような場所じゃない所に
呼び出しておいた。

お、いたいた！奏ー！！

・・・来た来た。

「ひっさしつぶ」天んんんからああお塩おおっ!!」「りゅぐう
っ!？」

・・・決まった・・・

「出会い頭に『天からお塩』決めなくてもいいじゃんかーっ!!」

「前にエリイになに吹聴しやがった!？」

「えー？ただ単に『早く奏の甥か姪の顔見せる』って言ったただけだ
けど?」

「・・・今から選ばせてやる・・・」

「はい？何を？」

さて・・・地獄に突き落としてやるか・・・

「姉弟の縁を切るか！消えるか！土下座してでも生き延びるかあっ
！」

・・・いかん、某戦闘狂の声が出た・・・

「・・・いいもん、あの薬の解毒法教えないからいいもん・・・」

「……よし、国家IS委員会にでも突き出してやるか……」
「しめんなさい許してくださいもつしません許してつかあさああ
あああああいつ……!」

殆どシバく勢いで解毒薬を作らせ、さっさと帰る。

(・・・姉さんを甘く見たようだね奏・・・! 甘い・・・砂糖より
甘過ぎるよ・・・! この国家薬剤師免許も持つてる高性能姉さんを
甘く見過ぎているよ・・・!)

「・・・エリイ？」

部屋の前にエリイがドアを開けさせないように立っていた。

「・・・ああ、かな兄・・・」

「・・・どした？」

「・・・逃げて・・・」

「・・・は？」

「いいから逃げてえっ!!」

エリイが『逃げる』なんて叫んでる。・・・一体なんでだ？

「・・・酔っぱらいが・・・発生した・・・」

「・・・まさか・・・料理酒でか・・・!？」

一番考えられる事項・・・俺の部屋には料理用（本当に料理用だ。直飲みなんてことはしない）

「・・・いや、まだ逃げられねえ！解毒薬を飲ませるのが先決だ！」
「止めといた方がいいよ！！いろんな意味で死んじゃうから！！」
「（バアン！）解毒薬をm」（ルティア／沙霧）奏っ！」「おおおっ！？」

ル・・・じゃない、沙霧が飛び込んできた！？

「ほら、言わんこつちやない・・・」

「（オリヴィエ／ロロツト）・・・ったく、不用意にドア開けるからこつなるのよバカ。」

「（沙霧／ルティア）ん！！」

「ぐえっ！？」

「（真琴／シャルロット）か、奏！？」

「（ロロツト／オリヴィエ）・・・というかルティアの姉妹のはずの今の私が全っ然酔ってないって・・・」

「ちよ、お前ら、退けっ！」

『（（沙霧／ルティア）&（ルティア／沙霧））やーっ！』

「『や』じゃねえっ！！』」

こうなつたら無理矢理解毒剤を飲ませるしかねえっ！つか方法が何もなくは無い！酔っている時って大概記憶に残ってないって話だし

!!

「だったらまずこれ飲んでくれ!」

『(沙霧/ルティア)&(ルティア/沙霧)・・・飲んだら好き
なだけ抱きついていい・・・?』

・・・ごふっ・・・

「ちよ、かな兄!？」

「(シャルロット/ラウラ)衛生兵!衛生兵!!」

「・・・ま、まだだ・・・!飲めば・・・な・・・!」

「(真琴/シャルロット)奏、この薬って・・・
姉製作バカ今回の事件の解毒薬だよ・・・!」

「・・・携帯の履歴にも『姉さん』ってあるね。」

『(ルティア/沙霧)&(沙霧/ルティア)・・・!(ゴクリ)』

早っ!?

『・・・』

・・・とけ・・・た・・・?

「・・・はふう・・・」

「・・・嫌な予感・・・」

・・・こういつ時の『嫌な予感』はいつも当たるが定石・・・

「シャル！ラウラ！今すぐこいつら引き剥がしてくれ！！なんか目がやばい！！」

「（真琴ノシャルロット）・・・え？」

「（シャルロットノラウラ）・・・いや、言っている意味がよく分からないのだが・・・」

「嫌な予感しかしねんだよ！！」

「・・・あれ、ルーが・・・」

「（オリヴィエノロット）ちょ、なんで脱ぎ始めてんのよ！？」

「・・・あちゅい・・・」

「いや確かに夏だけどさ、そんなに暑い、なんて思わないよ？寧ろ涼しいというか・・・」

「う・・・」

「（ラウラノ真琴）確かに当たった！！」

「（ロットノオリヴィエ）縄！それが無ければ手錠でもいい！今すぐ縛って！！」

「（シャルロットノラウラ）それ以上やらせるか！」

「うーっ！！！！」

「ぐええっ！？」

俺の上で方向転換するな・・・

「・・・あ、かな兄がいろんな意味で落ちそう・・・」

「っ！！？」

・
・
・そして俺の意識は
・
・
・落ちた
・
・
・

翌朝。

「・・・全く・・・散々な目に遭ったわよ・・・」

ロロツトの憤慨も分かる。・・・一番散々な目に遭ったのは俺だといいた「奏・・・」いんだけどなあ・・・

本当に休ませてくれよ・・・

S i d e E l y

あの後、かな兄はラウラ達によって助けられて、とにかく大変なことにならなくて済んだ。

そしてあたしも『被害者の一人だ』という理由で事なきを得た。

- ……全ての原因は華奈多姉だし……いいよね？押し付けても……

47 心体交換（原因は華奈多（バカ）・・・？（後書き）

（次回予告）

夏休み前のある放課後、珍しく次女と三女が模擬戦をしていた。

最初は三女が押していたが、徐々に次女のターンになっていく。

あわや敗北、と思われた時・・・

次回、# 48 偶然の覚醒・地獄の鎌の黒き血（ブラッディ・ノワール・ヘルサイズ）

覚醒したのは、蝙蝠か死神か・・・

「（奏）・・・つたく、あのバカには毎度毎度困らせられる・・・でもそれが華奈多イズム。それを覆すことが出来るのは多分どこにもいない！」

「（奏）・・・はぁ・・・で、今回もやるんだろ？」

あ、今回はもうゲストに来てもらいましょう。

「（エリイ）うーっす。」

「（奏）・・・なるほど、今回は俺が退出する必要ないな。」
そう言うことです。ではいつものを。

奏編

Q1・エドワード・ニューゲートさんから

『華奈多さんは何時からブラコンになったんですか？ また、そうになった理由に心当たりはありますか？』

「(奏)・・・俺が小3の頃には既にブラコンだった記憶が・・・あるな。それ以前ははつきり覚えてねえんだよな・・・」
で、心当たりは？

「(奏)ない。」

「(エリイ)・・・まーたはつきりと・・・」

Q2・エドワード・ニューゲートさんから

『二人一組でIS戦をした場合、このコンビは厄介だと思っ組は？ また、こいつと組んだら絶対勝てる！！ と言う人は？』

「(奏)まず厄介だと思っのはロロット・シャル組だな。シャルは一度組んでるからこっちの手の内は分かってるだろうし、ロロットはゼロを積んでる。相方が誰であれ、勝つのは難しい・・・最悪無理、だな。」

「(エリイ)逆は？」

「(奏)・・・雰囲気的に言えば沙霧&ルティア・・・か？」
何故に？

「(奏)ルティアは・・・ほれ、俺に対して面向かって突撃できると思えねえし、沙霧は多分攻撃してこない。寧ろIS通しで抱きついてくる可能性が高いかもしねえ。」

Q3・エドワード・ニューゲートさんから

『奏が乗ってみたいMSとありますか？ また、他のメンバーに載せるとしたら、誰がどんなMSになりますか？』

「(奏)ウイングゼロカスタム、DX、ダブルオーライザー、デスサイズヘルカスタムに決まってるだろ！！」

「(エリイ)ちなみにあたしはガンダムmkVね。」

で、乗せるとしたら？

「(奏)・・・そうだな・・・」

真琴：ガンダムサバーニヤ

オリヴィエ：ガンダムレオパルドデストロイ

篤：ガンダムエクシア

一夏：ダブルオーガンダム

セシリア：ケルディムガンダム

シャル：ストライクガンダム

ラウラ：デュエルガンダムアサルトシユラウド

リース：Ex-sガンダム

ロロツト：ガンダムエピオン

鈴：ZZガンダム

沙霧：ストライクフリーダムガンダム

・・・だな。」

Q4・俊さんから

『無人島で食料以外何も無い状態でヒロイン達と二人っきりになったら如何します?』

「(奏)・・・どうだろ?とにかく生き延びることを優先するか?」

「(エリイ)そっちの方が堅実性高いかもね。多分沙霧とかラウラ辺りは壮絶な答えを導き出してくれそうな気がするけど・・・」

エリイ編

Q1・エドワード・ニューゲートさんから

『華奈多さんの言う「断罪のエクセキューション」とはなんですか? 奏の「天からお塩」とどっちが怖いのですか?』

「(エリイ)・・・(ガタガタガタガタガタ)」

「(奏)・・・トラウマ入ったなこりゃ。・・・えーと・・・姉さんの『断罪のエクセキューション』はIS模擬戦を強制的に行わせ、圧倒的な火力・範囲の砲撃を相手に一撃ぶちかまして一撃で落とすという方法・・・だとき。・・・で、優劣は多分付けられないと思う。・・・エリイ、戻って来い!」

「(エリイ)・・・はっ！・・・あははー・・・もうやだよエクセキューションもお塩も・・・」
俊さんの質問の『華奈多と奏、ドッチのお仕置きが一番怖いですか？』は、この回答を以て代えさせて頂きます。

Q2・エドワード・ニューゲートさんから

『あの後(46話)、どうなったんですか？』

「(エリイ)華奈多姉に全ての責任を押し付けてあたしは難を逃れちゃった」

で、あの結果が今回の『天からお塩』というわけです。

Q3・エドワード・ニューゲートさんから

『得意なゲーム、或いは好きなゲームは何ですか？』

「(エリイ)ゲームは全ジャンルそつなくやるよ？一応18禁もやったことあるし。」

「(奏)・・・よし、今から姉さん殺しに行ってくる・・・」

「(エリイ)・・・あー、あたしからやりたいって言ってたし・・・」

「(奏)止めなかったことに原因がある・・・！」

「(エリイ)好きなゲームはやっぱりスマ ラだよ！」

「(奏)DXだとピ ユーしか使わないし一方的なやり方しかしねえけどな。」

Q4・俊さんから

『自分と奏以外で一番ゲームが上手いのは誰？』

「(エリイ)さあ？」

「(奏)随分適当だなおい・・・」

「(エリイ)だって誰かがゲームしてるの見たことないし。見てもホントにかな兄だけだよ？」

「(奏)俺は一夏がやってるとこみたことあるけど・・・まあ、

お世辞にも上手いとは言えなかったけど。」

Q5・俊さんから

『エリイから見てロロツトってどう言う人物?』

「(エリイ)王道を全く逸れることのないツンデレを極めた人物だね!キング・オブ・ツンデレ・・・じゃなかった、クイーン・オブ・ツンデレだ!!そして希少価値を持った同士!!」

「(奏)・・・希少価値?」

「(エリイ)偉大な人は言ってたんだよー?『ひんぬーはステータスだ!希少価値だ!!』って。」

「(奏)・・・ああ・・・そう・・・」

Q6・俊さんから

『無人島で食料以外何も無い状態で奏と二人きりになったら何をする?』

「(エリイ)かな兄と被るかもしれないけど、手堅く生き延びれるように行動するかな?食糧探したりとか雨風凌げるところ探したりとか。リアルにモン　ンみたいで楽しいじゃん!?」

「(奏)・・・こういう奴だよ、エリイは・・・」

今回はここまで。いやー質問多かった。エドワード・ニューゲートさん、俊さん、たくさんの質問、ありがとうございました!シャルへの質問がありました、当人のゲスト出演までお待ちください。で、今回はゲストはいないんです。

「(奏)そりゃ助かるわ。」

たぶ「(????)ぶるあああああああああおっ!!」んぐうっ!?

「(エリイ)なんか来た!?

「(奏)・・・ピカチュウ?」

「(ピカチュウ)空間やら時間やらいろんな所を超越するチートな死神い・・・レオンハルト参上おおおおっ!!」

「（エリイ）・・・なんでゴツドヴォイス若本？」

「（レオン）気分。」

「（奏）・・・レオンハルトレオンハルト・・・あ、ひよっとして『レオン確率事象シリーズ』主人公の？」

「（レオン）そゆこと。同一作者内の小説コラボってことで次元ぶった斬って無理やり推参っ！てね。」

「（エリイ）わーひどーい。」

「（奏）・・・よくわかんねえけど次回はこの自称『チート死神』のピカチュウのレオンがゲストってことで・・・」

「（レオン）よろしくウツ！！」

「・・・一応言っておきますけど・・・奏まで乱立はしませんけど・・・立てたフラグはヤンデレが出来るくらい闇より深く立ち上げる奴ですよ、こいつは・・・げふう・・・」

「（エリイ）・・・次回は作者の代わりにあたしがもう一回出て進行するからねー。・・・作者大丈夫かなあ・・・」

4 8 偶然の覚醒・地獄の鎌の黒き血（ブラッディ・ノワール・ヘルサイズ）

今回はネタ満載！！いやー、エリイはネタに走らせると扱いやすい
！！

とりあえず飲み物は口に含まないように！！

後、最後は布石あります。

48 偶然の覚醒・地獄の鎌の黒き血（ブラッディ・ノワール・ヘルサイズ）

（第三アリーナでは、珍しい戦いが行われようとしていた）

「ね、姉さん……い、行きます……！」

「だっしやー！かかってこんかー！」

……アリーナで戦おうとしていたのはエリイとルティア。

珍しく姉妹が戦う、ということ結構賑っていたりしていた。

「そう言えばエリイのISってまともに見たことないわね……」

「エリイのISはルティアのに比べると遥かに性能は劣ってるよ。」

けどそれを補うくらいの大火力や攻撃手段を持って、ということが癖だったりするんだよね。」

「攻撃手段……？」

「基本は今手に持つてる槍と盾。いざとなったら拳で戦えるISなんだ、エリイのIS、『プロトタイプ・ヴァルド』は。」

「……プロトタイプ、ということは……リースのヴァルドの試験機、ということ？」

「そういふこと。」

ルティアの『ブラッディ・ノワール』は何度も見ているから分かる。けどエリイの『プロトタイプ・ヴァルド』は初めて見た……

「..」
「..」

そしてついに始まった。・・・やっぱりノワール速え・・・

「相変わらずノワール速いね・・・」

「ひよっとしたらセラフィムと同等・・・ううん、それ以上かも・・・」

「・・・あの時セグエンテは余裕だったけど・・・今はどうか分かんないわね・・・」

「というかエリイも凄いなだけど!?!」

そう、さすがに速さに翻弄されてはいるものの、エリイはある意味凄い反応で攻撃を受け流したり避けたりしている。

ただ・・・

「ふっ!」

「ところがギッチョんっ!!」

とうとうとうとうの傭兵の台詞が聞こえてくるのは気のせいじゃ
ねえな……

「本気で来なよ！ええ！？黒血さんよおっ！？」
「うっ……」

・・・どうしてそんなすぐにガン　ムネタを引き摺りだしてこれるのが不思議で不思議で・・・

「というかエリイちっとも動いてないよね？」

「そう言えばそうねー。なんで？」

「・・・ひよつとしたら・・・ルティアの疲れを狙ってる・・・」

「・・・確かにあの速度を捉えるなら敢えて疲労させてそこを突いた方が決着は着きますわね・・・」

見た感じルティアは上下左右自由自在に動いているが、エリイはちっとも動いていない。というかその速度に合わせて回避、あるいは防御をしているくらい。

「・・・あ、ノワールの速度が落ち始めてきた・・・」

「・・・確かに落ち始めてきたな・・・」

まだ完全に、とは言わないけど、速度が落ち始めてきた。やっぱり速すぎて体がついていけない、ということもあるらしい。

「くうらええいつ！震天裂空斬光旋風滅碎神罰活殺撃いつ！！」
「うあつ！！」

「長っ！！」
「え、え！？な、なんて言ったの！？」
「ありや・・・『震天裂空斬光旋風滅碎神罰活殺撃』だな・・・」

『・・・』

・・・全員がきよとんとしている。・・・無理ないか、ありや知ってる人は知ってて知らん人は知らんネタだかな・・・

「おらに追撃いっ！富 フラァッシユッ！！」
「あっっっ！」

「眩しっ!?!」

「目があゝ、目があゝっ!」

「かなちゃん・・・そのネタ古いのかどうか分からないレベルだよ・・・?」

・・・真琴に突っ込まれるとは!!

「・・・というか眩しかったのは変わらないけど・・・あねってただのパンチだったよね・・・？」

「・・・(やられる・・・!負けちゃう・・・!)(!!)」
「これで止めえっ!!!!」
「・・・っ!!!!」

「決着付いたね、こりゃ・・・」

「ルティアも結構頑張ったと思うんだけどね・・・多分クラッシュヤ
ー行くかも・・・」

『クラッシュヤ？』

・・・なんだそりゃ？

「見てれば分かるよ・・・。本当に酷い攻撃だからあれ・・・」

・・・どんだけ酷い攻撃なんだ・・・

「うっうっうっ」

「あたしの拳でえ……星になれえーっ!」

ドゴオオオンッ……!

『きゃあああつ!?!?』

「な、なんつー衝撃波……!」

「とうかなにあの連撃……!手が一切見えなかった……!」

「これが……クラッシュャー!?!」

アリーナはクラッシュャーの影響で一切切見えなくなっている。中
がどうなっているのか……決着は着いたのか……一切が分から
なくなっている。

けど、視界が開けた時、全員が目を疑った。

「……ルー……あなた……」
「……あれ……負けて……ない……？」
「……というか……ノワールが……二次移行してる……」
「……へうえつ!？」

「うーん……こりや死神様がお通りなさる？」

「もう一度……行きますっ!!」

「ちょ、おまつー!？」

「おー、エリイがペース乱され始めた・・・」
「なんか今ルティアのターンだよね・・・」
「凄い圧倒してる・・・というかもう眼に映らない・・・」
「・・・ダメ、もう目が追いつかない・・・」

(けど)

「へう　　っ!?!?」
「ルー……どこ行ってんの……?」
「は、速さが、お、おいつ、かな、きやうっ!?!」
「……早くしないと……逆にルティアが自滅しちゃうし……
はぁ……」
「へう　　っ!?!」

「ちょ、ルティアさつきから自滅ばかりしかしてなくない!？」

「二次移行したてでさらに速度も上がったんだろう、それにまだ追いつけていないだけだ。」

「・・・ラウラ・・・アンタ冷静に分析してるけど・・・ホントは悔しかったりしてる?」

「悔しくなどない。別に何とも思っていない。」

ああ・・・ルティアがさつきから事故って・・・ってこっちに来てる!？」

『離脱つ！！』

「ちよ、お前ら俺を置いて」へっう
ぶべっ……」

っ！！」

衝突。そして俺はまた意識がブラックアウトした……

S i d e I c h i k a

ルティアが思い切り事故つて奏に衝突……あれは痛いって……

「お、おい、大丈夫か……？」

「というか体勢が凄いわねまた……」

「……(ゴゴゴゴゴゴ)」
「……(じとー……)」
「……(むすー……)」
「……アンタらさ……ちょっとは自重というものを学習したら
べつなのよ……」

ロロツト、その言葉に俺は激しく同意したくなってきた……

「う……うう……へうえっ!?! / / /」
「まあ……奏は仕方ないよな……」
「……仕方ないわね……。普通だったら強猥で即刻風穴だけど……
気を失ってちゃね……」
「……か、奏君……ま、まだ、そ、そういうのは……早いよ……
/ / /」
『いや、押し倒してないから。』

……ロロツトと突っ込みが被った。……珍しいかもしれないけど、
思ったことは全く一緒だった。

「かなちゃんは私のだからー!!」
「違う!! 私のだ!!」
「私のだってば!!」
「うー!!」
「……とりあえず奏を避難させて……っど。」

シャルロットが奏を退避させて・・・

・・・あ、膝枕・・・

『シャルロット！！』

「わひゃあつ！？な、何かな！？」

「膝枕厳禁！！」

「反則だよ！！」

「・・・ずるい・・・」

・・・また奏争奪戦が繰り広げられた。

「・・・ふふつ。」

「・・・ルシエラ？」

「一体如何したのよ？頭おかしくなった？」

「いえ、特におかしくなったわけじゃないわ。ただ・・・」

「ただ？」

「面白いな、と思っただけ。」

何となく。ただ何となくだけど、ルシエラの笑みは新しい何かを見つけた嬉しさが浮かんでいるような、そんな感じがした。

(夜)

「……………」

色々痛いけど……まあ何ともないからいいか……

「さつて、テレビ……なんか世間はどう動いてるかな……ぶはっ！？」

テレビのニュースを見て、俺は思わず口に含んでいたお茶を盛大に噴き出した。

その内容とは……

ISを動かせる男子が二人現れた、というだけでも噴き出すのは当然だったけど・・・

その二人が・・・

俺の親友と小学校の時転校していった旧友ってどうよ！？

48 偶然の覚醒・地獄の鎌の黒き血（ブラッディ・ノワール・ヘルサイズ）

（次回予告）

衝撃のニュースがあつたその翌日、その本人達（+）は編入してきた。

彼らは奏にとって忘れることのできない存在。

次回、# 49 友との再会

友との再会は、誰にとっても嬉しきものなり・・・

「（エリイ）今回はまずネタのおさらいからだね。レオン、後よろ

し。

「（レオン）んい。

『ちよいさあつ！』 『ところがギツチヨンっ！』 『本気で来なよ！ええ！？黒血さんよおっ！？』・・・機動戦士ガンダムOOより、アリー・アル・サーシエス（最後は本来は『ええ！？ガンダムさんよおっ！』）

『くうらええいつ！震天裂空斬光旋風滅碎神罰活殺撃いつ！』・・・ティルズオブデステイニー2より、ロニ・デュナミスの技の一つ。たまに失敗版が出ることもある。

『さらに追撃いっ！富 フラマツシュツ！』・・・ひぐらしのな
く頃により、富竹ジロウ・・・というか正確に言えば『ひぐらしデ
イブレイク』での技の一つ、『富竹フラツシュ』

『目があ、目がああつ！』・・・ご存知のネタなのでこれは・・・
言わなくていいかも？

『だりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりつ！』『
あたしの拳でえ・・・星になれえーつ！』・・・『BLAZBL
UE CONTINUUM SHIFT?』より、マコト＝ナナヤ
のアストラルヒート、『プラネットクラツシャー』

『死神様がお通りなさる?』・・・新機動戦記ガンダムWより、デ
ュオ・マックスウエルの台詞『死神様のお通りだあ！』

くらいだね。今回の僕の出演はこれくらいかな？」

「(エリイ)だね。一通も質問来なかつたし。・・・認知度の違い
?」

「(レオン)・・・かもね。んじゃ、アディオス!!大次元斬!!」

「(奏)・・・うわ、完全に次元斬り開いていったよあいつ・・・」

「(エリイ)んじゃ、『一問一答』だね。かな兄祭りだわっしょい
!?!」

Q1・俊さんから

『馬鹿（華奈多）が送って来た薬が原因で奏が美少女（リリカルなのは）の高町なのは（似）にされてしまいました。次の日にならないと元に戻れないと言う事で、それまでの間何をしますか？』

「（奏）・・・寒気がしてきた・・・」

「（エリイ）どうする？」

「（奏）ひきこもる。」

「（エリイ）・・・二ート発言ごちそうさまでした。」

Q2・エドワード・ニューゲートさんから

『奏はMS以外のロボットをどの位知っていますか？（ナイトメア、ガンメン、トランスフォーマー等）』

「（奏）・・・MSくらいしか詳しく知らねえ。俺のロボット知識は作者と同等だから・・・」

「（エリイ）ついでに言うと、三月は『ガンダムなら結構知ってるけど後は知らない。グレンラガンですらかじったくらいだし・・・』だつてさ。

Q3・エドワード・ニューゲートさんから

『奏の知り合いたちを四字熟語で表すと、誰がどんな四字熟語になりますか？』

「（奏）知り合いがどの範囲か知らないけど・・・とりあえず友達^{ダチ}でいいか？」

「（エリイ）いいんじゃない？」

「（奏）・・・だとしたら・・・なあ？」

友人1・・・器用貧乏

友人2・・・よく分からねえ・・・というか該当する四字熟語が浮

かばねえ

友人3・・・鼻血男爵（四字熟語じゃないのは分かってる。俺が今作り上げただけだし・・・というかこれしか言いようがねえ！！）

・・・だ。」

「（エリイ）鼻血男爵・・・ぶふっ！！」

Q4・エドワード・ニューゲートさんから

『奏の子供姿を見たら、他の面子はどんな反応をしますか？』

「（奏）驚くんじゃね？」

Q5・エドワード・ニューゲートさんから

『奏の知ってる女性たち（オリキャラ、原作キャラ問わず、後、千冬さんと東さん、華奈多さんも入れてください）> m（ ） m<（ ）を恋姫？無双のキャラ達に例えると？』

「（奏）・・・面倒なの来たな・・・」

「（エリイ）ま、答えちゃって？」

「（奏）・・・しゃーなしだな。」

第・・・関羽

セシリア・・・袁紹

鈴・・・馬超

真琴・・・張飛

オリヴィエ・・・孫尚香

リース・・・黄忠

エリイ・・・璃々（黄忠の娘、後の黄叙ね）

ルティア・・・董卓

シャル・・・孫権

ラウラ・・・趙雲

沙霧・・・呂布

ロロット・・・曹操

千冬さん・・・周瑜

東さん・・・孫策

姉さん（バカ）・・・冗談抜きで分からん・・・

・・・だな。」

「（エリイ）今回は質問ここまで！質問くれた人、ありがとうー！！

えと、今後の話なんだけど、今回の編入二話分挟んで番外編やるって。

なんの番外編かは活動報告見てちょーだい！！ちょっと泣ける部分も用意しておくって。」

#49 友との再会（前書き）

今回、3・4人目の男子IS操縦者が登場・・・そのうち一人は随分前に案をもらった少年です・・・雰囲気があっているかどうか分かりませんが。

#49 友との再会

「聞いた聞いた!？」

「うん、聞いた聞いた!見た見た!！」

「つ、ついに私にも春が来た!？」

女子がめちゃくちゃ騒いでる1・1。その理由は昨日のニュースだ。

昨日流れていたニュース、それは・・・

世界3人目&4人目の男のIS操縦者が現れた、ということだ。

ちなみに今俺もw k t kが止まらなかつたりする。なんつったって
親友ダチだぜ!?

「奏、なんかめちゃくちゃそわそわしてるな。」

「これが落ちて着いてられつかよ・・・!」

ひっさしぶりの再会か・・・!楽しみだぜ・・・!!!

「それよか一夏・・・」

「ああ・・・」

パン!!

『苦しみを分かち合える奴が来た!!』

「皆さん、今日は編入生を紹介します!!」

もはや何度目となったか忘れたけど、山田先生のこの一言。もう恒例行事な気がする。

そしてクラスの面々も・・・

「キタ

!!!!」

!

・・・このソニックウェーブが発生するくらいのはしゃぎっぷりだ・・・
耳が痛いぜ・・・

『男子!男子!男子!男子!男子!男子!』

「いいいやったああああああああああああああああ!!」
「ヒ

ハ

ッ!!」

うん、女子がさっきからスーパーハイテンションだ。その上がり様

で、結局。

シパパパパパパパ（ry

「静かにしろというのが聞こえんのか馬鹿者共が!!」
『ごめんなさい・・・』

見事に決まりました出席簿。殆ど全員が出席簿を食らいましたとき。喰らってないのが男子二人、女子だと筭とか真琴とかオリヴィエとか。ルティアはまず確実に食らうことはない。俺に目で助けを求めていたのだから。

「で、では！入ってきてください!!」

うん、山田先生の声にもちよつと喜色が入ってる気がする。声がいつもより高い気がするからな。そこで判別できるぞ。

・・・さつて・・・さつさと入ってきてくれ・・・

「失礼します。」
『!!!!』

入ってきたのは三人。・・・全員懐かしい奴らばかりじゃねえかよ。
・・・

「自己紹介をお願いします！」

「はい。では僕から・・・」

先に自己紹介を始めたのは一番最初に入ってきた男子・・・俺の親友だ。

「真田幸俚です。まだ分からないことだらけで迷惑をかけるかもしれません。よろしくお願いします。」

真田幸俚^{ゆきひな}・・・通称ユキは俺が小学校転校をした先で会った、中学二年で俺がまた転校するまでの親友。ゲーム仲間でもある。通称『飾らないイケメン』。

「・・・黒神亮だ。よろしく頼む・・・」

黒神亮・・・ユキと同じ時期に会い、小六の時に転校していった旧友。クールで自分から喋るなんてことはあまりしないが、気が合う友人。

「・・・真田雪菜です・・・。よ、よろしくお願いします・・・」

そして最後の真田雪菜。ユキの二卵性双生児の妹。上二人と殆ど同時に会う。小学校の時は病弱だったから結構学校休んでた記憶がある。

よく家に遊びに行っていた時に視線を感じていたが気のせいだと思う。さらにユキに呆れられていたのは何故だか未だに分からんが。

・・・で。男子二人を見た女子の反応はというと・・・

「ちよ、イケメン！！イケメンよ！！」

「私HR終わったら告白してくる！！」

「何言ってるのよ！真田君は私が貰うんだから！！」

「ちよっと何抜け駆けしてるのよ！！」

「やだ・・・黒神君クールすぎ・・・／／／」

「でもそこに痺れる憧れる・・・／／／」

「雪菜ちゃん肌白ーい・・・」

「白雪姫って感じ・・・。いーなー・・・」

それぞれに感想が出る。というかユキに対する反応が凄い。

・・・そっぴや男爵元気にしてっかなー・・・

(休み時間)

S i d e M a k o t o

「カナ！久しぶり！」

「久しぶりだなユキ！それに亮も！！！」

「・・・久しぶりだな。小学六年以来か？」

「亮とはな。しっかしまあ・・・ユキは相変わらず『飾らないイケメン』だなおい・・・」

「いやいや、そんなことないって。」

『そこが既に飾ってない。』

かなちゃんがユツキーや亮君、それにユキちゃんと話していた。

私も三人の友達なんだけど・・・今は混ざらない方がいい・・・かな？

「というか雪菜、お前、体大丈夫かよ？」

「う、うん・・・。大丈夫だよ・・・。」

「ホントか？ユキ、そことどこ違うんだよ？」

「んー・・・二年前に医者からは『激しい動きさえしなければ多少の無理は聞く』って言われたくらいだけど。」

「・・・体育は無理だな。あれこそ真田には無理過ぎる・・・。」

「だね。」

「そついやユキ、『男爵』はこつち来るまでどうだった？」

「相変わらず。IS学園に編入するのが決まったって話したら突然鼻血を噴いて倒れちゃったし。」

「・・・本当に相変わらずだな・・・。」

かなちゃん達が言う『男爵』って言うのは、はっきり言うと・・・変態の集大成・・・そんな感じの本当にえつちい人。どこかの学園の商会と繋がりを持っているとか特技は盗撮やスニーキングとか・・・とにかく色々噂が絶えなかったりしてた。そしてえつちい話を聞くこと決まって鼻血を噴き出していたなあ・・・

「あ、そうだ、一夏、ちょっとこっち来いよ!」

かなちゃん、相変わらず取りまとめるの上手いなあ……。ユッキ
ーとかの自己紹介、かなちゃんが主体になってやってるもん。

「……あ、まこちゃん、ちょっと……」

「ふえ?なに、ユキちゃん……」

急にユキちゃんに呼ばれてちょっと皆から離れる。

「……まこちゃん、奏君のこと……好き……なんだよね……」

「……うん。ユキちゃんも……だったよね?」

「そうだけど……私は……ほら、兄さんに迷惑かけたくないし……もし奏君と私が結婚しちゃったら関係が崩れちゃうかもしれないから……」

「……そっか。」

ユキちゃんは本当に優しくして、自分のことより誰かのことを優先しちゃう、そんな子なんだ……

「まこちゃん、応援してるね。」

「・・・ありがとう。」

「ところでユキ、お前たまにだけどメールで『今日異端審問会にか
けられた』なんて来るけど・・・あれなんだよ？」

「い、異端審問会？」

「・・・それは・・・あはは・・・」

「・・・無理に思いだす必要はないんじゃないか？」

「・・・それもそうだな。ま、無理に言わなくていいからよ。」

「あれはホント、理不尽だったなあ・・・。突然告白されただけで
『とりあえず、とつとと死刑！』って・・・」

『そりゃ異端審問会の奴らなら』とつとと死刑』なんて言う。』

「・・・は、話についていけない・・・」

昔っからユキって告白されること多かったからな。

「・・・幸俚、よく生きていたな・・・」

「生きていること自体がもう・・・奇跡だっと思ってきたよ・・・」

「・・・そう聞いたらそう思えてきたぜ・・・」

男子全員でしみじみと。ちなみに異端審問会とはいっても、某学園
のあの審問会とは違う。ユキが被害に遭っていたあの審問会は事あ
るごとに『とつとと死刑』。恋愛ごとであろうと、勉強であろうと、
スポーツであろうと。ちなみにユキが被害に遭うのはほぼ確実だっ
たりする。

「今日は・・・昼からIS実践授業だけど・・・」

「一夏、飛んでこい。」

「だが断る！」

・・・くっ、先手を打たれた・・・だがそうは問屋が卸さない！！

そして、その運命の午後。

「みいなのものお〜！！出会え出会え〜っ！！」

そう、噂を聞きつけた先輩やら同級生やらの襲撃が待っているんだから。

「急ぐぞ！！もし捕まったりなんかしたら出席簿が落ちる！！」
「いや、一夏の場合だけ『天からお塩』だ！！」

遠いアリーナの更衣室まで四人で走る。この時間だけは相変わらず酷い。

「……目の前に女子の軍勢が……」
「……一夏……すまん、お前の骨は拾ってやる……」

「い、一体何を・・・」

・・・俺の切り札Part 2発動!!

「適当に吹っ飛べー夏ミサイルMk2!!」

「ちょ、またかよ!!さすがに何度もゲフウツ!!」

「行けえよー夏あつ!!」

「またかよおお・・・」

よしヒット!お前の骨くらいは拾ってやるぜ・・・

「急ぐぞ!!始まつちまう!!」

「・・・だ、大丈夫かな・・・一夏・・・」

「あいつはそう簡単にくたばる奴じゃねえよ。それよりも急がねえと・・・!」

一夏を犠牲にして俺達は慌ててアリーナの更衣室へと走っていった。

(. . . 1547)

「ねえねえ織斑君、あの二人のこと教えてよ!!」

「二崎君の友達みたいだけど、そこんところどうなの!？」

「ちよ、ちよっと待ってくれよ!遅れるから!!」

(女子の質問攻めの回避に必死になっていた)

「・・・いつも・・・はあ、はあ・・・ああなのか・・・？」

「今日は多分特別酷い・・・な・・・。げほっ、お前らが入ってきたから・・・それで・・・だろうな・・・」

あくまで推測。シャルの時もそうだったから、大方そうだろうと思うけど。

・・・一夏・・・お前の死は無駄にはしねえからな・・・

「行くか。そろそろいかねえと千f・・・織斑先生にどやされるかならな。」

結局一夏は出席簿の餌食になった。とはいっても本鈴30秒の遅刻で済んでいた。……ついに離脱技術を身につけやがったな……

49 友との再会（後書き）

（次回予告）

3・4人目の男子IS操縦者がIS学園に編入して来たその日の夕方。

少女はたまたま階段を踏み外すというドジをした。

その時現れたのは・・・？

次回、#50 ドジが恋へと変わる時

さあお待ちかねのあの子が登場！待て次回！！

「（奏）・・・早いなあ・・・」

「（エリイ）・・・早いねえ・・・」

「（奏）・・・もう50話だぜ・・・？このまま行きゃロングタイトルに早変わりじゃね？」

「（エリイ）なるねえ・・・。あ、作者が今日のテストで軽くorz状態になってるからあたしが代わりね。」

「（奏）おーし、ちゃっっちゃと済ますぞー。」

「（エリイ）んい！」

Q1・俊さんから

『馬鹿（華奈多）が送って来た薬が原因で女になってしまった奏。部屋に引き籠もっていたらヒロイン達と千冬と一夏が入ってきまし

た。女の奏を見たヒロイン達は奏に女性服を着させてリアル着せ替え人形にしようとしてきます。その時如何しますか？そして、女状態の奏を見て、有ろう事か一夏が一目惚れしてしまいました。想いを伝えられたら如何しますか？』

「（奏）速攻で断る。つか拒絶する。なに？あいつの心がへこんだりしないかって？知るかそんなもん。」

「（エリイ）うわー、バツサリ切り捨てた。」

「（奏）女性陣の場合は速攻で逃げるね。そうでもしないと俺の尊厳やらプライドが一生回復しないほどにボロボロにされっかんない？」

Q2・エドワード・ニューゲートさんから

『奏が好きな歌は何ですか？』

「（奏）アニソンゲーソンだけど何か？」

「（エリイ）あたしも同類！」

Q3・エドワード・ニューゲートさんから

『奏がアニメ（或いはゲーム）のキャラになるとしたら、誰になりたいですか？』

「（奏）アニメか・・・ゲームキャラ・・・ねえ・・・？リトスの恭か？あいつみたいなのが周りにいるのか？
率先して何かやれるような奴になりたいね、俺は。」

Q4・エドワード・ニューゲートさんから

『奏の考える、真琴の撃退法は？』

「（奏）・・・あいつみたいなのが周りにいるのか？」

「（エリイ）・・・どうだろ？そこんどこよく分かんないけど。」

「（奏）・・・まあ、あれだ。弱点を突いてやりや大概撃退できる。勉強だー、とか、過去の恥ずかしい話を全校放送で流してやるぞー、とか。」

「（エリイ）悪魔だ・・・」

「（奏）今回はここまでのようだね。」

「（エリイ）え、あ、うん、そだね。え　っと、次々回あたりで番外編をやるって話だけど、現状、ホントに1万文字を超えそうな感じだつて。・・・あ、ひよっとしたら次回予告裏切つてひよっとしたら#45のテストの珍回答を掲載するかも？だつてさ。」

「（奏）・・・織斑先生・・・乙・・・」

#50 ドジが恋へと変わる時(前書き)

今回、お待たせしましたとばかりにあの子の登場！

やっつけ感がするというのは放置でお願いします。これでも結構、繋げるのが難しかったりしたんですから・・・

#50 ドジが恋へと変わる時

(渦中の男子二人がIS学園に新たに編入したその日の放課後)

S i d e ????

「おい、美雪ー？美雪つたらー！」

「・・・うえっ？ああ、玲菜ちゃんか・・・どしたの？」

「どしたのもこうもないわよ・・・。どうしたのよ、今日一日中ぼーっとして。」

「え、あ、うん、何でもないよ、なんでも・・・あはは・・・」

(今ここで玲菜と呼ばれた少女に突っ込まれていたのは佐橋美雪。

取り立てて何かあるわけでもなく、専用機も持っていない一般生徒だ

彼女がその日、ぼーっとしていたのには理由があった)

「ひょっとしてさ、今日の転校生君のこと気になってた？」

「うええっ！？そ、そんなにやことにゃいれしゅよ！？／／／」

「・・・嘘だっ！..!」

「ひゅっ・・・」

(某ひぐらし的な勢いで言われ、怯む美雪)

「もー！アンタじゃ釣り合わないっての分かってるでしょ！？今日私も見えてきたけどさ！アンタと比べたらルックスも違い過ぎる！それに何となくだけど全てそつなくこなせそうだったわよ！？」

「えうう・・・わ、私だって・・・料理くらいは・・・出来るもん・・・」

「料理『くらい』！？『くらい』じゃ通用しないわよバカっ！」

「って言うか！まだ好きになっちゃったーなんてことじゃないから！！」

「それも嘘！！そつじゃなきゃあんなにうるたえたりしないって！」

(そして散々ぼろくそに言われたその日の階段で)

もー玲菜ちゃんのバカぁ・・・。あそこまでめっちゃくちゃに言わな
くたっていいのに・・・

(そう思いながら階段を歩いてた時だった)

ガクッ!

「うええっ!?!」

(階段を踏み外した)

え、えっ!?!?わ、私階段踏み外した!?!?

お、落ち、落ちるうゝっ!?!

「危ないっ!?!」

・・・え?

S i d e Y u k i h i n a

「・・・悪いユキ、先部屋戻ってくれないか？ちょっと用事があったの忘れてた・・・」

「うん、僕は大丈夫だから。行って行って。」

「ん、悪い。」

カナはそう言って走っていった。

ちなみに部屋割は僕とカナ、亮と一夏。そんな感じで男子同士二人ずつという部屋割になった。

「えっと・・・1001号室・・・だっけ。さてと、急がなきゃ・・・」

そう言って階段を降りようとした時だった。

「うええっ!?!」

目の前を歩いていた女の子が突然階段を踏み外した!?

あれじゃ絶対にどこか怪我する!

「危ないっ!?!」

そう考えた時、僕の体はすでに動き始めていた。そう、その子を助けるために・・・

S i d e M i y u k i

突然後ろから聞こえた声の人は、私を抱きかかえながら落ちていく。
・ ・ ・ と思っ たら体勢を空中で持ち直してきれいに着地した。

・ ・ ・ あ、こ、この人 ・ ・ ・ は ・ ・ ・ / / /

「ふう ・ ・ ・ 危なかった ・ ・ ・ 。大丈夫？怪我とかない？」

「あ ・ ・ ・ は、はい ・ ・ ・ / / /」

ど、ど、ど、どうしょ ・ ・ ・ ！さ、真田君に ・ ・ ・ 真田くんに会っちゃった。
・ ・ ・ ！しかも ・ ・ ・ 助けてもらっちゃった ・ ・ ・ / / /

「・・・うん、大丈夫そうよかった。じゃあね。」
「え、あ、は、はい！！／／／」

さ、真田君と・・・真田君と話しちゃった・・・！ど、どどどどじよ
・・・！？／／／

（その後の美雪は、傍から見ればおかしいんじゃないか、と言われ
るほど混乱していた。

どれくらいかといつと・・・）

「美雪、さっきからフォークくるくる回してるだけだけど・・・ど
うしたの？」

「・・・へー！？」

（夕食の時、いつもの如く玲菜と一緒に食べていたのだが、突然パ
スタをフォークでくるくると弄び始めたのが気になった玲菜に突っ

込まれたり・・・)

「美雪ー、シャワー開いたわよ・・・って美雪く・・・さつきから顔がふにやけてるわよー?」

「ふえへへえく・・・へうえっ!? / / /」

(・・・と、突然『えへへうふふ』と笑いだしたり顔がにやけたりなど・・・とにかく奇怪極まりないことこの上ない状態だった)

「・・・美雪、アンタどーしちゃったのさ!? 放課後までと打って変わってアンタ変よ!？」

「どうもないよおく? ただ真田君と話せたことが嬉しいだけだよおく」

「・・・原因そこね・・・」

(ついに玲菜が原因把握)

「・・・美雪! いつまでもえへへうふふなんて言ったら気持ち悪いからさっさと真田に告うちまえ!! もしくは友達になれ!!」

「え、ええっ!? む、無理だよ! まだ会って数時間しか経ってない人に告白したって断られるに決まってるよ!! 変人に思われちゃうよ!!」

「大丈夫! 美雪ならきつと友達になつてくれる!!」

「サムズアップしていい笑顔で言わないでよおくっ!!」

(翌日。世間一般では休日と言われるその日1001号室では美雪が入り口に立ち、奏がそれに対応しているという形が出来上がっていた)

「あ、あの……真田君……いますか？」

「んあ？……あ、三組の佐橋……だったか？ユキに何か用？」

あ……真田君の友達って言う……二崎君ならきつと……

「……ひよつとして……ユキに告白か？」

「そ、そういうわけじゃなくて！ちよつとお話したいから……
／／／」

「……ま、いつか。ユキー、お前に客だぞー。」

んー！すぐ行くー！

二崎君が真田君を呼んでくれた。

「あ、昨日の……。どうしたの？」

「あ、あの、ちよつとお話したいな……。って……。／／／」

「いいけど？何処に行こっか？」

こ、こここれってデデデート！？／／／

「ユキー、そのままだとデートになんぞー。お前の妹に見つかって
みる、大変な目に遭うぞー。」

「あ、そっか……。屋上で良いかな？」

「ど、ど、どでもー!」

(幸俚と美雪は、二人で寮の屋上へと歩いて行った)

「・・・しかしユキに・・・なあ。あの妹がいる時点で前途多難
だなあ・・・」

(上屋)

「それで……お話って何？」
「え、えと……その……／＼／」

ど、どうしよ、緊張して……何話したらいいのか……分かんない……／＼／

「んー……緊張してたり……する？」
「へひゃいっ！？」

「……あはは、落ち着いてからでいいよ。今日一日、特にする」ともなく暇だったから。」

「あ……う……／＼／」

ど……どうしよ……どうしよ……！……！……！

「あ、あの……！」

「ん？」

「も、ももしよか、よかったら、っ、付き合ってもらえませう」
「！」

「……大丈夫？」

「……ら、らいりょうづねふ……／＼／」

か、噛んじやった……で、でも……！

「よ、よかったらですけど……っ、付き合って……もらえませ

んか……？
「……」

ああ……やっぱり変な子って思われたよぉ……あうう……

「付き合って……か。まだ会って二日目だからお互いのことよく知らないから答えは出せないけど……」

うう……やっぱり……

「けど、今から知って行けばいい話だから。まずは友達から……
ってことで、どうかな？」

……うそ……じゃ……ない……！

「……はい！はい！……」

「あ、それと変に敬語使うのやめてくれないかな？疎外感感じちやうから名前で呼んでくれると嬉しいな？」

「え……あ……ううん……」

思わず私は真田君……じゃなかった、幸俚君に抱きついてしまっ
た。

「わつとど……これからよろしくね。えーつと……」

「あ……ご、ごめん。私、佐橋美雪。」

「わかった。改めてよろしくね、美雪。」

「~~~~~っ!! / / /」

……な、名前で呼ばれちゃった……!

） こうして美雪は幸俤と友達になった。幸俤は『まずは』と言っていたことから、後々関係をよくしていこうと考えているようだ・・・

Side Kanade

「ただいまー・・・ってありや？カナ、どうしたのさ・・・」
「見りゃわかるだろうがむっ!？」

・・・只今絶賛、沙霧に襲撃を受けてキスされている俺でした・・・

「ぷっはあ!!沙霧!お前少しくらい自重しろよ!!」
「だって・・・さびしかつたんだもん・・・」
「つつても昼食堂で別れてまだそこまでたつてないだろ!？」
「別れてから30分会ってない!!」
『ええく・・・』

思わずユキと声が重なったけど・・・それくらい呆れていた、と考
えてくれ・・・

#50 ドジが恋へと変わる時(後書き)

「(奏) 次回・・・と言ってもそう時間かからないうちに#45のテストの珍解答集を公表するぜ。」

とりあえず笑える解答やら『ちよ、おまつ!?!』な解答、はたまたコメントの詳しい事よ・・・な感じも漂いますこと間違いなしです! とりあえず『一問一答』を。

Q1・俊さんから

『もしも異世界に飛ばされたとして、どんな世界に飛ばされたいですか?』

「(奏) ガンダム・・・特にアフターコロニーかアフターウォー、00レベルの西暦に決まってるんだろ!!」
・・・出ましたガンダム。

Q2・エドワード・ニューゲートさんから

『初めてあった時の三人の印象は?』

「(奏) ユキは・・・そうだな、『何・・・か僕(あん時の俺の一人称は『僕』だったからな)みたいな感じがする・・・』で、亮は『なんか仲良くなれそうな気がする』で、雪菜は『・・・大丈夫?』だった。」

まあ、そういうことです。

Q3・エドワード・ニューゲートさんから

『雪菜は病弱との事ですが、なにか病気を患っているのですか?』

「(奏) いやいやいやいや!! 病弱って言うけど体を壊しやすかったっただけ!! 熱出したり風邪ひいたり、インフルエンザはしょっちゅう・・・って感じ!!」

雪菜は『体が弱い』という意味での病弱です。

Q4・エドワード・ニューゲートさんからエドワード・ニューゲートさんから

『幸俚とのゲーム勝負、現在の所の勝率は？ また、幸俚はエリイよりうまいの？』

「（奏）勝率は・・・今んところ通算600戦中300勝300敗だ。今んとこ俺の連勝中。んで・・・エリイより上手いさ。スマラだとエリイなら圧倒できるけどユキの場合は戦略組まないと勝ち目ないし。」

幸俚と奏は規格外です。ということ今回はおしまい。俊さん、エドワード・ニューゲートさん、ありがとうございました！次回は幸俚に登場してもらいます！・・・と言っても、質問に答えるのは番外編の後書きで、ですけど。

そして業務連絡など。

まず企画1についてですが・・・

なるものガイドライン改正が行われるまで保留、事と次第によっては企画打ち消し・・・という形になります。もしそうなった場合は活動報告に記載します。その際はご了承ください。

そして次の番外編ですが・・・

結末がちよっと悲しい事になってしまいます（まだそこまで至ってませんが、頭の中では既に場面が出来上がってます。実際連想したら私自身、涙腺決壊起こりそうでした）。

『このままだと不憫だから本編レギュラーにして！』とかいう声が

出たら、多分！

多分ですよ！！

登場するやもしれません。新たに加筆修正して・・・ですけど。

とりあえず、今回はここまで。そう時間のかからないうちに珍解答集を出します！

超番外編 #45テスト珍解答集(前書き)

珍解答集です。

コメントーターは奏。珍解答と彼のコメントに注目！！

超番外編 #45 テスト珍解答集

さて、ちよつと前に掲載したあのテスト回の珍回答を公表しましょう。所謂恥さらしの回です。

「(奏)・・・さすがにそれは嫌らしいぞ・・・」

まあまあ、そこは放置、気にしない方向で。ということで奏、コメントよろしく!!

「(奏)・・・わーったよ・・・」

国語編

問・『鼻』『蜘蛛の糸』『羅生門』などの作品を書いた人物の名前を挙げよ

シャルロット・・・芥川龍之介

コメント：それが正解だ。ちなみに『河童』もそうだ。さらにどうでもいい話だが、実際に京都にあるのは『羅城門』だ。そこんとこる間違えんなよ？

ルティア・・・芥川竜之介

コメント：本当に惜しいミスだ。龍を間違えたというのが本当に惜しい。

真琴・・・夏目金之助

コメント：・・・なんで夏目漱石の旧名を書いた？

ロロット・・・あくたがわりゅうのすけ

コメント：・・・漢字で書こうぜ・・・

エリィ：地球人

コメント：・・・いや、確かに当たってはいるけどよ・・・

問・源平争乱を著した軍記物の名称を答えよ

沙霧・・・平家物語

コメント：正解だ。ついでにだが、怪談でよく出てくる『耳なし芳一』が語っていたのがこれだと言われている。

シャルロット・・・平氏物語

コメント：惜しい・・・本当に惜しい。意味としては合っているが、
正解じゃない・・・

セシリア・・・源氏物語

コメント：それは紫式部が書いた作品だ。そんな戦いやおどろおど
ろしい展開が起こるわけがない。

ラウラ・・・古事記

コメント：戻り過ぎだバカ。

問・宮沢賢治の著した作品の舞台となっている県は何県か、答えよ

シャルロット・・・岩手県

コメント：正解だ。宮沢賢治の書いた作品は基本的に岩手県・・・
正確に言うと彼の生まれた花巻市を中心としているらしい。

真琴・・・品川県

コメント：それは品川『区』な。そして東京。

ルティア・・・青森県

コメント：ただの間違いだな。

ロロット・・・ギリシャ

コメント：外国だ。

問・夏目漱石著『坊っちゃん』の舞台となった場所を県・市の順で
答えよ

沙霧・・・愛媛県松山市

コメント：正解だ。・・・というかそうとしか言いようが無いな。

ラウラ・・・三重県津市

コメント：確かに海に隣接した県だけどよ・・・違い過ぎるんだよ
な・・・

ロロット・・・あいちけんあいちし

コメント：漢字で書こうな。それに愛知県に愛知市は確かなかった
はずだが？

真琴・・・青山県新大阪市

コメント：・・・青山は『区』な。後新大阪って・・・あったか？
駅の名前でなら覚えてっけど・・・

日本史編

問・鎌倉幕府が成立した年を答えよ

沙霧・・・1192年

コメント：正解だ。覚え方なら『良い国（1192）作ろう鎌倉幕府』と語呂覚えした方がいい。

ロロット・・・4192年

コメント：・・・相当・・・未来・・・

ルティア・・・4192年

コメント：・・・さすが姉妹、と言ったところか・・・

エリィ・・・鎌倉時代が成立した年

コメント：・・・それを答えるって言うてんだよ。そして鎌倉時代が『始まった』な。

真琴・・・何年か前

コメント：・・・まあ確かにあってんだけどな？それがいつか、って聞いてんだよ。

問・江戸時代、唯一幕府・藩の人間の大量処罰が起き、『農民が勝った一揆』と言われている農民一揆の名称を答えよ

リス・・・郡上一揆

コメント：正解だ。ちなみに作者の地元で起きた一揆だ。きっかけは1754年・・・宝暦4年に郡上藩主が年貢の取り立て方法を今の税法で言う所の『定額法』から『累進課税法』に強制的に変えたことになっている。籠訴や直訴などの決行でこの一揆ではその農民が江戸での長期牢獄生活を強いられた上に厳しい詮議や拷問にかけられたことで何人も死んだらしい。そして判決は農民側だと獄門・・・まあ、罪人の首を斬って高台に乗せ、罪状を書いた捨札と呼ばれる札に晒す刑のことだな、それと死罪、三十日手鎖、それ以外にも追放、遠島、役職取り消し、過料銭。役人には当時の老中が免職、若年寄が遠江国相良藩の領地没収、美濃の代官が免職、郡上藩主は領地没収のお家断絶、盛岡藩預かりになった。他にも郡上犯役人に死罪、追放、遠島などが言い渡されているな。気になった奴は映

画を見る。まあ見たい奴で良いがな。ちなみに作者は見たがっている。

一夏・・・山城国一揆

コメント：それは室町時代の一揆だ。

セシリア・・・正長の土一揆

コメント：それも室町時代の一揆だ。

ロロット・・・一揆？何それ、おいしいの？

コメント：・・・美味しいと思うなら食ってみる。食えるわけねえから。

真琴・・・応仁の乱

コメント：一揆って書いてあるだろボケ！！

問・第二次世界大戦が起きた理由を答えよ

シャルロット・・・ドイツ軍のポーランド侵攻

コメント：正解だ。開戦したのは1939年だ。

ラウラ・・・1939年9月1日早朝、ドイツ軍がポーランドに侵攻し、その2日後イギリス、フランスがドイツに宣戦布告、9月17日にはソビエト連合が独ソ不可侵条約違反を犯してポーランドに侵攻したことが原因。さらに1940年にドイツが日本、イタリアと日独伊三国軍事同盟を締結したのも原因の一つ。

コメント：・・・詳しいな・・・というかここまで書かなくてもいいと思う。

エリイ・・・真珠湾攻撃

コメント：それは太平洋戦争な。

ロロット・・・いおうとごじょつりくさくせん

コメント：それは作戦名だ。後漢字で書け。

真琴・・・ポツダム宣言

コメント：第二次世界大戦終結が開戦？おかしいだろ？

問・日本がポツダム宣言を受け入れるきっかけとなったものは何か、答えよ。

シャルロット・・・原子爆弾二発

コメント：正解だ。落ちたのは広島、長崎。広島には原爆記念館、
というものがある。その近くには爆発の影響で人の影が残っている
場所があるのかなとか。広島の原爆資料館には旧住友銀行広島支
店の入り口付近の階段が展示されている。それもその場所の一つだ。

沙霧・・・広島に落とされたウラン原子爆弾『リトルボーイ』と長
崎に落とされたプルトニウム原子爆弾『ファットマン』

コメント：・・・詳しいな、やけに・・・

真琴・・・デ デ

コメント：ワシがポツダム宣言受入れのきっかけになるわけが無い
ぞい！

一夏・・・ポソ宗教戦争発生

コメント：・・・よし、今すぐポソへ行って土下座して来い。それ
にポソ宗教戦争は1990年代頃から二人の人間の小さないざこざ
から開戦したイスラムとキリストの二つの宗教の対立戦争だボケ！！

問・建武の新政を始めた天皇の名を答えよ

沙霧・シャルロット・・・後醍醐天皇

コメント：正解。足利尊氏と対立したとも言われている天皇だ。

真琴・・・完抜天皇

コメント：・・・新しい天皇を作るな。桓武天皇って書こうとしたことだけは分かるが。何処の映画祭か。

エリイ・・・デ デ

コメント：ワシはなんちゃらの新政なんて始めるわけないぞい！

ロロット・・・建武の新政？なによそれ

コメント：建武の新政は後醍醐天皇が始めた天皇自ら行う政治を開始したことによって成立した政権及び新政策だ！

理科一（科学）編

問・以下の物質の化学式、化学反応式を答えよ

水 塩酸と水酸化ナトリウムを混ぜた時の化学反応式 酸化銅

シャルロット・ロット・・・ H_2O 、 $NaOH + HCl = NaCl + H_2O$ 、 CuO

コメント：一つも間違いなく合ってるな。

ラウラ・・・ H_2SO_4 、 $NaCl + H_2O = NaOH + HCl$ 、
 FeO

コメント：化学反応式は合ってたけどなあ・・・なんで硫酸と酸化鉄が出てくるんだ？

真琴・・・ HO_2 、 $NaT + O_3 = F + CO_2$ 、 Ocu

コメント：左から『知らん、知らん+オゾン』フツ素+二酸化炭素、知らん』だ。いろんな意味で素晴らしいなこの公式は。

問・水が氷結、或いは蒸発すると周りの熱がどうなるか、原因を明記した上で解答せよ。

沙霧・・・水が氷結した場合、水自身が熱を放出するために周りの熱は上昇する。逆に蒸発した場合は周りの熱を奪っていくため、熱は下降する。

コメント：正解だ。しっかりと原因も書いてある。文句なしだ。

真琴・・・凍つたら冷えて、蒸発したら熱くなる。・・・多分。

コメント：多分で答えんな。詳しくも明記されてないし・・・全く・・・

ラウラ・・・氷結した場合水による熱放出が発生して周りの熱は上昇する。蒸発した場合は熱吸収が発生して熱が下降する。

コメント：俺的には正解なんだが、千冬さんだったら確実にアウトにされるぞ・・・この答え・・・

「(奏) こう考えると千冬さん乙だな・・・」
シャルでもミスするんですね。小さな凡ミスですけど。

「(奏) というか沙霧がミスしていないことがホント驚きだけだな。」
いやー、こういう晒しは楽しいですねー。

(奏) こいつ絶対サドだ・・・)

超番外編 #45 テスト珍解答集（後書き）

〈次回予告〉

突如奏の部屋に持ち込まれた、華奈多が造った謎の装置。

その装置は『一つだけなら、どんな願いを叶える』というもの。

本人たちには願いが無く、放置することにした。

それが一つの奇跡を生んだ・・・

次回、番外編 もう一人のルティア？人ならざる少女の想い〉

奇跡が生みし、積もる想いは届くのか・・・

活動報告にも書きましたが、構成が出来、なおかつある程度これらの小説が進んだら新作だします。

その時はその時で、駄文を読んでもただいたら幸いです。

初の一時創作ですので、かなり困ってますが。

番外編 もう一人のルティア？人ならざる少女の想い（前書き）

長いです！今回執筆した中で最も長い話になりました！文字だけで15000字以上という！！

とりあえず最後は悲しいです。今さっきまで書いてて涙腺潤みかけましたから。

ついでに、『IS殆ど出てなくね？』というツツコミは無しの方向で。

番外編 もう一人のルティア？～人ならざる少女の想い～

(ある日の夜、1001室にて……)

「ユキ、いつものように……」

「いいよ……！手持ちは3体、嫁は確実に入れておくルール……！」

「勝ち抜き、先発以外の途中切り替え禁止だ……！」

いつものようにポケモンバトル。俺の手持ちは

ルティア(シャワーズ)(嫁)

ボーマンダ

メタグロス

……だ！

(そしてバトル開始。妻の先発はメタグロス、幸俚の先発はサーナイトだった)

「やばっ！こっちの方が圧倒的に不利……！」

「よし、早期決着を・・・」
「すぐに交代、ジャンボ（リザードン）でー!!」
「やべえ!! コメパン威力半減かよ!？」
「こっちのターンで『かえんほうしゃ』!」
「・・・耐えた!! 道連れやってやらあ!」
「ま、まさか・・・」
「フタエノキワミ、アッー!!」

（メタグロス、『だいはくはつ』発動、ジャンボのHPを0にする）

「そ、そこで『だいはくはつ』!？」
「これが『フタエノキワミ、アッー!!』の威力だ!!」

(数分後)

「……後お互い一体ずつ……」

「最終決戦は嫁同士の戦い……！しかし俺の方は不利……」

『頼む(よ)、(ルティア/ヴィルミナ)……！』

俺は既にサ ナイト撃破のためにシャワーズのルティアを出して
いて、幸俚が出したのはキュウコンのヴィルミナ。

ちなみにあのルティアとは一切関係ない。会っ前からずっとルティ
アだったから、一致していたことは実は驚いていた。

相性はこっちが有利、勝たせてもらっぜ……！

(・・・結果)

「よしっ！601戦301勝300敗！！俺の勝ちだ！！」
「ルティアのあの硬さを忘れていた・・・！」

俺が勝った。相性が良かった、ということもあるけど、俺のシャワーズはHP・特防の努力・個体値考慮の耐久型だぜ！！

「これで負け越しかあ・・・」

「いや・・・あそこで一桁耐久してなかったら俺が負けてたしいい勝負だったぜ。」

「今度は負けないよ！（トントン）・・・あ、カナにお客さんだ。」
「・・・誰だ？」

声もないし、エリィだとしても静かすぎる。そう思って開けたら・

「やっぱりいた。奏、華奈多さんから渡されたんだけど・・・」

いたのはリースだった。しかも手に大きな段ボールを抱えていた。

「・・・おいおい・・・一体何が入ってんだよ・・・」

「ごめん、私にもよく分からないんだ・・・。お昼に突然織斑先生が『二崎に渡しておいてくれ』と言って・・・」

「差出人は・・・はあ・・・またあの姉さん（バカ）か・・・」

「・・・華奈多さんなら・・・分かる気がするよ・・・」

「とりあえず、開けてみるぞ・・・って・・・なんじゃこりゃ？」

段ボールを開けてみたら、何かしら大掛りな機械が出てきた。下の

方には手紙が。

【願いを叶える装置を作ったから試しに使ってみてね】 あ、でもこれ、試作品だから一つしか叶えられないから、よく考えてね？】

「・・・んなこと言ってもなあ・・・」

「・・・そうだよね・・・。急に願いが浮かぶなんてことないよね・・・」

「・・・ありがとな、リース。」

「ううん、どういたしまして。奏、おやすみ。」

「ああ、また明日な。」

リースが部屋を出て、ユキと二人、この大掛りな願望達成装置（俺命名）を見る。

けどこれ・・・見れば見るほどへんてこだな・・・

「とりあえず今日はこれ放置して明日また考えてみない？」

「・・・そうだな。もう今日は寝ちまうか。」

そして俺達はさっさと風呂に入って簡単に歯を磨いて寝た・・・

(深夜)

Side ????

《……、……いを……か……》

声が……聞こえる……

《……じ、……がいを……なえ……いか……》

……はっきりと聞こえないけど……何だろう……

《汝、願いを叶えたいか?》

願い……?それよりもあなたは……

《私のことは気にしなくてよい。叶えたい願いがあれば言え。一つだけ叶えてやろう。》

……なら……

私を愛してくれている人と・・・話させてください・・・！私の想
いを・・・伝えさせてください・・・！

(翌朝)

S i d e K a n a d e

(朝日が1001室に差し込んでくる。それは奏たちに降り注ぎ、朝の到来を告げていた。同時にそれは・・・)

「ん……」

朝……か……。それにしても……。なんだ……。？どことなく
ヒヤツとしていて……。それなのに暖かいこの何かは……

（事件の訪れをも告げていた……）

ふに。

「ちゃん……」

……ん？

ふにふに。

「ふちあ……」

……んん？

むじら。

「やう・・・」

・・・んんん!?

今、今だぜ!？俺達の部屋・・・いや、俺のベッドに聞き捨てならない声が聞こえ・・・違う、聞いたことのない声が聞こえてきたんだけど!？

・・・意を決して目を開けるしかない!!

「・・・誰?」

まず目に入ってきたのは・・・やっぱり女の子。見覚えが無いから尚更だ。

そしてさらに目に入ってきたのは・・・

「・・・ヒレ?」

頭の上、そして耳に当たる部分にある、ヒレ。

俺には全く思い当たる節が無い。というか、俺は一体何処からこの子連れ込んだ?なんだ?これは夢なのか?

「ん〜・・・」

目の前の子・・・なんか見覚えがあるようなそつでもないような・・・

「んう・・・あ・・・」

・・・目が合いましたとも。ええ、目が合いましたよ・・・

「・・・旦那様・・・？」

「よし色々と話しましょう。突然『旦那様』などと言われると俺は色々で大変なことになりかねないんだが・・・」

「・・・ぐすつ・・・」

「・・・ってなぜ泣く!？」

「・・・だって・・・ようやく・・・会えました・・・から・・・ひつく・・・会いたかった・・・ので・・・」

・・・意味がさっぱり!わからん・・・

「・・・カナ・・・朝から騒が・・・し・・・」

・・・ユキ起床。おはようございます。私めは何一つ悪い事はして

おりません。

「・・・カナ、悪い事は言わない。すぐに警察に行こうか。」

「寝ぼけているらしいな、ユキ・・・。昨日俺の方が先に寝ただろ？それをしつかりと見ただろ？そんな状況でどうやってこの全く知らない女の子を連れ込むな」・・・酷いです・・・私を心から愛して下さっていたのに・・・！」「て・・・」

「・・・ちよつと待って？その頭や耳のヒレ・・・もしかして・・・ルティア!？」

「ちよ、そうなのか!？」

「・・・はい!」

そう言ってルティア（シャワーズ・・・と思われ）が俺に抱きついてきた。

1605

「・・・ん〜・・・」

「どした、ユキ？」

「これ・・・萌えもんそっくりな気が・・・」

「・・・ああ、そう言われてみればそんな気が・・・」

「・・・?」

一度だけちらつと見たことがある。某動画サイトで。

「そう言えば・・・なんか萌えもんのある部分ってHPの種族値、個体値、努力値で算定された数値で変わってくるのか?」

「ある部分……」

ユキが言った一言で、俺はその部分を凝視してしまった……。そしてもう一度ユキの方を見て……

『……何となく納得がいく話だ……』

と、二人で同じ意見に逢着、納得してしまった。

「……えつち……／＼／」

……後ろでそう聞こえたのは気にしない。気にしない方向で行こう。

「……でもそんな旦那様が私は……はう……／＼／」

「……見事に惚れ込んでるな……」

「……惚れ込んでるね……って亮！？い、いつの間にいたの！？」

「……部屋が騒がしかったからな、気になってきたら……奏、お前は……」

「違うからな！？決してそんなことは無いからな！？」

「……あう……」

「……カナ、ルティアが……」

「お？」

「・・・だ、誰・・・？」

ルティア（シャワーズ）が俺の後ろに隠れてしまった。・・・なぜ？

「えーっと・・・萌えものの性格は、と・・・あ、あったあった。基の性格が・・・それをこっちにもってきて・・・あ、『ひとみしり』な性格なんだ。」

「・・・ううゝ・・・」

・・・なるほど、だから後ろに隠れたわけだ・・・

「大丈夫だって。別に何かするわけでも取って食うわけでもないからさ・・・」

「・・・ホント・・・ですか・・・？」（涙目）

「・・・ごふっ！？」

「カナ！？」

あの涙目は・・・ルティア（ノワール操縦者）の涙目と・・・同等の・・・破壊力・・・じゃ・・・ねえ・・・か・・・

「お、おい！奏、しっかりしろ！！」

「・・・死して尚・・・一片の、悔い・・・無し・・・（ガクツ）」
「死んじゃダメですうゝ！」

「・・・で、この状況を説明してもらおうか。二崎、真田・・・」
「（俺／僕）にも分かりません。」

そんな騒動があったため、千冬さん登場というね・・・

「黒神が来た時にはもういたわけだな？」

「・・・はい。」

「・・・(びくびく)」

ちなみにルティア(シャワーズ)は千冬さんに怯えきってしまっている模様。俺の後ろでびくびくしているから。

「・・・とりあえず、華奈多^{ハカ}が原因だということは分かった。数日は一緒にいてやれ。ただし・・・」

「ただし・・・？」

「見せるな。どうにかしてでも隠し通せ。あまり大勢に見られてしまつと後々の処理が面倒だ。それに・・・」

「それに？」

「・・・そこまで言うのも野暮だな。まあいい。頼むぞ。」

千冬さんが出ていった数分後、俺達は支度を始めた。

S i d e L u t t i a

「じゃあ学校行ってくるから、見つからないように留守番頼むぜ。」
「行ってらっしゃいませ、旦那様。」

旦那さまとその御友人……幸俚様は学校……という所に勉強を

するために出掛けられました。

・・・はあ・・・暇です・・・

「・・・何か・・・ないでしょうか・・・？」

部屋の中を簡単に漁り始めることにします。

「あるのは・・・私が元々いたゲームと・・・パソコンと・・・テレビと・・・後は生活必需品・・・ですね・・・」

もふっ。(ルティア(シャワーズ)が奏の使っているベッドに倒れこんだ)

「あああああうう・・・暇ですうう・・・」

もうベッドでぐるぐる転がるしかやる事が無いですよあう・・・

「・・・あ・・・旦那様の・・・におい・・・すう・・・」

(ルティア(シャワーズ)、睡魔に負ける)

S i d e K a n a d e

「奏、どうした？疲れきった顔してるぞ？」

「気のせいだ・・・放っておいてくれ・・・（明日から休み・・・どう凌ぎ切るか・・・？）」「

俺は朝のこともあって、焦っていた。・・・ルティア同士鉢合わせしたら・・・どうすりゃいいんだ・・・？

「かなちゃん顔真つ青だよ？大丈夫？」

「・・・そう・・・か・・・？」

「早退した方がいいんじゃないかな？酷くなってもあれだし・・・」

「・・・そうさせてもらおうわ・・・」

「私・・・ついてっいい・・・？」

『あ、それは困る。』

「あれ、なんでユツキーまで言うの？」

『それは気にしない方向で。』

「・・・亮まで言うか・・・」

とりあえず俺はユキに付き添ってもらって部屋に帰った・・・

の
は
い
い
が。

ガチャ。

「はにゃあああああああっ!?!」
『おわああっ!?!』

部屋に入った途端の悲鳴・・・というか変な声。

「・・・ルティア・・・何してんの・・・？」

「そ、それは・・・その・・・はう・・・／／／」

当のルティア（シャワーズ）は俺のベッドで座り込んでいた。・・・
というか・・・何をしてたんだろうか・・・？

「とりあえずカナを寝転がせてやってくれ。どうも体調不良なよう
で顔色が悪いから。」

「は、はい！！／／／」

慌ててルティアが退いて、俺がさっきまでルティアがいたベッドに
寝転がる。

・・・なぜだか知らねえけどだるいんだよな・・・

「それじゃカナ、俺戻るから。」

「おー・・・」

ユキは部屋の鍵をかけて学校へと戻っていった。二度くらいドアを
引いて、鍵がかかっていることも確認して。

俺は今日だけ早退。・・・というか・・・

「ルティア・・・」

「ひゃいつ!?!にゃ、にゃんでしょうか!?!?ノノノ」

「・・・そんなにじつと見られると寝辛い・・・」

「じじじじめんなさいっ!?!ノノノ」

「・・・まあいいや、ちよつと寝てるから・・・誰か来たらすぐ隠れてくれ・・・」

「は、はい!?!」

そうして俺は大人しく寝ることにした・・・。そうすればだるさも消えるだろ・・・

S i d e L u t i a

旦那様が眠ってしまつて・・・私はまた、何もやることが無くなりました。

出来ることといえば・・・寝顔を見ることだけ。

でも・・・それでも私は嬉しいです。こうやって・・・旦那様の顔を見ることが出来て・・・話すことが出来たことが・・・

「・・・はふ・・・旦那様の寝顔を見ていたら・・・私も眠たくな

う
っ
て
き
ま
し
た
・
・
・
・
・
・
・
・
・
あ
ふ
・
・
・
・
失
礼
・
・
・
し
ま
ふ
・
・
・
す

Side Luthia

「うー……」

「ルー……どうしたのさ、そんな唸ったりしてさ？」

奏君が早退したのは私だって分かってるもん……けど……

なんだろう……胸騒ぎがする……

「姉さん……」

「ほえ？」

「今からお見舞い行ってくる……！」

お見舞いというのは口実……ホントは胸騒ぎが当たって無い事を確認したいから……！

「え、ちょ、授業は！？この後ルーが苦手な現代国語だよ！？」

「姉さん、代返お願い！」

「あ、ちよっと！ルー……！」

「……行っちゃった……。そりゃ心配なのは心配んだけどさ
ー……別にそんなままでしていくことじゃ(シパァン!!)……
バカがみーるー……」

(この時、沙霧までもが物凄い勢いで教室を出ていった。それを見
ていたエリィは止めることも出来ずにただこう呟いていた)

(1001号室)

Side Kanade

「・・・また冷やつこいような暖かいような・・・ってまたお前かい、ルティア・・・」

「すう・・・すう・・・旦那様あゝ・・・好きですうゝ・・・大好きですうゝ・・・むにゃ・・・」

いつの間にかルティア（シャワーズ）がベッドにもぐりこんで来ていた。

・・・いかん、大変大きいものが当たってる・・・というか押し付けられているから精神がガリガリ削られていく・・・！

このままだといかん！！集中・・・！集中しなければ・・・！！

「むにゃ・・・だんにゃしゃまゝ・・・」

集・・・中・・・っ！

S
i
d
e

L
u
t
h
i
a

か、奏君の部屋の前に着いた……！し、心臓がバクバクいってる・
・！お、お、落ち着かなきゃ……！

「すう……はぁ……すう……はぁ……。
奏……君……？」

Side Kanade

奏・・・君・・・？

・・・なん・・・だと・・・！？

ちよ、これはまずい！まずいつて！！誰か！『備えあれば嬉しいな（BYDDD）』的なもの持ってきてくれ！！このままだとバレる！確実にバレる！！

・・・入るよ・・・？（ガチャガチャ）あ、あれ・・・？開かない・・・？

ユキグツジヨブ！！

このタイムラグの間にこつちのルティアをかく 何・・・してるの・・・？・・・さ・・・な・・・

鍵かけてて・・・。た、確かに体調悪いなら安静にしてないといけないのは分かってるんだけど・・・

だったら・・・（かちやかちやかちやかちや）

・・・嫌な予感・・・

「・・・くそっ、すっかりとしがみついているから動けない・・・！」

ルティア（シャワーズ）は今もなお気持ちよさそうに寝てる・・・
仕方ない、布団をかぶってしまえば・・・！

かちやり。

・・・開いた。

・・・は、入るね・・・

・・・後は狸寝入り・・・！

「・・・お邪魔します・・・」

・・・入ってきた。・・・どうにか隠し通せれば・・・

・・・ついに・・・バレた・・・!

「・・・ふに・・・?」

そしてピンポイントでルティア(シャワーズ)も目が覚めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・つ!!!!」

そして恒例、俺の後ろに逃げ込んだ。

「・・・奏・・・この女は一体・・・」

「ちよつと待て!色々と話したいことはある!とにかく殺気を引っ込めるIS展開を止める!!」

「あうっ、へうっ、ひへううっ、あうあう、にぱ〜!?!?!」

「ルティアも落ち着け!!」

「あ、あの・・・」

「しまった!名前被ってたんだつた!!!!」

「・・・(むすー・・・)」

「あう・・・(きゅ・・・)」

『!!!』

・・・なぜだ?なぜ二人とも驚いた顔してんだ?

「・・・奏は私の!!」

「ぐほおっ!？」（沙霧が見事に鳩尾に飛び込んできたために奏が発した不思議な悲鳴）

「んっ!!」

「いだだだだ腕と同が離れる体が干切れるそれくらい体が痛い!!」

「あわ、あわわ、あわわわ・・・」

『うーっ!!』

(数分後)

「お前ら授業はどうしたんだよ!！」

「次の授業自習になった・・・」

「嘘だつ!！」

『はうつ!！」

お叱りタイム中。特に俺の腕が大変なことになったから。

「・・・つたく!お前ら普段は全く勉強できてねえんだからさ、今ぐらいはちゃんと自習でも出席しておけ!！」

「・・・でも・・・」

「でももへつたくれもない!！」

「うー・・・」

「つか、そっちのルティアはなんでこっち来たわけさ?」

「へうう・・・」

「・・・まあとにかく!俺は大丈夫だからさつさと戻った戻った!」

「やだ。」

「・・・やだつてお前な・・・。さつさと戻らねえと織斑先s」

・あれほど気をつけれ、と釘をさしておいただろう・・・?」

・ピッキング相手にどうしろというんですかい・・・?」

はい千冬さん登場。俺何も悪いことしてないよね?ピッキングされて不法侵入されてそこでこんなバタバタして・・・

「兎に角、だ。」

シパン！

「あつ！！」

ひょいっ。

「・・・避けたか。」

・・・沙霧・・・お前はどんだけ超人な訳？

「自習時間を抜け出してどうする、馬鹿者共。今すぐ戻れ、良いな？」

「・・・はい・・・」

「神崎もだ。」

「私も早退します。」

・・・喧嘩売っちゃったよこの人・・・もう俺知らない・・・

「どこに早退する理由がある？」

「奏が心配だというのと少し禁断症状が出始めているので。」

「・・・禁断症状？」

「一日8時間一緒にいないと色々と痛いちゃうんです。」

「・・・良いから来い。終わってから好きなだけ一緒にいればいい
だろ？・・・ああ、それと・・・」

・・・やっぱりあれですかい？口封じと洒落込みますかいい？

「この事を口外した時・・・単位はやらんからな？」

「は、はい！！」

「・・・(コクン)」

・・・いやー、単位がかけられると誰でもびくびくするよね。・・・
沙霧は例外だけだ。

) HR、もつじき帰れる頃(

S i d e L o l l o t t e

．．．あー、ようやくめんどうさい一日が終わるわね．．．

「．．．．．では、これでHRを終了する(バンツ!!(．．．あいつ
か．．．」

気が付いたら沙霧がいなくなってた。．．．言い終わったと同時に

いなくなった……と言っても過言じゃないわね。寧ろ称賛に値する行動よ、あれ……

「……あの……幸俚君？」

あら、美雪じゃない。

「あ、美雪。どうしたの？」

「今の……沙霧ちゃん……だよな？F1カーさながらの物凄い勢いで廊下を走って行ったけど……」

「……たぶん……」

「そうね……」

……何となく目的が分かりきっているというのが……沙霧らしいわ……

S i d e K a n a d e

・・・放課後になつたなー・・・。
チャイムが聞こえ「(ばんっ!)
奏えっ!!」・・・え?

「奏え つ！！(ドスッ！！)」

「おぶう つ！？」

「だ、旦那様！？」

・・・い、いい突進じゃねえか・・・

「奏奏奏奏奏奏奏・・・」

「ちょ・・・やめ・・・意識が・・・」

「・・・っ！！(グイッ！)」

「・・・あっ・・・！！」

そしてまた始まる俺の取り合い合戦。正直言おう・・・腕が痛い！！

1637

「お前ら落ち着け！！俺は一人しかいねえんだから！！取り合ったところどころにかなるもんじゃねえっての！！」

『うー！！！！』

この取り合い、決して終わることないんだろうな・・・

・・・と思ったら。

「カナ、どう・・・ってバレてる！？」

ユキが帰って……！頼む助けて！！

「というかホントにバレちゃったの!？」

「ピッキングされたらどうしようもねえだろ!!というか誰も付いてきてないよな!？」

「あ、うん、そこは大丈夫。最初はついて回られたけど……どうにか振り切ってきたから。」

「そ、それなら良い……痛いって!!痛いから痛いから!!」

「……奏は私の……!!」

「だっ、旦那様は私のですう!!」

「……むー……」

「うー!!」

「取り合い終了!!」

ユキが無理やり二人を引き剥がしてくれたおかげで、俺の体は事無きを得た。というか分断されずに済んだ。

「うー……」

「……むー……」

それでもなお、いがみ合いは続く。

「奏、無事か?……おい、見つかったのか……」

そして亮まで来た。

「・・・誰にも見つかってないよ・・・な？」

「ああ。どうにかな。」

とりあえずこれ以上の事態は免れそうな気がするんだけど。

「とりあえず確認だ。今のところそここのバカがピッキングしたおかげで二人に目撃されたくらいだ。」
「ピッキング・・・犯罪じゃないのそれ？」
「・・・間違いなく犯罪だ・・・」
「・・・ん。」

横から声が聞こえたのでそつちを見たら、沙霧がなんか唇を突きだしていた。

「・・・で何でお前は唇を突きだす？」
「・・・キス。」
「だ、ただダメですう!!」
「しねえからな!?俺は断じてしねえからな!？」
「・・・だったら押し倒して無理矢理奪うまで・・・」
「旦那様の唇は私のなんですうっ!!」
「ちよ、止め、お、おい、止めてくれ!この色ポケ魔止めてくれ!」

ユキ・亮が後ろからの羽交い絞めでようやく二人を阻止した。

(その夜)

S i d e L u t t i a

・ ・ ・ 旦那様と一緒にいられて ・ ・ ・ 私 ・ ・ ・ 嬉しいです ・ ・ ・

「・・・うつ！?」

・・・・そっか・・・。私の願いはお話したい、気持ちを伝えたい・・・

そんなに長く・・・いられないんだっ・・・

(翌日)

「おはようございます、旦那様」

「・・・後15年・・・寝させてくれ・・・」

・・・15年・・・

「それだとお話できないじゃないですかあゝ!!」

「ん・・・んゝ・・・今日は休みだから・・・寝させてくれ・・・

」

「ふええゝん・・・」

私が旦那様に泣きついた時に、です。

トントン。

奏？朝ごはん一緒に食べにいかない？

「シャルっ!？」

「だ、旦那様・・・!？」

入るよー？

「ちょ、待ってくれ！まだ着替えてな・・・うわっ!？」

「ひゃんっ!!！」

「か、カナ！大丈夫!？」

痛い!!急に旦那様がこっちに倒れて・・・

・・・押し倒されちゃいました

「奏!？大丈夫・・・夫・・・」

(ちなみにこの時の状況は・・・

奏がルティア(シャワーズ)を押し倒し、彼女のHP基準でかなり大きい胸に顔を埋めている、という状況だった)

「・・・奏・・・？これは一体どういことかな・・・？」

「やつほ、かな兄……っておおづー!?これはなんといつ修羅場!」
「?」
「……かなちゃん……?」

Side Kanade

……ああ……シャルにエリイ、真琴にまで見つかった……迂闊だ、俺……

俺……オワタ……

「ぷつは!!窒息するかと思った!」
「やん……旦那様ったら大胆ですう……//」
「ばつ……それ火種……」

思わず俺は後ろを振り向いた。

「() () () エリイニヤニヤの図」

「かなちゃん・・・？これは一体どういうこと・・・？」
「わかりやすいように説明してくれないかなあ・・・？」
「・・・ひづつ！？」

ついにルティア（シャワーズ）がシャル達に気付いて、起きあがった俺の後ろに隠れた。

「・・・まず弁明の余地は？」

『ないよ』

「・・・ですよねー・・・」

「いや、あのさ！？ここで奏が大変なことになったら何も出来なくなるよ！？」

『・・・そっか・・・』

・・・さすがユキ！！伊達に異端審問会に襲われてない！！！！

「とりあえずISはしまつて、ね？」

「・・・なーんか納得いかなーい・・・」

「どうしてその子がいるのか説明してほしいなあ・・・」

・・・どう説明したらいいんだこれ？『朝起きたらいつの間にかいました』じゃ納得できるわけないだろうし・・・

「とりあえず言えるのは・・・」『朝起きたらいつの間にかいました』

ということだ。」

「信じられるわけないよ!!」

「どこから拉致って来たの!?!」

「拉致るかボケ!!それに仮に拉致ったとしても!ここまでなるか!?!」

ここまで、というのは俺の後ろに怯えて隠れているルティア(シャルズ)の現状だ。

明らかに俺を頼りにしていて、しかも抱きついていてという始末。

「・・・あ・・・」

「それもそうだよね・・・」

シャル達が理解してくれた時。

「(バァン!!ドンっ!ギユウウツ!!) 奏!何もされてない・・・!?!無事・・・!?!」

「ぐえ・・・ぐ、ぐるじ・・・」

「ちょ、沙霧!決まってる、決まってるから!!」

「奏、一緒に朝食でもど・・・な、なんだこいつは!?!」

「奏、朝ごはん・・・だ、誰!?!」

ら、ラウラにオリヴィエまで・・・!?!?

「・・・ちよつとアンタ・・・」

「ろ、ロロツト!?!?」

「やっぱり大きいのが好きなのけ!?!?アンタやっぱり変態! 犯罪者

! ロリコン!」

『待て、今のロリコンは無理があると思つ。』

結局見つかったのはいつものメンバー・・・そして第一声が決まっ
て『どこから拉致って来た』だ・・・

「つまり何よ？そいつはアンタの姉から渡された装置でここに出て
来たってわけ!？」

「そう言うことになるな。はっきり言って確証はないけど・・・」
「ううん、確証ならある。私があ装置を渡した時はいなかったけど、今ここにいてってことはあの装置が原因ってことになると思うよっ」

ただいま考察中。とりあえずルティア（シャワーズ）がなぜここに
いるのか、ということから。

「ふーん・・・。それにしても・・・」

・・・鈴？一体どうした？ルティア（シャワーズ）凝視して・・・

むにゅっ。

「ふひゃん!?!」

『ブツ!?!』(亮除く男子勢が一斉に噴き出した音)

り、鈴!?!いきなり驚掴みにしてどうした!?!?

「なーんでこいつはこーんな大層ご立派なものをお持ちなのでしょ
うかねえ〜!?!」

「・・・確かにな・・・」

「ルーを上回るサイズ・・・こりゃ次世代型?」

「うっわ、重っ!?!ずっしりとくる!?!」

「かなちゃん・・・ひよっとしてこんなバインバインな子が好きだ
ったりする・・・?」

「な訳ねえだろ!?!」

「私じゃ不満!?!やっぱり私の小さいからダメなわけ!?!」

「話を聞けやポケエ!?!」

「それ、元々奏が耐久型シャワーズ作った結果なんだよね・・・。
ポケモンが萌え化した時、HP値でサイズが決まるみたいで・・・

奏、結構HPと特殊防御に力注いでたから・・・」

ユキが説明しているその横では・・・

「・・・(いいなあ・・・)」

美雪がルティア(どちらの方も)を見ていた。

そして俺は・・・

「私は・・・ダメ・・・?やっぱり小さい・・・?」
「関係ないからな!？」

「ふにゃあああああああああー!!」

(数分後)

「ふええ〜・・・」

「・・・よしよし・・・」

(さんざん弄られて泣いているルティア(シャワーズ)を奏が慰めていた。しかし・・・)

「こわかったです〜・・・だんなさまあ〜・・・」

(この一言が空気を壊した)

「・・・奏・・・?」『旦那様』ってどういうこと・・・?

「嫁は私だろう・・・?だとしたら必然的に私の夫ではないのか・・・?

」

「いや、ちよ、な?落ち着こうぜ?な?ISの展開も止めようぜ?俺死んじゃうからさ!」

「これが落ち付いていられるか!」

「そうだよ!!これも含めて説明してよ!」

「いやだからさっきの説明で何となくわかってくれよ!」

『わからないっ!』

「やっぱり・・・許してくれなかったりする?」

『問答・・・無用っ!』

とりあえず千冬さんにバレたことを報告し、出席簿を食らって朝食に。

午後はセシリア、鈴がルティア（シャワーズ）に質問攻め。特に俺との関係で……

「ねえねえ、奏とどんな関係なのさ？」

「そ、それは……その……ふ、夫婦……です……//」

「そ、それでプロポーズは!？」

「……あう……//」

止めれ……恥ずいから止めれ……言わんでくれ……

ちなみにプロポーズというか……『シャワーズは俺の嫁!!異論

は認めるがキャンセルさせねえ!!』と思いつきり言ったことがあったかな・・・」

「奏！アンタルティアになんてプロポーズしたのよ！！言いなさい！さもないと・・・」

「さもないと・・・どうなるんだ？」

「いろんな意味で・・・飛ばすわよ？」

「じゃあ俺は逆に蒸発させてやるつか？」

「あたしが悪うございましたあ！！！」

（鈴、土下座して謝る。それほどあの粒子砲の怖さを知っているからだ。）

一方、同じく部屋に来ていたリースは・・・）

「・・・あ、取扱説明書・・・。・・・なにになに・・・？・・・そんな・・・。」

（取扱説明書を見て悲痛な声を洩らしていた）

(夜)

S i d e L u t t i a

私が旦那様と話していられるのは明日の夜まで・・・

それまでに・・・せめて・・・せめて気持ちを・・・感謝の気持ち
と私の想いを伝えなきゃ・・・

(翌朝)

S i d e K a n a d e

翌朝、ルティア（シャワーズ）を起こさないように、リースによって俺達は集められた。

「・・・あのね、聞いてほしい事があるの。あの子・・・ルティアちゃんね?」

「ルティアが・・・どうした？」

話に上がったのはルティア（シャワーズ）。

「・・・今から言うこと・・・覚悟してね・・・？」

「大丈夫。特にカナはそういうことには強いから。」

「・・・分かった。じゃあ・・・ルティアは・・・」

・その後リースから告げられたことを把握するのに時間がかかった・・・

「今日・・・正確には今日の夜・・・強制的に消えちゃうの。そう
じゃなくても、彼女の願いが叶った時点であの子は消える・・・。
あの子の願いはなんなのかわかんないけど、今日消えることは間違
いないから・・・」

S i d e Y u k i h i n a

「そんな・・・」

第一声を発したのは美雪。僕だって耳を疑った。あの華奈多さんが欠陥品を作った、ということになってしまふ事実だ。

「・・・消える・・・？消えるって・・・どういことだよ・・・！？」

「か、カナ！？」

強いと思っていたカナが・・・取り乱した・・・

「なんでだよ！？願いが叶わなくてもたった三日で消える！？ふざけんなよ！なんで・・・なんであんな欠陥品を送ってきやがったんだよ！！！」

「奏・・・」

「なんで・・・なんだよ・・・！こんなのって・・・あんまりじゃねえかよ・・・！」

「・・・はあ・・・」

僕は一つため息をついて、亮にアイコンタクト。

（亮、ここは僕に任せて皆を退出させてくれないかな？）

（・・・分かった。だがあまり泣かせ過ぎるな。悟られても仕方ない。）

（わかってる。僕もそこまでバカじゃないから。）

亮は意図を理解して皆を出してくれた。リースは分かってくれたみたい。

「・・・カナ、今カナがやれることって何だと思う？」

「・・・やれる・・・こと・・・」

「今ここで理不尽さに泣き崩れることでも、嘆き続けることでもな

いでしょ?」

「・・・つまり・・・消えるまでの間、一緒に居続けてやる、ということ・・・なのか・・・?」

「そ。だからいつまでも泣いてないで、さ?」

「・・・バーロー、泣いてなんかねーよ!」

・・・うん、いつものカナに戻った。

「・・・うっし、今すぐ戻ってルティアと一緒にいてやるか!」

・・・さて、僕の仕事もここまで・・・かな?

S i d e L u t t i a

「・・・ただいま。」

「ん・・・ん・・・?」

旦那様・・・?

「ルティア、今日は一日一緒にいてやるからな?」

・・・へ?

S i d e L o l o t t e

・・・今アタシの隣は非常に煩い。なんていったって・・・

「うゝ・・・あゝ・・・うゝ・・・あゝ・・・」

「ちょっと沙霧！少しぐらい大人しくしときなさいよ！！煩くて仕方ないじゃない！！」

そう、沙霧がさっきからベッドの上でぐるぐる転がりながら呻き声をあげてるの・・・

「だってえゝ・・・」

「だっても糸瓜もないわよ！！今日一日ぐらい我慢しなさいっ！！」

「・・・ぐすっ・・・」

・・・アタシは落ちないわよ？

「奏に会いたい奏に会いたい奏に会いたい奏に会いたい奏に会いた
い抱きつきたい抱きつきたい抱きつきたい抱きつきたい抱きつきた
い抱きつきたい・・・」

「寝てなさいっ！」

「あふっ・・・」

もうこれ『奏病』の禁断症状って認定してもいいと思う・・・

「はぁ・・・。これでゆっくり本が読めるわ・・・」

S i d e K a n a d e

今日一日、ルティア（シャワーズ）と一緒にいて……もう夜になった。

料理は全て俺が作ろうとしたが、『私が作ります!!』と言って聞かなくて、結局作らせたら指を所々切ったりと危なっかしそうだったけどちゃんとしたものを作ってくれた。

特に外出することもなく、ただ一緒にいるだけだったけど、ルティア（シャワーズ）はそれでよかったらしい。

「……あの、旦那様……」

「……どうした？ルティア……」

「私……その……あの……」

「……知ってる。今日消えてしまうということ、だろ？」

「……そう。今日消えてしまうこと、そしてその時間が迫ってきているということも……」

「それで……私の気持ち……聞いてください……。私の願い

は……そのことです……」

「……ん。」

ルティア（シャワーズ）が何かを決意したかのように口を開いた。

これを告げてしまったら、私は消えてしまう……。けど、これが私の願いだから……

「旦那様……、ゲームの中のことですけど、私をしっかりと育ててくださって……。ありがとうございます。私を愛してくださって……。本当にありがとうございます。きちんと育ててもらえたこと、愛していただけましたこと……。全て私にとって幸せなことでした……」

「……。礼を言われることじゃないって。」

「でも……。それでも私は本当に嬉しかったです……。ぐすつ……。」「……。ルティア……。」「」

「……。やっぱり……。ダメ……。！覚悟していたけど……。やっぱり……」

「……。旦那様あ……」
「……。ルティア、お前の今の気持ちは……。どうなんだ？」

本当の……。私の……。気持ち……

「・・・離れたく・・・ないです・・・！消えたく・・・ないです・・・！もつと・・・もつと旦那さまとお話したかった！もつと恩返しをしたかった！なのに・・・消えてしまうのは・・・嫌・・・消えたく・・・ない・・・！・・・ひっく・・・もつと・・・叶うなら・・・ずつと一緒にいたかった・・・！ぐすつ・・・」

Side Kanade

「ずつと一緒にいたかった・・・！」

しっかりと聞いたルティア（シャワーズ）の叫び。まだやりたいことがあるのに、それを果たせないまま消えてしまうのが嫌だ、もつと、叶うならずつと一緒にいたかった・・・

けど、それは叶わないという事実……。だけど……

「ルティア、ずっと一緒にいられないことは無いぜ？」

「……ふえ……？」

「ルティアはゲームの中で生き続けるわけだろ？俺がゲームを起動すればルティアといっだって会える。そうだろ？」

確かに面向かって会うことは叶わないかもしれない。けれど、疑似的に俺に会うことは出来る。俺にはそれくらいしか出来ないけど……

「はい……。はい……！」

「ルティア……。俺はお前のことが……。好きだからな……」

そう言っただけ俺はルティア（シャワーズ）を抱きしめた。

「私は……。幸せです……。ひつく……。旦那様に……。こんなに愛していただけ……。私は……。私も……。あなたのことを……」

最後まで言い切ることなく、ルティアは消えてしまった。

けど、その言葉は俺ははっきりと聞こえた。

愛しています・・・！これからもずっと・・・未来永劫・・・あな
たのことを愛し続けます・・・！

そう、聞こえた。

(ドア前)

「・・・いいこと言ってるじゃない・・・バカ・・・」

(1001号室ドアの前には、セシリア、ロロット、エリイ、幸俚、一夏が聞き耳を立てていた。セシリアは涙をぼろぼろと流していた)

「こんな・・・こんな別れってありますの・・・!?!?ぐすっ・・・」

もう顔を見ることも出来ないんですよ・・・？それでよかったな
んて・・・」

「・・・だけど、これでよかったのかもしれないね・・・。早い時
期にこんなことになったから、これだけの悲しみで済んだんだから・
・・・」

「・・・ううん、あのシャワーズとかな兄はずっと一緒にいられる
よ・・・。私達には聞こえなかったかもしれないけどさ、多分かな
兄には聞こえたと思うよ？」
『は？』

(発言の意図が分からない一夏とロロットが同時にエリィに聞いた)

「きっと・・・こういったと思うよ？」未来永劫、愛し続けます』
つて。」

「・・・だったら、そうかもしれないね・・・」

(翌朝)

「あ、おはようカナ。・・・大丈夫？シャワーズのルティアが消えちゃったけど・・・」

「ん？ああ、あのことか？それならもう大丈夫だったの。平気平気。会おうと思えば会えるんだしょ？」

「・・・ふふっ、そう言えばそっか。カナが起動さえすればいつでも会えるもんね。」

やっぱりカナはカナ。そんなカナに育てられたルティアはやっぱり

幸せ者だね。

・・・幸せだね、ルティア・・・

S i d e L u t t i a

私は消えてしまった。そしてまたゲームの中に戻ってきた。

けど・・・けれど・・・私の気持ちはちゃんと伝えることが出来た。
はっきりと『愛してる』ということが出来た。

旦那様からも同じ言葉が聞けた。

例え顔を見ることが出来なくても・・・私は旦那様に会うことが出来る・・・。それだけでも良い・・・。

だから私は今・・・

番外編 もう一人のルティア？～人ならざる少女の想い～（後書き）

～次回予告～

最近奏に構ってもらえなくなった真琴。

それが積もりに積もった時、彼女の本音が爆発した。

それは、かなり危ない方向の本音だった・・・

次回、#51 ジャンクにしてあげる ～病んだ真琴の狂気～

暴走した狙撃手を、熾天使は止めることが出来るのか・・・？

「（奏）・・・おい、『ジャンクにしてあげる』って某人形のあのセリフじゃねえかよ・・・」

まあそれは放置。しかし、よかったですか？ルティア（シャワーズ）消えちゃいましたけど・・・

「（奏）・・・ああ。ルティアの気持ちはちゃんと聞けたし、それに・・・な。」

ふーん・・・まあとりあえずゲストは幸俚ですよって。

「（奏）よ、ユキ。」

「（幸俚）よろしく、カナ。」

じゃあ『一問一答』開始！

奏編

Q1・俊さんから

『ガンダムの世界に飛ばされて、主人公と仲良くなつて一緒に戦う事になりました。専用のガンダムを作ってくれるそうですが、どんな機体が良いですか?』

「(奏) そりゃ・・・まあ、あれだ。DXとかデスサイズヘル、ウイングゼロみたいな奴に乗りたいたいぜ。」

「(幸俚) カナ・・・相変わらず趣味偏ってるね・・・」

「(奏) うっせー!」

奏編終了。

「(奏) 今回少ないな。」

後は幸俚と説明に来てますので。

幸俚編

Q1・俊さんから

『奏が雪菜と付き合う事になったらどんな反応をしますか?』

「(幸俚) 僕は素直に祝福するけど? だって雪菜がカナのこと好きなの分かってるから。というか遠慮要らないのに・・・」

「(奏)・・・いやいや、それは無いだろ?」

「(幸俚)・・・やっぱり相変わらずキング・オブ・唐変朴・・・」

Q2・俊さんから

『雪菜が自分の恋心を諦めるらしいんですけど、兄として如何思いますか?』

「(幸俚) さつきの質問でも言ったと思うけど、遠慮する必要は要らない。好きならちゃんと気持ちを伝えるべきだし、関係が壊れるなんてことないんだから。僕は応援するんだけどなあ・・・」

「(奏) そういうことだ。」

(幸俚)・・・カナのことが好きなんだけどね・・・。雪菜、頑張れ・・・)

最後は説明です。

エドワード・ニューゲートさんからの質問

『雪菜ってブラコンですか？』

『（奏・幸俚）違う。』
では説明どうぞ。

「（幸俚）ブラコンなのは一番下の妹の白雪なんだよね・・・」

「（奏）真田兄妹は3兄妹で、上がユキ、真ん中で長女が雪菜、末っ子が白雪ってわけ。で、その白雪が大変ブラコンでさあ・・・」

「（幸俚）基本心情が『兄ちゃん一番』『他の女子排除』だからね・・・」

「（奏）その上『幸俚以外の男子の存在を認めない』なんて来るからな・・・。俺なんて声変わって『男じゃん』と言われる状況になってもまだ女扱いなんだぜ？」

「（幸俚）で、将来の夢が・・・」

『（奏・幸俚）（ユキノ僕）との結婚・・・』

・・・はい、以上のことで大体分かります。今回はここまで。俊さん、エドワード・ニューゲートさん、いつもありがとうございます。感想をくれる人も毎度毎度ありがとうございます。

次回のゲストは今回出てきたルティア（シャワーズ）です。

とりあえず今回のルティアのことで、なにか意見がありましたらどうぞ。『本編参入希望』と来たらまた新たにストーリー組み直し可能ですね。

そしてプチ解説。

個体値・努力値・種族値・・・ポケモンの能力を決める要素。隠れ数値です。

HP値が・・・ある動画においてコメントに書かれていたことで

す。そのため、シャワーズはブイズの中で一番大きくなります。
フタエノキワミ、アッー！・・・『るろうに剣心』の英語版にて、
左之助が叫んだ『二重の極み』の発音があまりにも片言過ぎて聞こ
えた空耳のようなもの。ポケモンなどでは主に『だいはくはつ』、『
きあいパンチ』に使われたりする。『だいはくはつ』時の『フタエ
ノキワミ、アッー！』は有名。

ではまた次回。

#51 ジャンクにしてあげる く病んだ真琴の狂気く (前書き)

真琴暴走回です。被害に会うのは一番奏に近い(と思われる)あの
人です。

そして途中で出てくるのは・・・あれは歌詞ではありません。ア
ニメの台詞です。

#51 ジャンクにしてあげる く病んだ真琴の狂気く

最近真琴がおかしい。

それは色んな奴から見ても一目瞭然な程に。

く証言1 ロロツトからく

『最近突然』うふふあはは』とか笑いだして・・・気味悪いつたらありゃしないわよ・・・』

く証言2 オリヴィエからく

『昨日突然』かなちゃん是我的・・・』とかぶつぶつ言いだしたのを覚えてるわ・・・』

とりあえず証言は二つだけだけど、他にも実際証言が得られている。ホントの話だ。

前々からちょっと変なところはあった記憶がある（俺に対してえらくひつついてきたりとか人前憚らず抱きついてきたりなど）が、今回が異常だ・・・

そして、あいつの独占欲・・・というかなんと言っかよく分かんないけど・・・それがあそこまで酷いは思わなかった。

それが起きるまでは・・・

(ある平日の昼)

「・・・ちよつと、奏！奏！」

「・・・なんだよ鈴・・・くあ・・・」

寝てた所を鈴に叩き起こされた。

「真琴がなんか変よ・・・？なんか珍しくさっきから黙りこくって
るし・・・」

「・・・そうか？」

「・・・(この唐変朴・・・)」

・・・何ぶつぶつ言ってんだ？

「とにかく！なんか変だから気をつけなさいよ？なーんか沙霧みた
いな・・・じゃない、・・・あーもー！なんて表現したらいいのよ
！！」

「病んだんじゃなーい？」

「そうそれ！！ってエリィアンタいつの間に行ったの・・・」

・・・それは確かに思った。さっきまでいなかったらどうがよ・・・

「今日の真琴、いつもより変なのあたしも思ってたところだし。背
後に気をつけた方がいいよ・・・？あ、ロロットに救援頼んどくか
ら。もしかしたらに備えて・・・だけど。」

「まあ・・・警戒しておくよ。」

(そんな中真琴は・・・)

「・・・・・・・・」

(はつきりと聞き取れはしないが、ぶつぶつと何かを言っていた。
それは・・・)

「・・・かなちゃんは私の物かなちゃんは私の物かなちゃんは私の物かなちゃんは私の物・・・」

(完全におかしくなり始めていた)

(そして事件は起きた・・・)

(放課後)

「さーて、今日はもう帰って・・・」

「・・・奏」

「ちょ、おまっ!!--」

沙霧にいつもの如く抱きつかれ、それを振り解こうとした時、異変が起きた。

「・・・離れて・・・」

「・・・真琴・・・?」

「お、おい・・・？」

・・・なんか怖い。真琴が怖い。

「ど、どうしたんだ・・・？」

「かなちゃんから離れて・・・？離れなかつたら・・・」

いつもの雰囲気じゃない。完全に違う。

「・・・離れなかつたら・・・どうする気・・・？」

沙霧が挑発的に言った時、真琴の口から恐ろしい一言が聞こえた。

「・・・ジャンクにしてあげる・・・」

瞬間、教室が無言になった。誰かが『静かにしろ！』と叫んだわけじゃない。かといって自然に静まり返ったものじゃない。

原因はさっきの真琴の一言。冷たく、それでいて鋭く言い放たれた

それが教室を静寂に包んだのだ。

「……沙霧、悪い事は言わない、すぐ逃げる……」

「……（ふるふる）」

沙霧は沙霧で逃げる気は毛頭ないらしい。今の真琴の一言は冗談だと取ってるっぽい。

「そう……離れないんだね……。だったら……今すぐここでジャンクにしてあげるっ!!」

「……出来るものなら……やってみればいい……!」

同時にISを展開、ぶつかった……。つておい!!

「お前ら待て!! 暴れんなよ!! ここ教室! 他の奴も巻き込むって!!」

「奏! どうした!!」

「ちよ、なによこれ……。! ?」

ラウラとロロットが来た。そして現在の教室の状況を見て啞然とする。

「真琴が暴走しやがって……。沙霧と『ここ』で戦い始めやがった

んだよ……！」

「……とにかく、ここで戦わせ続けるのはまずいぞ……!？」

「場所を移させた方がいいわよ!どこか……広くて何も無い所じゃないと……!！」

広く何も無いところ……そうだ!

「……沙霧!アリーナへ飛べ!すぐに、今すぐにだ!!ラウラもロロツトもすぐ退避!!……周囲を封鎖するように頼む!!」

「……わかった!」

「わかったわよ!あーもう、手のかかるバカなんだからもう!!」「わかつてる!!これ以上被害を広げないために!!」

沙霧が窓を開けて離脱。出来るだけ破壊しないように、という考慮もしっかりしていた。

「まずはあんたをジャンクにしてやるんだから

っ!!!」

真琴もそれを追いかけるように出ていった。……もの見事に窓枠破壊してくれやがったよ畜生……

「……まあ、これで大丈夫だろ……ラウラー、ロロツトー、あのバトルの尻拭いするぞ!」

「そーね!……面倒だけど……」

「仕方ないだろう。出来るだけ痕跡を隠しておかないと……。まあ、窓は無理だが……」

「そこは……あれだ。」

『あいつらに押しつけてしまえばいい。』

満場一致で罪を押し付けることを決定した後、三人で散らかった教室の後片付け。

「しつかしまあ……ホントにこの学園の机って頑丈よね……」

「あれだけ暴れても何一つとして曲がってないなんてな……」

「一体何があった？」

『……』

ギギギ、という音が鳴りそうな感じで声のした方を向く。

「何があったか簡潔に説明しろ。いいな？」

『……はい……』

1 1の鬼こと千冬さんがいた……

(第一アリーナ)

「うーあー・・・」

「カナ！早く！大変なことになってるから！！」

「頼むから急かすな・・・こっちは作業したばっかなんだぞ・・・」
「？」

ユキに急かされて入ったアリーナ。その中では・・・

あっはははははははは！！あはははははははははは！！さっさとジャンクになりなさい！この私の手で！！あはははははははははは！！

・・・ジリ貧・・・っ！

真琴が一方的に沙霧のスペリオルビット・シールドモードに向けてビットや精密射撃によって攻撃する暇を与えない連撃を加えていた。高笑いしながら。怖・・・

「・・・まさかあの『銀真琴』モードになるなんて・・・」

「・・・俺も気付かなかったよ・・・『銀真琴』モードなんて・・・」

『銀真琴』・・・それは真琴が暴走した時につけられる状態名のことで、簡単に言えば独占欲が非常に高まった自己中モードのこと。

「このままだと沙霧が危ねえ・・・止めるぞ、ユキ！！」

「了解！あの方法で行くよ！！」

「OK、陽動は任せときな！！」

「あ、アタシもやるわよ！！」

二人がピットに入り、ユキは別行動。

《・・・ユキ、改めて確認。やることは分かってるな？》

《問題ないよ。やるべきことは・・・ね。そっちは大丈夫？ロロツトに作戦伝えた？》

《・・・今から伝える。》

《わかってることは・・・》

《頭にアーマーが無い事が致命的な弱点ということ！！》

ユキとのプライベート・チャンネルを切って、ロロツトの方を向く。

「ロロツト、俺達のやるべきことは陽動だ。ユキが作戦を成功させるまでひたすら攻撃を避けていく、ただそれだけだ。」

「・・・作戦ってなんなのよ・・・？」

「あいつのあの状態を止める、唯一の方法、とでも言っとこうか？」

「・・・分かったわ、本気で避け続ければいいのね？」

「そういうことだ。」

ロロツトに作戦を伝えたことだし・・・よし、やるか！

「・・・ゼロ、起動！」

「セグエンテ、アタシに勝利を見せなさい！！！」

俺達はアリーナに出た。

S
i
d
e
Y
u
k
i
h
i
n
a

カナたちがアリーナに出た・・・！僕も作戦開始だ・・・！

無事でいてね・・・頼むから・・・！そして・・・

陽動・・・頑張っ
て・・・！

S i d e K a n a d e

「沙霧！下がれ！後は俺達に任せろ！！」
「……！（コクン）」

沙霧は一つ頷いて下がった。

「……かなちゃん……退いて……？あいつをジャンクに出来ないから……！」
「だったら俺達をジャンクにしてからにしな！」
「アタシ達をジャンクに出来たら先に行かせてあげるわ！」

「……なら……かなちゃんはそのまま……ロロツト……ア
ンタはジャンクにしてあげる……」

言っや否や、閃光が俺とロロツトの間を飛んでくる。

《ロロツト、真琴の後ろにだけは行くな!》

《わかってる! 背後をとれるように、でしょ!?!》

《それと的を絞らせるな!》

《あの時の戦いで分かりきってること、言わないでくれる!?!》

分かってるようになにより……! ユキ、早く作戦を完遂させてく
れ……!

S i d e Y u k i h i n a

．．．カナ達が陽動を始めた．．．！僕の位置はまだ分からないはず．．．！

後．．．後少し．．．後少しで．．．

よし．．．今だっ！！

「……あ」

S i d e K a n a d e

「いよおつし!!成功した!」

「・・・あれで成功?どういうことよ?」

近くに来たロロツトが俺に聞いた。『なぜ頭にヘッドホンを付けただけで成功な訳?』と。

「まあ見てれば分かるさ。強制的に元に戻すわけだから荒療治、み
たいなものだし。じゃあユキ、頼むね。」

OK、スイッチオン!

ユキがスイッチを入れた。そして流れたのは・・・

S i d e
M a k o t o

・・・ユツキーにヘッドホンさせられて電源入れられた・・・

・・・ジャンクにされる・・・やだ・・・!

《 ちゃーはははー! どうはははー! がははははー! 殻かZOY!?!? 》

ふぎぢや

っ！！！！！

「な、なに！？何が起きたの！？」

突然聞こえた真琴の悲鳴に驚いた。

「まあ、ちよつと二度と聞きたくないような曲を再生中なわけ。．．
．聞く？」

「．．．ちよ、ちよつとだけなら．．．」

．．．この選択は、未来永劫間違えた選択だと思っている．．．

「イヤホンして．．．つと．．．」

そして私は、二度と聞きたくない曲が入ったそのプレイヤーを再生
した．．．

最初は普通に軽快な曲だと思ってたら．．．

《 であーはははー！どぅはははー！がははははー！殻かZOY！？ 》

「っ！！？」

(翠日：Side Kanade)

「・・・かなちゃん、ごめんね・・・」

朝いきなり真琴が謝ってきた。・・・まあ、昨日のことだろうな・・・

「もう二度とあれ聞きたくないんだったらもうちょっと自分を抑えることを学べよ？いいか？」

「うん、うん・・・」

真琴はそう言って自分の席に戻っていった。そして俺はロロットを

#51 ジャンクにしてあげる く病んだ真琴の狂気く（後書き）

く次回予告く

『アンタの特技ってなんなのよ？』

鈴の一言がきつかけとなったオリヴィエの話。

彼女から告げられた特技、それは意外なものだった……！

次回、#52 オリヴィエの特技

彼女の特技、それは普通では考えられないものだった……！

『一問一答』！……の前にちよつと補足です。

「（奏）頼むわ。」

今回出てきたヘッドホンから流れていたどこかで聞いたことあるようなあの歌詞っぽいのは……あれはマジな話、歌詞ではありません。『ローゼンデデン』でググッとみてください。それで分かります。……勇気のある人はどうぞ。

「（奏）あのロロツトでも『ふぎやー』言ってたしな……。んじや、」一問一答『だな。」

今日はゲストもいますので。

Q1・エドワード・ニューゲートさんから

『華奈多さんが作った発明品の中で、最も碌でもなかったもの、或

いはもつとも被害に遭ったものは何ですか？」

「(奏)・・・なんだろうな・・・もつとも碌でもなかったのは・・・やっぱりあれだ、『全自動悲しみ製造機』・・・だな。あれほど碌でもないし無意味なものは無かった・・・。最も被害に遭ったなと思うのは『対真琴用ハリセンピッチングマシンパトリオット1世』だな。なぜか俺だけ叩かれていた記憶がある・・・。」

・・・だそうです。奏分は実はこれだけ・・・なんですよね。

「(奏)へえ・・・？じゃ後はゲストか？」

前回の幸俚とかにもありましたが、その解答はここで代わりにさせていただきます。

全部エドワード・ニューゲートさんからです。

Q1. 『末っ子の白雪は今どうしていますか？』

現在幸俚のことをただ悶々と考え、喚いて、暴走して・・・など、半分病んでいます。

Q2. 『ユキと亮は、奏と喧嘩したことはありますか？』

ないです。幸俚事態あまり喧嘩を好まない人間性で、亮は自分から手を出さないタイプ。そのため、喧嘩は起きてません。

Q3. 『奏相手に「これなら絶対負けない!!」というものはありますか？』

幸俚が唯一絶対負けないとと言えるのはガンシューティングゲームとトランプです。奏は意外とこういうのが苦手なので、そこでよく負けていたりします。

とまあ、これくらいですね。では・・・ゲストを召喚します!!

「(奏)・・・召喚・・・だと・・・!？」

では・・・試獣^{サモン}召喚っ!!

「(奏)それ確かに召喚だけど!!違うから!!いろんな意味で違う

「からなあ!？」

「(????) あ・・・旦那様・・・!」

「(奏)・・・まさか・・・?」

はい、今回のゲストは・・・前回の番外編でのヒロイン、ルティア(シャワーズ)に来てもらいました!彼女に関する報告もあります故。

「(ルティア)・・・(びくびく)」

「(奏)・・・あー、大丈夫だから大丈夫だから・・・」

樽ありますけど・・・どうします?

「(ルティア)・・・っ!」

「(奏)うわー・・・ものすっごい勢いで入って行った・・・」

「(ルティア)・・・はふう・・・」

落ち着いたようなので質問回答お願いしますね?

「(ルティア)は、はい!」

Q1・俊さんから

『現実世界に自分と同じ名前の女の子が居ると知った時はどんな気持ちでしたか?』

「(ルティア)えと、ちょっとびっくりしてました。」

「(奏)・・・NN変えときゃよかったかな・・・?」

Q2・俊さんから

『もう一度実体化出来て今度は奏とずっと一緒に居られるとしたらどんな気持ちですか?』

「(ルティア)凄いい嬉しいです!!」

「(奏)うわっ!?!?・・・びっくりした・・・」

「(ルティア)あ・・・ご、ごめんなさい・・・ノノノ」

「(奏)ま、別にいいけどよ。で?報告とは何ぞやと。」

はい・・・それは・・・

ルティア（シャワーズ）本編参入&レギュラー化決定！！

「（ルティア）……！！」（周りに花が咲いたような感じの笑顔）

「（奏）マジで？」

はい。あの時の感想全四件中二件が『ルティア復活希望』あるいは『ルティアレギュラー化希望』とあったので。ただ、ルティアにすると被るため、奏に新しいNNを考えてもらって、それが新しいルティアの名前、ということにします。一応設定は出来あがっています。擬人化のままだと尻尾とかどうすんねん、という感じなので、そこは髪の毛で疑似的に再現する、という感じで。新しいNNは#52に発表してもらいますから。

「（奏）ん、分かった。」

「（ルティア）……旦那様あ……／／／」

#Other オリジナルキャラクターイメージミュージック一覧Part 2

本来の予告を違えまして・・・今回は臨海学校編以降の新規登場キャラクターのイメージミュージック一覧です。

#Other オリジナルキャラクターイメージミュージック一覧Part 2

イメージミュージック第二弾ねー！

「(奏)おい、どこのkwskだ？」

気にしないでねー！オレ、頑張るよー！！

「(奏)やっぱり某ピンク玉の出るあのアニメのkwskだな。」

・・・ふう。気が済んだのでリストをまずは明かしていきます。ロット、幸俚、亮、雪菜、ルティア(シャワーズ)ですね、紹介するのは。ルティア(シャワーズ)については、今後登場する時のも踏まえての物になりますので。

「(奏)だな。んじゃ、どぞ。」

ロット

基本：薔薇獄乙女

情報：アニメ『ローゼンメイデン オーベルテューレ』OP

作詞：宝野アリカ 作曲・編曲：片倉三起也 アーティスト：

ALI PROJECT

初戦闘時(初会合の時、奏が落ちるまで) : The wildness of sadness

情報：ゲーム『テイルズオブシンフォニア ラタトスクの騎士』V
Sリヒター・アーベント時

幸俚

基本：Once

情報：アニメ『いつか天魔の黒ウサギ』OP

作詞：岩里裕穂 作曲：清水武仁 編曲：小森茂生 歌：原

田ひとみ

戦闘時：抜刀！研ぎ澄ませ！

情報：ゲーム『テイルズオブグレイセス』序盤戦闘BGM

亮

DAYBREAK'S BELL

情報：アニメ『機動戦士ガンダムOO』前期OP

作詞：hyde 作曲：Ken 歌：L'Arc en C

iel

雪菜

まもりたい〜White Wishes

情報：ゲーム『テイルズオブグレイセス』主題歌

作詞：MIZUE 作曲：Hiroo Yamaguchi

アーティスト：BOA

ルティア（シャワーズ）

基本：progress

情報：ゲーム『テイルズオブエクシリア』主題歌

アーティスト：浜崎あゆみ

番外編最後の辺り：小さな誓い

情報：ドラマCD『魔法少女リリカルなのはStrikers』挿

入歌

作詞：都築真紀 作曲・編曲：佐野弘明 アーティスト：リ
インフォースツヴァイ（ゆかな）

番外編最後の別れのシーン：say goodbye&g
ood day

情報：ゲーム『テイルズオブイノセンス』EDテーマソング

作詞・作曲・アーティスト：KOKIA

「（奏）・・・なんかさあ、ルティア（シャワーズ）の結構充実し
てないか？」

仕方が無い事なのですよ。あ、『にぱ』とかは言わないのでこ
安心を。

「（奏）・・・お前が言ったら気持ち悪いわ。」

それとルティア（シャワーズ）の基本ソング、progressは
9月発売の『テイルズオブエクリシア』の主題歌で、浜崎あゆみさ
んの新作です。

「（奏）そういや、ユキの基本ソングのOnceってさ、最初『誰
が歌ってんのこれ？』って思ってなかったけ？アンタ・・・」

・・・思いましたよ。そしてアーティスト見て『・・・マヂデ！？』
て思いましたもん。イメージがかけ離れてましたから。あの人の本
来の姿と・・・

「（奏）今回は緊急特別番組的扱いにしてくれ。#52がまとまら
ないから、という理由で、だ。ユキとかのCVは後々明かすから気
にしないでくれ。じゃな。」

#52 オリヴェイエの特技（前書き）

今まで奏に何かしても全然ダメなところしか見せられなかったオリ
ヴェイエの特技が・・・！！

後書きでついに・・・！！

52 オリヴィエの特技

「あのさあ、アンタの特技って一体何なのよ？」

オリヴィエの特技追求は、鈴のこの一言がきっかけだった。

「・・・いきなり何？」

「だってあんた、今まで見た感じ特技の一つもあるように見えなかったからさあ、なんか特技あるのかなーって。」

「あ、あるわよ！！私にだって・・・ちゃんとあるわよ！！！」

ムキになって反論するオリヴィエ。

「へー？じゃあ今見せてよ？」

「え・・・あ・・・それは・・・無理・・・」

結局どもる。・・・もしかして・・・

「オリヴィエの特技ってさ、何かしら道具が無いと無理なタイプか？」

「・・・あ。ひょっとしてピアノ弾けるとかそう言っの？」

そしてオリヴェイエの特技は、芸術科目・・・特に音楽の時にいかに
なく発揮された・・・

「では、それぞれ楽器を選んでください。」

音楽担当の先生に言われ、俺達は適当な楽器を選ぶ。．．．つってもまともには引ける楽器は無い。俺とユキは少なくともリコーダーかハーモニカくらいしか吹けない．．．

なんて考えていた時だった。

「……ね、レギンハルトさん……？」
「……オリヴィエすごい……」

なんか音が聞こえてきたなーと思ったら、オリヴィエがピアノ演奏していた。楽譜が無い、聞いたことある曲だから多分例のあの曲だな、こりゃ……

「……んー……？」

弾きながらオリヴィエが声を洩らした。

そして突然演奏を止めた。

「……なーんか音が違う……。どこか狂ってるのかな……？」

そう言ったオリヴィエは一つ一つ鍵盤を叩き始めた。

「そう言えばエリイは何やってんだ……？」

エリイの方を見てみたら……

なんか某ヒゲ兄弟3のステージ曲を鉄琴で演奏していた。……あ

る意味そつちも凄い気がする・・・

この授業は、最早オリヴィエの独壇場だった。

「オリヴィエってさ、ひょっとしたら他の楽器も演奏できたりする？」

「出来るわよ。余裕余裕。」

「じゃあさじゃあさ、ホルンでこれ演奏してよ！！」

「・・・OK、やってやるわよ！」

女子がわいのわいの言っているその中で、オリヴィエはホルンの演奏を始めた。

「・・・なあ、ユキ、亮、一夏・・・」

「・・・分かってる・・・」

「皆まで言うな・・・」

「・・・絶望だよね・・・」

シャル達もそれぞれの物を手にしてはいたが、オリヴィエに目が行っているし。

「・・・といつかなんでもいつの間に他の楽器に持ち替えて軽騎兵吹き始めてんだよあいつは・・・」

いつの間にか別の楽器に持ち替えてメインパートを吹いているオリヴィエ・・・もつついていけない気がした。

「・・・オリヴィエ・・・吹奏楽部入りなよ・・・！絶対優遇されるって！！」

「優遇どころじゃないよ！！絶対唯一神的扱いされるよ！！」

「彼女がいれば吹奏楽部超安泰！！こりゃ救いの神だよ！！」

「レギンハルトさん、どう！？吹奏楽部に入ってくれませんか！？」

「え、えーと・・・わ、私は・・・」

オリヴィエ、めちゃくちゃ困惑してら・・・あはは・・・

それに比べて俺達は・・・

『はあ・・・』

「・・・溜息つくしか・・・ないな・・・」

男子一同、ため息だけが出てくるだけだった・・・

「オリヴィエ、ゲームのやつも譜面あれば弾ける！？」

「まあ・・・可能っちゃ可能よ？」

「じゃあチエックナイト弾いてよ！！これ譜面！」

「次これ！！」

「あーもー次々に渡さないでってば！！初見モノばかりじゃないの！！全部ピアノだからいいけど・・・」

そして再び演奏が始まった。最初は・・・お、チエックナイトだ。正式名称・・・『強いぞ星の戦士』・・・だったか？

流暢な演奏してんな畜生・・・指が動いてやがる・・・しかも合っ
てる・・・

(昼)

「・・・オリヴィエさん・・・あなたなぜそこまで楽器の扱いに長けているのですか・・・!?!?」

「そ、それは・・・ね?私の家だけ・・・何かしら特技を身につけることが絶対家訓だったから・・・」

「へ?そうなの?」

(今明かされたオリヴィエの家の家訓。びっくりかもしれない。なんでオリヴィエが全楽器を万能的に演奏可能なのか・・・)

「オリヴィエが楽器あんなにできるのって・・・結構練習した?」

「そうだよ?六歳の頃からピアノは重点的にやらされたし出来なかつたら叱られたし・・・」

「十三歳からは失敗したら(ちゅどん)されたりってあれちよつとリー姉一体あたしを何処に連れていっわなにをするやみやああああああああああああ!!!」

(・・・な、何が起きたんだろう・・・)(リース、エリイを除く全員がこの悲鳴を聞いて思った一言です)

(エリイがリースによって・・・大変なことになりました・・・)

「ふう・・・ごめんね。エリイが変なこと言って。」

「・・・り、リース・・・?その手に付いた血は一体・・・」

「あ、これ?気にしたら負けだよ?」

「え、でも・・・」

「気にしたら負けだよ?」

『は、はいっ!?!』

威圧のため、全員が口を閉じた・・・

「・・・で、オリヴィエが楽器をあそこまで万能的に演奏できるの
ってやっぱりたくさん練習したから、だよな?」

「・・・そ、そう。け、決してエリイが言ったことないからね?嘘
じゃないからね!?!」

『・・・怪しい・・・』

「ちよっ、エリイの言ったこと真に受け過ぎだっ!?!」

(一方エリイは・・・)

「・・・」

(・・・へんじがない ただの しかばねのようだ)

52 オリヴィエの特技（後書き）

（次回予告）

休みになったある日の昼。

食堂が休みなため、各自で昼食を作って・・・

そして奏の部屋には奏に『集りに』来たメンバーがいた。

次回、# 53 ツイン酔いどれ大暴走

奏は酔いどれ二人をどう止めるのか・・・？

「（奏）・・・おい。」

ハインデシヨウ？

「（奏）このタイトルの意味はなんだ！？」

・・・サア、ナンデシヨウ・・・？

「（奏）・・・おい・・・」

さ、さて、それはさておき『一問一答』！！

Q1・俊さんから（何度も質問の訂正を要求してしまいすみませんでした）

『ウィングゼロカスタムのゼロシステムとブルーディスプレイー3号機のEXAMシステム、どっちが有利だと思いますか？』

「（奏）EXAMとゼロシステム・・・難しすぎるな・・・。まず解説だが、EXAMは『人間の脳波を電磁波として捉え、その中に

ある所謂『殺気』を判別して敵パイロットの位置特定や攻撃を察知、回避するシステムだ。で、ゼロシステムは正式名称が『Zonin g and Emotional Range Omitted System（ゾーニング アンド エモーショナル レンジ オ ミットテッド システム）』、直訳すれば『領域化及び情動域欠落化 装置』。分析・予測した情報の推移に応じた行動の選択や結末を搭乗者の脳に直接見せる機構・・・言いかえれば搭乗者に直接勝利への道筋を見せる機構、となる。欠点をあげれば、EXAMは人間の殺気や死を感知して殲滅行為を行うシステムだから、戦場に出してしまうと暴走してしまう、同じEXAM搭載機同士が鉢合わせすると戦いだしてしまう、という二点だ。ゼロシステムは『単機での勝利を目的とする』道筋を示すから、自爆などのパイロット自身の死や友軍機の撃墜などの非人道的なものも見せる。システムに翻弄されて暴走を起こすかそれに耐えかねて精神崩壊や廃人化が起こる可能性がある、という点だな。それも鑑みても・・・俺はゼロシステムのほうが強いと思うな。」

「（奏）一応ゼロシステムは勝利を呼び込むんだぜ？多分EXAMの対処も分析してしまうだろうから・・・」
ということですよ。

Q2・エドワード・ニューゲートさんから
『真琴が初めて銀真琴になったのは何時？』
「（奏）うわ、嫌な質問するな・・・」
で？

「（奏）小四の時だよ。姉さんがあまりにもベタベタしてた時にいきなりプツンしやがって・・・突然『ジャンクにしてあげる・・・』とか言い出した記憶がある・・・」

Q3・エドワード・ニューゲートさんから

『突如子供の姿になってしまいました、気付かず外に出てしま
い、その姿を奏ラバーズの誰かに見られました。「コイツに見つか
つたら不味い!」という人物と「コイツになら見つかったも別に良
い」という人物を挙げてください』

「(奏) 見つかったら不味いと思うのはやっぱ沙霧だろうな。なん
か・・・色々されそうで怖い。で、逆はルティアとシャルだ。あの
二人なら分かってくれるだろうし、何もしてこないだろうし・・・」

Q4・エドワード・ニューゲートさんから

『ラバーズの面子がSDキャラになってしまいました。誰のSD化
が一番興味ある?』

「(奏)・・・うん、ラウラかロロットが気になる。」
なぜ?

「(奏)・・・なんかめっちゃ気になった・・・」

Q5・俊さんから

『Hi・ガンダムとユニコーンガンダムとフェニックスガンダム、
愛機として乗り込むならどれが良い?』

「(奏) フェニックス・・・かな?」

ほう・・・?それは一体なぜ?

「(奏)・・・実は・・・俺ファンネルとか苦手なんだよな・・・。
実際にゲームで使うと・・・」

なるほど。今回はここまでです。いつもありがとうございます。そ
して・・・

旧ルティア(シャワーズ)の新NN発表~~~~~!!!

ちゃんと考えてきましたよね!?

「(奏)・・・ま、まあ・・・な。」
では、どうぞ!..!

「(奏)俺のシャワーズの新NNは・・・

『リーシャ』だ!」

さて、その由来は?

「(奏)やっぱり名前の一部は使いたって思いもあったしな・・・
けどあんまり変なのは嫌だし・・・可愛い名前の方がいいと思って、
な。」

ということで、旧『ルティア』は『リーシャ』として・・・本編参
入します!!

参入時期は・・・

5 5 頃！！お楽しみに！！

#53 ツイン酔いどれ大暴走(前書き)

はい、一度見たことある人ならお分かりと思われるタイトル・・・
奏、乙です。

#53 ツイン酔いどれ大暴走

「・・・あのな？休みの度に俺の部屋に飯食いに来るのやめてくれねえか!？」

ある昼。世間では休日と呼ばれるその日の昼、生徒は各自適当に昼食をとっていた。

そして奏・幸俚の居る1001号室。

その部屋にはいつも遊びに来ていたエリイ、無理矢理連れてこられたルティア・シャルロット（エリイが無理矢理連れてきた）の他に、真琴・沙霧・オリヴィエ・ラウラがいた。前三人は普通にいつも来ているが、後の四人は奏に昼食を集りに来ていた。たまに美雪も来るが、彼女はユキ目当てだから気にしないでおく。

『えー？いーじゃん!』

「・・・前も作ってくれた・・・」

「うむ。あれは本当に美味かった。また食べたいぞ。」

「というかエリイとかルティアとかがずるい!! いつつもかなちゃんの手料理食べてるじゃん!!」

・・・エリイは仕方ないと思う。だって遊びに来てるわけだし、料理作れないしな・・・。ま、ルティアとかシャルが作れるからいいと思うけど。

「お前らタダ飯集りに来ただけだろ！！『ゆっくりしていつてね』とか言わねえからな！？」

「言つてよー！！」

「・・・ぶーぶー・・・」

・・・まったく・・・しょうがねえから作るけどよ・・・！！

「・・・あ、そだ。ルティアと沙霧退室頼むわ。」

「・・・(うるうる)なんで？」

「・・・ぐすつ・・・(どうして?)」

・・・なぜ目線で訴えてくる？なぜ涙目で訴えてくる？無言の訴えほど辛いものは無いんだぜ？

「ちよつと二人がいると・・・な。」

「あ、なるへそ。はいはいさっさと退席。」

エリィが悟ってくれて二人を部屋から出す。

「奏、大丈夫なの？前見た時においだけで泥酔してたけど・・・」

「できるだけにおいとアルコールは飛ばす。あと使うのは料理酒だし、そこまでは無いだろ・・・」

「じゃ、じゃあ安心だね・・・」

・・・あんなことがあったからなあ・・・シャルの心配も分かるけど・・・出来るだけアルコールは吹っ飛ばす気でいたし。

「・・・いつ見てもかなちゃん手際いいなあ・・・」

「女として羨ましいというか嫉妬しちゃうというか・・・」

「織斑先生も言ってたけど・・・奏のお嫁さんになれた人って幸せだよ、絶対・・・」

「・・・確かにな・・・」

(部屋を追い出されたルティア・沙霧以外の四人が奏の調理の様子を見ながら、口々に呟いていた。それほど奏の手際の良さは良いのだ。フライパンで野菜を炒めているその傍らで卵を溶き、そして溶き終えたと思ったら野菜を切って盛り付けて、まだ野菜を炒めるのに時間がかかると思っていたらその間にドレッシングまで作り終えるという・・・。なお、野菜が多めなのは奏だからという理由で通ずると思っしてほしい。

そして女子一同が思ったことは・・・)

(奏/かなちゃん)並みに料理が出来るようになるう!そして絶対奏と・・・!)

(ということだった)

後は・・・ちよつと簡単に肉を焼くか……。鶏肉は酒使つと意外と柔らかくなる・・・ま、今回は料理酒で代用するしかねえんだけどな。

「カナー、あんまり焦らなくていいからなー？」

「ん。あ、ユキ、あれ流してくれ。」

「了解。」

（幸俚が奏に頼まれて流したのは、『帝国のマーチ』・・・なのだが・・・）

「・・・なんだろ、この凄い脱力感は・・・」

「これ、本当に『帝国のマーチ』・・・？」

「ああ・・・なんだか眠たくなってきたぞ・・・」

「『帝国のマーチ』なのにリラックスできるなんて思わなかったよ・・・はふう・・・」

（通称『やる気のない帝国のマーチ』が流れたため、それぞれが脱力、リラックスし始めた。ラウラなんてうとうとし始めているくらいなのだから。

そんな中・・・）

「ゆ、幸俚・・・君？入って・・・いい、かな・・・？」

「あ、美雪？良いよ？」

(美雪がいつものように来た。なお『やる気のない帝国のマーチ』は継続的に流れている)

「さっき廊下にルティアちゃんと沙霧ちゃんがいたんだけど・・・どうして？」

「今カナが料理しててね、それでもしもの事があつたら、ということでもらってるんだ・・・何が起きたかはよく知らないんだけど、聞いたら『それだけは思い出させないでくれ・・・あれは黒歴史として葬り去りたいんだ・・・』って言われて・・・」

「そ、そうなんだ・・・(く、黒歴史・・・?)」

美雪が来たか・・・。だったらまた一人分追加で作らなきゃな。

(数分後)

「あ、ユキ、ちよいちよい・・・」
「どうしたの?」

(奏が幸俚を呼んだ)

「ちよい試食頼むわ。アルコール飛んだかどうか・・・俺だとわか

んねえし。」

「あ、ひよつとして鶏肉柔らかくするためにアルコール漬けにしてた？」

「少量だけだな。使った分は捨てたけど。味付けは・・・保証するぜ。」

なぜユキに試食を頼んだか。前・・・つっても俺が二回目の転校をするちよつと前の話だけど、『お別れ会』みたいなやつたんだよな・・・。そんなときに雪の親父がユキに酒を進めて・・・それを飲んだのは良いんだけど・・・ユキの奴、全然酔わなかったんだ・・・。確かあれ、結構度数強かった気がするんだけど・・・？

「・・・うん、お酒の感じは無いよ。これならだれも酔わなくて済むかも。においも無いし・・・」

「OK、んじゃ、昼飯にすつか。」

この時、俺は正直甘かったと思った。まさかあの二人が・・・

あそこまで弱かったとは思わなかったんだから・・・

「入ってきていいよー。」

エリイが二人を呼んだ。

「ぐぼおっ!？」

「・・・待つてた・・・」

「・・・い、良いタツクルじゃねえか・・・。というか・・・後ろの皆様方?何故そんな怒気を発しているのではありませんか?」

「・・・奏・・・」

「なんでそんなことをしているのかなあ?」

「ちよい待ち、これ不可抗力だから・・・な?」

「避けようとしてなかったぞ・・・?」

「避けれるか!!」

(そんな中、オリヴィエだけは何もしていなかった)

「確かにあれは避けられなかったと思うけど?だってあの時の沙霧の移動速度見たでしょ?F1カーとか言っても過言じゃなかったわよ?」

・・・オリヴィエ・・・そのまま俺の援護を頼む・・・つか沙霧退
け・・・！

「や。」

「『や』ておま・・・って読心術!？」

(『やる気のない』ry)のおかげでどうにか無事に生きていられた奏を含めた全員が、ようやく昼食を取り始めた)

「・・・やっぱりかなちゃん腕上げてるよお・・・」

「・・・結構自信ある方って思ってたのに・・・シヨックだよ・・・」

「

「神様はやっぱり私達には何も恵んでくれなかったのよ・・・!」

「・・・悔し過ぎる・・・!!」

・・・おいおい、そこまでのもんじゃねえだろ・・・？

「・・・うう・・・プライドをズタズタに引き裂かれた感じだよ・・・」

「・・・」

・・・美雪、お前もか。

(奏、酔っ払いズによって拉致)

「・・・かな兄、今の悲鳴はないわーって思うよ・・・」

「・・・というか助けにいかないと!」

「あのままでは・・・本来私が貰うべきものだった(禁則事項)が・・・!」

「ラウラ!そんなこと言っていないで早く行くよ!」

「むう・・・」

(ロロット・沙霧の部屋)

バァン!!

「っ!？」

(部屋にいたロロットは突然開け放たれたドアに驚いた)

「ロロット!! 部屋でなしやい!! ひつく!!」

「ちよ、うええ!?! い、いきなり何よ!?! アンタら顔真つ赤よ!?!」

つか奏、アンター一体何してんの!？」

「動けねえんだよ!!!つか拉致られてきたんだ!!!」

「さっさとれえばいいによ!!!れにゃひゃ・・・」(訳…さっさと出ればいいの!!!でなきゃ・・・)」

「ろろつとをたべりゆかりゃ!!!」

「わ、分かったわよ!分かったから何もしないで!!!つかアタシを食うってどういうことよ!？」

(部屋をあっさりと出たロロツト。さすがにあの二人に戦慄を覚え、というのが原因だ)

「ちよ、ロロツト!?頼む、助けてくれ!!!」

「・・・ゴメン、無理。」

「嘘だああああああああああ!!!」

(・・・だって助けに行つて逆に大変な目に遭うのヤだし。)

(ロロツト、奏を見捨てた)

(室内)

「うわっ!?!」

(ベッドに捨てられるように投げられた奏。そして、目の前には明らかに目がおかしい酔ったルティアと沙霧)

「……落ち着こうぜ?とにかく落ち着いて……な?」

「……やら。」

「……にゃー!」

「なんとおーっ!」 (神回避)

危ね!!もし今の二人に捕まりでもしたら……俺はもう二度と元には戻れなくなる……絶対……!!

「ふーっ・・・ふーっ・・・」
「にゃーっ!!」
「つおおーっ!!」

(回避回避で連続回避中。ある意味素晴らしい回避を見せる奏。その間攻撃する側の人間が一人になっていることに気付いていない)

「・・・あちゆいい・・・」
「ぶっ!?!」

(ルティアが脱ぎだしたのだ。それはそれはもう大変。もう上着なんて着てないのだから)

「ちょ、脱ぐな!うおおっ!!沙霧、もう止めてくれ!!」
「あ〜ちゅ〜い〜ん〜ら〜も〜ん!!」
「か〜にやれ〜」
「抱きつくな脱ぐない加減酔い覚めるボケっ!!」

無理矢理抑え込むため、二人をシートで一気に包んでベッドに引き倒した時だった。

「カナ、大丈夫・・・って何やらお楽しみだったみたいで・・・ごめんね・・・」
「これのどこがお楽しみに見えるっ!?!」

ユキたち突入部隊が来た。

「・・・奏・・・何してるの・・・？」

「シーツがあるからって・・・関係ないよ・・・？」

「・・・やっぱり大きい方が好きな訳・・・？」

「・・・あの二人が羨ましい・・・私も奏に押し倒されたかった・・・」

やーシャル達が怖い。なんかラウラだけ期待の籠った眼で見てるのが気になるけど・・・

・・・一応言っておくけど、俺が抑え込むのに触ってるの腹当たりだからな？胸とか触ってない・・・はずだからな？なんか腕んこもぞもぞしてるけど・・・

『あーっ！！』

「一体何がどうした！？」

なんか突然女子勢が叫びだしたんだけど！？同時に手に何か柔らかいものが当たってる気が・・・あれ？俺腹押さえてて脇腹触ってたよな？なんでこんな柔らかか・・・

「・・・ふふっ」

・・・確信犯がいらっしやいました。沙霧です。こいつ、俺の腹部拘束を解いて胸んところに手を持ってきてやがってました。

ルティアは・・・

「あーっーいー!!」

ついに俺の腕拘束の中で暴れ始めた。・・・やめて、これ以上暴れられたら流石の俺でももたな・・・

「ぶるあああああああああああ!?」

「・・・きゃー」

・・・ついに吹っ飛ばされました。というかルティアに引き込まれた、と言った方が正しいかも・・・

で、どうなったかって言うと・・・ゴメンナサイ、息が出来ません。というか・・・くる・・・し・・・

(現在の状況。ルティア・奏・沙霧の順でサンドイツチ状態。実を言うと、こっぴつ時って実は一番下より真ん中の方が苦しいって知ってました? by 作者)

「・・・ルティア達がいる前で二度と酒使っちゃってんだよ畜生・・・」
「・・・あー、うん、なんで部屋から出てもらったか分かった。あれは酷いね・・・。まあ、今日はこれ聞いてリラックスしてなよ。」
「・・・そうする・・・。」

(10001号室に、なぜか哀愁すら漂うレベルで『やる気のない帝国のマーチ』が流れていた・・・)

#53 ツイン酔いどれ大暴走（後書き）

今回は次回予告はしません。というのも・・・

「（奏）作者がネタ詰まりしたから次回出すつてよ、リーシャ。」

「（幸俚）今回・・・何で僕もいるわけ？」

次回関連でちよつとアンケートをしたくて。アンケート内容は・・・

『幸俚の嫁・キュウコンのヴィルミナをリーシャと同じ扱いにする
かしないか』です。要は実体化させるかどうか、です。キャラは出
来あがってます。セシリア以上のお嬢で高飛車、幸俚に対してはか
なりデレデレ・・・一人称は『妾』、語尾は『じゃ』・・・なんと
いう口　リーな感じが・・・

「（奏）・・・ま、まあ今までにないキャラクターになりそうだな
作者的に考えても。」

「（幸俚）・・・結構キャラ濃いかも・・・」

確かに結構濃いキャラになってます。さあ美雪はどうするのでしょ
うね・・・ふふふ・・・

「（幸俚）じゃあ『一問一答』だね。」

あ、取られた・・・

Q・俊さんから

『姉が送ってきたとある装置によって二頭身になって狼耳と尻尾が
生えてきました。その状態をラヴァーズに見られた場合、誰の反応
が一番疲れますか？また、誰の反応が一番落ち着きますか？』

「（奏）・・・何となく真琴と沙霧が一番疲れる気がする・・・」

「（幸俚）・・・カナの言いたいことがよく分かるよ・・・」

「（奏）で、逆はルティアとかシャルか？あと例外でリース。」

分からなくもない選択。今回はここまでです。俊さん、毎度ありが

とつございます。

「(奏)で、アンケートは何時までやる気だ？」

私の誕生日まで。そう遠くないです。『ソビエト連邦で保守派のクーデターが起きた日』なので、その日の翌日付変更直前までを受付期間とします。8/19ですね、×切。それまでにお願ひします。

「(奏)・・・あ、そうだ。作者への質問アリにしねえ？」
・・・え？

「(幸俚)それいいかも。ということ、作者への質問も随時受け付けるということ。あ、次回ゲストはセストナ姉妹の長女、リースだから。」

ちよ、おま・・・

『(奏・幸俚)宜しくお願ひします。』

5 4 天才少女は機械が嫌い（前書き）

本来の話を逆転させる形となり、申し訳ありませんでした。リーシヤ・ヴィルミナの登場を心待ちにしていた方、もう少しお待ちください。

天才少女は誰なのか？それは本編をどうぞ。

54 天才少女は機械が嫌い

Side Lolotte

「今日は誰もいないから・・・静かに本が読めるわねー・・・」

アタシは今、沙霧も誰もいない部屋で読書をしていた。マンガ？馬鹿じゃないの？小説よ？

けど、それもたった数分で終わった。

突然、携帯の『ピリリリ』という音が鳴った。

「あーもう誰よ！読書中に携帯かける馬鹿は！・・・奏？もしかし
！？一体何なのよ！！」

・・・いきなり通話口でギャーギャー叫ぶ奴がいるかよ・・・
「で？一体何なの？」

・・・テレビの録画、頼みてえんだよ。一昨日新聞で見て『見た
い』と思ってたらころっと忘れちゃってたんでな。

「・・・バーカ。」

うっせー！！

「で？何処の局の番組よ？」

T S Bの『昼も踊らない大捜査線』だ。確か・・・二時からだっ
けか？

アタシはちらりと時計を見る。・・・今、一時二十五分。まだ十分もあるわね。

「しょうがない、アンタの部屋ので録画しといてあげるわ。」
「助かる！俺のやつは電源入れて録画ボタン押すだけだからな！！」
「わかった分かった。用事、頑張んなさいよ！」

と言って電話を切る。・・・さて・・・

「困ったわ・・・」

実をいうとアタシ・・・

とんでもない機械装置音痴なのよ・・・

S i d e C h a r l o t t e

「シャルロット、そろそろ・・・テレビを見てもいいだろうか？」

突然ラウラが聞いてきた。時計を見たら一時三十分。

「そろそろって・・・あ、そつか。もうちょっとで始まるもんね、ラウラの好きな『昼も踊らない大捜査線』。」

『昼も踊らない大捜査線』・・・前、奏と一緒にラウラを見た、と言っていたそれを見てから、僕も殆ど毎回、確実に見れない時以外はきっちり見てる。

「奏と一緒に見た時に面白かったからな、あの上官三人組の漫才のようなあれは。そうだ、今日奏は出かけているだろうか？録画しておいたらあいつも喜ぶんじゃないだろうか？」

「んー・・・それもそう・・・だね。」

僕はBDレコーダーの電源を入れ、時間を指定して録画ボタンを押した。楽しみだなー、今日の『大捜査線』。今日はどんなのやるんだろ・・・

S i d e L o l o t t e

1001室に入ったら・・・

「誰もいないじゃない!？」

・・・思わず声すら出してしまうほどだった。幸俚すらいないの!？

「・・・ま、まあいいわ・・・。それより・・・電源入れて録画ボ

タン押すだけ・・・電源入れて録画ボタン押すだけ・・・電源入れ
・・・って・・・これは・・・」

アタシはレコーダーを見て動きを止めてしまった。・・・こ、これ
って・・・

「これってもしかしたら巷で噂のレーザーディスクブルーレイディスク「BDレコーダ
」な。」・・・／／／

い・・・いち・・・いち・・・一・・・夏・・・!?!?!／／／

「なんでアンタがここにいるのよ!?!どっか出掛けてたんじゃなか
ったの!?!アンタ馬鹿なの!?!死ぬの!?!／／／」(非常に早口
です)

「いでっ!いででで!!や、やつあたりで踏むなよ!!出掛けてな
かったって!!俺も奏に『ロロツトだけじゃ不安だからもし困って
たら助けてやってくれ』って頼まれたんだよ!!」

「よ、余計なお世話よ!!自分一人で出来るんだから!!／／／」

・・・はっ!／／／

「・・・まあ、頼まれてたことだし、必要になったら言ってくれよ
?」

・・・墓穴掘った・・・！／／／

（見事に墓穴を掘ったロロット。さて、彼女は大丈夫なのだろうか！？）

S i d e C h a r l o t t e

「……………イライライライライライライライラ……………」
「……………」

まだ二十分。それなのにラウラのイライラは溜まってるみたいで・

「もうニュースは要らん！こんなニュース何度見たことか！早く『大捜査線』を見せろ！！」

「ら、ラウラ、落ち着いて？ね？前見た時もこれだけ待たされた、って言ってたでしょ？」

「その時は奏がいたから特に苦ではなかったが・・・！今回は・・・

・・・もう限界みたい。

S i d e L o l o t t e

お、落ち着くのよアタシ・・・！変にテンパってちゃ不自然に思わ

(ここからはロロットの脳内妄想です)

「えっ、ちよっ？！あ、あ、アイツ、Sだったの！？あんなことするの好きなの！？こ、こんなエッチなの・・・あうあう、見たいよ
うな見たくないような・・・でもでも・・・きゃー！！／／／」

(元に戻ります)

「そんなことあったら絶対見れない！！／／／」

「・・・？(一体どうしたんだロロットのやつ・・・?)」

「い、いいー夏？男のアンタから見てカモフラージュに使えそうな
タイトルってどれかしら・・・？／／／」

「カモフラージュって・・・ってかいいのかロロット？もう時間が
無いぞ？ホントに助けてやるのか？」

「よ、よ、余計な御世話だって言ってるのよ！！あーもー！この際
エロビだろうが十八禁だろうが関係あるかー！！ちゃんとセツトし
てないあいつが悪いんだからねー！！『ミーツーの逆襲』、君に決
めた！！／／／」

ディスク置き場(正確にはディスクトレイと言うb y作者)にディ
スクを置いて、ウィーンと言う音と共に飲み込ませていく。

「・・・さ、再生ってどうやるの・・・？」

(笑っちゃいけないのは分かってるんだけど・・・笑いそうだ・・・)

！)

(男の一夏、もはやネタとしか言いようのない口ロットの奇怪な行動に必死になって笑いを堪える)

「・・・ぶ、ブルーレイとハードディスクの選択!? なによそれ! リモコンは!? あああ、変なところ押しちゃった!! 爆発なんてしないわよね!? ま、巻き戻してどうやるの!? よよよ容量あるのかなあ!?!」

(そして開始まで残り・・・一分)

「いや

!! もうわけがわかんない!!

「い!! もうダメ! 絶対ダメ! ダメダメダメ!! アイツが悪いんだからね!? 新品のディスク入れておかないアイツが悪いんだからね!!?!」

(・・・そろそろ限界か・・・?)

(ついに床の上でごろごろとたた打ち回り始めた口ロットを見かねた一夏。それに耐えられなくなって説明することに)

「なんなのよぶるーれいって」「口ロット?」「・・・ぶえ?」

「一夏の声に、可愛らしい声（実際涙目である）で返事をする口
ツト）」

「ロロツトは思い違いをしているだけだ。BDレコーダーで録画する時は、ディスクを入れる必要が無いんだぜ？録画するのは内蔵されてるハードディスクで、そのハードディスクからBDに落とす。奏も言ってたはずだぜ？」電源入れてスイッチ押しだけ』って・・・」

（その数秒後）

「あ

・
・
・

(1001室から男子が一人、窓から) (ここ重要) 飛んでいった
との目撃情報が多数寄せられた)

(ここから三人称)

夜。

「ただいまーっと。あれ、鍵開いてる・・・あ、そっさいやロロツトに頼んだんだっけ、録画。」

「・・・遅かったじゃない・・・」

何故か涙目のロロツト。

「で？録れたのか？」

「どうにかね。」

奏はハードディスクからの再生をした。

「さって、今日はどんなのがやってたんだろうな・・・」

そして再生されたのは・・・

《・・・マスター・・・》

《ん？》

《ビーム・・・撃ってもらえるかニヤ？》

《かしこまりニヤ

っ！おぶぱっ！！！！）チュドンチュ

ドンチュドンチュドンッ！！）《

《・・・んー・・・。・・・ビームって・・・、・・・良いものだ

ニヤ・・・》

《・・・！！！！）（ブンブンブン！！！！）《

《始まるよ・・・》

「・・・おいロロッ、ハ、ハ、ハね裏番じゃねえかよー！！」
「ぶへく・・・」

やはりというかなんというか・・・お約束だった。

おまけ

「……ちつくしよー、昨日の『大捜査線』見逃した……」
「あ、奏！」

机の上でうなだれている奏を見つけ、シャルロットが彼を呼んだ。

「どうしたの？元気ないみたいだけど……」
「昨日……見逃したんだよ……。ロットに録画頼んどいたら裏番録画してやがった……！」
「それなんだけど……昨日、録画したんだ。昨日出掛けてるって聞いたから「見せてくれ！」わあっ!？」

突然顔に迫った奏に驚きを隠せないシャルロット。

「ち、近いよ！近いつて!!」
「わ、悪い……。で、見せてくれるってのは……」
「う、うん……。一緒に見よ……。?/?/?」
「OK!!」

あっさりOKを出した奏に、シャルロットは顔一杯の喜色を浮かべた。その後の授業が頭に入らなかったが。

54 天才少女は機械が嫌い（後書き）

「（奏）つーことで一問一答だ。今回はいきなり作者への質問からの答えとなるからな。」

作者編

エドワード・ニューゲートさんから、

『三月語様が知ってるアニメやゲームを教えてくださいませんか？』

「（奏）つーことで全部言え。」

言えない範囲もありますけど。

知っているもの

アニメ

リリカルなのはシリーズ（劇場版はまだ見てません）

ガンダムシリーズ（一部は見てませんが、ゲームで補完してます）

ポケットモンスター（初代は一通り見てましたが、最近は見えてません）

バカとテストと召喚獣

恋姫無双（アニメ編、乙女大乱のOVAは見てません）

いつか天魔の黒ウサギ

DOG DAYS

緋弾のアリア

後は色々と見てます。深夜系は特に。

ゲーム

ポケットモンスター（萌えっ娘もんすたあ含む）

魔界戦記ディスガイア（1、2のみです）

魔法少女リリカルなのはA・S PORTABLE THE BA

T T L E O F A C C E S S (ほぼ全クリしました)

機動戦士ガンダムシリーズ (NEXT PLUSは100時間オーバーしてます)

テイルズシリーズ (初プレイはイノセンス、後はマイソロ2&3、VS)

萌え戦シリーズ (萌え萌え2次大戦 (略)、萌え萌え大戦争げんだいばーんのこと萌え戦 (略) 2は殆どクリアしてます)

空の奇跡シリーズ (2、3はプレイ済み、YsVSは殆どクリアしてます。まだレーヴエが出てないけど)

バンジョーとカズーイの大冒険2 (グランチルダリアルに倒しました)

剣と魔法と学園モノ。シリーズ

モンスターハンターポータブル (2と3のみ)

武装神姫 BATTLE MASTERS

BLAZBLUE CONTINUUM SHIFT

真・恋姫夢想 蜀編

後色々

です。

「(奏) 途中省略したたる?」
多かったです。

俊さんから

『好きな仮面ライダーは何ですか?』

好き・・・というか唯一まともに覚えていたのがアギトです。OPの一部が突然レベルで思い出せるほどなので。

「(奏) 後は?」

隙とか嫌いとかという話ではなく、純粹に知らなかったりです。あと例外的に好きだった特撮が『ビーファイターカブト』と『電磁戦隊メガレンジャー』でした。タイトル合っているか分かりませんが・

・
・
「(奏)俺も作者と同じで考えてくれ。」

奏編

1. エドワード・ニューゲートさんから

「真琴が銀真琴になって暴走した事で、華奈多さんはどうになりましたか？ また、どうやって真琴を止めましたか？」

「(奏)姉さんも姉さんでマジギレしたからな・・・あの時はお互い殴り合いに発展したって記憶がある・・・で、あの時はそのまま二人を置いて帰って次の日身に行ったらお互いに突然泣いて謝ってきた。・・・あれは・・・な・・・」

2. 俊さんから

シユールストレミング(世界一臭い缶詰)は食べられますか？また、誰かに食べさせた事は有りますか？

「(奏)どちらもないな。というか一度くらいお目にかかりたいくらいだ。」

3. エドワード・ニューゲートさんから

「もし自分が狼になってしまったとします。皆に如何されると思いますか？ また、そうなったと思われる元凶(最早言わずもがな)を如何しますか？」

「(奏)大人しく部屋に引きこもるな。とにかく人目につきたくない。なんかルティアとかにもふもふされそうなのがするけど。んで元凶はどうしてもあの馬鹿しかない。」

ということです。ではゲスト！

「(リース)えーと・・・どうも？」

「(奏)どうもでいいと思うぜ？多分・・・」

ということ今回ゲストはセストナ姉妹の長女、怒らせたら何が

起こるか分からない少女、リースです！質問もなんか多数来てます。さて、どんどん消化していきましょう。今回は最後の方でちょっとした企画（協賛あり）がありますから・・・

「（奏）企画？・・・まあなんだっていいけど・・・」

リース編

1. 俊さんから

『奏の事を好きになったりはしないんですか？』

「（リース）んー・・・ない・・・かな？」

「（奏）へー？それはなんで？」

「（リース）それは・・・ほら、ルティアの恋路を邪魔したくないし・・・それに私、エリイもルティアも好きな人が出来るまで誰かを好きになる気はないから。」

・・・お姉さんらしい一言、ありがとございました・・・

2. 俊さんから

『ルティアの恋を応援する為に何をしたいですか？』

「（リース）出来ることなら色々。出来る限りだけど、ルティアが自分でやる』って言うまで、かな？」

「（奏）俺も応援したい、かな？」

「（リース）・・・こりゃ厳しいかなあ・・・」

3. エドワード・ニューゲートさんから

『初めてあった時の華奈多さんの第一印象は？』

「（リース）端的に言うとお、変な人だった・・・かな？重度のブラコンだったし簡単に許嫁宣言出しちゃうし・・・」

「（奏）他のやつはどうかは分からねえけど・・・多分変人だと思っただんじゃね？」

4. エドワード・ニューゲートさんから

『妹達の行動で頭を悩ませている事ってありますか？』

「（リース）色々あるけど・・・やっぱりルティアの人見知りなことかエリイのヘビーゲーマーなことか声真似とか・・・後はルティアの無自覚な非ナンパ率の高さも気になってるんだよね・・・」

「（奏）ナンパ？」

「（リース）うん・・・。街に出るとほぼ必ずって言うていくらいナンパに遭うんだよね・・・。ほら、ルティアって鼻眉目抜きでも綺麗だし胸大きいしさ。」

「（奏）・・・俺としては外見が良くても中身が残念だったら意味無いと思うんだよね・・・。」

5・エドワード・ニューゲートさんから

『52話で、エリイに一体何をしたんですか？』

「（リース）お話、だよ？」

「（奏）・・・嘘だろ。オリヴィエがああ時のリースの手に血がついてたって言ってたぞ・・・？」

「（リース）O H A N A S H I だよ？」

「（奏）・・・ごめんなさい、心の底からごめんなさい・・・！という事で、52話のあれは二度と触れないように・・・！そして企画、エドワード・ニューゲートさん協賛の・・・」

『風花真白による、エリイ・セストナの髪修正作戦！』

『（奏・リース）・・・無謀じゃないの？』

無謀じゃ・・・ないはず・・・！という事で、超特別ゲストの、

『IS 桜の花纏う真剣』より・・・えーと・・・？

「(奏) どうした？」

・・・いやー・・・年齢定期には明らかにこっちの方が上なわけでしょう？けどゲストはお得意様なわけで・・・

「(リース)・・・だから？」

下手に呼び捨てできないし、『ちゃん』づけもアウトな気が・・・

「(奏) もういい、俺が言う。超ゲストの風花真白だ！」

「(真白) どうも。」

んで、対象となるのが、我らが無駄にスキルの多い通称『無駄スキルマスター』、エリイ・セストナ！

「(エリイ)・・・何であたし、椅子に縛られてんの？」
逃げるの防ぐため。

「(エリイ) 逃げないよー!？」

・・・
ということで、まずは実証。エリイの髪がどれだけ癖っ毛なのか・・・

「(リース)・・・行きます・・・!」

グイッ！

「(エリイ) いだだだっ!？ちよ、痛い痛い!!無理に引っ張らないでー!!みぎゃー!!」

ほぎ。

・・・折れました。

「(奏)・・・折れたな。」

「（リース）これ・・・現実です・・・」
「（真白）・・・頑張る。」

ということだ・・・ある意味バトル開始！！ちなみに捨ててもいいような櫛やらブラシやらを持ってきました。

「（真白）・・・ん。」

「（エリイ）・・・痛っ!？」

「（真白）・・・うまく・・・動かない・・・」

「（エリイ）みぎゃああああああっ!？痛いつ!！髪千切れるうっ!！」

「（リース）今までちゃんと髪の毛洗ってなかったり乾かしてなかったりしてたからだよ?」

「（エリイ）だからって無理に動かすことはふぎゃあああああああ!！」

「（真白）・・・折れた。だったら次の。」

・・・この戦い、いつまで続くかわからない状況ですが・・・結果は待て次回!ということだ。

#55 願望、顕現す（前書き）

ようやく完成までこぎつけました！！無理矢理感はもう放置する方向でお願いします・・・

書いていて結局15000字を超えた完全別モノのこの話、奏と幸俚の譲れない想いを感じてあげてください。

#55 願望、顕現す

「……さーで、ユキ？分かってるな？」

「……問題ないよ……。ガチバトル……。三匹シングル……。連勝させてもらうぜ!!」

「いや、今度は僕が勝たせてもらうよ!!」

恒例となったゲームバトル。今回はお互いの実力が拮抗している『ポモン』（w i版。お互いかなりやりこんでいるが、問題は性格一致を考えていないこと）。現状、百戦はこれでやってきたものの、5050の戦況完全拮抗、という所。負ける切っ掛けとなるのが大概『戦況の読み間違い』『選択ミス』という凡ミス、或いは単に運が悪かった、というものだけ。

だが今回はどちらも負けていられない。どちらが先に一歩進めるかどうかが掛かっているということもあるが、今まではどちらが蚊が勝つたらもう片方が勝つ、という状況だった。だが、今回は違う。幸俚 幸俚 奏 奏、ときているため、今回奏が勝つたら奏の三連勝、ということになるのだから。

「いやー、今日も今日とて、張り切ってバトってるねー。青春？」

ちなみに遊びに来ているエリイは傍観者。いつも二人の戦いは傍観を決め込んでいる（エリイ談）。

『いざ・・・尋常に勝負っ！！』

二人の気合の籠った一声でバトルが始まった。

「・・・しまった、相性が悪い・・・！だったら・・・」

「交換・・・だがそんなの関係ないね！」

「ちよっ、うええっ！？開幕爆発！？しかも大！？」

「道連れじゃー！！！」

「ま、まさかの『フタエノキワミ、アッー！』！？」

開幕から『開幕大爆発』を起こした奏の所為で波乱となったこのバトル、それが数分経って・・・

「・・・残るは・・・」

「お互いの・・・」

『嫁だけ・・・！』

「・・・かな兄のは耐久特化型、逆にユツキーのは攻撃両刃振り・・・立場が違うけど・・・相性的にはかな兄有利・・・」

ちなみにエリイが幸俚のことを『ユツキー』と呼んでいるのは、ただの愛称で、幸俚自身も了承している。というか、真琴に影響されていることも少なからずある。

そして、バトルが終わった。

「いよっしゃーっ!!三連勝っ!!」
「くうっっ……あそこで急所に当たらなきゃなあ……」

結果は奏の勝利、奏は無事（無事と言うのも変だが）三連勝を飾った。

「うっし、このまま連勝を（トントン）……って誰だ？開いてるぞ？」

突如したドアを叩く音。奏はそれを『鍵開いている』と言うことを簡単に伝えた。

「ごめん奏、開けてくれないかな？」

「リース？両手が塞がってんのか？」

「そういうことだし……重いから早く……」

「あ、ああ。悪い悪い。」

ドアを開けると、両手に何か大きな物を持ったリースがいた。

「よい……しよつと……。ふう……。これ、華奈多さんから奏につて……。今日届いたの。なぜか私経由で、だけど……」
「……。なんか、悪いな……。そっちに行つちまつたみたいで……何が届いたのか知らんけど。」

そして、三人がかりでその荷物の封を開ける。そこにはちよつと大きめな装置があった。ちよつと、とはいえ、テレビ大の物だったが。

「これは・・・一体何だ？」

「取扱説明書によると・・・」その人の願望を一つだけ叶える装置
(仮)『だって。』

「ふーん・・・。ま、今何か叶えたい願望なんてないけどな。あつ
たとしても平和が一番、ってことだし。」

「そうだね。」

その日、その装置について特に触れることは無く、奏、エリィ、幸
俚で十時の消灯直前までゲームで盛り上がった。

その日の深夜。

S i d e ？？？

・・・今日も・・・旦那様と共に闘うことが出来た・・・そして勝
てた・・・けど・・・お礼も何も出来ない・・・

【・・・じ・・・いを・・・いか・・・？】

・・・？

【・・・汝・・・願いを・・・叶え・・・たいか・・・？】

願い・・・？

【我が力を以てして・・・一つだけ・・・願いを叶えよう・・・】

一つだけ・・・なら・・・

今まで出来なかった・・・旦那様へと・・・お話をさせてください・・・！それが無理なら・・・せめてお礼を・・・！

S i d e ？ ？ ？

今日も妾は何も出来ず仕舞いじゃった……。勝てそうな戦いなのに負けたのが悔しい……

【……じ……いを……いか……？】

……なんじゃ……？

【……汝……願いを……叶え……たいか……？】

願い……とな……？

【我が力を以てして……一つだけ……願いを叶えよう……】

一
つ
だ
け
・
・
・
な
ら
ば
・
・
・

妾の主と・・・變する主と・・・話をさせてほしいのじゃ・・・！
それが叶わぬなら・・・せめて礼と謝罪を・・・！

(三人称Change)

翌日。

朝の日差しが部屋に差し込み、鳥の囀りと共に起床を促していた。

しかしそれは同時に、事件をも呼び起こしていた。

Side Kanade

「……ん……」

眩しさを感じる。……そうか……朝なんだな……

起きようとしていつものように横に体を転がした時だった。

もじっ。

「……もじっ？」

ふに。

「んう……」

・・・まだ眩しさを感じているため、目は閉じたまま。だから手の感覚だけでいつも動いているんだが・・・何で手に柔らかいものが抱き枕？いや、俺はそんなファンシーなものは持っていない。つか持ちたくない。背中にも何か感じる。

「・・・んう・・・」

そして声。・・・また・・・

「お前か沙ぎ・・・り？」

ガバツと飛び起きて正体を見た時、固まった。・・・だって・・・

「・・・んう・・・だんにゃしゃまあ・・・」

・・・全く見知らぬ女の子が・・・一糸纏わぬ姿で・・・寝ていたんですよ？俺のベッドで・・・！！

じゃあ後ろは・・・

「・・・もう・・・朝か・・・」

・・・やっぱりラウラだった。

「・・・ラウラ、なんでお前がいるんだよ・・・！しかも裸で・・・」

「・・・つむ、それはだな・・・」

覚醒早いな、おい・・・

カチャ・・・カチャリ・・・

・・・よし、侵入成功・・・！後は・・・む？

「すう・・・すう・・・」

・・・夫以外に誰かがいる・・・くっ、先を越されたか・・・！同じベッドで寝るのは嫁たる私の特権だぞ・・・！・・・だがいい・・・
「ううやうやう・・・」

しゅる・・・しゅる・・・

「よ・・・っと・・・」

「ううやうやう・・・入りこめばいいのだから・・・」

（今）Side Kanade（）

「・・・というわけだ。」

「『というわけ』じゃねえっ！！前にも言っただろ！？入りこんでくんなっつってんだろっが！！」

何真顔で『それが当然だ』的なこと言っただよ！？？

「私なら良い！！嫁なのだから！！」

「良くねえっ！」

「・・・それよりも、だ。奏・・・」

なんか突然真面目な顔になった。・・・つか前隠せ。

「一体あいつはなんなんだ！？お前のベッドに……しかも裸で……！浮気か！？浮気なのか！？」

「浮気じゃねえ！つか俺も知らねえんだよ！！」

ぎゃあぎゃあと言い争いを続ける俺とラウラ。そして、それが幸いして……というか災いしてというか……まあとにかく……

「……カナ……朝からつるさ……え、誰これ……！？」

……あれ？ユキんどこにも誰がいるわけ？

「……あるじい……」

……訂正、『いるわけ』じゃなくて……『いる』。聞いたことないからどっかの誰か、下手したら俺と同じ感じだ。

「……ふにい……」

そして俺の横にいた子が目を覚ました。

「……誰？」

「……旦那様……？」

「……冗談じゃない、今聞いてはならない声が聞こえた気がするんだけど？」

「……どういうことだ……！？『私の』旦那様ではなかったのか！？」

「ちよつと待て！！俺は誰とも結婚したことないぞ！？」

「……旦那様ぁ……私に『リーシャは俺の嫁だ！異論は認めるが反論させるか！』……とプロポーズしてくれたのは……嘘なのですか……！？」

「……もしかして……俺の『ポケン』のシャワズ！？」

「はい！！貴方の嫁、シャワズのリーシャです！！」

完つ然に判明。と、いうことは……

「もしかして……ヴィルミナ！？」

「ん……あるじい……すぎじゃ……」

もしかしなくてもヴィルミナだ、そいつは……

「か、かか、奏！！ぷ、ぷぷポーズしたというのは、ほほほ本当なのか！？」

「・・・したっつーか・・・してねーっつーか・・・何と言やいのか・・・」

「何故こいつなのだ！？こんな見ず知らずの女に先を越されたとなると私は一体どうすればいいんだ！？」

「知るか！！」

「『ラウラが好きだ』とか『ラウラに一番にプロポーズしてやる』などのあの言葉は偽りだったのか！？」

「事実無根なことを言うかねお前は！？」

「だ、旦那様は渡しませんっ！！」

「うわっ！？」

突然リーシャ（・・・だと思っ。尻尾とかあるけど・・・）に引き込まれた。引き込まれた勢いが強かったから当然倒れこんでしまう。・・・なんかすっごい柔らかいものに当たってるんですけど！？

「そんな無駄に大きいだけの脂肪の塊で！私の夫を誘惑できると思っなあーっ！！」

とか言って空いている方の俺の腕を引っ張りこむラウラ。・・・こっちはこっちで無理に押し当ててる気もする。・・・つか結局お前もその脂肪の塊とやらで誘惑してるものなんですけどな・・・

(結局この騒動、千冬が騒ぎを聞きつけてドアを蹴破り、鉄拳制裁を下すまで続いた。なお、奏、幸俚は無罪。リーシャ、ヴェルミナは鉄拳制裁のみ、ラウラは反省文五十枚という処罰が下された)

「……なんで朝っぱらから騒動に巻き込まれなきゃならねえんだよ……」

「……それに……さあ？」

鉄拳制裁後、俺達はまだ部屋にいた（実をいうと金曜日、朝飯は食いつぱぐれた。）。

千冬さん登場以降、リーシャは俺の後ろに隠れてしまっている。千冬さんが怖かったからだ。さっきの拳骨がそれに拍車をかけたらしい。ちなみに服は着せた。いつまでも裸のままではいさせるわけにはいかない。ラウラも同様。

ヴィルミナは今もなお、ユキに抱きついたまま。

「なあ、リーシャ？そろそろ離れてくれねえか？視線が……痛いんだけど……。人見知りなんだから怖いのは分かるけどさ……」

「……（うるうる）」

只今絶賛、女子一同が1001室に大集合。真琴とか沙霧とか、果てにはオリヴェイエ、ロロットから物凄い威圧感を感じている今、俺の胃に穴が開きそうな気がする。

「……（うるうる）」

・・・ルティア、頼むからそんな涙目は止めてくれ。何もしてないのに良心が痛む・・・

「かなちゃん？これはどういふことか説明してほしいんだけど？」
「正確に・・・ありのまま話してね？」

・・・お前ら・・・怖いぞ・・・

「・・・ぐすつ・・・」

・・・そして美雪が泣いた。・・・もうなんと言ったらいいのやら・・・
あーもーなんなのさこのカオス・・・

「・・・そう言えば昨日、取扱説明書しっかりと読んでなかったっけ・・・。後で読んで。」
「奏!？」

「・・・だからさ、さっきから言ってるだろ!?俺は何もやってないし、朝起きるまで全く気付かなかった!もし何かあったとしたら隣の女子が気付くだろうが!！」

「けどこの事実はどういふことか説明してよ!！」
「説明しようがないだろうが!！」

事実、説明なんて無理。証人は俺とユキくらいしかないと、リースがああ機械を運んで来てから以降はエリイが十二時くらいまでいた、というだけ。エリイじゃ真実を言っても『信憑性に欠けた発言』ととられることが目に見える。ラウラは頼りにならない。リーシャ達が見れたその瞬間は見えていないうえ、入ってきた時には既にいた、という話なのだから。

「幸俚君・・・その人、本当に彼女・・・？」

「・・・なんて言えはいいんだろ・・・？彼女だ、とは言い難いんだけど・・・」

「というか『主』って言うてるもんね・・・」

「主は主であり！妾の夫じゃ！！異論も反論も認めぬぞ！！」

（通称ラバースに詰め寄られる奏、美雪が愕然とした状態で幸俚を見、ヴィルミナはなおも幸俚に抱きついたまま。リーシャは怯えて奏の後ろ。解決するのはもちろん・・・）

「いい加減にしろ。二崎、真田、お前たち自身でこの問題を解決しろ。いいな？」

『・・・はい。』

（千冬だ）

「その代わり、だ。このことはお前達に非は無いとして公欠扱いにする。この問題が解決した時、連絡しろ。」

(千冬によって、二人はしばらく休んでもいいことになった。しかも嬉しい事に欠席扱いでないということもある)

女子メンバーは、千冬さんとリースによって全員連れて行かれた。なんか沙霧がかなしそうな眼をしていたんだけど。

さて・・・まずは取扱説明書を・・・いや、とりあえず話を聞いてみるか？

「とりあえず話を・・・」

なんてリーシャに改まって向いてみた瞬間だった・・・

「あゝるゝじいゝ!!」

「ちよつとヴェルミナ!? 話なら後で聞くから今ちよつと離してっ
てば!!」

「嫌じゃ!! 妾は主と一緒にいいのじゃ!!」

・・・ダメだ、お話になんない。というかどんどん悪化していつて
る気がする。特に状況。さて・・・

「あの・・・旦那様・・・？」

「・・・リーシャ、お願いがあるんだけど・・・」

「はい、何でしょうか？」

「・・・旦那様って呼ぶの止めてくれない？ 恥ずかしいのこの後の処刑が怖くなってくるんだけど・・・」

・・・正直最近、俺に女性絡みの何か起きた後が怖い。真琴・オリヴィエ・ロロット・シャル・ラウラから手加減なんて眼中にないつてくらい本気の暴行受けるから・・・

「・・・でも・・・私の旦那様なので・・・」

「けど今はそうじゃないと思うからな？」

「でもっ！！」

(そうして奏とリーシャのお互いの主張の言い合いが始まったその直後だった)

「奏っ！！」

「へぶうっ！？」

「っ！？」

(突然奏がリーシャの目の前で) ここかなり重要(吹っ飛ばされた。無論原因は・・・)

「奏、何もされてない？キスされてない？変な事されてたら私に言うて？」

「奏！もし何かされていたら私に言え！すぐにそれ以上のことをしてやるからな！？」

「げほっ・・・寧ろお前らに殺されそうなんだが・・・なあ・・・」

（教室に行ったはずの沙霧とラウラ、その二人であった）

「はあ・・・はあ・・・けほっ・・・ふ、二人とも・・・戻らないと・・・けほっ！」

（息を切らせてまで二人を連れ戻しに来たルティアがドアの前でけほけほいつていた）

「だ、旦那様あー！！」

「奏は私の旦那だー！！」

「あなたなんかには奏は渡さない・・・！」

・・・

「か、奏君が・・・奏君が！！」

「奏が・・・」

「どうかしたのか？」

(ルティアが慌てたような声で言ったその理由は……)

…… (へんじがない、ただのしかばねのようだ)

(既に意識がブラックアウトした後だった……)

「か、奏!?!」

「……しつかり……!死ぬのはダメ……!」

「旦那様あ……」

三者三様で奏の息を吹き返させようと)……ある意味表現ミスではないと思う(する。けど目覚める気配はない。

「じゅ、授業に戻らないと……お、怒られちゃう……よ?」

離れようとしないうら・沙霧を教室に連れて行こうと躍起になるルティア。そしてルティアの苦勞も少しで済むのだった。なぜなら・

スパパァン!!

『っ!?!?』

(突然頭を叩かれ、後ろを向いた沙霧とラウラ。そこにいたのは・
・)

「はぁ・・・お前ら、教室に行ったはずだろう?何故ここに戻ってきた?セストナ、もういいぞ。先に戻っている。」

「は、はいっ!?!」

(ピューっ!?!という音が鳴りそうな勢いでルティアは教室に向かった。ラウラと沙霧は蛇に睨まれた蛙状態になっていた。ラウラは無論、相手が千冬だから。沙霧はラウラとは違い・・・)

「全くお前らは・・・。これ以上騒ぎを起こすようなら10001号室への立ち入りを禁止するぞ?」

(半分死体になっている奏を脇目にラウラと沙霧はこっぴどりと叱られた。終わったら終わったでラウラは涙目になっていた)

「・・・真田、お前もいい加減そいつの手綱ぐらい握れるようになって。見る度にそんなにじゃれあわれていたらこちらが参る・・・」
「す、すみません・・・。ヴィルミナ、ストップ!お座り!?!」

(幸俚が犬に指示するかのように『お座り』と言った時、ヴィルミナは残像が映ったのではないか、という勢いで座り込んだ。速い。とにかく速い)

「・・・本当にあいつは九尾なのか・・・？」

「いえ、九尾・・・ではないんですけどね・・・」

(呆れあつ幸俚と千冬。その間ヴィルミナは『次の命令はなんじゃ？なんでもいいからとにかく命令してほしいのじゃ』と言わんばかりにうずうずしていた。目などもう・・・キラキラしていたのだから)

「こっちはこっちで、あっちはあっちで・・・まだお前は自覚がある方だからまだいいとして・・・あいつは・・・な・・・」

(そう言つて千冬が見たのは奏。現在リーシャに徹底的かつ手厚い看護を受けていた)

「確かにカナは究極の唐変林ですけど・・・決断した時はその決断を覆すなんてことは絶対しませんから。」

「酷い言い様だな。」

「でも事実ですから。」

(軽く談笑して千冬は部屋を出た。ちなみにヴィルミナはもう涙目

で体を震わせていた)

(その日の放課後)

奏？入るよ？

(シャルロットが1001号室のドアをノック。奏からの返事は無い)

「あ、うん。入っていいよ。」

(代わりに幸俣からの返事が。それを聞いたシャルロットは、おずおずといった感じで部屋に入る。同じ感じでルティアも。)

「・・・あれ？奏一体どうしちゃったの？リーシャ・・・だっけ？あの子も眠っちゃってるし・・・」

「あの後突撃食らっちゃって・・・」

「突撃？誰に？」

「沙霧とラウラ・・・」

「・・・分からなくもない二人だもんね・・・」

(シャルロットは幸俚に話を聞き、なぜかその時の光景が頭に浮かんだ。そしてついてきたルティアは眠ってしまったリーシャの代わりに看病を始めた。看病・・・と言っているのだろうか？気を失っているだけなのだから、看病と言っているには甚だ疑問があるが)

お兄ちゃん？どう？

「どつって言われてもね・・・入って見てくれれば分かると思うよ・

・・・？」

じゃあ入るね？

(そして雪菜も来た)

「・・・うん、朝のまんまだね・・・。変わったのは奏君が気を失ってるってこと・・・くらい？」

「・・・そう・・・だね。」

(真田兄妹、そしてシャルロットが話し合っているその間、ルティアは近くにあった紙を見つけた。ほとんど落ちていると言っても過言じゃない状況だったが)

「・・・取扱説明書？」

「・・・うっ・・・くあぁ・・・」

・・・俺・・・今まで何してたんだ？

(奏、起床。というか復活)

「あ、カナ！気が付いたみたいだね。もう放課後だからどれだけ気絶してたかがよく分かるくらいだよ・・・」

「うるせー。俺だって好きで気絶したわけじゃねえんだよ・・・！」

リーシャを起こさないよう、ゆっくりと起きる。・・・俺のこと、ずっと見ていてくれたのか・・・

「・・・ユキ、とりあえずこの装置について色々調べたいことがある。取説どこだ？」

「今ルティアが持つてるよ。」

ユキにそう言われ、俺はルティアから取説を受け取り、じっくりと読む。

(ちなみにヴェルミナは眠っていた。幸俚にじゃれついていて疲れたのかよく分からないがぐっすりと眠っている)

「・・・なにになに・・・？・・・マジかよ!？」

俺はその取説に書かれたことについて驚きを隠せなかった。

「……願いを叶えなかった場合……三日で消える……!？」

「嘘……!？」

「そんな……!？」

(幸俚、ルティア、シャルロットが驚愕の顔をする。)

……姉さんの馬鹿野郎……!なんでこんな欠陥品を作ったんだよ……!

「ユキ、久しぶりに最強タッグ組むぞ!!」

「うん!分かってる!!」

『二人を消させないようにするために!!』

(今ここに、天才発明家の姉を持つ少年と、その少年の持つ頭脳に匹敵する学力を持つ少年の、二人の最強タッグが結成された。過去そう何度も結成されたわけでもなく、結成された瞬間もその活動も見られたこともない。けど彼らが最強タッグと呼ばれるその所以は……)

「よし、まずはこれを修理する!なんかしらねえけど煙吹いてやが

るからまずは直すぞ!!2日で!!」

「OK、カナ、そっち持つてくれる?」

「了解、行くぞ!!」

(高速の思考回路、施行に対する迅速な行動、そして熱意。それが強い事が理由なのだ)

「明日明後日は偶然休日だ!だったら明日は徹夜で直す!!」

「華奈多さんに連絡入れる必要は?」

「必要無し!むしろそれをやっている時間がない!初見でやれるだけやるんだ!!」

(二人は脇目もふらずに装置を持ち運んでいった)

「奏!?無茶だよ!!徹夜でもそんな大きな機械、直せるなんて不可能だよ!!」

「・・・奏君!!」

(シャルロットとルティアも二人を追いかけていった。行き先は勿論・・・)

『ちよつとここ借ります!』

(学園の修理用のピットである。そこなら広さも十分、備品も揃い踏みしているからである)

「ユキ、作業やるぞ!!まずは・・・」

(奏は手元にある取扱説明書を見た。何故か機械の修理のために色々書かれていた)

「そのネジを外してくれ!こっちで同時に外した方が楽だ!」

「了解!外したらそっちの方でケーブルの欠損ないか見て!あった

ら交換お願い！」

（お互い何をやるべきなのかが分かっているかのように、作業を進めていく。その動きに無駄は無く、他から見たら、それは熟練者の行動さながらだった）

「願いを叶えたいとか関係なくせっかく会えたのに……」

「そんな制約条件の所為で消えるなんて可哀想すぎるじゃねえかよ
！！！」

（『願いうんぬんより、いただいだけいさせてやりたい』。その気持ちがあつてこの最強タッグが生まれていた……）

(午後八時。夕食にすら現れなかった奏と幸俚)

「一体奏と幸俚はどうしたというのだ？いつもなら私達の内の誰かと一緒に来るはずだろうし、そうでなくても一人でもう食べていたりなど……。いつも食べてただろうに……」

(ラウラが異変を感じていた。奏らがないのだから、感じるのも無理ないと思う)

「そ、それは……」

「う、うん……」

(少なくとも事情を知っている二人は苦笑いをするしかない。はっきり言うと、今の二人を邪魔したくない、というのが一番の理由である)

「と、とりあえず今忙しいみたいだから・・・後でご飯持っていくね？」

「私が持つてくー!!」

「重要なのは確実性だろう？ならば私が持つていこう。」

「・・・私が持つてく・・・」

(リースは今の言い合いを見て、しまったと思う。だが既に時遅し。言い合いは過激になりつつあった。内容が持つていくか持つていかないか、ではなくただの罵倒、誹謗中傷の嵐に変わったのだから・・・)

「・・・しょうがないか。あの二人の分のご飯も持つてってあげないといけないし・・・公平に考えると私が適任、かな？」

「・・・そう・・・だね。一番二人に迷惑かけないのってリースか僕かルティアだし・・・」

『はあ・・・』

(三人で盛大に溜息を突いた。しかたもない、目の前で真琴を除いた言い合いが行われているのだから・・・)

「あれ？真琴が珍しく罵倒誹謗中傷の嵐に参加してないよ？」
「んむ？」

（よく昼食中に見かけるような口にモノを含んだ状態でリースたちの方を向いた真琴。なんかハムスターに見えるのは気のせい）

「んつく。だつてかなちゃんユツキーがコンビ組んだんだよね？
だつたら寧ろ邪魔しちゃう悪い気がするから。」

「・・・そっか・・・。そう考えると悪いかも・・・。」

（夕食を持っていくのはとりあえずリースと真琴、リーシャ達にはシャルロットとルティアが持っていきいことになった）

「奏、どう？」

「・・・うっわ、大分分解したね・・・これ・・・」

（リースと真琴が夕食を持ってきたそのピットは、大変散らかっていた。無論、スパナとかドライバーとかだけじゃない。その本体のパーツも、である）

「そこ置いといてくれ！次そこを外して！」

（・・・ご飯、何時食べるんだろう・・・）

(リースと真琴が同時に思ったこと、それはこのハイペースな作業
の中、何時食事をするのだろうか、ということだった)

二日目

「くそっ！パーツが複雑すぎんだよ！！分解が終わらねえ！！メインまであとどれくらいだ！？」

「分からない！下手したら終わらないかも・・・！」

「『終わらない』じゃだめだ！『終わらせなきゃ』ダメなんだよ！！」

（最強タッグはまだ作業を繰り返していた。常人では考えられないような速度で分解を繰り返す。しかし、肝心のコアには未だ届いていない）

「せめて今日の昼までにはコアを直す！！そこまで行けばきっと大丈夫なはずだ！！」

「了解！！」

（初日からの徹夜。傍から見れば心配するのもしやむなしな状況だが、それでも必死に直そうとする二人）

(1001号室、ここではリーシャとヴィルミナがただ主を待っていた)

「あるじいゝ・・・妾たちをほっぽってどこへ行ってしまったのじや」

「旦那様達は今色々忙しいのですから・・・あまり無理を言っ
は・・・」

「うなっ!!」

(ヴィルミナにとってはもう限界そのものだった)

「・・・よしっ！昼ジャストにコア発見！！」

（昼丁度、装置のコアが見つかった。奏たちは今も奮戦している。ここからいかに早くコアを直し、パーツを組み立てることが出来るか。それが今の勝負だった）

「奏え〜・・・」

「・・・はぁ・・・アンタもさぁ、いい加減にしたら？いつでもどこでも奏にひつつけると思ったら大間違いってこと理解したらどうなの？」

「えうえうえうえうえう〜・・・」

「だーかーらー！ー！ー！うっさいって言うてんのよ！ー！風穴開けるわよ

「！！」
「ふにゃーっ！！」

(沙霧とロロットの部屋・・・沙霧が絶賛悶絶中。ロロットが切れ
たものの、逆に沙霧が謎の覚醒を果たしたくらいか?)

「わあっ!?!」

「うー・・・」

「ちよ、離しなさいよ!!なんでアタシを抱き枕にして寝転がるわけ!?!」

「すう・・・」

「寝るなー!!」

(哀れロロット、奏欠乏症(笑)発祥中の沙霧に捕まり、逃げられ
なくなってしまった・・・)

「どうだ、奏たちの状況は？」

（昼、ピットを出てきた所にロロット・沙霧以外のメンバーが勢揃いしていた。ちなみに昼食を運んでいたのは、公平をとるためにリースと美雪となった）

「今コアの修理中、という所。かなり焦ってる。ひよつとしたら外壁パーツが組み上がらないかもって・・・」

「あの二人が消えてしまうのって明日の昼だった筈よね？間に合わないと思うんだけど・・・」

「オリヴィエ、そんな悲しいこと言わないでよ！..!」

(オリヴィエが不意に漏らした言葉に、噛みつくように反論する真琴。しかし・・・)

「その話・・・分からなくもない話ね。だって、外壁パーツを全て外すのに一日半かかったのでしょ？それで今コアの組み立て。それが終わったとしても間に合わない。消えてしまうことを・・・覚悟しておいた方がいいと思うわよ。」

ルシエラの一言で全員が黙り込む。

「だったら・・・最終日だけでも彼女たちを近くに連れていくことは・・・出来るかもしれないわね。私の勝手な考えだけど・・・」
『それだ!..!』

(全員がルシエラの意見に賛同した。もし消えてしまおうとしても、その謝罪が出来ないまま消える、なんてことにはならないだろう、と考えたからだ)

(三日目、運命の日)

「……ユキ……生きてるか……？」

「……さすがに……二徹はきついね……」

(一睡もせずに作業を続けていたため、二人の目には隈が出来ていた。どこかうつらうつらしていながらも、作業を続けていた。既にコアは直り、後は組み立てるだけ、なのだが……)

「……やばい……そろそろ限か……い……」

「ぼ……僕……も……」

(コアを直し、組み立ても三分の一程終了しているという状況で、二人に限界が来た。そのまま二人は眠ってしまった)

「かな兄？入るよ？」

（奏たちが夢の中に入ってから三時間後、エリイが入ってきた。理由は単純、二人が心配になったからだ。部屋にも帰ってきていない（リーシャ&ヴィルミナ談）、ひよっとしたら二日間連続徹夜をし

たのではないか、と思ったからだ)

「……あっちゃー……やっぱり落ちちゃったか……」

(エリイが眠ってしまったている二人を見て、頭を押さえてため息をついた時、プライベート・チャンネルに連絡が入る)

《エリイ、どう？二人は大丈夫？》

《それが最悪な結果になっちまったわけですよリー姉……》

《どうということ？》

《やっぱり二徹やつちまったぜ！みたいな感じで……夢の中に突入してる……》

(エリイが事実を告げた時、通信先で溜息が聞こえた……気がした)

《で、どうする？リーシャ達来ちゃってるけど……》

《……しょうがないか。一緒にいさせてあげて？私達も後から行くね。自然に起きるのを待つしかないかも……》

《ん、了解。》

(エリイは通信を切り、二人を中に招き入れた)

「あ、主……」

「あの、だ、旦那様は……」

「だいじょぶ、今ちよっと疲れて眠っちゃっただけ。二人のために頑張ってるんだからさ、ちよっと寄り添ってあげて？」

「は、はい!!」

(エリイに言われ、それぞれがそれぞれの主の元へと駆け寄った。ヴィルミナはもうそれはそれは嬉しそうだった。リーシャはヴィルミナとは違い、自分のために頑張っている主を労わるように座り込んだ)

「旦那様……私達が今日消えてしまうことを知って今の今まで……
・ありがとうございます……!」

「主……力ない妾たちのためにここまで疲れ果てて……申し訳
ない……」

(午後四時)

「っ!!」

(奏、幸俚同時に飛び起きた。眠ってしまった、ということを見失態だと思っていた)

「あ……お目覚めになられたんですね。」

「り……リーシャ？待て、今一体何時だ！？」
「今……午後四時です……」

（リーシャに言われ、時計を見る。時計の単身が『四』を指していた）

「やべえ！！このままじゃ間に合わなくなっちまう！！」
「作業再開しないと！！」

（跳ね起きるように起きあがった二人はそのまま工具を持って作業を始めた）

「旦那様……」

（ただそれを見ているだけのリーシャは、それが心苦しかった）

(午後十時、いつものメンバーは(沙霧復活済み)1001号室に
集まっていた)

「十時・・・かなちゃんとユッキー、大丈夫かなあ・・・」

(真琴が時計を気にし始めた。奏たちが頑張っている、現在の装置の復活。それが間に合うか間に合わないかでリーシャ達が消えてしまっからだ。実際、この三日で彼女たちは喧嘩したり話したりなど、色々とおったからだ)

「行こう！不安になってきた！！」

「ちょ、迷惑なんじゃ！？」

(シャルロットが飛び出そうとした真琴に制止をかける。だがその答えは別の所から返ってきた)

「行くしか無いのよ！！目の前で仲良くしてた子が消えるってのを見るのは辛いかもしんない！けど、黙っていられるわけないでしょ！？間に合わないかもしれないでしょ！？だったら手伝いに行っただっていいじゃない！！」

「ロロットさんの言うとおりですわ！大切な人が消えるのを指をくわえて見ているなんてとても我慢できませんもの！！」

(シャルロットに対し答えたのはロロット、それに賛同するセシリアだった。真琴、ロロット、セシリアに続いて次々に立ち上がっていく)

「しょうがないわね。二日も徹夜してちょっと寝て、そして起きたらまた作業・・・どんだけアホなのよ、あいつら。」

「仕方ないだろう？大切な人を失いたくないという気持ちがあるのだから。」

「私達に出来るのはほんの些細なことかもしれないけど……」

「手伝うことしかありませんもの。」

（女子一同は部屋から駆け足で出ていった。残された男子二人は……）

「……なあ、亮……」

「……なんだ？」

「俺達も行った方が……いいよな？」

「その方がいいだろうな。ただ、今の二人からすれば、誰もが足手まといになりかねないが。」

（亮に辛口で言われたものの、一夏は立ち上がって女子一同を追いかけていった。亮はそれより遅れて立ち上がり、歩いて行った）

(そして、ピット。女子一同がついて入ろうとしたが、入り口の前にエリイが立っていた。入口は開けられていて、中の様子が見れる)

「退いて、エリイ！」

「・・・退けない。退くことが出来ない。今のかな兄とユッキーは・・・誰かが手伝おうとしたら逆に足手まといになっちゃおうから・・・」

「

（エリイも本当は手伝いたかった。『せっかく友達になれたのに』
という思いがあるからだ。が、彼女は直感で理解していた。今の二
人を手伝おうとしても、逆に足手まといになってしまうことを・・・
）

「エリイ・・・」

「だから・・・退けない。中に入ってもいいけど、それ以上はあ
たしが止める。」

(そして十一時半。リーシャ達に異変が起きた)

「あっ!!」

(その異変に最初に気付いたのは鈴)

「リーシャが・・・ヴィルミナが・・・二人の足が・・・薄くなっ
てる・・・!!」
「えっ!?!」

(そう、タイムリミットが迫り、二人の体が消え始めてきたのだ)

「エリイ！今何時分だ！！」

「今十一時三十一分！タイムリミットまであと二十七分！！」

「くそっ！後四分の一だつてのに！！」

「間に合え・・・間に合え・・・っ！！」

（ピッチを上げ、体の限界を迎えようと、それでもなお組み立てを続ける二人。時間は刻一刻と過ぎていく。それは同時に・・・）

「旦那・・・様・・・！！」

「主・・・！！」

（二人の少女の消滅までのタイムリミットも迫っている、というのとだった）

「消させるか・・・！願いがどうか関係ねえ・・・！」

「会いたいつて・・・想いを伝えたいつて言うのに・・・！」

『意思を無碍にしたいく（ねえ／ない）んだ！！』

（刻一刻と迫る時間。二人はそれに足掻き続ける）

「かな兄！ユツキー！後十分！！」

「くそっ！！間に合わせる・・・絶対に間に合わせてやる・・・！」

「！！」

(二人の作業を手伝うことも出来ず・・・)

「・・・(お願い・・・二人の気持ちを・・・無碍にしないで・・・!)」

「・・・(悲しい別れを・・・私たちにさせないでください・・・!)」

(それぞれがそれぞれで、祈り始めた)

「・・・後・・・五分!!」
「・・・くそっ!!リーシャ!!」

(奏がリーシャを見た時・・・)

「旦那様・・・もう・・・もういいんです・・・」

(既にリーシャの体は上半身を残し中空に浮いているという状況になっていた。それを見た奏は思わずリーシャの所に駆け寄り、抱きしめた)

「いいわけ・・・あるかよ・・・!目的があつてこっちに来て・・・」

果たせないまま帰らせるわけ……ないだろ……！」
「カナ……もう……無理だ……！」

(幸俚が奏にそう告げた。だが奏は最後の手段に出た)

「……うまくいけよ……！」

「……何をする気!？」

「……頼む……!リーシャとヴィルミナを……二人を……！」

「まさか……!?!無茶だよ!まだ完全に治ってない!コアは直つただけど外壁が治ってないんだからかなわないかもしれないし最悪爆発するかもしれないんだよ!？」

(奏のとつた最終手段、それは不完全なその装置に願いを言うことだった。不完全なため、叶わない、下手したら爆発するかもしれない。そんな危険を持ちながらも奏は勝負に出たのだ)

「人間として(……)生きさせてやってくれ!!一人一人の女の子として……!三日で消えるなんて残酷な運命から解放してやってくれえ!……！」

(リーシャを抱きしめたまま奏が叫んだ。幸俚もヴィルミナの近くに行き抱きしめていた。刹那……)

「うわっ!!」

「眩しっ!?!」

「な、なんですのこの光は!?!」

(突如何処からか発せられた光が辺り一面を包んだ。寮からは離れた位置にあるピットだったため、光が誰かに見られることはなかった)

「……リー……シャ……?」

「……ヴェルミナ!?!」

(光の発生源はリーシャとヴェルミナだった。光の強さが弱まりやっとな目が開けられるようになった時、消えていた体が再び現れるのが見えた)

「あ……」

「え、ちょっと待って!よく見て!?!」

(真っ先に何か気付いたのは真琴。何が起きたのかと言うと……)

「尻尾がなくなって……ちゃんと人間になってる……!!」

(そう、『ただ話をしたい、礼を言いたいという思いで生まれた存在』を現すそれぞれのポ モンの尻尾がなくなっていたのだ。人間になった、という証明にもなった)

「ということとはつまり・・・」

「もう消えない・・・ってことなんだ・・・!!」

(オリヴィエが結論を言った時、誰ともなく全員が喜びを分かち合った。そんな中・・・)

「・・・悪いユキ、俺もうダメだわ・・・。眠い・・・」

「僕も・・・そろそろ限界・・・」

(徹夜を続けていた二人が完全に限界を迎え、背中合わせにずるずると崩れ落ち、眠ってしまった)

「・・・しょうがないわね・・・。リース、二人を運ぶわよ。私が二崎君を運ぶから、あなたは真田君をお願い。」

「・・・うん、分かった。・・・二人ともお疲れ様。」

(リースとルシエラにおぶられる形で部屋に運ばれる二人。その二人の背中を、二人はただ見つめていた)

S i d e L i c c i a

・・・あの後私とヴィルミナはルシエラさんから名字をもらいました。

私は『リーシャ・オーロラ』として生きていきます。

そして、前の呼び方・・・私で言う所の『旦那様』と言う呼び方を止める、とも言われました。だから私は『奏さん』と呼ぶことになりました。

・・・今はもう眠っちゃって直接は言えないけど・・・

私は・・・嫁と呼ばれる存在じゃなくなってしまうたのですが・・・

一人の女として・・・あなたを愛することを誓います・・・！

S i d e V i l m i n a

妾は妻のお蔭で一人の人間になった。

そしてルシエラから『ヴィルミナ・ヘイルズ』と言う名を改めて貰い、そして『主』と言う呼び方を止めるとも言われたのじゃ。

もう・・・幸俚は眠ってしまっておる。正面切つて言えぬことなの
じゃが・・・

妾は・・・生涯幸俚だけを愛すると決めた・・・他の誰にも靡く
ことは絶対せぬ・・・。妾の決意であり、忠誠であり、本当の気持
ちじゃ・・・！

#55 願望、顕現す（後書き）

「（鈴）後書きコーナーなんだけど・・・」

「（真琴）今回はかなちゃんか寝ちゃったから私達が作者さんから受け取った事前回答を元に答えていくね。」

「（鈴）えーっと、最初・・・というか今回の質問全部エドワード・ニューゲートさんからね・・・いつもありがと。」

「（真琴）一つ目は・・・『奏はこの前、某黒足コツクの技を披露したが、他にも何か使える武術や技などはあるか？』という質問。

『何これ？』って思う人への解説で、前かなちゃんがエドワード・ニューゲートさんの感想で作者さんをぶっ飛ばした時に使ったのが某黒足コツクの技だったの。で、答えは『剣道なら達人並・・・なはず。中学の途中で止めたからな、剣道・・・』だって。あとは『居合抜刀くらい』と言ってたみたい。」

「（鈴）奏ってホントチートね・・・。足技使ってるし剣道達人並だし勉強できるし・・・。じゃ次。『今回の話でぶっ飛ばされた一夏がどうなったか知ってるか？』・・・って何よこれ？」

「（真琴）えと、全話の終わりちよつと前に一夏がロロツトにBDレコーダーの説明をした時なんだけど、吹っ飛ばされたんだよね。で、答えはかなちゃんじゃなくて色んな人に聞いてきたよ。」

「（鈴）で、返ってきた答えが『木に引つかかっていた』がほとんどだったわ。どう吹っ飛んでいったかは知らないけど・・・木に引つかかるって相当奇跡ね・・・」

「（真琴）最後は・・・ってあれ？鈴？どうして私を追い出すの？」

「（鈴）あんたには聞かれたくない問題だったからよ！！さっさと出てけ！！」

「（真琴）ぶー・・・」

「（鈴）よし、じゃ最後の質問！『真琴、オリヴィエ、シャルロット、ラウラ、エリイ、ルティア、沙霧、ロロットの良いところを一言で挙げるとしたら？』ね。回答は……」

真琴 元気があるところ

オリヴィエ 料理以外で器用貧乏な所

シャルロット 周りに気を配れる所

ラウラ ひたむきに頑張れる所

エリイ 趣味が共通しているから話しやすい

ルティア 自分の弱い所を自覚して、変えようと頑張ってるところ）
あれ、一言じゃ終わらねえ？（

沙霧 一つのこと集中できること

ロロット 簡単に入こたれたりしないところ

ね。で……みなさんお待ちかね、と言えば良いの？エリイの髪V
S 真白の結果は……

エリイの髪を伸ばした状態の半分までしっかり伸ばせたところで真白がリタイアしちゃったのよね……。肩までだったから結構奮闘してみた。

で、被害は櫛40本、ヘアブラシ2本。……どんだけクセが強いんだよ……

ちなみに真白って髪については頑固な所があったのかよく分からないんだけど、40本目の被害が出るまでずっと櫛でやってたの。・
・どうなんだか。

で、次回から夏休み編に入るわよ！！最初は……。ちよ、ええっ！
？で、デート！？／／／

な、内容は『大きくは言えない、でもマジでデートします』って・
・／／／

お、おおお楽しみにっ！！／／／」

#56 内気な少女、初デート(?) (前書き)

タイトルだけで察せる人はその少女のファンです。・・・冗談です。

予め言うておきますが、エリィの『〜ダーニ』という部分、誤字じゃないので。そこはネタです。

#56 内気な少女、初デート(?)

Side Ely

「・・・」

・・・朝からルーがおかしい。鼻歌歌ったり突然にへらつと顔がふにやけたり。決定的なのは何時も着ないめちやくちゃ気合いの入った服・・・いつも着ない真っ白なワンピースだったり、髪飾りもいつもは待機状態のノワールなのに、今日は可愛らしいヘアピンだったり。

「・・・ルー、今日何かあるの？」

「っ!!!(ギクウっ!!!)」

・・・んー・・・あの動揺っぷり・・・うっしっし・・・

「なななな、にやんでも・・・にやんでもにやいよっ!?!?!」

「・・・うーわ、自分からバラしてる感満載の噛みっぷり・・・」

何かある!これはこれは・・・面白いネタが見つかったもんだニ・・・

「ね、姉さんには関係ないもんっ！ー！い、いってきましゅっ！ー！／＼」

凄く慌てて出てった。・・・よし、こういうのはネタが分かるやつに連絡して、って相場が決まってるもんね・・・

「・・・あ、もしもし？鈴？今ね、面白い事があったんだけど・・・一緒に来ない？」

S i d e
L u t h a

今日は・・・奏君と・・・で
で、デザート・・・//
//

(実は昨日のことである)

「ふえ？」

「だからさ、ごめんルティア！誰かと適当に行ってきた！」

昨日、一緒に映画を見る予定だったリー姉さんが急用が出来たために一緒に行けなくなった。・・・うう・・・姉さんと一緒じゃないと・・・子供っぽいって思われちゃうもん・・・

(ちなみにルティアが見たがっていたのは某魔法少女もののアニメ

が劇場化したもの。深夜帯だが根強いファンが多い事で有名。ちなみに主人公はルティアにとって見習いたいほど心が強い。けど子供っぽいつて思われてしまうと思っているのは『魔法少女に憧れている』と思われてしまう、ということを考えているだけ。実際はそうでもなかったり)

「んー・・・これ、奏と一緒に見に行ったらどうかな？奏なら笑わないだろうし。」

「へうつ！？／／／」

か・・・か・・・か・・・／／／

「だからさ、頼みに行こ？私も行くからさ。ね？」

「う・・・ううゝ・・・／／／」

そ、その後姉さんと一緒に奏君に会いに行つてこのことを言つたら・・・

「・・・マジで！？」

「うん、マジ。ほら、証拠の割引チケット。本当は私が行くはずだったんだけど予定が入っちゃったからさ、二人で行つてきて？」

「へうつ！？／／／」

「行くし！これ見たかつたんだつて！！良かったー！もしかしたら見れねえかと思つてたんだよ！！」

・・・へ？

「ホントごめんね！！急な話で！」

「いやいやこつちも得させてもらったからお相子だって！！」

あれ・・・？私関係なく話が進んでいくよ・・・？

そして結局、私の意見を何一つ聞いてももらえないこともなく話が進ん
じやって、奏君とで、で、デートすることになっちゃった・・・/
/
/

(で、今)

「……ふふっ……」

けど……嬉しくて口が緩んじゃうよお……

(ルティアは『奏とデート』という事実が影響して、本来九時半集合だったのにも拘らず十分も早く集合場所へ来てしまった)

奏君、早く来ないかなあ……？

(そして、誰もが目を奪われるほどの美貌を持つルティアがただ一人そこにいるのだ、当然悪い虫が寄ってこないはずもなく……)

「ねえ君？今暇？」

「……っ……」

突然横に現れた『異性』に嫌悪感を見せるルティア。

「俺達といいことしてあそばねえ？」

「い・・・嫌・・・」

「いーからいーから。嫌なことしねえからよ？」

（ルティアとしては本心が見えてしまっていた）

この人たち・・・絶対私にエッチなことしようとしてる・・・。やだ・・・

「や・・・やめてください・・・！」

（ルティアがはつきりと『いや』と告げた時だった）

「人が嫌がつてるのに強要すんじゃねえよ変態共が！！」

「げふんっ！？」

『け、ケンちゃん！？』

ルティアの腕を掴んでいた男（下種A）が突然蹴り飛ばされた。

「な、なんだよオメエは！？」

「なんだよ！！俺達と彼女の楽しい時間を邪魔するってのか！？」

「アホ、彼女は俺の連れだ。」

「・・・あれ？声低いけどこいつ女っぽくね？」

「うわ、ダッセー!!」

「……(プチン)」

あ……今何かが切れる音が……

「ふん！」

「ぎゃあああああつ!!?」

「な、ナベつち!? テメエよくも!!」

「……殺す……」

「はあ？」

……奏……君……?」

「お前ら俺がめちやくちや気にしてることを!! ぜつてえ許さねえ!! ぜつてえ殺す!!」

「なんだとテメエ!! 嘗めてつと殺すぞコラア!!」

め、目の前で奏君が喧嘩始めちゃった……! と、止めな……あ、あれ?

「おらおらおらおらオラオラオラオラアツ!!」

あ、脚で……攻撃してる……!? これ、カポエラとか言う格闘技・

・・・だった・・・つけ？

「くそがあ！！一撃くらい・・・！」

な、ナイフ！！

「か、奏君！！後ろにナイフ持つてる人が！！」

「・・・たくよお・・・！雑魚はクソ引っこんでろ！！」

・・・え・・・？

「げふんっ！！」

や、やつつけ・・・ちゃった・・・

「お、覚えてやがれ！！」

あの人たち・・・逃げてっっちゃった・・・た、助かった・・・

「・・・ったく、人が気にしてること言いやがって・・・。ルティア、大丈夫か？」

へうつ！？そ、そんな真正面から見られたら・・・

「へうつ・・・//」

「・・・顔赤いぞ？熱ないか？大丈夫か？」

「だ、ただ大丈夫！！大丈夫だよ！！//」

・・・ほ、ほんとに大丈夫じゃないよお・・・//

「・・・奏つてあんなに足技達者なの？手一切使つてないように見えただけ・・・」

（二人の待ち合わせ場所からちょっとだけ離れた所に鈴とエリイがいた。そして・・・）

「ね、ねえ・・・、本当に尾行しちゃっていいのかな・・・？」

（そして雪菜がいた）

「だってさ、ルーの初デートだよ？どういう経緯があつたかは知らないけどデートなんだよ？姉として見守らないといけないじゃん？」
「あたしは面白そうだったし・・・だってさ、あの唐変朴の片割れ

がデートって聞いたら気にもなるわよ？」

「だけど・・・邪魔しちゃうんじゃないのかなって思うよ・・・？」

（雪菜はさつきからこの心配をしていたが、そんなのは関係ないと言わんばかりに二人は奏たちを追い続けた。ついでに鈴は前回の追跡の教訓から、ISは置いてきている。エリイははっきり言って邪魔だから置いてきた。雪菜は元から専用機を持っていない）

「あ、動いたみたい。映画館のチケット、ルーが持ってたのを見たから映画に行くんだらうって思うけどさ、何か二人に共通する映画って・・・」

（エリイが新聞を広げた・・・ってここで広げられるのか？まあそこは突っ込まない方針で）

「・・・あ、なるへそ。」

「なにになに？あったの？二人が共通して見る映画・・・」

「うん。あのリリカルな白い魔法使い少女のアニメが劇場化したやつだ。あれルティア結構見てたからなあ・・・」

「あー・・・三期で魔王になっちゃったあの？」

「あのシーン怖かったなあ・・・。目のハイライトが消えてたって言うか・・・」

（三人は奏たちが移動するまでその映画のことで盛り上がっており、移動した時にこそそそっと移動した。）

(映画館)

「えっと・・・」

(料金を払おうとルティアが財布を開けた時だった)

「あ・・・」

(財布の中には一人分をギリギリ払えない額が入っていた。本当にギリギリである)

なんでだろ・・・？準備して来たのに・・・？

(ちなみにルティアが素で忘れてきただけである)

「どうした？」

「な、なんでも・・・ないよ・・・？」

「いや、なんでもないわけないだろ？ひょっとしたら金足りないとか？」

「あう・・・」

ば、ばれちゃった・・・

「しゃーねー、俺が金出すよ。」

「・・・え・・・？」

私がお金が言う前に奏君がお金を出してくれた・・・

「あ・・・ありがとう・・・／＼／」

「気にすんなよ。とりあえずなんか適当に買って映画見ようぜ。」

(奏がルティアの手を取って売店の方へ向かった)

へううーっ!?!か、奏君!?!な、なんか大胆過ぎるよお!!!!／＼／

(一方)

「おおっ!!」

「さすが無自覚、手を繋ぐのも容易い事って言いたいわけ?・・・
ある意味本当に凄いとしか言いようがないわ・・・」

(・・・いいなあ・・・)

(エリイと鈴が奏がルティアの手を引いて物を買に行った時、それぞれがそれぞれで言葉を洩らした。雪菜はまだどこか未練が残っていたようで、ルティアを羨ましがっていた)

「あたしたちも映画見る？これ結構人気な映画だし・・・ついでに観察と言つことですか？」

「そだね。実はあたしも見たかったんだー。やっべ、超楽しみになつてきた！」

「ちよ、ちよつとエリイちゃん、言葉が男くさくなってるよ？」

「ホラーものだったらもつと面白い展開があつたんだろっけどなー。

nice boat だったらもうそれは怖い怖い・・・」

「・・・エリイ、あんた・・・そんなの見てたんだ・・・。あたし、そんなの知らないわよ・・・？てか何なのよnice boat っで・・・」

「あー、それは・・・」

「い、言わないで・・・！き、聞いたことあるんだけど・・・ね、眠れなくなっちゃうから・・・」

(雪菜ががくがくと震え始めたので話がお開きになった。ちなみに nice boat を詳しく知りたい人はググッてね。動画もあるけど見る時は覚悟をしておいてね。かなりやばいからby作者)

（中に入って席に座る二人。手にはポップコーンと飲み物。奏はコーラ、ルティアはオレンジジュースだ）

せ、席が隣同士なんだ……。買ったのが連続だったから分かって
はいたんだけど……。やっぱり……。恥ずかしい……。／／

「やべ、テンションあがってきた……。めっちゃ楽しみだったか
らなあ……。！」

……。でも、奏君楽しみだったって言うてたし……。よかった……。
のかな……。？

「ね、ねえエリイちゃん……この映画って……怖い事ない……
よね……?」

「……どうしたのよ雪菜?これ、普通の魔法少女ものじゃない。」

「……ひよつとしてさ、雪菜って別の魔法少女ものと勘違いして
ない?契約的な魔法少女とさ?」

「……もしかして……アレ……?あの3話で凄いグロかった
アレ……?」

「そのあれ。でもまあ……アレに比べたらかなりマシだけど。」

(エリイ達も席に座って話していた。そんな中、雪菜が不安げな顔
をした。別の魔法少女もののアニメと勘違いしていた、というのが
理由だ。ちなみに後者の『アレ』とはさっきの nice boat
である)

「・・・エリイ、あんたいろんなアニメに精通・・・してたりする？」

「そんなことないよ？知ってるやつは知ってて知らないやつは知らないだけ。」

「・・・何それ怖い・・・」

（鈴がエリイに呟いた所で、アナウンスが入った。お決まりの『携帯電話・PHSの電源をお切りいただくか、マナーモードにしてください』と言う。そしてエリイ達がそれぞれで行動をとった数分後、始まった）

「えうえうえううく……」
「……いつまで泣いてんだよ……」

(出てきた二人。奏は現在絶賛号泣中のルティアを慰めていた)

「だって……だって……可哀想すぎるよ……！フェトがあ
……お母さんに捨てられたんだよ……！！」
「……いや、あれは深いと言えばあの子を危険な目に遭わせた
くなかったんだと思うぞ……」
「それに……最後の……名前を呼び合う所が……えううく……」
「」

感動しちゃったんだもん・・・涙が止まらないよぉ・・・

「・・・かな兄たちは・・・あ、いた。・・・やっぱリルティア泣いちゃってるよ・・・」

「しょうがないよ、あれ、結構感動しちゃったもん・・・。敵対してる子に『友達になりたいんだ』って普通言えないよ?」

「・・・あ、動くわよ? まあ時間もいいくらいになっちゃったし、後帰るだけじゃない?」

(奏たちが明らかに帰るルートを歩き始めたため、一応最後までついていくことにした三人。一応気付かれないように)

「・・・あ、そだ鈴。帰ったら nice boat のやつ見る?」

「・・・見たいような見たくないような・・・」

「とりあえずラウラも呼んどくかな? ラウラだったら多分大丈夫な気がするし。」

「・・・り、鈴ちゃん、止めといた方がいいよ・・・? 前ちらっと見たんだけど腰抜けちゃったもん・・・」

「一応無修正ね?」

「・・・絶対無理だ・・・」

「・・・一人で見るなら無理っばいけど・・・誰かがいたら大丈夫かも・・・」

「じゃあ後であたしの部屋にね。あ、リー姉やルーにはちよつと出てもらっつから。」

(なんか色々と話がついていた二人。雪菜は鈴に『ああ・・・』と
言っていた)

抜け駆けになっちゃったかもしれないけど・・・皆より一歩リード・・・出来たんだよね・・・！

#56 内気な少女、初デート(?) (後書き)

「(奏) いやー、映画楽しかったぜ!」

良かったですね……。私なんてDVDもBDもないからまだ見てないってのに……。こんちきしょう……

「(奏) そういやよるちよつと鈴に用事があつて部屋尋ねたら鈴がものすつごい震えてただけけど何があつた?」

あー……。見てしまったんですよ。あなたが見れないあのアニメを・
・

「(奏) ……スクイズか……」

最近次回予告がない気もしなくはないですが、話の予告を作るのが面倒になつたんですね……。恒例つて言つても大雑把に言うのが苦手なんですから……

「(奏) 次回は原作四巻の買い物の話だ。面倒だからこれだけにする。ただ、相違点があるからな?」

では質問コーナー。ただ、一つだけ回答を事前に聞いておきました。

1・俊さんから

『十月から始まるガンダムAGEは期待してますか?』

「(奏) 正直言つて期待してない。」

私もです。なんか……。種とかの換装機に比べると換装後に面影が殆どない気がして……

「(奏) 俺は……。まあ、今までの話が重かつたりするんだけどなんか絵的に軽そうに見えて……」

2・俊さんから

『風雲再起に騎乗出来たら何をしたいですか?』

ちなみに風雲再起とは、『機動武闘伝Gガンダム』に出てくる、『

マスターガンダム』が乗っている馬ですね。馬・・・というより機械の馬・・・だった気が。そこはあまり記憶にないですよね・・・
「（奏）とりあえず乗れたら乗りまわしたい。ただそれだけだな。あとは何も望まないさ。」

3・エドワード・ニューゲートさんから

「奏には、生涯絶対消えないであろうトラウマはありますか？（ブラコン、およびバース関連以外で）」

これに関しては完全な答えが出せません。ネタバレになってしまうので・・・。とりあえず奏、伏せられる程度に。

「（奏）あ、ああ・・・。俺は人が死んだり他人の流す血を見るのが苦手で・・・それがショック症状を起こすくらいなんだよ・・・。『ある出来事』の所為で、な・・・。それがトラウマになってる、そう思う。」

そのため、先程『スクイズは奏が見れない』と言う理由が出てくるんです。これの完全な答えは後々本編に出るので、それをお待ちください。

後は私宛、と取っていい質問が一つ、答えが出るのにかなり時間がかかったのが一つ。ではまず私宛とも取れる質問から。

エドワード・ニューゲートさんから

「今現在、リーシャとヴィルミナに専用機を持たせる予定はありますか？」

あります。と言うか二人が出るのが確定した直後にISを決めました。具体的な情報は流せませんが、とりあえず名前は外国語になります。

ついでに日訳語を。

リーシャ……『人魚の涙』
ヴィルミナ……『炎の姫』

何処の言葉かは完全に教えません!!

そして、もう一つの……です。

「(奏)あれか……。相当もめたんだよな……。
では、質問の後はその風景です。」

俊さんから

『Gガンダムでのレインに告白するドモンを演じる事になった場合、ヒロインの誰がレイン役に成ると思いますか？そして誰がアレンビ―役に成りますかね？』
ちなみにドモンは奏です。

「(エリイ)はい、とりあえず会議ねー。会議の内容は「もしGガンでの告白シーンをやる時、だれがどの役になるか」ねー。あ、配役はドモンが奏だから。」

「(シャルロット)ドモンが奏？後の役は？」

「(リース)告白されるレインっていうキャラクターと、はっきり言っちゃえばふられちゃうキャラクターのアレンビ―ってキャラね。」

『(真琴・オリヴィエ・ラウラ・シャルロット)レインは絶対絶対私(だ)!!!』

「(沙霧)一番似合うのは私……!」

「(ルティア)わ、私も……立候補したい……。な……。//」

「(雪菜)私は……。アレンビ―かな……。？だって、そんな感じ

だもん……」

「(ロロット)わ、私はやらないわよ!?そ、そういう告白とかいとか興味無いものやりたくもないわ!!」

「(ルシエラ)そんな慌てて言ったって、説得力無いわよ?」

「(ロロット)うぐっ……」

「(ラウラ)レインは私だ!告白するということは結婚すること、つまり嫁である私が一番だろう!？」

「(真琴)違うよ!!レインはドモンと仲が良かったもん、仲が良くないといけないよ!!」

「(シャルロット)ううん、二人とも違うよ?他人に優しく接することが出来る人じゃないと向いてないと思うよ?」

「(沙霧)……違う。その人を強く思える人じゃないと向いてない……。だから私が一番……」

「(ルティア)わ、私だつて……思ってるもん……/ / /」

「(オリヴィエ)だったら白黒つけましょ、ISで!!」

「(ラウラ)その方が話が早い。全員まとめて蹴散らしてやる!!」

「(シャルロット)絶対!負けないからね!!」

「(沙霧)……勝つのは私……」

「(エリイ)……こりゃ紛糾どころの話じゃないね、こりゃ……」

「(リース)奏が相手だもん、仕方ないよ……」

「(奏)で?」

結局全員共倒れとなつてしまいました……。一応アレンビーは雪菜です。今回はここまでです。次回は……

「(奏)ゲストフラグキター、な感じだな……」

通称皆の嫁、シャルロットに来てもらいます。

「(奏)・・・まあ、否定はできないわな・・・。タグとかでよく
『シャルロット』とかいうのを見かけるし・・・」

57 Three Cats Rhapsody (前書き)

長かった・・・非常に長かった・・・(約30000文字)

沙霧の意外な一面、奏の本当に意外な所が見れます。

沙霧3割増し美化？

57 Three Cats Rhapsody

Side Laura

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。階級は少尉。現在はISの試験操縦士。」

（薄暗い部屋。不快な湿度がそれを物語っている。）

・・・そうだ、ここは・・・私の記憶の中でも特別暗い部分だ。軍隊の訓練、その中でも一番嫌いだ。『尋問に対する耐性訓練』だ。

その訓練場所でもあり、数年前まで実際に尋問・・・いや、拷問にも使われていた場所。床の黒い染みは湿度とはおそらく・・・いや、確実に関係がない。拷問で流れた血、あるいは今まで落ちてきた水滴だろう。

そして、水滴の音。結露した天井から時折落ちてくるそれが、無償に苛立ちを駆り立てる・・・

「気分は如何かな？ふふつ、顔色が良くないね？」

（立つ気力も座る体力もないラウラは、そんな問いかけを相手にしたりしない。このおぞましき部屋の主であるう女は、ラウラからは

顔が見えなかった。ラウラの立ち位置からは逆光になる位置に立ち、腰の後ろで手を組んでいた。その声は妙に澄んでおり、この部屋の湿度もあってか特別綺麗に木霊した)

「さて、三日間の不眠と断食は如何だったかな、ラウラ君？ん？」

・・・答えるのも嫌だ……。体力を使う……。そのくらい、私は疲弊しているのだから……

「これはねえ、典型的な尋問なんだよ？大昔から使われていた手法のね。時間の概念が停止した部屋で眠らせず、食べさせず、そして延々と水滴の音だけを聞かせる、ね。」

(かつかつと、硬質の踵を鳴らして女が数歩、進む)

「かけさせてもらおうよ？」

・・・勝手にしろ。

(今のラウラには、そう心の中で呟くのがやっとだった。

女は椅子にかけると右に左に首を鳴らし、ゆっくりと脚を組んだ。

僅かに光の網から抜け出した脚は、驚くことに素肌だった)

・・・軍服を着ていない・・・？誰だ、こいつは・・・？いつもの訓練官ではない・・・。いや、それどころか軍人だというのも怪しい・・・。

(部屋の主の女かと思ったが、どうやら違うようだった。改めてラウラが考え直してみると、いつもの訓練官とは口調が違い、声も高かった)

・・・こいつは・・・誰だ？何故・・・どうしてここにいる・・・？

(いつもとは違う要素が腐りかけていた思考回路を蘇らせた。自然と活力がわき起こり、次の瞬間にはどうやって制圧するかを思案する)

・・・そうだな・・・まずは・・・

「まずは、椅子を倒し、そのまま首を取る・・・というのは、あまりお勧めしないな。」

っ！？な、何故・・・！？

「なぜ考えていることが分かった、ということかい？それはねえ・・・

「・

(女の顔がゆつくりと光の網から出てくる。しかしそれは口元までで、目は見えない。美人・・・なのだろう、おそろく。顎の造形が整っていたからだ。そして形のいい唇が、ゆつくりと言葉を刻む)

「

」

(ラウラには、それが不思議なことに聞こえなかった。読唇術を会得したラウラにとつて、例え無言であつても言葉を理解するのは容易いことだ。しかし、なぜかその言葉を言語化することが出来なかった。だが、それなのに・・・)

・・・ああ・・・なるほどな・・・

(酷く、納得がいつてしまう。『それならば仕方がないか』と思つてしまう『何か』。その言葉にはそれがあつたのだ)

「さて、それじゃあ尋問を始めようかな？ラウラ君、君に愛国心はあるかな？」

「ああ。」

「ふふつ、簡単にウソをつくんだね、君は。・・・愛国心なんて、かけらも持ち合わせてないんじゃない？」

「そんなことはない。」

(女は『まあ、それはどうでもいいんだよ』と本当にどうでもよさげに言ってから、何やら手帳を取り出して聞く)

「さて、仲間は何処にいる？規模は？装備のレベル、それにバックアップは？」

「言うはずがないだろう。」

「・・・そうだね。じゃあ、こついつのはどうかな？」

(女の口元がにやりと歪む。それに取り合わず、ラウラは次にどうやって目の前の相手を制圧するかを考え始めた)

「好きな人は出来た？」

・・・

(刹那、ラウラの思考が停止した)

「なに？」

「君が好きなのはゲームが好きで天才で、男で唯一ゼロを扱える少年だね？名前は二崎か・・・」

「なっ！？ば、馬鹿っ！！言っつ、言っつなあっ！！！」

「あははっ！！顔を真っ赤にしちゃって 可愛いねえ。」

「いっっ、いっっ、殺すっ！！殺してやるっ！！」

（疲労も脱力も吹き飛ばして、ラウラは立ち上がるのと飛びかかるのを同時に行う。そして・・・）

「あ、あのー・・・ラウラ・・・？」
「う・・・？」

(ラウラが押し倒し、その首筋にナイフを当てているのは、ルームメイトのシャルロットだった。場所はIS学園一年生寮の自室。時刻はどうも早朝らしく、窓の外では雀が暢気にチュンチュンと鳴いていた)

「えーっと・・・あのね？ラウラがうなされていたから声をかけようかなーと思ったんだけどね？」

「そ、そう・・・か・・・」

(言われてみて気付いたが、ラウラは寝汗をびっしょりとかいていた。肌に残りつく髪が、堪らなく鬱陶しかった)

「・・・それで・・・いつまでこのままなのかな・・・？」
「そ、そうか、そうだな・・・すまない・・・」

(頸動脈にあてていたナイフを退け、そのままシャルロットの上か

からも離れる。ラウラ自身、夢の内容は覚えていなかったが、とても楽しいものではなかったということが、自分の乱れた脈拍から理解出来た)

「ん、別にいいよ。気にしてないから。」

「そうか。助かる。」

(ラウラはこの部屋割には最初こそ戸惑っていたものの、ルームメイアのシャルロットが非常に気の利く存在であったため、寧ろ今ではこの編成に感謝していた。対決の後も別段気にしたような様子は無く、改めてルームメイアとして、そして友人としての付き合いをしてきていた)

そのシャルロットに刃物を向けるなど……どうかしているな、私は……

(ふう、と溜息を漏らしてベッドから降りる。シャルロットもそれに続いた)

「ところでさあ、ラウラ？」

「なんだ？」

「あの……やっぱり服は着ないのかな？」

(改めて、シャルロットは指摘した。というのも、このラウラ、寝

る時はいつも全裸なのだ。その理由が・・・)

「寝る時に着る服がない。」

「いや、そうかもしれないけど・・・ああもう、風邪ひくってば・・・」

(常にサイドテーブルに備えてあるバスタオルは、このためのものだ。いつものように、シャルロットはラウラの体にタオルをかける)

「ふむ、すまないな。ところで私はシャワーをしてくるが、お前は
どうする?」

「うん、僕も浴びようかな?冷や汗かいちゃったし。」

「一緒にか?」

「ち、違うよっ!もうっ!!ラウラの後!」

「冗談だ。」

(いつも通りの冷淡な調子でそう言われ、シャルロットは一瞬ぼかんとしてしまう。その間にラウラはシャワールームへ行ってしまう、ボタンとドアを閉じる音が聞こえた)

前は冗談なんて言わなかったのに、どうしたんだろ・・・？

(心境の変化でもあったのだろうか、友人としては気になる所だった)

・・・それはそうとして、やっぱりパジャマ、なんとかしないと・・・

(うーんと朝から唸るシャルロットであった。そんな時)

(トントントン) シャルロット・・・いる・・・？

沙霧・・・？どうしたんだろ、こんな朝から・・・？

(突然部屋を訪ねてきた沙霧に引っかかりを覚えながらも、ドアを開けた)

「どうしたの、沙霧？いつも奏の所にいるのに・・・珍しいね？」
「奏が構ってくれないから・・・どこか連れてってほしい・・・」

(心の中で子供か、と思いつつも、シャルロットは考え始めた)

・・・どこか・・・あ、そうだ。ラウラのピジャマのこともあったから、一緒に来てもらおうというのもいいかも。

「じゃあ・・・でかける？」

「・・・!!」(コクコクコクコク!!)」

(シャルロットの提案に、沙霧は物凄い勢いで首を縦に振った。振り終えた後は最早犬のようだった)

(ちなみに、現在の奏はと言つと・・・)

『今こそ、決着の時なのです!!ゲイルス イグル!!』
『おおっと!やばかったねー・・・』

「えっ!?!今の避ける!?!」
「ゲイル食らつたら流石に落ちるから!?!」
「かな兄?そんな余裕ぶっこいてたら真っ先に・・・死ぬよ?」

『これこそ、天駆ける天使の牙!グンニユール!?!』

「うおおおっ！！急上昇急下降急上昇急下降！！」

「嘘っ！？全部避けられた！？」

「あつぶねー・・・R A E Xとかないわー・・・。今度はこっちのお返しだ！！」

「R A・・・じゃない！？」

『ボクの本気を見せてあげるよ！シザー　！！ガ　アス！ドミニオ　ール！！』

「嘘っ！？零距离ドミニオール！？しかも落ちた！？」

「後はユキだけだ！！」

（某神姫ゲームでバトルロイヤルをやっていた）

「買い物？」

「うん、そう。沙霧も一緒だけど。」

「・・・（コクコク）」

（寮の食堂、そこで早めの朝食をとりながら、ラウラとシャルロットと沙霧は話していた。三人の他には朝連をしている部活動の面々がちらほらいる程度で、全く混んではない。）

ちなみに三人のメニューはといえば、シャルロットがマカロニサラダにトースト、ヨーグルトで、沙霧がご飯と豆腐とワカメの味噌汁

と目玉焼きと煮物。ラウラはシャルロットのメニューと一緒になのが……)

「ら、ラウラ……なに、それ……?」

「キャベツの千切り、山盛りだ。」

「それは分かるんだけど……なんで?」

「夫の好みに合わせるのも、嫁の務めだろう?」

「……いや、それは好みというか単に偏食しているだけだと思うんだけど……」

(ちなみに奏は前にも出たと思うが凄い量の野菜を食べる。前にシャルロットが『そんなに野菜好きなの?』と聞いたところ

『好きだけど?それに本来ならもっと野菜を食わねえといけないんだっての。目安としては両手を合わせて指を広げた状態で支えられる量三回分。それくらい食ってやっと上等な量なんだぞ?』

と、もの見事に論破された。その時の奏のメニューに一切の肉料理がなかったから、シャルロットは偏食しているだけだ、と勘違いしたので)

「それに本来食べなければならない量の三分の一にも満たないんだぞ?人間、もつと野菜を食べないと体調を崩したり太ったりするぞ?まあ、ぶくぶくに太りたいなら止めはしないがな。」

「……それ、奏の受け売りだよな?」

「当然だ。」

「……だよ。そうだろうね……。今の喋り方、ラウラっぽくなかったもん……」

「……やっぱりなあ……。ラウラって存外、感化されやすい性格なのかなあ……」

(そんなことを考えながら、シャルロットはフォークの先端にマカロニをするつと通して食べた)

「む、なんだそれは？」

「なんだって……マカロニ？」

「それは分かっている。どうしてフォークに通したのかを聞きたいのだ。刺すのではなく、何故通したのかを。」

(ラウラの真剣な眼差しに、シャルロットはつい雰囲気飲まれそうになってマカロニを飲み込むのがワントンポ遅れた)

「なぜって言われても……。なんとなく……？」

「ふむ、なんとなく……」

「ラウラもやってみたら？結構楽しいよ？」

(そういつてから、ハッと気がついた)

う……、僕って子供っぽいかな……？ラウラのことだし……
もしかしたら……

『ほう、確かに面白いな。』

『そ、そう？よかった。』

『こんなもので面白いと言える、お前の頭がな。』

……い、いや！そんなことは無いよ、うん！ラウラはきっとそ
んなこと言わないよ……！

「シャルロット。」

っ……！

「これは確かに面白いな。ふむ……せっかくだ、全部の先端に通
してみよう。」

(言っですぐ、他のマカロニも弄り始めるラウラ。どうやら本当に
面白がっているらしく、その反応にシャルロットはほっとした)

「……のむ……く……っ……これは思ったより難しいな……こ
……の」

(なかなか最後のマカロニが通らず、悪戦苦闘するラウラ。それを見ていたシャルロットは、なんとなく昔飼っていた猫を思い出していた)

あの子って変な所で不器用だったなあ……。毛糸、ずっと追いかけてたりして、最後は玉じゃなくなっちゃって、不思議な顔してたけ……

「……できた。」

「おー。」

(マカロニを先端に通したフォークを軽く持ち上げるラウラと、それに拍手をするシャルロット。食堂にいた他の女子は、何かと目を瞬かせていた。ちなみに沙霧はというと……)

「……半熟……。……完熟じゃない……」

(目玉焼きが半熟だったため、落ち込んでいた。沙霧は奏に影響されてしまったのか、完熟派になっていた。ちなみに元は半熟派だったのだが)

「それで、買い物には何時行くんのだ？」

「あ、うん。十時くらいに出ようかなって思っただけど、どうかな？一時間くらい街を見て、どこか良さそうなお店でランチしようよ。」

「そうか。せっかくだし夫も誘っていこう。うむ、私はいい嫁になる。」

「あ、奏はどうしても来れないみたいだよ？」

「……どういうことだ？」

「そうじゃなきゃ、ここに沙霧がないじゃん。」

「……それもそうだ……」

(沙霧がここに存在「奏が忙しい(当の本人はユキ・エリイとゲームで激戦を繰り広げられているだけだが)」という公式がラウラの中で出来あがっていた。悔しいが、それくらい沙霧が奏にべったりだということが意識されていた)

「……だが出歩いた方が運動になるのではないか？最近のあいつは部屋に閉じこもってばかりな気がする。よし、やっぱり呼ぼう。」

「……出るといいね……」

(その頃)

「げえっ、緑!？」

「よっしゃ、俺が一位だ! !悪いなエリイ、勝たせてもらっぜっつて皮ピンポイント爆撃!？」

「ごめんよ、勝負は無常だから。」

「くっそー・・・お、テ サ・・・なにを奪って・・・よっしゃ、スーだ!よっしゃ、吹っ飛べユキい!!」

「うわ、うわ! !あ、当たらなかったけど逆転された・・・」

(いつの間にかマリ カートに変わっていた)

「・・・電話には出ない・・・。部屋にいるのかは分からない・・・なぜだ？」

「・・・前にラウラが完全防音使用にしたからね・・・」

「もしかして・・・浮気か？」

「いや、まあ、いないんじゃないよ。」

「ISのプライベート・チャンネルでなら繋がるだろう・・・。よし。」

「わああっ！？よしじゃないよ！！ラウラ、ISの機能は一部だけ」

でも勝手に使つとまずいんだよ!？」

「知るものか。嫁の所在の方が大事だ。」

「……織斑先生に怒られる。」

(沙霧がそう言った時、ラウラの動きがピシリと止まった)

「……そ、そうだな。プライベートな時間も、時には大切だろう。よし、シャルロット、沙霧、三人で出かけよう。」

「うん、行く。」

「……(コクリ)」

(学園を出る準備のため、それぞれの部屋に一旦戻る。勿論三人とも私服……のはずだったのだが……)

「あの、ラウラ?その軍服はなに?」

「うむ、これは正式には公用の服だが、如何せん私には私服がないのでな。」

「……」

(この事態には流石に頭を抱えるシャルロット。思い返してみれば、同じ部屋でも普通の女の子らしい格好をしているところを見たことがなかった)

「ラウラ、制服でいいよ……。その服って勝手に着たら本国の人

に怒られるでしょ？」

「そう言われればそうだな。分かった、制服に着替えよう。」

(それから女子とは到底思えない速さでラウラが着替えを終え、部屋を出たのは十五分後のことだった。そして沙霧と待ち合わせていた場所でも……)

「あ、沙霧。お待たせ。」

「……待つてない。私も来たのちよつと前だから……」

「……よかった。ラウラみたいじゃなくて……」

「……普段はパジャマでうろろしてるから……」

「……」

(ここでもシャルロットは頭を抱えなくなった。普段はパジャマでうろろる……つまり私服がこれしかない、ということになりかねないためだ。実際沙霧の普段着は今着ているちよつとサイズ大きめな白い半袖の服に袖のないジャケット(多分胸を隠すためだと思われる。沙霧は基本、私服の時は奏と一緒に限り、ジャケットのファスナーを上げてしまっているのだ)、ジーンズ以外には服を持っていないのだ。スカートなんてIS学園に来て初めて着たくらいだ)

……沙霧の服も見つくりつておかないと……

「まずはバスに乗って駅前に移動ね。」

「うむ。」

「・・・(コクリ)」

(バス停に着くと丁度バスが走ってきて、三人はそのまま乗り込んだ。夏休み、それも十時過ぎ、ということもあって、車内はかなり空いていた。)

制服のラウラとは違い、沙霧とシャルロットも私服だ。沙霧は前述したとおり、シャルロットは夏らしい白を基調したワンピース、それに淡い水色を加えて、涼しさと軽快さを醸し出している。

都市部のバスにしては珍しく、車内は冷房ではなく窓からの風で涼を得ていた)

そう言えば町の方ってあんまりゆっくり見たことがなかったなあ・・・
。せつかくだし、今日は色々見に行こつと。

(窓から見える景色を眺めるシャルロットを、風がゆっくりと撫でていく。僅かに揺れた髪は夏の陽光を受けて金色に輝いていた。)

その隣、ラウラは真剣な眼差しで町並みを観察していた)

・・・あの建物は狙撃地点に使えそうだな。それに向こうのスーパーは長期戦時にライフラインとして機能させられる。それと、いざという時のために水道や地下鉄測道などの地図を手に入れておくか。独立した発電機のある設備も確認しなくては・・・

（銀色の髪が日光を受けて鮮やかに輝く。その鋭い視線もあって、超俗的な雰囲気醸し出していた。）

そしてラウラの前の席にいる沙霧は・・・）

・・・あの雲・・・奏も見てるかな・・・。一緒にお出かけしたかったな・・・

（断言してしまえば、未練たらたらだった）

「ね、ね、あそこ見て。あの三人。」

「うわ、すっごいキレイ。」

「隣の子も無茶苦茶可愛いわよね。モデルかしら？」

「そうなのかな？銀髪の子が着てるのって・・・制服？見たことない形だけ。」

「バカつ、あれ、IS学園の制服よ！？カスタム自由の！」

「え！？IS学園って、確か倍率一万超えてるんでしょ！？」

「そ。入れるのは国家を代表するクラスのエリートだけ。」

「うわゝ。それであのキレイさってなんかズルイ・・・」

「まあ、神様は何時でも不公平なのよ。それにあの子・・・ほら、一緒に入ってきた黒い髪の子。」

「確かにキレーだった・・・モデルじゃないのって言いたいくらい・・・」

「それに大きかったよね・・・胸・・・」

(シャルロットとラウラ、そして沙霧に注目している女子高生グループが、声のポリウムを抑えることなく騒いでいる。そんな風に盛り上がっている会話は、当然バスという狭い空間で三人の耳に届いていた)

「・・・／／／」

(そんな風にほめられたことがなかったせいも、シャルロットは恥ずかしそうにうつむいている。その一方、ラウラはどうでもいことだと聞き流して、再度『戦争時下の市街戦シミュレーション』を続けていた)

ISは比類なき世界最強の力だ。しかし、戦争は個人の戦力だけでは決まらない。特に歩兵による市街地展開が行われた場合、防衛戦も同じく歩兵による戦線を展開しなくてはならないだろう・・・

(市街地全てを更地にしてもいいのならば、ISの出番ではあるが)

・・・市街地制圧前に大型輸送機による空爆が行われる場合も考え
て、何か独立した移動可能な対空兵器（SAM）が必要だろう。そ
れとは別に歩兵にも携行式地对空ミサイルを配備するのが望ましい。
蛇ベリンやスターストリークなら代謝量攻撃にも使える。それに何
より・・・

（そしてそのもう一方沙霧は・・・）

「・・・」

（もう何かを考えるの止め、ぼけーっとしていた。簡単に言えば、
話なんて初っ端から聞いていなかったようだ）

「ラウラ、ラウラ。」

「ん、なんだ？」

「駅前に着いたよ。ほら、考え事は中断しておりないと。沙霧、着
いたよー。」

「わかった。」

「・・・」

「ほら沙霧、ぼーっとしてないで降りるよ？」

「・・・うん。」

（三人は他数名の乗客と一緒にバスを降りると、そのまま駅前のデ
パートへと入る。シャルロットはバッグから何やら雑誌を取り出し
て、それを案内図と交互に見ては何かを確認していた）

「・・・うん、分かった。この順番で回れば無駄がないかな。」
「ふむ。」

「最初は服から見えていって、途中でランチ。その後、生活雑貨とか小物とかを見に行こうって思うんだけど、二人ともそれでいい？」

「よく分らん、任せる。」

「・・・私一人だと迷うからシャルロットに全部任せる。」

（相変わらず、一般的な十代女子のことには疎いラウラと、ある意味萌えを狙っているのかどうか分からない沙霧だった。十代女子というのは紛れもなく自分たちのことも含まれるのだが、とにかく分からないのだから仕方ない。沙霧については前水着を見に行った時に突然いなくなって道に迷っていたと聞いたから、なおさら心配だったりした）

・・・それにしても・・・

（ラウラはいつもそう思う。彼女は元来我が強い。それなのに、シャルロットの言葉に特に抵抗することもなくすんなりと頷いてしまう。普通なら、分からないことであっても行動は自分で決めるのがラウラという少女だった）

・・・不思議なものだ・・・

(シャルロットには、何かそういう言葉では言い表せない不思議な魅力がある。それは例えば、ラウラが知らない母性というものに近いかもしれない)

「ラウラ、聞いている?」

「……ん?ああ、すまない。聞いていなかった。」

「も〜。私服はスカートとズボン、どっちがいいのって聞いたの!」

「ん、どっちでも」どっちでもいいとか、言わないでね。」むう……」

(ラウラが言いそうなことを先に感知して封殺するシャルロット。ある意味よく知らないと出来ない芸当だ)

「……って言うかラウラ、そういう所奏にそっくりだよ……。服が適当だったり他人任せだったりさ……」

(はぁ、と溜息を洩らすシャルロットに対して、なぜかラウラは誇らしげな顔をした)

「夫婦が似るのはよい事だ。」

「……似ない夫婦もいるけど。」

「うぐっ……」

「……仲が良かったらいい。それが幸せな夫婦の条件。」

(服のことから完全に脱線した二人を見て、それを怒るのが馬鹿馬鹿しくなったシャルロットは、もう一度だけ溜息を漏らしてその話を切り上げた)

「とりあえず七階フロアへと向かうよ。その下、六階と五階もレディースだから、順に見てこ。」

「ん？何故上から見ると？下から見たらいいではないか。」

「上から下りた方がいいの。ほら、お店の系統から見ても、そうでしょう？」

(そう言われてシャルロットが開いた本を見るラウラだったが……)

「全く分かん。」

「~~~~~っ!!」

(結局そう言うラウラに頭を抱えるシャルロット。言葉にできない苛立ちがそこにあった)

「下の階は秋物。上の方はセールで値引き……もしかしたら半額セールやってるからそっちを見た方がいいってこと。」

「沙霧……よく知ってるね。」

「華奈多が言ってた。『これが奥様理論だ』って。」

「……お、奥様理論……？」

(突然妙なことを言い出した沙霧に啞然とするしかなかったシャルロットであった)

「・・・ちよつと待て、秋物は要らないぞ。」

「え？要らないって・・・なんで？」

「今は夏だからだ。」

「・・・はあ・・・」

「何かおかしなことを言ったか？」

(何でもないように言うラウラに、シャルロットは啞然としてしまふ。そして沙霧は溜息をついた)

「秋の服は、秋になってから買えばいい。」

「女の子は普通、季節を先取りして買うもの。そっちの方がしつかりしてるって見られる。」

「そうなのか・・・ふむ、確かに、戦争になってから装備や兵を調達しても間に合わん。つまりそういうことか。」

「えっと・・・うん、それで合ってるよ。」

「備えあれば嬉しいな、というやつだな。」

「『備えあれば憂いなし』。」

「・・・」

(単純に女の子としての感性の問題なのだが、ラウラは理屈でそう理解した。それを一概に間違っていると言うのも変なので、シャルロットは彼女なりにそれで良しとした。それよりも彼女が今驚い

ていたのが・・・)

・・・沙霧って、以外と女の子の感性鋭いんだね・・・。普段そんなの気にしてないように見えるからもしかしたら疎いんじゃないか、って思ってたんだけど・・・。

(出かける直前の話、そして普段。それを鑑みて『沙霧はひよつとしたら女の子の感性がないのではないか』と思っていた。実際問題、人前で平気でキスをするわ、抱きつくわ、布団の中に潜り込んでくるわ、拳句の果てには平気で裸になるわ・・・。しかし意外とラウラをいさめていたのを見て、考えを改めるのであった)

「とにかく、順番に見ていこうよ。分からないことがあったら何でも聞いてね。」

「そうだな、シャルロットと一緒に心強い。」

「あ、それと沙霧は僕と手を繋いでいこ？そうしないと逸れちゃうし。」

「・・・ん。」

(三人はエレベーターに乗って七階まで一気に進む。冷房のよく聞いた館内は夏休みということもあって十代の女子男子で溢れかえっていた。その移動の間、シャルロットは沙霧の手を絶対に離さなかつた。離れたら最後、店の中で『迷子様のお呼び出し』をされてしまう可能性があるからだ。さすがにそれは恥ずかしい・・・)

「あ、そうだ。ラウラも手を繋ご？逸れるとまずいし。」
「う、うむ……」

(さらりと言うシャルロットに対し、少し照れくさそうにラウラが頷く。やはり、何故だか素直に肯定してしまうのだった)

「じゃ、まずはここからね。」

「『サード・サーフィス』……変わった名前だな。」

「結構、人気のあるお店みたいだよ？ほら、女の子もいっぱいいるし。」

(そう言われてラウラ達が見た店内は、確かに女子学生・女子中学生が多くいた。セール中ということもあってか、店内は騒々しかった。そのため、接客がおざなりになるのが当たり前だ。しかし……)

「……(ぱりり)」

(客に手渡すはずの紙袋が店長の手から滑り落ちた)

「ブロンド金髪に銀髪、ブラチナ漆黒髪……？」

(店長の異変に気付いた他の店員もその視線を追う。そしてそのま

ま、魅了されたように眩いた)

「お人形さんみたい・・・」

「何かの撮影・・・かしら・・・？」

「・・・ユリ、お客さんお願い・・・」

(店長は三人に視線を向けたまま、ふらふらと歩み寄っていく。それはまるで、魅了されたように。或いは、熱に当てられたように)

「ちょっと、え、あ、私は？・・・ていうか服・・・落ちたままだし・・・」

(文句を言おうとした女性客もまた、シャルロットやラウラ、沙霧の姿に見とれて言葉を失う。まるで絵本の中のような二人の美少女と、テレビの中に映っているモデルのような美少女。その上片方は指だけを、もう片方は絶対に離れたくないと思わせるように繋がれた手が何より人を魅了した。片やしっかりとつなぐわけでもなく、それでいて軽くは無いつながり。片や信頼しているかのようにしっかりと繋がれて。それが三人の雰囲気さらに不思議なエッセンスを加えていた)

「ど、どっ、どんな服をお探して？」

(上ずった声を上げる(最後の方なんて声が裏返っていた) 店長は

見るからに緊張していて、サマースーツを着こなしている大人の女性とは思えない様子だった。それが何だか可笑しくて、シャルロットは注目を浴びたことで店を出ようかと考えたことを思い直す)

「えっと、とりあえず二人に似合う服を探しているんですが、いいのありますか？」

「こ、こちらの銀髪の方と黒髪の方ですね！？今すぐ見立てましようー！はい！！」

(言うなり、店長は展示品のマネキンからセールス対象外の服を脱がせる。

・・・ちなみに、夏物であってもやがて売れるであろう商品は、こうして店頭飾って客寄せに使う。もちろん、売るつもりではないがこれはあくまで』とっておきのお客様』のための物であって、初めて来店したお客のためにわざわざ脱がすというのは普段ならない。・・・そう、『普段なら』)

「ど、どうでしょう？こちらのお客様には綺麗な銀髪に合わせて、白のサマーシャツは？」

「へえ、薄手でインナーが透けて見えるんですね。ラウラはどう？」「分から、分からない、はナシで。」「むう・・・」

(言葉を先回りされて、ラウラは珍しくむくれたような顔をする。店長はまた店の中に戻り・・・)

「「こちらのお客様はプロポーションも抜群なので迷いましたが・・・そのプロポーションをよりよく見せるために黒のワンピースは？」

「・・・あまり胸を強調させないのがいい。」

「へ、どうして？」

「・・・あまりじろじろ見られるのヤだから・・・」

「へ？」

（てつきり『奏にしか見せたくないから』と返ってくるだろうと思っていた所に、想定外の答えが来て、シャルロットは呆けてしまった）

「え、あ、じゃ、じゃあこちらは如何で？」

（店長が持ってきたのはボートネックで張りのある生地の上がネイビーで下が水色という、ちょっと変わった配色のワンピースだった。その間、ラウラは唸っていたが、口を開いた）

「・・・白か・・・。悪くは無いが・・・今着ている色だぞ・・・」

「？」

「あ、はい。」

（何とも女子力の低い解答に、思わず間の抜けた返事をしてしまう
店長）

「せつかくだから試着してみたら？」

「いや、面倒く「面倒くさい、はナシで。」……」

（またしても台詞を先回りされて、ラウラはそのまま黙ってしまつ。そうこうしている間に店長とシャルロットはラウラのシャツに合うインナーとボトムスを選んでいった）

「ストレッチデニムのハーフパンツに、インナーは……」

「Vネックのコットンシャツなんてどうでしょうか？」

「あ、いいですね、それ。色は同系色か、またまた対照色か……うん……」

（あれやこれやと二人は楽しそうにラウラの服を選んでいく。『もう抵抗しても無駄だ』と判断したラウラは、少し距離を置いた場所で二人の様子を眺めていた。沙霧は店内を漁り始めた）

「……ジーンズがない……」

（そして、数分したら戻ってきた。かなり落ち込んだ様子で）

「……どうした？何やら随分落ち込んだ様子だが……」

「……青のジーンズがなかった……」

「青のジーンズ？普通の店に行けばあるんじゃないのか？」

「……一人で動く迷路から……」
「……止む無し、だな……」

(沙霧がジーンズに固執する理由は……単純にそっちの方が好きだからである。他のもあるじゃないか、などと言われても仕方ないと思うが、沙霧はジーンズが好きなのである。しかも、青色のが。ちなみになぜ青なのかというと、奏が好きなた色だ、と前に聞いたからである)

やれやれ……。何がそんなの楽しいのだろうか……

(服など着られればそれでいい。あくまで機能性だけを求めるラウラらしい考え方だった)

「さ、ラウラ、沙霧、これに着替えてきて？」
「わかった。」
「試着室はこちらになります。」

(ラウラは連れられるまま試着室に入っていく。しかし沙霧は動かない)

「沙霧、どうしたの？」
「……スカート嫌……」
「へ？どうして？」

「……だって……」

「だって？」

「……ひらひらするし動きづらいんだもん……」

(沙霧が極端にスカートを嫌がった理由がこれだった。その時のシヤルロットは)

ひよつとしたら沙霧って……ラウラより自己主張が強いんじゃないのかな……

(そう思えるようになった。ラウラはあっさりと受け入れた(はっきり言つと流されるままになってしまった、と言った方が正しいが)が、沙霧は拒否をしたのだから)

（試着室に入ったラウラは、小さく溜息を漏らした。試着室の外では沙霧がスカートを拒否していた）

・・・仕方ないとはいえ、せつかくの私服なのだから・・・一番最初は奏に見てもらいたかったな・・・

（そんなことを考えながら、ラウラは制服を脱いでいく。明かりに照らされた素肌は透き通るように白く、冷たさを感じるほどに美しくかった）

・・・

（ふと、自分の体を改めて眺めてみた。下着だけを身に纏ったその姿は、しなやかでありながらも鍛えられた屈強さがある）

・・・自分ではよく分からないが・・・異性にとっては魅力がないのだろうか？・・・特に・・・奏にとっては・・・。ううむ・・・

（何かの雑誌で見たグラビアのポーズを真似てみた。鏡に映ったその姿は扇情的で、下着に包まれた曲線は異性であれば誰だって虜に出来るであろう魅力に溢れていた）

「・・・馬鹿馬鹿しい。」

(突発的にとつた自分の行動に恥ずかしくなったラウラは、そう小さく呟いて着替えに戻った。改めてシャルロット達が選んだ服を見ると、所謂『クール系』というタイプのファッションだった)

・・・どうせなら・・・可愛いのがよかったのにな。それなら奏が褒めて・・・

『ラウラ、その服可愛いな。』

『服だけか?』

『ラウラの方がもっと可愛いけどな。』

『ばっ、馬鹿者・・・』

『でもまあ、どんな姿になったって、俺はラウラを愛しているけどな。』

『・・・私もだ・・・奏・・・』

・・・っ！（ボフィン！！）

（自分の妄想でありながら、ラウラは顔を真っ赤にして沈黙していた。顔から湯気が出ているように見えるくらい）

「い、いや、その、なんだ・・・そんなにうまくいくとは思わなかったが、しかし・・・／＼／＼」

(が、可能性としては皆無とはいえない)

「どう、ラウラ？着替えた？」

(ドアの向こうから声をかけてきたのは、おなじみシャルロットだった。ラウラはとりあえず急いで制服を着直してからドアを開けた)

「あれ？どうして制服のまんま・・・？」

「シャルロット。」

「う、うん。えと、もしかして・・・気に入らなかった・・・？」

「いや、そうではない。そうではないのだが・・・」

(珍しく齒切れの悪いラウラに、シャルロットは頭に？マークを浮かべる)

「も、もう少し・・・可愛いのがいいな・・・」

(照れくさそうに言うラウラがあまりにも女の子的で、シャルロットは一瞬ぼかんとしてしまう。けれどすぐに持ち直し、力強く頷いた)

「う、うん！可愛いのがいいんだね！？すぐ見繕うから待ってて！

「！

(さっきまで興味なさげだったラウラの思わぬ発言に、シャルロットはそれまで以上にヒートアップし、明らかに熱がこもった言葉で頷いた)

「で、で!?!?どんなのがいい!?!?色とか、形とか、希望ある?」

「そ、そうだな……。それなりに露出度があるものもいいな……」

「ん、分かった!」

(シャルロットはすぐに店長の元へと戻ると、服の物色を始めた)

「そっちの肩が出てるワンピースと、そっちのブレスレット、それから、えっと……」

(まるで自分のことかのように、シャルロットは楽しそうに服を選んでいく)

「露出度が高い服なら黒の方が落ち付いていいよね。ラウラの髪にも合うし。」

「あ、あまり派手なのは困るぞ……」

(シャルロットの頑張りぶりに多少不安を覚えたラウラは釘を刺す。

しかし、返ってきたのは陽気な声だった)

「大丈夫大じょーぶ！もう、任せちゃってよ！..」

「わ、分かった...」

「あ、沙霧、着替え終わった!？」

...まだ...

(普段は大人しいシャルロットに強引に來られると、ラウラとしては従う他ない)

...しかし、私よりは確実にセンスがいいだろうし、特に問題視する必要もないか...。しかし、沙霧は一体どんな服を着せられるのだろうか...？

(沙霧はラウラが入ったその隣の試着室で、シャルロットから渡された服を手に呆然と立ち尽くしていた)

「……こんなの……着れない……」

(シャルロットに渡されたその服は、上はネイビーのトレーナーと水色のインナー……という所は普通だった。沙霧が呆然と立ち尽くすその理由とは……)

「……露出が多すぎ……」

(トレーナーに問題があった。インナーがあると言うことでまだ多少は……と思えたが、Vネックが強過ぎるのだ。下手に着れば胸チラ、なんてことになりかねないのが沙霧にとって一番の大問題だった。ちなみにシャルロットがそれを選んだ理由が『沙霧はスタイルがいいんだからもつとそれを強調させた方がいい』、とのこと)

……でも……これを着て奏が喜んでくれるなら……

「・・・うん、着よう。」

(沙霧がある意味一大決心をした瞬間だった)

(20分後、着替え終わったラウラが試着室を出ると、店内の全員が息をのんだ)

「うわ、すっごいキレイ・・・」

「妖精みたい・・・」

(着ているのは肩が露出した黒のワンピース。部分部分にフリルのあしらいがあつて、可愛らしさを演出していた。ややミニよりの裾がラウラの超俗的な雰囲気と合っていて、言葉通り妖精さながらの格好だった)

「く、靴まで用意したのか。驚いたぞ・・・」

「せっかくだもん、ミュール履かないとね。」

(初めて履くヒールのある靴に、ラウラが姿勢を崩す。全員が『あつ!』と思った瞬間には、シャルロットがその体を支えていた)

「す、すまないな・・・」

「どういたしまして。」

(体勢を立て直したラウラの手を取り、お辞儀をするシャルロット。そんな二人はさながら貴公子とプリンセス、といった様子で、まるで物語のワンシーンの様でさえあった)

「しゃ、写真撮っていいかしら!？」

「わ、私も!！」

「握手して!！」

「私も私も!！」

「あ、あの、まだもう一人見ないといけないので・・・その、そういうことは止めてもらえませんか？」

(シャルロットが必死に止めるも、勢いは止まらない。一気に囲まれた二人であった。店内だけでなく、騒ぎを聞きつけて集まった店外の人まで輪に入ってきて、辺りはしばし騒然となった)

「シャルロット・・・着た・・・」

「あつ!さ、沙霧!ど、どう!？」

「・・・自分じゃわからないから・・・見てほしい・・・」

(沙霧の一声で騒動が突然治まり、シャルロットもラウラもとりあえず沙霧の元へと向かうことが出来た。騒動の間、沙霧は一人黙々と着替えていたのだ)

「じゃあ、開けるよ？」

「うん……」

(シャルロットがドアを開けた時、その店の時が止まったかのような状態になった。試着室にいたのはVネックの強いネイビーのトレーナーに水色のインナーを、そして普通のジーンズを着た沙霧だが、その沙霧が異様な程『美人だった』ためだ。沙霧は基本、寒色系を好むため、『クールな女の子』と思われていたが、今は全く違った服の相性も合っていたのか『絶世の美少女』へと変貌を遂げていたのだ)

「……沙霧……すごい可愛い……」

「……そう……?」

「あ、ああ……。いつものイメージと全然違うぞ……」

(シャルロットもラウラも、予想外の事態に戸惑いを隠せなかった。そして……)

「……あまり見ないで……。……恥ずかしい……。……から……
／／／」

(この沙霧の一言で・・・)

「お願い！写真撮らせて！！」

「もっと似合う服とかない！？もし似合う服があったらその服生殺しにしちゃうわよ!？」

「ジーンズじゃなくてスカートって似合うのかな!？」

「バカ、スカートじゃ可愛い女の子っただけで終わっちゃうわよ！ジーンズだからあれほどの美貌が映えるのよ!？」

(またしても騒ぎが起きた。・・・ラウラとシャルロットの時と同等のレベルで)

「・・・お会計、済ませちゃおっか？」

「・・・そうだな。」

(沙霧が着せ替え人形状態になっている間、ラウラは着替えを済ませ、シャルロットは会計を済ませていた)

「・・・ふう・・・、疲れたな・・・」

「まさか最初のお店であんなに時間使っちゃうなんて思わなかったね。」

「・・・二人とも酷い・・・」

「仕方ないだろう？近寄るに近寄れない状態だったのだから。」

（ちょうど時間は十二時を過ぎた所で、三人はオープンテラスのカフェでランチを取っていた。ラウラは日替わりのパスタ、シャルロットはラザニア、沙霧はナポリタンをそれぞれ食べている）

「しかしまあ、いい買い物が出来たな。」

「・・・（コクコク）」

「せっかくだからそのまま着てればよかったのに・・・」

「い、いや、その、なんだ。汚れては困るからな・・・」

「ふうん？あ、もしかして、最初のお披露目は奏に取っておきたいとか？」

「なっ！？ち、違う！！だ、ただ、断じて違うぞ！？」

「・・・私は恥ずかしくて着れないだけだもん・・・」

（顔を赤らめて取り乱すラウラと、頬を膨らます沙霧の姿に、シャルロットは的を得たことを確信しながらもあえて知らないふりをした）

「そっか。変なこと言っでごめんね。」

「ま、ま、まっただだ！」

「ラウラ。」

「な、なんだ？」

「フォークとスプーンが逆。明らかに動揺してるって言ってる。」

「~~~~~!!」

(沙霧の指摘によって気がついたラウラは、それこそ耳まで真っ赤になって口に運んでいたスプーンを離れた)

「^レ、午後はどうする!？」

「生活雑貨を見て回ろうよ。僕は腕時計見に行きたいなあ。日本製の時計って、ちよつと憧れだったし。」

「腕時計が欲しいの？」

「うん、せつかくだからね。二人はそういうのってないの？日本製の欲しい物……ってそういうえば沙霧は日本人だったけ……」

(ちよつと思い出したようにシャルロットが言った。しかし沙霧は首を振る)

「……私、日本にいたのは生まれて二年くらい。ずっと外国を転々としてたから……」

「あ、そ、そうなんだ……。そ、それで?どうなの?」

(二人はちよつと考えて……)

「日本刀だな。」

(きっぱりとラウラが告げた)

「・・・女の子的なものは？」

「ないな。」

(即答。分かっていたとはいえ、にべもない返事にシャルロットはガクツと首を落とした。その後、一途の期待を持って沙霧を見た)

「沙霧は？」

「ピカ ユウの人形・・・」

「・・・それ、日本製なのかな・・・？」

(人形は基本中国製だからだ)

「前見た時可愛かったから。」

「そ、そうなんだ。」

(ちょっと可愛らしい返事にほっとしたシャルロット。ふと、隣のテーブルの女性に気がついた)

「……どつすねばいいのよ……まったく……」

(年の頃は二十代後半で、かつちりとしたスーツを着ている。何か悩みごとがあるらしく、注文したであろうペロンチーノは冷めきってしまっていた)

「はぁ……」

(深々と漏らす溜息には、深淵の色が見て取れた)

「ねえ、ラウラ、沙霧。」

「……お節介はほどほどにな。」

「度が過ぎると身を滅ぼすから。」

(今度は逆にラウラと沙霧がシャルロットの言葉を先回りする。そんな反応にびっくりするシャルロットだが、すぐに嬉しそうな顔を
して続けた)

「僕のこと、ちゃんと分かってくれてるんだね。」

「偶然。シャルロットは優しいから。」

「た、たまたまだ。……で、どうしたいんだ？」

「うーん……。とりあえず話だけでも聞いてみようかな？」

(そう言っつて、シャルロットは席を立つなり女性に声をかけた)

「あの、どうかされましたか？」

「え？・・・っ!？」

(三人を見るなり、ガタンツ!と椅子を倒す勢いで女性が立ち上がる。そしてそのまま、シャルロットの手を握った)

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

『バイトしない!？』

『え?』

(その頃)

『覚悟は出来てるか？ワールドデス ロイヤー！！』

「あつぶな！！もうちょっとで直撃食らう所だったぜい・・・」
「ところがギツチヨン！！」

『熱 旋風刃！！天を統べる覇者の し！魔王 滅刃！！』
『有り得ん・・・有り得んぞお・・・』

「やられた！？というか巻き添え！？」

「うそーん！！さつきからかな兄連勝し過ぎだよーっ！！」
「勝てば官軍負ければ賊軍！これがこの世の摂理だ！！」

（現状。奏がエリイ・幸俚相手に連勝記録を更新していた）

「・・・というわけでね、いきなり二人辞めちゃったの。駆け落ちしちゃったんだけどね。あはは・・・」

「はあ。」

「ふむ。」

「それに今日一人風邪ひいて寝込んでるじゃって。」

「・・・」

『でもね、今日は超重要な日なのよ！本社から視察の人間も来るし、だからお願い！あなた達三人に今日だけアルバイトしてほしいの！』

（女性のお店というのが、これまた特異な喫茶店だった。女性は使用人の格好、男は執事の格好で接待をするという・・・所謂メイド（&執事）喫茶である）

「それはいいんですが・・・」

(着替え終わったシャルロットはやや控えめに聞く)

「なぜ僕は執事服なんでしょうか・・・?」

「だって、ほら！似合うもの！！そこの男なんかより、ずっとキレイで格好いいもの！！」

(褒められたと言つのに、あまり嬉しくなさそうにシャルロットは溜息を漏らした)

・・・僕もメイド服がよかったなあ・・・。そっちを着てるラウラと沙霧、すごい可愛もん・・・

(少し・・・いや、かなり残念な気持ちになりながら、自分の着ている執事服を見下ろした)

うう・・・やっぱり僕ってやっぱりこういう方向性なのかなあ・・・?
?

(やや落ち込み気味のシャルロットに気付いてか、自分もメイド服に着替えた女店長はガシツとその手を掴んだ)

「大丈夫！すっごく似合ってるから！！」

「そ、そうですね・・・あはは・・・」

（シャルロットが引きつり気味の顔で、それでもどうにか社交辞令の笑みを返す）

・・・それが問題なんだけどなあ・・・

（複雑な乙女心を持って余しながら、シャルロットは改めてメイド服姿のラウラと沙霧を眺めた。

細身でありながら強靭さを秘めた体躯に、飾りっ気の多いメイド服。それらを統一するようにシュツと伸びた銀髪。そしてミステリアスな雰囲気加速させる眼帯。

一方の沙霧は全身的に鍛えられているものの女の子特有の体つきをしており、本来着ない飾りっ気の多いメイド服が可愛らしさを増長させていた。漆黒の髪が頭のカチューシャの白を映えさせている）

うっ・・・羨ましいなあ・・・。二人ともなんでこんなに可愛いんだろ・・・

（きつとラウラは男装をしても『かつこいい女の子』、沙霧は『無理に男装して背伸びしてる女の子』として人の目に映るんだろうなあ、とシャルロットは思った。対して自分は男装をすれば『可愛い顔立ちの男の子』なのだから。そう考えると自然と溜息が漏れた）

「店長、早くお店手伝って〜！」

(フロアリーダーがヘルプを求めて声をかける。すぐに店長は最後の身だしなみをして、バックヤードの出口へと向かった)

「あ、あのっ、もう一つだけ。」

「ん？」

「このお店、なんていう名前なんですか？」

(店長は笑みを浮かべてスカートを摘み上げ、大人びた容姿に似合わない可愛らしいお辞儀をした)

「お客様、@クルーズへようこそ。」

(店の名前を確認した三人は、いざホールへと出……ようとしたが)

「あ。」

ドテンー…！

「さ、沙霧！？大丈夫！？」
「・・・痛い。」

（沙霧がスカート裾を踏みつけて盛大に転んだのだ）

「・・・沙霧って本当にスカート・・・苦手なんだね・・・」
「・・・スカート嫌い・・・」

「デュノア君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い。」
「分かりました。」

（カウンターから飲み物を受け取って、@マークの刻まれたトレイへと乗せる。そんな単純な動作にさえシャルロットの気品さが滲み出ている、臨時の同僚にあたるスタッフ達は、ほうつと溜息を漏らした。初めてのアルバイトだと言うのに、その立ち振る舞いには物怖じした様子は無く堂々としていて、けれど嫌味ではない。そんなシャルロットの姿に、女性客の殆どが見入っていた）

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は？」
「は、はい。」

（自身の方が年上であるにもかかわらず、女性は緊張した面持ちでシャルロットに答える。紅茶とコーヒーをそれぞれの女性に差し出す前に、シャルロットはお店の『とあるサービス』の要不要を訪ねた）

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？よろしければ、こちらで入れさせていただきます。」

「お、お願いします。え、ええと、砂糖とミルク、たっぷりで・・・」

「わ、私もそれでっ・・・」

（実は二人とも常日頃からノンシュガー・ノーミルクのだが、今日に限っては敢えて目の前の美形執事に奉仕してもらいたい一心でわざとそう答えたのだった。その内心を知ってか知らずか、シャルロットは柔らかな笑みを浮かべて頷く）

「畏まりました。それでは、失礼致します。」

（シャルロットの白く美しい指がスプーンをそつと握り、砂糖とミルクを加えたカップの中を静かにかき混ぜる。時折、僅かに響くかちやかちやという音でさえ、女性客は息をのんで聞き入った）

「どうぞ。」

「あ、ありがとう・・・」

(ずっとシャルロットの手元から差し出されたカップを受け取り、女性はどぎまぎした様子でそれを口につけた。次に同じようにコーヒ―を混ぜて貰った女性客も、緊張からかぎくしゃくとした動きで僅かに一口だけ飲んだ)

「それでは、また何かありましたら何なりとお呼び出してください。お嬢様。」

(そうやって綺麗なお辞儀をするシャルロットはまさしく『貴公子』としか言いようのない雰囲気をつけていて、女性客はぼかんとしたまま頷くのが精一杯だった)

・・・ふう。接客業ってやってみると結構大変なんだね。二人は大丈夫かな？

(仕事をこなしつつ、シャルロットは二人の姿を探す。そして、丁度男性客二名のテーブルで注文を取っているラウラを見つけた)

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ。」

「・・・」

「あのさ、お店何時に終わるの？一緒に遊びに・・・」

(ダンツ！と、テーブルに垂直に置かれた(と言うよりは、半場叩きつけられた)コップが大きな音と一緒に滴を散らかす。面喰っている男たちを前にラウラはぞっとするほど冷たい声で告げた)

「水だ。飲め。」

「こ、個人的だね。もっと君のことよく知りたくなっ・・・」

(台詞の途中で、しかもオーダーを取ることなくラウラはテーブルを離れる。そしてカウンターに着くなり何かを告げ、少しして出されたドリンクを持っていった)

「飲め。」

(さっきよりは多少優し眼に(ソーサーが割れるので)カップをテーブルに置くラウラ。それでも弾んだカップからは中のコーヒーが遠慮なく零れた)

「え、えっと、コーヒーを頼んだ覚えは・・・」

「なんだ。客でないのなら出ていけ。」

「そ、そうじゃなくて、他のメニューも見たいわけだし・・・」

(ラウラに好印象を持たれたためか、それでも有無を言わせぬ態度に委縮しているのか、男は言葉を探りながら会話を続ける。実際、女性優遇社会でこんな風に初対面の女子に声をかけられるというのは、勇者か馬鹿のどちらかでない。そして、男達は確実に後者である)

「た、例えば、コーヒーにしてもモカとかキリマンジャロとか・・・」

(言葉を遮るように、ラウラは全く笑っていない目のまま、その顔に嘲笑を浮かべた)

「はっ。貴様ら凡夫に違いが分かってても？」

「いや、その・・・すみません・・・」

(結局、ラウラの絶対零度の視線と許しのない嘲笑に折れて、男達は小さくなりながらコーヒーをすすった)

「飲んだら出ていけ。邪魔だ。」

「はい・・・」

(ドイツの冷氷と呼ばれたラウラの一面は、今でも健在のようだ。しかし、そんな人を寄せ付けない態度ですら、美少女の外見を伴えば魅力となるらしい。店内の男性客はその殆どが自分達と同じ様に

接客してほしいとばかりに熱の籠った視線を送り続けた)

「あ、あの子、超いい・・・」

「罵られたいつ、見下ろされたいつ、差別されたいいつ!」

(特別盛り上がっているテーブルは、異様な興奮を見せていたが、他の客はもちろん、スタッフまでもが見て見ぬふりでやり過ごしていた)

沙霧は・・・どこだろ・・・?

(シャルロットが店内をきよろきよろと見てみた時だった)

ピタンッ!!

だ、大丈夫ですか!?

・・・もしかして!?

(突然起きた音。シャルロットはその音に心当たりがあった。そして音のした方へ行くと案の定・・・)

「……沙霧……大丈夫……？」
「……痛い……（うるうる）」

（スカートの裾を踏んでしまい、盛大にすっ転んだ沙霧がいた。手に持っていたのはトレーだけだったため、何か割れるということ心配する必要はなかったが、やっぱり客に心配させてしまったことが悩ましかった。しかし……）

「……あの子……可愛い……！」
「どうしよう、抱きしめなくなっちゃう……／＼／＼」

（周りの反響は素晴らしかった。偶然の産物が萌えへと昇華された瞬間だった）

「……沙霧、ホールから厨房回る？」
「……その方がいい。このままだと仕事出来ないもん……くすん……」

（沙霧がとぼとぼと（また途中で転んでいたが）厨房へ向かった。その直後だった）

「あ、あのっ、追加の注文いいですか！？できればさっきの金髪の執事さんで！」

「コーヒーください！銀髪のメイドさんで！」

「あのドジっ子メイドさんに来てほしいです！」

「こっちにも美少年執事さんをつつ！」

「美少女メイドさんをぜひ！！！」

（そんな騒動は一気に店内全体に感染し、爆発的に喧騒を大きくしていく。どう反応していいか困るシャルロットとラウラだったが、店長が間に入って上手く二人を滞りなくテーブルに向かうように声をかけての調整をしてみた。そこはさすが本業、店長の指示は的確で、いつの間にか通常時の五割増しの実数を見事にさばっていく。その裏側で、沙霧は正確な分量で（小数点第三位までの誤差がないくらい）調理室に持ち込まれるオーダーをさばっていた。

そんな混雑が二時間ほど続いて、さすがにシャルロットとラウラ、
厨房で阿修羅のごとく料理を作る沙霧にも精神的な疲れが見え始め
てきた頃、その事件が起きた)

「全員、動くんじゃない?!」

(ドアを破らんばかりの勢いでなだれ込んできた男が三人、怒号を
発する。一瞬、何が起こったのか理解できなかつた店内の全員だっ
たが、次の瞬間に発せられた銃声で絹を裂くような悲鳴が上がった)

「きゃあああああつ?!?!」

「騒ぐんじゃないねえ! 静かにしろ!」

(男達の格好と言えばジャンパーにジーパン、そして顔には覆面、

手には銃。背中のバッグからは何枚か紙幣が飛び出していた。見るからに、強盗である。それもおそらくは銀行を襲撃した後の逃走犯。で二十世紀のマンガのような格好に全員がぼかんとしたが、そこはそれ、銃を持った凶悪犯なのだ。いうことを聞かないわけにはいかない)

「あー、犯人一味に告ぐ。君達は既に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す・・・」

(流石は駅前の一等地である。警察機関の動きはこの上なく迅速で、窓から見える店外ではパトカーによる通路封鎖とライオットシールドを構えた対銃撃装備の警官達が包囲網を作っていた)

「・・・なんか・・・」

「・・・警察の対応も・・・」

「・・・古・・・」

(おそらく十代には通じないであろう妙なクロニクルを覚えて、人質という立場にもかかわらず数名の客がそう呟いた)

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺達全員・・・」

「うるたえるんじゃないやねえっ！焦ることはねえ。こっちは人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ。」

(リーダー格と思しき三人の中で一際体格のいい男がそう告げると、逃げ腰だった他の二人も自信を取り戻す)

「へ、へへ、そうですね。俺達には高い金払って手に入れたコイツがあるし。」

(ジャキツ！と硬い金属音を響かせてシヨットガンのポンプアクションを行う。そして次の瞬間、威嚇射撃を天井に向けて行った)

「きゃああああっ!!！」

(蛍光灯が破裂し、パニックになった女性客が耳を劈くような悲鳴を上げる。それを今度はリーダーの男がハンドガンを撃って黙らせた)

「大人しくしてな！俺達の言うことを聞けば殺しはしねえよ。分かっただな？」

(女性は顔面蒼白になって何度も頷くと、声が漏れないように口をつぐむ。その間、沙霧は犯人からは死角になるカウンターの裏側にこっそりと移動していた。武器はフライパン。銃声が聞こえたことから強盗が来たんだと判断した彼女はここまでこっそりと移動してきたのだ。足音を立てずに・・・)

「おい、聞こえるか警官共！人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！もちろん、追跡車や発信機なんかつけるんじゃないぞ！！」

（威勢よく言つて、駄賃だとばかりに警官隊に向かって発砲する。幸い、弾丸はパトカーのフロントガラスを割っただけだったが、周囲の野次馬がパニックを起こすのには十分だった）

「へへ、奴ら大騒ぎしてますよ。」

「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ツスね！！」
「まっただくだ。」

（暴力的な笑みを浮かべる男達。それを、物陰から観察する目があつた）

・・・一人はショットガン、一人はサブマシンガン、そしてリーダーがハンドガン。他にも予備で何か持っている可能性もあるけど、とりあえずは・・・

（目立たないようにしゃがみつつ、シャルロットは状況を冷静に分析していく。もう一度店内の状況を確認しようと視線を動かして、カウンターの裏に隠れている沙霧を見つけ、『状況を見て』と指示を出し、もう一度視線を動かして、そこでぎよつとした）

「・・・」

(店内で強盗以外にただ一人立っていたのはラウラだった。しかも銀髪に眼帯、目が覚めるような美少女とくれば誰の目であろうと止まってしまっ)

「なんだ？お前。大人しくしてろってというのが聞こえなかったのか？」

(案の定、すぐにリーダーがやってくる。その手に握ったままの銃を、ラウラは一瞬だけ見て視線から外した)

「おい、聞こえないのか！？それとも日本語が通じないのか！？」

「まあまあアニキ、いいじゃないッスか！時間はたっぷりあるんスから、この子に接客してもらいましょっよ！！」

「ああ？何言ってるんだ、お前？」

「だって、ホラ！すっげー可愛いッスよ！」

「お、おれも賛成っ！メイド喫茶って入ったことなくて・・・」

(二人揃ってテヘへと嬉し恥ずかしな表情を浮かべる手下に、リーダーは眉間にしわを寄せながらソファにどかっとな腰を下ろす)

「ふん、まあいい。ちょうど喉が渴いていた所だ。おい、メニューを持って来い。」

(ラウラは頷くでもなく男達を一瞥すると、カウンターの前にすたすたと歩いていく。裏に隠れていた沙霧からコップを受け取り、戻ってきた手に持っていたのは氷が満載された水だった)

「・・・なんだ、これは？」

「水だ。」

「いや、あの、メニューを欲しいんですけど・・・」

「黙れ。飲め。・・・飲めるものならな。」

(ラウラは突然トレーをひっくり返す。当然、氷水が宙に舞うが、それを回転するような動作で掴み・・・はじいた)

「いってえっ!? な、なっ、何しやがっ・・・」

(氷の指弾。それをトリガーから離れていた人差し指に、突然の出来事に反応できずにいた瞼に、眉間に、喉に、一瞬で当てる。そして犯人の怒号より早く、男の一人の懐に膝蹴りを叩きこんだ)

「ッざげやがって! このガキイツ!!」

(いち早く痛みから復帰したリーダーが、早速ハンドガンをぶっ放す。火薬の炸裂音を連続して響かせるが、しかしラウラには届かな

い。ソファを、テーブルを、観葉植物を、ドリンクサーバーを、店内のあらゆる物を盾にして、ラウラはその細身からは予想もつかないスピードで駆けていく)

「あ、兄貴っ!?!こ、こいつっ・・・」

「うるたえるな!ガキ一人、すぐに片付けて・・・」

「・・・一人じゃないんだよねえ、残念ながら。」

「・・・一瞬の油断が、命取りになる・・・」

(マガジンを切り替えたリーダーの、その背後に迫っていたのは見目麗しい執事服の美少年・・・もとい、美少女のシャルロットで、もう一人の手下に迫っていたのは、先程までこっそりと移動していたフライパン少女・・・というかドジっ子だった沙霧だった。シャルロットの言葉にはやれやれといった溜息が含まれていたが、どうもそれは強盗事件に巻き込まれたことにはなく、ラウラが機を待たずに戦闘を開始したこと・・・そして、それをサポートしなければならぬということに対してのものらしい)

「なっ!?!このっ・・・」

「あ、執事服でよかったかな。うん。思いつきり足上げてても平気だし。」

(そんなことを口にしながら、シャルロットはリーダーの拳銃を手ごと蹴りあげる。その一瞬を突いて沙霧がシヨットガンの男の肩に掌底を勢いよく決める。ボキッという非常に嫌な音が鳴り、シヨットガンを構えていた腕はだらりと垂れた。・・・というか動かなく

なった。そして追撃とばかりに持っていたフライパンで思い切りショットガンの男の顔を殴打した。正面から。カーンという音が鳴り、男は気を失った。

三人そろって慣れている・・・というようなレベルでは最早無い。より高度な戦闘を数多く経験している、その証明であった。ISの専用機持ちともなれば、どの国も『ありとあらゆる事態』を想定した訓練を課している。それが候補生で合っても変わりはない。ISが展開不能な状態にあっても、状況を打破できるように鍛えられているのだ。無論、軍人であるラウラとひ軍人であるシャルロット、『ただの専用機持ち』というだけの沙霧では、それぞれに持っている技能・対応能力・身体能力に開きはある。

しかし、この程度の状況ならば、特に問題は無い)

「目標2、制圧完了、いや、オーバーキル・・・ラウラ、そっちは？」

「問題ない。目標3、制圧完了。沙霧に制止を頼む。」

(手下二名の意識及び行動能力の喪失(つまりは気絶)を確認して、シャルロットとラウラは頷く。沙霧はその部下を念入りに・・・というか執拗に叩き続けている。フライパンで。それじゃあ最後の目標1ことリーダーを・・・と思った所で、男はさっき蹴られて指が折れたのとは逆の手に、予想通り予備のハンドガンを握って立ち上がった)

「ふっ、ふざけるなあっ!!お、俺がつ、こんなガキどもに・・・

っ！」

(その引金が引かれるその直前、沙霧は持っていたフライパンを投合した。それと同時に韋駄天の如く飛び出していく。シャルロットは身を捻って弾丸を避けた後、丁度足元にあつた@クルーズ特製トレーを勢いよく踏みつける。淵を踏まれたトレーはそのまま乗っていた物体・・・ハンドガンをぽーんと空中に投げ、ラウラはフライパンが顔面に(横向きに)当たり怯んだその追撃とばかりに空中一回転してハンドガンを蹴りまた当てる。連続して顔面に物が当たり完全に怯み切った男の懐に飛び込んだ沙霧は顎に小掌底を打ち上げる。その刹那にその拳銃に細工をした)

「て、てめえ!!」

「撃てるものなら撃つてみればいい。」

「さ、沙霧!？」

「・・・シャルロット、安心しろ。沙霧は撃たれないさ。」

「で、でも・・・!」

(激昂するリーダーに対し、沙霧はその真正面に立つたまま。そんな沙霧に焦るシャルロットだが、ラウラは逆に冷静になっていた。その理由が・・・)

カチッ!カチッ!

「な、なんで撃てねえんだ!？」

「ハンドガンは撃鉄を中途半端に降ろした状態にすると安全装置が掛かって撃てなくなる。銃を扱うなら当然知ってるべき。」

「なっ……」

「ということ……死んで。」

「ちよ、沙霧、待つ……」

（ガツン！と弾丸ではなくいつの間にか持っていた銃のグリップが額に叩きこまれ、男は糸の切れた操り人形のように倒れ伏せた）

「……制圧、完了。」

「……はあ……一瞬びっくりしたじゃない……」

「しかし沙霧、よく安全装置のことを知っていたな。」

「この程度、一般教養。（キラッ）」

「いや、一般教養じゃないからね!？」

（しばらくの間、シーンと静まり返る店内。ジェットコースター展開に呆然としていた店内の『民間人』こと客とスタッフは、のろのろと頭を上げ始める）

「お、終わった……?」

「助かったの、私達……?」

「い、一体何が……?」

（危機を脱したことは分かるものの、まだ状況を出来ていない人々は、何度も瞬きを繰り返してラウラとシャルロットと沙霧の姿を呆

然と眺めていた。同じくまだはつきりとした意識が戻らない店長は、
『銀髪と黒髪の美少女メイドと金髪の美少年（女）執事が銀行強盗を撃退しました』って本社に報告したら信じるかしら・・・？』
と、変にずれたことを考えていた）

「お、俺達助かったんだ！」

「やった！あ、ありがとう！メイドさんに執事さん、ありがとう！」

（助かった実感が今になってはつきりと自覚できたのか、突然店内はわっと騒がしくなる。その様子を見て、状況に決定的な変化があったのかと警官隊も詰めかけてくる）

「ふむ、日本の警察は優秀だな。」

「ラウラ、まずいってば！僕達って代表候補生で専用機持ちなんだよ！？沙霧はただの専用機持ちだけど！公になるのは避けないと！」

「それもそうだな。このあたりで失敬しよう。」

（案の定、警官隊の後ろには交通規制もなんのその、立ち入り禁止のロープを乗り越えたマスコミ関係者が見えた。）

・・・しかし、事態は再び一変する)

「捕まってムシヨ暮らしになるくらいなら、いつそ全部吹き飛ばしてやらあっ!!」

(完全に意識を失っていたと思われたリーダーは、決まりが浅かったのかそう叫んで立ち上がるなり、革ジャンを左右に広げた。そこにあつたのは、軽く四十平方メートルは吹き飛ばせそうなプラスチック爆弾の腹巻だった。起爆装置は、もちろん手の中にある)

「わー・・・」

「最後まで古」・・・」

(そんな言葉を漏らしたのは誰だったか、すぐさま店内は先刻以上のパニックに飲み込まれる。しかし・・・)

「諦めが悪いな。」

(ふわっと、ラウラがスカートをなびかせるように右足を上げ、その奥にちらりと見えた白い布地に男の視線と意識が奪われた。そしてその一瞬の隙に、ラウラが脚を振り下ろしたその踵はテーブルを

勢いよく傾け、そこにあつた拳銃が宙を舞い、それをシャルロットがラウラの背中を転がるようにして受け取る。沙霧は転がっていたハンドガンを駆け寄りながら回収、ロックを外す。そして・・・)

ダダダダンッ！

『チエック・メイト。』

(高速五連射×三の弾丸は的確に起爆装置と爆薬の信管、そして導線『だけ』を撃ち抜いていた)

「まだやる？」

「次はその腕を吹き飛ばしてやるうか？それとも・・・」

「人間か男を終わらせてあげる・・・」

(ジャキッ！と三丁の拳銃を突きつけられ、さっきまでの威厳も高圧もなく男は震える声で謝った)

「す、すみっ、すみませんっ！も、もうしまっ、しませんっ！いい命と男ばかりはお助けをっ・・・！」

(そんな敗北宣言を最後まで聞くことなく三人は颯爽と立ち去った。

さながらそれは再び吹きささぶ黒き一陣の風のように
リパレティンゲ
シユヴァルツェア
ラファール

（あの強盗事件の後、シャルロット達は残りの買い物を済ませ、ちよつと刊行して帰ってきた。そしてシャルロット達の部屋では・・・）

「こ、これは、なんだ・・・？」

「どこからどう見てもネコパジャマ。」

「ん〜 可愛いーっ！ラウラ、すっごく似合うよー！」

「だ、抱きつくなくなっ！う、動きにくいだろう！？」

「ふっふ、ダメ。猫っていうのは膝の上で大人しくしないと。」

「シャルロットも猫・・・」

（楽しげな声が聞こえていた。夕飯を済ませて特にすることもなくごろごろしていた所に沙霧が買ってきたばかりのパジャマを着て来たため、じゃあ僕らも、というシャルロットの提案でこうなった）

「これは・・・本当にパジャマなのか？」

「うん、そうだよ。寝やすいでしょ？」

「ね、寝てないから分かるはずないだろう・・・」

がその要求は却下されました』という、いつもとは百八十度違う理屈なし根拠なし交渉なしの強引なやり取りで、気がつけばシャルロットの膝の上に座らされていた)

「ほらほら、言ってみようよ　にゃーん　」

「にゃ、にゃーん・・・／＼／＼」

「にゃー。」

(照れくさそうに猫の手振りまでつける眼帯黒猫ラウラと、ポーズが猫な斑猫沙霧に、シャルロットはますます幸せのパーセンテージを上げる。それはもう、自由の名を冠する機動戦士の核動力並の数値を叩きだす勢이었다)

「二人とも可愛い〜っ!!写真撮ろっ!!?ねっ、ねっ!?!?」

「き、記録を残すだど!?!拒否する!断固拒否する!?!」

「そんなこと言わずにさ〜」

コンコン。

「はい、どつぞ〜。」

(女子寮特有のフランクさで答えたシャルロットは、ラウラを愛でて幸せいっぱいだった笑顔が次の瞬間真っ赤になった)

「・・・」

(訪ねてきた主の奏は、すぐにドアを開けて部屋を出た)

えええええっ!?!い、今までいきなり部屋に来るなんて一回もなかったのに、なんで急に!?!っていかどうして今日!?!・・・うああっ、猫パジャマ着てるのにつ!?!ち、違うよ!?!こ、これはね!?!今日シヨツピングで見つけて可愛かったから買ったんでね!?!そのね、いつもはもっと大人っぽいの着てるんだよ!?!ち、違うんだよ!?!?

(頭の中がグルグルと急速回転を始める。シャルロットはそれでも説明できているつもりだったが、実際に口から出ていたのは『あ、え、う・・・』というしどろもどろの音だった)

「・・・奏、なんか変だった・・・」

「え?」

「ドアを優しく締める感じなかったし。笑ってなんかなかったから・

・・・」

S i d e K a n a d e

俺はシャルの部屋に沙霧がないか尋ねてきただけだ……。アイツ、よく知った場所じゃないと迷子になるから……。ロロットに聞いたら『シャルロット達の部屋に行ったわよ』って言ってたから来たら……。猫パジャマ着てたとか……

・・・耐えるのやつとこさじゃねえかよ・・・！

・・・意を決して・・・意を決して・・・！

「シャ、シャル？入るぞ！？」

・・・あれ、返事がない？

・・・とりあえず悪いとは思っけど勝手に入って・・・奥まで行っ
たら・・・

「にゃーん。」

「うわあっ！？」

突然襲撃されてベッドに倒れこんでしまった。

「さ、沙霧！？」

「にゃー！。」

耐える俺・・・耐えるんだ俺・・・

「に、にゃー・・・／＼／」

シャル、お前もか!?!?! マジ耐える・・・耐える・・・!!

「・・・にゃ・・・にゃー・・・／＼／」

・・・もう無理、限界・・・

「すまんラウラー!!」

「な、なんだあつ!?!」

(言葉を言い終わらないうちにラウラは奏に引っ張られ、腕の中へ)

「もー無理、もーダメ、耐えられるわけねえ。子猫が多過ぎじゃねえか!!!可愛い子猫がいて我慢出来る奴いるのか!?!いるわけねえだろ!!!」

『こ、子猫!?／＼／』

「・・・子猫・・・／＼／」

(子猫発言にシャルロットとラウラは顔を真っ赤にし、沙霧も珍しく顔を真っ赤にした)

「か、奏、は、はなっ、離せっ!?!」

「だが断るっ!?!」

「断るな!?!」

(奏の腕の中にパニックになってるラウラ。離せと言っても離さない結果、奏が落ち着くまで腕の中にいるしかなかった。シャルロットと沙霧は子猫発言にフリーズしていた)

おまけ (Side Laura)

「・・・寝れん・・・」

(午前二時。消灯時間はとうに過ぎたこの時間にラウラは目覚めた。否、寝付けなかった。これを含めると既に四回、目が覚めている。理由は簡単、あの奏の行動が原因だ)

・・・まったく・・・! あんなことするから眠れないではないか・・・!! 奏・・・知らなかったとは言え・・・急過ぎるではないか・・・
。おかげで眠れん・・・/ / /

(ラウラはベッドから下りると、寮の廊下をフラフラと歩き始めた。そしてふと足を止めたのが1001号室前)

・・・あの時のお返しだ。朝起きて盛大に困らせてやる・・・

(そしてラウラはいつもの通り部屋に侵入し、いつものようにベッドに侵入した。しかし、彼女は一つミスをした。

猫パジャマを着たままベッドに侵入してしまったという盛大なミス
を・・・)

(翌朝、幸俚が見たのは『猫』と幸せそつな顔をしてラウラを抱きしめて寝ている奏と、パニックになっているラウラだった)

「ゆ、幸俚あ！！た、たす、助けてくれえ！！」

「・・・ゴメン、無理・・・」

「た、頼むから助けてくれ！！このままだと頭がパンクしそうなんだ！！」

「幸せでパンクするならいいんじゃないかな・・・。というかこのままだつたらちよつとリードできたと思えば気が楽になると思うよ？」

「・・・／／／」

(幸俚がアドバイスした途端、大人しくなったラウラ。顔は真っ赤だが顔は幸せそのものだった)

「・・・にゃー・・・／／／」

#57 Three Cats Rhapsody (後書き)

奏の超意外な一面、如何でしたか？

「(奏)・・・すっげえ恥ずい・・・ノノノ」

子猫が可愛いのは否定しませんよ。当然ですから。では、今回はゲストもいますし、奏の追放も急がないといけないのでさっさと・・・

「(奏) 待て、追放ってどういうことだよ!？」
では一問一答)

1. エドワード・ニューゲートさんから

『主要メンバー全員にパートナーのポケモンをつけるとしたら、誰がどのポケモンになりそう?』

「(奏) 俺と雪は分かると思う。俺はシャワーズでユキはキュウコン。後は分かる順で言うと・・・」

篝・・・ハッサム(むし、はがね)

鈴・・・グランブル(ノーマル)

真琴・・・マルマイン(でんき)

リース・・・サーナイト(エスパー)

ルティア・・・ピカチュウ(でんき)

シャル・・・トゲチック(ノーマル、ひこう)

ラウラ・・・ミニロル(ノーマル)

沙霧・・・サンダース(でんき)

ロロット・・・ギャラドス(みず・ひこう)

・・・後は・・・ちょっと見当がつかねえ。悪い。」

ということ。ではゲスト! フランス代表候補生、シャルロット・

デュノア!!

「(シャルロット) えと、どうも……」
「(奏) リースの時も言っただけど……緊張しなくていいからな？」
「(シャルロット) 分かってるんだけど……ね？」
「ということ、奏。出てけ。」
「(奏) 随分淡泊だなおい!!」
「出ないと nice boat 見せる。」
「(奏) 分かった!! 分かったから!!」

「(シャルロット) ……いいのかな……」
「いいんです。では質問。結構あるので頑張つて。」

1. 俊さんから

『目が覚めたら奏の隣で目が覚めました。眠ってる奏に何をしますか?』
「(シャルロット) えっ!?! / / /」
「で、どうします?」
「(シャルロット) ……き、キス……します…… / / /」
「はい次。」

2. 俊さんから

『白いネコミミと白いネコシッポ、白いスクール水着が目の前にあって、ソレを着て奏を誘惑するとしたらどんな台詞を言いますか? また、奏に実際に着てくれと言われたら着ますか?』
「(シャルロット) えっと……その……あの……ま、まず……着ます……言われたら…… / / /」
「で、なんて言います?」
「(シャルロット) ぼ、僕を可愛がってください……にゃん……つて…… / / /」
「……この言葉、どれだけの人がパンチ食らっただろうか……」

3・エドワード・ニューゲートさんから

『最近のラウラを見て、「ああ、これ奏の影響だ」って思う行動や言動はありますか?』

「(シャルロット) や、やっと普通の質問来た・・・」
それで、どうです?

「(シャルロット) やっぱり良く野菜を食べるようになった・・・ことかな?前はパスタとかをよく食べてたけど、今は野菜をよく食べてるし。後はテレビをよく見るようになった・・・かな?」

4・エドワード・ニューゲートさんから

『一緒にいると飽きない人物と、一緒にいると苦勞する人物を教えてください(奏を除く)』

「(シャルロット) 一緒にいて飽きないのはやっぱり沙霧とルティア・・・かな?沙霧は慣れちゃったっていうのがあると思うんだけど、ルティアは話しやすいし趣味が一緒だから。」

趣味とは?

「(シャルロット) 小物集め。よくそれで話が合っんだ。お互いに宝物を見せ合ったりしてるからね。」

で、逆は?

「(シャルロット) ロロット・・・かな?奏を見て思うんだけど、結構性格きついし扱いにくいんだよね・・・」

とのことです。さて最後。

5・エターナルさんの所のティエリアから

『あの時子作りしようとしたのがラウラではなく君だったらどうしてましたか?続けてましたか?』

「(シャルロット) 答えづらい質問が来たよ・・・//」

#46の話ですね。で、つまるところ?

「(シャルロット)・・・続けてました。//」

とのこと。次回は秦宅訪問。『来ちゃった』『お楽しみに!!』

#Other 王様ゲーム in IS学園(前書き)

書き上がった王様ゲーム・・・カオスです。ラッキーあり、自爆あり、笑いあり・・・

一部オマージュあります。

後書きコーナーは今回お休みです。

#Other 王様ゲーム in IS学園

IS学園の教室。その一角に四人の男子と多数の女子が集まっていた・・・

「（奏）王様ゲームッ!!」

「（奏以外）イエーツ!!」

ちなみにメンバーは

男子 一夏・奏・幸俚・亮

女子 篤・セシリア・鈴・シャルロット・ラウラ・真琴・オリヴィエ・リース・エリイ・ルティア・ルシエラ・沙霧・ロロット・雪菜・美雪・リーシャ・ヴィルミナ

「（奏）エリイ、ルールの説明を頼む。」

「（エリイ）了解。・・・ここに、今いる人数から1引いた分までの数を書いたくじと、『王』と書かれたくじがありやす・・・。『王』のくじを引いた人は他の番号の人に命令が出来る。例えば、『2番は4番にしつぺをする』とか『8番は10番に愛の告白をする』とか。分かっているとと思うけど・・・王様の命令は・・・?」

『絶対!!』

とりあえず作者的には・・・よくここまで的人数で囲める机があったなと思う。・・・正直、直径がどれだけかがめちゃくちゃ気になる所。

「(幸俚)・・・じゃあ・・・始めるよ・・・!」

「(一夏)覚悟は・・・出来てるな・・・?」

「(鈴)出来てるわよ・・・!」

「(セシリア)当然ですわ・・・!」

「(奏)せえーのおーっ!」

『王様だーれだ!』

「（エリイ）いよっしゃーっ！！あたしが王だーっ！！」

エリイが勢いよく立ちあがり叫ぶ。それ以外の面々はorzしたり頭を抱えたり思い切り悔しがったりと様々だ。

「（エリイ）そんじゃ命令だぜい？そうさね・・・」

全員が息をのんだ。

「（エリイ）・・・4番と！」

「（ロロツト）うっ！？」

「（エリイ）8番が！」

「（鈴）あたし！？」

「（エリイ）織斑先生に『好きです、付き合ってください』と告げて来い！！」

（（エリイ・ロロツト・鈴以外）随分はっちゃけた命令来たな・・・

)

その間、一瞬だけorzになっていた鈴とロロツト。しかし・・・

『(鈴・ロロツト) あ、あんたねえっ!!』

「(ロロツト) なんて命令すんのよ!! 完全に誤解されちゃうじゃない!!」

「(鈴) そうよ!! こんなことしたら恥かくじゃないの!!」

猛烈に反論開始。

「(一夏) ダメだぞ、二人とも。さっきエリイが言ってたじゃないか。」

「(リース) そうだよ二人とも。」

「(エリイ) 王様の命令は!？」

『(鈴・ロロツト) 絶対・・・!』

「(ルシエラ) そういうことだから・・・盛大に散ってきなさい。」

『(鈴・ロロツト) うわああああああん!!』

「(エリイ) いつてらっしやーい」

「(鈴) こうなったら盛大どころか華々しく散ってやるうーっ!!」

「(ロロツト) 末代まで呪ってやるんだからあ　っ!!」

数分後・・・

帰ってきた二人は【私は教師をからかったことを反省しています】
という看板が掛けられていた。

「(奏) ぷっ……くく……!!」
「(鈴・ロロット) 笑うなーっ!!」
「(シャルロット) じゃあ……次、かな？」
「(一夏) せーのっ！」
『王様だーれだー!!』

「(ルシエラ) あら、私みたいね。」
「(鈴) ……まずくない…?」
「(ルティア) ……な、なにされるんだろ…。」

全員がどんな命令をするのかが予測できないルシエラに戦き始めた。

「(ルシエラ) さて……どういう命令をしようかしら…。」
「(ルティア) ……(うるうる)」
「(リーシャ) ……(うるうる)」

傍からすれば恐ろしく見えるルシエラの笑みにお互いを抱きしめあつて震えるルティアとリーシャ。

「(ルシエラ) じゃあ……5番が9番にダイレクトキス。」
「(ルティア) あ……5番だ…。」
『(ルティア&男子以外) じゃあ9番は!?!』
「(奏) と言うかお前らは見たのかよ…。」
「(鈴) まずアンタらが先なの!!」

「(一夏)そんなこと言ってたってなあ……」

男子勢が一斉に紙を開けた。結果……

一夏 1番

幸俚 8番

亮 4番

奏 9番

「(奏)って俺かよ!?!」

「(ルティア)へうっ!?!?!」

『(真琴・オリヴィエ・シャルロット・ラウラ)嘘(だ)っ!?!』

「(沙霧)認めたくない……」

「(鈴)王様の命令なんだから仕方ないでしょ?ほら、さっさと廊下でやっちまいなさい!」

「(セシリア)どれだけ時間がかかっても構いませんわよ?」

(一夏・幸俚)この二人、絶対見る気だ……

明らかに見る気満々な二人に呆れるしかない一夏と幸俚だった。

「(エリイ)と言うことで、お二人さん、廊下にごあんな〜い」

「(奏)ちよ、おい押すなって!?!どわっ!?!」

「(ルティア)……う……」

エリイに追放（感覚的にはそんな感じ）された二人。その直後だった。

（以降、小声です）

「（鈴）よっし、見るわよ！」

「（セシリア）ドアを開けるのはどれくらいですって？」

「（エリイ）ばれない程度にこっそりと開けるのが一番ぜよ。」

「（ルシエラ）どう？」

「（セシリア）今お互いに向きあいましたわ。」

「（ロロット）・・・」

気になるかのようにちらちらとドアの方を見るロロット。

「（篝）気になるのであれば見たらどうだ？」

「（ロロット）ばっ、馬鹿言わないでよ！！気になるわけないじゃない！！ふざけないでよ！！／＼／＼」（大声です）

「（鈴）よしいけ、そのままやっちゃえ！！！」

「（セシリア）そのまま・・・そのままぐつと・・・」

「（エリイ）ブチュつとやっちゃえ・・・」

『(鈴・エリイ) キタ

っ!!!』

「(セシリア) きましたわーっ!!!」

「(エリイ) 何これすっげー長いぞ!?!長すぎるぞ!?!」

「(鈴) ちょ、これってまさかのデーブキス!?!...ルティア・
...恐ろしい子...!」

「(セシリア) だ、大胆すぎます...大胆すぎますわルティアさん...」

「（シャルロット）見たい……だけど見たくない……うう……」

シャルロットを筆頭に、一部の女子が悶絶していた。ドアの向こうでどんな状況になっているのか。判断できる材料は鈴・エリィ・セシリアの言葉だけ。

一方、ルティア・奏はと言つと……

「（奏）・・・／／／」
「（ルティア）・・・／／／」

お互いに顔を真っ赤に染めていた。ちなみに唇はもう離れている。
だが・・・

「（奏）る、ルティア・・・？そ、そろそろ戻らないか・・・？／／」
「（ルティア）あ、あの・・・も、もうちょっと・・・こうしてた
いというか・・・なんというか・・・／／／」

キスをしていた時に首に回していた腕を下ろしたただけだが、ルティアが奏に抱きついていているという状況だった。

「（鈴）うわ、すっごい恋人同士っぽい……。見てることがちが恥ずかしくなってきた……。／＼／」

「（セシリア）う、羨ましいですわ……。私だって一夏さんと……。／＼／」

「（鈴）私だつてしたいわよ……。！けど……。これはさすがにちよつと……。／＼／」

だが、三人の覗き見もここまでだった。なぜなら……

「（オリヴィエ）もういい加減にしなさいっ！！」

「（ラウラ）ルティアだけ……。！貴様だけそんなことが出来るなんて卑怯過ぎるぞ！！」

「（真琴）うなっ！！」

上の三人の我慢の限界が来たのだから。

「（鈴）嘘、もう限界！？」

「（セシリア）少しぐらい我慢してもらいたいものですわ！！もうちよつとあの二人を幸せに……。」

「（ラウラ）させられるわけないだろう！？目の前で夫を取られて

「たまるものか!」

そして、セシリア・鈴・エリイの防衛隊（笑）と、真琴・オリヴィエ・ラウラの特攻隊（笑）が激突した。

くしほらくおまちください

『(真琴・オリヴィエ・ラウラ・エリイ・鈴) すいませんっしたあ

!!-!』

「(ルシエラ) これに懲りたら少しくらい自重しなさい。興味本意や怒り任せになったら碌な目に遭わないわよ?」

ルシエラによって制圧されていた。セシリアは一夏に羽交い絞めさ

れているんな意味で陥落していた。何故一夏がって？ルシエラが止められる限界人数が五人だったため。

なお、ルシエラに制圧された五人は土下座状態だ。

「（奏）・・・なにがあつた？」

「（ルシエラ）暴動が起きたのよ。それを制圧しただけ。」

「（奏）・・・ただの罰ゲームだったのに・・・」

「（ルテイア）へうゝ・・・／／／」

そしてルティアの顔の火照りが治まってから再開。

『王様だーれだ！！』

「（ヴェルミナ）妾じゃな。」

いつもの通り全員が悶えたりなんやらしたり。

（（ヴェルミナ）・・・ここで幸俚を狙って番号を言って、対象を妾にするのもありじゃが・・・確率は低い・・・されば他の番号を言って被害に遭わせた方が無難じゃろうな・・・）

ヴィルミナが思考に耽っている間、全員が戦々恐々としていた。

「（ヴィルミナ）・・・よし。ならば・・・2番と5番が廊下で『SUPER STREAM』を歌う！」

「（篝）なっ・・・私か・・・!?」（2番）

「（ラウラ）むっ・・・私か・・・」（5番）

（（篝・ラウラ・ヴィルミナ以外）当たらなくてよかった・・・）

結局ラウラと箒が同時に合唱。ヴィルミナとしては二人同時に歌え、ということだったため、一致するまで歌わされた。結果、かなりの赤っ恥シーンとなった。・・・が。

「（ラウラ）どうだ奏！ちゃんと私を見ていたか！？」

「（奏）見ていたもなにもな・・・否応にも聞こえてたつての・・・」

「（ラウラ）なら聞いていたんだな！？最初から最後までしっかりと聞いてくれていたんだな！？」

「（奏）だから聞いてたつての・・・」

奏がラウラに詰問されると言う光景が見られた。

「（亮）次だ。」
『王様だーれだー！』

「(奏)・・・誰だ？」

「(セシリア)私じゃありませんわ。」

「(ロロット)アタシでもないわよ？」

「(シャルロット)僕も違うよ？」

「(ラウラ)私でもないな。」

「(奏)じゃあ誰が・・・」

奏がある一点を見た時、フリーズした。その一点とは・・・

「(沙霧)・・・(ヒョオオオオオオオオオオオ・・・)」

「(奏)・・・(声にすら出せない恐怖感が襲っている)」

王は沙霧だった。

「(奏)スマンが急用が!!」
『(エリイ・鈴)逃がすかあっ!!』

突然逃げ出す奏をエリイと鈴が追いかけ・・・

「(鈴)さあ王様、ご命令を!!」

「(奏)離せ!!こいつ何言い出すかわかんねえから怖えんだよ!!」

「(沙霧)・・・じゃあ・・・奏は今から、私に何をされても文句言っちゃダメ・・・」

「(奏)お前一体何がしたいんだ!？」

「(沙霧)・・・そんなの・・・恥ずかしくて言えない・・・//」

「(奏)こいつ変態だ!」

奏が盛大に大声をあげて喚く。

「(リース)でも沙霧、さっきの命令は残念だけど無効だよ?番号で指定しないとルール違反になっちゃうよ?」

「(奏)ほら見る、だったら大丈夫なはずだ。」

「(沙霧)じゃあ・・・1番。」

数秒後。

「(奏)逃げるっ!」

「(鈴)逃がすかつ!」

「（奏）・・・で、なんで俺はこうなってるんでありませうか？」

現状、奏は今沙霧が膝の上に乗っているという状況。沙霧は幸せそうだ。

そして、奏に飛んでくる4つの殺気が籠った視線。

「（奏）・・・胃に穴が開きそうだ・・・」

「（シャルロット）次やるよー！」

「（真琴）さっさとやるー！」

『王様だーれだー！ー！』

「（一夏）俺か……。うーん……」
「（エリィ）決まらないならこれどうぞ?」

罰の内容を考える一夏に、エリィが謎のボタンをズイツと差し出した。

「（一夏）……まさか……。これは……。!?!」
「（セシリア）なんですの、これ?」
「（奏）……。悪魔のボタンだ……。!」

「(ロロット)悪魔のボタン?」

一夏・奏・鈴・箒・真琴・幸俚・雪菜が戦々恐々としていた。原因は目の前のボタンである。

「(美雪)押すと・・・どうなるの?」

「(奏)・・・一夏、罰は決まったのか?」

「(一夏)・・・決まらねえ・・・」

「(奏)・・・押せ。俺達のことには気にするな・・・」

「(幸俚)僕達なら・・・覚悟はできてるから・・・」

「(箒)止める一夏!押すな!!」

「(雪菜)止めて一夏君!!それを押したって平和にならないから
!!!」

しかし、一夏は勢いよくボタンを押した。

【デデーン】

『(知らない組)っ!?!?』

【3番、11番、14番、19番、アウト。】

突然某元マネージャーの声が出たと思つたら、上から何かが落ちてきた。

「(ロロット)・・・なに、これ？」

「(奏)・・・伝説の・・・」

「(幸俚)しばき棒だよ・・・」

「(一夏)・・・ところで、番号当たったのは？」

「(エリイ)・・・あたしと・・・リー姉とオリヴィエとリーシャだった・・・」

「(奏)・・・仕方ない、ラウラ、ちょっと来てくれ。」

「(ラウラ)なんだ？」

奏がラウラを連れて教室を出た。

「(真琴)かなちゃん・・・ラウラに一体何を・・・」

「(幸俚)カナ、今ラウラにあの棒の使い方をレクチャーしてると思うんだ。あ、知らない人のために言っておくけど・・・エリイ、そこの椅子に掴まってくれない？これを罰に充てるからさ。いいよね、一夏？」

「(一夏)いいぜ？」

エリイが椅子に掴まった。位置を指定してたので前かがみになっている感じだ。

「(幸俚)・・・で、こつやって・・・!!」

「(エリイ)(パアン!)(ひぎゃつっ!?)」

いい音が鳴る。リース、オリヴィエ、リーシャは自分のお尻を守るように隠した。

「(エリイ)痛い……」

「(幸俚)こつこつ風にしばかれる。これがルールなんだよね……

」

幸俚が丁度教え終わった直後だった。

「(ラウラ)準備は整った!さあ実行だ!」

シパアン!と音を立ててドアが開き、ラウラが部屋に入ってきた。手にはしばき棒が。

「(リース)……あのー……ラウラ?」

「(オリヴィエ)ちよーっと待って……」

「(リーシャ)ほしいん……ですけど……」

「(ラウラ)問答無用だ!!さっさと準備をしろ!!」

あの時のラウラが復活したため、リース、オリヴィエは慌てて体勢を取る。リーシャは怯えきってそれどころではない。

「(リース)(シパアン!!) きゃうっ!?!?」
「(オリヴィエ)(シパアン!!) 痛いっ!?!?」
「(リーシャ) あう...あう...」

しばかれたリースとオリヴィエは該当箇所を痛そうに押さえる。リーシャは目の前のラウラに怯えて涙目になっている。

「(リーシャ) や...やめてください...」
「(ラウラ) 断る。さっさと執行させる。いつまでも終わらん。」
「(ヴィルミナ) そうじゃぞ。さっさと主の未来の旦那に尻を見せる、そして叩かれるがよい。」
「(リーシャ) 嫌ですうっ!?!?」

慌てて逃げ出したリーシャ。それをヴィルミナが許すわけがなく...

「(ヴィルミナ) 鈴音! エリイ! ひっ捕えるのじゃ!?!?」
「(エリイ) 了解しました女王様!?!?」
「(鈴) 分かってるわよ!?!?」

奏捕縛メンバーと同じ面子でリーシャ捕獲。そして罰は執行された。

「(ラウラ)・・・私だな。」

ラウラが王のくじを見せ、堂々と立ち上がった。

「(ラウラ)・・・そうだな・・・。(奏の番号は・・・大方3か
5・・・ならば・・・)(5番は王の頬にキス!!)」

その宣言後、全員がくじを確認。

「(奏)俺じゃないな。リーシャでもねえ。」
「(ラウラ)何っ!?何番だったんだ!？」
「(奏)3番。」
「(ラウラ)予想が合っていたのに・・・宣言する番号を間違えた・
・・・)」

Orzの体勢になるラウラ。

「(?????)ラウラ。」
「(ラウラ)・・・なんだ・・・。」

誰かがラウラの肩を突いて呼ぶ。ラウラが見たのは5番の紙。持つていたのは……

「（ルシエラ）私よ？5番。」

「（ラウラ）……馬鹿な……」

ルシエラだった。

「(ラウラ) 不覚・・・一生の不覚・・・!! っそ殺してくれ・・・!!」

「(奏) じゃあこれでラストな？」

「(鈴) 後二回!! 後二回やらせて!!」

「(セシリア) もちろんこれは含めず、ですわ!!」

「(奏)・・・はいはい。じゃあ・・・」

「(リーシャ以外) 王様だーれだ!!」

「（鈴）っしゅっ！あたしだ！！」
「（セシリア）鈴さんが王なんて・・・きーっ！！」

セシリアがハンカチを噛んで怒っていた。・・・古っ。

「（鈴）じゃあ・・・4番が次の命令終わるまで王を膝枕！」

「（奏・亮・幸俚）・・・違う（ね）。」

「（一夏）・・・マジか・・・」

当たったのは一夏だった。

「（鈴）ビンゴッ！！さあ一夏、膝枕しなさいよねー。」

「（一夏）・・・これスゴイ恥ずかしい・・・／＼／＼」

「（セシリア）・・・後二回・・・！」

「（奏）・・・つかリーシャ寝ちまったぞ・・・」

「（ヴィルミナ）・・・主は子供か・・・？」

リーシャ、泣き疲れて睡眠中・・・

「（真琴）むきーっ！やるっ！やるよっ！...」

「（奏・リーシャ以外）王様だーれだ！...」

「（リース）あ、私だ。じゃあね・・・」

リースが考え始める。それも数分だった。

「（リース）3番が1番を一分間抱きしめる。」

『（恋している女子たち（リーシャ以外））愛の抱擁！？じゃあ（私／あたし）の番号は！？』

一斉に番号を見た。結果・・・

「（奏）・・・なんか俺被害率高くね？」

「（シャルロット）あ・・・僕だ・・・！」

「（オリヴィエ）うー・・・」

そして命令執行。奏は滅茶苦茶恥ずかしそうに、シャルロットは『この世の幸せを今実感してます』と言わんばかりの顔をしていた。

「（奏）・・・もうこれでラストだ！！否定させるか！！」

「（真琴）・・・かなちゃん言うなら・・・しょーがないけど・・・」

「（オリヴィエ）罰しか受けてない気がする・・・」

「（セシリア）いきますわよ！！せーのっ！！」

『（リーシャ以外）王様だーれだー！！』

「(奏) よっしや、俺が王だっ!?!」

奏が勢いよく立ちあがった。直後、殺気が奏を襲う。その内容は簡単。

『自分と(奏)かなちゃん)で愛しあえる内容を言え』と。

「(奏)・・・ふっ、最後の最後でそういう脅しに屈する俺と思っ
なよっ!?!」

カチツ。

「(奏・リーシャ以外) あっ。」

【(デデン) 4番、12番、15番、アウト】

「(ラウラ) なんだとっ!?!」

「(エリイ) またあたし!?!」

「(ロロット) アタシも!?!」

「(奏)・・・よし、ちよっと練習してくる。鈴、逃がすなよ・・・

「（鈴）サーイエツサーっ！！」

奏の絶対零度の笑みを含んだ脅しに鈴は涙を流して返事をするしかなかった。

「（ロロット）鈴、今すぐアタシ達を逃がして！！」

「（鈴）・・・ゴメン、無理・・・」

「（ラウラ）何故だ！？」

「（鈴）あの笑顔に・・・」

全員が固唾をのむ。

2057

「（鈴）零距离高压縮粒子砲直撃させて蒸発させるって・・・」

「（鈴・リーシャ以外）・・・」

鈴の放った一言で、部屋の温度が一気に三度も下がった。

「（奏）（シパンン！！）おーし！！執行じゃーっ！！」

そして、奏によってしばかれた三人。ラウラは痛みの所為か無言になり、エリイとロロットは涙目で『痛い痛い痛い痛い痛い・・・』とうわ言のように呟いていた。

「(沙霧) 奏……」
「(奏) ……なんだ沙霧？」
「(沙霧) ……私も叩いて……」
「(セシリア) 沙霧さん!？」
「(篝) 何を言っているんだお前は!？」
「(奏) 逃げるっ!!」
「(沙霧) 逃がさない……!」

奏と沙霧の逃走&追跡劇が始まったため……

「(亮) ……終わりだな。」
「(幸俚) ……そうだね。」

王様ゲームは終わりを告げた。

#Other 王様ゲーム in IS学園(後書き)

「(奏)・・・生き延びた・・・生き延びたぜ・・・」

沙霧に捕まったら沙霧共々二度と陽の目を拝めなくなる所でしたね。

「(奏)・・・変態のレッテルを貼られる所だったっての・・・」

次回は本当に奏宅訪問です・・・よ？

「(奏)何故疑問符？」

気にしたら負けです。

58 恋に騒がす八重奏（オクテット）（前書き）

原作4巻分最終・・・ですが夏休み編は続きます。

最後の方でオリジナル展開がありますし、後書きではちょっとした募集（・・・と取っていいのだろうか？）があります。

#58 恋に騒がす八重奏（オクテット）

Side Charlotte

「・・・／／」

（ドキドキとしながら、ネームカードを見る。『二崎奏』と書かれた、奏直筆のネームカードをシャルロットは何度も読み返しながら、深呼吸した）

だ、大丈夫・・・大丈夫・・・。一昨日から家に帰ってるって言ってたし、奏は迷惑がったりしない・・・よね？多分・・・

（シャルロットがいるのはIS学園一年生寮の廊下ではなく、住宅の通路である。『二崎』と書かれたネームカードの下のインターホンと覗めっこをしてとうに十分。日影の中とはいえ、暑さは彼女をジワリジワリと攻めていた）

うー・・・あー・・・えっと・・・本日はお日柄も良く・・・じゃなくてっ！これ運動会の決まり文句だよ！！／／／

（なんて切り出そうかと考えては、またボタンに伸ばした手を引っ込める。そうして躊躇十一分目を過ぎ、再度ボタンに手を伸ばした

所で、いきなり声をかけられた)

「シャル? どうしたんだ、俺の家の前に突っ立って?」

「ふえっ!?!」

(いきなり後ろから声をかけられ、狼狽百二十パーセントのシャルロットが振り向く。そこには、コンビニのレジ袋を手に下げた奏が立っていた)

「あ、あつ、あのっ! ほ、本日はお日柄も良く・・・じゃなくて!

! / / /」

「・・・?」

「え、えつと、ええつと・・・ / / /」

(パニックになりながら、シャルロットは何かいい言葉がないものかと頭の中のライブラリを全力で検索する。小さいシャルロット総数二百五十六人、総動員で)

「き・・・」

「き?」

「来ちゃった」

(えへ、と笑みを添えて・・・言った後、途轍もなく後悔をした)

う、う、うわああっ！！僕のバカッ！僕のバカアっ！！なんであんなこと言っちゃったの！？

「・・・ま、上がってけよ。そんなもてなしは出来ねえけど。」

「えっ！？あ、上がって・・・いいの・・・？」

「よくないわけないだろ？帰れっつて突っ撥ねる理由もねえっつてのに、もしかして予定でもあつたか？」

「う、ううんっ！！ないっ！全然っ！！まったく、微塵もないよっ！！！」

（突然の予定なし猛アピールに押され、奏はちよつと引いた。そんな奏の行動に気付いて、シャルロットははつとすると顔を赤くして俯いた）

「な、ない・・・です・・・／／／」

「・・・熱で頭やられたか？ま、入れよ。鍵開いてるし。」

「う、うん・・・／／／」

（ごくごくと頷きながら、シャルロットは心の中で『変なやつって言われなくてよかった・・・。けど暑さで頭やられたって思われた・・・』と、布団に頭を埋めてゴロゴロ状態だった。しかし、そんな動揺も奏の家に上がった感動に流されていった）

こ、ここが奏の家か・・・

(考えてみれば、男子の家に上がったこと自体が初めてなシャルロットは、思い出したようにドキドキと心拍数が上がっていくのを自覚する)

マスター、お帰りですか？

「あー、今帰って来た直後だっつーの。弟の心配する姉か？」

え？女の人の・・・声？

(突然聞こえた声にシャルロットは驚いた。それに奏はさらりと返す。突っ込みも交えていた)

「奏・・・誰？今の・・・」

「ああ、そっぴや全然言ってなかったな。中学の時に姉さんが突然よこしたアンドロイドだよ。確か『奉仕用メイドアンドロイドTYPE (ニュー)』^{ヘステイア}『Hestia』・・・だったか？」

「ヘステイアって・・・確か炉の女神じゃなかった？」

「炉の女神で合ってる。一体何をトチ狂ったんだか・・・」

(姉に対し愚痴やらなにやら言いながら奏は奥に入っていく。シャルロットはそれに続いていく。顔を赤くしたまま)

「ま、ちょっと座って待っててくれ。汚えけど我慢してくれ。飲み物持ってくつから。」

「う、うん。ありがとう・・・／＼／」

(部屋に綺麗に置かれている座布団に座るシャルロットは、それとなく部屋の中を見渡した)

汚いって言うてたけど・・・ちゃんと片付いていて綺麗になってる・・・。これ、みんなへステイアさんのお蔭なのかなあ・・・？

(散らかっていると知られてもそういう光景が全く見られない。へステイアが片付けなどをやっているためである)

・・・あ、ゲーム機だ。こつこのつを見るとやっぱり奏の家なんだなつて思っや・・・

(テレビ台の下に無造作に置かれているゲーム機(6)も、部屋のインテリアの一つとして見てとれるくらい。奏も実際片付けていたりするのだ)

奏たちの部屋も見たことあるけど・・・やっぱり奏って家事が得意なんだなあ・・・。お掃除にお洗濯、それに料理も・・・

(幼い頃、フランスで通っていた小学校の男子を思い出しても、そんなタイプは何処にもいなかったように思う。そんな変わった所でさえ、正直好きなシャルロットである)

奏って・・・いい旦那さんになりそうだよね・・・だ、旦那さんかぁ・・・／／

(何となく思った言葉を、ふと反芻して自分が結婚する未来を思い描いてしまう。僅かに赤くなった頬を抑えながら、つい表情が緩んでしまった)

「ほい、麦茶。」

っ!!!(どきいっ!?)

「水だしで作ったやつだから味薄いかもしんねえし、それ考慮して昨日寝る前に作ったから逆に濃いかもしれねえけど。」

「う、うんっ。あ、ありがとう・・・」

(突如として現実に呼び戻されたシャルロットは、奏が隣にかけた(とはいっても一番テレビに近い席だが)ことに驚きながらニヤけた顔を隠すように早速お茶を飲んだ。そのお茶は奏の懸念通り少し焦げ臭いような味がしたが(実際水出しを長時間入れておくとホントに濃くなります)、シャルロットにとってそんなことはどうでも良く、寧ろ緊張と動揺でほとんど味が分からない状態だった)

「マスター。」

「なんだー？」

「冷蔵庫を確認したら、夕食分の材料がなくなっていたので・・・」

「買い物か？頼むわ。」

「はい、行ってまいります。ではごゆっくり。」

えっ!？

(シャルロットが少しだけ落ち着いていられたのは、ヘスティアがいたから。そのヘスティアが買い物で出かけてしまうということ、さらに緊張と動揺が激しくなってしまう)

か、奏と二人きり・・・奏と二人きり・・・／／／

(ドキドキと心臓の鼓動は加速度的にその速さを増していく)

な、何か話さないと・・・えっと・・・ええっと・・・／／／

「さつてと・・・続き続きつと。」

つ、続き・・・？

(奏がテレビを着けると、先程までやっていただであろうゲームが、中断状態で表示された。やっていたのは『マリ パーティ2』)

「あ・・・やったことないけどそれ知ってる。」

「お、知ってる？じゃあやってみるか？」

「えー？いいよ、見るだけで十分だよ！！」

「つってもな・・・これみんなでやった方が盛り上がるんだよな・・・。コントローラーも四つあるし。」

「・・・しゅ、周到だね・・・。」

(奏の6 専用コントローラーがきちんと四人分あることにちよつと引いたシャルロット。でも奏と二人でやれると改めて考えた時、悩み始めた)

「じゃ、じゃあ・・・一緒に・・・やろうかな・・・。」

「ん、じゃちよつと待っててくれ。コントローラー引っ張り出してくるから。」

(奏が言ってもう一度本体を確認した。繋がっているのは今奏がプレイしているコントローラーだけ。他にコントローラーは見当たらない)

「そ、そんなに焦らなくていいからね？僕のワガママなんだし・・・」

「

「確かこの辺にあつた気が・・・あ、あつたあつた。」

(奏が引つ張り出してきたのは黄色いコントローラー。偶然か必然なのかは分からないが、シャルロットに合った色だった)

「んじゃ、早速やるか。」

「は、初めてだから・・・色々教えて・・・ね?」

「任せろつて。これタッグ形式ないからちよつと辛いな・・・G出すか?その6は確かタッグ対応してたはずだった気が・・・」

「だ、大丈夫だよ!!教えてくれれば分かるから!!」

(そして今プレイ中ステージを止めた時だった)

ピンポーン。

「宅配便か?」

「へステイアさんじゃないの?」

「いや、あいつは両手が塞がってもサブアームで開けるから鳴らさねえ。誰か来たみたいだ。」

(ロビー画面で某キノコの人が案内をしている状態のまま、奏は席を立て廊下に向かう。シャルロットは深く息を吐いた。どうにも焦ってしまって奏のペースに乗せられっぱなし)

・ ・ ・ そうですね 奏の趣味って ・ ・ ・ ゲーム以外にあるのかな ・ ・ ・
?

(遡ること十分前・・・)

S i d e L u t h i a

こゝ、ここが奏君の家・・・

(奏宅前の通路にルティアがいた。寮にいてもエリイに弄られてしまつのが目に見えていたため、奏が帰省していることを人伝に聞いて奏宅までやってきたのだ)

・・・あ、でも一応確認しとかないと・・・。他の人のところだったら滅茶苦茶恥ずかしいから・・・

(確認したその先には、しっかりと『二崎』と書かれたネームカードが入ったネームプレートが。つまるところ自身の目的地到着最終確認となった)

そう言えば私・・・男の子の家に上がるの初めてだ・・・／／／

(思い返してみれば、ルティアは初めて男子の家に上がるのだ)

え、ええと・・・なんて言えばいいんだっけ・・・？ほ、本日はお日柄もよく・・・？こ、これって運動会の決まり文句だよね・・・？えと、本日は晴天なり・・・？これ絶対違うよね・・・

(かなり頓珍漢な事を考えていたが、やがて考えるのを止めた。)

きよ、今日奏君が帰ってきてるのは皆から聞いていたから・・・今は一人のほず・・・。今行けば二人きりになれるから・・・へう・・・／／／

(二人きりになれるから、の続きを意識してルティアの顔が真っ赤に染まる)

い、いい雰囲気になっちゃって・・・そ、そのまま二人は・・・

(頭の中のシアターでは既に色事に耽る直前状態の自分と奏という映像が上映されていた。そして、それを意識してますます顔が赤くなった。というか顔から湯気が出ていた)

(以下、妄想です)

『あ、あの・・・奏君・・・//』

『ん？なんだ？』

『あの・・・やっぱり・・・恥ずかしい・・・//』

『大丈夫。俺に全てを任せてくれ。』

『えと、その・・・よ、よろしく、お願いします・・・//』

(ここから普通です)

きゃーっ！きゃーっ！！それ以上は考えられないよーっ！！

（頭を抱えてしゃがみこみ、そして頭をぶんぶんと振る。傍から見れば変態そのもの。そしてその妄想からようやく離れたルティアはその妄想を現実にするため（なるかは分からないが）、インターホーンに指を伸ばした）

意を決して・・・意を決して・・・！！

（ピンポン、と軽い音がして数十秒、目の前のドアが開いた）

「うーい。・・・おろ、ルティア？」

「え、えと・・・その・・・／／／」

（いつもと変わらずはつきりと言えない。しかし内心は穏やかではなかった）

な、なんだか私服姿も格好いいよあ・・・へう・・・。な、なんて言えばいいんだっけ・・・！？／／／

「き・・・」

「き？」

「来ちゃった・・・」

(数秒後、ルティアもシャルロットと同じく激しく後悔した)

わーっ！わ　　っ！？な、なんでこんなこと言っちゃったの私！
？変な子って思われてないかなあっ！？へううーっ！！？

(奏にしてみれば突然ルティアが目の前でしゃがみこみ恥ずかしがってしまったため、どうしようもなかったため・・・)

「ま、まあとにかく入れよ。外暑かったからな。」

「え、あ、う、うん・・・。あ、後、おいしいって女の子の間で噂のケーキ専門店のケーキ・・・買ってきたんだ・・・／／／」

「お、サンキュ。んじゃ紅茶でも即興で作るか。」

「う、うん。」

(嬉しそうな顔をして、履いてきたサンダルを几帳面に並べ、家へ上がるルティア)

「シャル、ルティアも来た。」

「えっ？」

(ばったり、シャルロットと鉢合わせをするルティア。お互い状況がよく飲み込めないでいた。特にルティアは拳動不審な状態で上が

ったので靴を見逃しており、何かが言いたくても何も言えず口をパクパク開閉させていた)

「早速ルティアが買ってきてくれたケーキを食うか。．．．お、御誂え向きに三つもある。今日は暑いし、さっぱりしたのでってことでアイスレモンティーにするか。ちょっと待っていてくれ。」

「う、うん．．．」

(奏はそう言ってキッチンへと姿を消した。『座って待ってて』と付け加えられて言われたルティアは、シャルロットの隣にちょこんと座りこんだ)

『．．．』

(話題がないわけではないが、どちらも自分からは切り出せずに沈黙を続ける。)

「．．．き、奇遇だね、シャルロット．．．」

「そ、そうだね。奇遇だね、ルティア．．．」

(えへへ、あはは、と愛想笑いをする二人)

『．．．』

(そしてまた、沈黙)

Side Luthia

な、何でシャルロットがいるの……!? 話、私がもつちよつと早く行動してれば……ひょっとしたら……へうう……//

Side Charlotte

……うう……ルティアまで来ちゃったよ……。せつかく二人つきりだったのに……ああ……。僕が早く行動しないからこんなことに……

(全くタイプの違う金髪少女が並んで座る様は中々絵になっていたが、残念ながら奏宅に画家も写真家もないのであった)

「うーい、お待たせー。ケーキどれにする？」

(奏がアイスレモンティーと一緒に持ってきたルティアのお土産ケーキは、それぞれ苺のショートケーキ、チーズケーキ、チョコレートケーキだった)

「ま、ルティアのお土産だし、ルティアが先選んでくれ。」

(そう言いながら、奏は先程まで座っていた座布団にどかっと座った)

(・・・ここに来てくれればいいのに・・・)

(それぞれが思ったのは、それぞれの隣。そうすれば自分は幸せになれる。そう思っていた。しかし、そんな幻想も『ふざけた幻想をぶち殺す』みたいな勢いで破壊するようにもてなしを真面目にする奏であった)

「で？ルティアはどうするんだ？」

(漫画を買ったら付いてきたコースターを敷きながら、二人それぞれ

れにアイステイーを配る奏。万が一のことも考えてシロップ（カッ
プタイプ）も配る。ホットで入れたものを氷で急速に冷やしている
それは、時折からんと氷の軽快な音を立てた）

「えと・・・じゃ、じゃあ・・・チョコレートケーキで・・・」
「これ、私が好きなだけ買って来たもん・・・」
「ん、了解。んでシャルはどうする？」

（チョコレートケーキの乗った皿をルティアに渡しながら、奏は連
続して尋ねる。無意識に自分が最後というのがデフォルトのようだ）

「か、奏が先に選んでいいよ？僕はほら、最後でいいから。」
「そういうなって。レディーファーストにございます、お嬢様。」
「か、奏！ーは、恥ずかしいから止めてよ！／＼／＼」
「冗談だ。」

（気を抜くために奏はわざとそう言った。ちなみにルティアはその
横で顔を真っ赤にしていた。結局何を言っても無駄だろうと判断し
たシャルロットはぽつりと希望を告げた）

「じゃ、じゃあ、その・・・苺のがいいな・・・」
「ん。ほいで。」
「あ、ありがとう・・・。その、ルティアも、ごちそうさま・・・」
「お、お粗末さまです・・・」

(どこか恥ずかしそうに、それでも浮かぶ笑みで返すルティアを前に、シャルロットは急に手ぶらで来たことが恥ずかしくなった)

だ、だって、奏の家に行くって考えただけで・・・ほ、他のことは全部頭から抜けちゃってたんだもん・・・／＼／

(どうも自問自答スパイラル傾向にあるシャルロットは、そのままさらなる自責の念に駆られてしまう)

ああっ、でもでも、常識のない子って思われたらどうしよう・・・。うう、既に思われてるかも・・・。あっ!?も、も、もしかして、苺のケーキを選んだの、子供っぽって思われてないかも・・・だ、大丈夫かな・・・?

(じーっとケーキを見つめている格好でシャルロットがそんな思惑を巡らせている間に、奏はチーズケーキを半分ほど食べ終えていたルティアはまだ先端をちょっぴり食べたくらい)

「どした?食わねえのか?」

「えっ!?あ、うん!た、食べるよ?いただきます。」

(ケーキの先っぽをフォークで切り、ぱくりと食べる。しつこくなく適度に抑えられた甘さが口の中に広がり、クリームが気が付いた

らなくなっているほどさつと溶けていく感触に感動する。スポンジもふんわりとしたもので、苺を混ぜ込んであるのか、ふわりと苺の味がした)

「わ、すつごく美味しい……。これ、何処のなの？」

「えと、『町の小さなお菓子屋さん』ってお店。知ってる人は知ってる、知らない人は知らないっていうお店なんだけど、普通に売ってるケーキとは違っていてことで知られてるみたいなんだ。」

(ルティアが何気なく言ったその言葉に、ちょっととした罪悪感を感じてしまう。本当なら、きつと奏と二人で食べたかつたんだろうなあ、と考えると、シャルロットは少し申し訳ない気持ちになった。しかし実際には、ルティアは二つケーキを買うつもりでいた(当初は苺のショートとチーズケーキ。チーズケーキは奏がケーキを食べる時八割がた食べているのを見て好きだと思ったから(読みは当たっていた)。が、チョコレートケーキを見てあっさり誘惑に負けてしまっていた)

「これ美味しいな。家で作れないものか？」

「ホットケーキミックスで作れるって……。言ってたよ？」

(奏が漏らした疑問にルティアが実際に聞いたことを言った。それに奏は『へー』と聞きながら、ふと思ったことを口にした)

「なあ、せつかくだしちよつとずつ交換しあわねえか？二人とも、どうせなら三つとも食べれた方が嬉しいだろ？」

「えっ！？そ、それは……その……あの……//」
「た、食べさせ合いっ……見たいな……？」

（ぴたりと手を止めた二人が、探るような声色で奏に尋ねる。それに対し奏は躊躇なく……というか何の気も無しに頷いた）

「そ。」

『……っ！！』

（二人の顔がぱあつと華やいで、天上から光が差し込んでいるかのようなイメージが脳内に沸き起こった）

「……あ、男が口つけたやつってさすがに嫌だろ？だったら二人だけでも……」

「うっんっ！！ちょ、丁度チーズケーキ食べたかったもん！！」

「そうそう！それにほら、こっちのケーキも味わって欲しいしね！」
「！」

（一瞬のアイコンタクトで共同戦線協定……いや、不可侵条約を結んだシャルロットとルティアは、心の中で固い握手を交わす。Congratulations!の横文字がピカッと光った気がした）

「じゃ、じゃあ、まずは奏のケーキから・・・」
「そ、そう・・・だね・・・。た、食べさせてほしいな・・・」
／

（二人とも、餌を待つ小鳥のように口を開く。しかしそれは、多少の恥じらいと乙女の躊躇いとが混ざって、僅かな開口になっていた。そして、ドキドキとその時を待ちわびるかのようにきゅっと握られた手。差ながらそれは、王子の口付けを待つプリンセスのようだった）

「んじゃ、ルティアからな・・・ほい、あーん。」

（しかしそこは『キング・オブ・唐変朴』と云われる所以、全く気にも留めない奏である。すつとフォークを入れてケーキを切りだすと、それをルティアの口へと運ぶ）

「あ・・・む・・・／／／」

（口に運ばれたそれを顔を真っ赤にして味わうルティアは、味なんて全く分からない状態だった。嬉しさと恥ずかしさがごちゃごちゃとなってしまい、味を楽しむ余裕が何処にもなかったからだ）

「どうだ？」

「お、おいしい・・・です・・・／／／」

(顔を真っ赤にして答えるルティア。実際はその行動が嬉しくてたまらないのだが)

「つ、次、僕だよね。」

「お、悪い悪い。．．．ほい、あーん。」
「ん．．．」

(チーズケーキの一切れを下の上に滑らせ、シャルロットは瞼を閉じてその感触を楽しむ。．．．勿論、楽しんでいるのは味ではなく心の感触である。奏が直接食べさせたのはこれが二度目だが、一度目よりも遙かに心の感動が大きかった。それはきつと、シャルロット個人の心の変化が一番の要因だろう)

「お、おいしいね。うん、僕これ好きだなあ。／／／」

(無論、本当に好きなのは別のことだが)

「じゃ、そっちのも一切れ貰うぞ?」

(そう言って自分のフォークで切り取って食べようとした奏を、鋭く二人の声が止めた)

「ちよ、ちよつと待って!!」

「こ、ここは礼儀的に見て僕達もちゃんと食べさせないとダメだと思っただよね、うん!」

「いや、礼儀もなにもそういう必要がないと・・・」

「か、奏君はそうかもしれないけど!!わ、わ、私達がよくないの!!」

「わ、わかった。」

(珍しく声を大にして言うルティアに推された奏は、渋々それを受けるところにした(奏がそのまま使えば間接キスになることに気付かなかったのだろうか)。ニコニコと笑みを浮かべてそれぞれ自分のケーキを一切れ取り取って、奏の元に)

『はい、あーん』

(同時にフォークを差し出されて困る奏であったが、最初自分がした順番通りルティアのケーキから順に食べた。バターチョコをメイにしたクリームとほんのり甘いスポンジが食感と味覚で舌を楽しませる。途中でレモンティーを飲んで口の中を洗ってから、シャルロットのショートケーキもぱくつと食べた)

「本当においしいね、このケーキ」

「うん。また買いに行こうかな・・・」

(上機嫌この上ないにこにこ顔でそういつて、女子二人はアイスティーを口にした。何かで口元を隠さないと、にやけきった顔が奏に見られてしまいそうだったから)

「んじゃ、シャル。」

「な、なに!？」

「やるか?手取り足取り教えるけど。」

「っ!!!／／／」

(『手取り足取り』という言葉聞いて、ルティアは顔を一気に真っ赤に染めた。ちなみに本来は・・・)

「あ、うん。そうだったね。手加減してね?僕、初めてなんだから。」

「分かってるって。さすがに初心者相手にフルボツとか大人気ないからな。」

(ここからルティアサイド)

・・・あ・・・ゲームのこと・・・だったんだ・・・え、えっちなこと・・・するかと思った・・・／／／

(6)のコントローラーをシャルロットが持ったことで、ようやく奏の言いたいことが理解出来たルティア。顔は真っ赤)

「ルティアもやる？僕だけだとやっぱり不安だし・・・」
「・・・え？」

「やるならやるうぜ？多人数なら面白いし。」
「じゃ、じゃあ・・・やる・・・／／／」

(ルティアも参戦し、(ちよつとやってみる程度で) 奏が黒のコン
トローラーを持ってきて接続し、早速プレイ)

「ところでさ。二人ともえらく早く来たよな？まだ十時前だぜ？」

「奏君つて朝早いつて聞いたから・・・姉さんに・・・。だから午
前中でも大丈夫かなって・・・」

「ま、大丈夫だな。ヘステイアが叩き起こすから必然的に早く起き
ることになってっから。というか二人ともさ、せつかくの夏休みな
んだから友達と出かけなくていいのか？」

「い、いいのいいの。今日はたまたまみんな予定が合わなかったか
ら、一日ずつと暇なんだよね。」

「き、奇遇だね・・・。きよ、今日姉さん達予定があるって言うて
て・・・やることなかったから・・・」

「ふーん、そっか。」

(実はこの日のために全部の予定をキャンセルしている二人だった
が、それは秘密にしていた。男子の家にどうしても行きたがる女子
というのが、それぞれの中でよくない印象だったからである)

S i d e C h a r l o t t e

な、なんていうか・・・その・・・即物的な女って思われたくないし・・・

S i d e L u t h i a

か、奏君はどう思ってるか分からないけど・・・は、はしたない子
って思われたくないもん・・・

2088

(と)ということで、二人とも『何故か偶々偶然珍しく非常に稀な、
日暇』ということにしておいた)

(こうして奏一(君)と一緒に遊べるから・・・)

(そしてゲームを起動させ、三人でゲームプレイが始まった)

「『いろいろ ダツシユ』・・・？」
「右上のキノ オが旗上げるから、その色と同じ足場に移動させるだけ。Aでジャンプな？」
「う、うん・・・わかった・・・」

【START!!】

「あ、赤!? 赤って・・・あ、そっち!？」
「あつ、あつ、あつ・・・あーっ!!!・・・脱落しちゃった・・・へう・・・」
「あれ、COMも脱落してる?なんで？」
「あ、潰しておいた。」
「へっっ!!?」
「・・・つてことは・・・奏と一騎討ち!？」
「・・・自滅してやるっか？」
「や、やれるだけやってみる!負けたら負けだもん、それくらいは覚悟できてるから!!」

(数回やって)

「あーっ!」

【LUIGI WON!】

「最初は楽だけど、後半早えからな。しょうがない。」

「うっ……いきなり脱落ってえっ……」

「結局奏がトップだもんね……僕が三位でCOMが二位……」

「私がドベ……へう……」

「いや、どうにか転がり落とすこと出来るけ^{ヒンボーン}d……また?」

(奏は億劫そうに立ち上がった)

「あ、今セーブデータ残しておいたから勝手に今のデータ止めてミニゲームやってもいいから。左下のやつね?」

(奏はそう言っつて玄関に向かった)

「……えつと……操作は……あ、あれ?動かないよ?」

「ということとは……奏の使ってたコントローラーじゃないと動かないのかな?」

「ってことは……」

(二人が言葉を止めて、思ったのはたった一つ)

(奏一(君)の触った直後のコントローラーに触れる!!)

(というものだった)

「……シャルロット……お願いだから渡してほしいな……」
「……なにを言ってるのかなルティア？先に手に取ったのは僕な
んだよ？」

「うー……」

「むー……」

(しばしの睨み合いが続いた所で……)

『最初はグー！ジャンケンポンっ!!』

(原点に戻ったジャンケン。出した手はグー同士で相子)

『あいこで……しょっ!』

(パーで相子、それが二、三回続いた所で)

「悪い二人とも……」

「ふえ？」

「どうしたの？」

「……全員集合……」

(奏が面倒臭そうにそう言った時だった)

「シャルロットにルティアじゃない。なに？アンタらも暇だったの？」

「ぬ、抜け駆け！？」

「ずるいよ二人とも！！」

(ロロット、オリヴィエ、真琴を筆頭にゾロゾロと部屋に入ってくるおなじみメンバー(言い換えればラバーズ。前誰かが命名してくれましたby作者)。それを見たルティアとシャルロットは、『その後の展開』を完全に捨て去ったのだった)

(三人称)

「来るなら誰か一人くらい連絡くれっての・・・」
「仕方ないよ、今朝になって急に暇になっただもん。」

「・・・何か隠すものがあつた？」

昼食のざるそばを啜りながら、真琴とオリヴィエが答える。結局大人数になつたため（ヘステイアは現在店巡り中。いい食材を買っため）、昼は手軽に作れる麺物になつたのだつた。

「わ、私はほら、初めて行つた店だからちよつと迷つちゃつて・・・」

「ご、ごめんね、うっかりしちゃつて・・・」

「私は電話とか持つてないんですよ・・・」

山葵抜きのざるそばをちゅるんと食べて、ルテイアとシャルロットもそれっぽいい訳をいう。リーシャはある種訴えだつた。実際のところ、たつた一人を除いて「来ちゃつた」をとこのをやりたかつただけ、というのは、その一人を除いて互いに理解していた。

「ちなみに私は突然やってきて驚かせてやろうと思つたのだ。どうだ、嬉しいだろう？」

そばつゆに次の麺を入れながら、しれつとラウラがそう告げた。

「アタシは暇だつたから来ただけよ？」

ロロットもしねつと告げた。

(・・・この自信が時に羨ましい・・・)

ラウラ、ロロット以外の女子六人は、全く同時にそう思うのだった。

「ところで午後はどうするよ？皆室内っつーか、家ん中がいいんだよな？」

全員がコクン、と一糸乱れぬ動きで頷く。

(わざわざ奏が帰ってきてるのを狙ってきたのに・・・)

(外に出たならもつたいないもん)

(な、何か今まで知らなかったことの一つでも知りたいなあ・・・)

(奏の趣味も詳しく聞けてないし・・・)

(元々そのつもりだ。そうでなかったら来ていない)

(・・・それに、色々見たかった)

(・・・は、初めてのお宅訪問ですから・・・)

全員が思う中、ロロットは・・・

「あんな暑い中出て歩くバカが何処にいるわけ？午後に出歩いたら熱中症確実じゃないのバカ。」

しれっとそう言った。そんなことを各々言いながら全員がざるそばを食べ終えた。

「さつて、茶でも入れるからちょっと待ってくれ。」

「あ、私手伝います。」

「お、そりゃ悪いな、客なのに。じゃあテーブルの片付け頼む。」

「分かりました。」

人のタイミングを読むシャルをも上回る速度で、リーシャがさらりと後片付けの手伝いに参加した。それを見て多少なりの危機感を覚えた真琴と沙霧が同時に立ち上がった。

「わ、私も手伝う！！」

「・・・私も。」

「いや、四人いても狭いっての。二人は休んでてくれ。」

「むう・・・」

「で、でもっ・・・」

食い下がろうとした二人だったが、沙霧はしつこいと嫌われると思つて、真琴はちよつと食い下がってしつこいと逆効果になると思つて引き下がると同時に座り込んだ。ちなみに座席配置は奏の席から見て右側にシャルロット、ルティア、真琴。左側に沙霧、ラウラ、リーシャ、オリヴィエ。そして奥に口ロット。

「これ、洗っていいですか？」

「おう。そのスポンジと洗剤で頼む。なんか悪いな、手伝わせちまって。」

「いえ、いいんです。その・・・好きですし・・・／／／」

ほんの少しだけ『好き』という単語を強く言うリーシャだったが、さすがにあからさまな言い方をするのは恥ずかしかったようで、結局口から出た言葉は尻すぼみとなっていた。

(えへへ・・・なんだか新婚さんみたいです・・・／／／)

ふにゃつと幸せなにやけ顔をするリーシャ、じとーつとその他六人が、そしてちらりと一人が眺めた。

(うー・・・出遅れたあゝ・・・)

(むー・・・。リーシャずるい・・・)

(えう・・・羨ましい・・・)

(ふむ。あいつめ、あれで中々強かだな)

(いいなあ・・・)

(・・・もうちょっと早く動けてたらきつと僕が・・・)

「・・・ふん。」

リーシャが手伝ったおかげで後片付けから茶(麦茶である)の用意まで恙無く進み、それから十五分後には全員がテーブルで寛いでい

た。

「……はー。パック扱いといてよかったー。これ以上漬けてたらどうなってたか……」

夏だから麦茶。それが奏理論だった。ちなみに春秋は烏龍茶、冬は緑茶である。

「で、この後はどうすんだ？全員で遊べるもんなんてないぞ？」
「あ、だいじよぶ。そこは私にお任せあれー。」

真琴がそういつて持ってきたポシエットから取り出したのは、
U
O x 3。

「……それか……。ま、三つもありゃ全員で楽しめっか？」
「そだよー。皆でやると楽しいよー？」

真琴は慣れた手つきでU Oをきる。

「わー。真琴上手だねー。」
「そうでもないよー。私なんて普通だよー。」

へにゃっとした顔で言う真琴。そして奏の方を見ると・・・

「・・・」

無言で作業をしていた。早い。とにかく早い。

「アンタその作業慣れてるのね。ちょっと見直したかも。」

「はっ、今更か?」

「べ、別に変な意味で言ってるわけじゃないからね!?!」

「へいへい。」

ロロツトとそんな会話をしながらも、U Oをきる奏。その手は一切止まってない。というか・・・

(・・・か、奏って本当に器用だ・・・)

シャルロットがそう思うのも仕方ない。U Oを二つに分けて段組みにし、バタバタと倒していくというテクニクを披露していた。真琴と比べても段違いの速さ。

「やて、やるか。」

奏がきつた山から配り始める。

(・・・なんか奏って・・・)

(見てるとディーラーみたい・・・)

そしてそれぞれの手元に七枚ずつ配られていよいよ開始。奏から時計まわりだ。

(なお、ルールに関しては作者がやるローカルルールでやっています
by作者)

「んじゃ・・・これ。(黄色の9)」

「・・・ん。(赤の9)」

「私はこれだ。(赤の3)」

「じゃあ、私はこれで。(赤の4と青の4)」

「私はこれださせてもらうわね。(青の5)」

「悪いわね、一気に出させてもらうわ。(青の5を一番下に、緑を一番上にして四枚)」

「・・・だったら勝負!(ドロー4)」

「えっと・・・ごめんね?(ドロー2赤)」

「僕も出させて貰うね?(ドロー2青)」

「んじゃ俺も、っと。(ドロー4)」

「・・・私も出す。(ドロー2青)」

「私もだ。悪いな。(ドロー2緑)」

「い、ごめんなさい、出させてもらいます!...(ドロー4)」

「私も出すわよ?(ドロー4)」

「・・・何でこんなにドローが出るわけ!?!?」

ロロツト、計ドロー24。一気に出せたと思ったところで大量に引かされた。

「……絶対復讐してやる……！絶対やってやる……！！！」

「……ロロツト、目が怖いよ……」

「へっへーん。下手に手を出すとこっとなるってのがこれの恐怖なんだよねー！」

「むっかー！！だったら反撃してやるからね！？）ドロー2×5、一番上は緑（

「はい残念。（ドロー2青）」

「へうっ！？」

ルティア、計ドロー12。涙目で山からカードを引いていく。

「なんでとばっちり……（青の8）」

「仕方ないよ、これってそういうものでしょ？（青の3）」

「お、ラッキー！上がりだ。（青の4を筆頭に三枚、一番上は緑の4）」

「ウソっ！？」

「わー、相変わらずかなちゃん運いいな……」

「……ズルイ……（赤の4）」

「……どうやら私も同じようだ。悪いな、先に上がるぞ。（緑の9を筆頭に三枚、一番上は青）」

『えーっ!?!』という声が響く。奏に引き続き、ラウラが上がったためである。そしてその直後、全員が手持ちを穴があくほど睨みつけていた。

「さて、誰が次上がるか見てるかな。」

「そうだな。」

奏の横にちょこんと座りこむラウラ。そしてそれを見た全員が・・・

(次は絶対上がってやる!!)

闘志を燃やすのだった。現在最も不利なのはロロット。先程ドロー2とドロー4の積み重ねによって二十四枚も引かされていたからだ。次にルティア。同じ感じで十二枚。後は少ないのだが・・・

「らっしゅーっ!!スキップーっ!!」

「ちょ、ロロット!?!」

「わ、私は・・・ごめんね、シャルロット・・・」

「うわっ!?!ドロー4が三枚!?!」

真琴が飛ばされ、シャルロットがドロー4×三で十二枚。

「だったら・・・」

「・・・っ!？」

大量のカードを出すシャルロット。被ったから出せる技。そして沙霧は持ってない色だったため山札からドロー。

「じゃ、じゃあ・・・これで!)(ドロー2青)」

「悪いわね、そうは問屋が卸さないわよ!!(ドロー2×四)」

「えっ!？ちよ、被り過ぎだよ!？」

自分達もカードを積まれていく中、ロロット・ルティアの復讐劇が幕を開けた。・・・が、そんな中・・・

「・・・あ、U O!！」

『っ!！」

「ひゃうっ!？」

リーシャが後一枚となり、全員が睨みつけるといふ事態に。

「おいおい・・・殺気立っとなっ・・・」

奏が諫めて、一応事無きを得る。

(リーシャの手札は……一体何……?)

リーシャの直前である沙霧が残りの手札一枚を見て思慮に耽る。

「沙霧？次沙霧の番だよ？」

「……ゴメン。ちよつと考え事。……スキップ。(緑)」
「えっ!？」

スキップで順番を飛ばされるリーシャ。

「そこはスキップでじゃなくて適当に出して手を伺った方がいいと思っただけだ。」

「仕方ないだろう？真琴や奏と違って初心者なのだからな。」

既上がった二人が解説というか茶々を入れる。

「どうにかしてリーシャを止めるわよ!!沙霧、あんたに全てをかけるわ!!」

オリヴィエが適当に出した緑の3の上にロロットがドロー2を三枚(赤、青、黄)出す。呼応するかのように真琴が二枚(緑、黄)をと、とんどンドロー2ないしドロー4が積まれていく。そしていよいよ沙霧の番、となった時に問題は起きた。

「……ドロ……持ってない……」

沙霧が全てを被ってしまった。そしてその隣のリーシャの輝いた顔。

「沙霧ーっ!!」

「なんでアンタこんな時に持ってないのよ!!」

「だって……一枚も出なかったんだもん……」

そして沙霧が引いていく。総数にして……三十四枚。まるで鬼だ。

「……くすん……」

そして色変えもせずに（青の3）終了。そして結局……

「ありがとうございました」

リーシャが三番目上がった。

「奏さーんっ!」

「うばあっ!」?

そして勢いも殺さず突進。奏が不思議な悲鳴を上げる。

「……絶対上がってやるんだから……」

「……上がるのは私だよ……?」

「……次上がるの僕だからね……?」

そして黒々とした何かに包まれ始めた残り（ロロツト以外）。

「うわー……怖……」

そして非常にゆっくりとかかって終了。最終的な結果は……

一〜三までは言わずもがな、四にロロツト、五にルティア、六にシヤルロツトで七に真琴、八にオリヴィエという結果になった。つまるところ、沙霧はビリ。

「むつきーっ！！もう一回！もう一回やるわよ！！」

「今度こそ一番に・・・それが無理ならかなちゃんの次にーっ！！」

「・・・今度こそ勝つ・・・！！」

そして二戦目、三戦目と進めて行った。ちなみに奏がどれもトップだったのは言わずもがな。

時間も過ぎ、夕食頃と言っても差し支えない頃。

「
」

鼻歌を歌いながら包丁を扱っていたのは真琴。その横ではルティアが何かを煮込んでいた。

「ルティアってなに作ってるの？ジャガイモとか結構切ってたけど・
・
」
「えと・・肉じゃが作ったの。前作ってみたいなーって思って・
・
」

真琴は豆腐を使ってハンバーグを作っていた。余ったのは一口大に切って衣につけて・・と揚げ豆腐にするらしい。

「シャルロットは何を作っているのだ？やきとりか？」
「違うよ、ラウラ。これは空揚げ。今下味をつけてるところなの。」
「ふむ、そうか。」

言いながら、ラウラは大根のかつらむきを見事に行っている。その手つきは手慣れたもので、プロでさえ息を呑むだろう。・・・使っ

ている刃物がサバイバルナイフなのだから。

「ら、ラウラ、なんか凄いね……。そういうの、どこで覚えたの？」

「見様見真似だ。テレビでコックがやっていたのを真似してみた、ただそれだけだ。」

「真似しただけでそこまで鮮やかになるものなんだ……」

「ナイフの扱いには長けているのでな。ジャングルでは、木を加工できなければトラップの一つも作れない。」

「そ、それはともかく、メニューは？」

「おでんだ。」

瞬間、時間が止まった……。ような感じがした。

「おでんだ。」

「に、二回言わなくてもいいよ……。でも、あれって冬の料理じゃないの？」

「夏に食べてはいけないという決まりはない。」

「それはそうだけど……。あ、ラウラ、大根余ったら分けてくれるかな？前奏が作った大根おろしを混ぜる唐揚げ作りたいから。」

「……」

「ラウラ？」

ダンっ！といきなりラウラが大根を真っ二つに叩き斬った。

「・・・ああ、すまない。集中していて聞こえなかった。なんだ？」
「え、えっと、大根が余ったら欲しいなって・・・」
「そうか、分かった。」

ダン！と正確に、五センチ幅でラウラのナイフが大根を分断している。

「・・・斬る。」

ダン！ダン！ダンっ！と、エプロンドレス姿の眼帯少女が大根を斬っていく様は、異様を通り越してシユールだった。

そして、そんな料理中の女子の風景が、なんとなく気になっている様子で、奏は何度もキッチンを見る。

「なに見てんのよ？スカートの中？変態。」

「アホ、んなわけねえだろ。色々心配なんだよ・・・」

「心配することは無いと思いますよ、マスター。」

心配を募らせる奏に、ヘスティアがポツリと言う。

「というより何も出来ない私達が辛いんだけど・・・」
「・・・仕方ない。」

それぞれがそれぞれで色々言っていく。

「・・・でも、それでも私は幸せです・・・」

そんな中、ひっそりと・・・でも確実にぴつとりと奏にひつつくりーシャであった。ロロットは持ってきた小説を読んでおり、オリヴィエと沙霧はテレビを見ていた（ニュース）。

テーブルに並ぶ、四人の料理。その中で一際異彩を放つのは、やはりというかなんというか、ラウラのおでんだった。

「おでんというのは中々に珍妙だな。バーベキューによく似ている。」

大根、卵、竹輪、蒟蒻を一本の長い串に刺しているだけでも普通ではないのだが、煮込んだはずのそれに何故か焼き色が付いている。こんがりきつね色が。

(・・・何故だ？これ、もしかしてチビのおでんとごっつちやにな
ってないか？)

どういう過程で作られたのかは、想像したくない奏であった。

そして、安全圏確実な方に目を向ける。

まず最初に目についたのは、ルティアの肉じゃが。しっかりと味が
付いているようで、いかにも美味しそうだった。

続いて真琴の豆腐料理。ハンバーグの方はしっかりと焦げ目が付い
ており、美味しそう。そして揚げ豆腐は形崩れが無い。安心の真琴、
といったところか。

そしてシャルロットの唐揚げ。からっと揚げられたそれはシャルロ
ットが『下味をつけている』と言っていたが、手際もよかったので
期待できそうだった。

「んじゃ、みんなで食べようぜ？・・・なんか、待ってるだけって
あんまり経験したことないから知らなかったんだけど、結構腹減る
もんだな。」

「そうだね。じゃあ夕ご飯にしよう？」

「では、皆さんの分のお皿を取ってきます。」

「わ、私、飲み物取ってくるね。」

「こっやってお互いに作った料理を食べるというのは、なんという
か不思議な気分だな・・・しかし、悪くはない。」

「そういう時は楽しいっていうんだよ、ラウラ。」

そう、楽しい。それは奏も同じだった。中学の頃までは一人で、ヘステイアが来てからも『ヘステイアのためだけに』作っていた時もあった。それらからは感じられない楽しさがここにはあった。

「んじゃ、いただきます。」

奏の一言を皮切りに全員で『いただきます』といい、食べ始めた。

そして夕食も終わり（ロロットがルティアの手の付けてないハンバークを奪い取ってルティアが泣いたというハプニングがあったが）、時計を見ると午後6時を回っていた。

「……すつかり遅くなっちゃったけど……どうする？ここから寮まで結構あつたぜ？」

奏はどうするか聞いてみた。実際交通機関を利用しても軽く一時間はかかるのだ。

「私は・・・お爺ちゃんところ行かないとき。ほら、お爺ちゃん私を可愛がり過ぎてちよっと・・・ね。」

「私は実家に帰る準備しないと・・・。」

真琴とオリヴィエは既に用事があるようだ。

「私も・・・お墓参りしないといけないし・・・。」

「沙霧もか？珍しいな。」

沙霧もだったようだ。ちよっと引っかかりがある一言だったが、あえて触れないでおいた。

「アタシはあの研究所を漁りに行ってくるつもりだから帰るわ。」

そしてロロツトも帰ることを決めていた。

「私は特に用事は・・・む？」

そこまで言って端末を取り出すラウラ。

「私だ。・・・なに？公開軍事演習？し明後日で明後日には打ち合わせがしたい？」

(公開軍事演習って・・・まあ、IS部隊だもんな、それくらいはあるだろうよ・・・)

「・・・急遽帰国せざるを得なくなった・・・」

明らかな落胆を見せるラウラ。突然の報告だったのでなおさらだ。

そしてその五人が出て行った後、残っていた三人の奏は聞いた。

「シャルヤルティア、リーシャはどうする?」

「私は元々泊まる気でいました!」

「・・・さいですか・・・」

そう言っつて部屋の一角を指さすと、リュックサックが置いてあった。

「僕は・・・明日は予定ないけど・・・」

「私も・・・ないよ?」

「では、一泊していかれたらどうですか?」

「えっ!?!」

「そ、そんな、お気づかないか・・・というか・・・その・・・えと・・・//」

へスティアからの突然の提案に焦る二人。

「それに、ほら、リーシャみたいに着替え持ってきてないし……」

「……泊まることなら実は問題なかったりするんだよな……あの姉^{バカ}さんの所為でな……」

「え?」

歯切れの悪い奏の受け答えに、疑問符を浮かべるシャルロットとルティア。

「実は先日、マスターの姉様から……」

「華奈多さんから……?」

「……お二人のサイズに合った衣類を送られてきたのです。無論、下着も、です。」

「っ!?!? / / / /」

シャルロットは『いつ測られたの!?!』と言わんばかりに顔を赤くして口をパクパクさせていた。ルティアは本当にされているとは思ってなかったので驚いていた。

「……だから平気なんだよ、泊まったって……」

「じゃ……じゃあ…… / / / /」

「ひ、一晩……よろしく……お願いします…… / / / /」

こつこつとシャルロットとルティアも一晩だけ奏ぎに泊まることになった。

華^{ハカ}奈多のありがた迷惑な行動によって・・・

「ああ、そのまま明日もどこかお出かけになられれば宜しいかと。
私、車を運転できるので海でも如何でしょうか？」
『えと、あの、お、お任せします！！／＼／』

#58 恋に騒がす八重奏（オクテット）（後書き）

「（奏）・・・ということで、姉^{バカ}さんの所為で泊まることになったルティアとシャル。俺は一体どうなるんだろうな、本当に海行ったら・・・」

ま、そこは面白おかしく『両手に花束！？羨ましいじゃねえかこのヤロー！』な話を書いてやりましょうぞ？

「（奏）・・・最低だ・・・」
ということで質問コーナー。

1. エドワード・ニューゲートさんから

『奏が嫁にリーシャ（シャワーズ）を選んだ理由は？』

「（奏）・・・何でだったかな・・・一番最初の頃は可愛かったということで見た目重視だったけど・・・あと後になって耐久性を見出したから、か？」

ということですよ。シャワーズは擬人化すると結構人気ですよ？色んな意味で。

2. エドワード・ニューゲートさんから

『奏が好きなミュージシャン、またはミュージックグループは？』

「（奏）・・・そうだな・・・UVERworldとかfriday's ideとかだな。割とアニソンばかり聞いてるからそつち系になるな。」

3. エドワード・ニューゲートさんから

『自身を含めたレギュラーメンバーを、fate/stay nightのサーヴァントのクラスに例えると、誰が何になりそう？』

「（奏）・・・そうだな・・・」

セイバー：箒

アーチャー：セシリア

バーサーカー：真琴

ライダー：ルティア

キャスター：エリイ

ランサー：一夏

アサシン：沙霧

ギルガメツシュ：俺

・・・みたいな？」

ギルガメツシュカウントは私個人の感覚です。本来ならアヴェンジャーも入りますが、今回は割愛させていただきます。

そして募集(?)と言っていたのは、この話の夜々朝にかけての話を見たいか、ということです。笑いどころが多かったりします、実を言つと。

二日だけの募集なので、三票あれば書く、ということにします。

もしなかったとしても、一度今現在出せるだけのキャラ紹介と美雪を含めたCIIMを発表します。美雪はあの時は忘れていたのと、思い出した後で考えてみたら有耶無耶になってしまった、というのが原因です。

とりあえず、お楽しみに。

#58・5 恋に騒がす八重奏（オクテット）

After Story（前

#58のその後の話です。悶々とした・・・というのは見れませんが、ネタに集中しました。そしてちよつとルティアが大胆になりました。・・・あれ？

そして活動報告でキーワードとして出した『蛞蝓』。書いてたら・・・あれ？』って思いました。そこは本文で。

#58・5 恋に騒がす八重奏（オクテット） After Story

）前回のあらすじ。

奏宅に泊まることになったシャルロット、ルティア、リーシャであった）

）三人称視点でお送りします）

「……さて。俺は今日はここで寝るかな……?」

三人が泊まることになって、奏は自分の寝る場所を変えることを提案。しかし……

「だ、ダメだよ!そこまで迷惑かけられないって!!」

「そ、そうですよ!!まずは家主さん第一ですから!!」

「……!!!(コクコクコク!!)」

三人一斉に拒否コール。寧ろ発言的には『自分達が此処で雑魚寝したほうがいい』という感じ。

「……つつてもなあ……寝冷えしてもあれだし……このマンション、ちよつと古いからな……」

「……マスター、それなら皆さん一緒に、というのはどうですか?これが一番の妥協案だと思うのですが……」

『っ!?!? / / /』

ヘスティアの提案に全員が顔を赤くした。そして考えついたのは……

『一緒に寝る!! 添い寝、運が良ければその後は……』

という、変態極まりない考えだった。……三人共である。

「とにかく、風呂入ってからだな。そうしないと何も始まんねえし。」

「そ、そうだね！ま、まずはお風呂からだよね！！／／／」

明らかに挙動不審なシャルロット。しかし奏は気にも留めなかった。

「……んじゃ、ちょっと準備してくらあ。」

奏は（色んな意味で。決して18的な意味は無いよ）風呂の準備に向かった。

「では、今晚着る服を持ってきますので、そこから選んでください。」

ヘスティアに続いてルティア、シャルロットも部屋を出た。ただ一人、リーシャが部屋にぼつんと残った。

「……あ……」

そしてふと見たのが、『先程まで奏が座っていた座布団』だ。まる

でN極の磁石に吸い寄せられるS極の磁石のようにふわふわとその座布団に近づき、取る。

「……はふう……奏さんの座布団……／＼／」

一応周りに誰もいないことを確認してから、ギュウツと抱きしめる。そしてそのまま、ぽてんと倒れ込んだ。

「はぁ……。このまま結婚できたらいいのに……」

「誰とだ？」

「ひゃわあああっ!?!?!」

突然声をかけられ、素っ頓狂な声を上げるリーシャ。

「び、びっくりさせるなよ……心臓に悪い……」

「え、あ、そ、その、ご、ごめんなさい……／＼／」

声をかけたのは奏だった。驚かせたことを即座に謝るリーシャ。

「皆は？」

「今日のお着替えを選びに……」

「そっか。じゃアリーシャから入れよ。一番風呂だし、気持ちいいかもよ？」

「え、あ、はい・・・／＼／＼」
「あ、あつちだからな。」

先程のあの恥ずかしい行動（座布団を抱きしめて転がってるという事態）に顔を赤くして頷き、奏が指示した方向に歩いて行った。

「さて・・・後は待つだけ、か。」

奏は6 を起動して早速プレイを始めた。

「あれ？リーシャは？」

「一足先に風呂に行かせたよ。場所も教えだし、大丈夫だろ。」

「あの・・・マスター？」

へスティアがおずおずと言葉を紡いだ。

「どうした、へスティア？」

「あの・・・『あのこと』はお教えに？」

「・・・あ、忘れてた・・・」

「『あのこと』？」

シャルロットが先程から出てる『あのこと』を聞いた。

「ええ、最近……」
「最近……？」

次の一言が、女子二人を青ざめさせた。

「たまに、なのですが、蛞蝓が出るんです。」

「ナメ……クジ……？」

「はい、蛞蝓です。」

ヘスティアが締めと思う一言を言った瞬間。

「案の定来たか！！というか何でこんな時に限って!？」

奏がバタバタと駆ける。それに続くヘスティア、シャルロット、ル
ティア。

二つ三分前。

「ふう・・・／＼／」

顔を真っ赤にしたまま脱衣所に入るリーシャ。

「あ、あんなところ見られちゃうと・・・変な子って思われちゃいますよぉ・・・／＼／」

服を脱ぎ、浴室に入った……その時だった。

「……」

リーシャの目に映ったのは、一匹の蛞蝓。その蛞蝓も、『あ、ども、お騒がせしております』と言わんばかりにぺこりと頭を下げた……気がした。

「きゃあああああああああああ……!!!!」

そしてリーシャが悲鳴を上げたのだった。

「リー」「ふええええええええええん！！奏さーん！！」「ぶはっ！？」

突然奏が吹いた。仕方ないだろう、突然しがみついていたリーシヤが・・・

全裸なのだから。

「ちょ、おま、服！服は！？」

「ナ、ナメ、ナメ、ナメクジがーっ！！」

全裸のリーシャに抱きつかれて困る奏。それにムツとする二人。しかしリーシャは本当に怖がっていた。

「ちょ、とりあえず離れてくれ！！何も出来ないから！！」

「マスター、私がどうかします。いつもの方法で・・・」

ヘスティアが一度離れ、戻ってきた時に持っていたのは、割箸。

「えと、それでどうするんですか？」

「外に出してあげるんです。迷いこんできたのなら出してあげるのが定石なので。」

そう言っただけで浴室に入ったヘスティア。戻ってきた時、割箸には一匹の蛞蝓がいた。なんか割箸の間でいやいやをしているように見えて、ちよつと可愛いと思っただけでしまふルティアであった。

「リーシャ、もう蛞蝓はいない。ヘスティアが外に連れてったから。」

「・・・ほんとお・・・?」

涙目+上目使い。ちよつとくらつとした奏ではあったが・・・耐えた。ある意味殺戮コンボに、である。

「それよかりーシャ・・・その・・・なんだ? / / /」

「・・・ふええ・・・?」

「・・・裸なの・・・忘れてないか・・・? / / /」

「・・・~~~~~つ!!! / / /」

上を向きながら言う奏。指摘されてそれに初めて気づいたリーシャでもあった。

(落ちつけ俺、心頭滅却、落ち着け・・・be cool, be cool・・・)

リビングで心頭滅却を図る奏。必死になってやっていることから、相当キていた。

(集中しねえとさっきのが・・・って思いだしてどうする俺!!！)

隔てるのが自分の服のみという、はつきり言つと殆ど直レベルのそれを頭の片隅・・・いや、メモリーから消去しようと思死になっていた。

「奏?」

「・・・」

「奏!!」

「うおわっ!?!」

集中(笑)している所に大声を出され、驚く奏。声をかけたのはシ

シャルロットだった。

「……なにしてたの？」

「……さっきの頭から消し去ろうとしてたんだよ!!」

「本当？」

「本当……ってあーもうっ!!また思い出しちゃった!!」

その後、リーシャが風呂から出て、シャルロット、ルティアと続き、奏が入浴して出てからようやく煩惱退散に成功したのだった。

ちなみにシャルロットは黄色い花柄のパジャマ、ルティアは黒と白のチエツクのTシャツとズボン、リーシャは首元と裾のフリルをあしらった可愛らしい水色のパジャマだった。

「奏、どうしたの？鼻にティッシュ詰めて・・・」
「風呂で煩惱退散に集中してたら逆上せて鼻血噴いた・・・」
「・・・ぷっ・・・」
「そこ、笑うなっ!!」
「いっめん!!」

そして、みんなでマリ 2 やったりトランプしたりして十二時。騒動はここでも起きた。

「……で？ 一体俺はどこでどうすればいいと？」

『真ん中でお願ひ（します）！…！』

女子一同からのお願い、そして口論。

「シャ、シャルロットは奏さんと一緒の部屋になったことあるから、いいですよね！？ 隣じゃなくても！！」

「り、リーシャには言われたくないよ！！ 一緒のベッドで眠ってたこともあったし！！」

「わ、私にもチャンスを……へう……」

加速していく言い合い。

「……いつそのことジャンケンで決めた方が楽しじゃね？」

『あ……』

そして奏の一言に『その手があったか！』と言わんばかりの呆け顔をした三人娘であった。

「・・・で、では・・・いきます!」

「最初は・・・グー!」

「ジャンケン・・・ポンっ!」

そして何回かのジャンケンをして・・・就寝。

（・・・ど、どうしよ・・・奏の隣になったのは嬉しいけど・・・

眠れない・・・／＼／

（か、奏さんの隣・・・はふう・・・幸せですう・・・／＼／

（・・・何であそこでチヨキ出しちゃったんだろ・・・）

配置としては、シャルロット、奏、リーシャ、ルティアという配置だ。

シャルロットは顔を真っ赤にして顔を半分隠し、リーシャは顔は赤いもののニコニコ顔。ルティアは奏から一番遠い布団の中で奏に背を向けてしくしく泣いていた。

原因の奏は顔を真っ赤にした美少女二人の間で・・・

「……………すう……………」

完全に眠っていた。

そして、三時。

「……トイレ……」

むくりと起きたルティア。目的は言わずもがな、トイレだ。

「……ふに……」

ぺたぺたと廊下を歩き、トイレに向かう。そして用を済ませて戻ってきて……

「……布団……どこだったっけ……？」

寝ぼけていて自分の布団が分からなくなっていた。

「……ここ……だったっけ？……ふにゆ……」

適当に布団に入りこんでそのまま眠ってしまった。

そして翌朝。

「うに……?」

真っ先に起きたのはリーシャ。……しかし、目の前に異変が起きていた。

「……何で……ルティアさんが……?」

自分は寝る時、目の前にいたのは奏だった。しかし朝起きてみたら

どうだろうか。目の前にルティアがいるのだから。

勿論リーシャには面白くない。壁ルティアがあるので奏に抱きつけないからだ。

ちなみにシャルロットと奏は規則正しく眠っていた。特に布団が乱れた様子はない。そして奏の右腕には、ルティアが寝惚けて（こ重要）抱きついていた。

「むーっ……」

頬を膨らますこと数十秒、

「……よい……っしょ！ふにいつ、ふにゅっ！」

ルティアを無理に引き剥がし、思いつきり元の位置に転がす。そしてその開いたポジションに自分がまんまと治まるという姦計を見事に発動させた。

「えへへ……」

そして体に（ここかなり重要）抱きつく。ちなみに自分の体はしっかりと密着させている。そこは抜け目ないと素直に称賛すべきだ。

その後、ルティアとシャルロットが目を覚まし、リーシャの現在の姿を見て絶句、一番最後に起きた奏を囲んでの取り合い合戦に発展していた。なおシャルロットは取り合いというより奏救出に躍起になっていたとだけ伝えておく。

「話してください!! 奏さんは! 私が!!」

「ち、違うもん!! わ、わた、私がー!」

「二人とも落ち着いて! 奏の腕が外れるから!!」

「そういうシャルロットも引つ張るな・・・ぐええ・・・首が・・・絞まる・・・!」

「えっ!?! あっ、ご、ごめん!」

「それに・・・なんか当たってんだけど・・・!」

「当ててるんです!!」

「あ、当ててるんだもん!! / / /」

「・・・奏のえっち・・・ / / /」

「俺被害者だよなあっ!?!」

ちなみにこの光景を遠くでただ録画（待て）をしていたヘステイア
がいたのはご愛敬。

「（奏）・・・なあ、俺って何時か後ろから刺されて死ぬ、なんてことないよな？」

「ないと思いますよ？・・・タブンネ。」

「（奏）おい、何故カタコトになる!？」
それはまた置いといて。」

「（奏）置くな!！」

蛞蝓。書いていたらなんか可愛くなっちゃいました。ちょっと考えてみてくださいよ？見られたらぺこりと頭(?)を下げたり、割箸で挟まれたら体の半分を揺らして嫌がつてる姿を・・・

「（奏）・・・偶然だろ。」

ま、それは置いといて質問、いきましょ。今回はエドワード・ニユーゲートさんからのみいただきました。

1・【奏に家上がった八人に質問、奏の家の中に入った感想は？】
これについては事前聴取しました。では、解答です。

『（真琴）やっぱりかなちゃんの家だーって思ったよ?』

『（オリヴィエ）マンションって聞いてたけど、結構広いんだな、って。キッチンもあっていい物件だと思う。』

『（ルティア）・・・は、初めて男の子の家に入ったから・・・緊張しちゃってて・・・へう・・・ノノノ』

『（シャルロット）男子の家ってこんなふうなんだって思ったのかな?それに、奏の普段の姿が見れてちよつと得したかも。』

『（ラウラ）アンドロイドに驚いたな。あそこまで精密なものを作れるとは・・・』

『（沙霧）・・・幸せ。』

『（ロロット）アイツのことだからこつちやになつてゐるって思つて

たけど・・・存外広がったわね。ま、いい暇つぶしにはなったわ。』
『（リーシャ）もう・・・感無量です・・・／＼／』

とのこと。

「（奏）ルティアとリーシャ、解答になってないと思うぞ?」
いいんです、そこは。

2・【アンドロイドのヘスティアさんの詳細なスペックと、機能を教えてくれませんか?】

「（奏）取説取説・・・えーっとだな、一回の充電で稼働可能時間は最大三年、それにかかる電気代は500円程度。耐熱温度は1500、圧壊深度はマリアナ海溝より深い・・・雑過ぎだろ。で、飛行は不可、走行速度は100m世界記録保持者並だとか。あとは・・・3サイズか?書いてるのは。えっと・・・っておい、これ適当に書いたなあいつ・・・なんだよ」3サイズ・・・ボン、キュッ、ボン』って・・・」
そんな感じですよ。

「（奏）機能は・・・感情制御がちゃんとできる、器用貧乏な女性、と思ってくれ。」

3・【華奈多さんって、国際薬剤師の免許を持ってると言ってますが（47参照）、他にもなんか資格を持ってたりしますか（IS関連は除き）】
「（奏）・・・一応俺が覚えているのが

日商簿記1級

実用英語検定1級

パソコン検定1級

漢字検定1級
応用情報処理技術者試験
税理士
精神保健福祉士
診療放射線技師
中小企業診断士
危険物取扱者
毒物劇物取扱者
火薬類製造保安責任者
火薬類取扱保安責任者
電気通信主任技術者
教育職員
学芸員
司書
建築士
建築施工管理技士
土木施工管理技士
管工事施工管理技士
電気工事施工管理技士

「……だ。他にも滅茶苦茶取ってやがった記憶がある。」
「……です。チートですから、あの姉は。で、次回は一回キャラ紹介とCIMの発表を挟んで、『両手に花束！？畜生このリア充め！』な遭難話を3話くらいでやります。」
「（奏）……嫌な予感しかしねえんだけど……？」
あ・き・ら・め・ろ
「（奏）うわ最低だこいつ……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5762q/>

IS-インフィニット・ストラトスー 熾天使を駆る少年

2011年10月13日01時04分発行